THE CENTRAL REVIEW

中央公論

『輿論と暴力』號

五月號

第四十四年 第五號 第四百九十

高血壓に

アニマザ

血壓を下げ、早老及び血管硬化を防止す

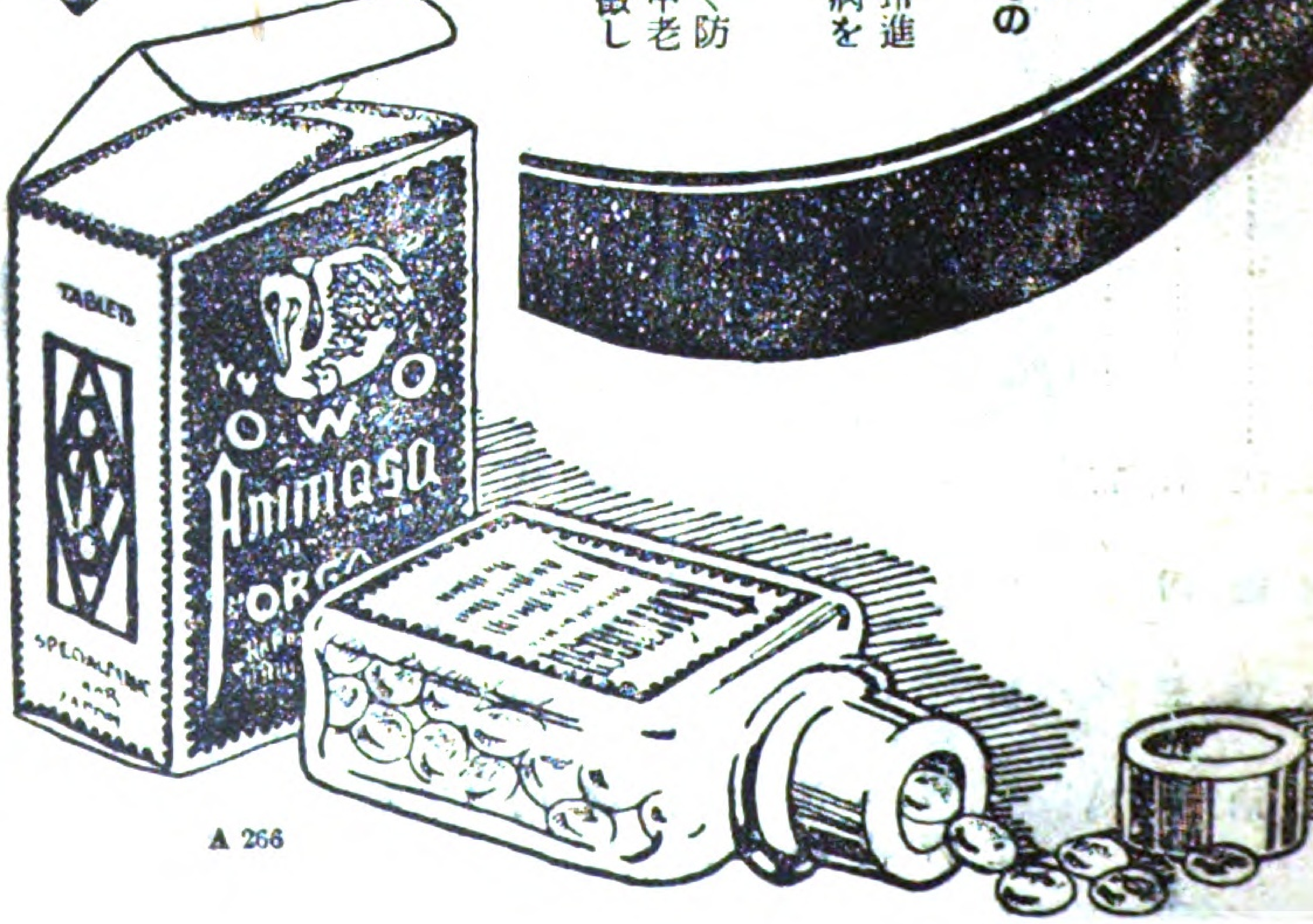
幼老動物の血管内膜及び中膜に存するホルモンを抽出せるもの

老衰の原因は血管の硬化にあり、血管硬化すれば血壓亢進し、精神的並に肉體的退行現象起り、種々の所謂老年病を誘發し、或は腦溢血を突發す。

アニマザの應用は血管に若返り現象を與へ、老衰を全く防止し得ざる迄も、その進行を緩除ならしめ、初老及び中老期に隨伴する不快症狀を除き得ることは多數の實驗に徵して明らかなり。

動脈硬化症、高血壓症、初老期に於ける體力及び精力減退腦溢血の豫防及び治療に最も賞用せらる。

説明書送呈



三〇錠……二圓四十錢
一〇〇錠……六圓八十錢
著名藥店にあり

獨逸オスナブルク臓器治療藥會社

總代理店 東京日本橋區本町 株式會社 田邊元三郎商店

A 266

第一書房の二大學術雜誌創刊！

學術雜誌が年と共に萎靡して行くことは悲しい事であります。過去の哲學雜誌を惟ふにつけ、過去の藝文を考へるにつけ、色々な學術雜誌を顧るにつけ、その活氣、いつの間にか銷沈しつゝある事を私は寂しく感ぜずには居られないのであります。

今度創刊する『獨逸文學研究』竝に『美學研究』の二大雜誌は偏に萎靡銷沈しようとする學術雜誌界に一の活氣を齎らしたいと希ふ微意に依るのであります。幸ひに此の二大雜誌は委員諸氏の燃えるやうな熱情と精鋭とに依つて編輯されるのでありますから、必ずそこには大きなセンセエションを起すを期待されるのであります。何卒大方の御愛援と御支持とを仰ぐ次第であります。

第一書房長谷川巳之吉　敬白

獨逸文學研究

五月創刊

シュトルム・ウント・ドラングの宗教觀……成瀨無極
ヘルデルとゲーテの『ファウスト』……相良守峯
傳記の研究に就いて……高橋健二
ヘルデルリーン詩抄……吹田順助
鐵中の人間其他紹介……芳賀檀
獨逸最近文壇消息……

帝國大學獨逸文學會編輯
年四回刊行
定價未定

美學研究

六月創刊

オーブレヒト『カントの美學批判』……寄稿
コヘンの美學批判……石幡五郎
ギリシヤ哲學以前に於ける美的概念……渡邊吉治
構圖論……村田良策
音樂の樣式に就いて……遠藤宏
カントの美と崇高に就いて……金田廉

帝國大學美學談話會編輯
年四回刊行
定價未定


新マツダ
お空に光るはお星様　おへやの中には新マツダ
ぱつとついたら日の光　其のさわやかで美しい
球は眼によい眞珠色　明るいおへやが嬉しいな
ギバ体温計
平型


Agfa
寫眞材料界の權威
アグファを お薦めします……
ロール・フイルム
フイルム・パック


新築落成
建築中の新館愈々竣工四月末を以て移轉致します。
帝國生命
東京・丸ノ内・一丁目



よしきり　　森田恒友筆

大島花束編著　最新刊

良寛全集

定價五圓五十錢
送料書留廿七錢
菊判六七八頁
寫眞版八頁
地圖一葉附
絹布装函入

明哲な理性と深遠な思索と豐かな感情と親しみ易い性格とが、天眞素朴のまゝに、その生活藝術の上に反映して、人の心を正しく清く、戒め進め、慰め安んじ喜んで僞らざらしめるものは良寛上人その人である。編著者、上人出生の地において、親しく舊迹を探り遺墨を索め德澤を傳へて、深く上人の詩歌書に得る所あり、全集の編著に從ふもの十年。新な資料によつて解説を施し異考を註して參照に便し、第一部詩・讃・長短歌・俳句・俗謠・手紙・戒語・遺文等の全部、第二部傳記・逸話・系圖・年譜・周圍の人々及び地名解説・地圖・寫眞、第三部關係參考文書・索引、丁寧親切なる一卷の全集はよく上人に親まんとする諸賢の期待に副ふであらう。

改訂増補 芭蕉全集	沼波瓊音編 賀川他石校訂	定價四圓八十錢 送料書留廿七錢
冬の日抄	幸田露伴著	定價二圓三十錢 送料書留十八錢
春の日曠野抄	幸田露伴著	定價二圓五十錢 送料書留廿七錢
奥の細道評論	荻原井泉水著	定價二圓二十錢 送料書留十八錢
一茶句集 しだら	荻原井泉水校訂	定價九十錢 送料六錢
一茶遺稿 父の終焉日記	東松露香校訂	定價八十錢 送料四錢
橘曙覽全集	井手今滋編	定價二圓八錢 送料書留十八錢
萬葉集の鑑賞及其批評 前編	島木赤彦著	定價二圓 送料書留十八錢

東京市神田區南神保町　岩波書店　振替東京二六二四〇　電話九段 三一〇八・三一〇九 一〇二二・一二八一

共濟生命保險會社調査課長 法學士
川崎貞明著

米國信託會社の組織と經營

信託會社に於ける組織の一般と信託業務並に附隨業務に關する實務の詳悉

菊判 四三一頁 シュランク裝
實務樣式 五七種
定價 四圓
送料 廿七錢

最新刊

吾國の信託會社は、信託業法に基いて創設されてから未だ四年の歳月を經てるに過ぎないのに、既に早くも十二億五千萬圓の信託財産を保有してわが財界に嚴然たる地位を占め、一面財産の受託機關として家政の代行者となり又財産の安全地帶となると共に他面金融機關として銀行及保險會社と共にわが金融界を三分すべき趨勢を示してゐる。この時に當りこの新興の信託會社を研究することは苟もわが財産制度乃至經濟組織を知り金融組織を究めんとする士にとつては最も緊要なることの一である。蓋し米國の信託會社はわが國の信託會社の母體であり、其の將來の發達に對しても常に羅針盤たる地位を保つであらうが、幸ひ著者は最近米國の信託會社に在つて親しく其空氣に觸れ、巨細に實務の研究に從事した篤學の士である。本書述ぶるところは通常の財産信託、社債信託は勿論、わが信託會社に於ても將來取り扱ふべき遺言執行事務、後見事務等の固有信託業務並に各種の附隨業務を含み、各種の信託契約書の内容と多數の實務樣式とは著者の懇切なる説明と相俟つて、さながら讀者をして、信託會社に在つて實務の研究に從事するの感を懷かしめる。

東京日本橋通
丸善株式會社
大阪 神戸 京都 名古屋
横濱 福岡 仙臺 札幌
東京＝神田・三田・早稻田・丸ビル

對支外交の好轉

――(卷頭言)――

三月二十八日外務省の發表せる濟南事件の協定に關する文書を見ると、協定の内容は昨年七月十八日の政府の聲明と餘りにも懸け離れて居る。昨年の聲明では(一)國民政府の謝罪(二)責任者の所罰(三)在支邦人の受けたる損害の賠償(四)將來の保障を基礎的條件とし、先づ之を承認せぬ以上何等具體的の交渉に入らぬと云ふのであつた。而して今度の協定では、謝罪だの責任者の所罰だのと野暮な事は云はず、損害問題は共同委員會の調査に一任し、向ふ二ケ月間に撤兵を完了して將來に於ける在支邦人の生命財産の安全は彼國政府の處置に信頼すると云ふのだ。洵に氣持のいゝさつぱりした捌き方である。

この協定を目して國家の威信を傷くるの甚しきものとする論者がある。隣邦に臨むに常に强者の威容を誇示せんとし外交といへば理が非でも利權の伸張をはかることだと心得て居る偏狹なる帝國主義者から觀たら、成る程屈辱でもあらう。併し昭和盛代の新しき外交は徹頭徹尾公明正大をよろこぶ、殊に隣邦民國に對しては、過去に於て幾多の過失を重ねて居るだけ格別注意して公正和平の態度を一貫するの必要がある。この意味に於て今度の協定は久し振りで公正なる日本國家の眞面目を發揮したものだと云へる。之に依て顏の潰れるのは實は日本の國家ではない、國家を笠に着て私慾を營む侵略者流にとゞまるのではないか。

更にもう一つ國民の期待に反すると云ふ非難もある。國民の本當の良心が今度の協定の趣旨と違つた何物かを期待したか否かは分らぬが、少くとも去年來屢々繰り返された政府の聲明に由り、國民が心ならずも變な期待を懷かせられたことは事實だ。さればこそ操觚界にも、そんな馬鹿氣た條件などを固執せず虚心坦懷速に和平の解決に急いではと云ふ樣な忠告が盛に叫ばれたのではないか。そこで今度の協定は國民の期待に反すとは云ひ難いが國民に期待させたものに反するとは云へる。國民に期待させたものは必ずしも國民の期待せる所ではない。國民は寧ろ今度の協定に滿足して居ると觀るべきであり、此點に於て政府の措置を非難せんとはせぬが、併し政府としては、最後まで繰り返した聲明を露骨に裏切り國民に對する公約を反故の如く棄てたに就ては、何としても政治上重大なる責任を辭するわけには行くまい。

今次の協定に關して問はるべき政府の責任はたゞ右の一點に存する。協定其者を不滿として難詰するは獨り帝國主義者の一派に限るべきだ。此點に於て我々は、所謂幣原外交に依據すと稱する民政黨が單に倒閣の目的を達するに便なりとて此問題を提げて帝國主義者の運動に合流するのを陋なりとする。今日の場合、對支外交を正しい軌道の上に立て直すこと、而して國民をして何が正しい規道であるかを見誤らしめぬことは、田中内閣の存續以上に重大な問題だ。

今度の事件を日支外交好轉の端緒となし、南京漢口事件をはじめ兩國間に横はる一切の懸案をば、續々この方針で解決して行きたいものである。

中央公論



議事妨害論

第四十年第五號
五月號
四百九十六號

吉野作造

少數派の議事妨害

多數派の横暴に對抗する窮餘の手段として、少數派の議事妨害の態度に出づるは、諸外國の議會史に於ても珍らしいことではない。議事妨害は大體二つの目的の爲めに行はるるを常とする。一つは云ふ迄もなく特定の法案の通過を無理に阻

止せんとするもので、他は多數に押されて餘儀なく屈するにしても之は決して無事平穏に通したのではないと云ふ旨を示威的に示さんとするものである。我國の沿革から云ふと、往年の原内閣時代に於ける憲政會の議事妨害は主として弱者に屬し、法案阻止の目的を有するものとしては先き頃の議會に於て用ゐられたのが始めだと謂つていい。孰れにしても、多數を恃んで横車を押すことは政友會の專賣であるが如く、多年少數黨の宿命的苦境にいぢめられて來た憲政會乃至民政黨は、議事妨害の慣用手段を弄ぶに於て特殊の技能を有する樣である。

多數を恃んで横車を推すのもあんまりだが、策を弄して議會の作用を全然無能力ならしめるのは何としても許し難い、斯くて政友會も民政黨も駄目、凡そ政黨は到底黨利黨略に制せられざるを得ざるものだとて、一概に政黨政治を呪咀せんとする者すらある。德富蘇峯先生の如きも四月上旬の東京日々紙上に於て、呪咀とまでは往かぬにしても、相當强い語句を以て政黨政治の前途を悲觀し、併せて其本質にまで一種懐疑の情を寄せて居られる。併し之は少し結論を急ぎ過ぎた俗、見たるを免れぬと私は考へる。

要するに政黨政治と云ふ樣式に根本的の缺陷があるのではない、今眼の前に横つて居る政黨乃至政黨者流が惡いのだ。否、必ずしも政黨乃至政黨者流のみが惡いのではない、何よりも第一に政黨政治の培はるる地盤が惡い、その育まるる雰圍氣が惡いのである。私は今の政黨を呪ひ今の政黨者流を責むることに於て決して人後に落ちるものではないが、併し彼等を責むる前に先づ政界の雰圍氣を吟味したいと思ふ。道路がわるければ如何に晴着を大事にしろと訓へても塵埃にまみれるを避け難い。果して然らば、眞に責めらるべきものは先づ第一には雰圍氣の混濁を促したもの又はその清掃の任に在るものではあるまいか。

私の結論は斯うだ。凡そ爭ひはその勝敗の決定が公明に與へられる限り堂々と闘はるるを期待し得る。勝敗の決定が不當に枉げられて眞の實力と伴はぬやうになると、爭ひの手段方法の自ら醜陋に墮するを防ぎ難い。ひとり醜陋たる手段の

横行に依て周圍の迷惑するばかりではない、社會一般がたゞ勝たんことのみに焦つて眞の實力の涵養を怠ると云ふ大害に至つては洵に忍び難いものがある。頑是なき幼童でも、學校での席順が銘々の成績に依らず教師の依怙贔負に依て勝手に左右されたと知つたら、屹度怒つて反抗するに違ひない。勝つた者を驕らしめず、負けた者を怨ましめず、總ての人をしてひとしく勝敗の結果に滿足せしむる唯一の方法は、その決定を斷乎として公正ならしむることの外にない。勝敗の決定が公正であれば、勝てる者は益々精進してその地位を維持せんとし、敗れたる者も亦益々その能をみがく事の上に他日の勢力挽回を期待する。乃ち勝敗を爭はんが爲めにする彼等の一切の衝動は、期せずして善を競うて熄まざるの結果を呈するに至るのである。憲政の運用に於ける政權の爭奪は、本來斯うした期待の上に組み立てられたものなのである。

所が不幸にして我國憲政運用の現狀は右述ぶるが如き形には行はれてゐない、寧ろ本來の期待を裏切つて居るといふべき有樣である。見よ、第一に選擧が公正に行はれてゐぬではないか、第二に政府側はその權力を濫用して容易に所謂不自然なる多數を作り得るではないか。斯くして政界に成功すべき第一の要件は最早眞實の內面的能力ではないと云ふことになる。而して一旦少數黨の地位に落ちたが最後、如何に精進努力しても相當に酬いらるる見込は斷じてない。どうして自暴自棄に陷らざるを保し得よう。そこで私は斷定するのだ、我國の議會が年々無意味の騷擾を繰り返すのは、その原因一に政爭の公明に行はれぬ所に在ると。

一言にして云へば雰圍氣が惡いのだ。代議士ほどの先覺者なら周圍の空氣如何に頓着せずも少し毅然たる態度の執れさうなものといふも一つ理窟だが、所謂群衆心理の作用はなかなか人をさう冷靜にしては置かない。個人的に觀て相當立派な筈の紳士が一たび議場に入るや陋巷の匹夫にも劣る底の醜態を演じて憚らざるも已むを得ないのである。而して斯うした雰圍氣は一體誰が作つたか、又之を清掃するの任にある者は誰なのか。いづれにしても政界の雰圍氣をこの儘にして置いては、議場の擾亂はいつまで經つても屏息せぬにきまつて居ると思ふのである。之を差し措いて或は政治家の不謹愼を

罵り或は政黨政治そのものの效用を疑ふのは少しく早計に失せぬだらうか。

議場擾亂の責任者としての朝野兩黨

今玆に先達ての議會に現はれた實例に依て議論を進めて見る。政友會竝に新黨俱樂部共同提案の小選擧區制還元案に對し、民政黨は長演說に由る議事妨害を武器としてその通過を阻礙せんと試みた。今度の小選擧區制還元案は國民輿論の擧つて反對する所だつたから、民政黨の執つた態度に幾分諒とすべきものあるかに思はれぬでもないが、併しあんな事が、後度々行はれる樣では飛んでもない國家の禍である。將來に惡例をのこすものとして識者は斷じて之を寬過すべきでない。斯う云ふ理窟を以て民政黨に詰め寄ると、民政黨は亦恐らく辯じて云ふだらう、何も好んでやつた譯ではない、政友會が默視に堪へぬ橫暴を振舞ふので事遂に玆に出でざるを得なかつたのだと。成る程小選擧區制還元案なんど云ふが如きとてつもない提案が無かつたら民政黨は恐らくあゝした愚劣な行動には出でなかつただらう。之が通ることは固より國家の損失でもあるが、何を差し措いても我黨の利害に及ぼす影響の頗る大なるものありと觀て、彼等は之を阻止するに全力を傾倒し手段を選ぶが如き餘裕を有ち得なかつたものと見える。して見れば罪は寧ろ政友會（新黨俱樂部のことは姑く論外におく）にある。政友會の我慾がつまりあの醜き不體裁を演ぜしめた根源だと云ふことにならざるを得ない。

政友會の提案が最近の議會騷擾の主たる禍因を爲すの事實には最早疑ひはない。而して之が一に彼等の我慾に出づることも亦隱し難い。併しあの場合政友會は一體あゝした無暴な提案を差控へて居れたものかと云ふに、私は殘念ながら否と答へざるを得ぬ。政友會としては實はこの外に活くべき途はないのだからである。詳しく云へば、彼等は始めから國民の信望我に歸して居ないことを知つて居る。彼等の唯一の據り所たる下院の多數も、政權の濫用に由て僅に作り得たる所謂不自然の多數であつて、未だ十分安心して之に恃み得ぬことを知り拔いて居る。若し此儘總選擧に臨むやうなことがあつ

では、去年の經驗でも明なるが如く、必ず依然優勝の地位を持ち續けると限らぬことを熟知して居る。而して貴族院の形勢は反政府熱の意外に高きものありて何時内閣瓦解の運命に押し詰められるやら分らない。總辭職を餘儀なくされ新しい政府の下に總選擧に臨んでは無論の事だが、よしんば留任の儘解散に由て改めて信任を國民に問ふことにしても、事に依ると政友會多年の威容は土崩瓦解を免れぬのではないかの豫感がされてならない。打ち續く失政の當然の結果たる國民的不信の表示は、到底干涉や買收に依て抑へ切れさうに思へぬのである。そこでどうしても選擧法を改正して、どの政府の下で總選擧をやつても政友會在來の勢力が著しく傷かぬやうに工夫するの外に、彼等の活くる途はないと云ふ事になる。政友會の盛衰の如き固より我々國民の利害に何等直接に關はる所はないが、政友會自身この儘をめ〱死滅したくないと焦るのを人情の自然と許せば、彼れがあの際小選擧區制還元案を提出せるは、盲龜に浮木の譬と同じく、亦餘儀なき仕方であつたと認めねばなるまい。

民政黨の議事妨害にも事情已むを得ぬ點がある。政友會の小選擧區案の提出にも之を諒とすべき理由がある。と云つたからとて私は全然右の兩黨を不問に附すべしと云ふのではないが、唯その前に、之等の悲しむべき現象を餘儀なからしめた政界根本の狀勢に深酷なる注意を拂はれんことを讀者に乞ひたいのである。之を吟味しこの點に關する一般國民の判斷が背棄に當つて居ぬと、情弊を一掃して憲政の前途を坦々たらしむる見込は立ち得ないと考へるからである。

朝野兩黨をして常道に依らしめざる事情

私の議論を進める前に、先づ外の國では右の如き場合どうするだらうかを簡單に述べて置かうと思ふ。今日普通の立憲國では第一に國民の信望を缺くものが政府に據ると云ふ樣な現象は最早絕對に之を見ない。從て第二に政權の濫用に依て不自然の多數を作ると云ふが如きは想像だもすることは出來ない。選擧後議員が自由の判斷に由て黨籍を變ずることも稀

にはある、併し外部の誘惑に之を期待すべからざるは勿論だ。概して云ふに、議會に於ける多數少數の關係は總選擧の結果に依て自然に定まり總選擧の結果は卽ち國民的信望の歸着する所を示すものなるが故に、濫りに政黨政派の恣意を以て之を動かす餘地はない。第三に選擧法の立て方、就中選擧區の別け方如何が、彼此黨勢の對照上に重大の影響を及ぼすことあるは言ふ迄もないが、今日のところ其利害得失の論の未だ一定せざる部分に付て制度の一に歸せざる個所はあるも、大戰以前に屢々見たやうに之に由て一黨一派の私を遂げしむるが如き技巧を弄するは絶對に跡を潜むることになつた。だから外の國に於てなら政友會の提案せるやうなあんな選擧法改正の申出は始めから無かつたらうし、土着國民の信望に副はぬものなら政友會内閣なんど云ふものもてんで存在して居なかつたのであらう。そこで政友會内閣の存在その事が、抑も我國政情の變態たる所以を證明する明白なる事實だと謂はねばならぬのである。併し斯んな所まで遡つて議論しては政界實勢の批判にはならぬ。變態であると云ふ點を姑く論外に置き、先づ政友會内閣の存在を前提し、彼等が自ら國民の信望漸く薄らぎたるを感知し、貴族院亦とかく事に託して我に反抗すと觀たら、一體どう云ふ態度に出るのが立憲の常道とする所であるのかを考へて見よう。我が貴族院の最近の行動に非議に値するものの多々あるは論を待たぬが、濫りに下院の院議に反すべからずの說は必ずしも當らない。それも濫りにと云ふ文字の解釋次第であるが、貴族院がその當然の權限に據つて是否の論を卒直に吐露するは寧ろ獎勵すべきことであり、制度の上で（或は一つの慣例としてでも）彼を下院に隸從せしむるは決して好もしい解決ではないのだ。下院の上院に對抗すべき本來の而して最も有力なる武器は、實は專らその道義的權威に在りとされる。下院の多數が眞に國民の信望に基いて作られたと云ふ事實の外に、上院を有效に屈し得る道はないのである。現に護憲三派の聯立内閣の下に於て見たやうに、眞に國民の信望に基いたことを知れば、上院は下院に對し自ら其鋒鋩を斂めても居る。その逆にまた、昨今の上院が頻りに田中内閣を窘めるのは、その國民的根柢に本質的の弱點あるを見せ付けられて居るからだと云へぬこともない。いづれにしても貴族院との關係があゝなつた以上、常道論の

要求からいへば、田中内閣は適當の時機を見計つて解散を斷行し改めて國民の信任を問ふべきであつた。而して事の遂に茲に出で得なかつたのは、畢竟我が國の政界が常道に依て立ち常道に依て運營されて居らぬことを語るものではないか。

憲政常道の何たるかは今更説くまでもあるまい。而してその趨勢に逆行して織り成されたる我國變態政情の樞軸を爲す原理は、私が前號所載の論文に於ても説ける通り、凡ゆる方法を以てする政權の獲得並に其維持である。更に細かく分析すれば、次の四ヶ條の基柱の上に立つて居ると云へる。

（一）下院に多數を占むればその當然の結果として天下が取れる。此意味に於ては我國でも略〻政黨内閣主義が確立したと觀てよからう。最近一部の人の間に一種の中間内閣を説くものあるも、無論實現の可能性あるべしとも思はれぬ。而してその「多數」が國民の信望に基くべきものとするが所謂常道論の要求だけれども、それが文字通りに行はれぬ所に特色がある。

（二）所謂下院の多數は政權の濫用に依て作らるるを常とする。この意味に於ての政權の濫用は大體二つの方面に活らいて居る。一つは總選擧に於ける官權の陰陽兩面の干渉で、他は常時に於ける議員の誘拐である。兩つ乍ら現政友會内閣が最も露骨に之を行つたと云はるるが、その實、程度に多少の差こそあれ、歴代内閣一として此擧に出でなかつたものはない。

（三）政權を離れた者に取つて多數を作るの機會は殆ど絶對に惠まれない。少くとも大正以來の事例に徴するに、現に政權を掌握する者は常に絶對多數を獲得するに成功し、唯一の例外たる清浦内閣時代の總選擧は特殊の事情に基くものとして別に考察するを要すとし、去年の總選擧に於てあの不評判極まる政友會内閣が反對諸派と相伯仲するの勢力を占め得しに觀ても、現に政權を握ると云ふ事の如何に總選擧を有利に活用し得るものなるかが分るだらう。之は國民の智德の進歩

に連れて永く同様なるを得ざるものではあるが、元來斯かる現象の原因は國民自身に在るに非ず、官權を笠に衣て威迫誘惑するもののあるに迷はされての餘儀なき過誤に出づるものであるから、國民自身に於て、何等の誘惑威嚇に對しても斷然之を峻拒するだけの强い積極的の公德心の發達を見せぬ限り、容易に之を根絶し得ぬものであらう。知らずして犯す罪は無論だが、進んで犯す罪も――少くとも選擧に關する限り――論して之を阻め得る見込はあるが、他から犯させられる罪に至ては如何とも之を匡救するの途はない、況んや之を誘ふものが現に權力を握る官界の人なるに於てをや。

(四)一旦握つた權力は何としても之を手放すことは出來ぬ。手放したが最後、尋常一樣の方法では到底再び之を恢復することが出來ぬからである。馬鹿と罵られても唾を引つ掛けられても、田中内閣の頑として噛り付く所以はこゝに在る。若槻内閣の如く極度の陰忍を推し通し得ぬのは、現代の我國に在て政治的成功の最大要件を缺くものと言はねばならぬ。從て又在野黨としては、所謂常道に依て政權に有り付くの望みはないから、其の執るべき手段は自ら次の二つしかないことになる。一は陰謀である、二は反對の爲めの反對に依て僅に溜飲を下げることである。シーメンス事件の如き偶然の突發事件に依て内閣を倒し得たこともあるが、斯かる稀有の場合を外にしては、陰謀に因る内閣倒壞も、今の所寧ろ政友會に便宜が多いと觀ねばならぬ。若槻内閣を倒す爲めに樞密院を動かしたやうの事は、到底民政黨には望まれない。そこで民政黨としては自然議事妨害に依て鬱憤を晴らすの外ないことになる。原内閣時代の憲政會の對議會策は、頗る斯の色彩の濃厚なものであつた。

茲に私は筆の序に陰謀に因る政變と云ふ事に關し近頃現はれた一異說に付て語つて置きたい。誰人の論文であつたか一寸忘れたが、或る雜誌で次の樣な說明を目に留めた記憶がある。曰く、最近各立憲國の政變は、一種の陰謀に出て成し遂げらるるを常とし、憲政常道論の期待した樣な形では行はれなくなつた。是れ所謂憲政の漸く行詰れるを示すものであり、之に代つて今後一種の英雄政治が行はれんとするのではないかと思はれる云々と。立憲政治の次に來るべき樣式として英

雄政治を立つるの正しきや否やは姑く措くとして、陰謀に因る政變を最近の流行と觀、之を以て憲政常道論の行詰りと斷ずるは、必ずしも當代の歐米政界の實歴上に確證はない。少くとも我國に於ては、所謂陰謀に因る政變は憲政創設の當初からの事であり、憲政の常道に依る政變は、我國としては寧ろ例外的に、清浦内閣の崩壞の際にたつた一回之を觀たのみである。故に論點を暫く我國の政治沿革の上に限るなら、陰謀に因る政變の終息の上に始めて憲政の常道が確立さるるものと謂ふべきであらう。我國でも後來屢々憲政の行詰りと云ふ事が說かれた。併し行詰つたから陰謀に因る政變が當然之に代つて現はるべきだと說いたものはない。寧ろ斯うした陰謀の餘りにも屢々繰り返さるるの事實を目して、我國憲政の運用の行詰りを嘆いた方が多い。故に嚴格に云へば、行詰つたのは憲政そのものではなくして、我國の憲政運用の能力であつたのだ。西洋に於ける憲政運用の最近の變調に付ては、別に說あるも諄々しいから今は略する。

さて本題にかへり以上に述ぶる所を一言にして要約すれば、我國の政界は全然暴力の支配に一任されて居ると云ふことに歸する。政界で最も重んぜられるものは精神的才能ではない、それが國利民福の伸張の上に效せる功績でもない。最も國民的信認の薄い政友會内閣が各方面から浴びせられる非難攻擊を外目（よそめ）に見て所謂微動だもせざる所以も茲に在る。

但し田中首相が何處かで放言したと新聞に傳へらるる「微動だもしない」といふ言葉の意味は、いろ〳〵に解することが出來る。最も平凡な解釋は、「現に政權を握つて居る以上、貴族院が何と云はうが一般國民が何と出ようが、下院に占むる多數に微動だも與ふるものでない」とするものだらう。之れには間違はない。而して下院の多數の微動だもせざる所以は一に政權の掌握にあり、政權を離れては萬事休すである。茲に於て人或は田中首相の言葉を解して、「此際政府の腰に微動だもさせて堪るものか」と觀るものもある。之れも其通りに相違ない。從て田中首相としては、此際政權に離るる危險の伴ふ樣な事は何事に依らず一切之を避けなければならず、所謂君子は危きに近寄らずで、一身一家の保全の爲めには大義名分など構つては居れぬのである。そこで貴族院の襲擊に接し理正に議會の解散を斷行すべくして之を敢行せず、下院

の多數を恃んでは上院の急所を狙つて打ち下ろす痛棒に顏をしかめながら、「微動だもせぬ」と嘯いて居るのであらう。この第三の解釋も固より肯綮に當つて居る。而して一代の武人田中首相をして遂にこの醜態を固守せざるべからざるに至らしめた所以に付ては、私の讀者諸君と共に深く三省したいと思ふ所である。

主たる禍因は政界の雰圍氣に在る

憲政の運用は政權の爭奪を前提する。政權の爭奪が公正に行はれるときに、政戰の勝負は正義の發展を意味する。勝敗は國民の信望を多分に博することの上に決せられ、信望の集る所自ら正義の存する所と觀るを得るからである。要は公正に行はれしや否やに存する。最近スポーツなどにも屢々唱へらるる所謂フエア・プレーの精神は、最も嚴密に政爭に於て遵奉されなければならぬものである。一たび之が蹂躙されると、勝敗を爭ふに手段を選ばざることとなり、而して政治の場面が廣くして且つその關係する所頗る深きだけ、之に依りて社會の蒙る禍害は大きい。是れ世上の近眼者流が往々にして政權爭奪そのものを呪ひ、之を根據とする立憲政治の前途をまで悲觀し、果ては翻つて專制政治をすら謳歌せんとする者あるに至る所以である。禍根は政爭そのものに伏在するのではない、その方法の選擇に存するものなることを忘れてはならぬ。

政爭が徹頭徹尾公正に行はれたりしとせよ。總選擧の結果少數に墮したからとて今更誰を咎むべきでなく、寧ろ自ら省みて國民の信望を將來に恢復するを心掛くべきである。若し又自家に加へた國民の批判に誤りありと思惟するなら、論陣を新にして更に國民に訴ふればいい。國民は之に依りて大に教育され爲めに一段とその蒙を啓かるるであらう。斯くして生ぜる少數黨と國民との接觸は自らまた多數黨を促して大に警戒する所あらしめずには置くまい。迂濶にして居れば信望は知らぬ間に敵方に奪回されるからである。依然として彼等の心を我方に繋がんとせば、我亦鋭意國民の爲に謀る所な

ければならぬ。之に依てまた國民は大に教へられ且つ幸福にもされる。政界の事は妙なもので、甲の政策の數年に亙る繼續は必然にやがて乙の政策に轉囘すべきを要求するやうになり、施設の結果に直接の利害を感ずる國民大衆の敏感は、何時とはなしに政權の移動を餘儀なからしむるに至るものだ。之等の點は別に詳細の説明を必要とするのだが、論議の多岐に亙るを避けて今は述べぬ。たゞ少數黨の誠實にして愼重なる平素の言動は、右の機運を促進助長するに大に效能のあるものたるを一言しておく。そこで政事の公正に行はるる國に於ては、多數黨も少數黨も、最も腐心して言論行動を愼むのである。例へば議場の掛引に於て、少數黨は何ともがいても其意向を達することは出來ず、始めから負けると決まつて居るのだから汗水たらして論辯するがものも無いやうだが、併し彼等は院外の國民大衆が如何に之を受取るかを懸念するが故に、決して之を疎かに扱ふことはせぬ。多數黨とても同樣だ。力任せに押し切つて目的を樂に達し得ぬこともないが、さうしてはその結果たる後害が恐しい。畢竟多數黨も少數黨も實は皆院外の國民大衆を目當てとして論じ且つ動いて居るのである。我國でも今度の議會を評して、上院に於ける若槻幣原兩君の堂々たる演説は大に民政黨を重からしめたが、下院の連中の心なき輕擧盲動に依て復た元の杢阿彌にして了つたと云ふものがあつた。勝敗の最後の決定を專ら國民の批判に求め難き我國に於ても、猶且つ斯く戒むるの餘地はある。況して憲政運用の常態を保つ國に於て、議會に於ける各黨各派の言動の常に愼重を缺かざるは、深く怪むを須ゐない。

專制時代の舊式政治に在ても、信賞必罰は施政成功の第一義とされてあつた。碌でもないものが高祿を食んだり、如何に才能を磨いても到底うだつが揚らないときまれば、不平の極自暴自棄に陷るは人情の已み難い所である。而して此理は當今に於ても固より變る所がない。今日の少數黨も他日精進努力の結果相當に酬いらるる所あるを期待し得れば、彼等は必ずやまじめに勉强するに相違ない。彼等がまじめに行動するとせざるとは、要するに信賞必罰の原則の行はれるか否かに歸するのだ。一旦權力を握れば之れの濫用に由りて益々太る、少數黨に取ては何としても頭を擡げる機會がないとなれ

ば、どうして其の自暴自棄に陷らざるを必ず得よう。勿論政治家の個人々々に對つては、その先覺者たる地位に免じても慎重の態度を執つて欲しいと責めることは差支ない。併し一般論としては、政界の雰圍氣をこの儘にして置いて自暴自棄に陷る勿らんことを要求するのは、餘りに難きを人に責むるものと謂はざるを得ない。そこで私は云ふのだ、昨今の議場のふしだらの主なる禍因は專ら政界の忌むべき雰圍氣に在るのだと。

斯う考へて來ると、最近の議事妨害の直接の原因を爲す小選擧區案の提案の如きも亦斯うした雰圍氣に依て醞釀された當然の產物たるを認めざるを得ぬ。そは何故かと云ふに、田中内閣は元々自信のない所に、貴族院からは窘められる、其外議會後に於ける樞密院との關係の不穩も豫想される、事に依つたら内閣瓦解の悲運に逢着するかも知れぬと覺悟せねばならぬ破目になつた。自分が罷めれば次の内閣の民政黨の手に歸すべきは大體疑なく、民政黨が議會を解散して總選擧をやるの段取りになれば、無論彼れも亦政友會同樣政權濫用の慣手段に出づべきは間違ないから、政友會としては今の中に之が對策を講ずるの必要がある、否らずしては新政府の選擧對策は政友會に對する國民的大不滿と協合して、彼れを再び起つ能はざる底の窮地にまで叩き落さぬとも限らぬからである。細工は現に權力を握つて居る中の事だ。斯くして小選擧區案が按出されたのであらう。泡よくば之れが通過を幸ひに直に議會を解散し、原敬の故智に倣つて新選擧法を自黨の手で運用し、見ん事三百足らずの絕對多數を心ひそかに夢想したのかも分らない。いづれにしても政友會としては、政界の雰圍氣が今日の如くである以上、此の外に活くべき途が無かつたのである、幸か不幸かこの折角の小選擧區案は貴族院で阻止された。起死回生の唯一の妙藥は暫くは封ぜられたのである。斯うなつて見れば、新に別種の妙藥の見出せぬ以上、彼れは今や何としてもその地位を棄てるわけには行かぬのである。棄てることの唯一當然の結果は政友會の土崩瓦解の外にないから。たゞ瀕死の田中内閣が此上かぢり付主義の固執に依てどれだけ餘命を延ばし得るか、是れ私共の昨今多大の興味を以て傍觀して居るところである。

斯う云ふ目的で小選擧區案が提案されたものとすれば、民政黨が之に對し死力を盡して爭つたのも亦怪しむに足らない。今日の政狀の下に於て相爭ふ一方の死活問題はその儘反對の意味に於て他方の死活問題だからである。政友會が餘りにも露骨に橫暴を逞うすると云ふ點は、國民をして自ら之を阻止する凡ゆる努力を一應歡迎せしめた嫌はあるも、併し民政黨のあの議事妨害は、必ずしもこの國民的感情を正直に代辯したものとはいへぬ。彼等の行動の直接の動機は寧ろ小選擧區案の通過に依て受くると豫期された損害の防止にあつたのだ。是亦畢竟するに此上勢力を縮められては、如何に精進努力しても善き目を吹く見込がないと觀たからではないか。

果して然らば、政友會があんな亂暴な提案を急いで出したのも、又民政黨が國民環視の手前も憚らず愚劣な議事妨害の手段を弄して恥ぢなかつたのも、要するに根本の禍因は政界の忌むべき雰圍氣にあつたと云ふことになる。私の懇意な代議士の多くは皆曰ふ、議場に一歩足を踏み入れると妙に昂奮した氣持になり、やがて自ら激情を抑へ難くなると。又或る先輩政治家の口から斯んな言葉を聞いたこともある。自分は議場に入つて始めて、政敵ほど憎いものはないと云ふ感じを經驗したと。之等の言葉は皆それ〴〵に私共の深く味ふべきものではあるまいか。

あゝした議事妨害は西洋にもある

我國に見るが如き議事妨害は西洋諸國にも全くないでない。併しそは多くは特殊の事情に原因し、原則としては先づないと觀る方が正しい。蓋しあんな馬鹿氣た妨害をやり又眞劍に之を相手取つて同じく馬鹿を競ふやうでは、直に國民の信望を失墜する。信望を失つては次の選擧があぶないからである。現に我國でも識者の多數は一樣に議員のふしだらに眉を顰めて居るではないか。從て極端なる議事妨害の國民的信望を繋ぐ所以に非るの點に於ては、日本も實は西洋と變りはないのだが、唯其信望の消長厚薄が覿面に選擧の結果に現はれないので困る。下らない奴は二度と議場に送らないと國民の

恥がかたまつて居たら、議員の行動も自然と變らざるを得ないだらう。西洋では這般の關係が常に定石通りに運ぶので、議員に馬鹿な眞似をする者が少いのだ。我國に見るが如き醜態の徹して影をひそめて居る所以である。啻にあゝした醜態を見ないばかりではない、却て昔の武士道の譚に出る樣な奥床しい美談をさへ屢々聞かされる。議事妨害の目的か何か知らぬが一議員が長々しい演說を續けてみんなの倦怠を來したとする。それでも疲れたやうに見へると反對黨から休憩の動議を出して彼れに一ト息入れる餘裕を與へるとやら。時計の針が十二時に垂んとするや、態と振子を止めて針を十二時以上に進ましめず、十二時前だと云ふ暗默の假定の下に十二分の發言を許すことも珍らしくないとの事だ。反對の爲めの反對でない、高尙なる社會國家の福祉の爲めに協力するのだと云ふ實意があれば、敵味方と分れるのも元々主義上の事、共に天下の爲めに諮ると云ふ誠意に變りはないと觀るから、如何樣にも妥協は出來る筈である。斯くてこそ始めて眞に國民の利害を代表すると云ひ得るのであらう。

　西洋に於ける憲政運用の大體の形勢は右の通りだ。それにも拘らず特殊の事情ある國に於て今尙は我國同樣の――時としてはまた夫れ以上の――ふしだらの盛行を見ることあるは先きにも述べた通りだ。然らばその特殊の事情とは何か。

　第一は國家構成の各種族間に人種宗教等の差に基く强烈なる歷史的反感の存在する場合である。人種と云ふ文字は此場合やゝ廣義に解して置きたい。血統上同種の者でも歷史的には永く別個の政治群として發達し、而して其の一方が他方を征服して同一國家内に優劣の關係を以て包含されたと云ふやうな場合をも姑く人種の差と云つておく。斯種の國に在ては歷史的には、或る一種族が政治的優勝の地位を占めて他種族を壓倒して來て居るのだから、(一)其の劣れる者に政治上の權利を與へざるを常とし、(之が彼等の反抗を挑發する原因となり統治上多大の困難を齎むるに至れるの事實は茲に縷說するまでもあるまい)、(二)已むを得ずして政治上の發言權を認むる場合と雖も、制度の上に於て又は實際の手加減を以て、斷じて彼等にその實勢に相當する發言權を附與しないことになつて居る。孰れにしても彼等は歷史上和すべからざる反感

を以て對立し、本來一緒になるべからざるものが一緒になつたと云ふ格好だから、一方は他を犠牲とすることに依つてのみその勢力を伸張し得べく、他方はまた徹頭徹尾對手の立場を打壞すことに依て自分の自由に進み得べき途を拓き得ると考へる。所謂反對の爲めの反對は斯うなると最早單なる感情問題ではなく、實に全種族に取つての死活問題となるのだ。丁度小選擧區制還元案を前に政友會と民政黨と對立した時の樣な感情が常住彼等の間に存るのである。斯う云ふ國柄に於て議會に於ける各派の協同の期待し難きは固より云ふまでもない。斯うなると議會そのものが元來各種勢力の協力を實現すべき機關ではなくして、寧ろ各種勢力の反感軋轢の恐るべき内訌を防ぎ、鬱積せる不平不滿を僅に之に依て洩させる爲めの覺束なき安全瓣に過ぎないのである。だから或る意味に於ては、議場の光景がふしだらを極めるのを見て人々始めてホツト心を安んじ得るといへぬこともない。馬鹿に物靜かでは、却て嵐の前の靜けさと云つた樣な悽慘の感を抱かずには居れぬから、從てまた斯う云ふ國に於ては、一般に議事妨害の如き手段の行はれるのは致し方ないと許されて居る樣である。

第二には十九世紀中葉以降歐洲大戰前まで二三の國に行はれた新興階級の進出に對する制度上の阻止と云ふ事を擧げることが出來る。十九世紀中葉と云はず、そも／＼佛蘭西革命以來、稀な例外を除いては、例へば選擧法の立て方などは隨分無産階級を無視したものであつた。併し此時代は實はまだ無産階級自身に積極的の要求が起らず、從て一般の議論としても當然與ふべきものは與へずに居ると云ふ考はなかつたのである。其後無産階級の政治的自覺が進み其方からの積極的要求が起ると、細かく云へば其間固より種々の迂餘曲折はあるが、大體に於ては漸を以てその要求は容れられ意識的に之れが阻止を續けるものは極めて少なくなつた。(所謂プロレタリアの歴史解釋は斯う云ふ説明を好まぬであらう。好む好まぬは解釋の仕方であつて解釋さるべき事實に二つあるのではない。)而して之は歐洲大戰と共に全く消滅に歸するのであるがそれまでの間大勢が普ねく之を許すべしとする樣になつても、約半世紀に亙つて、特殊の理由から制度の上に還の新興階級の當然の要求を抑へた國が二つ三つある。獨逸帝國、その一邦たる普魯西並に白耳義の如きが是である(拙著「普通選

學論」參照)。之等の國に於ては所謂新興階級の代表者は、その背後に如何に多數の投票を荷はふてゐても、擧げられた數は極めて尠く、議場では常に反對多數派の壓倒する所となつて居た。そこで彼等は勢ひたゞ徒らに反對の爲めの反對を濫發して以て僅に鬱憤を洩らすより外に仕樣がないと云ふことになる。獨逸帝國議會は小黨分立のお蔭で必ずしも斯くの如くなるを要せなかつたが、昔普魯西の議會にはやゝこの氣味があつた。白耳義は流石に少數と云つても其勢甚しく劣弱ではなかつたので自ら愼重の態度に出で不平を洩らす場所は寧ろ之を議會外の運動に求めることにし、議員としてはいづれも皆努めて眞面目にやつた樣である。概して云ふに、この第二類に屬するものは議場をふしだらに導くべき十分の素因があつて而も其實甚しき醜態を發露するに到らない。昔の墺匈國內の議會には隨分目にあまる醜態を演じたものもあるが、之は第二種の原因の外猶一層強き意味に於て第一種の原因をも兼ね備へたのであつて、事情は固より爾く單純なものではなかつた。

　更に將來の事を考へると、階級鬪爭の觀念の普及がまた同じ樣な狀勢を來さぬかを懸念すべき理由がある。無產階級の政治的進出と共に階級鬪爭の考が銳くなるとする。無產階級の全部がさうなるかどうかは分らぬが、少くとも其一部は絕對無條件に所謂ブルジョアジーとの協動を拒むであらう。大戰以前の社會黨はやはり右の觀念に基いて形式上豫算協贊の禁令なるものを揭げてゐた。てんで頭から豫算を否認すると云ふ形で以て既成政黨との協力を斷乎として峻拒せんとするのである。併し實際に於て之は文字通りに行はれなかつた。此事は詳しく說明するまでもあるまいが、最近のボルシエヴキズムは斯うした社會民主主義の微溫的態度に反抗して起つたものだとすると、それの最近に於ける急激なる流行は、自らまた從來とは變つた形勢の發展を見せるものと考へねばならぬ。私の考では、ボルシエヴィズムの政治理論の徹底より生るべき此方面の實際手段は只二つしかあり得ない。積極的には一黨專制の強行であり、消極的には純粹なる議事妨害の濫發である。前者の例は既にロシアに現はれた。但し一黨專制主義の成功はロシア同樣他の諸國にも容易に期し得べきや

は問題である。さすれば議事妨害が恐らく之れからのやかましい問題となるのだらう。さるにても我國の現狀に於て、議事妨害の廉を以て責められるのが既成政黨の人達であり、少數ではあるが無產黨に屬する議員だけに紳士らしい立派な態度の賞讃されるのは、頗る皮肉な話であると思ふ。

我國の場合は如何

以上の說述に依て私は次の結論に到達した、議事妨害と云ふが如き不祥事は西洋にも其例絕無ではないが、之れ有るは專ら特殊の餘儀なき事情ある國に限り、少くとも斯かる事情の存するに非る以上毫末も之を諒とすべき理由を認められて居らぬと。然らば此種の餘儀なき事情あるに非ずして而も同樣の不祥事に累されて居るとすれば、そは無くて濟む禍を自ら作るものに外ならず、何人かが必ず之に對して責任を負はねばならぬ筈だと考へざるを得ぬ。

日本國民が歷史的反感を根據として截然たる敵味方の數群に分れて居るのでないことは云ふまでもない。一部少數の特權階級が今なほ政界に優勝の地位を占めてや、新興階級の進出を邪魔して居る形蹟あるは疑ないが、大觀すれば之も今暫くの我慢で、到底滔々たる民衆勢力の進路に當り切る代物ではない。階級鬪爭に絡まる懸念は將來の大問題として各國と共に之れからの攻究に委ねるとしよう。若し朝鮮や臺灣の土着人に內地人と同等の基礎に立つて代議士を送るの權利を認めたなら、玆に始めて或は西洋に見るやうな苦がい經驗を嘗めなければならぬかも知れぬが、今のところ之も實際の問題となつては居ぬ。果して然らば我國今日の憲政運用の途上に於て、甲乙派を分ち彼等をして根本的に爭はしむる素因は全く存在しないのである。單純な比較から云つたら、日本ほど國民的利害感情を複雜ならしむる原因の乏しい國は他に餘りないと考へる。現に國民の間には何處を探したつて議會の爭ひに見る樣な反感を見せぬではないか。國民は寧ろ擧つて皆議會の喧嘩に愛相をつかして居る、彼等の私鬪の結果議會が議員自身の手で全身不隨の狀態にされて居るのを迷惑にも感じ

又心から憤慨しても居るやうだ。併し之を以て單に議員政治家その人のみの罪なりと斷ずべからざるは、前々から私の繰り返して述べた所である。唯吳々も注意したいのは、之れは本來無くて濟む禍であり孰れかといへば有るべからざる禍であり、偶々西洋に同樣の狀景を呈するものがあるからとて、憲政に伴ひ勝ちの通弊だなどと嘯くべからざる底の禍害であると云ふことである。憲政に伴ひ勝ちの通弊だと觀る考の恐るべき結果は、一つには酒飲みが道樂を寬過すると同樣責むべきものを深く責めずに放擲することであり、二つには更に遡つて憲政そのもの、效用を疑ふことである。就中之に由て政黨政治に對する懷疑の風潮を助長するが如きことあらば、我國憲政思想の健全なる進歩は爲めに大に障害を受くることにならう。何となれば、政黨政治の本體を明にしそれの完成をはかることが、啻に我國目前の弊害を救治する唯一にして最有效なる方法なるのみならず、一般政治思想の向上の上にも亦缺くべからざる必要だと考ふるからである。

附記　引續いて私は昨今世上に唱へられた二三の救治策を批判し、終りに政黨政治論を以て本稿を結ぶつもりであつたが、時間の餘裕がないので之れは他日の詳論に割愛した。併し本號所載の分だけでも、議事妨害と云ふ事の事實上の原因と道理上の無根據とを明白にし、從てその根本的救治策の何たるかをもおぼろげながら讀者に感知せしめ得たと考へる。十分に意を盡し得なかつた點に就ては幾重にもお宥しを乞ひたい。(四月十日)

輿論と暴力

土田杏村

一

タルドは輿論と、それに補助と制限とを與へる社會意識の他の二つの部分とをはつきり區別した。その二つの社會意識とは、「傳統」と「理性」とである。祖先の輿論であつたものが凝結し蓄積せられ教育により國民の所有となつて、先入見と呼ぶ一の精神的遺產を構成すると、それが卽ち傳統である。また一般の潮流から孤立して思考する優秀な個人の判斷は、勿論誤まることも多いが比較的に合理的であるから、これを理性と呼ぶのである。大學とか法廷とかが、それに相當すると見られよう。斯くして國民は、輿論を持つよりも前に、先づ共同の傳統を持つ意識を持ち、更に進んで優越すると考へる理性の決定に隨ふのだ。輿論は、理性を通俗化しつつこれを傳統の中へ送り込む任務を果たすけれども、輿論の活動區域はそれだけに限られてゐるものでも無い。彼は傳統と理性との媒介役を勤めるよりも、寧ろ好んで兩者の鬪爭渦中へ姿を現はして來る。結局以上三つの力は、その性質を異にし、またその原因と結果とをも異にして、相競爭しつつ事物の價値を形成するのだ。タルドは斯樣に考察した後、輿論を次の樣に定義した。——「輿論とは、現實的な時事問題に應じて、同國、同時代、同一社會に屬する人人の間に傚ふべきものとして現はれた無數の判斷の、多少論理的であつて一時的な集合體である。」

タルドのこの考へは大體に於いて誤まつてはゐないし、その輿論の定義も巧妙なものであると私は考へてゐる。併し彼がこの論を書いてから既に四分の一世紀を經過してゐるだけに社會生活の構成化には大いなる變化が起り、最早そのままの標準では現代社會生活の意味を捕へることが出來ないやうになつた。彼の考察の中でも疑問の多いものは、所謂「理性」であら

學者、大學、學界などの名で呼ばれる所謂理性が誤まつた判斷をなす場合の多いことはタルドも認めてゐるけれども、判斷が誤まられる誤まられないといふよりも前に、――また判斷は勿論大體に於いて所謂理性により正しくなされる蓋然性を持つにせよ、――我我の生活にはなほ別の大いなる問題が與へられてゐるやうだ。それは所謂理性が絶えず正しく時代を判斷するかといふことではなくて、絶えず新らしく時代を創造するかといふことである。よい判斷者は必ずしも常に新らしい創造者ではないし、また逆に新らしい創造者は必ずしも常によい判斷者ではない。時代は傳統に對しよい判斷を提供するだけでは進みはしない。理性はよい判斷をなすより前に、先づ自らに與へられなければならぬものがある。それは時代の新らしい創造である。卽ち時代には、つねにその尖端に新らしい要求者が位置しなければならぬのだ。なほもう一つタルドの考へに對して批評を加へたいのは、彼の見方がまだとかく個人の力を重く見るに過ぎ、社會の進みの尖端に働らきかける社會生活全體の機構的な壓力を十分に見てゐないことである。併しそれはタルドがこの論をなした時代の社會として當然な時代解剖であつたらう。マルクスは產業革命後の社會經濟社會の構造を對象とし、その社會の商品の生產的性質を分析したが、この分析はマルクス經濟學の論理的基礎をなし、今日の經濟社會から見れば既に意味の古いものになつてゐる。社會科學はその研究の資料をその時代の社會生活より得るが故に、いかに豫見力の强い科學者により考察せられた場合にも、時代が隔たればその見方は幾分かづつ新らしい時代の社會生活に適合しなくなるのは當然のことだ。タルドの時代には、個人的天才はまことに彼の社會學の構造が描き出したやうに時代生活の尖端に立つてゐた。けれども現在では個人的天才の力でどうにも始末のつけられない一層大きな社會的機構自身の創り出した壓力が社會生活の全體の上に働らきかけてゐるし、また同時に時代生活の進みの尖端へ押し寄せてゐるのである。そして個人的天才が時代生活の尖端をきり開いて進む場合は、一般に甚だ少くなつた。

私は現代の建築について他の場所でも小感を書いたが、現代建築の本流はいふまでも無く鐵筋混凝土のビルヂング建築であると考へる。アパアトメントの發達とともに、個人の單なる住宅でさへも今ではその混凝土のビルヂング建築の中に包容せられ始めた。然らば斯うした建築樣式は、建築界の個人的天才が全く自らの頭腦の中から獨創的に考へ出したものかといへば、さうでは無かつた。ビルヂングのやうな構造を持つた建築を要求したものは近代の產業文明であり、またそれに伴隨しての商

素形態であり都市形式であつた。それは建築家が要求するより以前に、社會の經濟的構造自體が要求してゐたものであつた。建築界の個人的天才は、社會のこの經濟的構造が自らに與へる建築の註文書を先づその儘に讀み且つ「理解」するよりほか仕方がなかつた。さうしてゐる間に、混凝土建築の物質的方法がまた純粹に化學界より與へられた。それは單なる物質であり技術であるに過ぎないけれども、我我の建築には革命的の變化を起さねばやまぬ性質のものである。キネマが小說や劇を止揚しはじめたのも、最近の現象だ。キネマはつめたい機械性であり物質であるに過ぎないと冷笑してゐたのは、鐵筋混凝土のビルヂング建築が單なる事務的建築であつて美の女神は其處では磔刑に處せられてゐると考へたと同じ性質の時代錯誤であつた。キネマは機械性であり物質性であるけれども、一般に機械的なもの物質的なものにより大きい、新らしく構成せられた「精神」が見られるやうになつたのが現代の文明だ。キネマは進んで、小說や劇やを舊世紀の藝術形式と見て、これをしりへに殘しさへした。キネマが小說を模するのでは無く、小說がキネマを模しはじめたのだ。また現代の貨幣組織が銀行や手形交換所を必要とし、これを設立しはじめたのは極めて最近のことであるけれども、クレディットの組織は今ではマルクスが考へたやうに生產の相互關係であるところを超越して、それ自身に自主的の意義を持ち、クレディットの組織が資本を、生產を支配するのである。極言すれば、それは單なる帳簿であるに過ぎず、これ程機械的な、物質的なものはない。然るにその機械的な、物質的なものが、生產者や消費者の意志を離れて全く機械的、物質的に、我我の社會を支配するのだ。それが我我の現實である。この機械性この物質性を直接に支配してゐる個人は、だから特別に個人的の天才でなくてよい。フォオドは生れないでもフォオドの自動車のテムポは何處からか生れたに相違ないし、フォオドほどのビジネスマンはいかなる銀行にも二人や三人は見出されることであらう。現在の田中總裁の判斷力は田舍の村役場の書記ほどのものであるにせよ、立派に政友會の總裁がつとまつて行くのである。

社會意識には、絕えずそれの尖端が生れて行く。それは社會意識全體の壓力を背景にし、その壓力の尖端として生れ出るのだ。勿論それは或る個人意識の中に或る發明として自覺せられることもあれば、また生物の突然變異のやうに全く新らしく出現することもある、併し結局の大いなる動力は、社會生活自體がつくつた、組織的な機械性物質性の「相互關係」であるといはなければならない。社會生活はこの複雜な尖端をも含んで、それ

い、のより大いなる統一をつくらなければならぬ。タルドの考へ方に隨へば、この統一をなすものは所謂「理性」であらうが、理性はその論理の前に理解の能力を持ち合さなければならないといふことの理由は、既に考へて來たことによつて明らかであらう。時事問題に對し批評の主觀となるものは、またこの尖端までを含んでの社會生活の全體的統一である。民衆は漠然とながらも幾分論理的な、この全體的統一觀を持つてゐる。時事問題に對し、同一共同社會の民衆が、社會生活のこの全體的統一の立場から幾分論理的な判斷を下し、その同一判斷が他の民衆の間に於いても同樣に分有せられて居ると意識せられつつある時、我我はこの判斷の一時的なる集合を輿論と呼ぶことが出來る。

二

傳統は、その社會生活に對して現實的に一の支配權力を持つてゐる。傳統は社會生活の尖端に位置する社會の新らしい機械性隨つて新らしい社會的要求を包容してゐないものであるから、實際はその社會の全支配をなすに不適當であり、老朽淘汰を前にする。その點では輿論は傳統より遙かに勝れたものであるけれども、その社會の支配權力はつねに傳統より傳統へと受け繼がれて來る。また傳統はその支配權力を自らの手に保持するために、あらゆる手段を構じ、教育その他の方法によつてその社會の民衆にこの事を當然と考へさせるやうにさへ工夫するのである。傳統の地位にある人達は、その社會の秩序はただ彼等が傳統を鞏固に支持するが故に失はれずにゐるとも考へてゐるのだ。それに較べると尖端は元來ならず者であり、親の厄介者である。傳統のつくつた軌道を歩かない常規に外れた人物であるし、絶えず傳統のブラツクリストに氏名を掲げられる要視察人でもある。さうした尖端が社會生活に於いて自覺せられて行くのは、社會生活の構成から見て當然のことであり、その尖端が傳統に一致しないこともまた餘りに當然過ぎることだ。尖端は社會生活の全體的統一より見れば、全體に對する固有の意味と論理とを持ち、その點では傳統と同一權利を以て對立するものであるが、その意味と論理とは傳統の固有する意味と論理とに一致するもので無い。しかし彼は傳統のやうに支配の權力を持つてゐないから、傳統の目より感化を要するならず者と見られながら、つねに傳統の支配を受けて行くより外に仕方がない。

傳統が全社會生活の上に支配權力を以て臨んでゐる間に、その支配者の意識の中には支配することと自身の快感が生長して來た。それはヒロイズムである。またこの支配の間に多くの物質

的利益をも自分の懐の中へしまひ込むことが出來た。これも忘れられない旨い味といへよう。だから傳統はいつまでもその傳統としての全支配權力を失墜すまいとつとめてゐる。輿論は尖端から受け取つた新らしい機械性、新らしい要求を論理化し、また一層通俗化して、頑迷な傳統を感化しようとつとめるけれども、傳統は執拗にそれを排除しつつ進むのだ。そして傳統が民衆に鼓吹する道德は、立身出世であり、實利實用である。傳統は匹夫の中より起つて自らに婿養子となつて來るものにその遺產を讓り渡さうともくろんでゐる。また傳統が自分で手足として使へるものが實利實用であり、社會はさうした價値を最高のものとして要求すると民衆に說敎する。

權力を以て支配することは、結局は暴力を以て支配することである。或は、暴力を使つてもよいと容認せられた支配、暴力が公然と共稼ぎする支配が權力であるといつてもよい。暴力は實際はそれ以外のところに多く生長しないものであるけれども、權力が暴力を作ふのは始終のことであるから、權力に作はれた暴力は暴力であると特別に意識せられないし、それ以外の場所に暴力が存在した場合には、虎が動物園の檻を出て銀座を歩いてゐるやうに、傳統はそれを非禮とし向ふ見ずと呼ぶのである。言論の取締・出版物の發賣禁止、集會の解散强行、個人の拘束執行などは、現社會の日常風景であり、何人もそれを奇觀だとは思はない。暴力を常用すれば、暴力を使ふことが月給を貰つてゐることの目的だとさへ考へるやうになるから、暴力と非暴力との境界標が引つこ拔かれ、人の頭をなぐることも人を保護することも、監視中の女と逃げることも人を保護することになつて、何が何やら暴力行使特權者にも分らなくこんがらかつて來る。昔は武士に切捨御免が特許せられたが、今も暴力と非暴力とを判斷する權利は暴力の常習によつて暴力に麻痺した人の任意裁量に公許せられてゐる。

尖端に位置する民衆は、傳統により屢々狙ひ打ちの目標として取られる。傳統は切捨御免の特權者であるが故に、この狙ひ打ちを自ら非行と感ずる筈もない。そしてこの狙ひ打ちには一種の功名心の伴なふが通常だ。「偉いものになれ」と敎へるのが傳統の敎育法であるから、「どうせ新聞に出て名前を天下に知られるやうの大仕事をしなけりやならぬ」といふことが狙擊人の直接の動機になる。尖端に位置する民衆は、結局ならず者であり、厄介者であつて、この狙擊を防禦しようものならそれは「口論」であるし、狙擊者がこのならず者に向ふために刄物を揮へば、それは「正當防衛」になる。

傳統によつて特別に嚴重に支配せられる社會生活の尖端は、

その社會に今やつと籍を持たうと要求してゐる無籍人であるから、全く無名の賤民であることは言ふまでもない。この無名の賤民は傳統によりどれだけ暴力的に支配せられ、踏んだり蹴つたりせられても、ただ默々と隨從する。賤民なるが故に傳統の尊嚴をそこなつてはならぬと考へてゐるのだ。また自らの手に暴力などを持つのは、もつての外の僭越だとも考へて居る。隱忍持久はほとんど彼の天性であるやうにさへ見えるのだ。踏んだり蹴つたりがその極度に達し、尖端は、それ以上持久すれば最早自らの存在をさへ失つてしまはなければならぬ時になつて、はじめて暴力的に傳統へ反抗するであらう。彼は無名のならず者であるが故に、隨つて、その名前を世に現はさなければならぬとするヒロイズムを持ち合さない。個人的に反抗し勇名を世に現はすことは專ら彼の廻避するところであつて、その無名の人間は絕體絕命の場合大衆的集團的の反抗方法を取らうとする。私は繰り返して言ふ。彼等は決して最初から積極的に傳統の上に働らきかけようとするものでは無い。彼等は全くその存在性を失はなければならぬ時になつて已むを得ず大衆的集團的に立つたのだ。しかし平生暴力により支配せられこそせよ自分で暴力を持つことの無かつたものがはじめてそれを持つたのであるから、その危險性は殊によく目立ち、社會の秩序を根本より破壞するものの如くに傳統によつて考へられるのだ。

三

社會生活のこの尖端と傳統との中間に立ち、よい傳令の役目を勤めるものは輿論であつた。輿論は社會の兩端の緩衝地帶でもある。だから輿論は社會生活の尖端より遙か後方に退いて居り、傳統がこの輿論を敵とし輿論の上にまで暴力を揮はうとした時には、傳統の固執するものの古く無用に歸してゐることは言ふまでもなく、傳統はこの途を執拗に支持することによつて自ら社會の中に危險なる情勢を釀育せしめてゐる。

輿論は必らず表現せられなければならぬ。表現せられたものを共同に認識することによつて、社會は同一の判斷が他の民衆によつても同樣に分有せられて居ることの共同意識を持つのである。輿論の表現の近代的樣式として著しいものが二つある。議會とジャアナリズムとが其れであつた。

議會は、社會の尖端の創造した新らしい要求が穩健に傳統と取引せられる一つの國際市場である。だから議會の誕生の最初に於いては多數決などは思ひも寄らず、傳統が特別の決定權を持つてゐた。一つの問題に對しても、全員によつて採決するのではなく、議員の發言權はそれぞれの議員が代表してゐる集團

の階級的位置に隨ひ、それぞれ特別の意味を持つてゐた。現在の上院制度なるものは、なほその古い時代のものの殘物である。無名の民衆を代表する議員の意見は、元來が無名の人達の主張するところであるからそれに甲乙の等差を附けることが出來ず、すべてを等價の一として數へることにした。多數票決の意義が其時にはじまる。しかし議員の意見をそれぞれ等價の一として數へはじめた時には、社會の尖端の創つた新らしい要求は、古い尊嚴な傳統と共同に立つ土臺を獲得した時であつた。水呑百姓は自らの要求を一票權として主張すると同時に、貴族の權威をも一票權に相當するものとして値踏みした。傳統の目からは常規に外れた要求であつたものも、要求自體として當然の論理を含み、一定數の民衆の支持を得れば、議會の合法的機關を通過して、從來の傳統の苦笑のもとに傳統の尊嚴な祭壇へ送り込まれることが出來た。

しかし議會が輿論の機關としてさうした機能を十分に發揮すればするほど、傳統は自らの地位を擁護するために何等か議會の表現を骨拔きにする工夫をしなければならなかつた。議員は民衆の選擧によつて選出せられるものであるから、その選擧の費用を多額に要するやうにすれば、民衆は先づこの選擧を爭ふことを斷念するであらう。またそれでも僅かに選出せられたものには物質的に好餌を提供して所謂議員の切り崩しを行ふのである。更に進んでは議會の表現の名を以て選擧法そのものを改正し、出來る限り社會の尖端の要求を議會へ送り込まないやうにする。元來議會は、傳統と尖端との間の合法的な取引機關として生れたものであるけれども、ここに至つて議會自身が議會の意義を否定することを決議しようとするのだ。各國の議會は何れも一度はさうした經過を取らうとする。しかし議會が議會を否定する決議をした後にも、民衆はなほ議會を民衆の議會として認識するものであらうか。それは斷じて無理のことだ。輿論の合法的な緩衝地帶が撤廢せられれば、傳統と尖端とは再び直接の爭鬪を續けるより外はない。そして輿論を支持する大衆の層は、自らもその表現を議會に於いて失つたが故に、當然尖端の同情者として立ち、また自らの地位を擁護するためにも決然として立つて傳統と爭鬪する途を取るに相違ない。

社會はジャアナリズムによつて或る程度の好奇心を滿足せしめてゐる。隨つて社會生活の尖端に現はれる何等か新らしい要求は、ジャアナリズムにより寧ろ屢々誇大にさへ報道せられるのだ。ダンスの流行は全體の民衆から見れば極めて僅かの數に限られた流行であつたにしても、新聞によつて報道せられた時には社會の異常の好奇心を刺戟し、ダンスをしないものの室に

もそのダンスをする空氣を幾分かづつ送り込む。モボ、モガの出現が新聞種になつた時は、勿論すべての人が多少づつモボ、モガ化したのである。斯様にしてジャアナリズムは社會の尖端に現はれる新らしい要求を、絶えず通俗化してすべての民衆の上に放送する役目を果たす。勿論保守的な傳統も濃厚に新聞の上には表現せられ、民衆は新聞を讀んでゐる間に傳統と尖端との適當なカクテルを調合する。それは尖端の芳烈な革命酒によつて踊躍と醉はされるものでもなければ、傳統の沈滯した殆ど酒精の氣をさへ失ひかけた古酒によつて憂欝な睡眠に誘はれるものでもない。ジャアナリズムは民衆の輿論を議會とはまた全く違つた方法で構成し、これを一般化する作用を營んでゐる。しかし傳統がその地位を執拗に保守的に支持するためには、このジャアナリズムの可なりに平凡な調子をさへも敵としなければならない。ジャナリズムは傳統をも含めての一般民衆を商品の顧客として求める必要上、尖鋭化し難い、輿論としての自制作用を持つに拘らず、飽くまで保守的であらうとする傳統は、ジャアナリズムの表現するこの輿論の上に種々の壓迫を加へ、議會の表現と同樣に成る可くそれを骨拔きにしようとする。

輿論は議會とジャアナリズムとの上に表現せられ、傳統と社會生活の尖端との爭闘はそこに合法的な國際取引市場を見出してゐたのであつた。然るに傳統がこの二つの機關をさへ極度に壓迫し、尖端をして全く表現の場所を失はしめたとすれば、その結果はいかなるものになるか。傳統自身がその存在を失はないためにもこの極度なる壓迫が自らに安全な仕方でないことは、とにかく最初に何人にも分かることである。社會生活の尖端は、既に考察した如く社會生活全體の構成を背景とし、避けるを得ない機械性物質性として自づから生起せしめられたものであり、單に個人の不軌心より生み出されたものでないとすれば、それの存在を奪ふことは、寧ろそれの背景としての全社會生活を危地に陷れる所以である。尖端は最早理論では無くて事實なるが故に、如何に極度の壓迫を加へてもその存在性をまで奪ふわけにはいかない。傳統はその意味の上より絶えず更新せらるべき傳統であり、この更新を廢した時にそれの歩みは不合理的となる。卽ち傳統が自らを更新することを廢し、社會の尖端の存在性をまで奪はうとしてその上に望んだ時には、尖端に對するその壓迫は不合理的なるが故に當然或る原始性を、更に進んでは或る野蠻性を持つに至るものであるが、その時には尖端も對抗上當然或る原始性或る野蠻性を自らの中に含まなければならない。社會生活はここに一の重大なる危機に當面しなければならなくなつた。

四

今や田中内閣の躊躇が當面の問題として我々の前に横はつてゐる。田中内閣が時代の上に殘した業蹟は、傳統を極度に保守

的に支持するといふ反動以外の何物でも無かつた。言論を徹底的に抑壓する他面では傳統の更新を阻止する所謂思想善導に熱心となり、治安維持法と呼ぶ最惡の、新興社會運動禁過の法令を布いた。所謂議會の切り崩しを行つて議會を獨占し、公然自派に都合のよい地方的利權を吸收し、普選を骨拔きにする區制案をさへ通過せしめやうとした。田中内閣の行ふ政治によつては、社會生活は一歩づつ古く昔へ還らなければならない。

責任内閣の意義も田中内閣によつては全く蹂躪せられようとしてゐる。議會にはかつた政府の重要法案がその議會を通過しなかつた場合には、輿論の一表現機關としての議會はその政府の政策を容認しなかつたのであるから、政府は當然責めを引いて辭職しなければならない。なほ輿論の他の一つの表現機關としての新聞も、政友會の機關紙を除いては、一つとして政府の政策を支持するものが無く、ひたすら田中内閣の辭職を待つてゐる。それにも拘らず内閣が辭職しないとすれば、責任觀念を全く缺除する點で内閣は前例を持たず、内閣の諸員が國民にどれだけ責任心を鼓吹して見たところで國民はそれを一顧もしないに相違ない。また斯く輿論を無視して進むことにより、田中内閣は國民に專制と暴力との可能を敎へてゐるのである。床次氏等によつて提出せられた區制案は、普選を骨拔きにするものだと評する點で輿論の見るところは一致した。然るに田中内閣は議會の切り崩しにより全く偶然に議會を獨占し得た形勢を利用して、單に形式的に議會にはかり、この惡法をも制定しようと努めてゐる。これが爲めに論議を盡さうとすれば、政府黨は任意の動議を議決して議員の論議を議會が封鎖することをなしてゐる。斯く任意の動議を議會が議決し得るものならば、なほ進んでは、「議會は議決權をすべて政府黨に委ねること」、「政府の提出する議案に對しては何等の質問をもなさず、即決議決によつて全部これに賛成すること」など、議會は如何なる内容の議決をもなし得る筈であり、結局議會は議會の意義を否定することをなすのである。選擧法が選擧の意義を極力否定する性質のものとなり、議會が議會の意義を極力否定する議決をなす機關に變つたとすれば、最早民衆の何人が議會や選擧に興味を持つであらうか。議會は今や會議の場所でなく、暴力によつて鬪ふ場所になつた。そしてこの形勢は近時の議會に於いて益々露骨に進められてゐる。私は田中内閣の如き類例稀れな反動内閣が意義の滅んだ死屍を擁して今なほ存續することを、國民生活の安定の爲めに一つの大いなる危險と感ずるものである。

しかし民衆はその反動專制の内閣の下にむかしなしたやうな民衆運動をも行はず、政黨のなすところをただ默々と傍觀してゐる。この沈默あるが爲めに田中内閣の如きも民衆の不滿の度を輕く測定してゐるのであらう。けれどもこの沈默は民衆が批評を持たない結果の沈默ではなくて、その底流には滔々たる勢ひのものが流れてゐることを忘却してはならない。輿論は今や

一般に既成政黨によつて支配せられる議會政治に失望したのだ。内閣に失望し、政黨に失望し、議會に失望し、結局は政治一般をまことに僞瞞の多いものとして失望しはじめてゐるのだ。内閣はこの形勢を更に何處まで押し進めようとするのであるか。

　時代生活の進みは複雜である。これを全體的に統一して理解することは、最早田中首相や小川鐵相や床次氏やの頭腦の堪へるところで無くなつた。社會生活の尖端の創造するものが意味として如何なる新らしさを持つものであるかを理解し得ないのは當然のこととして、輿論のレヴェルの與へる課題が首相等の理解には既に重荷となつたのだ。一例を言へば、首相等はマルキシズムの盛行を極度に畏怖してゐるけれども、我々から見れ居ばそれは大して怖るべき現象でない。今日の經濟生活は個人的のものでなくて全く社會的のものとなつたから、社會的の經濟學が起るのは當然のことであるし、社會的の經濟學が起れば經濟生活の理想とするものをその立場の上に求めることは餘りに當然過ぎることである。マルキシズムの一般的方向が其れであるとすれば、およそ時代經濟の現實を在りの儘に認識するものは如何にしてもマルキシズムのこの一般的方向を容認しなければなるまい。併しマルキシズムの階級鬪爭理論がなほ一の原始性を帶びることは、今日の社會經濟現實から見て發達の未完のものだといへる。社會經濟現實の構成は、マルクスの生きてゐた時代に於けるよりもなほ顯著にその機械性と物質性を增大せしめたのだ。私はマルキシズムの將來の發達では、この原始性の色彩の中より脫し、その論理に併せて政策をも大いに機械化し物質化するに相違ないと考へてゐる。何故なればマルキシズムの含む原始感情はなほ大いに觀念的であり、唯物論は一層徹底的に客觀化せられなければならぬからである。然るに現在マルキシズムが社會に盛行する理由は何であるかといふと、傳統の壓迫が原始感情に訴へて、或る野蠻性を含むものなるが爲めに、これにより絕えず壓迫せられて居る民衆はやはり或る野蠻性を以て對抗しなければならなくなり、原始感情の觀念性を含むマルキシズムによつて淸新に鼓舞せられるが故である。隨つてマルキシズムを導いて益々原始性野蠻性を發揮するものにする罪は、社會生活の尖端に極度の壓迫を加へる傳統のがはが當然擔はなければならない。

　私は田中内閣の辭職の一日も早いことを衷心より希つて居る。私は民政黨の内閣が全くこの反動を一掃し得るとは考へてゐない。しかし政友會内閣が崩壞して民政黨内閣が樹立せられたとすれば、それはとにかく傳統を一步近く輿論へ近かづけた所以だと信ずる。今日社會生活のいたる處にこもつてゐる沈滯の空氣は何人によつて釀し出されたものであるか。田中内閣の無責任な存續そのものが、今日では社會生活のあらゆる危險の根本原因であることを政府は速かに自覺しなければならない。

輿論製造論

青野季吉

一

時の政府を打ち倒して、政權の美果にありつかうとする反對政黨は、いつも定つて、「輿論」といふ錦の御旗をかつぎ出して來る。「囂々たる輿論に聞け！」とか、「天下の輿論は今や一日も現內閣の存續を許さず」とか云つた類ひの叫びを、我々は幾度聞いたか知れない。この叫び聲は、議會の壇上からも放送されれば、日比谷の野天にも響き、大新聞の初號活字も動員さるのである。輿論なるものは、恰かも政權移動の最後の審判官の如くである。

それならばこの輿論なるものの實體は何であらうか？ かう問ふたならば、何人もほとんど反射的に答へるであらう。輿論とは國民の大多數者の一致した意見だと。だが、少し立ち入つて、それなれば國民の大多數の一致した意見とは、いつたいどんなものかと重ねて問ふたならば、卽座に、反射的にこれに答へ得るものは餘りないであらう。

いつたい國民の大多數の一致した意見などと言ふものが、在り得るものであらうか？ 一口に國民と言つて仕舞ふから、いかにも同質的な個人の集團のやうに響き、そこに大多數者の一致した意見がつくられるやうに考へ做されるが、しかし國民は決して同質的な個人の集團ではない。第一に、そこには、儼然として階級の差別が存する。階級の差別が存すると言ふことは言ふまでもなく、根本的に利益の相反する社會群が存すると言ふことである。根本的に利益の相反する社會群が、一致した意見を持つと言ふやうなことが、出來あり得るものではない。その根本的な利益に忠實であればあるほど、それに意識的であればあるほど、その各社會群の抱く意見は、一致するどころか、兩極的に背反せざるを得ない。この場合せいぜい在り得るもの

は、階級的の輿論、或る社會群の輿論である。だが、これが、嚴密に言つて國民の大多數者の一致した意見と言へないのは、自明のことである。第二に、同じ階級、同じ社會群の内部にあるとき、部分的利益を異にする小社會群が存する。都會勞働者と小作人とでは、尠くとも部分的に利益を異にするし、工業ブルジョアジーと金融ブルジョアジーとでは、部分的に利益が相反する。だから、同一の社會群の内部にあつても、一致した意見などと言ふものは、全然在り得ないとは言はないが、容易に在り得るものではない。

かう考へて來ると、輿論とか、國民の大多數者の一致した意見とか、言つたものは、事ある毎に擔ぎ出して來る神輿のやうなものであつて、一度びその扉のサビた錠前をはづして見れば、なかには石ころか木切れしか入つてゐないことになる。言ひ換へると國民の大多數者の一致した意見と言つた意味での輿論なるものは、現實に存在し得ないものとなるのである。

かう言つて仕舞ふと、それならば戰爭の場合とか、政變の場合とかに、尠くとも國民の大多數者の意見の一致と理解してい現象の生ずるのは、どうした譯かと訊ねる人があらう。尤もな不審である。だが、少し立入つて考へて見ると、そういふ場合でも、それは大多數者の一致した意見と見えるだけであつて、實質を洗つて、案外そうでない場合が多いのである。極く卑近な例で言へば、先般の東京市會議員の選擧の際の如き、市會を淨化せよとか、市會から醜議員を驅逐せよとか言つた叫びは、東京市民の大多數者の一致した意見のやうに、即ち全市民の輿論のやうに見えた。ところが實際に市民の投票に問ふた結果はどうかと言ふに、嚴に醜議員を出した政黨や勢力系の議員が大多數を占めて、その輿論が前面に押し出した無産黨議員は隅つこに五六名寒むそうにちぢこまつてゐるに過ぎない。尤も選擧の結果は、必らずしも輿論の鏡であると言ふ譯にはゆかないが、それにしても頼もしげに見える輿論なるものが、案外頼りにならないことは、この卑近な生々しい事實でも分ると思ふ。

かう言つたからと言つて、輿論なるものが全然無いとか、これまでも存在し得なかつたと言ふのではない。階級の對立がそれほど甚しくない、階級利益にたいする意識が、それほど明確でない時代には、國民大多數の一致した意見と言つて差支へないものが形ちづくられたことは事實である。たとへば、近代日本の初期において立憲政治の要求した場合とか、日清戰爭の場合などは、尠くとも輿論と言つたものが形ちづくられたと言つてよいであらう。だが、階級の對立が尖銳となり、階級利益に

關して意識的となつて來れば、最早やそう言つた意味の輿論の形ちづくられる社會的基礎がなくなつてしまふのである。

二

政府反對黨が政權移動を望むごとに、輿論の錦の御旗をかつぎ出すのは、それならばどう言ふ譯か？　一口に言へばこれが一番有效だからであり、これが一番大義名分的だからである。

それと言ふのは、立憲政治における政府は、國民の大多數の一致した意見の支持によつて、政權を掌握してゐることになつてゐる。事實がそうであらうがあるまいが、とにかくそうなつてゐるのである。そこで時の政府を打ち倒さうとする場合には、最早や國民の大多數は、現政府を支持しない、輿論の支持がない、と笠にかゝつて行くのが、最も有效な、最も大義名分的な行き方となるのである。

政權移動に際しては、謂ゆる國民の大多數よりも、今日、寧ろ日當りのいい海濱に隱居してゐる元老なるものが、技術的に重要な役割を演ずることは、誰でも知つてゐる。また政黨の背後に控えて、莊嚴な何々倶樂部の密室に圓卓をかこむ一群の金融家團の方が、謂ゆる國民の大多數者よりも、政權移動により接し強制力を持つてゐることも、誰でも知つてゐる。然して政黨は在野の間も、その某隱居や、密室組にこつそりと渡りをつけることを忘れるものではないが、しかしおもて向きに、まぶしい天日のもとへ擔ぎ出して來るものは、「天下の輿論」なのである。「輿論の審判」なのである。政治といふものには、出來大義名分がつきものである。いゝかけ聲が大切である。旗を高く掲げないと仕事が出來ないのである。

ところで旣に說いたやうに、現實の社會には國民大多數の一致した意見と言つた意味での輿論なるものは存在しない。せいぜいあり得るものは、階級輿論であり、國民の一部に一致した意見である。だが、それでは政黨や政派か、大義名分の飛行機に乘つて、政權爭奪爆彈を投下することが出來ない。是非とも輿論が必然である。否、少くとも輿論と受取られるものがなくては仕事が出來ない。こゝに輿論製造の喜劇乃至悲劇の幕が上るのである。

輿論は、階級利益の對立した社會では、現實に成立不可能であるが、しかし輿論らしいものは、これをつくり出すことが出來る。これが附目である。これが凡ての手がゝりである。

たとへば或る國の支配階級が、自己階級の發展のために、戰爭の開始が必要だとする。ところで戰爭を開始し、戰爭の遂行に國民を總動員するためには、文字通りに國民の大多數の一致

した開戰意見、一致した戰爭支持が必要である。だが、その戰爭が支配階級の利益のためだと言つて仕舞つたのでは、國民大多數の同意は得られない。輿論はいれられない。そこで國家の危急存亡の秋とか、民族精神の發揚とか、敵國の侵略政策の克服とか言つた無數のスローガンが工夫される。これを一口に言へば、この戰爭をやらなければ國は亡びてしまうぞ、とおどすのである。お前達の足元に火がついてゐるのだぞとおびやかすのである。詰まり居ても立つても居られず、決然として劍をとつて立たざるを得なくするのである。これは大抵の場合に成功し、筋書き通りに戰爭支持の輿論がつくられる。たとへば世界戰爭の際に見ても、あれだけ勞働階級が階級的に成熟してゐたドイツでは、よもや支配階級の宣傳に乘せられて、その階級までが戰爭支持の輿論に合流することはあるまいと期待されてゐるが、そんな期待は見事に裏切られて、すつかりそれに合流して仕舞つたのである。それと言ふのは、この戰爭に勝たなければ、ドイツは亡びて仕舞うぞ、ドイツが亡びたら、勞働階級の解放も何もあつたものではないではないか、とおどかされて、そうだ、社會主義社會を建設するまへに、まづ祖國を救へ、と無我夢中になつてしまつたのである。

これは戰爭と言つた大がゝりの場合だが、政變の場合にも、規模が少し小さくなるだけで、演ぜられる芝居は同じことである。憲政の危機とか、政界革新とか言つた類ひの無數のスローガンが、輿論製造工場で生産されて、國民の頭上へ遠慮會釋なく撒き散らされる。それを解いて見れば、いまの內閣をのまゝでおいては、憲政は泥にまみれてしまうぞ、國民生活は危機に瀕するぞとおどかして、居ても立つても居られなくするのである。このおどしが利いて、國民の大多數がうまく居ても立つても居られなくなれば、政府反對黨は、もう占めたものである。

だが、そう言ふスローガンだけでは必らずしも輿論がつくれない場合がある。否、國民が次第にそれに慣れて來ると、容易にそれにおどかされなくなる。そこで反對黨は、抽象的にスローガンに重ねて、物質的の彈丸を送つて、輿論の製造にかゝる。輿論を表象する筈の示威行列は、實は、日當を貰つた自由勞働者の集團的散歩に過ぎない。輿論を反映する筈の總選擧は、實は、物質と權力の未來派的交錯に過ぎない。

輿論は、中から生れるものでなくて、外からつくられるものである。國民大多數の一致した意見と言ふ意味での輿論は、眇くともそうである。

その社會的機能において最も有力な働きをなすものは、何と言つても新聞である。

三

今日、新聞と言ふ新聞で、或る政黨か、或る利益共同團か、或る小社會群かの利益を、直接又は間接に代表してゐない新聞はないと言つてよい。だが、また新聞と言ふ新聞で、その代表する利益を男らしく前面にさらけ出してゐる新聞はないと言つてよい。あれば階級利益のために戰ふと宣言してゐる勞働階級の新聞ぐらゐのものである。が、これはまだ新聞であつて無いやうなものである。新聞と傳單の混血兒見たいなものである。

そうして新聞はどれもこれも天下の公器のやうな濟した顏をして居り、社會の木鐸のやうな涼しい顏をしてゐる。だが、この場合の天下とか、社會とかゞ、輿論の場合の「國民の大多數」と同じやうに、扉を開いてサビた錠前をはづして見ると、中味に御幣か木片れに過ぎないことは、誰でも知つてゐる。だがやはり新聞は、それが一個の商品であつて、結局多く賣らなければやつて行けぬといふ矛盾から、天下の公器、社會の木鐸の大看板を、辱かしくつても天日にさらさざるを得ないのである。

ここに一寸エピソードとして誌しておくが、この一文を草してゐる時、東京の某大新聞の配達夫の罷業が起つてゐる。その罷業は、配達夫團とその新聞の中繼販賣者との間に起つた爭議であるが、それが引いて當然その大新聞の利益に關するところから、その大新聞社がこれに干渉して、罷業團に大きな壓迫を加へてゐる。當の中繼販賣者が暴力團を動員して、罷業團を威嚇してゐるのを見ぬ振りをしてゐるばかりでなく、罷業といふこの社會的事實を、一言半句紙上に報導してゐない。この罷業中に、一人の多感な青年配達夫は、憤激のあまり絶望的な氣持になつて、束になつた新聞を抱いたまゝ、斷崖から省線に身を投じて自殺してしまつた。この青年の死すら報導されてゐない。しかもこの大新聞は、日ごろ自由主義的イデオロギーを全紙の基調としてゐる新聞であり、勞働階級の「健全な發達」を希つてゐる進歩的な新聞であり、暴力團の横行にたいして、常に抗議を忘れない新聞であり、天下の公器、社會の木鐸として全國的に最も信望のある新聞なのである。

それはそれとして、輿論をつくる武器としては、新聞は恐ろしい威力を持つてゐる。新聞ほど恐ろしい威力をもつてゐる武器は一寸他にないと言つてよい。それと言ふのは誰にでも分る通り、全國的に販路を有する新聞商品そのものゝ性質から來ることであると共に、また新聞が天下の公器、社會の木鐸を標榜して居り、讀者大衆が多かれ尠かれそれに信をおいて來るとこ

ろから來てゐるのである。

尤も輿論の生産行程を見ると、必らずしも新聞や政黨が、その行程の最初に立つてゐるとは限つてゐない。何等かの社會的集團の一致した意見が先づ前面に浮び出で、それが新聞や政黨に反映し、政黨や新聞の活動によつて、それが輿論化されて行くと云つた行程をとる場合もあれば、その他いろんな場合が考へられる。だが、何れにしても、新聞を通じて、それが飛躍的に輿論化されることは間違ひない。だから大政黨は必らず機關紙を持ち、大利益共同團は自己の新聞を持つてゐるのである。

そんな譯で新聞が輿論生産に絶大な力を持つてゐるとしても自己の屬する政黨、又は利益共同にとつて都合のいい主張ならば、どんな蟲のいい主張でも、その活字と輪轉機とインクによつて輿論化し得るかと言ふにそう甘くは行かない。そこに矛盾がある、そこに新聞紙の人知れぬ惱みがあるのである。

輿論化し得るについては、そこに一定の條件がある。その條件までも新聞は左右することは出來ない。例へば今日、政友會の機關紙であり、田中や久原の金屬製の呼吸のかゝつた新聞紙でも、現政府支持の輿論をつくり出すことは出來ないのである。だから、何となく生氣のない態度で反政府の聲に合流し、いやいや乍ら、人前をとりつくろつてゐる有樣である。また例へば、勞働階級の政治的進出が、いかにその新聞の屬する階級や、利益共同や、政黨にとつて不利益であり、望ましからぬものであるとしても、その政治的進出反對の輿論をつくり出すことは出來ない。澁々ながらも「健全な發達」を望むと言つたごまかしで自身をごまかして、お茶を濁しておくより外はないのである。

新聞紙の字面にその當事者の意志に反して現はれて來る自由主義的、進歩主義的、乃至民主々義的色彩は、實にどうにもならぬこの條件の故である。

然らばこの條件は何によつて決定されるかと言ふに、それが說明は社會的、經濟的原因に、これを求めなければならない。この意味においては、新聞紙は社會の鏡であるとも言へる。だが、この鏡は決して行く鳥の影をもとどめる明鏡ではなくて、ずゐぶん曇つた鏡である。

新聞は輿論をつくるが、また輿論をつくらせられるのである。

四

政黨や新聞は、いまも言つた通りに、輿論をつくることが出來るが、しかし結局、輿論をつくらせられるのであつて、どんな蟲のいい要求でもそれを輿論化して、その上に立つて仕事をするといふ譯には行かない。

そこで、第一には、相當に無理な要求を輿論化するために、第二には、その輿論化を拘束する者を脅嚇するために、第三には自己の利益を輿論に訴へずに直接に防禦するために、等等の理由から、宣傳の武器と重ねて、更に直接的な武器が必要となつて來る。それは言ふまでも無く、暴力である。

今日は實に、暴力の時代と言つてよい。政府卽ち支配黨派も、××的暴力の外に、自由暴力を動員としてゐる。反對政黨も、自己の暴力組織をもつてゐる。新聞紙も、暴力の擁護を準備してゐる。個人も亦、暴力で武裝しやうとしてゐる。これは何故か？ この原因をあげて來たら際限がないが、總括的に言へば、意見や言論や論策の力をもつてしては、最早や、大にしては輿論をつくり出すことも出來ねば、小にしては自己の利益を擁護することさへも出來ないからである。

言論の時代から暴力の時代へ、政策支配の時代から暴力支配の時代へ――これが今日の社會的、政治的の相貌である。

尤も政黨の行動や、言論の背後に、暴力の後詰めの無かつた時はない。日本の暴力團發達史は、實に、日本の政黨發達史と一致すると言つてもよいであらう。だが、今日ほど暴力が前面に押し出されたことは曾つてないのである。つき詰めて言へば、今日の政治的靜穩は、暴力によつて保證された靜穩だと言つてもよいのである。

この暴力時代の現出は、言ふまでもなく政策支配、言論支配の政治の沒落を意味する。政治は力である。それに相違はない。だが、その力が政策の壓力となつて現はれ、言論の威力となつて現はれるか、それとも暴力の物理力となつて現はれるかは、その政治の歷史的意義によつて決定されるのである。

だいたいから言つて、新興階級が政權を掌握した當初は、暴力によつて輿論がつくられ、暴力によつて、政權が支持される。だが、その政權が確立した場合には、その暴力支配か、政策支配、意見支配に移動する。この時期には、その政治的な支配がその社會にとつて進步的な役目を演ずるからである。だが、やがてその政策支配、意見支配の文化的相貌は、暴力支配の野蠻的相貌へと移動する。この時期には、旣にその政治的支配がその社會にとつて反進步的、反動的な役割を演ずるに過ぎないものとなつたのである。言はばその政治的支配は、その社會の進步にとつて一つの桎梏と化してしまつたのである。當爲的に言へば、ここでその政治的支配が解消されればそれほど結構なことはないのであるが、そうは行くものでない。反進步的となり、反動的となり、桎梏となつた政治的支配を、猶も維持して行かうとする。ここに暴力の必要が生ずるのである。イギリスの政

治は、政策政治、意見政治として世界に聞えてゐたが、それはグレー・トブリテン・シユーペリオリテイの昔であつて、今では保守黨の大人達も、自由黨の紳士達も、暴力を使用することを、食卓でナイフを使用することと同様に、必要なことだと覺悟してゐる。炭坑夫罷業の場合の實例などが、立派にそれを物語つてゐる。

日本でこの暴力時代を最も鮮かに宣言したものは、曩の内相鈴木喜三郎の議會政治否認論である。また實際において、最も公然とそれを表現したものは今期の議會での小選擧區制案上程の際である。そこでは議會政治の生命とする討論が封ぜられてしまつた。この一大暴力支配にたいして、反對黨の個人個人が、親から貰つた二本の腕を武器として、無組織の小さな暴力をふるつたとて、仕方のないことである。

だが、今日、いかに暴力時代だとて、これに對抗する力が無いと言ふのではない。ただそれに對抗して、政策支配、意見支配を現出すべき力が、未成熟だと言ふに過ぎない。今日の暴力支配をいい加減でなく徹底的に解消するには、その力の成熟と組織とを待たなければならぬのは言ふまでもない。尤も、それが解消の途中には、更に大がかりな×××××××××の時期があり得る。それは言はば今日の暴力時代の辯證法的飛躍の時期である。

五

議會といふ機關は、本來から云つて見れば、暴力支配を防ぐために設けられた機關である。暴力的闘爭の代りに、政策的闘爭によつて、暴力的克服の代りに、意見的克服で、政治的支配を確立して行かうとして設けられたのが、議會である。

議會には、本來から言つて、國民の大多數者の一致した意見が反映すべきである。それでなければ議會は意義をなさないし、議會を成立せしめる選擧は意義をなさない。

この議會の使命が多かれ尠かれ果されたやうに見えた時期が無かつた譯ではない。それは曩にも言つた通り、時の政治的支配が、その社會にとつて進歩的な役割を果してゐた時代である。ところが今日では、議會内部ほど、暴力的闘爭の激烈なところはない。一切の討論封鎖と云つたやうなことや、自由な喧騷亂闘と云つたことが、平常の場合、議會以外に何處で見られるであらうか？　これは何ものかを證明する前に、先づ議會にたいして、謂ゆる輿論なるものが何等の意義を持つて來なくなつた證據である。政策支配、意見支配の行き方では、最早や議會で仕事が出來なくなつた證據である。更に押しつめて言へば、議

會が不用になつた證據である。

議會機能のかう言ふ行詰りを打開しやうとして、曩に普選が採用された。つまりそれによつて、より多く國民の意見を議會に反映させやうとするのであつた。だが、その普選は、有形無形のさまざまな拘束を課せられ、手を折り、足をもがれた普選であつたが故に、所期の結果は、勿論生れて來ない。結局は、それも一時のごまかしに過ぎなくて、議會機能の喪失は、依然として變るところはないのである。

曩に一寸引合ひに出した前内相鈴木喜三郎の議會政治否認論は、主觀的にはどんな理由があり、どんな動機があつたにしても、客觀的には、議會の意義の喪失、暴力支配の事實を物語つてゐるものであつて、その意味では劃期的な宣言と言つてよい。だが、鈴木はその宣言者告知者にとどまつて、それが實行者は、首相田中義一である。その意味で田中の政治は、劃期的な政治と言つてよいのである。

この議會機能の喪失、議會の暴力支配化を救ふものは、無産黨の政治的勢力の議會的進出だと、頭から考へてゐる人がある。その見地から、無産黨をこつそり支持してゐる人も相當にあるであらう。だが、遺憾ながら、これは可成り人のいい幻想であると言ふより外はない。無産黨を支持すべき理由は他に起るので、この理由で支持したら、或る時期には、反つて無産黨を敵にまわすことになるかも知れない。

尤も無産黨の中にも、安部磯雄氏のやうに、議會政治を中心にユトピアを描いてゐる士君子もないではないが、だいたいにおいて無産政治の議會的進出は、議會内の階級鬪爭の尖銳化に結果するに相違ない。これは說明するまでもない。この尖銳化を暴力行爲によつて表現しまいと、無産勢力の方でいかに戒心しても、既成政治勢力の方で承知するものでない。早い話が、今期の議會で治安維持法事後承諾案上程の日に、勞農代議士山本宣治氏が、帝都の中央街の一旅宿において兇刃に倒れた事實、それにたいする支配黨派の議會内での態度が、それを立派に表徵してゐる。無産黨の議會的進出は、議會の失はれた機能を取戻すものではなくて、議會に新らしい意義を與へるのである。それは階級鬪爭の一戰場としての新らしい意義である。

議會の政治的意義の喪失は、一田中が頑張つてゐるからではない。それの暴力支配化は、議員の素質低下の故でもない。議會形態による政治的支配が、既にその生命を失つてゐるからである。一度び廢物となつた政治的制度は、どう繕つたところで元通りになるものではない。若返りの注射液くらゐは見出せるかも知れない。だが、若返りの注射液を發見した國手も、常人以上には長生きは出來なかつた。況んやボロ〳〵になつた政治的機關においておやである。(四・五)

現代暴力論

平林初之輔

一

日本の左翼政治運動が、最近非合法主義を標榜して立ち、合法的埒内に於ける運動を斷念したことは興味ある事實である。勿論すべての××運動は、本質上、非合法的運動であらねばならぬし、又さうであつた。維新の浪士は、幕府の默認のもとに倒幕運動を起すことはできなかつたと同じく、資本家政府を××しようとする左翼政黨が、その政府の默認のもとにこの運動をつづけてゆくことのできないのは明白なことである。

だが、原則的には、これ程わかりきつた問題も、實踐的には幾多のニュアンスをもつたデリケートな問題となる。現に日本の左翼政黨も、その成立の當初から非合法主義を標榜してゐたわけではない。政黨が解散され、その再結黨が再び阻止されさうな形式を観取して、遂に、合法主義に斷念したのである。一般的に言つて、左翼政黨は、全く合法主義の範圍内にとどまつてゐることはできぬであらうが、少くもそれが合法主義を利用し得るには、次の條件が必要である。

一、進步的な政黨の行動を政府が或る程度まで寛容する場合

二、合法主義によつて、民衆のために闘ひとらるべきものがまだ相當にのこされてゐる場合

この一及び二に對する認識の相違が、今日左翼無產政黨を合法主義政黨と非合法主義政黨とに分裂せしめてゐるのであらうと思はれる。ところで、一の條件は、時の政府が自由主義若しくは民主主義的性質をもつてゐる場合にのみしか見出されない。そして日本の現在の政府がさういふ性質を全くもち合はせてゐないことは萬人の認めてゐるところであり、左翼政黨が、

その獨自の行動をなすことは今日に於いては全く封ぜられてゐるといつてよい。從つて現在の日本では合法的運動が、たとひ望ましいとしても、合法的運動の埒内では、左翼運動が進歩的役割を果すことは甚だしく困難だといへる。尤も甚だしく困難だといふことは不可能といふこととはちがふ。非常に屈伸性のある左翼政黨が、優秀なリーダーを得た場合には、どんな事情の下に於いても、合法運動の埒内でも、左翼政黨の機能をはたらかすことが絕對に不可能であるわけはない。それ故に、左翼政黨の合法主義の拋棄は、常に一歩前進でもあると同時に一歩退却でもあつて、その可否は公式では把握されない。常に現實の情勢との關係に於いてのみ評價されねばならぬ。

第二の條件が見出される場合は、その國の政治形態が、近い將來に、自由主義的な若しくは民主主義的な形態に進化し得る可能性をもち、國民大衆が、さうした政治形態の進化に或る程度の希望をつないでゐる場合にのみ見出される。日本の現在の事情はこれに對しても一應否定的な回答を與へるやうに私には思はれる。政友會内閣が民政黨内閣に變つても、日本の政治形態が、民主主義的方向へ轉向するとは考へられないし、大衆が、歐米先進國で失敗の實驗ずみの民主主義議會政治に大して希望をつないでゐるとも思はれない。だがしかし、ここでも、左翼政黨は合法運動によつて求むべき何物ももたないとは速斷できない。たとへば治安維持法の改正勅令案の否決といふやうな問題をはじめとして、その他の多くの問題は、ブルジョア政黨間の政略的、若しくは黨略的反目を利用して、有利に解決し得る見込みがないとは言へないからである。問題は、無產政黨が、少なからざるエナージーを合法運動に向けることによつて、それにひきあふだけの效果を收め得るか否かといふ點で決せられるのであらう。

そこで、一部の左翼政黨は、以上の二つの條件が合法主義運動をつづけてゆく努力に値ひする程有利ではないと認識して、合法的運動を拋棄することに決定したのであらう。

私が何故このことを言ふかといふと、私がここで暴力といふのは、單に腕力をさしてゐるのではなくて、一切の非合法手段をひつくるめて暴力と呼ばうと思つてゐるからである。

二

今日の文明國の人民はすべて法律をもつてゐる。否文明國の人民でなくとも、法律とは名づけられないまでも何等かの形に於いて、社會的強制の手段をもつてゐる。この強制の手段、この法律もその本質に於いては、ルソオの唱へたやうな社會的契約

ではなくて、一階級が他の階級を支配するための組織的暴力であることは、マルクス主義國家學者の認めるところである。だが、この階級支配説を承認しても、法律は或る一定時期の支配形式を表現したものであるから、支配者と被支配者との關係が刻々變化するにつれて、支配の手段として、適切でなくなり、更に進んでは障害となることが少なくない。法律の改廢及び新法律の制度の必要が頻々と起るのはそのためである。

此の意味で新法律の制定は、多くの場合、支配階級の暴力を合法化することを意味する。たとへば、國體及び私有財産制度を改革しようとするやうな結社をつくる場合、支配階級は、これを嚴罰したいと思つても、法律がなければこれを合法的に罰するわけにはゆかない。そこで治安維持法が制定される。治安維持法のない時に、政府が祕密結社の巨頭を十年の禁錮若しくは死刑に處したら、それは純然たる暴力行爲であるが、この法律が發布された以後に於いては、政府は司法官の手を通じて、合法的にその目的を達し得る。かやうに合法と非合法との差は間一髪の際どいものであつて、しかもその境界線は絶えず移動してゐるのである。從つて、私の解釋によれば、暴力行爲の內容は一定不變のものではなく、內容によつて定義するわけにはゆかないものであり、形式的にのみ定義し得るものである。

それ故に、暴力は、內容的に見れば、必らずしも被支配者の反抗の武器に限られてゐるのではなくて、支配者の抑壓の武器となる場合が却つて多い。ただ後者の場合には直ちにそれが合法化されてゆき從つて暴力ではなくなるといふ點が異るのみである。

大正十二年の地震の時、無政府主義の巨頭大杉榮が甘粕大尉によりて銃殺された。また最近の昭和四年三月五日には、舊勞農黨の代議士山本宣治が黑田某によりて刺殺された。これ等の例は、直接、支配者が被支配者に加へた暴力といふことはできないが、少なくも、この同じ事件に對して起つた輿論は、はつきりと階級的に分裂してゐる。支配階級に屬する人々は、表面この非法行爲を辯護するわけにはゆかないけれども、少くもこれ等刺客の行爲に對して、多少のレーゾン・デートルを認めるであらう。ところがプロレタリアートはこれに對して骨の髓までの憤激を感ずるであらう。そして中岡艮一の原敬暗殺のやうな場合の反響はちようどこの場合の逆であるだらう。

三

合法と非合法との差が紙一重の差であり、暴力といふ言葉が全く相對的の意味しかもつてゐないといふことは、支配者には

暴力の必要なしといふことになる。何となれば支配者の暴力は同時に法律であり、正義であるからである。

先頃、議會で、與黨が選擧區制改正案を議會に提出したとき、野黨はこれを阻止しようとして妨害したために、一二の起訴者をさへ見るやうな事件が起つた。

與黨は、野黨のこの行爲を暴力行爲であるとして批難し、司法權の發動まで要求したのであるが、それでは與黨の行爲は暴力行爲ではなかつたかと言へば、內容的には却つて與黨の行爲の方が暴力的である。

政友會幹事長島田氏はこの問題について意味深長な感想を洩らしてゐる。

『議會政治は要するに多數決制度で、頭數で決せられることは仕方がないとあきらめる哲學が含まれてゐる。少數者が多數者の權利を害せんとして法の規定を越えて公然と暴力に訴へるは絕對に認容できない。かやうな事件を司法官憲に委ねることはできるだけ避けねばならないが、少數者の横暴ある以上は萬止むを得なかつたのである。』

民政黨幹事長俵氏の談は更に一層意味深長である。

『……かかる國民の權利に重大な關係をもつ案を政友新黨の横暴な力で論議させずして通過さようとしたのを默過するのは議會政治否認で、國家國民のために惜すまい。かうなると法律問題ではない。他に手段方法がないから、我々の權利擁護のために奮鬪したわけである。今後と雖も與黨が議會の機能を停止する如き行動に出るならば、この方法も致し方ない。』(以上二つの引用はいづれも三月二十三日東京朝日新聞夕刊による)

島田氏の冒頭の一句は、議會政治に於いては、議員の多數さへ占むれば何でも自由自在にできるから、少數黨はどんな不合理なことでも仕方がないとあきらめてをるがよいといふ思想を露骨に示してゐる。そこで政友會內閣は、中立議員を抱きこみ、民政黨を切り崩し、實業同志會と妥協して、辛うじて議會に絕對多數を占め、島田幹事長の哲學をそのままに實踐にうつして自黨に都合のよいやうに百方やりくりをした改正區制案を上程し、野黨の發言を封鎖して、一擧に議會の通過を計らうとしたのである。議會で多數を制するといふことは力である。そして一たんこの力を獲得すればそれは正義となる。民政黨の俵氏の言葉をかりれば「議會政治を否認」することすらも正義となる。島田氏の論理こそ、正に勝てば官軍主義の多數黨の、支配者の論理である。支配者や多數黨には、暴力の必要はない。軍隊が機關銃で反亂民衆を掃蕩することは、內容的には暴力であつても、形式的には合法的な行動であるのはそのためである。

ところが俵氏の謬は少數黨の哲學、從つて一般的には被支配者の哲學を不知不識のうちに最も露骨にあらはしてゐる。「かうなると法律問題ではない。他に手段方法がないから我々の權利擁護のために奮鬪したわけである。」この言葉を顯微鏡で擴大して議會から、國民全體にあてはめて見ると、正に左翼非合法主義政黨の論理となる。

少數黨は院内に於いて、少數黨としての合法手段としてのこされた唯一の策戰、卽ち質問、討論の續出によつて議事の進行を長引かし、採決を遲延させるといふ消極的戰法を、同じく合法的手段によりて、卽ち發言禁止を多數によりて可決するといふ方法によりて、多數黨から阻止された。さうなればもう少數黨として合法的範圍内に於いて施す術はない。そこで、俵幹事長の言葉によれば「かうなると法律問題ではない。他に手段方法がないから、我我の權利擁護のために奮鬪した」といふことになつたのである。

この問題は倫理的に批判すれば、暴力をもつて挑戰した政友會が惡い。しかし、法律的に批判すれば、若し、桝谷代議士等の行爲が非法的行爲であつたとすれば民政黨側に勝味はない。暴力の問題が、倫理的、絕對的批判の對象ではなく、法律的、相對的批判の對象でしかあり得ないことはこれによりて明白であらう。現に、この事件に於いて國民多數の同情が、むしろ民政黨側に傾いてゐるといふ事實は、合法と非合法との間に、嚴密な倫理的境界線を設けることのできないこと、合法的惡があり、非合法的善があることを雄辯に語つてゐる。

左翼政黨の非合法主義は、俵幹事長の論理を、院内の多數黨と少數黨との關係に於いてでなく、支配階級と被支配階級との關係に於いて適用したものに他ならぬ。反動政府のもとに於いては、被支配階級は一切の運動の自由を剝奪されてゐる。結社の自由は死刑をもつて脅かされ、言論出版の自由は、合法的、若しくは非合法的合法手段によりて極度に抑壓されてゐる。「かうなるともう法律問題ではない」。左翼政黨の非合法化、從つて私の解釋によれば暴力化は、さきの院内に於ける政友會と民政黨との關係の場合と同樣に、倫理的には、先づ、支配階級の暴力によつて挑戰され、被支配階級が暴力によつて應戰せんとしたものである。ただ前者の暴力は、合法化されて、形式上暴力でなくなつてゐるといふだけの相違である。

かういへば政友會はえたりかしこしと、それ見ろ、民政黨は左翼政黨と共同戰線を張つてゐる、民政黨の某代議士は××黨員だなどと出鱈目な理由をつけて、善良ではあるが無知な民衆を迷はす武器に逆用するかも知れないが、その筆法で行けば、

政友會のやりかたはネロ王やヘロデ王や秦の始皇のやり方と共通點をもつてゐる。そして政友會が野黨に下つた場合のやりかたは民政黨以上に暴力的であつたことは周知の事實であることを忘れてはならぬ。

四

マルクスが暴力××を主張したか、これを排斥したかについては、ソヴエート・ロシアのプロレタリア獨裁問題を中心として一頃さかんに論議された。マルクスの著述を一部分づつ拔萃すれば、彼は議會萬能主義者であるかの如き印象を與へるかも知れない。特に「ブリユメール十八日」や「革命と反革命」(これは最近エンゲルスの著であることが明かにされたらしい)や「パリ・コミユン」などは、その時々の政治情勢を批判したものであるから、專制政府と自由主義乃至民主主義運動との戰ひに對しては、マルクスは後者の勝利のために、前者と戰つてゐる。制限選擧と普通選擧との戰ひに於いては、後者の獲得のために戰つてゐる。だが、私たちが、政友會と民政黨との或る政策に於いて民政黨を支持したからといつて、私たちが民政黨の謳歌者でないやうに、マルクスが、制限選擧と普通選擧との戰ひに於いて後者を支持したからと言つて、彼が議會萬能主義者であるとは斷言できない。この問題に關するカウツキーとレーニンとの論爭は、レーニンの方に軍配をあげざるを得ないであらう。

修正主義者の擡頭後、マルクス主義は一時合法的改良主義となつて、各國の社會黨は、悉く議會主義黨となつたことがある。この間にあつて、マルクス主義の××的一面を傳へてゐたのは不思議にもサンヂカリストであつた。ソレルの「暴力論」「マルクス主義の崩壞」等を見ると、彼は、マルクスの階級鬪爭說を强調して、資本主義の必然的崩壞說は却つて、階級鬪爭を減弱させるものとして斥けようとしてゐるやうな傾向が見える。修正派社會主義よりも、むしろ、無政府主義や、ユトピア社會主義に彼の同情が傾いてゐるのはそのためである。

だが、近代國家の階級的性質を、マルクス、エンゲルスの文獻そのものの中から、はつきりと規定し、一度び離れ離れなものにされてゐた唯物史觀と階級鬪爭說とを緊密に結びつけ、修正主義者の平和的革命の幻想を粉粹したものはロシアのボリシエヴイキ、特にその最も優れた實踐家でも理論家でもあつたレーニンである。各國の帝國主義政策が尖銳化され、デモクラシイやリベラリズムの色彩が急激に薄れて來た今日では、平和革命の可能の信條は、漸次一般人の信仰を去りつつあるやうに思はれる。

ではマルクス主義はテロリズムか？　これはカウツキーの疑問そのままであるが、暴力といふ言葉を私のやうに非合法運動と解し、日本の紳士政黨である民政黨ですら、「他に手段がない」時は非合法運動に訴へるの已むを得ざる場合があることを知れば、こんな疑問は起らずにすんだであらう。

テロリズムに言及したついでに、テロリズムの元祖、バクーニン、特にその片腕であつたと言はれてゐるネチャイエフの暴力論を引用しておくのも興味のないことはないであらう。この一派のこした文獻に「革命戰術教程」（レヴォリユショナリ・カテキズム）といふパンフレットがあつて、これははじめ暗號で書かれ、ネチャイエフが保管してゐたといふ由緒づきの書物である。ネチャイエフは革命家といふよりもむしろロンブロゾの研究の對象となる人物であるから、このパンフレットの二三の文句を拔萃しても、差支へないであらう。

『彼（××家）にとつては唯一の快樂、唯一の慰安、唯一の報償、唯一の滿足があるのみである。××の成功といふことがそれである。彼は日夜ただ一つの考へ、ただ一つの目的をもたねばならぬ――容赦なき破壞といふことがそれである……この容赦なき破壞の目的のために、彼は社會の中に、彼の正體とは別人のやうなふりをして生きることができるし、又生きなければならぬことが屢々ある。××家は到るところに潛入しなければならぬ。上流社會にも、中流社會にも、商店にも、教會にも、貴族の宮殿にも、官界にも、軍隊にも、文壇にも、祕密探偵の中にも、××にさへも』

以上はその一節であるが、この書物にはこれ以上拔萃することは憚るやうなテリブルな文字に滿ち滿ちてゐる。そして最後には、「吾々はロシアに於ける唯一の眞正××の家である賊徒と同盟しなければならぬ」といふやうなことまで書かれてある。これによりてテロリズムの本質がわかるであらう。これはさすがにバクーニンの書いたものではなくてネチャイエフの筆になつたものであらうと言はれてゐる。

ここまで來ると、私のいふ暴力の限界をこえて犯罪となつて來る。だがこの犯罪的暴力は、黑色テラーのみでなく、赤色テラーのみでなく、白色テラーとして現はれた場合が最も慘虐であつたことを歷史は語つてゐる。戰爭も一種の大規模な國際的テロリズムといふことができるであらう。

戰爭とテロリズムとだけは、コレラ菌と同樣人類の社會から永久に絕滅したいものである。（完）

北歐素描

柳澤健

○

今から十年ほどもまへ、自分が最初の歐羅巴の旅に出掛けるそのまへだつたか、それともその旅から歸つてだつたか、島崎藤村氏を今も變らぬ飯倉の氏の住居に訪ねてこれ等のいろ／＼の國について話を交したことがあつた。そのとき『エトランジエ』の作者の口から出たあの意味深さうな言葉を、今もつて自分は忘れない。——『スカンディナヴィアには行つて見たいと思ひますね。ロシアのやうに空想的ではなく、それでゐて西歐羅巴の國々のやうに無暗に現實的だといふこともなく……』

自分は、そのときは思ひも掛けなかつたこのスカンディナヴィアの一角で、とう／＼一年半といふ月日を送ることになつたのである。しかもこの月日の間に大きなこの半島を北から南へ東から西へと幾度か歩きもした。二度の夏を過し、今また冬をも二度迎へやうとしてゐる自分が、この北歐の雜景を素描しやうとすることは、あながち大それた野望でも冒險でもあるまいと信ずる。——

○

佛蘭西を去つてこの北歐の都に向はうとしたとき、知り合ひの幾人かは顏色にまで出して氣の毒がつた。『寒い國！』『霧の國！』『陰欝な國！』『悲しい國！』『冷たい國！』

自分の頭に來たのも言はゞそれだつた。あのストリンドベリイ。あのイブセン。ビョルンソン。ハムズン。スウェデンボールの『エルシノアの黄昏』とその題名までも物かなしい著書を持つて、ガール・デュ・ノールを出る汽車に乘り込んだ自分だつた。まつたく自分の頭には、北歐はハムレットの幽鬱の漂ふてゐる「黄昏」の國にほかならぬのであつた。

それが、實際に自分の眼に映つた姿はどうであつたか？

○

伯林を夕方に出る汽車は、その夜を海上で過して、眼が覺めると既に瑞典である。トレルボリイ、それからマルモ。あゝ、寢臺車の窓掛けをはねて、初めて見たこの瑞典の夏の曉の朗らかさ、麗しさを、自分は今でも眼前に顯然と思ひ泛べる。あの空の明澄さ、あの太陽の清淨さ、あの芝生の新鮮さ、あの白樺の高雅さ、――それからあの行人の面輪の善良さ純朴さを、自分は、この瑞典の土地以外の何處でかうもはつきりと見たらう！陽に透いて鮮やかな若樹でつゝまれた森。それに續く傾斜の緩やかな牧場。あちこちの赤屋根のコッテージ。それから、面接に忙がしいほどに現はれては消えて行く小さな湖水。佛蘭西邊の田園が持つてゐるほどの豊かさ優しさはないにしても、瑞西邊の自然が持つてゐるほどの繪畫的の美しさ變化の美しさは缺けてゐるにしても、これほどの淨らかさ靜けさを持

つた好もしい風景が何處にあつたらう。すくなくも、伯林を出てからサルスニッツ邊までの北獨逸の索莫たる風景を眺めて來たものにとつては、海を越えたこの瑞典の自然は、處女のやうに清くてそして優しい。『北方』といふ言葉が若し粗貧で陰氣なものを意味するものとしたら、瑞典は決して『北方』ではなかつた。

○

然し、冬は？

自分は佛蘭西での冬を四度ほども過ごしてゐる。倫敦のあの人を締めつけるやうな深い霧の冬を知るものにとつては、また伯林のあの凍りつくやうな嚴しい寒さの冬を知るものにとつては、セエヌ河畔の都の冬が凌ぎよいものとせられてゐることは、誰しも知るところだと言つていゝ。然し、北緯六十度の北方で自分が初めて送つた冬にくらべると、この巴里の冬の如何に陰氣でまた如何に凌ぎにくかつたことか！

夏の間、太陽の影が眞夜中でも空にあか／＼と殘つてゐるこの國は、その代り冬になると、午すぎの二時半か三時にはそろ／＼燈の用意がいる。然しながら、雨と霧とのなかで冬を送らねばならない巴里にくらべると、この國では昨日も今日も澄んだ南の空に太陽が優しく燃えてゐるのを見ることができるのだつた。街も水も白雪で蔽はれてゐるうへに、薔薇いろに薄く烟つた太陽が輝いてゐる風景は、眞黒な枯枝の林のうへに陰慘な鉛色の空が押ひかぶさつてゐるやうな佛蘭西の冬の風景とくらべて、どんなに明るく麗しいものであつたか。それに雪の街路にひゞく橇の鈴の音と、スキーやスケートやに乗つて輕く馳驅する男、女、子供、大人の姿と……

それから、建物の堅固さと、暖房の完全さと。自分は、羅馬で冬を送つた人々が、その土地で暖房の設備の不完全さから、そこの冬の凌ぎにくさを喞つのを、幾度かきいたことがあつた。そういふ自分も、郊外に近かつた巴里の住居では、

暖房の不完全なのに弱らせられたことも、度々であつた。それにくらべて、この國での冬の住居の暖かさは！　自分たちは、暖か過ぎると言つてわざ〳〵夜更けて暖房の栓をすることさへ鮮くはなかつた。壁は厚いし、窓硝子はみな二重になつてゐた。この國の地酒と言へるあの透明な雅味をもつたスナップス、さては仄かな紅味を帶びたプンシュ。――そうしたものでも口にしながら、明るい部屋に大勢寄り合つては遲くまで談笑することの好きなこの國の人にとつて、永い冬の夜さへもがどうしてそう陰氣な、また、凌ぎにくいものであらうぞ。

○

先づ何よりもストリンドベリィのやうな激しい型を、さては、彼の作品に出て來る人物のやうな暗い型を考へながらこの國に來た自分にとつては、この穩やかな自然とこの自然と完全に抱き合つてゐるらしい優しくて善良な人々とは、全くの『發見』であつた。自分の周圍に見出だしたものは、要するに、この土地を踏むまへに描いてゐた想像を、すつかり毀してさへしまふものであつた。

そうだ、この國は決して『寒い國』といふのも當らなかつた。『霧の國』でもなければ、『陰鬱な國』でも『悲しい國』でもなかつた。はじめての旅人の眼に映つたこの國は、あのストリンドベリィの描いたやうな人々の國でもなければ、あの慓悍な北歐の海賊の後裔を想はすやうな國でもなかつた。さては、ヴォルテールの『シャルル十二世』でお馴染の、あのナルヴァの海戰で味方に十倍するピーター大帝の大軍を擊破した勇敢な帝王をさてはその兵卒を想はすやうな人々の國でもなかつた。

生粋の新教國でありながら舊敎國の夫れにも增して饗宴の華やかさに心を牽かるる人々、獨逸に隣りし・しかも獨逸より一層『北』に位置しながら、その重厚・鈍澁なる趣味に捉はるることなく、むしろ纖奢・簡素の美を本能的に解する人々。

總人口の何分の幾つかを亞米利加に移民として送り、その物質文明の影響を受くることを歐羅巴諸國中最も濃厚たるべしと言はれながら、頽狂・輕敏なる所謂ヤンキイ氣風よりはおよそ遠かるべしと思はるゝ人々。——數へ來ると、通りすがりの旅人には、こゝも亦一つの『謎』であらねばならなかつた。

○

白夜と言へば、すぐ露西亞を想ひ出す。然し、聖ペテルスブルグと同じ緯度にこのストックホルムの町はある。ほんとうの白夜の感じは、この國でこそ味ははれると言つてもいい。

リラの花が町といふ町に咲き亂れてゐる六月。晩餐をすまして、もう九時だもう十時だといふのに、外は晝の通りに明るい。十一時頃になると美くしい夕燒が北(西ではない!)の方に漂つて、ほのかに黄昏らしい情景を帶びて來る。けれど窓際で燈火なしで我々は容易に本を讀むことができる。十二時。黄昏は漸次深くなつて來る。町は靜かになつて來る。空を見ると、(いつも北だ!)紅の色は漸くあせて、碧と黄とが交り合つた透明な澄み渡つた光りが燦いてゐる。がその透明な光線は! それは、最早曉の到來を示してゐるのだ。午前一時。二時。もう我々はまつたく朝にゐる。リラの花は薄い露をかぶつてゐる。午前三時。煌ゆい太陽が通を歩いてる人もない靜かな眠りの町を照しはじめる。……

ストックホルムを夜出る汽車は、翌くる日の夕方には北方の國境驛アビスコといふのに着く。そこで人々は既にあの『眞夜中の太陽』をさへ見ることができるのだ。

この日の永い、——否ほとんど夜のない六月のうちでも、その廿三四日といふ日はわけて日が永い。この日を瑞典(諾威邊はさしてその風習がないときく)では仲夏祭と稱んで國中のお祭り日にしてゐる。ストリンドベリイの作品のなかの『シュリー孃』といふ人口に膾炙してゐる芝居は、實にこのお祭の晩を背景として描かれたものである。町の廣場々々には

綠樹で飾つた高い柱が立てられる。暮れやらぬ夜をこの周圍で踊りたはむれながら人々はすべての苦勞を忘れて過さうといふのである。

○

はじめてこの國で迎へた仲夏祭の晩を自分は家族の者や友人やと一緒にレトヴィックといふ古いさゝやかな町で過ごした。ストクホルムから汽車で六七時間、シリアンと名付けられた湖水の緣(ふち)にあるきれいな町である。

このレトヴィックの町のある地方一帶をダラーナと稱ばれる。瑞典統一の祖とも言はれるグスタフ・ワサが兵を擧げたのも、この地方だ。セルマ・ラレゲレフがその名著『エルサレム』の小說のなかに描いてゐるのも、この地方だ。近代の名畫家アンデルス・ソルンが、生れ、描き、且死んだのも、この地方だ。然しそれよりも、我々が瑞典を旅して最も古い、傳統的なまた繪畫的な『きのふ』の瑞典を見ることができるのも、實にこの地方なのだ。シリアンの湖(みづうみ)はこのダラーナの地方の『眼』だと言はれてゐる。その『眼』の瞳とも言はるべきレトヴィックで、自分たちはこの如何とも瑞典風な仲夏祭を過すことができたのであつた。

いくら斷髮が一世を風靡してゐるとは言へ、またいくら短かいスカートが世に持囃されてゐるとは言へ、各國とも夫れ夫れ田舍には傳來の風俗の面影を絕さずにゐることは事實だと言へやう。然しながら、自分たちが見たこのダラーナ地方にもましてその古來の風俗を今に敢然と維持してゐる所が他にあるかどうかは自分は知らない。兎も角自分は、漫遊客の吸收策より發したるにあらで自然(おのづから)にこの世にも美くしき土俗の衣裳がかくも固く維持されてゐる所が他にあらうとは容易に信じない。

勿論このダラーナ地方の衣裳自體は、例へば我々がボヘミア地方に於いて、コーカサス地方に於いて、さてはアルサス地

方に於いて、アンダルシア地方に於いて、見ることができる土俗の衣裳にも増して美くしく床しいものだとすることはできぬかも知れぬ。また、大體に於いて紅・青・綠・黄の原色をはげしく用ゐることに於いて、これ等一切の地方の土俗の衣裳は彼我大差ないものと言ふことができるかも知れない。然しながら、かくも多數の人々が、――殊に津々浦々まで斷髪と短かいスカートとの流行に遲れまいとしてゐる現代にあつて、かくも多數の若い娘たちが、この色彩賑やかなる晴着に身を飾り古風のボンネット床しく嬉々として漫歩してゐる光景は、何處の國に見ることができるであらう。若い男は、それに較べて、この土俗の衣裳を纏つてゐるものが多くはなかつたことは事實だ。然し、この古風な風俗で路を歩いてゐる年老いた男たちは、それに老若通じて女たちは、さては子供たちは、應接に暇ないほど夥しく街上にあふれてゐた。

町から數十分、湖水につき出た岬のうへに松林につゝまれて形のいゝ教會が建てられてゐる。仲夏祭の翌くる日は日曜だつた。北歐獨特なあの爽やかな陽の光りを一杯に浴びながら、これ等の古風派出やかな衣裳におのがじし着飾つた老幼男女が三三五五教會指して湖沿ひの松林のなかをゆるやかに歩いて來る光景は、自分をしてそゞろにベルソールがその著『瑞典』(巴里ペラン版)の劈頭に書いた一句を想ひ出さした。――

『この國――瑞典――より更に詩的な國があらうとは自分は信じない!』

○

夏の瑞典の麗くしさを更にのびやかに味はせやうとするものは、ストックホルムからギョーテボリイへと續く長い運河の旅である。汽車ならば十時間で行き着くのが船ならば三日に亙る永い旅となる。急ぎの旅に誰が乘らう。二十人か、せいぜい三十人位で一杯になつてしまう位の船でのこの三日の旅にも増して、世にものどかな旅が他處にあらうか。――

自分がギョーテボリイの港をこの小さな船で出たのは八月の半のある日、曇りがちの朝だつた。季節もやゝ遲れたこと

とて乘客は二十人にも充たなかつた。工場の煙突が續いてゐる港町のなかを漸くのことで出離れた船は、緩やかな緑りの平野のなかにはいつて行つた。白樺の林。牧牛の群。赤屋根のコッテージ。遠い山上の古塔。雲は切れて、碧い眼の空が爽やかな陽の光とともに現はれて來た。船はせいぜい人が馳ける位の速さでしか走らない。船と岸との間は、數メートルあるかないかの距離だからである。連れのある人は二つの椅子を寄せ合せて、孤りぼつちの客（自分もそれだつた）は孤りぼつちのまゝで、甲板のうへに搖れ動く陽の光を手に顔に一杯浴びながらうつら〳〵の旅を續けて行く。トラヴァトーレの序樂が終つたかと思ふと、カルーゾーのオー・ソレ・ミオだ。その次は「リンドベーグ、妾も巴里へ飛びたい」のジャズだ。「リリアス・パスチャの酒場でマンサニヤの酒を飲まう」のカルメンだ。羅針盤も望遠鏡も眺める必要のない船長は、食堂への階段のそばで、飽きもせずに蓄音機の盤を廻しては代へ、廻しては代へしてゐる。籐椅子から立ちあがる客があれば、彼方の丘のかげに現はれた寺院の姿を寫眞機に收めやうがためである。それとも居眠りの間に手から滑り落ちた帽子を取り上げやうが爲めである。

時々、船は停まる。荷物を卸したり積むだりする。たまには乘り込む客の一人位はゐる。小さな村。小さな町。丘が迫り、また擴がり、森が切れ、また續く。

トロロハッタン。景色はこゝで急に變化する。船は山のなかにはいるのだ。今まで歩いて來た水とその山が圍む湖の水とは同じ水準ではない。船は水閘の大きな仕掛で見る見るうちに蒼黑い波を上げて高い水準まで押し上げられる。太陽は西に傾いて、彼方此方の窓にはもう燈が見える。白樺の細かい葉が、薄寒くなつた夕風のなかに、小鳥の羽のやうに顫へてゐる。

乘客を食堂に集めて、船はトロロハッタンの町をあとに今度は夕暮の迫つた湖水へと出て行く。——

「今夜は涼しすぎるから甲板では踊れませんな！」

船長はこんな愛嬌を食堂に下りて行く客に振りまきながら、暫らく絶えてゐた蓄音機をまた廻しはじめる。……

○

自分が馬に乗ることを始めたのも、この瑞典に來てからだ。いつの間にか自分には、乘馬がこゝの生活から離せない氣がするやうにさへなつてしまつた。日曜日以外の他の日でも、夏、陽の落ちることを知らぬやうなこの國では、一時間位馬で馳けるほどのことは何時でも出來たのだから。

ストックホルムの水都が東で切れるところに、ユールゴーレンと稱ばれる麗くしい公園がある。それは、自動車のドライブでの散策に恰度適してゐる位の大きな廣さの公園だ。丘。森。原。それから右にも左にもの水。巴里のあのボア・ド・ブローギユよりは稍廣さが足りぬかも知れない。然し、あそこにはないこの麗くしい丘。それからこの水邊の靜かな眺め。

春が來て、白樺の新芽が優しく萠え出る頃、この公園の芝生は白い草花と黄色の蒲公英の花とで蔽はれる。自分たちの馬は、この派出な絨緞のうへに房のやうにつけられた眞白な砂道を走つて來る。春の甘美な太陽に温められて、小鳥はあちでもこちでも鳴きしきつてゐる。春草の軟らかな匂ひは兎もすると馬の鼻を草のなかへ引き込まうとする。未だ僅かのギャロップだけなのに馬はその毛を微かな汗で光らしてゐる。

夏の眞中となる。詩人ベルマンの若々しい半身像が青々した若葉を背景として今までとは別人のやうに泛き出して見える。すぐその像のそばから、自分たちはいつでもギャロップを始める。馬道の兩側の樹の葉がこんもりと繁つて、それが兎もすれば、馬の腹にも觸り、鞭を持つたこつちの手にも、汗ばんだ頬にも觸れる。道は一息に阪となる。白樺の枝が、狹いその阪みちに更に一しきり交差する。然し、道に馴れた馬は、その迂曲した坂みちを、ひとしい迅さで走つて行く。ああ、白樺の優しい纖葉を透して見る北歐の夏の晴れた空の麗くしさは！その陽の光りの柔らかさは！馬のギャロップをとど

めて、自分たちは急に眼界の廣くなつた野原の道を緩歩して行く。盲唖學校の朱い建物をあとにして暫らく行くと、水邊だ。運河だ。碧と紫と緑と黄金との交錯した光線が、いままで樹葉の緑色に馴れた眼のまへに急におどり出す。光の舞踏がそこで渦を巻いてゐるのだ。リディンゲン行の小汽艇が一杯の客を乗せて通る。若い戀人を二人乗せたモーターが通る。五六人の健やかな青年たちを乗せたボートが通る。水が、光りがその都度に土と空とに一杯に搖れあがる。……

この水に沿ふて四五百メートルほどの馬道が眞直に續く。こゝで自分たちは馬の首をそろへる。そして馳け出す。激しい勢ひで馬は進む。馬は互に他を拔かうとする。水を蹴つて進むモーターのなかから、こちらに笑ひを、笑ひ聲を投げて來る。時々はその會釋に振り向く隙もないほどに馬の馳り方がはげしい。

道が水邊から外れる。こゝで一先づギャロップを止める。馬も自分も一杯の汗になつてゐる。――

それから秋。

日本で自分たちが見たやうなあの眞紅な紅葉はない。けれど、いつまでも緑りの鮮やかな芝生の丘を越えて、黄金いろに燦く林のかげに落葉を焚く、煙の立ちのぼる秋の美くしさには變りはない。殊に、處女のやうに肌の冷たく白い白樺が落葉の點綴した澄み透つた水のそばで、細かな葉を黄金いろにして顫へてる姿は、可憐でまた艶めかしい。太陽はもうずつと南の方に傾いて、運河を通る船のなかも、人の影がめつきりと淋しくなつてゐる。

然し、夏中田舍で暮した人々が皆都に戻つてゐることゝて、乗馬姿はこの廣い公園に充ちみちてゐると言つていゝ。若い夫婦で乗つたのが來るかと思ふと、父親が娘と轡を並べたのが行き過ぎる。眞黒なビロードの帽子、それに眞黒な乗馬服、廣いネクタイだけを眞白にしてゐる瀟洒な姿の美くしい娘が一人して乗つて來るのがあるかと思ふと、十人も十五人もの團體で賑やかに馳けて來るのに出逢ふ。三度五度と逢ふうちに、見知り合ひの顔が數限りなくできてくる。馬と馬とが行き交はすとき、北歐の人々に特有なあの優しい眼で、それとない會釋が送られる。……

冬。

野も丘も街もみな深い雪だ。―そればかりではない、水のうへまでもその雪だ。その水のうへの雪を、――半メートルにも近く凍つた氷のうへに更に積んだ雪を、四つの蹄鐵で粉のやうに激しく飛び散らせながら馳驅する馬の姿を見た人は北歐の冬の樂しみの一つを間違ひなく眺めた人と言つていゝ。

ユールゴーレンの公園にかゝる橋、――その袂からはるばると續く水が、それだ。一月から二月にかけて、その水のうへに、立派な人道さへ作られる。右手のスカンセンの高い丘に、兎もすれば隱されてしまひさうな低い冬の太陽が、光のみはちら／＼と煌ゆくこの雪道を照してゐる。――一日の間の僅か二時間位を。ストックホルムの人々は、南を受けたストランドウエーゲンの大路りを步いて、この雪道まで出てくる。そして、この陽のかゞやいてゐる水上の道を、三十分ほども費やして、對岸の橋の邊まで漫步しては、そのまゝ元來た通りに引返へして冬の短かなしかし樂しい散步を終はるのを常としてゐる。

馬が馳けるのは、この道路に添ふての廣々とした水上だ。激しい馬の足搔に連れて、氷がきし／＼と軌む。けれど、氷は厚い。我々はびく／＼しなくてもいゝ。

激しく馳けて行く馬のうしろに時々小さな橇が矢のやうに速く走つて來る。それは馬に結びつけられたものだ。橇のうへには、毛絲のジャケツにくるまつた若い娘が立つたまゝ、滿面に笑ひをたゝえて乘つかつてゐる。鳥渡でも身體の平均が失はれたら大事だ！　けれど、彼女等は馴れ切つてゐる。馬の走りが激しくなればなるほど、彼女等の笑顏は鮮やかになつてくる。見てゐるだけの我々は決してびく／＼しなくてもいゝ。……

○

オスロの郊外にあるホルメンコーレンの地名は、最早遠い日本までも馴染になつてゐる。三月の一日、常にこゝで行はれるスキー大會はサンモリッツやシヤモニーやの競技とならんで、歐羅巴の——否世界中でのスポーツ・フアンの熱心な興味の對象となつてゐる。

自分がこゝで初めてこの國のスキーのジヤンピングの鮮やかな競技を見ることのできたのは、三月も半ば過ぎであつた。オスロのわが名譽總領事をしてゐるM——といふ諸威人に連れられて、自分は歩き馴れぬ雪の阪道をふうふう言ひながらこの競技を見に行つたものであつた。オスロの町からの見物人は自分たちの前後に果しなく續いて、兩側を檜と松にかこまれた同じ雪道を上つて行つた。時々陽の光が洩れてくると、眼が痛いほどに四邊が眩ゆかつた。

かうして雪道を上つて行く人々のなかに、若い女はずゐ分と夥しかつた。多くは皆毛絲のジヤケツトを着込んで厚い頭巾と手袋とを附けてゐた。それは——まるで巴里邊にゐたら想像もできぬ姿であつた。が、自分は、興味といふよりも、むしろ嘆賞の眼で、これ等の風變りな女性の姿を、——さてはその淨らかで生々してゐる面輪をば眺めて飽きなかつたものだつた。何と言つても、それは世にも健やかでぴちぴちとした美の姿相そのものとも言つてよかつた。自分は、その頃讀んで間もなかつた佛人モーリス・ベデルの好小說『ジエローム。北緯六十度』のなかのあのウニといふ諸威娘の數々のすぐれた描寫を想ひ出した。あの小說のおかげで、自分は一層これ等の若い娘の姿に美を見出だしたのだつたかも知れない。然し、兎も角、今でも自分は諸威の女性といふと、あのイブセンの作品に出て來るやうな反逆的なまた陰欝で運命的な女性はちつとも頭に浮ばずに、このホルメンコーレンのスキー競技に集つてゐた言はゞ『モダーン』な、この若い自由な健全な感じに充ちた女性を想起するのである。

ジヤンプ臺のまへ。十七十八の若さで、四十メートル、四十五メートルと樂に飛ぶ大勢の青年少年の輕々した姿とそうした競技を見物してゐる夥しい人々の動きを飽きもせずに眺めながら自分たちは二時間許りも冷たい雪のうへに立ちつゞ

けたのだつた。——

○

ソニア。——これだけで、あゝ、あの可愛らしい諾威のスケートの選手か、と肯づく人は日本でもすくなくあるまい。オスロのブリストルの明るい食堂で自分たち夫婦が前記のM——氏夫婦に招ばれてスーペをしてゐたとき、『あれがソニアですよ！』と、M——氏は、すぐ近くの食卓で十四五人ほど同じスーペをとつてゐる一團のなかの、素直さうな愛くるしい小柄の少女をそれと數へて呉れたのだつた。

ストックホルムもさうであるやうに、オスロでも、冬の夜の樂しみの一つは、かうした明るい華やかな食堂でスーペをとりながら、賑やかな音樂でワルツやフォクス・トロットやを踊ることであつた。自分たちのオスロ滯在中、M——氏夫婦は毎晩のやうにこのスーペに誘つて、曉方の二時頃までは歸させなかつた。（その癖このM——氏は諾威でも有數の船主で仕事は山のやうに持つてゐた。だからどんなに夜更かしをしても、朝の九時にはきちんとビューローの机をまへにしてゐた！）

そうしたある夜、自分たちは、このソニア孃を見たのだつた。

恰度、彼女がサンモリッツのオリンピックの競技でその妙技を世に示してから故鄕に歸つて間もなかつた時で、この夜のスーペは彼女の爲めにこの國のスケート倶樂部の幹部たちが催したもので、あれが會長の何大尉、あれが有名な何中尉、それから彼女のまへに坐つてゐる物堅さうなおど〳〵した老人は、その父親だといふやうな説明であつた。

スナップスの強いアルコールが、さては三鞭酒の湧きあがる響が、だん〳〵にソニアを圍んだこの十數人たちのうへに賑やかに流れて行くのが、近い自分たちの食卓からよく判つた。皆の話聲が高くなり、顏のいろが映えてき、眼が輝き出して行つた。然しそうしたなかで、ソニアだけは相變らずにつゝましやかだつた。『ソニア。スコール！』——かう言つて

差出されるコップにたゞ自分のコップを合はせやうとするだけであつた。そのつゝましやかさが、純な少女以外の何ものでもなかつた。かうした少女を見ることは、場所が場所だけに、人が人だけに、いゝ氣持だつた。

やがて珈琲。こつちでも、あつちでも。そのうちに、オーケストラに連れて、人々は段々食卓（テーブル）を立つて、手と手とを組み合せはじめた。ソニアも先づ何中尉といふのと組み合つて、ワルツのステップを踏みはじめた。あの世界のレコードを作つたその足。けれどそれは、一向に變りのない素直な小さな、しかし形の整つた足であつた。が、踊り具合は何と言つても靭（しな）やかではつきりとしてゐた。やはり、うまい踊り方と言つてよかつた。

タンゴがはじまると、五十人の人が十人位に減つてしまう。その位に、北歐では人々がタンゴを踊らない。わがソニアも、タンゴがはじまると、食卓に戻つて來た。そして、稍々上氣した顔を小形の手で撫でながら、依然つゝましい素振（そぶり）で、食卓から動かずにゐる、嬉しさうに眼をしよぼ〳〵さした父親と短かな話を交はしてゐる。……

もう二時すぎ。さきほどイブセンの『青年同盟』といふ芝居をまるで筋も判らずに三時間ほども國立劇場の舞臺のうへで眺めて來た自分たちにとつて、更に三時間以上も續いたこのスーペ・ダンサンだ。ずゐ分と疲れもした。然し、M——氏夫婦は、未だ容易に席を立たう氣配も見えない。ソニアはソニアで、身は益々輕げに、それからそれへと踊つて飽かない。食卓の父親はと見ると、流石に睡さうに見えるが、それでゐて踊る人々の群のなかに呑吐されるわが娘の姿を探し出しては相變らず嬉しさうににこ〳〵してゐる。……

○

ストックホルムの町はづれに、スカンセンと稱（よ）ばれてゐる小高い丘の續きがある。元來北歐に特有だつたもので、然も今日では各國ともこれに倣つて續々設けつゝあるといふ屋外（オープンエアー）の博物館がこれだ。オスロにも町はづれにこのミユゼがあるし、

丁抹の國にもコッペンハーゲンから北方さして遠くない田舍に、これがある。そこにはいづれも、その土地の古い原始的な、——今日では遠く偏在した田舍にでも行かなければ見られなくなつてしまつた古風な農家の建物がそのまゝに保存してある。また他の國では到底見られない古風な形ちの木造の敎會の建物がある。これも古風な水車と風車とがある。數百年まへにあの神祕學者のスウエデンボリイが神を見たといふその建物なぞもそのまゝにある。それから、北方にのみゐる動物がゐる。北方にのみ生長するやうな植物もある。それ許りではない、そこゝに設けられた茶亭のなかには、この國の田舍の古風な風俗をした女が立ち働いてゐるし、古びた農家のまへでは同じ田舍の古風な服裝をつけた男たちが、この國の固有の樂器を用ゐて古風な牧歌を奏でてゐる。かと思ふと、十人許りの若い男女が、ダラーナ邊の風俗をして、この地方の踊りを古風なダンスのメロディと合せて踊つてゐる。……屋外の博物館であるとともに、それは動いてゐる博物館でもある。

こゝで、除夜の晩に行はれる催しは、情趣に充ちたものだ。更け行く夜の進むにつれて、ストックホルムの人々は三人五人と相伍して雪道を踏みつゝ、こゝの丘へと集つて來る。あちこちと林のなかに燃してゐる篝り火は、雪のうへに映つて、月の夜よりも明るい。殊に昨年のこの夜は、樹といふ樹、枝といふ枝は、あの細かな纖麗きはまる雪花をつけてゐたことゝて（この雪花は、不意な溫度の變化から生ずる現象で、一冬を通じて何度といふ位の比較的珍らしいものである）、それが篝り火を受けながら星の多い鋼鐵のやうに冷たく黑い空に泛び出してゐる美くしさ華やかさと言つたら無かつた。

除夜の鐘が鳴り出すまでに未だ一寸時間がある。篝り火のそばに近寄つても、熱いのは顏だけで、流石に身體にはめり〳〵と深夜の寒さが沁み込む。とう〳〵堪え切れずに自分たちは、明るい茶亭のなかに飛び込んで、あつい グローグか何かを註文する。——

十二時近く。軍樂隊の奏樂が彼方にひゞき渡る。我も他も、いそいで、林越しの廣場へとおもむく。既に黑山のやうに

人々は集つてゐる。見ると、そこには仰いで眺める高い臺が出來てゐる。雪上の篝り火が辛ふじてその頂を照してゐる。

音樂が止んだかと思ふと、この臺のうへに人の影が現はれる。あのイブセンの「ペール・ギント」で自分にはわけてお馴染みになつてゐる當國の名優——といふよりもスカンディナヴィアを通じての名優の一人、アンデルス・デ・ワールだ。木綿で作つたシャツを表に着込んでゐる奇異な恰好も、この國の古い習俗を想はせる。やがて、舞臺でお馴染みの高い錆のある聲が夜の空にひゞき渡る。それは、古い歳を送り新らしい歳を迎へやうとする人々に呼びかける數々の詞だ。四分、五分。この強くて優しい調子を持つた瑞典語が終るか終らぬかに、おゝ、町から一樣にひゞいて來るのは、正に十二時を告げる除夜の鐘の音だつた。同時に、デ・ワールの發聲につれて、ウラー、ウラー、ウラーの聲は黑山のやうな人々のなかから湧きあがる。高い臺をなしてゐる夥しい薪には、この時一齊に火が點される。

おゝ、瞬く間にそれは火の丘となる！ その下で人々は、夫婦親子戀人、さては友人同志「新年おめでたう」——と言ひながらキスを交し合ふ。鐘の音は益々賑やかにあちこちの寺院寺院に鳴りひゞく。火の勢ひは益々はげしい。

ふと見ると、右手の高い望樓のうへには、電燈煌々と「1928」の四文字が、描き出されてゐる。

鋼鐵のやうに勁くて冷たい空。——しかし東の方が思ひなし仄かに明るい。がそれは、極光の光りだつたのかも知れなかつた。（……）

○

多が去つて春が來るまでの北歐の日は流石に佗びしい。殊にあの復活祭（自分の爲めにこゝに瑞典語で書き記して置かう。ボスク。——そら、ストリンドベリイの作品の題にもこれがある——）の前後の佗しさは、巴里での復活祭を幾度か迎へた自分にとつては、一しほに感じられる。巴里邊で復活祭と言へば、——あの美くしい言葉 Pâques fleuries（花咲く

復活祭）がそのまゝに示してゐるやうに、もう自分たちは森のなかで鈴蘭の花が採せる頃だ。リラの蕾みもそろ〳〵破れかける頃だ。空のいろがすつかり艶やかさにかゞやいて來る頃だ。

それが、この國では、やつと雪が消えた許りだ。草の芽も、土のうへに出ていゝか知ら、と未だ迷つてゐる頃なのだ。陽の光りの一時よりはずつと豐かになつて來たことも事實だし、小鳥の啼き聲の繁くなつて來たことも事實だけれど、樹の芽なぞは、探すすべもない。雪のなかを堪えて來た樹木は、そのまゝに眞黒な鐵の鎧に身をつゝむでゐるまゝだ。南方の國々の音信を手にする度毎に、自分たちは、今こそ北の端に住つてゐる身であることをふかく感じねばならなかつた。

然し、とう〳〵この國にも春が訪れて來た。しかもその訪れる歩みの速やかさは！　それは、一日の遊ひで、といふよりも、朝夕の遊ひで判るほどの速さであつた。一二ケ月も遲れた季節は、かうして十日か二週間位のうちにすつかり取返してしまうのだ。もう自分たちは、青草と青葉と白い鈴蘭と薄紫のリラと艶やかな太陽とおしやべりな小鳥と、それからあの織奢な白樺の若芽とのたゞ眞中にあつた！

リラと言へば、このストックホルムの町にも增して豐かな華やかなリラを持つた都が外にあるだらうか？　幾年かまへ、五月のある日、あのイタリアのフィレンツェの古都を訪ねたとき、自分はそこの窓にそこの庭にゆら〳〵と咲き亂れた百合の花の豐かさを嘆賞したものであつた。けれど、あの古都の清楚なる百合の花の麗くしさも、この北歐の初夏の水都を飾つてゐるリラの花の華やかさには及ぶべくもあるまい。……『去年の雪今何處にありや？』今窓外のこの嚴めしい都會の冬景をまへにして眼をつむれば、自分のまへに泛ぶものは、實にこの白紫の華やかなリラにつゝまれたストックホルムに外ならぬのであつた。

マロニエとプラタースの若葉しか持たぬやうな巴里の初夏の寂しさを、自分はその後幾度心で較べたものであらう。……

○

一口に人は北歐と言ひ、スカンディナヴィアと稱ぶ。然し、たゞ汽車の車窓から見た許りでも、瑞典と諾威との違ひは大きい。またこの二國と丁抹との違ひだつて大きい。

瑞典が優雅でありながら何處か嚴しさがあり華やかでありながら何處か寂しさがこもるあの美くしいながらに老けた處女のやうな情景を持つた國だとしたら、諾威はあくまで敢爲で、倨傲で、鬪爭と憧憬と孤獨との夢にあふれた海賊ヴィキングを偲ばせる粗々しい男性の風景を持つた國だ。それが丁抹となると、國は何處まで行つても山がない坦々たる平野で、開け放しになつてゐる南方からはどんどん大陸の風が這入つて來るといふ、なかなか陽氣でしかも心底はなかなか憂欝で年が若く見えても實はずゐ分とませもしてゐる娘を想はせる國柄だ。

それは、みなこの三國のそれぞれに違つた地形からも來てゐ、地勢からも來てゐ、それが惹き起して行く生活方法の相違からも來てゐる。歴史がそれぞれに違ふのも、その結果である。人情なり思想なりがそれぞれ違ふのも、またその結果に外ならない。

狹い意味では決して瑞典的であるとは言ひ難いストリンドベリイは暫らく措く。今年の秋その七十歳の生誕日を瑞典を擧げて祝はれた『ギ・スタ・ベエリング物語』の作者セルマ・ラレゲレフ女史の數々の作品に盛られたあの神秘で純粹な土俗の強い聲は、北歐のひゞきとは言ふものゝ、瑞典を離れては容易に探し得ぬ聲の色どりである。同樣に、あの『アルネ』で『ソルバッケン』で山の彼方をみつめてゐる少年のにがいノスタルヂアの心を描いたビヨルンソンにしても、あの『人民の敵』で『人形の家』で社會と傳習とに對する侮蔑と反抗とのはげしい想ひを描き出したイブセンにしても、さてはあの『餓』で貧しさの惨めさとそののどかさとを巧みに描き出したハムズンにしても、北歐以外では求め得ぬ作者であるとして

も、到底瑞典のタイプでもなく、また丁抹のタイプでもないのである。あくまでもかの素朴にして[illegible]遊な諾威フィールトと荒海との諾威の土地のみが持ち得る姿でしかあり得ないのだ。お伽噺のアンデルセンに到つては、「マリー・グラッブ」『ニールス・リーネ』の作者ペテル・ヤコブセンに到つては、さては、ハムレットの哲學そのまゝとも言へやうケールキゴールに到つては、あの際涯のない曠野を霧ふかい海でかこまれてゐる丁抹の土地からならでは到底咲き出づべくも思はれざるはろ〴〵と蒼白い花である。

スカンディナヴィアの土地に住つてから自分は、この土地をつなぐ力よりも、むしろこれを分たうとする力をばそこにもこゝにも感じるやうにさへなつたのである。

○

瑞典から、はた諾威から、南の海を越して丁抹に渡る。それだけで既に我により近く西歐羅巴に來たことを感じる。獨逸からの風が、さては佛蘭から西の風がたしかに我々の頬を撫ではじめることを感じる。

○

コッペンヘーゲンの町（この國流に稱べばシュウベンホーンである。）は、オスロの町に二倍し、ストックホルムの町よりも更に大きい。そして、その幾つかの通りの賑やかさは、オスロのカール・ヨハンの大通りよりも、ストックホルムのストランド・ウェーゲンの水邊の大路よりも、はるかに殷盛である。殊に人通りのなかを連續して馳驅する自轉車の夥しさは、その運轉の與へる賑やかさの效果は、同じ自轉車の町ジュネーヴに較べても杳かにそのうへにあらう。かくして靜かな北方から遣つて來た旅人には、足一歩既に西歐羅巴らしい賑やかさ騷がしさのなかにある。ストリンドベリイの、死

の舞踏』のなかの文句の通り、夜になれば、そこゝには『足を臺へかけて飲める』酒場さへ、數すくなからずあるし、四角い大形な皮の化粧鞄をおのがじし手にさげた薄化粧の女の數の際立つて眼につくのも、これから北方の都では見られない夜景の一つとも言へやう。そう言へば、この國では、瑞典や諾威やで見るやうなやかましい飲酒の制限といふやうなものはない。ウィスキイの瓶が、コニャックの瓶が、ベルモット瓶が、店一杯にあふれながら明るい飾窓の灯をなみ〳〵と受けてゐる。大きなレストラン。大きなホテル。遊樂公園ティヴォリ。其他、其他。

然し、この大きな都を足一歩出れば、我々は、北海のもたらす霧に朝夕洗はれる曠野つゞきの丁抹に逢ふのである。丘とも言へぬほどの緩やかな起伏の耕地。そのこゝかしこに勢ぞろひしてゐる森林。それにつゞく水澤。日が暮れると、あちこちに點し出される侘しい燈影。單調な、陰氣な風の音。――それとも、陸をめぐつて吠え續ける波の音。そのなかで物淋げな瞳がみつめてゐるのはケールキゴールだ。さてはあのアンデルセンだ。それとも、あの憂鬱で病みがちのヤコブセンだ。ハムレットの幽靈が、かくして、丁抹の曠野のうへを影のやうに彷徨するのだ。……

○

コッペンヘーゲンに赴く毎に自分は必ずあのストランドの河岸通りにあるグローグといふ名の魚料理屋に立ち寄ることを忘れない。それは、この家ほど美味な魚料理を食べさせるところは、おそらく歐羅巴を通じても他にあるまいと思はれるからである。(自分はこゝであのうまい鰈やオマールやを食べながら、どんなに巴里のプリュニエ邊で舌鼓を鳴らしてゐるわが同胞を憫れんだことであつたらう!)それは、料理の仕方が特別に秀れてゐるといふよりも、材料そのものがよいところから來てゐるのだつた。バルティックと北海とが恰度打ち合ふその地點に位置を占めてゐるこの國は、一方で物侘しい霧とそれに醸された蒼白な思想とを生み出すとともに、他方かうした美味な肉を持つた魚を生み出すことにもなつてゐ

るのだ。

季節ならばこの地方の牡蠣も決して惡くはない。ポルチュゲーズやマレンヌやとはまた別種のいゝ味がある。然しそれよりも先づコースのはじめには、小さな蝦を澤山に塗りつけたサンドウィッチを註文することをすゝめる。これこそこゝでしか味へない美味のものだ。このあとで、自分は大がいは、鰈(ソール)をとる。油揚げにしたのでもいゝし、ムニエにしたのでもいゝ。魚はかなりに大きなものだ。然し、その肉のひきしまり具合、その大まかながらに細かい味、それと同の味も些かも失はしめまいとしてゐる料理の仕方は、天下一品をもつて稱んでもそう誇張ではあるまい。それに、その皿に必ず附ける馬鈴薯は、これまた容易に他の店でまた他の土地では味へないほどにいゝ味のものである。

日本流の金ぷらだと言つてもよさゝうな鮭の油揚げも、なか〳〵にいゝ。これで、あの純雅な葡萄酒シャブリでも飲めれば申分のないところだけれど、天は二物を與へずで、多少なり佛蘭西邊で馴らした口にはとても合はぬ代物しかない。やはりピルスナーの麥酒といふ段取りだ。……

○

魚料理にコペンハーゲンを推すにしても、所謂北歐料理の特色とも言へる豐かな珍らしい前菜料理にいたつては、矢張り瑞典かも知れない。勿論、丁抹でも諾威でも食卓のうへに一杯に並べたてられるこの前菜料理は、その種類・内容から言つて、瑞典のそれと殆んど大同小異とも言へる。然し、自分がストックホルムの宮殿うらのあのジルデン・フレーデンの窟料亭でとつた、または、楊柳の水にひたつた風景を窓外に眺めるローゼンバッド料亭邊でとつた前菜料理ほどのものはオスロやコッペンやにはあるまいといふ氣がする。

これ等の前菜料理は、すくない時で十ほど多い時で二十から更にそれ以上も、數が運ばれる。鮭の燻製や、羚羊の生肉

や、鮭の甘漬や、それから七八月の季節ならばエクルヴィス（クレフトールと稱ばれる）の茹でたのや、——鳥渡北歐を離れては口に出來さうもない珍らしい數々の皿が並べられる。それに、これ等の前菜は佛蘭西や獨逸の大きなレストランなぞで出すオール・ドーヴルのあの仰々しさ、あの凝り過ぎがなく、文字通りに前菜としての役割だけしかつとめまいとしてゐるのは、先づ氣持がいゝ。勿論これ等の國々でも正式の客の時なぞは、前菜なぞを出さずにカビアールでゝも始めてスープ、魚といふ風な順序でコースを進めるけれども、自分はやはり、數多い、見た眼にも綺麗でないことはないこれ等の前菜が食卓につくや眼前に並べられるといふことの方が、ずつと豐かで賑やかな饗宴にあるといふ氣がされていゝ。それに高價のわりに味のさしてよくない舶來の葡萄酒か三鞭酒かがそばのコップについであるよりも、やはりこれ等の國の地酒のスナップスを、前菜をつまみながらぐつとやる方が、はるかにいゝ。——

○

馬鈴薯から製られるこのスナップスは、露西亞のウォッカ同樣、極めて強い飲料で、火を近付ければ容易に燃えあがりさへする。食卓へついてから、主人側の音頭で『スコール！』と言ひ合つて小硝盃に並々と注がれてゐるこの酒を一息に咽喉へと放り込む。餘りアルコールに強くない人ならば、この一杯だけで、充分の效果がある。五分と經たぬうち、身體は温まり、食慾は增し、多少の醉心地すらも感じる。かくして、食卓をかこむ初めの舌のこはばり心のこはばりは、易々と解けて行くのを見る。若しそれ勇敢にこのスナップスのスコールを續け合ふならば、半時間にして、今迄相知らなかつた隣人同志は、百年の厚誼を結ばうとすら努めるに相違あるまい。——

北歐の國々で『スコール！』と呼び合つて乾杯するその酒は、このスナップスのみではなく、その後に卓上に注がれる一切の葡萄酒、三鞭酒等も同樣である。主人も客も、多くの場合獨り硝盃を唇に當つることをせず、必ず『スコール！』の

辭をもて他を誘つてそれを飲み合はんとする。誘はれた者は、たゞちにおのれのまへの硝盃をとりあげる。そして、飲み合ふ二人は、互にその眼と眼とを合はしつゝ、硝盃を傾くるのである。飲み終れば、二人はその硝盃をたゞちに卓上に置くことをなさず、胸より稍下の邊にそれを下げ、お互に輕く辭儀し合ひ、こゝに始めて「儀式」は終つて、硝盃を卓上に置き得るのである。

單に酒を飲むに過ぎぬこのスコールに表はれたるかゝるセレモニイと、かゝる感情と、――北歐の北歐らしき特色の一つがこゝにもあるのを感ずる。

○

北歐の女。

北歐の女と言へば、先づ何よりもイブセンのノラを思ひ、ヘツダを思ひ、「ロスメルスホルム」のレベツカを思はせられてゐた自分にとつて、現實に見た彼女等はどうであつたか？

自分はさきにオスロ郊外のホルメンコーレンの丘で見た彼女たちの「モダーン」なスキー姿の美しさを述べた。さてはブリストール・ホテルのスーペ・ダンサンで眺めたソニア孃の輕ろかに踊る姿を述べた。さては、モーリス・ベデルの好小說『ジエローム』のなかに巧みに描かれたウニのことをも一言述べた。これ等の女性が自分に與へた印象なり感銘なりは、イブセンの劇のなかに現はれて來る數多くの女性と、むしろい、對照でさへもあつた！　自分が現實に見た北歐の彼女は、實に佛蘭西邊の女性よりかその形に於いてもその內部の生活に於いてもはるか『現代』であることをすら、感心させられたのである。

然し、この現象は、極めて當然のことゝも言へる。イブセンによつて描かれた（もつと適確に言へば、イブセンによつ

て現はされた）ノラなりヘツダなりは、北歐の女性が從來から如何に時代にもがき時代に醒めてゐたかの例證ともなるものである。舊時代への反逆、新時代への憧憬、そしてその惱み。――これこそイブセンの女性の生命にほかならぬものであつた。現代の北歐の女性が、取りも直さず、これとひとしい信條と情熱とを以て、新らしい時代に渇仰しそれに適應して行かうと努めてゐるのは、最も當然のこと、しなければなるまい。それも、大陸の他の國々で見られるやうなその時々の單純な流行・物眞似といふやうな淺い動機からではなくて、更に深い『要求』から來てゐることが認めらるゝ。……

今年の春オスロの王立劇場で一週間ほど引き續いてイブセン祭が催ほされ、毎晩あの深刻な、――そして陰氣な芝居が上演せられてゐた當時、その劇場と向ひ合つた活動寫眞館では、チヤツプリンの『サーカス』が、イブセン祭にも增して夥しい觀客をよんでゐるのを、當時自分は意味ふかく眺めたものであつた。それもこれも時勢だ、と言つてしまへばだが、この推移この變遷のなかに、自分はやはり一つの生きた連續を見る。イブセンの女性をその當時の形で見やうとして北歐に赴く人があつたら、必ず失望しやう。しかしよく見詰めたら、そこにはいつもイブセンの亡靈（ゴスト）があることに氣が付かう。――

○

ストツクホルムのあの水邊にある壯麗な建物の立ち竝ぶストランドウエーゲンの大路を午後三時頃漫步したことのある人は、そこに行き交ふ瑞典の女性の美しさを當分は忘れ得まい。先づあの純粹で伸びやかな綺麗な面立ち。あの眞直な長い二つの脚。あの佛蘭西風な意氣な流行の衣裳。それに、女は必ず男と步く、といふやうな感じを與へる巴里邊から來ると、こゝでは、女一人だけが、さては女づれが、小犬のみをせめてもの連れとして步くことの如何に眼につくことよ。それは一しほに艶やかな空氣さへもつくつてくれる。――

北歐のこれ等の靜かで晴れやかな女性に、佛蘭西風なエレガントとかヴォリユムプチユーズとか言ふやうな形容詞を附け加へることの當らないのは言ふまでもない。彼女等は、その善良さでさてはその優しさで、人の心を惹く。熱く動く眼尖とわなゝく薄い唇とで迫らうとするやうな烈しさ露はさは、到底この國では見難い。それだけに旅人にとつてこの國の女性は、寂しすぎるかも知れないが、また極めて心安き眺めでもある。活動寫眞が此頃遠い日本までもその名と顔とを知らしめた瑞典の女優グレタ・ガルボーにいたつては、同じこの國の男優ラルス・ハンソンと、もに、むしろわが瑞典のタイプとはなし難いものである。この方面にあつて最も瑞典風の美くしき容姿を有する女優は、けだし王立劇場に出演するトラ・タイエであらうが、この人の現はれた映畫の存することを、自分は不幸にして知らない。……

ストランドウエーゲンの漫歩をやつてから、再び南下伯林に出てそのウンターデンリンデンをそのウイルヘルムシユトラーセを漫歩した自分の友人の幾人かは、伯林の如何に田舍じみてゐることよ！との感想を遠慮なく洩らしてゐる。然し、巴里ですらも、このストックホルムの水邊の大路にも増した華やかで品のいゝ女性が粒ぞろひで歩いてゐる通りはないかも知れない。『ストランドウエーゲンの素描』——これだけでも、かの風俗畫家カルル・ラルッソンの彩管があれば見事な一卷の繪卷物ができるであらう。自分はむしろそれを將來のわが國の畫家にも期待して、こゝにその情景を描き出さうといふあらぬ野望は捨てることゝしやう。——

(終り)

後記。本稿は昨冬瑞典にあつて執筆せるもの。未定稿のまゝ篋底に藏して歸朝せる處、公論社の囑黙しがたく忙中二三を加筆するに止め不滿乍ら發表することゝせり。讀む者諒せよ。

(四・四・七)

濟南事件解決と日支の將來

米田實

一

過去一年間あらゆる日支交渉の障碍物となつて兩國人を一喜一憂せしめた濟南事件は、三月二十八日芳澤公使、王正廷（南京國民政府外交部長）間の公文交換で漸く解決を見ることが出來たのである。

思へば此交渉ほど複雜且つ困難の徑路を取つたものが他にあらうぞ、事件は五月三日から同十一日までに起つたものであるが、之につきて七月から始まりかけた双互協議は支那の「日支條約の一方的廢棄宣言」（七月十九日）と田中內閣の神氣昂奮及その脫線した（否な田中內閣にとりては脫線でなかつたかも知れぬ）對張學良南北妥協中止勸告などで駄目となり、之に影響せられて英（八月）米（三月）佛（十月）が解決し得た例の南京事件（昭和二年三月支那兵暴行掠奪事件）さへも日本のみは解決し得ず、すべての問題停頓せねばならぬと言ふ變調を餘儀なくされたのであつた、その後一は國民政府が八月の第五次全體會議十月の國民政府組織法制定及主席並びに五院々長等任命で統一政府の形姿が出來あがり、一は支那の強硬な條約無效論が形式は兎も角も、實質的に於て緩和せられて來たので、田中內閣も考へ直し十月十九日から二十五日にかけ南京で矢田總領事及王外交部長間に南京事件、漢口事件、通商條約改正問題、濟南事件の四問題の非公式交渉が進められた、だが此處でも濟南事件が先きにせられた、否な支那の空氣では之を先きにするより外は無いのであつた、かくて之も山東省に於ける將來の安全保障と日本軍撤退時期とで二十五日停頓し、矢田氏の請訓となり、有田アジア局長の上海南京行となり、その後日本でも例の久原遞相の強硬論が藪から棒に飛び出し、支那でも日本の撤兵眞意に疑念を挾み又た國民黨の政情もあつて、十一月二十二日等の芳澤

王正廷會見も、局面の行詰りを打開することも出來無かつた、かくて年暮れ昭和四年一月になると、床次訪支後の進言やら、又た前年中、支那と十二箇國(米國、ドイツ、ベルギー、ノルウエイ、イタリー、デンマルク、オランダ、ポルトガル、イギリス、スウエデン、スペイン、フランス)間の條約締結成り日本のみ取り殘されてゐる點などに刺戟せられて、芳澤公使の南京訪問となり、一月二十五日から二月四日に至る五回の交渉で翌五日早朝解決の報は一時日支親善論者の愁眉を開かしめたものであつた、しかし之も日本政府側の對支疑念即ち支那側が責任及損害の共同調査委員會設置に乘じ日本側に濟南城攻撃に依る損害を賠償せしめんとする無きやを疑つたことに依つて、破綻を見たのである、蓋し此點で日本政府を安意せしむる約束を與ふることを南京政府は躊躇したのであつた、之れ二月二十四日中央政治會議で戴天仇、孫科兩氏「賠償問題不讓歩」を呼號し「此方針に於てする共同調査委員會に日本が同意せざらば條約問題其他も日本と交渉せざる可し」と說き、滿場之に一致したと言ふのでも分るところである、かくて談判挫折、月を新にするに至つたのである。

而して以上の徑路に於て、日支双方の思想の背馳、立場の相違、感情の惡化こそは、種々の機會を覘つて極度に局面を混亂せしめねば止まなかつたのである、從つて双方共に幾分か爭に倦き始めて居たとは言へ、必ずしも今の時に於て急轉直下、暗雲を排して天日を見やうとまでは誰も豫言することが出來無かつたのである。

然らば今回急轉直下、解決を見たのは何故であるか、日本で「支那問題努力を看板に、政權に近かうと夢想してゐる」例の床次黨は、之をも同黨の政府監視の功に歸するだらう、田中內閣乃至之が忠犬たる一部外務官僚は「南京國民政府は先きに第三次國民黨代表大會を控へて居たので共產黨其他反對派に口實を與ふるを畏れ強硬を裝つて居たのだ、其大勢が極れば讓歩するに違ひ無かつた、首相と我等とは之を豫見して待つてゐたのだ」と吹聽するだらう、だが予の見に依ると、南京政府が態度緩和急に協定を造りあげた所以は、重に最近廣西派對中央政府が干戈相見ゆる重要期に於て、之を馮玉祥懷柔の妙策に使はんと言ふ彼等にとつて頗る怜悧な處置としてであつたと答へねばならない、即ち之は床次黨の手柄でも無ければ、田中內閣の待望策の成功でも無い(田中內閣は待望政策に依つて唯だ日本國民の負擔たる駐兵費額の膨脹に成功したのみだ)、賢知の譽れは、寧ろ間一髮の危機に於て少しの遲延もなく本問題を對馮玉祥策に利用し得た蔣介石及其周圍にあらねばならない。

それは外でも無い、孰れ來らねばならなかつた蔣介石對廣西派（李宗仁、李濟琛、白崇禧等一派）の爭ひは突如勃發したからである、元來蔣介石と廣西派は最近二年ばかりの間犬猿啻ならぬ關係になつてゐた、否な少しく古きに溯ると、親分孫逸仙もその廣東政府時代常に廣西派に苦しめられ度々逝亡しては歸つた歷史を持つてゐる、だが勢を見るに明敏な智者白崇禧は、大正十五年三月になると政治手腕を發揮し廣西代表として、廣東に來り廣西、廣東を妥協聯絡せしめ、七月李宗仁と共に蔣介石下に立ちて、北伐に盡力したのであつた、かくて翌年三月國民軍は、長江以南の支配權を得たが、成功に從ひ又もや分裂が始まつた、同年夏蔣介石が總司令を辭職し、次で蒼皇日本に走つたのなども、李宗仁が西の方武漢に據り、白崇禧は東の方上海、南京を占め、李濟琛は南の方廣東を根城とし、所謂廣西派のみで、三角的に中支南支を支配せんとする驚く可き陰謀に、形勢不利を感じ、止む無く亡命に決したものに外ならなかつた、左れば昨年北伐の美名に一旦協和が出來ても、いかで其永續を望み得やうぞ、殊に蔣介石は中央集權と裁兵（兵を少くする丈けで無く結局之を中央政府下に置くもの）とを主張するが廣西派はどうしても地方分權に依らねばならぬ、然らざれば蔣等を排して自ら中央政權の掌握者となる外、生きる途がない、尤も中央政府にも彼等の同情者胡漢民（立法院長）戴天仇考試院長）などもあるが、要は地盤を固め實力を造り將來に備へねばならぬ、かくて彼等は本年二月湖南政府主席魯滌平を勝手に免職したのである、（魯滌平は譚延闓系で蔣介石に近く、廣西派にとりては異邦人である）、しかし此中央政府を無視した措置然かも湖南を武漢勢力に歸し以て「武漢から廣東に亙る」廣西派の陣線を成立せしめて蔣介石を脅威する策動をば、どうして蔣介石が默過し得やうぞ、禍根は速かに刈らねばならぬ、かくて蔣の出兵と遠征とを見るに至つたのは、何人も了解に苦まぬだらう。

だが斯く戰爭となると、双方共に重視するのは馮玉祥の去就である、南京對廣西の互角の勢を一變するのも、一方に勝利を得せしむるのも、一に馮の進退に依るのである、茲に於てか南京政府は馮懐柔策として、急に山東問題を解決したのである、蓋し馮は現今富少く收入無き甘粛陝西、河南等に根據を持ち財政不如意なので、富みも多く、海港と之に通ずる鐵路があり、物貨の通路明瞭に、課税し易く收入も多かる可き山東省に垂涎して、日支交渉遲延に不滿を懐いて居た、誰か此際の蔣介石の「問題解決」を、巧妙に餌を投げたので無いと言ふものがあらう、否な此點ばかりでは無い、將來幸ひに蔣介石軍勝ち武漢敗る、

とき、山東の海口馮玉祥に與へられ居らざらば、馮は必らず策を決して「水への出口」を先づ收入多き武漢に求むるに違ひ無いであらう。

勿論馮玉祥は老巧で且つ心事複雜の梟雄だ、故にそれがどれ丈け蔣の手に乘るかは別問題だ、然かも南京政府丈けから見ると、それが此機に於て山東解決を遺憾なく利用したことは、成果如何に拘らず、誰か其巧妙な遣り口で無かつたと言ふものがあらう。

かくて急速なる日支濟南事件解決は來たのである。

二

しかし此三月二十八日聲明、交換公文、議定書等に依つた濟南事件解決は、果して日本の面目少くとも田中內閣の從來の態度に合致した解決であつたか、否なそれは正反對である、日本の主張は丸潰れとなり、田中內閣は世界物笑の種と化したのである。

勿論當時發表公文は「聲明」に於て濟南事件の悲痛事たるを說きて今後互ひに此記憶を一掃し兩國親交を期すを述べ、「交換公文」に於て日本より支那側の居留日本人生命財產安全保障を條件として日本軍の二箇月以內撤退を申入れたるに對し支那側は國際公法に照し保護するを述べて撤兵期了承を告げ更らに「議定書」に於て日支兩國の損害問題を日支共同委員會に調查に委する旨を聲明したもの、卽ち之で日支協定のすべてが發表せられたものでは無い、たとへば損害調查を行ふも、それは大體相殺の方針だと言ふやうなことは、少しく公表せられて居無い、だから多少批評を差控へねばならぬやうだが、それは唯表面の話しで、實際我政府が必要の前に低頭して惜氣も無く其所謂對支主張を擲棄したことは、最早や識者公知の事實である。

昨年五月事件直後福田司令官が蔣介石に提出した要求の後を承けて同七月我政府が聲明した濟南問題解決の條件を顧みると、國民政府の公式陳謝、責任者の所罰、損害賠償、將來の安全保障の四者が根本となつて居た、之は田中外相により議會にも縷說せられたものであり、多數國民は之を信じ、其實現を待つてゐたのである、だが今や此期待は完全に裏切られた、國民政府の陳謝は日支兩政府の陳謝と早變りし日本も同じやうに遺憾の意を表し、責任者の所罰は曖昧の裡に消え去り、損害賠償は我國民に依りて支那側の賠償だと考へられたものが急に日本側からより多く賠償せねばならぬ危險性さへ生じて、大體相殺で安心せねばならぬ羽目となり、唯一つ實現したやうに見ゆる「將來の保障」も、支那側は國際法上當然の責任だからと言ふ見

地から邦人保護に同意したと言ふ丈けで、撤兵に基く特別保障發生と言ふ意義は一向明確になつてゐ無いのである。

如何にしてかゝるミジメな最後を田中内閣の濟南外交は遂げねばならなかつたのであるか、それは拙劣外交の罪か、思へば近年の内閣中、現内閣ほど我外交機關を攪亂し、其専門家を雌伏せしめ、雌伏せぬものを貶謫し、能率を破壞し去つたものも少いであらう、だが田中内閣外交の失敗は昨年及び昨年濟南出兵から引續き對支策を誤つた點にあつて、最後のミジメな濟南事件解決そのものにあるのでは無い、予の見る所では、出兵後あのやうな徑路をとつた濟南問題につきては、今度のやうな解決も自然であり、止むを得無かつたと考へねばならぬ、田中首相は此「解決」よりも寧ろ「解決前史」に對してこそ重に責任を感ぜねばならぬのである。

三

何が故にかく言ふか、世人は先づ濟南事件につき日支兩國人の知識が全然異つたものであつたことを記憶す可きである、「廬山の半ばを見る」とは兩者にとりて適評であつた、日本人は同件につき支那人の暴虐其他あらゆる不都合を往々誇張的にさへ致へられたが日本人側の不部合をば少しも聞き得無かつた、之に反し支那人は日本人側の不都合をのみ同じく否な遙か以上に誇張的に数へられたが支那人の暴行をば聞かされ無かつた、かくて兩國民は互ひに他方をのみ悪いものと思ひ込んだのである、ゆえに互に事件は他方の陳謝、賠償に依つてのみ終結す可きものと考へて來たのも、何の不思議があらう。

尤も事件はなほ共同調査委員會の公平な研究に附せられた今日であるから予もすべての實例を語ることを其以後に遠慮せねばならぬことを感ずる、だが二三の點を江湖の参考までに指摘するのは何の差支へもあるまいと思ふ。

第一は紛爭の發端をなした支那兵の濟南麟祥門外滿洲日報取次店吉房長平方掠奪事件である、當時直ちに我等に傳へられた所に依ると五月三日午前九時三十分數名の支那兵突如侵入略奪を始めたので、天津隊久米川中尉指揮部隊が鎭壓に赴くと支那兵は久米川部隊に發砲したので同隊も應戰して次々各方面共交戰狀態に入つた、且つ支那兵側は豫じめ周到なる計畫の下に略奪隊を組織しその背後に大部隊後續し堂々として日本人略奪を開始したと言ふのであつた、之は交戰後に起つた多人數の邦人虐殺と共に非常に我等を憤慨せしめたものであつたが、その後判明した事實に依ると、それは幾分緩和した見方をせねばならぬことが知れて來た、即ち支那兵が滿洲日報取次店を掠奪した

とき、驅け付けたのは我領事館巡査であり、久米川隊が赴いたのは支那兵が已に引揚げた後であつた、そこで我兵は支那兵の跡を追ひかけ其屯所に迫つて爭ひが開けたのであつた、掠奪の現場で支那兵が我が制止をきかず發砲したわけではなかつた、勿論支那兵の不法な掠奪が事件の原因たるに變りは無いが、交戰となつた經路につきては、稍緩和した見方が必要となつたのである、次ぎに「豫じめ周到なる計畫の下に略奪隊を組織した大部隊之に後續した」と言ふのも、其後の調査では餘程怪しくなつて來て居たのである。

第二は山東交涉員蔡公時等殺害事件である、紛爭の口火をつけた上記略奪事件は能く日本人に知られてゐるが、支那人民間に知らされ無かつたのである、故に支那人側は原因を專ら日本の野心及陰謀に歸し且つ專ら五月三日夜に起つた蔡公時殺害事件の如きを高調し悲憤慷慨したものである、先づ支那側の言に依ると國民政府は山東を收めたので、同省に於ける日本其他外國との交涉に當らしむる意味で日本語に堪能な京都帝國大學卒業の蔡公時を山東交涉員に任命し蔡は濟南に其事務局を開いたのである、ところが、三日夜日本兵は同事務局に入り、地下室に避難せる蔡公時以下交涉署員十六名を四つに分けて縛し、殺害したのが、其内一名張漢儒なるもの逃れて之を總司令部に訴へた、又た日本兵は鼻耳等を切つたと言ふのである、日本側は之につき三日蔡同署内から街頭の日本兵に發砲したものがあつたので、夜間同署を襲つた、又經路も逆ふと說明して居るが、支那人側は此件の誇張的報告に動かされ、罪はすべて日本にある如く考へたものである、鼻耳切斷云々は馬鹿々々しい、だが日本人の知る滿洲日報略奪は支那人に傳へられず、支那人が知る蔡公時事件は一般日本人に傳へられず、兩國民互ひに半面丈けの知識に因據し互ひに「罪惡は皆な彼に在り、我は全く清淨無垢なり」との自己陶醉にかゝるを見ては、學究的環境に立つ我等は竊かに無限の感慨を催さねばならぬのである、尤もコウ言ふ例は過去歐米の國際紛議にも屢見らるゝ所で、珍らしいわけでは無いが、それを眼前に見ねばならぬのは亦た何たる憾事だらう。

第三は日支兩方の死人である、五月三日から五月十一日の日本軍濟南城占領迄に双方幾許の死人があつたか、と言ふと、最初頗る多數の在留日本人は隨分亂暴な殺し方をされたと考へられた、其不人道な殺し方も我等の憤怒を喚起したが、其數量の多いことが亦た怒焔に薪を加へたのであつた、だが時日が經るうち、それは幸ひに僅少だと言ふことが判明して來た、最初は同じ数の報道が重複したり、行方不明者が死人視せられたので、大分多いやうに感ぜられたが、居留民の遭難は、十三名半に過

ぎぬこととなつた、半とは負傷しその後死んだ人を數へたのだ、次ぎに交戰中死んだ日本兵の數は四十名と稱せられてゐる、ところが支那人の死者になると、約三千人と言ふ驚く可き數だと傳へられて居る、濟南城陷落後直ちに城内を檢したものは千五六百位の死體が遺棄せられて居たのを目擊して居る、此三千人中兵士もあるが普通の良民も隨分多いと言はれてゐる、然り、日本側在留者十三名半兵員四十名の死に對し支那側三千名の死である、而して此少く死んだものは、多く死んだものに對し「陳謝せよ」「賠償金を拂へ」と言ふのである、其主張には相應の論據があるとしても、之を國際聯盟若くは第三國の會合に訴へ、判斷を求むるとき、理義は兎に角感情は如何に動くであらうか、その感情は理義を動かし來るではあるまいか。

四

のみならず、所謂理義の問題も、世人が思ふやうに簡單でも直截明瞭でも無いのである。

蓋し日本の出兵は國際法上の自衛權に依つたものであつた、此權利は國家の基本權の一であり、それは外國が自ら在留外人の生命財產を保護し得ぬ狀態に在る場合に本國が出兵等に依つて自ら其臣民若くは人民を保護することを含み得るのである、ガライス、ハーシイ、ホール、マルテンス諸學者夙に之を認めてゐる、かく言ふ予も此說に贊成する一人である、しかし今の學界の姿では之は萬人一致の定說とまではなつて居らぬ、リストなどは單に緊急狀態を以て說明し、オッペンハイムなどは同權を認めないで「不法性を免る、」丈けだと目してゐる、殊によしや同權を認むる學者と雖も、出兵等の場合、相手國に之を尊重する義務ありとは誰も說いて居らぬ、玆に於て乎支那は出兵當初卽ち昨年四月二十一日北京政府羅外交總長から「出兵の理由に對し支那國政府は主權の關する所なれば承認し難し」と抗議し、同日國民政府から「獨り公法條約を蹂躙するのみならず其結果意外の事變を釀さんが其責任果して誰に歸す可きぞ」と抗議してゐる、卽ち在留民保護の出兵を正當とする日本は此根據に立つて其後の活動をも正當とするが、出兵を不當とする支那は出兵より出ずるすべての日本の行動を不當とせんとするものだと言ふことを忘れてはならぬのである。

次ぎに福田司令官は五月七日午後四時國民軍に向つて事件關係南軍最高幹部の處罰、其他の條件と共に支那軍隊の濟南及膠濟鐵道沿線兩側二十支里以外への撤退を要求し、十二時間を回答期限とし、右期間內に滿足な回答が無いと、濟南城攻擊を開始したのである、之は當時數萬の支軍に包圍せられて居た少數の日本軍として必要止むを得ぬ措置であつたらうが、二日前「商埠地を退けば城內は支兵あるも善し」と協定した積りで安心し

其後濟南を去つてゐた蔣介石としては、短時間期限附の要求に至深の不滿を感じたことも、容易に了解せらるゝところである。
　何分與へられた紙面に制限があるので詳述は出來ぬが所謂理義に於ても、支那側又た或程度の主張を持ち、それが濟南問題協定を累する少くなかつたことを忘却してはならぬのである。

五

　已に上述のやうな事情があり、又餘り解決を遲らしてならぬ日支間の政情も加はつて、所謂濟南事件は最初支那側の不法な掠奪に始まつたにも拘らず、我要求は失敗し、一種の妥協に落着を見たのである。
　誰か之を顧みて、山東出兵の徹頭徹尾愚劣極るものだつたのに今更ながら驚かぬものがあらう、蓋し第一、政府は現地保護と言つて出兵した、がそれは商埠地內の狹き二箇所に居留民を呼び集めて保護したものであつた、多くの居留民は五町、十町と自己の住家財產をすてゝ來た、五町離るゝも、五十里、百里離れて青島其他に引揚るも、財產を危險に委するのは同一であつて、之では最初から眞の現地保護では無かつたのである、第二、出兵は痛く支那人心に惡影響を生じ、紛爭の一因をなしたことも疑ひが無い。殊に濟南城破壞、支人三千人死亡を含む慘事は、是非善惡の判斷を別とするも、濟南人に惡記憶を留め、よしや平和となつても此處、數年間邦人の安住なく、市面の秩序の維持も困難となり終つたでは無いか、第三、此問題は一般日支交涉の障碍となり、すべてのことに列强に先鞭をつけられたばかりで無く、我貿易を排日ボイコットに惱ましめたのは世の知る通りである、然かも是れ實に我國が忠良の軍兵を一年の長き風餐惡しき異鄕に苦しめ且つ五千萬圓（否なそれ以上）の國費を消費して得た結果では無いか。
　後ちの歷史家は必らず日本が昭和三年、四年好教訓を得たことを記するであらう、然かもそれは高き代價を拂つたものなることを記するであらう。
　だが過去を說くは死兒を數ゆる類だ、予は此際眼を將來に向け、今回の解決を一轉機として日支關係の革新が行はれんことを希望せねばならぬ。
　思ふに山東問題が定まつた上は、南京事件、漢口事件等は容易に纏るに違ひ無い、之は支那側の暴行を支那側が陳謝乃至賠償せねばならぬのであるが、米支間の同じ南京事件は一年以前に（昨年三月三十日）協定成り、英支間は八箇月以前（昨年八月十二日）解決し、伊佛と支那間は半年前（十月八日及十月十六日）協定を終へて居るから、日本のみ面倒があらう筈がない、敏捷よりも粘着力を特質とする芳澤公使が交涉役であつても、殊更らに之を遲らかす理由はあるまい、故に今後の問題は專ら日支

條約改正問題にあらねばならぬ、同問題は大正十五年十月に明治二十九年日支通商航海條約の三回目の十年期限滿了から北京政府と我國との交渉となつたが、段政府沒落、政局不安定と彼我主張の差異との爲め進捗せず、北京政權を認めぬ國民政府は無論之に關係が無く、其交渉をも認めて居無かつた、而して昨年六月國民政府の北京占領成功し、とも角も國内統一すると、昨年七月十九日王外交部長は日支條約の一方的廢棄を聲明して、痛く日支關係を惡化し、その内幾分双方の了解がついたが、猶ほ濟南事件未解決はすべての交渉の癌となつてゐたのである、誰か今回の解決が右交渉發展の門戸を開いたことを否認しやう。

支那の條約改正と言ふと、關稅丈けは昨年七月二十五日、米支條約が手始めにベルギー、ドイツ、ノルウエイ、イタリー、イギリス、フランス、スペイン、スウエデン、オランダ、ポルトガルと協定し、本年に入り日本とも協定が出來てゐる、だが治外法權（領事裁判權）撤廢、租界回收、內地河川通航權廢止等諸種の問題は今から我等の面前に立つて我等の解決を求めねばならぬ項目に屬する、中に簡單に取扱ひ難きものもあつて、そこに多少の難關伏在若くは公在せざるを得無い、然かも大體から言ふと、（過去に安政年間の諸不平等條約に反對し千辛萬苦、明治年間に之を撤廢し得た日本、東洋民族の先覺たる日本は、彼等の當然の抱負を支持する道德的義務を感ぜねばならない、次ぎに支那の統一と平和を理想する國民政府も又た東洋の平和と日支共存共榮を念とする我民族の贊助を値ゐするものであらねばならない。

ところが今日の處此點で英米等こそ却つて我以上に支那の味方たる如き奇觀を呈してゐる、米國は一昨年一月及び昨年七月ケロッグ氏聲明其他に於て親支策を表示したが最近支那通フーヴァ氏を大統領として新活動を期してゐる、イギリスは一昨年一月二十七日外相チエンバレーン氏が支那治外法權等につきての新宣言をなし、昨年十二月二十日ランプソン公使をして信認狀を南京政府に捧呈せしめて殊更らに國民政府支持を示してゐる、のみならず兩國側は盛んに顧問供給に依り支那新政に參加してゐる、唯だ米國側はケムメラー（プリンストン大學教授）ヤング（國務省官吏）ロックハート（コーネル大學教授）ボンビル（商務省官吏）以下多數の專門家を供給し、支那が之に拂はねばならぬ年俸八十萬圓と傳へらるゝに反し、イギリス側は印度等東洋に經驗深きサー・フレデリック・ホワイト氏（英下院議員たりし人）を無給にて派して一の對照をなしてゐるのを見る、だが日本のみは新支那建設援助に於て仲間外れとなつてゐる、しかし過去をして過去を葬らしめよ、かくして輝ける未來をして來らしめよ、而してかうすることが濟南問題一掃を機として始めらるゝならば、我等は寧ろ深く今回の解決を歡迎す可きだと思ふのである。

水野直論

馬場恒吾

貴族院の怪物と云へば、誰れでも直ちに子爵水野直氏の事と察しる。それほど彼れは恐れられ、疑はれ、憎まれ、怪まれ、嘲られ、責められ、毀譽褒貶、千種萬別の批評を受けてゐる。貴族院が動けば水野が動くと云はれ、貴族院が動かねば、水野が引き止めるからだと云はれる。それが事實である事もあり、事實を外れてゐる事もある。然し何れにしても水野は貴族院の伏魔殿の中の、魔王の如き地位に据へられてゐる。

目下の政情に於てこそ、貴族院は世間に好感を以て見られてゐる。衆議院が所謂不自然の多數を以て政府を支持し貴族院が反政府的態度を取るとき、世間は貴族院の行動を喝采する。政府と政友會ではそれを貴族院の横暴だ、特權階級の增長だと云つて攻撃する。そして貴族院を增長せしめる世間が怪しからぬ。宜ろしく貴族院を改革膺懲すべしと云ふ。平生ならば輿論はかうした議論を喜ぶのであるが、今日は誰れもそれに共鳴せぬ。稀れにそれに共鳴するものは政府筋の息の懸つたものだと見られる。それは世人は本質的には貴族院に贊成しないが、しかし今日政府が衆議院議員を誘惑懐柔して、不自然の多數を製造してゐる場合には、國民は自衞的の應急手當として貴族院の奮闘を喜ばざるを得ない。恰かも世間は平生は警察を攻撃する、併し強盜が横行するときは、警察に頼みに行くと同じ心持ちである。それが警察を威張らしめる結果になる事は事實であるが、此場合に警察を攻撃して、強盜を威張らすよりはましである。

此議會に於て、貴族院は政府の重要法案を殆んど全部握り潰した。其重もなるものは、地租營業收益稅の地方への委讓案、普通選擧法を改惡する小選擧區制案、山本農相の命懸けの自作農と肥料管理の法案、勝田文相の宗教法案、握り潰しと同じ結

果の不成立になつたボロ鐵道買收法案、これ丈けでも關係大臣は各々別々に辭職する價値はあるのだ。何となれば、それは皆彼れ等が入閣以來、それを自分等の存在の理由としてゐた政策であるからだ。其存在の理由を握り潰しにされたる今日では、彼等は大臣としての存在の理由を有たぬ。そして尚大臣として存在してゐるのは無意義の存在になる。只其職に居るのみの存在になる。普通の人間ならば居た堪らない立場に居る。それを平氣で居る所に、彼等の何とも云ひやうのない心持ちがある。

尤も辭職すべき筆頭は田中總理大臣である。彼れは貴族院から優諚問題に關して問責案を突き付けられた。彼れは輕率不謹愼の甚だしき者、總理大臣としての職責に缺くる所ありと決議されてゐる。それでも彼れは辭職すべき理由がないものと思つてゐるらしい。彼れは矢張内閣に頑張つてゐる。だから外の大臣の辭職せざるのも無理はない。

内閣は辭職しない。併し條理の上では辭職しなければならぬ空氣が作られた。此空氣を作つたものは水野直子だと云はれてゐる。それは水野子が積極的に活動してさうした形勢を作つたのではなく、寧ろ活動しなかつた爲めにさうなつたと云ふ方が適當であらう。彼が働いて政界の風雲を捲き起す事があると同じく、彼れが働かない爲めにも亦政界の風雲が捲起される。彼れが貴族院に於ける中心人物として注目されるも其爲めである、

彼れは如何なる人物であるか。永年彼れと懇意にしてゐる者も、水野子の正體は摑み得られないと云ふ。彼れの人物の正體が摑へられぬのみならず、彼れの肉體の居所を突き止める事も困難である。今でこそ彼れは病身で餘り活動しないが、彼れが活動するときには何日何處に居るか神出鬼沒、殆んど端倪すべからず、朝六時に電話を掛けても外出、夜十二時に電話を掛けても外出、それが必ずしも居留守を遣うのでなく、一日廿四時間何處を何う歩いてゐるか、殆んど自分の家に居た事はない。だから政變時分になると新聞記者の自動車が幾臺となく彼れの自動車を追つて行く。すると彼れは往來の眞中に自動車を止めて、私はこれから家に歸つて寢るのですから、用事は此所でお話ししませう。何んでも質問し給へと來る。かうして新聞記者を擊退した後は、彼れは風の如く消へるのである。

最近の政情に於て、貴族院が何の故に反政府的態度を採つたかと云へば、貴族院の主力團體たる研究會が政府を援助する爲めの統制が付かなかつた結果である。元は、研究會は小笠原長幹伯、青木信光子、水野直子の三角同盟で、一糸亂れざる統制を示してゐた。然るに一般社會に於ても然るが如く、研究會内部に於ても、下剋上の空氣が漂ひ、壓迫される階級が壓迫する

階級を劃する研究會部内の不平分子が幹部專制に反對して、部内革新運動を起した。此運動の勢力如何は見る人に依つて其評價を異にするが、單に表面の事實丈けを見ても、研究會幹部の統制力は昔のやうにない事丈けは確かだ。

革新運動は幹部專制に對する反對の空氣を作つた。然し此空氣丈けで幹部專制が崩壞するや否やは疑問である。一般社會に於ける既成政黨反對の空氣が作られても、既成政黨は直ちに崩壞しない。それが崩壞する前には既成政黨内部の分解作用が起る。研究會幹部の統制力が失はれる前に、其幹部の中心であつた所の小笠原、青木、水野の三角同盟に龜裂が生じた。

其龜裂の歷史は二年前に田中政友會内閣が成立の當時から已に萠してゐた。田中内閣が成立するとき、小笠原伯は自分が研究會を代表して内閣に入るべきものだと信じてゐたに關らず、青木、水野は馬場鍈一氏を入閣せしむべきものだと推薦した。そして田中首相は馬場鍈一氏を採る方に決心したのであるが、それは政友會内部の反對に遭つて沙汰止みになつた。その時の事は私は前に小泉策太郎論の中に書いた。

所ろでそれが後の祟りになつた。政友會内閣で見れば、馬場を入閣せしむる約束して、それを反古にした。即ち研究會に對して借金をしてゐる形である。青木子は小泉策太郎氏に向つて馬場を勸業銀行總裁に推薦したのである。小泉は其場でそれを請合つて引受けたのである。後に小泉は田中首相に向つて、研究會に向つては返濟すべき借金があるのだから、馬場を勸銀總裁にする事を引き受けたと云つた。これは田中と小泉がまだ物別れにならぬ前の事であるから、田中は一も二もなく小泉の云ふ事を聞いた。馬場は勸銀總裁になつてゐる。

其頃小泉は自分の家で月見の宴を開いた。田中首相、小笠原、青木、水野、それにまだ勸銀總裁にならぬ馬場と云ふ顏振れであつた。然るに此會合を水野の方では妙な風に解釋してゐる。これは馬場を勸銀總裁として田中に推薦する會だ。その事は小泉と青木二人の間の[illegible]るに止まつてゐるに關らず、かうして小笠原も水野も顏を揃へて居て見れば、恰も三人が共同して推薦してゐるかの如く見へる。水野は後に『酷い目に會ひました』と滂してゐる。さうしてそれが青木と水野の感情が冷却した原因として傳へられる。

併し眞實に水野がそれを怒つたか、否乎。或は青木、水野が仲が惡るくなつたか否乎。そんな事すら眞相がどうであるか判つたものでない。政治家の離合集散は朝に夕の事は計られない。昨日の敵は今日の味方、今日の味方は明日の敵なるのみならず仲が惡いと宣傳してゐる時こそ最も仲がよい時であり、仲が良

ささうに見へて、却つて心に刄を磨いてゐる事がある。陰性の貴族院政治家には殊にそれが多い。例へば議會開會中に貴族院の空氣が恐くなつたとき、田中首相は深夜青木信光子の邸を訪ねた。宜ろしく賴むと云ふ事である。水野子は宜ろしく賴むと言つて、何を宜ろしく賴むのか。政府は一體何處へ行かうとしてゐるのだ。何を爲さんとしてゐるのだ。政治の根本方針を示さずして只宜ろしく賴むと云つても、賴まれやうがないではない乎と云ふ。さうして見ると田中、青木會見の席上には水野も居たのであらう。

小笠原伯と青木子の反目は表面の問題になつてゐた。昨年暮れの研究會役員選擧の時、極度の抗爭を行つた末に、溫厚篤實の長者である牧野忠篤子の仲裁で漸く小康を得てゐる形である。所ろで何故二人は仲が惡い乎。仲が善かつた時に、青木、水野兩子は小笠原伯の邸内の土地を安く分讓して貰つた。水野は遠謀遠慮で其所に家を建てない。青木は家を建てた。青木は研究會の頭目であるが故に、其家に天下の政客が雲の如く聚まる。伯爵であり、邸の殿樣である所の小笠原伯の方が却つて閑却せられる。かうした事も、格式を重んずる華族社會では問題になる。そして感情疎隔の原因になる。

第五十六議會の會期も僅かに三日しかないと云ふ頃に到つても田中首相は貴族院の形勢に關しては極度の樂觀をしてゐた。兩税委讓と肥料管理は少しく問題があるが、小選擧區制案も、自作農も、鐵道買收も皆んな大丈夫通過すると確信してゐた。まるで世間の空氣を無視した樂觀說で手が付けられない形ちであつた。後に此等の法案が枕を列べて討死した後で、誰れが一體田中首相を欺したかと云ふ事が疑問とせられた。

此間の機微に精通してゐるものの云ふ所に依れば、政府と研究會の間には大動脈が通つてゐる。其脈は馬場勸銀總裁、森恪、鳩山一郎、宮田光雄、小笠原伯と云ふ道筋を辿つた。然るに其脈が小笠原伯の處で閉塞して、血液が研究會に廻らない。從つて研究會が麻痺して働かない。それを政界の心臟部では矢張研究會が期待通りに働くであらうと思つた。其所に田中首相の樂觀と失望が生れたのだと。

それも畢竟するに小笠原、青木、水野の三角同盟がシックり行かぬ所に原因する。殊に其中の水野が病氣の爲めか、不平の爲めか、元とのやうに働かない事に原因する。それは只對個人の感情と云ふよりは寧ろ日本の政治機構に於ける研究會の地位、或は今一層達觀すれば貴族院の地位と云ふ所の、根本問題に根ざしてゐる。同時に政府と貴族院との關係、それが原内閣の時と、田中内閣の時とを比較して、甚だしき變化を來たして

ゐる所に原因してゐる。

水野が貴族院操縦掛りとして、時の政府に重用されたのは原内閣の時であつた。水野は神經衰弱で二年許りも鎌倉に引込んでゐた。然るに原内閣は大正十年春の議會に於て、貴族院から少なからず油を絞られた。議論の焦點は中橋文相の二枚舌問題であつた。文相は前年藏前高等工業學校を初めとして五校を大學に昇格するやうな言質を與へた。それが教育調査會に反對された爲め、政府は十年度豫算に計上せず、此問題を默殺せんとした。それが文相の食言として攻撃され、貴族院は文相彈劾案を出すに到つた。

形勢がかう惡化する事を察して、首相の原敬は鎌倉に引籠中の水野を招いて、貴族院の反對を緩和するやうに依賴した。さうなると水野は恐るべき活動力を發揮した。彼れは風の如く來り、風の如く去るのである、が晝と夜の見界もなく、研究會の議員を訪ねてゐる。誰れに批評さしても、水野ほど人情の機微を捉へるに妙を得た男はなく、そして其人に依つて、其人に向くやうに話しを持ち込む。名譽を求めるものには名譽を與へ、衣食に窮せるものには衣食を與へる。同僚の家庭の結婚の世話は勿論、女中の世話、臺所の世話迄する。

或人が水野を評して、水野は東京市政を牛耳つた森久保作藏に似た男だ。決して議論で人を壓し付けやうとはしない。水野が誰れかを世話して呉れと云つて賴みに來る。あの男は馬鹿だから駄目だと跳ね付けると、さうですな、あの男は馬鹿だと云つて引き下る。二三日すると、又やつて來てあの男は何うでせうと云ふ。跳ね付けるとさうですなと云つて引下る。二三日すると、又同じ事を云つて來る。さうして十度も二十度も來られると終には此方が陷落するのだと。

此精力と根氣で水野は貴族院議員の間を說廻つた。文相彈劾案が貴族院に上程されたとき、其彈劾案は三十八票の多數で否決せられた。此票數で政府が勝つであらう事は前から水野に依つて、原敬に通してあつたのである。

併し一時は原も心配してゐたものだ。此彈劾案が上程せられる前日の事である。當時の內務大臣であつた床次竹二郎氏の一秘書官が議院內の大臣室に呼ばれた、行つて見ると原と床次二人切りで緊張した顏をしてゐる。床次は秘書官に向つて、

『君、これから大塚（水野の住所は大塚窪町にある）に行つて、先日のお話しはあの通りと承知致して居て差支ありませんか、それ丈けでよい。其返事を聞いて來て呉れ給へ』

秘書官はこれは水野の事と心得て、

『承知しました』

と答へて、其室を出やうとした。すると今迄一言も云はなかつた原が、

『君一寸待ち給へ、若し大塚の主人が留守だつたら、君はどうする積りだ』

『さあ、どうしたものでせう』

『馬鹿ッ。豫めそれを聞かずして出掛ける奴があるものか。留守ですか、へえ、さうですかと云つて歸つて來る積りだらう』

と叱つた後で、原は、水野は自宅に居なければ、其隱れ家は此所と此所と此所と、一々其の所を敎へた。そしてたとへ徹夜しても必ず水野に會つて、內務大臣に報告せよと命じた。其結果が三十八票であつた。

其前に、政友會の幹部連中は衆議院議長官舍に集つて中橋文相問題を相談してゐた。彼等の意見は此際中橋文相を犧牲にして原內閣を助けると云ふ事であつた。それを原首相に進言する爲めに、最初に岡崎邦輔老が行つた。岡崎は歸つて來て、

『とても僕ではいかん。誰れか代つて行くがよい』

と云ふのであつた。小川平吉が行き、奧繁三郎が行つたが、皆んな撃退されて歸つて來た。

其時の話しを原の側から聞くに、初め岡崎が來て縷々中橋文相を罷めさせねばならぬと進言したとき、原は、

『君はどうして貴族院が中橋に反對だと云ふ事を知つてゐるのか』

『それは貴族院の空氣なり輿論の大勢を見ても判る』

『それは飛んでもない事だ。勝敗は空氣で決まるのでなく、投票で決まるのだ。君は貴族院の投票が何票政府に付くか、それが判つてゐるか。判る筈はあるまい。折角其投票を動かしつゝあるのは、吾々政府當局者なんだ。さうして政府には何票勝つとチャント成算が付いてゐるのだ、空氣やなんかで騷がれては困る。殊に、貴族院を緩和する爲めに中橋を罷めさすなどは以ての外だ。今中橋を罷めさすと、次ぎには山本(達雄)が氣に喰はぬから罷めさせよと云ふであらう、其次には高橋(是清)がいけないと云ふであらう。此際一度屈すれば、又伸びる時はない。此問題で外の人に會ふ必要はない、君からよく云つて吳れ給へ』

と云つたのである。併し岡崎は總理から直接云つて吳れと云ふのであるから、次ぎ〱に一々面會したのである。

かう強く云ひ切つたものゝ、原は貴族院の形勢を心配してゐた。其結果が床次の祕書官をして、今一度水野の報告を確めさしたのである。

かうした事のあつた後は、研究會は全く原の藥籠中のもので

あつた。其所には原の巧妙さもあつた。原は始終研究會の巨頭を築地の花谷に招いて會食してゐた。其席上で原は内閣の行ふ凡べての政策を打ち開けて話した。これはまだ閣議に掛けず、だから黨の幹部は勿論、閣僚さへも知らぬ事であると云つて政治上の機密を打ち開けた。是に於て、研究會巨頭は内閣以上に政治の樞機に參加する。天下の政治を行ふは原と自分等であると云ふ所の自己滿足を覺へる。それが即ち政府援助となつた。

内心でこそ原は貴族院を輕蔑し、若しくは嫌惡してゐたかもしれぬ、併し表面は貴族院に對して丁寧親切を極めた。それは日本の政治組織に於ては、貴族院は衆議院と同等若しくはそれ以上の實際の權力を有つてゐる。其制度を變へる事が望ましき事であるにしても、とても急の間には合はぬ。それ故に實際問題としては、貴族院を懐柔するにあらざれば政治の運用は出來ぬ。そして原は正當なる手段と正當ならざる手段、汎べての手段を盡くして其目的を達したのである。

原の時代に於て、研究會を支配する政治思想は最早貴族院の傳統的な是々非々主義ではなかつた。表面は是々非々主義を唱へても、政府當局者と研究會幹部との諒解する所では、貴族院は衆議院と同じく二大政黨で縦斷する。そして研究會は政友會と連契して國家の政治を行ふ立場を採るのであつた。それ故にこそ、大正十二年の暮れに、山本權兵衛内閣が潰れたとき、研究會幹部は政友會との連契を基礎として、清浦内閣を組織せんとした。それが政友會の拒絶に依つて實現されず貴族院内閣と云ふ變態内閣になつたのである。

研究會幹部としては原内閣當時の政治の樞機に參與した夢が忘れられず、其夢を滿足せしめられゝば、何日にても政府と結ぶ事を否まない。それが偶然に加藤高明伯の憲政會單獨内閣の時に實現した。加藤伯は人の知る如く正直一遍の人であるが故に、水野子や當時また研究會に居た近衛公などを招いて、眞底の打開け話をした。さうして腹を割つて話されると水野は否と云へない男である。だから彼は加藤内閣の時の陸軍政務次官になつて、研究會を率いて政府の政策を援助した。それは研究會表面の是々非々主義には反するやうであるが、内實の貴衆兩院を二大政黨で縦斷すると云ふ根本方針には反しないのであつた。

是れで、今日水野子が、田中首相に對する態度が諒解されるであらう。田中首相が宜しく賴むと云つても、何を宜ろしく賴むのだか判らない。政治の根本方針を打ち開けずに、宜ろしく賴むと云はれても、何う働いてよいか判らぬと云ふ。原の遣り方は物凄いほど水際立つて、五分も隙きがなかつた。田中はさう云ふ風でない。加藤は正直で自分の腹の底を見せた　田中は

さうでもない。田中は全部隙きがあつて、それで腹の中に内所事があるやうに思はれる。水野が怠業氣分になり、從つて研究會員が個々別々に動き、さうして政府に致命的な傷を負はすのは、かうした機微な人情の動きの結果である。只茲に付加へて置き度い事は、然らば田中首相が今から原、加藤の眞似をして凡べての政策を相談したならば、水野が果して政府を助けるであらうかと云ふ事である。所ろでそれは保證の限りにあらずだ。かう斷はつて置くのは田中首相に向つて見當違ひの獻策をするものがあるかもしれないからだ。

水野直子の性格は彼れの祖父である所の紀州新宮の城主水野土佐守（忠央）のそれを受け繼いでゐると云はれる。土佐守は一筋縄で行かれる人物でなかつた。彼れは紀州公に對する徳川將軍家からの附け家老であつた。紀州公が第十四代將軍家茂として江戸城に乘込む以前から、土佐守は千代田の大奥に勢力を植ゑて居り、其勢力を以て井伊直弼を大老として起用せしめた。所謂井伊の行つた開國の大方針、安政の政變は其實は皆土佐守のやつた仕事だと見られてゐる。

土佐守は紀州新宮に居る時からして、已に西洋文明の吸收に興味を有つてゐた。日本で外國から蒸汽船を購入したのは彼れが元祖であり、西洋流の兵隊調練（例のドガジヤン・ドガジヤンと云ふ調子のもの）を採用したのも彼れが元祖であつた。新宮にガラス製造場を作つた事も幕末の仕事としては破天荒であつた。又土佐守は三樂燒きと云ふ陶器製造所を作つて、海外一の輸出を企てた。後に彼れは井伊大老の黑幕として餘りに劃策した事が世間に注目されるに到り、井伊の死後彼れは隱居謹愼を命ぜられた。かうして歴史上の人物として井伊大老の名が殘つてゐる。併し事實は水野土佐守が井伊大老を使つて開國方針を實行せしめたのである。

水野直子の頭には反逆性の隆起がある。平地に波瀾を起すのは彼れの先天的の性質で已むを得ざるものだと、かう斷定を下すものがある。そのやうな事は容易に信ずる事が出來ないが、併し彼れの遣り方には土佐守の魂が入つてゐる。直子は研究會を牛耳つた所の堀田正養子、三島彌太郎子、青木信光子と次ぎ〳〵に手を握つた。或は水野を使つた此等の人が研究會を牛耳る事が出來たとも云へる。然るに水野自身は何日でも表面には立たず、日陰を縫ふて歩るく。そして、實際は研究會を動かしたゞ水野が歩るかなくなると研究會は動かなくなる。

然らば彼れは何の政治上の理想があつて動くの乎。彼れは云ふ、

『私には政策の問題は判りません。政策は何う云ふのがよいのか、それは皆様に決めて貰つて、私は只使ひ歩るきをする許りです』

と慇懃と謙遜そのもの、化身であるかの如き返事をする。彼れの少年時代の學友は水野直樣は談論風發の青年であつたと云ふが、今はすべての議論を胸に藏つて、只情實因緣のみに沒頭してゐるかの如く行動する。

彼れの心の奥を察したらしく見へる或人は云ふ。水野の政治上の目的は華族制度の維持と云ふ事にある。だから同族の世話をよくするのだと、眞個にそんな下らない事を政治の理想としてゐるとは信じられぬ。それならば目的は何かと云へば、畢竟するに彼れは目的と云ふ程の何物をも有つてはゐない。只政治上の闘爭そのものが面白くて闘爭するのだ。闘爭の成果を求めるのでなく、闘爭の過程が面白くて堪らぬのだ。彼れの守り本尊は闘爭の神であらう。

彼れの強味に二つの原因がある。一つは彼れはそれほど働いて、自分には報酬を求めない事である。一つは如何なる厭やな責任をも辭さない事である。水野は金を欲せず、地位を欲せず、名譽を欲せず、それは誰れでも知つてゐる。彼れは貧弱な家に住み、何年も同じ著物を着て居り、酒も飲まない。料理屋や待合に行つてもしるこを註文し、コップで生水を飲む。彼れには政治の談以外には何の話しもない。外の連中が藝妓を相手に笑ひ興ずる時には彼れは默つて居るばかりだ。そして政治に狂奔するときは、三日も四日も徹夜で奔走する。何日でも自分が有つ凡べての物を投げ出しての博奕を打つ。それ故に大抵の人は降參して了う。

かうした事丈けでも、彼れは不可解の人物とされる。其上に彼れには迷信的な所がある。日獨戰爭中、彼れは池袋の神樣を信仰した。其神樣は岸本加賀美と云ふ問題を起した人である。尤も神樣の正體は井戸の中にあると云ふので誰れも見た事はない。

此神樣のお告げなるものを水野は信じた。其告げには獨逸の飛行機が東京に飛んで來て、帝都を爆破するが故に、帝都を信州戸隱山に移せと云ふのである。水野は眞面目に之を信じ、宮内大臣であつた波多野敬直男を神樣の處へ連れて、所謂お告げなるものを聞かしめた。波多野はそれを聞いたが、何を云つてゐるか、要領を得ないと云つて、問題にしなかつた。併し水野は大眞面目であつた。尤も戸隱山付近は氣流が最も險惡で飛行機には近寄れない事丈けは事實だと云ふ。

同じ池袋の神樣のお告げで、舊藩時代に水野家の領土であつ

た所の、結城々下の或地點を掘れば、二十五億の金が埋めてあると信じた。神様のお告げに依る地點は或運送店の倉の下になつてゐる。其所に大きな石の蓋があつて其下に金がある筈であつた。水野はそれを信じて、大がゝりに人夫を連れて、地下何十尺かを掘らしめた。だが石の蓋は勿論、小判一つも出なかつた。其頃から水野は氣違ひだと噂された。

水野は魚の漁が好きだ。投網は素人離れがしてゐる。其頃漁に行きますかと聞くと、

『漁にも行き度いのですが、私が行くと種々の悪靈が隨いて來ますので』

と云ふ。これは神經衰弱の甚だしくなる兆候である。彼れの友人達は心配して、無理に彼れを鎌倉に隱退せしめたのである。

彼れは報酬を求めず、如何なる責任をも辭せず、只闘爭の興味を遂つて、迷信的の熱狂を以て活動する。貴族院に置いておけばこそ、陰性政治家として、種々に批評される。若し彼れが無産政黨の陣營にでも居らうものならば、彼れはどんな働きをなしたかも判らない男である。

無産黨から見た第五十六議會

安部磯雄

水棲動物が突然陸上に跳ね上げられた時の樣に無産黨議員が有産階級を代表する議場に出た當分は何となく勝手が違ふような氣がしたのみでなく、實際に於て眞劍な太刀打は出來なかつたのである。無産黨の代議士は屢演壇に立つて其意見を述べる機會を得たけれども、他黨との立場が餘りに異なつて居るのであるから、彼等の揮ふ劍は虚空を切るのみで何等手答へがなかつたのではないかと思はれる。此狀態は既成政黨が一團となつて無産黨と正面衝突をなす時まで繼續されるに相違ない。

然し私共は既成政黨がどんな考へで議場に臨み、どんな態度で國事を論じて居るかは充分に看取することが出來た。政友會と民政黨とは政策を基礎として爭ふのだと言ふて居るけれども、私共の立場から見れば其は單に蝸牛角上の爭に過ぎない。第五十六議會に於ける重要問題は言ふまでもなく兩税委讓案と區制案とであつた。殊に兩税委讓案の如きは政友會の一枚看板と稱せられ、これが貴族院に於て握り潰されることは政友會内閣に致命傷を與へるものだと考へられた。これは單に民政黨の主張であつたのみでなく、新聞紙の論調も概してこれに贊同したようである。議會に於て無産黨は勿論兩税移讓案に反對したけれども、彼等は決してこれを現内閣の運命を決する程の問題とは考へて居なかつた。兩税委讓案に就ては贊否の兩論共可なり傾聽すべき點があるのだから、何れに決せられても國家全體に大なる影響を與へるものではない。金額から見ても單に一億二千萬圓といふ問題である。これを國庫の收入としても、或はこれを地方に委讓するとしても、國家全體から見れば大した問題ではないように思はれる。私共は決して斯る問題を愼重審議することに異論を唱へるものではないけれども、これが五十六議會に於ける最大重要問題として取扱はれたことには多少の失望を禁じ得なかつたのである。

區制案に對しては兩稅委讓案以上に無產黨の注意を惹いた。私共は此案が無產黨の進出を沮止するといふような實際的方面からでなく、寧ろ純理の立場から兩稅委讓に對する以上に反對の態度を表明した。小選舉區其ものには幾多の利益があるけれども、買收や壓迫の行はれ易き現在に於てこれを實行することは必ず政治を腐敗せしむることになる。これがため無產黨は極力これを沮止することに努めた。然し私共は決して斯る問題に沒頭することを滿足に思ふものではなかつた。何となれば私共は今一層無產大衆の生活問題に觸れた論議を議場内に於て聽きたかつたからである。

對支外交の失敗から日支貿易の不振となり、其反映として我國内は極度の不景氣に陷つて居る。其結果筋肉勞働者は失業に苦しみ、頭腦勞働者は就職難に陷つて居る。然も政府はこれに對して何等の手段を取らず、在野黨も亦何等の對策を公にして居ない。これでは何のための政治ぞと言ひたくなる。國民が政治家に要望する所のものは一日も速に彼等を失業の不安から救ふことである。これが兩稅委讓案や區制案よりも更に重要問題であることは言ふまでもない。然も現在の政治家が此重大なる問題を冷視して、委讓案や區制案で蝸牛角上の爭をなして居るのには相當の理由がなくてはならぬ。既成政黨員の中には無產黨の代議士のみが無產大衆を代表して居るのではなく、我等も亦或程度まで彼等を代表して居るのであると公言して居る者もある。然し無產大衆を代表するといふことは單に社會政策によりて民衆の苦痛を緩和するといふが如きことを言ふのではない、民衆の代表者は民衆の生活を安定せしむるといふことを目標として進まなければならぬ。而して其第一步は失業問題の根本的解決に在る。私は民衆の代表者と稱する人に失業問題に關し如何なる對策を有するか否かを質問して見たい。その答辯によりて其人が眞の民衆代表者であるや否やを知ることが出來ると信ずる。

以上述べた如く五十六議會の重要案と見られた問題でさへ無產政黨に取りては血を湧かす程のものでなかつた。更に一方に於てはあらずもがなと思はれるような法案が出た。例へば米穀法、絲價安定法、國際汽船會社扶助法の如きである。米價の下落を防止する爲に政府が隨時米の買上をなすことは大分以前から行はれて居るが、政府は今日まで一億數千萬圓の損失を招いて居る。結局此米穀法は一般消費者及び賣米を有たぬ小農を犧牲にして中農大農を保護することになつて居る。絲價安定法の如きも單に生絲商人を保護することになつて、養蠶家には何等の利益を與へない。殊に國際汽船會社扶助案は會社の窮狀を救ふ

ために政府自ら作主たらんとする案である。此の如く政府は無力者を犠牲にしても有力者を助けんとして居る。此法案中にはまだ兩院を通過して居ないものもあるが、兎に角此種の法案が比較的容易に通過することは私共の不快に堪へない所である。

議會に於ける議員の不謹愼は今に始まつたことではないが、五十六議會の騒擾は前例がない程であるとさへ言はれて居る。區制案を沮止するために民政黨が議事の進行を妨害したことは多少の同情に値するものがあるとしても、議會の秩序といふ點から見て容易に寛恕すべきことではない。然し政友會が自己の力を恃みて遮二無二區制案を通過せしめんとしたことは大人氣なき行爲である。多數黨が少數黨と相爭ふ場合には多數黨は常に雅量を示すといふ餘裕を有たなければならぬ。若し政友會が區制案に對して充分民政黨に言論の自由を與へたならば彼の如き騒擾は多分起らずして濟んだであらう。若し民政黨が故意に討論を引延ばす策戰に出たならば、政友會は時機を見て討論終結の動機を出すことも出來る。これがため民政黨が彼の如き騒擾を惹起することになれば輿論は決してこれを辯護しないであらう。要するに議會の不秩序は政友會と民政黨との責任であつて明白に既成政黨の不統一を暴露するものである。

議場は天下に向つて言論自由の模範を示すべきであるのに、其言論を妨害する點に於て惡彌次をあびせかける點に於て、議場は最も甚しい實例ではないかと思ふ。馬鹿、低能といふが如きは餘りに平凡であつて、國賊、賣國奴、泥棒、胡麻の蠅などいふ野卑なる言語が用ひられることもある。甚しきに至りては元田議長を老耄と呼んだ人さへあつた。斯の如くして議會の品位は益低下するのみである。然しこれは表面に現はれた積極的惡弊であるが、其外に消極的惡習慣が少なくないように思はれる。議場に於ける演説の中には時として全然黨派に關係なきものがある。此場合に於ては惡彌次や其他の妨害はないけれども、これがため議場は必ずしも靜粛でない。何となれば議場の此處彼處に於て盛に私語雜談が行はれるからである。私は可なり熱心に演説を聽かんとしたけれども、此等雜談のために充分聽き取ることが出來ない場合があつた。私は今日まで種々なる會合で演説を試みたけれども、議場の聽衆に向つて話す位氣乘りのしないことはなかつた。

私は平常時間の勵行といふことに注意して居るのであるが、議院内に於ける時間は世間一般と同じく不正確極まるものである。私は單に二つの委員會に列席したのみであるから、全體の委員會に就て言ふことは不當であるかも知れぬが午前十時に會合すべき委員會が十一時に開かれるのが慣例になつて居る樣に

思はれる。本會議でさへ午後一時に開かるべきものが一時三十分でなくては開會が出來ぬことになつて居る。今一つ不愉快なことがある。私共議員は本會議のある度に一回二枚宛の傍聽券を豫め受取るのであるが、此傍聽券こそ不渡手形と同樣極めて不確實なものである。要するに傍聽券は座席數以上に濫發されるのであるから、傍聽券所持者が全部入場せんとすれば其内幾割かの人々は入場を謝絶されることになる。其結果是非入場せんとするものは午前六時乃至七時頃から行列を造つて受付で待たなければならぬ。午後一時の開場に朝早くから待つて居るといふことは文明の今日に於て堪ゆべからざることである。此の如き非文明的のことは僅少なる改善で直に矯正することが出來ると思ふ。

無產黨の代議士は山本君を失ふてから僅に七名となつた。五十六議會の最初に於て私共が考へたことは多分私共には演壇に立つ機會さへ與へられないであらうといふことであつた。然るに五十五議會で無產黨が民政黨と合流した緣故により民政黨は私共に發言の機會を與へるため種々なる便宜を謀つて吳れたのである。其結果私だけは單に一度しか演壇に立たなかつたのであるけれども、他の同僚は少くも三回、多きは四回も演壇に立つこととなつた。私の記憶する所に據れば淺原健三君は議會の劈頭に於て政府に對し質問演說をなし、更に山本君の橫死に關して痛烈なる質問を試みた、河上丈太郎君は地方制度、工場法兩稅移讓に關して演說をなし、更に山本君の橫死に就て、弔詞的演說を試みた。鈴木文治君は勞働運動に關する政府の取締に對して質問をなし、更に工場法と自作農創定法に關する質問をなし、最後に自ら提出した勞働組合法案に就き說明を試みた。西尾末廣君は不信任案、勞働者災害扶助法、健康保險法に關し三四回演壇に立つた。龜井貫一郎君は豫算案返上につき演說し區制案に就きては三時間の大演說を試みた。水谷長三郎君は一身上の辯明を爲すために演壇に立つたのを初めとして治安維持法に關する質問、同じく右論議、及び區制案反對のため合計四度演壇に立つた。私は自ら提出した公娼制度廢止に關する法律案の說明をなしたゞけで、しかも其れは十五分位の演說に過ぎなかつた。山本宣治君が演壇に立つたのは單に一回であつた樣に記憶する。しかも其れは淺原君の演說中山本君に關することにつき自ら證明するためであつた。若し山本君が兇刃に斃れることがなかつたならば少くとも二三回は演壇に立つたであらうと信ずる。

無產政黨は多くの場合民政黨と步調を共にしたけれども、これは單に政友會よりも民政黨の方が比較的無產大衆のために善

政を行ひ得ると信じたがためであつて、決して民政黨の主義主張に賛成したがためではない。昨年四月特別議會の開かれた場合に於ては無産黨の向背が內閣の運命を決するといふ際どい程度にあつたにも拘はらず、無産黨は何等民政黨に對して條件を持出すことはしなかつた。これは無産黨が獨自の立場に於て自由なる行動をなさんがためであつた。實業同志會は政友會が數名の味方を得るためには如何なる犧牲をも拂ふといふ弱點を利用して收益稅の委讓及び其他二三の條件を提出した。其結果最大黨たる政友會は僅に三名の議員を得るために政策の協定を行ふことになつたのである。其後床次氏の態度が煮へ切らないため政友會は依然として少數派を馴致する必要を感じた。新黨俱樂部や明政會や無産黨が反政府側に立つとすれば、憲政一新會がキャスティング、ヴォートを握ることになる。そこで一新會は實業同志會と同じく政友會と政策の妥協をなして政府を援助することになつた。然し新黨俱樂部が結局政友會と握手することが明白となつた今日に於て、實業同志會も憲政一新會も往日の如き位地を保つことは出來ない。「いづれかあきにあはではつべき」といふことは正に現在の小黨派を諷したものとも考へられる。

無産政黨が決して無批判的に民政黨に合流したものでないことは次の如き事實を見ても了解することが出來る。濱口總裁が政府不信認の演說をなした後を承けて松田源治君の賛成演說があつた。其演說が高潮に達し遂に優詔問題に及んだ時田中首相は腕を組み天井を仰ぎながら冷笑したといふのである。民政黨の議員は大聲を發して此不謹愼なる態度を攻擊した。一旦休憩となつた後民政黨では田中首相をして陳謝せしむべしといふ動議を提出することになつたが、無産黨は斯る問題で政府を攻擊するのは堂々たる政治家の爲すべきことでないといふ理由を以てこれに反對した。民政黨からは二名の代表者が來て頻りに私共の決意を飜さんことを要求したけれども私は頑としてこれに應じなかつた。今一の事實は元田議長の不信任案である。これに關しては直接民政黨からの交涉はなかつたけれども、新聞記者の質問に對する私の答辯が翌日の新聞で公にされた。私は例を野球に取りて議長は卽ちアムパヤーである。アムパヤーに對して物言ひをつけることには絕對に反對するといふことを明言した。田中首相の陳謝問題も元田議長不信任問題も結局議場に提出されずに濟んでしまつた。これが無産黨の反對のためであつたかどうかは明白でないけれども、無産黨が事前に民政黨に合流したのでないことは以上の事實を見てもこれを知ることが出來る。

政友會の人であつたか新黨俱樂部の人であつたか私はよく記憶して居ないけれども、民政黨は無產黨と通謀して議場內で大騷擾を惹起したのだと言つた人があつたようだ。これこそ無產黨を誣ゆるものだと言はなければならぬ。區制案に反對するためには民政黨の討論引延はし策に贊成して龜井君の如きは堂々三時間の長演說をやつたけれども、無產黨の議員は一人でもあの騷擾には加はらなかつた。川原議長が騷擾を目擊しながら何時までも休憩を宣しないから、第一控室の代議士はこれを見るに忍びず、尾崎氏と私とを促して議長に注意せしめたのであつた。其際龜井君は私を保護するために議長席近くまで進んだのであつたけれども、これは全く議場の秩序を保たんがためであつた。無產黨の議員は各自の席を離れずあの悔しい光景を傍觀して居たのである。私共は平素から議場の秩序を維持することに努めて居たのであるが、私自身は絕對に彌次を飛ばすことにも反對して居る。

私共は一日も早く議場內に於て失業問題、土地問題、地代及び家賃に關する問題、獨占事業國有問題、軍備縮少問題、人口問題といふが如き國民生活に重大なる關係を有する諸問題の論議されることを切望するのであるけれども、現在の議會は政權爭奪に是れ日も足らないといふ有樣であるから、私共は當分議會の秩序を維持するといふことに努力するの外はない。言論の自由を重んずべき議會に於て彌次を飛ばしたり、計畫的に他黨員の演說を妨害することは如何なる手段を以てしてもこれを禁止しなければならぬ。私は無產黨員の同意を得て此問題のために聊か盡力したいと考へ、政友會及び民政黨の有志者にも相談を開始して居るから、來議會の劈頭に於て解決の曙光を見ることが出來ると信ずる。私の提出した條件は大體次の如きものである。第一は馬鹿、低能、國賊、泥棒といふが如き野卑なる言語を以て反對者を罵る者を嚴重に懲罰すること。第二は團體的に他黨議員の演說を妨害する時は議長は黨全體の責任として其黨員五名を退場せしむること。第三議員の演說が三十分以上に及ぶ時は多少の妨害あるも議長は之を看過することである。議場に於ける演說は普通三十分で充分であるから、長演說を制限するためには多少の妨害を是認することは便利なる方法ではないかと思はれる。兎に角現在の議會は立法府としての威嚴を保持して居ない。惡罵と喧騷とを特色とせる議會は一日も早く反省しなくてはならぬ。然し多年の惡風に染んでゐる既成政黨がこれを一掃することは容易のことでないから、何等過去の習慣に囚はれて居ない無產黨が此方面に於ける運動を開始することは最も適當なる任務ではないかと思ふ。

最後に私は無產黨員としてゞはなく、單に日本國民の一人として考へて見たいことがある。現在の議會は重要なる國策を論議する場所といふよりも寧ろ二大政黨が政權を爭奪する土俵であるかの如く思はれる。政友會も民政黨も各攻守の策戰に沒頭して居る結果、落着いて重要政策を論議するの遑がない。五十六議會に於て政府提出案の內貴衆兩院を通過したものは其數極めて少なく、殊に重要法案の大部分は貴族院に於て停頓して居るといふ情態である。極端に言へば現在の政黨は政權爭奪を第一義として、政策の討議を第二義として居る。これがため鬪爭は益激甚となり、遂には議場に於ける大亂鬪となるのである。普通にカルタの遊戲を爲す者は殊に勝敗に重きを置かないけれども、一たび金錢を賭けることになれば、勢ひ勝敗に熱狂せざるを得なくなる。單に政策の爭ならば、金錢を賭けぬ遊戲と同じゝ比較的冷靜にこれを行ふことが出來るけれども、政權の爭奪には多くの利益と名與が賭けられて居る。政友會と民政黨が血眼となつて議場に爭ふて居るのも要するに賭博者の心理に動かされて居るがためであると言ひ得る。

若しこのまゝに放任して置くならば政黨は益々墮落し、國民は遂に政黨政治に對して疑ひを懷くようになるかも知れぬ。苟くも我政治界の前途を憂ふる者は此大問題に對して何等かの解答を與へることを[illegible]て居ないといふ。私は[illegible]に其大要を述べて見る。

私は大分以前から聯立內閣論を唱へて居るのであるが、其內容は決して獨逸や佛蘭西等に行はれ居るものと同一ではない。私の所謂聯立內閣は議會內に於ける各黨の議員數に比例して各黨から選出した大臣を以て組織するのであつて、大臣の數は現在の大臣の約二倍とする。議會に於ける多數黨（小黨分裂の場合には最大のブロックを造り得る政黨）は總理大臣及び其他の現任大臣を選出し、小數黨は其議員數に應じて無任所大臣を選出する。換言すれば現在の如く多數黨が政治の實務に當り、少數黨は單に無任所大臣を選出して、これを多數黨の大臣と同一資格で內閣に列せしむるのである。今日まで歐洲諸國に於て試みられた聯立內閣の弱點は全內閣員が同一の責任を負ふことであつて其結果內閣の統一を維持することが困難であつたけれども、私が考へて居る聯立內閣の責任は實務に當つて居る多數黨の大臣のみが負ふのであつて、少數黨の無任所大臣はこれに與らない。內閣會議に於ては無任所大臣も多數黨の大臣と同一資格で諸問題を討議するのみでなく、議會に於ては少數派を代表して政府反對の意見を述べることが出來る。要するに內閣の主要部分は總選擧の結果によりて時々變動することも少しも現在の

制度と異なる所はないけれども、內閣全體から見れば常に各黨派が代表されて居るといふ點に特色がある。此の如き聯立內閣が原則として行はれることになれば大要左の如き結果が得られるに相違ない。

(一)　各黨派が多少とも政權に附隨する榮譽と利權との分配に與ることが出來るから、現在の如き醜惡なる政爭を避け得る。

(二)　少數黨の代表者が內閣に列して居るのであるから、充分に多數黨を監視することが出來る。政府黨が利權を漁つたり選擧干涉を行ふことも自然に減ずるようになる。

(三)　大臣の數が二三倍に增加されるため大臣の價値は漸次に下落し、從つて大臣になることを榮譽と思はぬようになる。

然しこれがため政黨政治が活氣を失ふ心配はない。四年每に行はれる總選擧に於て多數の議員を得さへすれば直に內閣の首腦部となつて自ら信ずる所の政策を實行することが出來る。私が我議會に於て經驗した所によれば本會議よりも委員會の方が總ての點に於て優つて居るやうである。これは全く人數といふことが主なる原因になつて居るからだ。若し各黨派の代議士が委員會に於て比較的愼重に諸問題を論議することが出來るならば各派を代表する二三十名の大臣が卓を圍んで國政を論議することは更に一層有效ではないかと思ふ。私は此聯立內閣論に對して廣く有識者の批判を仰ぎたいのである。

愛國心の悲劇
——經濟的に觀た田中外交——

清澤洌

一、算盤にのらぬ愛國心

愛國心といふものは、すべての美と眞をふくむものであらう、われ等の教科書とわれ等の道徳に、恐くさう教へて居るのであるから、これに間違ひはないであらう。が、それは確かに算盤にのらないものではある。

たとへば田中内閣は濟南に在住する二千人の財産——田中首相の所謂重大な利害は約五十七萬圓にすぎないが、これに對して日本が出兵に支出した額は後でも說くやうに精確に三千七百四十萬圓である。かりに日本の國内で、五十七萬圓の財産が何かの理由で危險に瀕したりとするか、日本政府はこれを保護するために三千七百萬圓を支出して出兵する意志があるであらうか。

更に支那における邦人の事業が不振だからといふので、これがため貸出した低利資金、そして恐らくはもう返濟されぬであらう低利資金が青島方面と長江方面だけで四百二十萬圓ある。この内譯は青島方面が三百萬圓、長江方面が百二十萬圓だが、然らばその青島方面に邦人が幾らゐるかといふと約一萬七千人である。この中には日本の大會社から送られたものもあつて、補助を必要としないものもあるが、かりに全部に頭割りに金をやつたとしても二百圓近くになる。もし國内で商賣がうまくゆかなくて困つて居るものがあつた場合に、日本政府は一人頭二百圓の低利を貸せるか。

濟南には日本人の人口は約二千人、これに對してこれを保護するために、現に日本から陸戰隊五百五十人、第二艦隊(乗組員五百三十六名)が現に常置されて居り、少し多い時には在留同胞一人に軍人四人あてと幾關銃二挺、輕機關銃四十挺を以て守備したとのことである。國内においても隨分不安な場合もあるが、日本政府は一人の同胞を四人の軍人で警護する準備があるか。

滿蒙の利權については日本は國運を賭しても、これを擁護すべきことは、政友會政府は勿論、民政黨政府と雖もこれを揚言してゐる。然らばその滿蒙の利權といふものは何かといふと田中首相によると利權それ自身……何といふ珍答辯だッ……だが、算盤ではじき出してみると、最も重要なものは滿鐵に外ならない。その滿鐵の財産は拂込額が二億五千五百萬圓で、三菱銀行の預金に少し輪をかけたほどのものである。これを擁護するのに一個師團の兵隊と特別守備隊を以てして居る。政府に聞くが國内の同じくらゐな大會社に對し、日本國家は國運を賭しても、また何年これ

だけ人力と金力を消費して、これを擁護する用意があるか。

これ等はたゞ目の前に轉がつてゐる二三の事實をあげたにすぎない。愛國心といふものに何のいゝところがあつても、少なくともそれが算盤にのらないものであることを示すためには、シベリア出兵に八億圓以上を使つた例をあげてもよければ、一ケ年百四十五人の移民を拒絶されて日米戰爭を開けと叫んだ輿論を指摘してもいゝ。このことを、も少し詳しく論ずるのがこの文の目的である。

二、愛國心と國策

田中内閣の外交政策を檢して、われ等が特に感ずることは、それが熱烈なる愛國心を基調として居ることである。この内閣ほど『國策』を云ふものなく、この内閣ほど『國威發揚』を說くものはない。貴族院でこそ何かといふと、直ぐ對手の『誠忠』を疑ひたがるのが癖で、地租委讓でも、優諚問題でも、不戰條約でも、乾度この言葉を持ち出して一文句をつけることを常とするが、これは恐らく貴族院自身をも輔ひするであらう貴族院特有の一つであつて、軍人出身の、しかも柴佐伴備を誇ふして居る田中首相に、誠忠の志しの有無をいふのは、いふ者の方が滑稽である。この點だけはわれ等は無條件に田中首相を信用していゝと思ふ。

元來、軍人は古往今來愛國心と離れて存在するものではない。愛國心(Patriotism)及び愛國者(Patriot)はその語原を、Patria 卽ち國家(カンツリー)といふ文字から發し、しかしてこの文字はまた Pater 卽ち父(ファザー)といふ言葉から出てゐるのだそうで、自分の國を祖國とか、父國(Fatherland)とか、母國とかいふのはこれがためである。そしてこの祖國を護るのが軍人の任務である以上、これと感情的にも一致して居らぬのは當然である。故にホルムス博士の如きは愛國心の人格(パーソニフィケーション)化が軍人だといつてゐるほどである。("Patriotism is not Enough" by John H. Holmes, P. 27)

この愛國心から出た國策といふものが必然的に絕對的自國第一主義の形ちをとるのは當然であらう。ボルテアーは『われ等の國の强大ならんとする心は、卽ち他國に對する嫉惡を望む心である』といつてゐるが、これほどの明らかな意識はなくとも、極端に自國の意志を主張する心は、やがて他國の意志と自由を壓迫しても顧みざる心となるのは、自然の勢ひである。

故にストックスは國策なるものの本體を論じてかう云つてゐる——

『ある樹立された國家の「國策」といふものは國家的自我及び膨脹の政策であつて、民族的感情によつて神聖化する「神聖なる自我(セクレット・イゴイズム)」に外ならない。國家的にはそれは總ゆる權力を以て國民的結合を强く緊切にすることに努力し、また對外的にはその充實したる軍力を背景にし、大膽かつ强硬なる外交政策を以て、その國が懼れられ、尊敬され、かくして地球上の未開發の富源に分け前を得ることを努力する。それは原始的なる愛國心に訴へる。その國家に對する愛情はやゝもすれば外國人憎惡の念となり、また國民の義務は政府の決定したる如何なる國策に對しても無條件で一致して保持せねばな

られると解釋するに至る。』(“Patriotism and the Super-State,” by J.L. Stocks P. 71)

そしてこの國策を遂行するものが軍隊なのである。故に『軍國主義はその實行の行使、武力の威脅によつて、世界における勝利的國家主義の永久の特色である。軍隊は國家の名譽、國家の權利、國家の利益——即ち國家主義の三特色のために存在するものである』(“Essays on Nationalism,” by Charlton Hays. P. 159)と斷じうる。

この國家主義が一轉して如何にして帝國主義になるか。即ち國家自衛のために起つた日本の軍國主義が何故帝國主義に轉化したか、これを產業革命と結びつけて論ずることは興味ある論題であるが、これをこゝで說くいとまはない。こゝでは只以上の記述によつて、軍人として育つた田中首相が、政治を實行しうる位置にたつや、總べての反對を押し切つて外務大臣となり、その國策を遂行せんとしたこと、そして國民に對しては是が非でも自己の政策を擧國一致で後援せんことを要請した思想背景を知るだけで充分としよう。

三、經濟的に觀た山東出兵

田中內閣がその位置につくや、始めに敢行したことは誰も知るやうに山東出兵であつた。

山東出兵の目的が、その後何回も政府から發表されたやうに、邦人の權益を擁護するにあつたことは繰り返すまでもない。然らばこの擁護すべき權益は何なりやといへば、それは二つに分けることが出來る。一つは濟南在住の二千の邦人と、他は膠濟鐵道に有する日本の權益である(青島にも日本の權益は無論あるが何人も青島に相當の派兵をし、こゝで邦人を保護するの必要を反對したものはない。故に田中內閣の出兵は前記の二つが最大の眼目だといつていゝ)。

濟南在住の邦人が約二千人であつて、この投下資本が約五十七萬圓であることは前に述べた。この外に山東鐵道から受取るべき金が當時約三百萬圓近くあつた。即ち同鐵道は例の山東懸案鐵道細目協定の第二章により日本國政府に對し償却すべき鐵道財產の價格を日本金四千萬圓とし、其の國庫證券の利息を六分と假定し、半年毎に日本政府に支拂ふべきものとした。この利子が當時三回ばかり滯つてゐたのである。

われ等の確聞するところによれば、蔣介石は始め日本軍と衝突すべきことを恐れ、濟南在住の邦人の引きあげを希望し、これに對しては支那側からその費用の補償を申出でた事實があるといふから、當時引きあげたとしたら外交交涉によつてこの費用は非常に少なくなつたであらうけれども、そうしたことを少しも考慮に入れなくとも、その『權益』の內容は三百五十萬圓を越すことはなかつたであらう。

これに對して田中內閣は幾ら使つたか。そこで失なつた人命と損害は一切いはない。たゞ出兵費だけで四千萬圓近くある、即ち

昭和三年度	三千五百萬圓
昭和四年度	二百四十萬圓
行賞費	四百萬圓
總計	四千百四十萬圓

である。但しこれは總費用であつて、軍隊は

日本に居つても經常費を必要とするから、これが費用四百萬圓を差引いても三千七百四十萬圓となるのである。しかもこの中には海軍費が含まれず、また山東鐵道補償金の內、まだ一期分滯納してゐるのも見逃がしてある。

かうして田中內閣の國威外交、愛國外交は日本の權益を護るのに當の權益の價格の約十倍の金を費消したことになるのである。併しかうした努力をしても實質的に權益が護れたかは疑問であつて、日本兵の徹兵と同時に、在留邦人の四分の三は引きあげて來つゝあることは最近の電報が報ずる通りである。出兵して引あげ、しなくても引きあげるとすれば、田中內閣の目がけたのは何なのか？

これに對して田中首相は昂然として濟南出兵が成效であつたことを總ゆる場合に揚言してゐる。これを一個の云ひ逃れだと見てはいけない。田中首相の如き軍人政治家にとつては、尊いものは『國威』であつて『金錢』ではない。かれは例へ一億圓を費消しても、國威を伸張したことに甚大なる滿足を感ずるであらう。われ等はこの人々の平生の心理狀態から押して、かれの言を額面通りに信用するものである。

四、貿易の激減と首相

濟南出兵による失費は無論その直接の費用にすぎずして、その間接の失費は排日貨による貿易の減少をその最大なるものとする。

田中首相は議會において日支貿易について反對黨の詰問を受けるや、昨年度は一昨年度に比し三百五十萬圓增加したことをあげて、その影響のないことを述べて居る。併しながらこれは支那が漸次國內平穩に歸し、購買力が增加したことを無視する議論であつて、支那の貿易は昨年は二億萬兩も增加してゐる。各國が增したのに、日本が殆んど停態を維持して居ることは、結局その減少を語るものでなくて何であらう。

殊に排日貨は昨年の十月頃から組織的に擡頭して來たものである。その頃からの貿易が減少した以外に貿易表には現はれて居りながら、埠頭に滯貨してゐるものが山積してゐる狀態で、日支貿易に從事してゐるものが續々として倒產した事實でも打擊の甚だしかつたことを知りえよう。この事は本年になつて明らかになつた。卽ち一月以降三月末までの對支貿易は輸出超過二千六百三十七萬圓であつて、昨年に比し五百十九萬二千圓の激減である。濟南問題の交涉は三月に解決したが、この月の出超額は、昨年同期に比し六百萬圓といふ減退を示したのである。

かうして貿易においては、前後恐らくは二億圓以上の減退を見ながら、そしてその閣員である三土藏相をして金解禁の不可能も、不景氣の恢復も、日支關係によるところ多き點に悲鳴をあげしめながらも、田中首相はかうした點には殆んど顧みるところがなかつた。かれは『支那の排日については、わが國の實業家も辛いであらうが、國家のために我慢して貰ひたい』と新聞記者に語り、また政友會でも幹部會を開いて『かうなると我慢比べだから、わが黨は現內閣の對支政策を極力援助する』と無條件でこれを承認してゐた。

考へても見給へ、不詳間における兩國の交涉が經濟的利害を度外視し『國家のために我

慢して』何が得られるのだ。兩國對立し『我慢比べをして』われ等の目あてとするものは何なのだ。かれ等は明らかに戰爭と外交を間違えてゐる。果然、田中首相の交渉の中心は經濟的利害でも、大局の利益でも何でもなかつた。それは謝罪をするとかしないとか、始めの要求が通つたとか通らないとか全く面目の問題——軍人流のエキスプレッションでいふと『國威』の問題にすぎなかつた。グルぐ廻つて、出て見たところは前と同じ出發點だつたのだ。

これが愛國心の悲劇でなくて何であらう。併しながらわれ等の解するところによれば、田中首相がこれをしも悔ひてゐると思ふのは困難である。何となればかれから見れば貿易の如きは國內の問題であつて、國威の發揚とは大して關係がないからである。もし自から不滿な點がありとすれば、それは思ふやうに支那側をして謝罪、責任者の罷免、賠償等をなさしめなかつた點にあらう。失つた貿易の一割もあれば、在支邦人を救つてお釣りが來るといふやうな考へは、御用商人流の考へ方で、軍人政治家には元より齒牙にかくるに足らぬ問題だからである！

五、滿蒙の利權の價値

田中內閣の對外政策の重點は滿蒙にある。滿蒙に對しては田中內閣は成立以來、口うるさいほどこれを繰り返してゐる。今期議會においても首相は

『もしそれ滿洲に關しては同地方が我と接壤地帶なるがため國防上政治上極めて重大なる關係あるのみならず、曾て帝政露國の侵略に對し國運を賭して同地方の自由を回復したる歷史的關係あり……この地の靜謐を亂しもしくは我重大なる權益を害する如き事態の發生に對しましては、これを排除する覺悟を有するものであります』

と述べて、滿蒙のためには如何なる犧牲をも拂ふことを聲明してゐる。

滿蒙と一口にいつても、田中首相自身も認めるやうに、何も全體が日本のものでない以上は、これを評價するためには滿鐵を引用するのが最も便利である。大連も大きな投資地たるには相違ないが、その諸港等は滿鐵の投資によるものが多く、また都市はそれ自身償還し得るのは上海、天津等の例によつても知られるからである。

滿鐵の財產が幾らあるかは、三井三菱の財產が幾らあるか分らぬと同じやうに分りにくい。公稱資本が四億四千萬であることは誰も知るところだが、總財產に至つては七億萬圓內外といはれてゐる。これは山本社長が先頃財產整理をして、監督官廳の諒解を得たもので、これには鐵道は勿論、鑛山、船舶、製鐵所、土地等をもふくむものなのである。(これについて東京朝日は七億二千萬圓と報じ、東京日日は八億八千萬圓と報じてゐる)。

この財產評價額は何れであつても、この滿鐵から日本本國が受ける金は、相當に大まかに見積つて五千萬圓近くだといはれる。この中には政府に對する納付金、株主に對する配當金の外に材料購入費等も見つもられてゐる。卽ち日本の滿鐵によつて受ける直接の利益は年額約五千萬圓であつて、無論これ近くの金は株式會社である以上、誰が持つてゐて

も受けうる額なのである。

　日本の朝野が、そのためには國運を賭すことも辭せないとする滿蒙の利權といふものは、極めて大雜把にいふ時に、一ヶ年五千萬圓の問題なのである。これを擁護するために日本は一個師團の兵力と、守備隊を常置し、本年から更に二個大隊の兵員數千七百人を增設し、右は昭和四年度から年割額百十五萬圓を支出することに先頃の議會で確定した。無論これ等の軍隊の任務は在留邦人全體を保護するにあることは當然であるが、併し在留邦人が多いからといつて必ずしも軍隊を常置しないことから見て、その主たる目的が政治的にいへば『特殊權益』、經濟的にいへば四億四千萬圓の會社を保護するにあるは問題である。

　日本はかつてこの事が算盤珠にのるや否やを考へたことはない。滿蒙の特殊利權といふと何にも聞かない前から、もう眼が眩んでしまふのが常である。そればかりではない、今や日支交渉の最も重大なる暗礁となつて居るのは滿洲に借款鐵道を敷設するか否かの問題である。田中內閣は殆んどその全力をこれに傾倒し、しかもその交渉は前途は益々困難になつてゐる。

　われ等は問題を根本から考へ直す必要がある。一體借款鐵道敷設がそれほど無條件に是認せらるべきものであるか。世界を通して借款鐵道を敷設するために懸命になつてゐる國などは、もうどこにもありはしない。英國すら印度に對するあの鐵道から、着々手をぬきつゝある。然るに日本だけが強制的に、無理押しに滿洲に鐵道をしかんとするは何故であるか。それが經濟的に大した問題でないことは、同じ種類の洮昂鐵道が大した好成績でないことによつても明らかである。

　何故日本は、十九世紀の夢を繰り返して、これが爲めには日支の關係をも犧牲にして顧みざらんとするのであらうか。

六、愛國心と將來の國策

　要約すると愛國心の悲劇は四つの方面から來る。

　第一は支那人に愛國心を敎へたものが誰よりも日本人であつて、今の排日はおのれに出でたるものがおのれに歸つてゐるのである。

　支那の事情に注意を拂つてゐる者は、その排日の中心人物が却つて日本留學生に多いことを知るであらう。彼等は日本に留學し、殊に士官學校などに入學するに及んで強烈なる愛國心を敎はるのである。先頃濟南事件の故に歸國した支那留學生を前にして、その日本人敎官は『諸君と戰場にまみえん』と豪語したさうだが、かうした敎育に依て支那人がその自國に對し強い愛國心を持つのは當然である。

　日本留學生の何人をあげても――蔣介石を始め、死んだ楊宇霆、許崇智、賀耀組、周龍光、崔士傑等、その一人だに日支親善のチャンピオンをあげうるか。これを日米國交が危險に瀕した時に、米國歸りの日本人がその親交のために努力し、また同じことが支那でも米國留學生間に見られるに比し、その相違は大なりといはねばならぬ。

　第二に愛國心の悲劇は對手の立場と心理狀態が判らないことをあげうる。

　始めに述べたやうに愛國心はその性質上必然的に排他的である。故に自己の目的を遂行するに急であつて周圍を顧みる暇がないのである。支那に澎湃たる國民主義が起り、自國建設の意志が盛んになつて來た時に、これに

よつて利益をするためにはこの經濟によつて政策を定むることであるが、愛國心にはこの餘裕がない。そして排他的なる日本の愛國心と支那のそれとが相會すれば衝突するのは當然である。元來、滿洲には鐵道を必要とする、それを飽くまで峻拒しようとするのは日本の極端なる愛國心を、自國のために拒絶しようとするまでゞある。

第三に愛國心といふものは高價なるものである。海外發展のためだといふと、全く打算を超越した低利資金その他を貸出し便宜を講ずることは前述した。邦人數約一千人の漢口に三十萬圓、百名の南京に三十五萬圓、二千人の濟南に百萬圓と數へて來ても、それが並々ならぬ援助であり、況んやこれに加へて二三人に一人づゝぐらゐの軍人が保護して居るにおいてをやだ。しかも在支邦人などは何かといふと『第一線に立つて奮鬪するわれ等同胞』などゝまるで國家のために異郷で苦役にでも從事してゐるかのやうに恩に着せて、その援助の薄きことをかこつてゐる。かうして彼等は成功しつゝあるか。……この愛國心の延長が支那でも米國でも南洋でも、日本移民の慘めな失敗の原因になつてゐることに、こゝで書くには餘りに平凡な事實である。

最後に、併しながら最も大なることは、愛國心は地圖の色と『國威』にのみ血眼になつて、その根柢に算盤がないことである。

たとへば滿蒙の問題にしても、その重要性はさるをながら、これを守るために一切他を排して顧みないといふ態度が日本將來の國策としてとるべきであらうか。『特殊權益』から來る利益が前述したやうに假りに五千萬圓ありとして、その額は日本の對支貿易の約十億圓の五分にしか當らない。特殊利益が滿蒙にだけあると思ふのが、その錯覺であつて、貿易をしなければ國家經濟が持てない日本にとつては、特殊權益は揚子江にあるのは勿論、山西には廣東にも何處にでもある。そしてこの額は支那の統一がなり、購買力が進むに從つて、急速にかつ無盡藏に增加するのである。

かういつたからとて何も滿鐵を直ちに返せといふのではない、返還しても投資額だけは現金か株かでとるのだから一部で思つてゐるほど大問題ではないが、支那が未だ秩序を維持しえず、かつその運轉も覺束ない以上は進んで來[illegible]ない。わが國が保持せんとするのは日本の國防として特にかけるほど大事なつてゐる滿蒙の利權などゝいふものが、經濟的に見て決して云ふがほどのものでなく、約四億圓の資本を二十ケ年も運轉して、それに軍事費、警備費その他總ゆる國家の援助を與へれば、大概の事業はあれぐらゐになるであらう點である。即ち利益を得てゐるのは支那であつて、日本の利益は實質であるより想像的、經濟的であるよりも地圖的滿足にすぎないのである。

愛國心を算盤珠にのるものにせよ。それが對支問題、朝鮮問題、臺灣問題を解決しうる唯一の方法であり、又不景氣打開策でもある。

正　誤

前號所載「資本の現段階に於ける金の意義」（楢田民藏氏）本欄、一〇三頁十三行目「一九一四年の二十八億、一九一〇年の三十五億（當時イギリス七十億、フランス三十五億）」とあるは「一九一四年の二百八十億、一九一〇年の三百五十億、（當時イギリス七百億、フランス三百五十億馬克）」の誤に就き訂正す。

社會不安は益々増大して來た。若き青年・乙女達よ。絶望してはいけない。我等の提唱する「戀愛の甦生」にきけ！
本號はぜひ賣切れぬうちにお求め下さい！

婦人公論

戀

絶望より甦生へ……山川菊榮

花はくれなゐ……池谷信三郎

影子は男の友二人とスキーに行つた。さて、それから。

京都……渡邊均

木がくれの巣……小島政二郎

庄造は美代子の美しさに牽かれた。綾子は又しても策を弄した。

漾子の噂とおせつかいの中に、妻のまゆみは如何に處したか。

長篇小説

わが半生の記……ナジモヴ手記

戀は甦る

亡靈へ感謝……柳原燁子
過去の影……平林たい子
碧空へ！……城しづか
彼等の復活……下村千秋

男の戀の解剖

良くない男は……片岡鐵兵
鎧へる心臓……若杉鳥子
男の戀とは……北村兼子
戀愛のテンポ……廣津和郎

早婚者の手記

（ここに二重寫しの心がある。それは思切り早い結婚、私は十七で結婚した）……新居格

ニユーヨークにて

正宗白鳥

「散史一日費府の獨立閣に上り、仰いで自由の破鐘を見、俯して獨立の檄文を讀み……」といふのが、東海散史の「佳人の奇遇」の書き出しの文句であつた。明治二十年前後に讀書界を風靡したこの政治小說は、私なども少年時代に愛誦して、そのうちの幾册かは筆記したほどであつた。そして、米國の歷史については知るところの少い私も、費府の獨立閣だけは最も強く記憶に留めてゐるのみならず、少年の夢やあこがれがそれに纏はつてゐた。米國の風景ではナイアガラの大瀑布、歷史的遺跡では獨立閣が、昔から私にいろ〳〵な空想を描かせてゐた。

そのフイラデルヒアへ、私はある日ふと思立つて出掛けた。ニユーヨーク市の中心にあるペンシルバニア大停車場から、急行で僅か二時間を費やすだけなのだから、雜作はなかつた。しかし、汽車に乘ると間もなく、雨が降りだした。窓から郊外を見てゐると、日本の初春の雨と同じやうな長閑さがあつたが、費府に着いた頃は、雨足が烈しくなつて、あたりが陰欝になつた。ゆつくり市中の見物など出來さうでなかつた。

私は兎に角、驛の前から電車に乘つた。電車の窓から市街を眺めて、可成り時間を過してから下車して、雨に濡れながら、「インデペンデント・ホール」の方角を訊き〳〵歩いた。訊ねても知らない人が多かつた。やうやく搜し當てゝ見ると、

その獨立閣といふものは、見榮えのしない茅屋であつた。その茅屋の建てられて以來百幾十年の間に、この國の物質文明がいかに進歩したかを證明させるために、そこに保存されてゐるやうだつた。ワシントンその他の志士英傑の用ひた椅子やテーブルは、今の日本の小學校の先生の用ゐるものよりも、もつと粗雜なものだつた。例の「自由の破鐘」が物々しく安置されて、當時これを鳴らして、自由獨立を高唱した所以が記錄されてあつたが、この鐘に裂け目の出來たのは、つまりは、鑄物師の腕前が劣つてゐたのであらうと思はれた。しかし、裂けたゝめに有難味がついて後世に傳はつてゐるので、古今東西の遺物にはさういふ例が多い。私には、米國建國時代の追想よりも、「佳人の奇遇」の紅蓮と幽蘭との愛國の美女が空想されたが、そこらにゐた見物人は、田舍者ばかりで、泉岳寺詣りと同じやうだつた。

私は、少年時代の幻想を一つ破つたのに滿足して、これから、いゝホテルで午餐をたべて休息して歸らうと思つたが、雨がます／＼激しくつて行動が妨げられた。それで獨立閣の前の飮食店へ入つたが、そこは、女ばかりの經營してゐる簡易食堂であつた。近所の勤め人らしい若い女が大勢べちや／＼しやべりながら食事してゐた。私もサンドヰッチとコーヒーとで、他氣なく腹をこやしたが、その間に、獨立閣の低い塔の上から、時を知らせる鐘が鳴つた。それは由緒のある「自由の破鐘」とは異つた鐘なのだが、雨の中を傳はつて聞えて來るその音は、私の耳にも、夢の世界の音色のやうに聞かれた。

自由とか獨立とかは、昔からアメリカ人の好みにかなつて、高唱されてゐたので、私は、費府の「獨立閣」を見たあと、間もなく、ニューヨークの海上に聳えてゐる「自由の神像」を見た。この日も春雨がしと／＼降つてゐたので、渡船に同乘した見物客は、數人の田舍者に過ぎなかつた。左手に書卷を持ち右手で炬火を高く捧げた女神の姿は、市中雜沓の巷でをり／＼目に觸れる影像よりは威力を持つてゐた。外から仰いで見るだけでは、滿足しないのが米國人の特色で、ここでも銅像の中をエレベーターで中途まで運んで、それから細い階段で頭上まで上らせるのだが、私は、靴を辷べらせはしないかとビク／＼した。階段は百五十あまりだが、そこを上つて女神の頭の中に入つて行つたつて、特別に何かが見える譯

ではなかつた。やはり、外から仰いで見るだけでいゝのであつた。この地の美術館には、ラファエルの「マドンナと幼兒の石畫が一つ、階段の正面に置かれてあるが、その畫中の使徒の一人は、書卷と鍵とを持つてゐた。「自由の神像」が、書卷と炬火とを持つてゐるのに思合せて、宇宙の秘密を開く鍵と、世界の闇を照らす光とが、昔も今も人間の心に潛んでゐる要求であるらしく思はれた。しかし、この「神像」にも、ラファエルの繪にも、私は讃歎する力を缺いでゐることを、私はひそかに歎じた。

私は、異邦人に取つて、現代喜劇や音樂より遙に解かり易いのが彫刻や繪畫であらうと信じて、美術館へは、毎日のやうに足を運んで、西洋の古今の傑れた美術に、生れてはじめて接した思ひをしたのであるが、日を重ねるにつれて、次第に味の失せる名畫も尠くなかつた。この美術館には伊太利中古の宗教畫が多量に蒐集されてゐるのだが、私は今度はじめて、宗教畫の詰らないことを感じ、それとゝもに、中古の宗教觀に對してある親しみを覺えた。繪は、古いが故に尊いといふ妄信から脱して見たら、拙いが上にも拙いので、日本の昔の佛畫の方が傑れてゐるに違ひないのだが、基督やマドンナが、こんなに通俗に平凡に、こと更らしい神々しさなどを取去つて描かれてゐようとは、私の豫想しないところであつた。ある畫で、十字架上の基督も、その左右の罪人も、顏に甲乙のないのも面白かつた。基督を神としながら、繪の上では、時には薄汚いらしいまでに人間らしいのが面白かつた。

私は、ルーベンスやヴァンダイクなどフレミッシュスクールの繪畫の前に、いつも最も長く立留つてゐる。ルーベンスの「狐狼狩」は面白い。口の中へ槍を突付けられた狼の顏の苦悶と諧謔味の表現は、いつも私の眼を惹くのである。それよりも、ブルーゲルといふ、ルーベンスなどよりも先輩らしい人の「刈入れの人々」(ハーベスター)を、私は美術館中のどの作品よりも愛好してゐる。それには、伊太利の宗教畫には見られない心の平和が現はれてゐる。幾人かの農夫が樹蔭で食事をしたり休息したりしてゐる光景を中心にしたもので、ミレー以前にこんな田園情調を寫つしたのは、繪畫史上珍ら

しいのではないかと私には思はれた。十六世紀の和蘭あたりの實景なのであらうが、どの農夫の顏にも、その日に安んじてゐるところが見えた。食事を終つて樂々とし草の上に寢そべつてゐるもの、椀を持つて物を食つてゐるもの、壺から水を飮んでゐるもの、まだ長い鎌を持つて穀物を刈つてゐるもの、穀物の間から顏を出してゐるもの。それ等の人々は、近代的表情はなくつても、をの〳〵生存に適してゐるやうに、互に一つの長閑な世界をつくつてゐる。樹木の後には敎會堂の一端が現はれ、遙かに穩かな海が微見えて、丘陵や島がのんびりとしてゐる。この地の美術家らしい男がこの作品を模寫してゐたが、その模寫では、背景として塗抹された野面の黃色が、原畫のやうな平和を持つてゐなかつた。

私は、私の宿の近くから、小さな乘合自働車に乘つて、五錢のニッケルを投じて五分ばかりの短時間で、この美術館(メトロポリタン・ミユージアム)へ來るたびに、この平和の繪の前に立つて、自分相應の藝術的感興に耽るのであるが、それ等の數百年前の農夫の有つてゐたやうな日々の生活に於ける平和は、私の心には宿つてゐないのである。獨立閣に現はされてゐる獨立の精神、自由の神像に現はされてゐる自由の精神、この用閣圖に現はされてゐる平和の心境は、このドル萬能の騷々しい都會にも光つてゐるのであらうが、私には、それ等の獨立、自由、平和は、抽象の世界に記された文字で現實に生きて動いて感得されるとは思はれない。

たゞ旅行客の一人として見て步いたゞけでは、浮世は金の世界である。新聞の重要な記事は「$」といふ文字であるらしい。火事でも「何十萬弗の火事」といふ見出しで出てゐる。その「$」の數字が、數へて見ると大きい。今日の新聞にも、二千五百萬弗のアパートメントが新築されるといふ記事が出てゐる。ワーナーブラザーの活動寫眞館が千萬弗以上の資本で出來ることになつてゐる。イーストリバーにかゝつてゐる五つ六つの橋は、その構造の巨大と堅牢とに驚かれるが、それを知らない人に話すには、それ等の橋を建築するに、どれも、二千萬弗も費されてゐるといふことが、最も簡にして要を得た說明である。金の力で何でもやらうといふ意氣が何處にも見られるやうである。

「金持で、貧乏人の眞似をして面白がつてゐるものもある」と、ある米人が云つた。イーストサイドは貧民窟の代名詞になつてゐるが、その不潔な貧民街の中に、しかも川を隔てゝ監獄に直面した所を撰んで、この頃は少數の百萬長者が住居を構えて、朝な夕なに囚人の姿や貧しい黑人の姿を心に描いて喜んでゐる。そして、美術などには全く門外漢でありながら、美術家氣取りで風流な眞似をしてゐるさうである。

私は、有餘る金を有つた人間にはありさうな心理であらうと、興味を起して、そこへ行つて見た。黑人の町伊太利人の町西班牙人の町猶太人の街と、東部には、陸續と異人種の町が續いてゐて、西部の町々に比べると、不潔なことは不潔だが、しかし、どの町の人家もガッシリした、所謂「西洋館」ばかりなのだから、日本の西洋造りを見た目には、それ等の町がさう貧乏くさくは思はれなかつた。例の富豪のゐる三四のアパートメントは、それらの中に巍然と聳えて、川に臨んでゐて、巨大な美しい橋を見下し、監獄も外形が少しも不快な色を持つてゐないのだから、そこにゐる富豪が、あながち貧乏人の眞似をしてゐるらしく思はれなかつた。あとで聞くと、そこらの貧民街の地價を騰貴させるための地主の策略で、風流でも何でもなさゝうだ。世の中のことは底を割つて見たら、大抵そんなものなのであらう。

富人の貧乏三昧や美術家氣取りと對照して、本當の貧しい美術家や詩人などは、ワシントンスクウエヤの近所に巢をくんでゐるから見せてやらうと、ある米人は、私をそこへ連れて行つた。その一區劃の家々のうちで、私の興味を惹いたのは、ある小劇場であつた。昔馬小屋であつた所を劇場にしたのである。覗いて見ると、築地小劇場に酷似してゐた。「役者は俗受けはしないが藝はうまい」とその案内者は云つた。オニールの戯曲は此處ではじめて演ぜられて價値を認められたのである。オニールの戯曲は、今他の二ヶ所の商業的劇場で演ぜられて、人氣を博してゐるが、この小劇場の舞臺にも上つてゐた。

そこで、私は翌日のマチネーの切符を買つて、二三の新聞の劇評をも讀んで出掛けることにした。

その日は、雪がチラついて陰鬱だつた。劇場（Province town Play house）の廣さは、築地小劇場の半分に滿たぬくらゐである。細長くつて、椅子は二列になつてゐる。天井は青く壁は白い。壁には蠟燭形の細い燈火が左右に三四ヶ所ついてゐるだけだ。見物は、マチネーのためでもあらうが、五十人に滿たぬくらゐで、この狹い劇場でも空席だらけで、何處へ行つてもギツシリ詰つてゐるのを例としてゐる他の華美な大劇場と比較して、京にも田舍ありと、私は感じた。それ等の見物には、築地とは違つて中年以上の人が多かつた。

出し物は、オニールの一幕物「朝餐前」と、ヴアーヂル・ゼツデスの三幕物“The Earth between”であつた。ゼツデスは、まだ三十歳を過ぎたばかりの青年作家であるが、かういふ新進を世に紹介するのが、この劇場の特色であるらしい。この戲曲の大要は、妻に死なれて、一人娘と暮してゐる農夫が、娘が近所の若い男に目をつけられるのを嫌ひ、むしろ嫉妬を感じ、ダンスをする場合には、父親自身が娘と踊つて、他の男に手を取せまいとした。そして、この農夫の使用人である青年が娘に熱情をそゝぐのを怒つて、青年を、濕氣のある物置小屋に寢させることにした。そのために、青年は肺炎に罹つて死ぬるのだが、父親は、むしろ、それを喜んで、これからは、娘は父親一人の者で、傍から奪はうとするものはなくなつたと云つて、明るい光に照らされた島で娘を抱くのである。

三幕八場で、一場々々が甚だ簡單だ。舞臺も、築地小劇場の半分に充たぬほどに狹くて、巨大な役者が三人も出ると舞臺が一杯になるくらゐだ。そして役者の顏も百姓のやうだ。見物は物足りぬらしく、拍手好きの米人どもゝ、此處では幕が下りても滅多に手を打たないで、屢々冷笑を洩らしてゐた。しかし、見物を湧立たせてゐる大劇場の現代喜劇を幾つか見た私は、アメリカにも、こんな作者とこんな役者とこんな劇場があるかと痛快に感じた。「タイムス」とか「ウオールド」とか云ふ有力な新聞の劇評にも、好意が乏しいのである。不愉快な戲曲とされてゐる。作中の人物の非常識を笑つてゐる。「ウオールド」に「この芝居を見てゐるうちに、この劇場は元の馬小屋になつた方がましだ」など、皮肉を云つてゐる。

こちらの舞臺の言葉を充分に聞取り得ない私は、確信をもつて批評することは出來ないが、この戲曲は、技巧の幼稚なところはあつても、永遠の眞實性を有つてゐると思ふ。父親の娘を獨占したい慾望、娘一人を力にしてゐる淋しさには、日本人にも共鳴されるところがある。陰鬱な物置小屋で、青年が娘を引づり込まうとするところなどロシアのある作を思出させる。

アメリカ人は、元氣がよくつて、明るいもの、笑はせるものが好きなのだが、この作者は、シカゴの近くに生れた生粹の米人で、しかも新進作家でありながら、こんな暗いものを書いた。私は、この馬小屋劇場の一隅から、獨りひそかに敬意を拂つたのである。

この芝居に不滿足を現はしてゐた見物も、最後の幕が下りた時だけは、一齊に拍手を送つた。役者に對する見物人の道德なのであらう。

所演時間は二時間ばかりであつたが、劇場を出ると、寒さは急に加はつて耳が千切れさうだつた。ニューヨークではをり／＼かういふ氣候の激變に會ふのだが、急いで近所の飲食店へ入つて、溫かいコーヒーでもすゝると、心身がのび／＼として來るのを覺える。（三月九日）

家を建てる人の為めに
附和洋住宅の実例

工學士 山田醇著

保健的住宅の第一人者であり、多年歐米の建築界を視察研究された著者が濕氣多く寒暑の差甚しく、加ふるに地震と火事の多き我國には如何なる建築が最も適應するか、又現代生活には如何なる家が理想的であるかに就き、敷地の選定、保健的間取の作成法、客間台所の設備其他數十項に亘つて和洋風の實例廿八圖を擧け且つ著者多年の研究を公開したもので、本書一冊あれば決して冗費を費やす恐れも建築者の奸手段に陥る憂も絶對になからしむ、これから住宅を建築する人には勿論既に建築された人もこの本だけは一般的知識を得るといふ點から是非とも繙かれむことを薦む。

菊判天金洋装函入
口絵挿絵百數十圖

定價五圓
送料廿七錢

中流向 和洋風庭園の作り方

林學博士 上原敬二著

我が國の現在は家屋は洋風をとり入れて所謂文化住宅の普及を見てゐるが、其の庭園に至つては殆んど顧られてゐない有様である從つて家屋とは不調和のものを平氣で作つてゐるのを遺憾に思ひ今度斯界の權威上原博士が洋風をとり入れた眞に日本の住宅に適應する庭園設計圖數十を示して、素人の誰れにもわかるやう平易に造園の秘訣を述べられたものである、その特色とする所は何處までも小庭園に重きを置き、庭師の手を煩さず自分自身で造園し得られることにある！ 文化生活者の大方に是非とも薦む。

四六判布装函入美本
口絵挿絵九十餘圖

定價三圓
送料十二錢

石井勇義著・定價二圓五十錢・送料十二錢
西洋草花の知識

石井勇義著・定價二圓五十錢・送料十二錢
温室園藝の知識

石井勇義著・定價二圓五十錢・送料十二錢
花壇庭園の知識

淺川英一著・定價二圓・送料十二錢
草花のフレーム栽培

淺川英一著・定價二圓二十錢・送料十二錢
菊と洋菊の作り方

大橋昌夫著・定價一圓五十錢・送料八錢
美しい實用的な蔬菜園の作り方

非谷正已著・定價一圓八十錢・送料十錢
小温室とフレームの造り方並煖房法

平山美佐明著・定價一圓六十錢・送料八錢
月益一羽一円を標準とする養鶏經營法

東京市麹町區飯田町二ノ三
資文堂書店
振替東京六二四八七
電話九段二七一五


CHEVROLET
シボレー史上
空前のシボレー
四氣筩車値段の六氣筩車
一九二九年式新シボレー號はゼネラル・モータース獨特の豐富なる實力と卓絶せる工夫の產める一大傑作であります。夫れは僅かに「シボレー史上空前のシボレー」です。過去四年に亘り實に百種以上の發動機に就て不斷不撓の研究と實驗とを重ね最後に選定されたのが此の「四氣筩車値段の六氣筩車」です
新シボレー號の六氣筩頭上弁式發動機は從前より三割二分の動力と二割の速力とを增し、ガソリン一ガロンにつき優に二十哩を出します。
型錄は各地特約販賣店にて進呈。
日本ゼネラル・モータース株式會社
新シボレー號はゼネラル・モータースの製品なり



新聞懺悔

太田正孝

一

ナポレオンは、なぜワーターループで負けたでせうか。——私はそれについて面白い茶話を聞いたことがあります。一言にして申せば、當時彼は大へんに太り出して來て、すべての事を片づけるのに、モノグサ（懶惰）になつたからであるといふのです。それに初夏とは申しながら日本の四月ごろの氣持のよい時節ですから早く眠つたからであるといふのです。その體質からする油斷に乘ぜられ——援兵も間に合はず、つひウエリントンのためにやられてしまつたといふのです。私は、これについての細かい歴史家の考證のほどは存じません。ちかごろヤブの多いお醫者さんたちにも聞き質して見ません。しかし、私自身の短かい經驗から申しますと、心の引しまつてゐるときには、太つてまゐりません。神經も鋭いのです。尤も楚人冠の書いたもので見ますと、ロンドンタイムスのノースクリッフ卿は太つてゐたやうですが、昨年私がアメリカやヨーロッパでお會ひした新聞界の人たちは、幸か不幸か太つてゐたといふ印象を殘してゐるものはおりませんでした。それはとにかく、私は一年たらずの間新聞事業の現役を去つて——ただ取締役（これは頭取といふ名とともに私の最も嫌いな名ですが）といふ立場だけに置かれて——少しく閑を得た今日になつて見ますと、それがよく分ります。つひこの間までは、

そんなに神經が高かつたのかとおもふと、夢のやうに感じます。義父の三木善八も、——もう老人ですから太つては來ませんが——四十年あまりも新聞事業にたづさはりましたが、一昨年の冬顧問といふ名義も除き關係しなくなりましてからは、ホツとしたと申してゐます。それでも新聞以外には一つの道樂もないといふ父も、以前のやうには強く新聞のことを氣にして話頭にのぼさぬやうになりました。

太らないナポレオンと同樣、新聞事業にたづさはつてゐますものは、押しなべて神經が高いのです。あるひは高すぎるものが多いのです。なかには行きすぎて、ニユースに對する第六感が、見當はづれを仕出かすことさへあります。いつぞや浮田博士が、ウソを書くのを業としてゐるものが新聞記者であるごとき甚しい惡口を叩かれたのに對して、雄人氣がいたく腹を立てられたのも道理です。どうして〳〵良心ある記者の仕事は、世間の知らない苦勞があるものです。また新聞の販賣とか廣告などの營業にたづさはつてゐる人たちも、普通の商賣ガタキ以上の強い戰鬪意識をもつて働いてゐます。印刷工場員とても、同じです。これといふのも一つには、毎日つくられるものが、何何新聞といふ看板だけは同じものをつけてゐますが、織り込まれ表はされてゐる材料なり內容がちがつてゐるからです。いはば、毎日新しい商品をつくらねばならぬからです。——[illegible]人として暮らす一日の常道を申してみませう。

朝眼をさましますと、書生さんは枕元に一束の新聞紙を置いてまゐります。一と束と申すのは、東京の各新聞はもちろんのこと、私の關係してゐる報知新聞としては、別に地方へ送る二十何種といふいはゆる「地方版」もあるからです。總數にして三十何部といふものに眼を通してゆくのです。そして各新聞紙の片隅の方に、それ〴〵配達された時間が鉛筆で記されてゐます。これは、なか〳〵大切なことで、新しい記事は早く讀者の手に入るといふ意味で、はじめて新聞としての目的を達するからです。尚あなたのところの新聞は、早く配達されるからよいといふのも、記事の如何は別にして、一つの誇りとなるのです。尤も同じ地域でも、配達する順路がありまして、(それを書きました順路帳は得意帳としても大切であります)、遲速のあるのは免れません。——私は、まづ自分の關係してゐる「報知」を手にします。記事の材料に眼を通します。——ゆうべ遲くなつて編輯へ電話をかけて注意しておいたことを確かめて見るなどといふことは別としまして——讀んでゆくうへに氣になるのは、知り合ひの政治家や實業家についてのことです。肩身の廣いといはれる新聞人は、かうして肩身を縮めて——ひたすら誤りのな

からんことを氣にして――記事を見るのです。君が關係してるるから間違ひはないでせうが……――などいふことをよく聞きますか。出來事の起る範圍が廣くもなり複雜にもなり、それが多數の記者による綜合的の作品であるかぎり、かうした心配の起るのも當然です。尤も政治家（といへるかは別としまして）のうちには、事の善惡にかかはらず、自分の名前の出るのを喜ぶ人たちが多いやうです。分り切つた幹部會にしましても、その會合があつたと報道しただけでは氣に入らず、一一集つた人の名前の書かれることを好んでゐます。かうしてまで世間から――とくに選擧民から忘れられざらんことを希ふ心理狀態は、おかしいほどです。それから私が特に氣になるのは數字です。これは、むしろ私の癖といつてもよいでせう。財政や經濟についての數字でケタちがひのものがあつたり、社會記事にしましても見當はづれの燒失戸數や被害者數を書かれたり、物價の單位に無頓着なものなど見ますと、腹立たしくなります。また論說の理筋の通つてゐるかどうかといふことも注意します。政治についての記事も議論も、政黨色がつかないやうに、また、惡意でなくとも、ややもすると記者の個性のために曲げられる記事がないやうに祈つてゐます。それから全體としての編輯ぶりと、見出しのつけ方、活字の大小のことまで氣になります。私は、かうして第一にその日の記事の無事なることを祈り、第二に他社にぬけがけしてゐるいはゆる特種のあるべき期待を抱い新聞を讀むときまで繼けておきます。自分の書きましたものは多くの場合にすでに校正されたものに眼を通しておりますから、改めて見ません。大體記事がすみますと、また、はじめから廣告を通して見ます。大體契約される單價を知つてゐますから、高い廣告が多いかどうかといふ胸算用も出來るわけです。私は大きい廣告は、あまり好みません。そのことは後に申します。事業や、質のよい商品の廣告を見ると、うれしいものです。妙なことですが、死亡廣告の多いのは、新聞力のあるものとして喜ばれます。よく讀まれる新聞は、よく死亡廣告が載ります。また讀者の階級もあらはれます。さらに進んでは死亡廣告が多いからとて醫藥の廣告を申し込まれたこともあります。――死亡廣告にともなつて死亡記事が出ますが、年齡を落したり病名を書かないなどは特別な場合は別として親切な扱ひではありません。――猥褻なものはもとより、書き方の拙いのや、並べ方の工夫のない廣告は、イヤなものです。このことは記事の編輯とともに大切なことでありますが、日本の新聞は總じてこの方面の研究が足りません。書籍廣告の黑つぽいのや、木曜日の夕刊の活動寫眞の廣告の如き。その甚しいものです。いはゆる、

地域に不良な家屋を描く雜然と建てた形です。——物は、逆さにすると良く見へるものが少なくありません。天の橋立へまゐりますと、「股のぞき」といふのがあります。着物の裾をあけて——あられもない女までが——自分の股から日本三景を見ようといふのです。たださへ美しいものは、視覺をボヤかされる加減か一層よく見えます。また、私など頼まれて書いた大きい文字が拙なく出來ましたときも、逆さにして見て、ややウヌぼれることもあります。しかるに、ここに申した廣告に至つては逆さにしても美しう見えません。——それから印刷につきましても、うつりの惡るいのや、インキの香ひなど、一一嗅ひだり透したりして見ます。一といふ字のひつくりかへつてゐるのなどは、すぐ氣につきます。かうして一と通り濟みますと、地方版に移ります。これは市内もしくは市附近などに分たれます案内廣告の掲げられてゐる所を、それぞれの地方記事で埋めたものです。大きい新聞は、みな同樣のものをつくつて地方に送つてゐます。報知ではいまのところ、「神奈川第一」「同第二」「武藏」「群馬」「山形」「秋田」「福島」「千葉第一」「同第二」「山梨」「茨城」「北海」「栃木」「中京」「宮城」「岩手青森」「北陸」「新潟」「埼玉」「靜岡」「長野」と二十一あります。大阪新聞になりますと、中國四國九州などへの區分があります。これを一一見てゆきます。細かいことは別として、そのうちに、東京に分たれる市内版——すなはち全國的の記事として掲ぐべきものがあつたりすると注意しておきます。もとより、地方種との連絡は編輯者において注意してゐますが、時に落ちます。すなはち地方種で市内版に入るべきものが、ムザムザと捨てられることがあるからです。かうして一と通り報知を見てから、他の新聞に移ります。記事材料の落ちたのを見ますと、よい氣持ちは致しません。廣告の落ちてゐるのも、いやなものです。同じ情景をとつた寫眞にしても、見たところの惡いのも氣になります。かうして讀みをはるといふよりも見通すのに、ざつと一時間半から二時間近くかゝります。ホッとします。散文的に頭を使ふことは、なかなか疲れるものです。——そして新聞の出來榮え如何は、朝の食事にもひびきます。社へ出るまで氣になります。私は大森から通ふのですが、省線電車のなかでも、一と通り見渡して、自分の關係してゐる新聞の數を、ソット眼で讀みます。それが少なからうものなら、暗い氣になります。尤も大阪の某大新聞の社長さんは電車内に自らの社の新聞の少ないのを見て、家庭で讀まれてゐるものが多いからであるといつてウヌボレたさうですが、私にはそんな氣持になれません。——いよいよ社へ出ますと、前日までの營業成績や統計を見ます。事務上の片付仕事をしますそれから、

社内の各局へまゐります。編輯長と紙面の問答などを話しあひます。かういふ雜談のうちにいろいろのことが考へ出されます、そして、たとひ落した種があつても氣を腐らすことなく先きへ先きへと進み、ただ注意を怠らず、誤りのくりかへされないやうにする外ありません。さなきだに刻々と新しい記事を作るべく時間は過ぎてゆくからです。工場を見廻つたり、販賣や廣告の人たちに話しかけたり、氣のついたことは遠慮なく申します。かうすることが、お互の仕事のうへにいろいろの良い結果をもたらすものです。

私は、春と夏と秋と冬と、十年近い月日を、かうしてくらしました。日曜日も出かけねば氣がすみません。高ぶつた神經が習性を生んだのでせう。尤も日曜日は夕刊を出しません。それは私の新聞へ入つてからのことで、たしか、まだ五六年にしかならないとおもひます。一體私は國民の休息日が不統一になつてゐることを氣にしてゐまして、日本の商店や勞働者の休み日の不揃ひなのを無駄の一つとさへ考へてゐるのです。六日働いて七日目に休むといふことは、神さまのきめた掟です。澁澤さんなどが明治のはじめに銀行休日をきめたのは、何でもないことのやうですが、當時の國民生活の狀態から申しますと大膽な掟をつくつたもので、非常の功績であるといはねばなりません。イギリスでも戦後ショッピング・アウァ・アクトの改正で日曜市が開かれて、有益な報告も出てゐます。それはともかく、休日問題を氣にしてゐる私が日曜日にもかかさず社へ出るのは、やつぱり神經のセイでせう。それでも、十二月二十九日——それは最終版（他の新聞はちがふものがあります）の出來る日——を迎ふるのはうれしいものです。各室をめぐつて、同僚社員にサヨウナラの年末挨拶をし、よく働いてくれた印刷機械をながめて、「おまいにもナー」といつて年を送るのは。——

二

私の新聞生活は、まだ十年にしかなりません。職業としての經驗を時間で見積る人から申したならば、決して長いものではありません。私は、それを自分の小傳として一一書くほどの誇りも持たなければ、自負も勇氣もありません。ただ短かつた割合にはいろいろの事件に出つ會してゐます。御代が大正から昭和に移つたことも、その一つです。景氣の世の中から不景氣のドン底へすべり込んだことも、その一つです。大抵のことは新聞は先き走りますが、新聞の經營は、世間より遲れて景氣の恵みを受けるやうにおもはれます。不景氣になるときも、さうおもはれます。その間に、ストライキにも會ひました。火事にも

會ひました。震災にも會ひました。一時流行のやうになつた建築もしてみました。しかし、私はかうしたことを私の利害をもつてゐる一報知新聞として書きたくありません。新聞は社會の公器です。それは私の年來の主張であり、いまもその氣分を離れないやうにして筆を進ませつつあるのです。

一體、私が新聞生活にはいることになりましたのは、この仕事に對する興味をもつてゐたからです。蘇峰先生の申されるやうに新聞記者は面白いことを見聞するのが役目です。また、その經營は、面白いことを見聞したのを書いて賣ることにあるのです。私は自分の力は別として、學校生活のときから、新聞をやつて見たいと思つてゐました。しかし大學卒業の當座は、然るべき手づるもありませんでしたから、しばらくその志望を伏せておきました。そして青年としての人なみの思案の結果、研究に興味をもつてゐた財務關係の大藏省に入れてもらふことになつたのです。總じて私たちの頃までは役人希望が多かつたので、何とはなしに引づられたことも事實です。しかるに近ごろは大學卒業生で新聞に向はれるものが少なくありません。結構です。大新聞の入社試驗には志望者が何百人も集るといふ盛況です。これは世間がセチ辛くなつたばかりではありません。役人をさう有い難いものと思はぬやうになつた點もありませう。否、世のなかの就職の傾向も時とともに變るものです。役人志願の盛んなのも、私たち明治時代までのものをクギリとしてゐるではないでせうか。大正の御代となつてからは、景氣も出て來、實業家の力も認められ、物質生活觀からも實業界に向ふ人が多くなつたやうです。形式上の標準ですが、學業成績のよいものも、實業界に向はれます。私たちの先輩の三菱銀行の山室宗文氏なども、私たちに實業界の將來を說かれ實業界入りをすすめられました。しかし、私たちの組は、やつぱり官界入りが多つたのです。そして近ごろ實業界からさらに方面を變へて新聞界に入りたい人たちが多くなつて來ましたのも、職業開拓の新傾向として良いことと信じます。巡査までが學士といはれたのは、いまは珍しくもありません。新聞記者も大學教育を受けたものが多くなるのは、うれしいことです。——

それはとにかく、役人となつた私は、研究癖からする財政の實際に首を入れて益することは多かつたのです。稅の研究——とくに關稅の研究は面白かつたのです。白狀しますと、大學の卒業試驗のとき河津博士から出された關稅問題の答案の出來が非常に惡るく——それが却つてその方面の研究に手をつける緒ともなり、學位論文の主題とするに至つたことなど思ひ出すと、おかしくなります。また豫算の仕事を覺えましたことも、

今日まで役立つてゐます。それは國の財政の批判といふうへからのことのみでなく、いろいろの經營の實際にも、役立ちつつあります。――その大藏省をやめて報知新聞に入ることになつたのは、町田忠治さんのお勸めによるのです。養父の三木善八からではありません。もちろん町田さんが「報知」に入るについて、三木の緣者としての私をすすめられたものであることは改めて註釋するまでもありません。とにかく三木からは一言も社へ來いとは申しませんが、楚人冠などが直接間接に私の新聞入りを促されたことはあります。それは、私が箕浦勝人先生の御子息多一君（現報知取締役）を富士紡績會社にゐたのを迎へにまゐりましたときも、翁は多一君の新聞入りを勸めもせず、一切本人の自由に任されたのと似てゐます。否翁は、多一君に對して、小學校をきめてやつた以外は、中學も商業學校も大學も就職も一切本人の心任せにしたと申されてゐます。――私の大藏省をやめましたのは、大正八年の秋です。私としては、七年あまりの月日を過して來ましたので、それから年來の希望である新聞といふスキな道に向ふとは申しながら、思ひ切ることも大へんであり、感慨も深かつたのです。それは、モウ少しすると進級するといふやうなことからではありません。誰でもさうでせうが、その空氣に住んでゐますと、何となく侘しく離れにくいものです。新聞記者流に申せば一と口に「小役人」といはれる社會にぶち込まれてゐる私が、それに執着をもつてゐたのですから、いま考へるとおかしいのです。私の同窓で大藏省に入りましたものは、いまの海外財務官の津島壽一君や法制局參事官の金森德次郎君や臺灣銀行頭取の島田茂君などですが、みんな四年も判任官で引ぱつておかれました。よく晝食の後で裏門から濠端に出て、春先きなど、しなだれる柳の下で、いろいろの話をして油を賣つたこともあります。用命の客を乘せてゆく車夫が、「ここにはお上みの金が澤山あるところ」などとマコトしやかに說くと、「さうかい」と車上に眼をパチクリさする喜劇なども、おもしろい記憶です。それからそれへと役人時代の回顧は、年ごとに忘れつつも、なほ思ひ出されるものがあります。私は新聞へはいつた當座、編輯局長に「役人根性」といふものを書いてみやうかと申したが、ツイそのままになつてゐます。漱石の坊ちやん流に書いたら面白いことがあります。つつましやかな役人たちが、晝食時になると、茶瓶のついた湯のみ茶碗と辨當箱とをもつて食堂にゆきます。そこには判任官と高等官とに分れてゐて、むろん判任官食堂に入ります。そこでウドンのカケを一パイ（大正三年ごろはたしか三錢）たべて來ます。月給でもらう日以外は、例の如くにやつてゐま

す。かうして六七十圓の月給で子供を中學なり女學校なり、さらに高等の學校へ通はしてゐるものもあるのですから、エライものです。税務署長生活も神戸税關生活も、長い期間ではなかつたが、地方色として思ひ出も少なくありません。とくに成金の都の神戸に大正六七年ごろ働いて、實業家たちから「割の惡るい商賣」として過した役人生活は、みぢめなものでしたが、また良い訓練でした。しかし役人生活として記念すべきことは、いよいよ明日やめるといふことにきまつた大正八年十一月十二日の夜のことです。當時私は本省の主計局に勤めてゐて、大正九年度の豫算編成の仕事にたづさはつてゐました。時の内閣は、原敬さんの政友會の天下です。よいつぱりの原さんは、おそくなるのも平氣で閣議をやります。私たちは廊下一つ隔てた部屋で、おとぎをするのです。相當つらいと思ふ夜がつづきました。電車がなくなるからといつて漸く歸るとか、二時すぎまでも待たされて友人の宅へ宿つたこともあります。しかも、明朝は九時に來てくれといふのですから、やりきれません。尤も私の關係してゐた遞信省の豫算などで、野田さん(遞信大臣)が、私たちの部屋へやつて來て、この經費は認められたといつて來ると、高橋さん(大藏大臣)が、「ウンニャ認めぬ」といひ、それならば、モウ一遍相談しなほさうなどと、大山の崩れるやうな笑ひを殘して二人がわかれるといふ他愛もないこともありました。それでも、原さんといふ人は、なかなか如才ない人であつたと思ひます。豫算閣議中、各大臣とともに西野主計局長以下私たちまで、晝食の同じテーブルに付いたことがあります。議會の豫算總會などで聞いた方もありませうが、原さんは常磐津でもやつたらばと思はれるやうな美しい聲で世間ばなしを絕やしません。正面の高橋さんと野田さんとが、相槌を打ちます。かうしたことのあつた次の日に――すなはち十二日に大正九年度の豫算は大體出來上つたのです。――實は私は、その前に役人をやめねばならぬことを決意して局長の西野さんに話したのです。とくに相當祕密の多い豫算の仕事に關係してゐて、報道することを業とする新聞に入ることは何となく氣がとがめますので、豫算にかかるまへにやめたいと申したのです。しかるに西野さんは豫算の形が出來るまで待つてよいとのことでした。そして西野さんは他の人たちにも話されず、いよいよやめるときになつて上申してくれたのです。私はやめる少し前、大藏大臣官邸で、高橋さん以下の人たちと夕食をたべましたとき、私がこれから新聞に入るべきことも知らずして、盛に新聞界の惡る口を申してゐるのを聞きましたときは、イヤーな感じがしたのです。とにかく私は西野さんに對して、私の一生涯の轉換期

とした記念すべき大藏省生活を氣持ちよく打切らしてくれたことを感謝してゐます。また、その後新聞生活に入つても、本來の意味の祕密は一切口外しませんでした。否、記者そのものも知つてゐる祕密(それは役人社會の無分別なのとはちがひます)をなかなか筆に載せず、ソツトたくはへて置くものであることは、やがて月日を積むにつれてわかつて來ました。

三

バーナード・ショウは、有識階級の婦人のために書かれた社會主義および資本主義の解説のなかに、かういつてゐます。

『…私たちは新聞とか小說とか芝居とか活動とかからとるロマンチイツクな下らないものを頭に一杯詰め込まなければ精神機能の無使用から馬鹿になつて死んでしまうでせう。こんな下らないものによつて、どうにか私たちは生きてゐるのです。しかしてこいつは無茶に私たちに對してあらゆることを僞り敎へるので、これがため眞實の世界において私たちを多少氣狂にしてしまふのです。…このやうに申すことをゆるして下さい。私自身書物や戯曲の作者であるので、貴女方より餘計にこの愚かさと危險とを知つてゐるのです…』と

隨分ショウ一流の皮肉な言葉ですが、また味ふべき文句です。新聞人をもつて、あらゆることを僞り敎へるといふのは、不屆千萬な表現です。惡るいアメリカの新聞記者氣質のものや、いはゆる羽織ゴロ時代の記者はいざ知らず、いやしくも良心ある記者に對しては、極度の侮辱です。尤も世のなかには陰へ廻つて新聞のことを惡しざまにいふ人は少なくありません。そのくせ、その人たちとても新聞がないと困ります。一昨々年イギリスで炭坑ストライキがありまして、それに新聞の印刷職工が同情罷業をしましたときも、そのために一般人は一向世間のことがわからないので困りぬき、却つて勞働者側に對する反感を起さしめ、つひに資本家側の勝とならしめたことほど、新聞は有り難がられたのです。わが國でも震災のとき同じやうな例をもつて居ります。災厄に遇つた人たちは、その日の食物と雨露を凌ぐだけの家を求めました後に、否それと同時に欲しがつたのは新聞です。私たちが僅かの活字で極めて大マカな記事を掲げた號外を自働車でくばりますと、飢えたものの如くにほしがり、有り難がられたものです。當時陸軍から公報が出て辻々などに貼り出されましたが、世間の人たちは、それに集まらずして平素はウソを書くといつて攻撃する新聞に集つたのです。公報そのものが時代おくれの片假名で片くるしい文章體で書いたりしてゐたことにも關係しませうが、一般人が本然において新聞に

對する親しみをもつてゐることは、必ずしもヒイキ目にのみ見たことでもありますまい。しかし、ショウのいはゆる下らないといふことが世間の腹のなかにもつ評價であるとしますれば、新聞人こそはまことに報ひられることの少ない仕事に苦勞してゐるものといはねばなりません。

かやうに報ひられることの少ない仕事であるにかかはらず、新聞人にならうといふ人は少なくないやうです。だから自らに求むるところのない君子人の心がなくては、この仕事はやつてゆけません。世に功を認めてもらひたいといふやうなことは頓着せず、新聞事業そのものに精進する心がけが必要かと思ひます。それはとにかく、私の見るところをもつてしますれば、この事業ぐらゐ人的要素の働きかけるものはないかと思ひます。とくに記者において然りとおもひます。萬朝報は黒岩涙香によつて天下第一を唱へ得た時代があつたではありませんか。この意味で、今日榮えてゐる新聞も、いつまでも明日の地位を要求し得るとは限りません。もとより近代の新聞戰が、資本の力によることの少なくないことは認めます。その擴大してゆく通信網にせよ、その日に進歩してゆく印刷機械にせよ、その宏壯な建築物にせよ、これを整へるには少なからざる金がかかります。しかし人的要素の力づよいことは、それ以上かと思ひます。否、資本だけもつてくれば何でも出來るといふ考へで新聞を起したり、他の新聞を統御してゆけるなどといふことは、少くとも日本新聞發達の跡を見てうなづかれることではありません。おそらく蘇峰先生も、かく感ずるでせう。村山本山の兩先輩も同樣にみとめられるでせう。要するに資本家根性の人たちの新聞經營眼は資本の力を過大視する傾があります。さういふ人たちは、機械を増設するといふ場合などには——その形も殘りますので——多くの場合に贊成されますが、記者の給料をあげるといふやうなことになりますと澁りたがるのです。もとより、新聞經營も支拂手形を書く人によつてアヤツラれ、資本の力の働きかけることの相當強いものであることは後にも申しますが、さりとて人的要素の大切なことを看過することはいけません。またよく實業家の口からもれる「金でもまうけたら新聞でもやつてみたい」などいふ考へ方は、やめてもらひたいのです。かつて二百萬圓の資本ではじめた大正日日新聞が、なかなか良い新聞を作られましたが、不幸にして半年位で經營を變へることになつたといふのも、やつぱり人的要素がシックリしてゐなかつたことが大きな原因の一つではなかつたかとおもはれます。とにかく人的要素の新聞事業に働きかける力の強いことは、クドいやうですが、よく呑み込んでおいていただきたい。私たちが、組合

組織でやつて來た「報知」を株式會社組織に改めますときに、これまで培ちかつて來られた人たちの功を思ひ、資本力と對抗するものとして人間力を然るべく見積るといふ方法を採りましたのも、上述の信念から割り出されてゐるのです。

序でに申しますが、新聞人の顔つきには特色があると申す人があります。それは會社員顔でもなく役人顔でもなく辯護士顔でもないといふのです。かつてニユウヨークワールド紙の寫眞部長ダブルユ・ジイ・ハリス氏が、試みにアメリカにおける有名の摸範記者十二人の顔を集めて綜合寫眞を作つたことがあります。それがここに掲げられたものです。これまで新聞記者には記事を嗅ぐ鼻（ノーズ・フオア・ニユウス）があるといはれてゐましたが、この寫眞に見るとほり、むしろ耳に特長があらはれてゐます。ハリス氏も記事を聞く耳（イヤース・フオア・ニユウス）に注意せよ、しかも額といひ眼といひ何となくウイルソン大統領のおもかげがあるといつてゐます。申すまでもなく歐米人は日本人とは骨相がちがひますが、どちらかといへば鼻といふ獸物性で表現されるよりも耳といふ人間性で表現さしてもらう方がよいでせう。それは記者についてのことですが、御客つき合ひの多い廣告に働く人たちを別にして、新聞人は總じて違つた顔付をしてゐます。――鏡に向つた私自身の顔などは平凡すぎてゐますが――。


(木版127)

四

私は、いよいよ新聞の本體について書いてゆくに當り、まづ申してみたいのは、新聞用紙についての問題です。それは記事や廣告を植付ける地面であるからです。私はその大きさについても、價についても、需要供給の關係についても、いろいろの主張をもつてゐます。なかには自分の主張の通されたものがあり、恥しながら思ふことばかり進んで、どうにもならないものがあります。

私は、お互の習慣が恐ろしい力をもつて、生活樣式なり仕事のやりくちに働いてゐることに、むしろアキレてゐます。從つ

て、これを打破して改革なり革命をおこし——根こそぎ變へてゆくといふことは、なみなみならぬこととおもひます。もとより、物の在るには、在るに都合のよい理由に基いて、それが積み重ねられ繰り返されてゐるものもあるでせう。けれども、なかにはただ偶然に深く考へもせずして採用されたり、不自然不合理でありながら繼續されてゐるものも少なくないやうにおもひます。ことにヨーロッパなりアメリカなりから輸入されたものに、それがあります。——私はこの意味において、わが國における普通の新聞の大きさの不合理なことを思ふのです。第一に讀者は、不自由を感じませんか。折り疊むうへにも、小さい机のうへにひろげるうへにも、汽車や電車のなかで讀むうへにもとくに交通の繁くして設備の不完全な東京市内の電車のなかなどで見るうへにも、不便であるにちがひないとおもひます。それから新聞を利用する人、とりわけ廣告を出す人にも不利益であらうとおもひます。少さい廣告を出して功能をあらしめやうとする人にとつては申すまでもありません。よしんば大きい廣告を出す人にしましても、一ページそのものが少さくなるだけ値段は下げらるべく、しかも一ページとしての功能に變りがないからです。なほ古るい新聞を利用して養蠶や包紙の目的に向ける場合もありますが、それはどちらにしても大した變りはなからうとおもはれます。さらに新聞社そのものに取りましても、少さい型の方が都合がよいとおもひます。讀者を増すために見本として配付するうへにも、議會時期とか特發事件について記事の輻輳するために増ページをしなければならぬ場合にも、また繼續的に紙幅を増すうへにも、それが手輕であり經濟的であるからです。ことに八ページから十ページを經て現在の十二ページとなり、これからさらに十四ページなり十六ページとなるでせうとおもふと、このことを切に感じます。多くの場合に繼續的に紙幅を増さうといふときには、記事と廣告との收容量を半分半分に見てソロバンをとつてゆくものであることをおもふと、無理に廣告をとらねばならぬことの少ない點において、小型の方が便宜です。しかるにいまの新聞の型は、むかしながらに大きいのです。尤も明治の初めには今のよりも大きい型のものがありました。郵便報知新聞の如き、ひろげますと疊一枚にもなるといふ馬鹿げて廣いもので「お座敷新聞」の異名さへあつたのです。それをいまの型にしたのは明治十九年の秋からです。世間は習慣によつて、今の型を當然と信じてゐるものが多いのですが、これを半分にしたタブロイド型にしたならばといふのが、私の年來の主張です。しかし、それを行ふ力の乏しいのを嘆き、かつ悔いてゐるのです。道理としては上述の諸點が

與げられ得るにかかはらず、いまに行はれません。第一には讀者が習慣を改めやうとしないからです。震災の直後と記憶しますが、たしか萬朝報がやつてみましたが、「雜誌のやうだ」といふ一言のもとに喰ひついてくれませんでした。第二には新聞社自身において斷行する勇氣がないからです。對内的には機械を變へる問題があり、對外的には他の新聞社との協調がなくては主として營業上の立場から危ぶないとおもふからです。楚人冠の書いたものによると、ノースクリッフ卿もこれを試みたことがあるといつてゐます。それは、かつて彼がアメリカへ行きましたとき、ニユウヨークのワールド紙の社主から頼まれて編輯一切のことに當つたとき、理想としてタブロイド型のものを印刷さしたのですが、それもタッタ一日やつてみたにすぎなかつたとのことです。結局は時流に抗することが出來なく、彼の經營してゐたロンドン・タイムスもデイリー・メールも昔のまゝの型になつてゐます。東京朝日新聞も、アサヒグラッフを日刊としてタブロイド型で出しましたが、震災後は週刊にして寫眞本位のものにしてしまひました。惜しいことです。尤も、同じ社内でやつたといふことは如何なものでしたらうか。この點については、私は夕刊をつくることも別にすべきものと考へてゐます。――第三には製紙會社も、器械の關係などもあつて、かうしたことを實行したら困るなどといふ問題を考へたものもないやうです。しかしこれが成否の主力となるものは、何といつても新聞社にあります。つまりは斷行の勇氣がないからです。尤も新聞社はいろいろ社會の出來ごとについて改革を唱へますが、その實行になると容易に手をつけません。近ごろも産業合理化などいふことを盛んにとなへますが、さて新聞事業そのものには殆んど應用されてゐません。このことは後でも申します。とにかく先きに立つてやつてゆけば讀者はついて來べきはずです。また將來のことを考へると、やがてこのことに眼の覺めるときが來るでせう。製紙會社も生産品の大部分を占むる新聞紙のことですからこの要求に應ずべきものと信じます。この意味において「我城主義」を取り去つて、社會共同の利益のために相協調してゆくべきではないでせうか。私はドイツやフランスでタブロイド型の新聞を見たり、震災前のアサヒグラッフを思ふと、何となくなつかしくなります。――もちろん編輯廣告の内容上のことは別にしまして。

五

それから新聞用紙の價については、とくに私には少なからぬ思ひ出があります。私の新聞社に入りました頃は、値段が高

つたのです。新聞用紙代は經費の少なからぬ部分を占めてゐる意味において、このことは新聞經營上の切實な問題でした。すなはち大正八年ごろは、四十五ポンドの紙（紙の品位は主として目方が示すもので、製紙會社との契約書には四十五ポンドの重さのものとしてありますが、事實は、それよりも重く四十七八ポンドあるのが普通だとおもひます。それは製紙機械の關係などによるのですが一連（新聞紙千枚）につき七圓でした。外國からの輸入紙とくらべると高く、原料や勞銀などの採算をしてもやつぱり高すぎるとおもつたのです。尤も當時は、戰爭による景氣のお影で、新聞の讀者なども増すばかりです。大中小の各紙とも用紙に對する需要が多く、製紙會社としては供給に不足を感ずる位です。新聞社は頭を下げて買ふといふ狀況であつたから、高くても賣れ高くても買はねばならなかつたのです。現に私の「報知」に入りましたころは、朝刊四ページ夕刊四ページで、如何にも紙幅が狹い、いままで夕刊を出さなかつた新聞もそれを出すやうになると、見くらべて記事も少ない――何とかしたい、そこでページを増さうとしても、製紙會社が紙をくれません。漸くのことで王子製紙會社に泣きついて、一枚の半分（二ページ）だけを朝刊に添へることにしたのは、忘れもせぬ大正九年六月十六日のことです。それが出來たあと間もなく早稻田に大隈老侯をたづねましたところ、新聞を振つてみて中から落ちる新しい二ページを眺め、一文字の口を崩して喜ばれたといふ記憶もあります。とにかく當時は用紙の需要に應じきれないといふほどでしたから、その値段の高いことも我慢せざるを得なかつたのです。その外に私たちの神經を高まらしめましたのは、表面上は各社共通の契約値段になつてゐますが、供給量の如何によつて割引などによる開きがあり、從つて競爭上の對抗力を見出さねばならなかつたといふことです。しかも、試みに外國紙の相場を調べてみますと、引き合ふどころか相當安いではありませんか。よし、自衞のためです、輸入してみやうと決心したのです。かへり見れば報知としては、先輩の人たちによつて外國紙の輸入を試みられたことは數回あります。いはば製紙會社にとつてのニガ手です。記憶をたどりますと、その第一回は明治二十一年です。當時はまだ內地の製紙事業が幼稚であつて、主としてフランスから取り寄せたのです。第二回は明治三十年で、アメリカから輸入しました。第三回は、明治三十八年です。申すまでもなく日露戰爭の結果としてエライ景氣が出て新聞用紙の供給に不足を告げた頃です。このときはスウェデンから輸入しました。これによつて競爭戰に臨み、とくに媾和會議當時の新聞界を有利に游ぐことが出來たとのことで

す。かういふ經驗も手傳つて、再び外國紙を輸入してみることになつたのです。もちろん、單に値段の點ばかりで決行したのではありません。いふまでもなく内地製紙會社とのデリケートな關係も考へねばならぬからです。もしものことがあれば新聞事業の食糧ともいふべき紙の供給道が孤立することになるからです。また、スウエデンなり、ドイツなり、フインランドから印度洋を通つて來ますには二ケ月もかゝり、まさかのときの用心としても二ケ月の貯へをもたねばなりません。(いまでも内地製紙會社も東京なり大阪なりに同じ見當の貯へをもつてゐるはずです)。それだけまた倉敷料も金利もかゝるわけです。また、急の場合の用意として、價は比較的高いが一ケ月見當で着くアメリカ紙のことも考へ、また實際にアメリカからも輸入してみました。かういふ計畫の實行には金融上の故障があつてはいけませんので、社長の町田さんや三木なども少なからず心配しました。とにかく斷行することになつて注文を發すると同時に、その夏私は見學のため北海道行を企て、製紙工場を見ました。苫子牧に放たれてゐる馬の草をむさぼつてゐる景色や、シコッ湖の妖魔でも出て來さうな山奥のサブライムな景色も、當時の私にとつては詩境をさまようといふ氣分にはなれませんでした。そして、いよいよ十月になるとスウエデンに注文した紙が神戸に着きました。それが新聞界に知れました。噂さとばかり聞いてゐた製紙會社も、いよいよ横濱に入港されるとともに驚きました。私たちは製紙會社と交渉したのですが、カルテルをつくつてゐる會社側はなかなか強いのです。ことに先達死なれた富士製紙會社の穴水要七君などは強いです。私たちは、横濱から東京へ持ち込む間に話が割れることにでもなつて、紙の供給が斷たれでもしたならば、號外を出して讀者に謝さうとさへ考へたのです。しかし、話は容易にまとまりません。寒い冬のいく夜かがつゞきました。私は一週木曜日の朝一回づゝ早稲田大學に講義にゆきますが、十二月の最後の講義のあつた日ですから、多分二十日頃でせう——講義もそこそこにして社へ歸りましたとき、話がもの分れになり、私たちは輸入紙によつてやつてゆくこととなつたのです。そして、それは大正十二年まで續きました。しかも、この事件は新聞界にも製紙界にも、ただならぬ渦を捲き起こすことになつたのです。ことに「報知」に關するかぎりにおいては輸入紙によつたために思ふやうな擴張も出來、十ページから十二ページへと紙幅を增すことも出來たのです。また震災にあたつても樂に乘り切ることが出來たのです。

——それと申しますのは。

六

大震災は、都もありとあらゆるものを搖り動かし、赤い舌で甜めつくしてしまひました。そのなかに新聞用紙はどうなつたでせう。何と申しても、報道機關にとつては、紙の有無は仕事の出發點です。これがなくては、たとひ燒け殘つた建物と機械とがありましても、どうにもなりません。不幸にして、内地の製紙會社の用紙倉庫は燒けてしまひました。しかるに私たちの住友倉庫に預けておいたものは、當務者の注意――そのことは住友銀行の燒け殘つたことに對すると同じく話題になつて殘つてゐますやうに――によつて助かつたのです。もちろん助かつたと申しても、直に倉庫を開けて取り出して用ふることは出來ません。周圍の火氣が強いからです。火を呼ぶ危險があるからです。それについても、また幸にして、も一つの良いことがあつたのです。それは外でもありません。――一體外國から來ました用紙は、一旦横濱港で荷卸されて艀に移されます。それがよく品川沖で見ますやうに――何艘もの艀に繋がれて、東京へもつて來まして、隅田川べりの倉庫に入れられるのです。――さうした艀が、いよいよ着いて、これから倉庫へ入れやうとするとき、ガラガラと地震がやつて來たのです。火事は擴がります。火の子は落ちます。これでは堪らぬといふので船頭たちは沖へ出て避難しました。幸に火の子もかぶりません。――それを調べさしてみると、すぐ使へるといふのです。この用紙があつたればこそ震災後間もなく新聞を發行することが出來たのです。あの紙がなかつたとしたら、どうにもなりません。もとより記事その他の關係で平常どほりの紙幅を印刷することは出來ません。二ページから四ページへと次第に進んで行つたのです――しかるに燒け殘つた他の新聞はどうかといひますと、内地の會社の倉庫――先きに申した二ケ月分ぐらゐの貯へ――が燒けましたため、大阪から回送するにしても、北海道などの産地から持つて來るにしても、不便な交通機關のため少なからぬ日子がかかるので困つたのです。――製紙會社の人たちも、頭を痛めたわけです。

九月の四五日ごろであつたと記憶します。私が脚絆がけで營業室で働いてゐますと、やつぱり同じ格恰をした穴水君が突然やつて來ました。『どうか紙を分けてくれ』といひます。燒け殘つた某社にやるためで多くはいらぬ、ホンの數日間、荷物の到着するまでの分だけでよいと申します。かういふ危急時において新聞の競爭心理で働くのは罪です。私は、心よく引き受けました。ただし、それには條件があります。その某紙は花柳界の記

事を載せてゐますが、私の解釋では非常時の新聞としては良いこととおもひません。あゝいふ記事を載せるために貴い紙を、此の際に分けてやりたくありません。その點を充分呑み込んでくれるならばといふ條件をつけたのです。宍水君は、その旨を某社に通ずることを諾して、話がまとまつたのです。私にとつては先きに分れ話になつた製紙會社へ紙を賣つてやつたといふ（證文もあります）こと、勝氣一點張りの宍水君がその相手であつたことを、いまだに忘れません。しかし某社の花柳界の記事は、たつた一日しか私の申出を容れた形になつてゐたにすぎませんでした。

かうした喜びもありますが、一面には心配もあり、苦心もあり、情けなくおもつたことも白狀しなければなりません。それは最初輸入したものの中に薄いものがあつたことです。先きにも申したとほり、一般の製紙會社との契約にしても四十五ポンドのものといふことになつてをり、實際にはそれよりも厚く四十七八ポンドにもなつてゐますが、私たちの輸入したものには四十ポンド見當のものもあつたのです。それは日清戰爭當時輸入したときの先輩の經驗などから大丈夫とおもつたからですが、機械の速力などの點もちがつてゐまして、うまくゆきません。工場からはキツイ抗議が出ます。また實際機械場に行つてみますと無理がありません。よく切れさうで、なかには裏刷りの字が表へ滲み出て來るのもあります。編輯からの苦情も烈しいです。さらにこれを受けた販賣店なり讀者なりは承知しません。なかにはそれを見よとばかりに送りかへして來るものもあります。對内關係はともかくとして、對外關係には一方ならぬ苦しみをしました。それに古い新聞を發送のときの下紙として利用する人たちは役にたたないといひます。それは長野縣あたりからの苦情です。また果物をつゝむために用ふる東北や靜岡地方などからも苦情が來ます。もちろん一番心配なのは讀者關係です。讀めないといふのです。また廣告するのはイヤだといふものもあります。このため營業關係の人たちは、非常に苦境に陥り、それぞれ各地に出掛けて輸入紙のやむべからざる理由を述べ、諒解を求めにいつたほどです。また、大體かういふ場合には、競爭新聞紙としては、これを批難材料とすることは當然であるべきにかゝはらず、そのことの割合に少なかつたのはせめてものことでした。これには私たちの輸入紙によつて間接に利益を得た關係もあつたではないかとおもひます。言葉をかへていへば、輸入紙によつて内地製紙會社が新聞社との契約値段を下げたからです。先きに申した一連七圓もしたものが、次第に下つて、大正十三年には五圓になりました。丁度二割八分五厘――ザツト三割の値下げになります。各社から發表される考課狀中營業

關係を知る損益計算表には用紙代としてはハッキリ掲げられてゐません。大阪朝日新聞の考課狀中の勘定科目の「新聞原料社費」(昭和三年上半期千二百六十餘萬圓下半期千二百九十餘萬圓)のうちには用紙代は少なからざる部分を占めてゐるでせう。また大阪毎日新聞には「新聞原料」として昭和三年上半期五百七十餘萬圓下半期五百六十八萬圓餘とあります。これがもし全部用紙代であるとしますれば、單價で割つてみますれば、大體一ケ月の平均使用量なり、一日の發行部數もわかるわけです。(雜誌などの出版物もあるでせうが、それを別にして)尤も契約してゐる單價によつて計上してあるか割引値段によつてゐるかによつてちがひます。いろいろの經費のうちで用紙代の占める割合から打算しますれば大體の見當もつきますが、それは申しますまい。もちろん、先きの數字は東京大阪兩紙の合併したものです。また大體の見當としては、よく爭はれてゐる大阪毎日と大阪朝日との發行部數の比較も出來ますが、それも私の胸算用で樂しむだけにしておきませう。ただ私がここに援用したいとおもうことは、新聞用紙の値下による理由がどのくらゐあるかといふ點だけです。假りに大阪毎日新聞の場合において半期五百六十萬圓見當の全部が新聞用紙代であつたとしますれば、用紙の値下げなかつた場合に七百八十三萬圓と要すべかりしことを考へますと、差引二百二十餘萬圓を利した計算になります。もしさうであるとすれば、この値下げによる利益がなかつたとしましたならば、同社の利益は、それだけ減ずる筋合ひであります。しかるに下半期の利益九十六萬餘圓、上半期の利益九十三萬餘圓となつてゐますから、他の關係にして變りがないものとすれば、結局同社の決算に缺損となるべきであつたといひ得るでせう。もとより、以上のことは私の假定條件をもととしての推算です。とにかく大阪朝日新聞が昨年は上下期とも一割五分を、大阪毎日新聞が二割の配當をなし得て餘裕があつたといふことは、新聞經營上の經費の少なからざる部分を占めてゐる用紙代が低落されたといふことが作用してゐるといふ理筋は認めてもよいでせう。さらに見方を變へて申しますれば、製紙會社としては他の條件が變りないものとすれば、それだけ利益を減じたわけです。尤も値下げのことは一般に物價の下落につれて下るべき傾向もあつたでせうが、反對に需要が年とともに增して來たといふ點からは相殺さるべきものですから、ヤツパリ輸入紙のあつたことが値下げの強い材料であつたといひ得るではないかとおもひます。この意味において王子製紙會社や富士製紙會社について、その配當率を調べて見ますと、多いときには五割も分けたこともあります。大體大正六年から二割から三割の配當をしてゐたものが大正十一年から一割五分見當に下げられてゐます。ここに參考のための兩社の大正五年以來の配當率を掲げて見ませう。

	大正五年	六年	七年	八年	九年	十年	十一年	十二年	十三年	十四年	十五(昭和元)年	昭和二年	三年
王子製紙會社 上	・三三	・三三	・一六	・一六	・一六	・一六	・二二	・一七	・一六	・一五	・一六	・一六	・一五
王子製紙會社 下	・一八	・一二	・一五	・一六	・一五	・二〇	・一七	・一五	・一五	・一〇	・一五	・一五	・一五
富士製紙會社 上	・二四	・二〇	・一八	・二五	・二〇	・二〇	・一五	・一五	・一五	・一五	・一五	・一五	・一三
富士製紙會社 下	・一七	・一五	・二〇	・二三	・二三	・二〇	・一五	・一三	・一五	・一五	・一五	・一三	・一三

いふまでもなく配當率のみを標準として會社の經營を批評することは出來ません。貸借對照表の各科目をよく檢討し利益處分の關係をも見なければなりません。配當率は株主關係を考へてやる場合が多いのですから一概に申すことは出來ませんが、二割三割の配當の大きすぎることと、現在とても一般の不景氣にかかはらず一割以上の配當をつづけてゐるといふことは、新聞社の計算のそれに比して割がよいといひ得るでせう。ましてや製紙會社の利益の源泉は主力を新聞用紙においてゐるといふておいておやです。私は徒らに各事業の利益の多少などいふことについて、彼れ此れと申したくありません。ただ新聞は社會の公器であるといふ立場を忘れるやうな經營をするものは、嚴肅な意味において正しいと思ひません。過分の利益配當することは如何かと存じます。また製紙事業としましても、文化の基調となる事業に食糧に等しきものを供給するものである意味において、なるべくそれが一定の利益計算のもとに安くするところを心掛けてもらひたいのです。かう考へると、私は社會公正の立場から、私の上述しましたことは正しいものであると信じます。――もしそれ「報知」としても、輸入紙によりましたがため相當の經營上の利益を得たことを記せねばなりません。しかし彼の配當は一割を出たことはありません。しかもはじめから新聞用紙の値段が五圓見當を正しいものとしてゐましたから、そこに落ちついた大正十三年をもつて輸入紙を打切ることとしたのです。またこれが單にソロバン勘定だけからしますれば、しかるべき貿易商と組んでやりましたならば少なからざる利益もあつたでせうが、もともと自衞の立場からしたものですから、一切さういふ範圍に踏み出ませんでした。くりかへて申します。新聞は社會の公器です。それ自體の經營は嚴肅であつてほしいのです。また製紙事業も、よくこの公器のために關聯する事業であることを記してもらひたいのです。近くは木材關税の引上げもありました。昨年はパルプの關税引上運動もありました。保護關税の糸は緣をたぐつて次第に増してゆく傾きがあります。私は、こんなことについてもそれとはなしに心配してゐます。

×　×　×　×

私は、なほ新聞用紙について、その需要供給關係から出發した問題を申し殘してゐます。それは「新聞マルサシズム」として、次號に筆をつなげてゆきます。

――昭和四年四月五日夜――

東京新風景

(一)「金座」

中川一政

凡そ畫家は線と色とさへある所なら、そこへ入込んで畫を描くものである。

線は素描となり、色は明暗となり畫面を構成するのである。

だから東京が如何なる風に變らうとも私は文句を云はぬ心算だが、また變れば變つた面白味が出るものだが、それと同時に出來てゐた面白味を失ふのは如何にも惜しい。

しかし今のところでは濱町あたりの所謂金座、駿河臺のあたりが新東京で、建設が不充分な代り、また破壞されずに殘つてゐる舊東京も見られる。

圖は其金座で、濱町中ノ橋の角から明治座の方を見てかいたのである。晝だから人通は澤山ない。此甲板のやうな新しい街路を肥料車が通るのが異樣に目立つ。そして街幅が廣いから此馬力を曳く人が武裝した戰人のやうに勇しく見える。そして街道は撒水で青空に寒く光り、人影が黑くはつきり見える。

駿河臺も金座とさう大した變りはない。たゞ道幅が廣くなると空が近くなつたやうな氣がする。ニコライのドオムはひどく貧相に見える。前のニコライを知つてゐる人にとつては今度のは瞥物のやうな氣がするだらう。

五番町のあたりも新東京になつてゐる。

これから推して將來の新東京を頭に浮べると、私は何か淋しい氣がする。

何しろ輕快で、明るくて自ら(おのづか)ラッパズボンを穿いて歩きたくなるやうな建築である。

そしてそこに住む人は皆、文學や美術や音樂やマルクスやスポーツの理解を持つて、さういふ事を流暢に語るに違ひない。

しかし一人殘つても剛情を張りとほすやうな人は住みさうではない。



妙に建築にねばりがない。執着がない。よい着物をきると着物に遠慮するから力を出す氣になれない。かういふ建築に住めば矢張建築に遠慮して力が出しにくいだらう。

今に此街路に晝提灯をつけたダイオジエネスが現れて來なければよい。

東京の景色は宮城のめぐりの濠端より美しい所はない。線と色とあれば畫が出來ると前につたが、お濠端の景色はその外に氣品と情趣とがある。

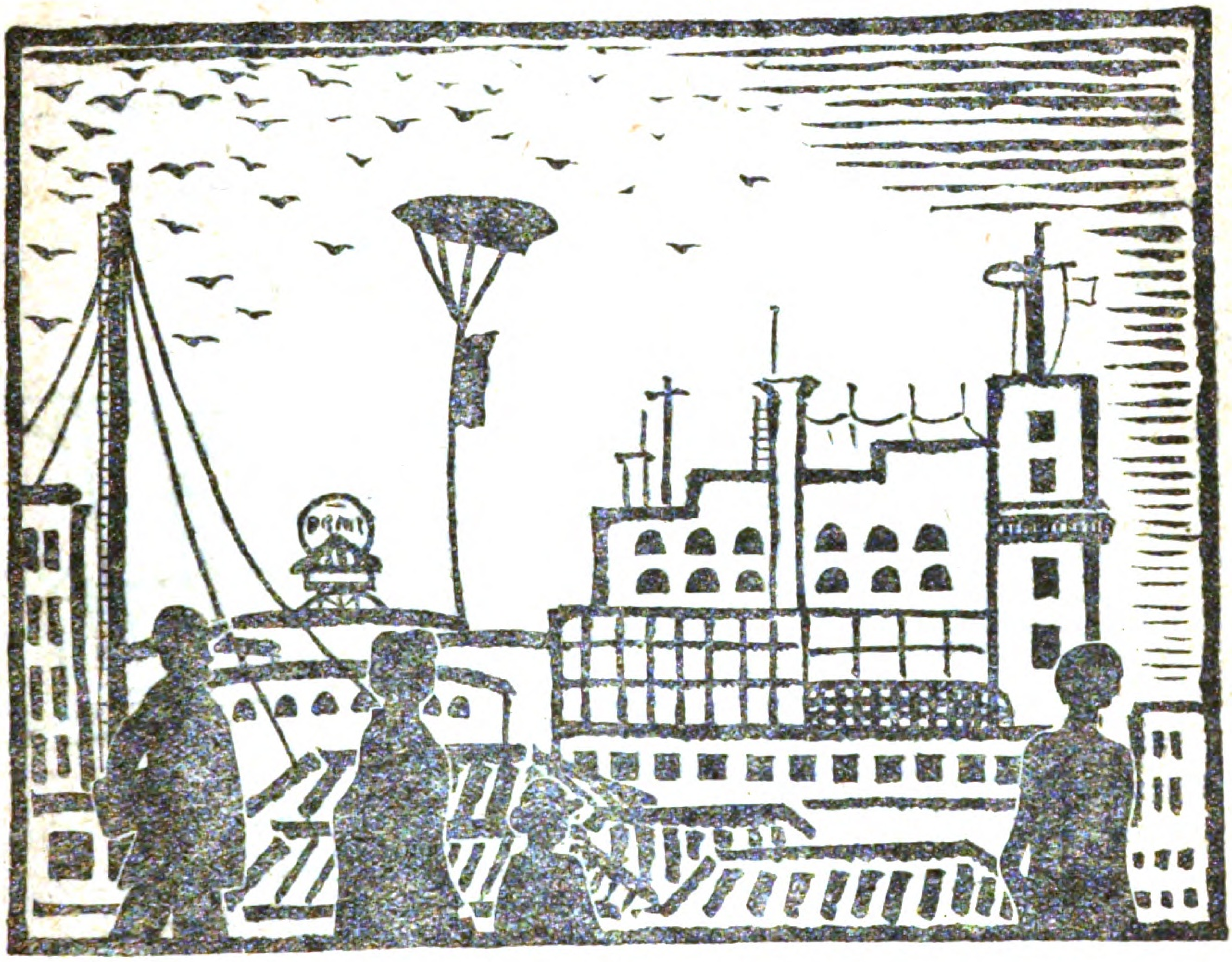
五番町から參謀本部の下を通つて櫻田門のところへ歩いて來る。五番町公園へはいつたり、半藏門のところへ一寸はいつて見たりする外に、一寸陸軍省の門のところへ立つて見る。此建築は今となつては凡そ古いものだが素直で質素で無駄がない。

例へばヴエランダの欄干は簡單な圖(略)の如きものである。今私が歩いた金座や駿河臺にこんなデザインさへ一つも目あたらなかつた。このデザインは、凡そシンプルでありながら綾がある。そして少しも無理がなく附燒刄がない。奥床しいと思ふ。

參謀本部も中を見たい。

櫻田門の景色はたしかに東京の名物に違ひない。今は柳が坊主だが梅雨の頃の軟かな線と白い壁の調和は、いかにも靜かな趣である。彽徊去るにしのびない。

こゝで後を見れば司法大臣官舍である。折柄の逆光に枯木の枝々が



はつきり浮き出して、こゝは又植民地のやうな氣持がある。陽炎の上を人が歩いてゐる。

かういふ繪は勢よく描けば趣が出る。櫻田門の風情は勢よく描けば趣を損じ、ゆつくりかけば畫が眠る。それだけ景色が完成してゐるのである。

（をはり）

(二) 動いてゐる風景

――白日のシエルエット――

永瀬義郎

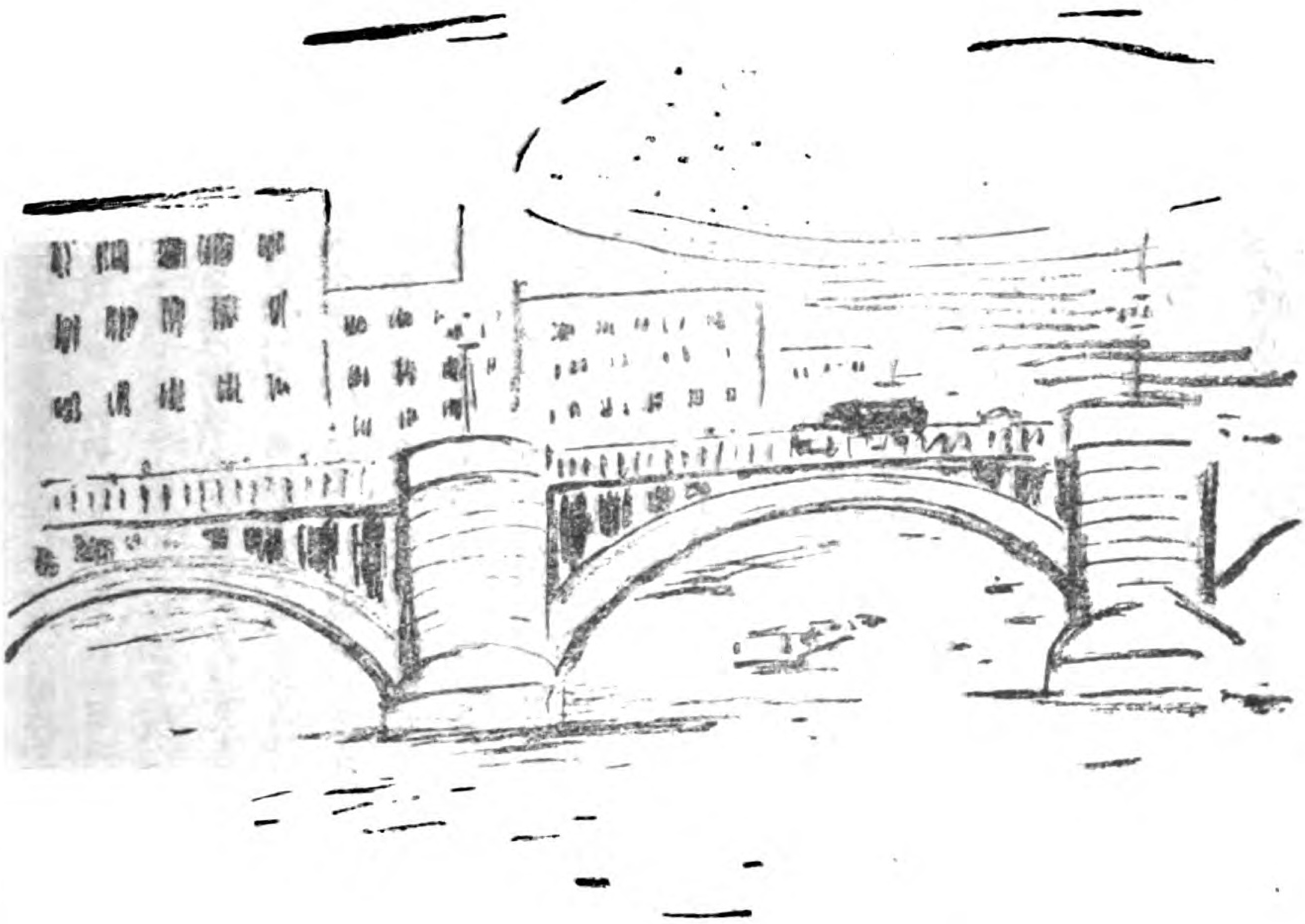
動いてゐる風景、と云ふ題は難かしく解釋するとアインシユタインの相對性原理でも持ち出さないとおさまらなくなるが、實は毎日何十萬と云ふサラリーマンや其他のモボ、モガが知らず〳〵親しんでゐる處の省線電車の窓の中から眺める、所謂東京新風景、の事に過ぎないのである。

現在の我々の新時代では風景に對する解釋も見方も昔とは大變な變り方をして終つた。僕の友人が或るからつ風の吹いてゐる寒い冬の日に、愛人とのランデブーに「どこへ行かうかね」と愛人にきいた時、愛人がふと大した思惑があつた譯でもなく「向島でもあるきませう」と云つた處が、男は見る〳〵御機嫌を惡くして了つて、くるりと廻れ

右をして女をあとにすたこら駆け出して女に左様ならをして了つたと云ふ話があるのだ。がこの男が見る見る不機嫌になつた氣持が實に手に取る如く解つて愉快でたまらない。察する處、その女はモガではなくて所謂古風な良家の處女で、向島なら人通りも少ないし景色もよし、と思つたに違ひないが、男にとつては、向島の土堤から待乳山を見た處で何の感興もないし、自動車が土煙をあげて驅つてゐるあの土堤の一本路を、女が川風に裾をさらはれて霹な脛を見せまいと一生懸命になる、その事だけを考へても嫌になつて了つたに違ひがない。今の若い人達は山へでも登らない限り景色を眺めるなぞと云ふ事はしないだらう。つまり生活のテンポが早いので、生活が主になり風景が從になつてゐる。だから東京の何處を探したつて、景色の素晴らしさに、無我の境地に至る、なんて處は一つだつてあるものぢあない。要するに都會風景なるものは人間生活の伴奏樂でなければならないのである。否、つきつめて云へば、生活そのものゝ一分身かも知れない。我々の畫業に點景人物と云ふ言葉があるが、近代では、人物點景と稱してもいゝ繪が澤山ある。兎に角、近代は人間が自然を支配して了つたのだ。ワイルドの藝術主情主義ではないが、藝術が自然を作つて行くと云つても過言ではない位東京新風景は刻々變つて行く。國粹保存論者が、壞されて行く東京の名所舊跡の爲に憤慨してゐるが、時勢の力は歴史的價値を無視して堀を埋め、山をくずしてゐる。然し、それが取りも直さず偉大な新興勢力であつて、其處にまた新鮮な美を發見する事も出來ると云ふものだ。

天の橋立の名所繪はがきに、股覗きをして見てゐる圖がある。これは、空が水か、水が空かさだかならぬ風光明媚さを賞歎させやうとした魂膽に過ぎないのだが、これを一の感覺描寫だと考へると面白い。どんな處でも股覗きをすると世界が一變して見える。小供の時はこれを盛んにやつて喜んだものだ。誰の小説だつたか、（作家）を忘れて了つたが、小供（作家）が友人と丘に登つて例の股覗きをして田畔を見てゐると、友人は牛が車を引いて通るのが見えると云ふのに、自分にはどうしてもそれが見えずに、大砲を馬がひいてゐる砲兵の一隊が見えたと書いてあつたが、牛車を股から覗くと砲車に見えるかどうかそれは知らないが、兎に角天地がひつくり返つて見えるのは事實だ。それと同じやうに近代風景と云ふものは、古代風景を股覗きにかけたやうなもので、天地が完全にひつくり返つて了つた。五年前迄は一顧も返り見られなかつた處も今では立派な近代風景として我々の前に立ちはだかつてゐる。そして近代風景は動いてゐる。それは近代生活が動いてゐるからだ。ピチ〳〵跳る鮮魚だ。

處で僕は此處に一枚の動いてゐる風景を描かなければならない。其處で大森から省線電車に乘つたのであるが、車窓に現はれる愛す可き近代風景は矢のやうに馳る。これを繪にするには昔の東郷青兒君に待たなければならない。處が東郷君は新聞の記事に依ると、昨今愛人と共に生死の程もさだかならないと云ふ、これも動いてゐる近代風景（モダンガール）の罪かも知れないが。兎に角自分は有樂町に下車してプラットホームに立つた。おゝ!! 其處に現はれた偉大なる風景。朝日新聞社の巨體が



くらまへ橋

午後の太陽を正面に受けてどつかと橫たはつてゐる。那樂座は飛行母艦だ。朧に霞んだ春の空には無數の傳書鳩が銀翼を翻して大圓を描いて遊泳してゐる。松屋の屋上から離してある、繫留飛行船が春風に流されながら靜に大空に浮いてゐる。然し、此處に下車する人々は、シユルエットのヒルムのやうに、この近代風景には無關心に、明るい大空をバックに氣ぜはしく手足を動かしながら次から次へと階段に向つて姿を消して行く。嗚呼、白日のシユルエット、これが東京の近代風景でなくてなんであらう。

(三) 大川の新架橋
——言問橋と藏前橋——

川路柳虹

新東京といふが、ほんとに出來上つた新東京は丸之內の一角ぐらゐをのぞくとどこにもない。地震後の速成バラックが少しばかりお化粧して建つてゐる町の連續、掘りかへし掘り返して足の踏み入れ場もない惡道路。實をいふとまだ新東京讃美には早すぎる時代だ。

だが、せめて詠嘆せよとなら私は方向轉換して人の讃める銀座や新宿などに見向きもせず先づ大川の淵に出る。

大川の景觀は恐らく現代のモダン好みの人には忘られた、もしくは

氣にもとめない新時代的景觀かも知れない。明治末期に大川端情調などゝ一寸の間持て囃された時代があつた。自然主義後享樂主義文學の時代、永井荷風氏の江戸情調追懷時代荷風氏の「隅田川」に、小山内氏の「大川端」に、北原白秋氏の「東京景物詩」に、木下杢太郎氏の「緑介春春調」に――この大川は一つの詩情のよきモチーフであつた。江戸時代の文化は正にこの兩岸に起つた。ことに遊蕩享樂の空氣は歌麿や清長の美人舟遊圖の艶姿に見出さるゝ通りの景觀を呈してゐたことが察せられる。だのに明治以後ことに最近のこの兩岸は東京の中心からひどく追ひやられ、江戸文化の中心情趣であつた江東の地は工場地帶となり、首都の所謂「イースト」となつてプロレタリアットの根據地と化し、ひどく今のモダン文化とはかけ離れて終つた。

が私は大川が好きである。ことにあの一錢蒸汽なる新時代的交通機關が電車よりも、ボロタクシーよりもいかに乘心地よく、可憐であるか。吾妻橋から小松島へ、或は南下して永代へとこの乘物に時々乘つて移りゆく兩岸の風物を眺める。こゝにも景觀は素晴らしく變化しつゝある。ことに新景觀と思はれるのはあそこに架したる橋が今全部新にならうとしてゐることである。橋梁の美といふものは街衢や建築の美と相俟つて都市美には缺くべからざるものであるが今迄の東京の橋にロクなものはなかつた。日本橋にしてからが永いことかかり作らあのコセツいた形は決して美しいとは言へない。が今度大川へ架けられた言問橋や藏前橋ははじめて橋らしい美術的な橋だと言へよう。厩橋も惡くはないがあの鐵のアーチだけが餘計いである。鐵橋といふものは十九世紀の遺物だ。いかにも工學臭く、素朴くさい。巴里の橋、ドレスデンの橋、みな美しいのはそれが美術的に石材を用ひて繊細な一つの彫刻の如く河の水をよく引き立てるため、周圍の建築に風雅を添へるやう出來てゐるからである。

大川の新架橋はたしかにこの江東の地にモダンな景觀をつくりつゝある。ことに言問橋と藏前橋の設計は簡素で厭味がなく、近代の合理的構造と洗練された單純性の美をもつてゐる。東京で何より美しい橋は恐らくこの二つであらう。言問橋は昔なつかしい向島の風趣を全然改めつゝある。小唄にある枕橋も今は瀟洒な石の小橋に變つたが名代の料理屋八百松も影を沒し、あの邊に河岸の散歩道が出來つゝある。あそこには何ほどかの樹木の緑も見られる。私はこの大川の兩岸に立派な散歩道路をつくり、並木街をしつらへたならどの位ゆつたりした一區劃が出來るかと思ふ。そして今の丸之内の一角にあるほどのビルデイングをこゝにづらりと並べたならこの邊こそ最も風雅な近代的歐風都市となるであらうことを察しる。即ち新銀座はこの邊へもつてくべきであらうとさへ思ふ。藏前橋は商業地帶と工業地帶との間に蟠居して架つてゐるがあの邊の景觀はすでにモダンな風趣をもたらしてゐる。

私はあそこにセーヌ河を上下するほどの遊覽的な美しい小蒸汽を浮べたらと思ふ。東京のどこを歩いても落ちつけない氣分がこゝでは和らかに呑氣にされる。都市文明の餘澤はあはてふためくことでなく人間を安慰に落ちつかすことにあるべきだ。ゴロツキにゆき合ふやうな

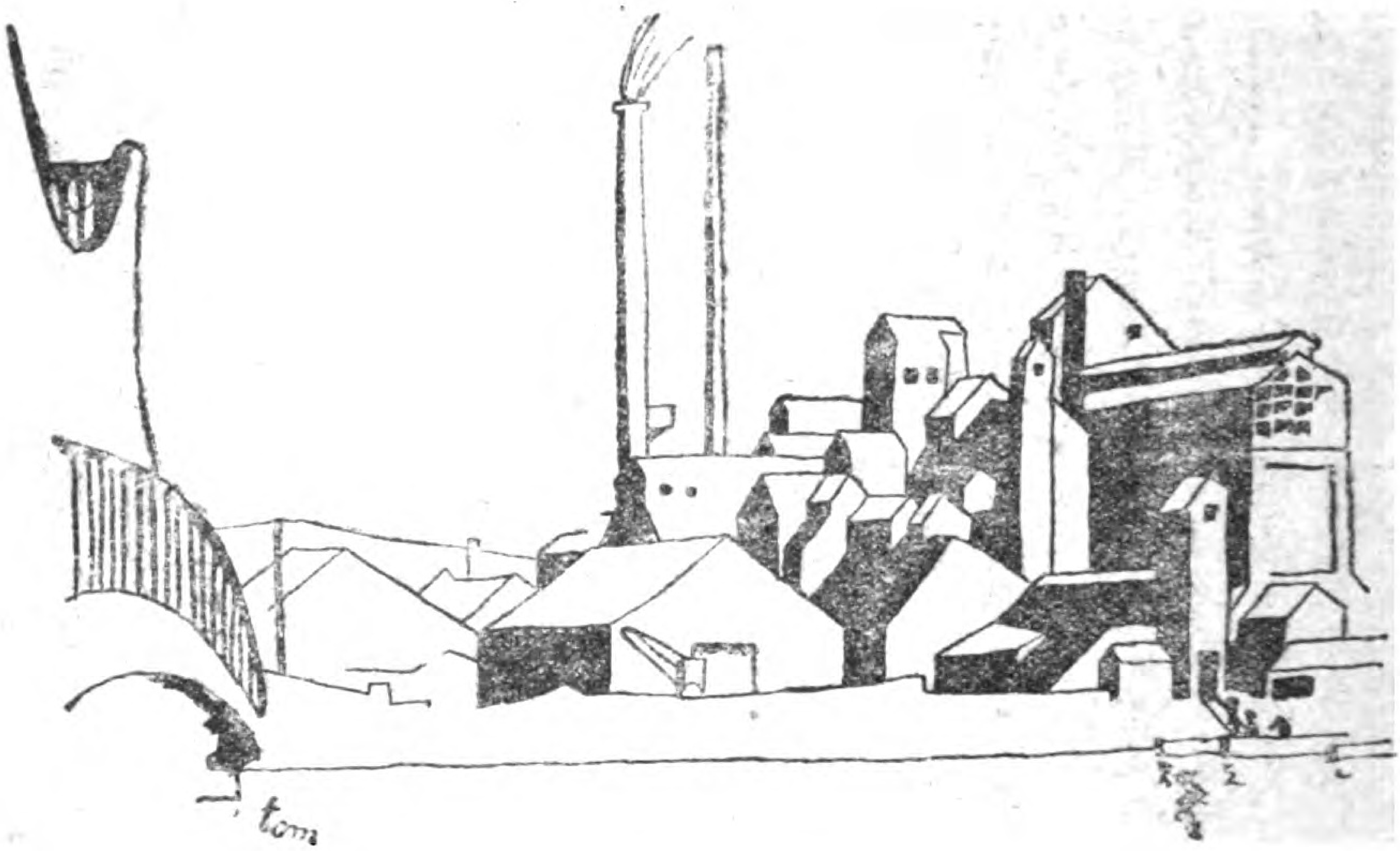
不安な銀座の歩道よりこゝの一錢蒸汽の中の方がはるかに安易である。この安易さのどかさ和らかさを吾々の都市のキーノートたらしめよ。漫々たる春の大川の水のなごやかさ、大きな空をほしいまゝに映すゆたかな河水、あれを清潔にする工夫も市民として考へてよいことだ。

宮城内濠と丸之内の建築

東京で一番古いところで、しかもいつも最も美しい景觀の一角がある、それはあの江戸城とそれを圍む濠の水との作り出す洗練され古典的風景である。心ある外人が亞米利加の西部都市か、支那の租界かの一角としか見ない今の東京に於てこゝばかりには押しなべて讃嘆の聲を惜まない。かつてのクローデルがさうであつた。あの自然主義の小說家ユージエーヌ・ブリユーが日本へきた時上田敏博士の案内で電車に乗りながら丸の内を通つた。帝劇をさしてこれは何かと尋ねた。唯一の大劇場なることを告げると「フン」と言つた切りであつた。反對の方向に見える千代田城と森をさしてまた「アレは何か」ときいた。それが皇居なることを告げると「流石美しい歴史的建築だ」と賞めたといふことを生前博士の口づからきいたことがある。そんな外人の觀察をもとにするまでもなく、吾々が世界的に誇れる東京の一角は正にこゝである。かくの如き風景はまたこの一角を措いて世界どこにも見られないことを痛感するからである。風景にも或る程度の歴史が要る。そこには「時」が一切を調和化する。あの石垣、あの美しき松、あの濠の曲線、あの線のスロープ、そして、あの古い門と城と——それは純粹に畫的である。しかもこれだけ古典的なる風景であつて、周圍が亞米利加都市に見るモダン建築の列る丸之内を控へて、すこしもそれに壓倒されず、むしろそれを包容して、その二つの對比の中に自然な調和をつくりつゝあることをさへ感じる。丸之内の周圍にあの濠や石垣やがもし無いとしたらその殺風景さはお話になるまい。かういふ締めくゝりの中心があつてこの近代的景觀が更に生きるのである。

丸之内のビルディング街は東京のビジネスタウンに過ぎぬが、しかしこれだけの一區劃は日本に於ける最も近代西洋風の都市をなしてゐる。それは歐羅巴にない傳統である。紐育か市俄古の一角を想起させやう。私はかつて巴里に入つてそれが餘りに黑い建築の連續に驚いた。それは歴史の古さである。私は今も巴里を「黑い都會」と呼ぶに躊躇しない。それに對すると今のこの近代東京はその建築物の色に於てまことに「白い都會」である。夫れは歴史なき「白さ」傳統なき「白さ」である。清潔で簡素で合理的だが一歩誤ると無趣味にも陷る。その缺陷を傍に控へて補つてゐるものが宮城とその濠である。

「タウン東京」から「シテー東京」への移り變り、古い部落的集團都市が新しい企業的集團都市へ移る過渡期の東京の中で、傳統と非傳統とのかくもよく調和してゐる一角を私は他に見ない。



淺野セメントと清洲橋

(四) 清洲橋

村山知義

相川町で電車を降りて私は川添ひに新大橋の方へ向つて歩いた。區劃整理でゴタゴタしてゐて、大川にそそぐ二つの堀割の一つでは道がストンと川に突き當つてゐて橋が無かつたり、又は小さな新しい橋が出來たてで、古い橋脚を泥を卷き起こしながら引き拔いたりしてゐた。インデイヤン自轉車のラムプを作る工場が道を挾んでゐる。小さな倉庫、小さな商店——すると私は素晴らしい場所に吐き出された。右手に長い二本の煙突を持つたセメント色の大きな工場、そして左手に一つの橋脚の上に三度身體をくねらせた新しい橋！

工場は淺野セメントであり、橋は清洲橋だ。

私はそこで立ちすくんでしまつた。

短い三本目の煙突と僅かな窓とを除くとただ一面にセメント色の建物の塊。その中で勞働者諸君はセメントの粉を肺一杯に吸ひ込みながら働いてゐる。澤山の櫓を持つた城。このプロレタリアの城！　嘗ては評議會の食ひ込んでゐた工場だ。間もなくそこから鋭い群が迸り出るのだ。

清洲橋は多分隣の工場で作られたセメントの白い橋脚の上に灰緑色の鐵の身體を雄渾にそしてしなやかに、休むことなくぴんと張りつめてゐる。これは力だ、美だ。だが近寄ると、細部に、ブルジョア的なセセッションの遺物的装飾觀念がコビリついてゐて、隨所に弱點を曝露してゐる。その醜の綜合のやうに、橋際に交番が、恥づべき金メッキのマークを光らして立つてゐる。

小ブルの若旦那見たいのが、何處かの藝術寫眞展覧會へ出すためだらう、カメラを持つてウロウロしてゐる。橋を渡る間に四人もゐた。彼等にとつて、この淺野セメントとこの橋との「美」が何のかかわりがあるといふのだ。

プロレタリアの力のある所にこそ美が生れる。

橋の鐵骨の間からドンヨリ曇つた空を見ると飛行船が一つ浮いてゐる。無邪氣さうな氣輕さうな、とぼけた顔をして、月島の上で旋回してゐるが、あいつは海軍の飛行船だ。

同じ水邊と城との美だが、此處と、三宅坂附近の封建時代の城壁と濠のつくる美とは何といふ違ひだらう。後者にあるのは、超貴族的美だ。我々と何のかかはりがあらう。

私はまた深川區へ戻つて川添ひに溯る。ゴッタ返した路を十五分程あるくと、大きな圓蓋が屋根屋根の上に浮んでゐる。國技館だ。この薄汚れた圓蓋は、伯林の腐れ坊主の城、金色燦然たるドームよりは遙かに親しみのある美を持つてゐる。近頃あまりはやらなくなつたが、少くとも競技場であり、その目的のために建てられたからだ。だが近寄つて見よ。入口には赤と金の安物の妙な神社の入口のやうなものが建つてゐる。「臺灣博覧會」が開かれてゐるのだ。五十錢出して中に這入ると、ペンキと布でデカデカと張り廻され塗りたくられて、そこに恥づべき侵略のあとが、ほこらしげに飾り立てられてゐる。土俵のあつた所には舞臺が作られて、被征服民族の藝妓が唄をうたつてゐる。彼女達の美しい顔一杯に浮んでゐるあの冷い無關心さと憂欝さを見よ。

この競技場は全く嘔吐を催させるやうにけがされてゐる。外苑の野球場の美は、本所か深川にあつたならば、更に發揮されたらう。

國技館の裏に小屋掛けの見世物がある。そこで、何かの病氣で、身體中の皮膚が所々キノコのやうに疊まり突起した男と、せむしでヒョロヒョロ痩せた男が見世物に出されてゐる。それがシャツ迄ひきめくつて見物人の前にさらされてゐるのだ。君はどう思ふだらう、こんな時世に、帝國劇場の舞臺の上に何等かの「いい景色」が展開されたとて、それが「いい景色」であり得るだらうか？

今度は東京中で最も「惡い景色」の一例をあげよう。

新橋演舞場の後ろ姿をバックにし、近景に海軍大學校(？)の焼跡を置いた景色だ。あの極端にブルジョア趣味(帝劇を貴族的ブルジョア趣味とすれば、これは商工的ブルジョア趣味だ)の赤茶けた、人を小馬鹿にしたやうな建物の「かくしどころ」。それから、潜航艇の殘骸と砲彈と銅像。これは殆んど完全な「惡い景色」だ。

だがここがたつた一遍「いい景色」になつたことがある。それは我々の寫眞家が泡食つて驅けつけた程の「いい景色」だつたのだつた。あの潜航艇の胴つ腹に、ベッタリと反戰のビラが張りつけられた或る冬の朝だ。

帝國ホテルはあなどり難い魔術だ。近代建築の口火を切つた天才の手から生れたあの贅澤な建物は、カクテールのやうな魔性の媚態を持つてゐる。

東京驛及びその附近の如きに至つては一顧の價ひもない。また何の誘惑もない。賤劣なブルジョア魂が、何の曲もなく、細工もなく、ふんどし迄はづしておつ立つてゐるのだ。

地震が丸ビルから化粧煉瓦をおつぱづしたやうに、やがて我々はこの三菱村から、有用なオフイス街を作り上げるだらう。朝鮮銀行の化粧面のいやらしさを見よ。

遙か向ふに議會の鐵骨が何年越しに立つてゐる。親愛な鐵は默つて立つてゐる。いやな運命を暫く忍ばなければならないのだ。いやらしい着物を着せられて、腹の中で行はれる資本家代表の亂舞を我慢しなければならないのだ。

ここいらには「いい景色」はここ暫くの間まだ無いのだ。

——二九、四——

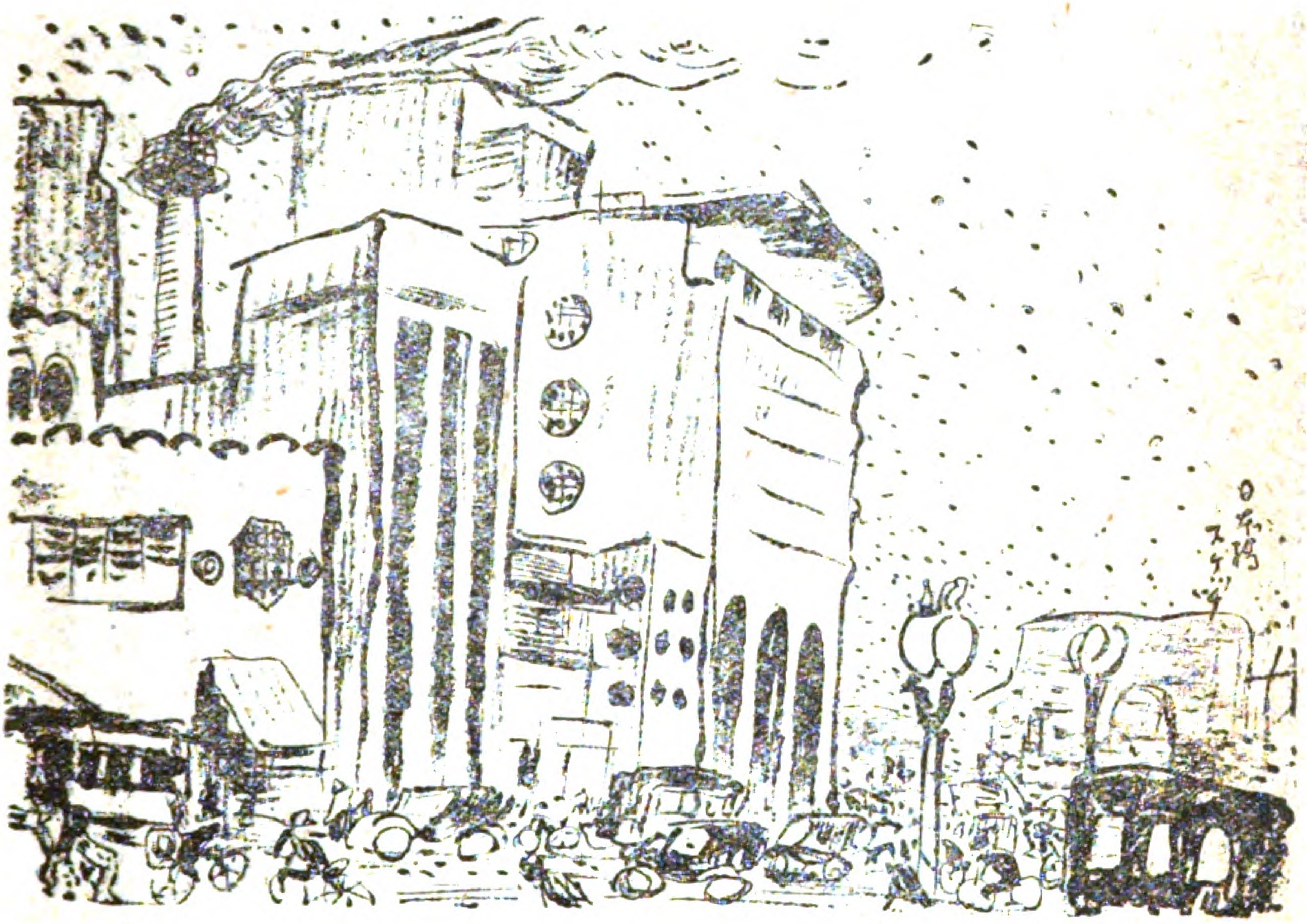
(五)マツスとしての都會美

高間惣七

靜から動へ！　錯雜から調和へ！　近代の有つ特異性は、伸展し變貌し行く都會にそれが著しく顯はれる。そして、東京も亦、今新しい完成美への途上にある。

古い形と精神とを棄て、近代的な形と精神とを孕む新しい都市としての東京は、立體的にも平面的にも新しい形式に依つて押し擴げられて近代人の生活の凡ゆる部分に浸潤して行き、近代人の感覺の凡ゆる部分と深い交渉を有つてゐるのである。

畫材として都會の風景に餘り興味を感じなかつた私も、近頃は、東京の街路に立つと知らず〳〵數時間を通路の邪魔になる事も忘れて立つて居るやうになつた。私を斯くも捉へるのは何であるか？　東京で生れ東京で成育しながら今まで餘り好んで都會の風景を描いた事がなかつた私である。美校に居た頃は永代橋の傍に自家(うち)があつたので靈岸島から大川附近を多く畫材にして居たとは云へ、矢張り郊外の景色に接する程の熱意と難有さを感じなかつた私である。その私を斯くも捉



へるものは何であるか？

東京は移り行く！　その感じである。私を捉へ私を打つのは近代都市としての東京の姿である。脈打ち流れる生命感と動態感とが有つ其の形貌と其の内容とである。

試みに日本橋の白木屋前の交叉點に立つて見る。街路、建築物等から云つても全體に纒まりがあり、十字街路を雪崩のやうに強い豐富な色彩と線とが交錯して、車の洪水と人の群集は強い動的な形を展開して居る。そして此の「動」と云ふ形は、周圍の建築物にも、劃された空にも強い響を以て、此の風景を生かし、都會の生命を躍如と奔逸させて居る。

私は思ふ。街路の風景は無論重要なものであるが、同時に、通行する人物や車がその都會の生活と生命とを現はすに決定的役目をなすものである。語を換ふれば、都會風景の生命として或は眞實の形貌として、街路に動く處の集團が決定的要因なのである。

近代都會風景は、「動」と「力」とを其の本質とする。そして、それらは建築物・道路・人物車馬の上に動らかきかけ、融合し、統整を示して居るのである。

往き去つたその頃の永代橋附近は、江戸時代から殘された昔乍らの古い俤と云ふか匂ひと云ふか、兎に角、白い土造倉や黑い板塀や、赤い宮とか、或は太い角柱を有つ酒間屋や醤油屋と云つた古風なものが存して居たのであるが、そしてさう云ふものを少しも多く殘し度い氣がして毀ち壞されて行くのを淋しくも思つた事もあつたが、今の東京

を見るとそんな風の物が全然不必要になつた事を痛感するのである。潑剌と伸展し變貌し行く現在の東京は、建築に就て見ると多少色々な形式の集合、つまり建築の各様式の見本じみた處はあるとは云へ、新しき東京としての都市全體から受ける感じは、廣さ・大いさ・重さ・力であり、色彩に對しての感じが都會人近代人の要求にぴつたり合致する鋭どいコントラストをなし、廣さ・重さ・大いさ・力等を結びつけて我々の心象に働きかけて來るのである。

震災は東京の轉換期として非常な意義を有つものだと私は考へる。震災は近代都市として成育する東京に種々なる形態を賦與したのである。震災後の東京の街路を歩む人々の服装や、急流のやうに疾驅する自動車などの色彩も周圍の建築物等と融合し調和して來た事は私の痛感する處で、例を服装に藉れば、私の子供時代のやうな唯一人の服装はその人の羽織とか帶とかと云ふやうに個人の中に調和があつても周圍(空とか街路とか建築とかと云ふ風に)は餘り無關係であつたのが、最近に於ては色彩は色彩としての大きなマッスが强い力で風景に働いて居る、色彩は極く單純化された一色のもので、赤・青・黄といふやうに一人一人の色彩が集團となつても其の固有色を失はず、そして固有色から固有色にうつり行く色調が巧く調和されて音樂的な面白さを示すに至つた。

都會の有つ陰翳は、時と空とに影響されて様々の「美」の分野を示し或は新しい視點に依つて新しい風景を展開する。高層ビルディングからの俯瞰や高架線による展望や、それからまた光と影と色との快よい調和と變化を見せるビルディング街の薄暮など、それらも都會の新風景ではあるが、私は最に擧げた日本橋の交叉點を最も好ましく思ふのである。

調和された色調・交錯する「動」の流れ・十字路といふ力の均衡・重さを以て迫る建築物・縱横の線の齎らす奔放さと纒まり、これらは相倚り相融合して新しい風景を生かし、その上に或る渾然たる力が動き、其處に新東京としての發達を十分私に感じさせる熱とでも云ふべきものが其の交錯の中に在るからである。(完)

初代市川團十郎

高木文

天正十八年小田原落城によつて城中幾多の戰士は關八州の地にそれ〴〵離散する者が多かつた。

もとより生れ付いての武士の少ない、剛東豪族の雇兵にひとしい者共で、長い戰亂におき〳〵し武張つた甲冑や帶刀を着けてはゐるものの、結局は昔の農に歸るのが人間としての幸福であると考へた。彼等は肉縁の薄い身内や舊友をたよりにそれぞれ平和な農村に落付いて、そこに妻を迎へ、ささやかな家庭を作り、戰の昔し語りに靜かな幾年月を送つたのであつた。

下總國市川村、江戸へ三里の道筋に、僅に旅人對手の小商ひをしてゐた堀越十藏も、祖父からそんな昔し語を聞かされた一人だが、家業は弟の宗左衞門にまかせきりで、己は虛無僧となつて近郊を浪々してはふるまひ酒に醉て歸ることが多く、いつか遊俠の徒輩の仲間に入つてをつた。いつ頃うけたか顏面に大疵の痕があるので、中間からは疵の十藏、又は孤の十藏とあだ名され、萬治二年に、先輩の遲蒔重兵衞の娘おときをすゝめられて女房に貰つた。十藏が三十一、おときは二十歳であつた。

翌萬治三年に、一子小三郎が生れたが、此子供が、成長するにしたがつて、辯舌爽に、慧敏の性を發し、隣人の寵を集めた。

寛文十二年、近郊を打廻る歌舞伎芝居がこの市川村にも懸つて十日餘り興行を續けたことがある。小三郎は子供心の面白さに、毎日熱心に役者の演技を看覺え、近所の子供らを集めてはその眞似ごとをして見せて、村人に舌を捲かせた。芝居の人たちまで感心な子供だと云ひ囃した。

一座もいよ〳〵明日で此地を引上げると云ふ日に、この一座の頭取が十藏の住家を訪れた。永らく御贔負になりましたが、いよ〳〵千秋樂になるのでとまづ御禮の挨拶を述べ、それから申上げにくいことではあるが、お見受け申す所によればお家のお子様は毎日熱心に吾等の芝居を御見物下さるので一座の者共が感心を致して居ります。行末は名優となられまする樣にお仕込み申上げたいが、何卒一座へお貰ひ申したいと懇請した。

十識も、もとより道中小商人のことではあり、遊俠の徒に伍してもをり、子に對する愛着心も、どちらかと云へば淡く、それに、女房からも、別に異議は出なかつたので、早速欣諾の旨を返答したのであつた。

この寒村の居住者から見れば、たとひ旅役者の一座にもせよ、舞臺生活の晴々しさは、正に羨望の的であつた。それに身を投じることは、本人の出世をも意味し、同時に又、それだけ懷に餘裕の生じるわけでもあつた。

かゝる簡單な機緣のもとに、小三郎は、寛文十三年十三歳にして、祖父と父母と叔父夫婦の住む陋屋を後に、揚々と旅役者の群に入り、爾後數年一座と共に巡業を續けたのだが、これが後年江戸隨一の名優と謳はれた初代市川團十郎の前身であるとは誰が想見し得やう。

市川家の代々によれば、延寶元年九月に江戸中村座で「四天王稚立」の上演に、坂田公時に扮して顏に紅墨を塗り荒事狂言に出演したとあるが、これは傳說だけで之を立證す可き典據が見出されない。

又歌舞伎年代記によれば、延寶三年五月に山村座で「勝鬨譽曾我」の上演に五郎時宗は團十郎、十郎は宮崎傳吉、工藤には永島磯右衛門等が扮し、これが五郎劇の根元で角かつら沒とり荒事であると所載されても居るが、年代に誤算があると思はれる。(後に記す)

更に柳亭種彦の記文する所によれば「才牛延寶八年市村座にて「遊女論」と云ふ演劇に不破伴左衛門を爲す、名古屋山三に村山四郎次、傾城かつらぎに伊藤小太夫、これ才牛が三十歳の時云々」とある。これも不破伴左衛門を爲した點はよろしいが、延寶八年に誤りがある。團十郎三十歳を逆算して見れば判る。右延寶八年には、彼は二十一歳で、未だ江戸の人ではなかつた。從つて「遊女論」の不破は、歌舞伎十八番の一で、延寶八年三月に市村座で團十郎が初めて之を演じたとなつてゐるが、これは當然疑問視されねばならぬ。今日現存の延寶年間の評判の記には、未だ市川團十郎なる者の名は見當らないのである。

兎に角、小三郎は、好きな道ではあり、生れ付いて發明の性で、藝事の進みも速く、頭取も育て甲斐のあつたことを今更喜んでゐたし、又一座の者にも可愛がられて、巡業をつゞけた。

彼が漸く一人前の役者となつて、一座の立者として、市川團十郎なる藝名を多少とも世間にひゞかせたのは二十六歳のことである。道中筋の一文商人の子にとつては、これは相當の出世であり、彼自身も、今のところ、田舍役者の立者で、滿足して居たのであつた。一座に若い花形で女形役者に筒井若松と云ふ

者があつた。珍らしく綺麗で愛敬もあるところから、一座の誰彼と心をこれに寄する者が多かつた。

この若松が團十郎を慕つてゐた。團十郎も若松を愛してゐて結局二人は深い相愛關係に陥ち、その評判が一座の人々に漸く知れわたることになつた。

ところで同じ一座の中に、藝道に於ても團十郎と相對し、且つ先輩でもあつた市山半三郎と云ふ役者がをつて、此者が又若松に深く戀着して、暇さへあれば之を口說いた。若松も初めはそれとなくあしらつてゐたが、遂には溜りかねて情を團十郎に訴へた。

一座が葛西で芝居を打つてゐた時のこと、若松も半三郎の執拗さにほと／＼困つたと見え、しかし一座の上役者ゆゑ眞向から拒絶することも出來ず、詮方なく、かねて自分と團十郎との仲を心得てゐる彼の廻し方(召仕の男)の宗四郎に旨意を含めて、半三郎を敬遠するやう取計らはせることにしてをつた。

其夜も半三郎が若松の宿に遊びに來て、若者の宗四郎にふるまひ酒を呑ませて四方の話をしてゐたが、そのうちに、宗四郎が、ツイ酒に亂れて、半三郎の顏を蹴つてしまつた。半三郎も先方が醉うての上のことではあり、それに若松への戀の取持を頼んでゐる關係上、この無作法をも我慢して、口で叱る位にして置いたが、宗四郎はそれをよい事にして醉に托してあばれ出し、上役ではあるが戀の取持はイヤジヤ／＼と大聲に呶つて、果ては、側にあつたかん鍋を取つて半三郎の眉間になげ付けた。半三郎も如何に酒の上なり、戀の弱身はあるとは云へ、最早堪忍ならぬと立ち上つたので、宗四郎は初めて驚いた風を裝ひ勝手へ逃込んでしまつた。若松も今更自分の事で如何に成行くかと一隅に怯えて見てゐると、半三郎が怒りにまかせて追ひ迫るを、若者の方ではかねての仕組み通りに、隱し置いたる脇差を拔いて之を逆襲した。もとより殺す氣はなく、顏面に疵を付けて役者として再び舞臺には立ち得られぬ程度に斬らうといふ淺はかな若者らしい考へであつた。

ところで、半三郎は悉皆あわててその顏へ落ちかゝる拔身を素手で握り留めたので、若者が調子でそれを強く引くはずみに、何かはもつて右の指四本共斬り落されてしまつた。半三郎は死者狂ひとなつて若者に噛り付く、若者も今はこれ迄と半三郎の脇腹へ刀を刺し、遂々之を即死せしめてしまつた。

宿の上下は大騒ぎとなつた。半三郎の弟子共もかけ付けて騒ぐ、村役人も來て若者を捕へ、一座の役者たちをも一應は取調べた。若者は吟味に答へて、自分は半三郎には少しも遺恨はないが團十郎に頼まれたので殺した、と遁れ言葉を云つた。團十

郎は、自分は一座の仲間でもあり何の恨もなく宗四郎に左様な事を頼んだ覺えは少しもないと否定し、押問答の末に、喧嘩の起りは酒の上の狂亂であつたと言張つてしまつた。

　結局取調べは不得要領で、遂に此事件は半三郎の殺され損となつたが、一座はこれで總崩れとなり、役者たちはそれぞれ離散せねばならぬことにたち至つた。そして多くは他の旅役者の一座へ加入したのであるが、團十郎は、致方なく江戸に上ることになつた。しかしこの時の彼には、別に江戸一流の名優として立たうなどとの大望はなかつたらしい。何んとか江戸の役者として立つて行けさへすればよい。今日までも田舍芝居とは云へ立役者の位置に居たのだから、江戸へ出ても、せめて下廻り位には雁つては呉れるであらうと思つてゐたに過ぎなかつたのだ。

　若し此一座に右の事件がなかつたなら、團十郎の一生は如何なつたか。恐らく旅役者として、自ら滿足してゐたかも知れぬ。



演劇史並に年代記等によれば、天和三年三月「女君二河白道」の上演には、團十郎が伴左衞門に扮した旨が誌されてある。

　又貞享元年正月中村座にて「門松四天王」に、彼が鳴神上人の役を勤めて大當りをとつたとあり、且つ此脚本は彼の自作なりと云ふ。

　又同年五月には「不破即身雷」の上演に三度伴左衞門に出演して稻妻と三升の模樣を繡伏せにした衣裳を着て家の紋を三升と改めたなどと、それぞれ所載されてはゐるが、予は此等の事は疑問に屬すると考へる。以下年代順を追て述べて見たい。

　彼は、貞享三年に市村竹之丞太夫元へ年金十二兩で抱へられることになつたが、江戸へ出ては未だ番附の數に入らぬ下役者であつた。

　此年に出版された「鹿の卷筆」の内に古山師重の畫きし霜月狂言の團十郎の舞臺姿の挿畫がある。これが初代團十郎を窺ふことの出來る現存中の最古の繪ではあるまいか（挿畫參照）衣裳と紋所に注意を要する。

此書の一節に團十郎の乗りたる馬がものをいふたと云ふ落語があつて、それが禍して、出版後九年の元祿七年に幕府から發賣を禁止された本であるが、内容は團十郎には關係のないことであるから述べぬ。

貞享四年に、彼は十八兩に昇給した。彼が江戸の劇壇に多少認められる樣になつたのは此頃から後のことである。貞享末年の刊本と稱されてゐる「舞曲扇林」の挿畫にも彼の舞臺姿が見える。これは前掲の舞臺後二三年を經たものと思はれる。（挿畫參照）

貞享五年辰の三月三日より山村座で「古今兄弟兵曾我」十番續きの狂言に、彼は五郎時宗に扮した。これが團十郎の五郎狂言の根元で、二日替り十郎は宮崎傳吉、大當りであつたと傳ふ。（前記歌舞伎年代記の延寶三年說參照）

同年刊行の「野郎立役二町弓」に初て彼が評判記に所載された。彼の面影を知る爲めに其原文を載せて置くことにする。



「此市川と申すは三千世界にならびなき、好色第一のぬれ男にて御器量ならぶものなし、丹前の出立ことに[illegible]事なり、せりふ天下道具なり、およそ此人ほど出世なさるゝ藝者又とあるまじ、實事惡人、其外何事をいたされてもおろかなるはなし、ことに學文の達者にて仕組の妙を知らぬものなし、當世丹前役者の元祖お江戸においてかたをならぶるものあらじ、威勢天が下にかがやきおそらくは末代の役者の鏡ともなるべき人なり、するすゑなほもはやり玉はん歌に　市川の流れの水もいさぎよく悟りすました藝者なり」

とあつて、彼が如何に藝才に富み、當時既に衆望を負うてゐた趣が察せられるのである。

同じ貞享五年の顏見世には年五十兩に昇給した。（當時二十九歲）

彼は葺屋町河岸に住居を構へてをつた。家庭には六十歲になる父の十藏と、四十九歲になる母と、それに女房を迎へて、親子水入らずの樂しい生活を續けて居た。十六年の昔、無名の田舎役者の手に何の氣もなく與れてやつた吾子が、今日ではお江

戸に存在を認められる役者となつて一ッ家に暮して行けると云ふことは、父十歳としては夢の様に思へもし、胸中には吾子ながらに感謝の意を表せずには居れなかつた。

其十月十一日には、女房は初産をして男の子を生んだ。家中大悦、父の十歳にちなみて九蔵と名け、一家和氣の内に其年を送つた。

元祿二年三月には中村座で「名護屋大全」の上演に不破伴左衛門に扮した。此年の顔見世には八十兩に昇給をした。

翌三年二月には中村座で「大吉武士鑑」の上演に荒岡源太を演じ、七月には同座で「金平甲論」に坂田金平を勤め、此年百二十兩に昇給。

彼自身としても是程に昇らうとは夢想もしなかつたらしい。先輩の役者でも自分より下に居据りの者が少くなかつたのだ。

同じ年の九月上旬に、寄友を茶亭に招いて昇進の祝莚を張つたが、彼としては洵に感慨に堪へざるものがあつたと察せられる。彼は此年に初て三升の定紋を定めたと云ふ。それ以前には三蓋松の紋を用いてゐたと稱され、市川家の代々には二ッ矢であつたと傳へられて居るが、此の點を立證す可き史料は未だ發見されてをらぬ。

三升の紋所は元祿初期に於て、初て挿畫に之を見るのであり、さすれば今の所、此元祿三年より定紋説を信じるより致方がない。市川家の紋として今日まで來つたのであるから、家傳としては重要な事項である。

劇壇の閑を得て、俳諧の道に遊ぶ餘裕の出來たのも此頃からで、彼は、當時名聲ありし其角の門に入つてをつた。

元祿四五兩年度には、彼の劇壇に於ける記錄を見ることが出來ぬが、五年の十一月には更に二百五十兩に昇進したのを見るとその活躍のほどが推察し得られるのである。

元祿六年正月中村勘三郎座にて曾我五郎に扮せし鳥居清倍の畫きし繪番附を見た。今日現存してゐる繪番附に團十郎を見る最古のものではあるまいか。

此年の五月に開板せられたる鳥居清信畫の「古今四場居百人一首」の内にも彼の姿が所載されてある、尚また同年開板の「役者繪づくし」の内にもその舞臺姿が見える。(挿畫參照)

おなじ四月には感ずる所あつて、天地神明に奉る願文を草して居る。其文面によれば、元祿三年より滿二年間毎朝水垢離を取り、三寶荒神を拜し、父母の生存中は酒を禁じ、妻の外女犯を斷ち、家業繁昌を祈ると云ふのであつた。(市川家に傳へられてあつたが大正震災に失ふた)

此誓願には何物かが窺はれる樣に思はれる。兎に角、間もな

く藝道修行の爲めに、彼は京坂に赴くことに心を決した。

中村座では、市川團十郎が今度修業の爲め京四條芝居に罷り登る旨の看板を出して、名殘狂言として十一月に「新撰殺生石」を上演し、彼が上總之介を勤めた。三浦之助は中村傳九郎、玉藻前は袖岡政之助にて、大詰狐狩の場で、上京の口上を述べたのであつた。十一月十五日には舞納をなし、下旬に江戸を發足して上方に向つたが、一行は、親子女房とも家族一同を伴れての旅であつた。

何を感じて、團十郎は一家を引きまとめてまで京坂に志したか？藝道修行の爲めと云つてしまへばそれまでだ。事實また、元祿初期の此時代には、何を云つても劇壇は京坂が中心で、一代の名優として坂田藤十郎、山下半左衛門、竹島幸左衛門等多士濟々、正しく芝居は上方が發達して居たにちがひないのであつた。

一說によれば、團十郎は更に上方役者になつて一代の名聲を磨き上げる大志を立てゝ上方へ赴いたとも云はれてゐる。或は左樣にも考へられる。



或は、江戸の劇壇が行づまり、人氣の飽き氣味なるを察して、氣拔きに座をあけたのだとも說をなすのであるが、何れにもせよ、上方芝居を見聞して置くことは、彼の前途にとつては徒勞事ではなかつたに違ひない。

此時代に京坂に上りし江戸の役者は決して彼一人ではなく、彼と前後して、たとへば坂東又九郎など、大坂の岩井半四郎座に出勤してゐるのである。

團十郎は此年十一月今迄は段十郎とあるを團十郎と字を改めたと傳はつてゐる。これは然し、此年以前にも既に團の字を併用して居るのであるから、結局此年以後段の字は用ひぬことになつたと云ふことだけは明言出來るわけである。

十一月末に京に着するや、直ちに四條村山平右衛門座に出演して「箱傳授」に浪人大原二郎左衛門の役を勤めてゐるが餘り好い役廻りではなかつた。

元祿七年正月五日より再び村山座で「源氏武者與勢力」の上演に、朝比奈三郎義秀に扮し若武者門破りの荒事を勤め、附け幕に「巡逢戀の七夕」に牽牛星の精に扮して、織女は若女形の伊藤庄太夫であつた。

此興行は未聞の大當りで、初日は木戸を打毀される騷ぎで、花笠踊りの一幕だけで一先づ打出した程であつた。翌日より團十郎は座元附添三升の定紋附に上下を着て舞臺の正面にて御目見得の御禮口上を述べたので大變な評判であつたと云ふ。此興行は四十餘日打ち續け、大入つゞきで毎日舞臺迄客を詰込み、役者の三間の太刀のこじりが客に當らなんだが不思議なと云はれた程であつた。

此時京童の唄に「お江戸市川團十郎みさい。京の名物一ッ升ますノ\評判高稱、丸に釘貫白鳥毛、朝日に輝く目出度さは、ほんに結ぶのかぞへ唄」と謠はれた。

椎が本才麿は、この七夕狂言大當を祝して、彼に才牛の號を贈つたと云ふ。彼が在京中の句に曰く

春御影堂　法ひろし油をふくむ花の風

伊勢物語　烏帽子着て遠くは行し草いきれ

秋海棠　かくれなし秋海棠のとら御ぜん

十月蟋蟀入ニ我牀下ー　しがみつく里子や牀のきり／＼す

此年再び同座で「阿闍世太子倭姿」にくづうの翁に出演した、今川上總之助は平右衞であつた。

彼は年三十五、女房一女を擧げ、みよと名けた。これが彼として最後の子であつた。

元祿八年正月、京都の明石貞雲のものした「役者大鑑」に、彼の批評が出てゐる。彼の藝と其人物を窺ふことが出來やうから玆に上げて置く。

「上上敵役市川團十郎、此人立役三分敵役七分を兼たる仕出し京都村山平右衞座の勤先初狂言の朝比奈大當りにして座元に金を儲けさせたとあればもつて上手なると人はあり先以て四方きれめの役者隨一川團十郎うたのならぬが疵なり何をされてもあぶなげなしある人の曰く此人中村傳九郎と四分六分の役者併し此人二分の强みあり、第一　幕をきつてのはしがらのはしりを見ゆる諸藝に腹あり取分けおもにこなさる、本藝の荒武者事をよくこなされ言句に及ばぬ所多し」とあつて彼の短所も又窺はれる。

又一説には、京にては坂田、竹島、山下の名優が大阪へ行きたる留守に團十郎が出勤したので大當りを取つたのだと酷評をする者もあつたが、江戸役者の荒事が見物の目先きを喜こばしたのではあるまいか。聲量の豐な役者であつたことは何れの評にも見える。

此年の春は大阪の岩井松三郎座に轉じて「鳴神」と「遊女論」の二つを出して、得意の上人と不破伴左衞門に扮したと云ふ説

がある。然しこれは疑はしい。何となれば、岩井座には江戸から來た前記の坂東又九郎が出演して甚だ不入であつたのである。兎に角、右の說では、この大坂出演後、また京の舞臺を踏んでゐる。同年刊行の「評判役者折紙」には、彼は決して上位ではなかつた。

彼は此年の冬に江戸に歸り、山村座に出て、給料も三百二十兩に昇つたと云はれてゐるが、これは誤りで彼が江戸に立戻つたのは翌十年の春であつた。

此元祿八、九兩年度に就ては、特筆すべきほどの史料がない。イヤ彼の在京は滿三年餘にもなるが、その間を通じて、彼は、大した評判らしいものを殘して居らぬ。彼が大望を抱いて上方の劇壇に立たうとしたのは間違であつた。後の名優團十郎ほどの印象は何ら留め得なかつたのだ。

上方には其頃には彼位の役者はザラに居た。江戸の劇壇は上方から見れば幼稚なものであつた。坂田藤十郎としば〳〵張合つたと云ふが、藤十郎の眼からすれば彼の藝は所詮未だ乳臭の域を脫してゐなかつたのだ。彼にしても、それは認めてをつた。然しその藤十郎と、顏つなぎに會んとして輕くあしらはれた時は遉に彼も不快を感じたらしい。藤十郎は、自分在世中は京坂へは江戸の役者を登すまじと、團十郎歸京後に言つたと云ふ。此等の事は前後を綜合して考へると、事實に近い話と思はれる。かくて彼の京坂滯在は失敗であつた。むしろ冷遇に近い憂き目を見たことが察せられる。

彼に藝道のうぬぼれが多少あつたのが間違のもとだつた。どこまでも修行を忘れてはならなかつたのだ。一面、この失敗は彼の將來の爲に、洵によい刺戟となつた。

彼は如何にしても江戸で立たねばならぬ立場に置かれた。彼が、江戸隨一の名優たらんと發憤したのは、この京坂の失敗が動機で事實また彼が劇壇に遺した仕事の見るべきは、此の後に屬する。

元祿十年二月に四年越しに江戸に歸つてお目見え狂言として中村座に於て「大福帳參會名護屋」四番續きを上演した。名古屋山三郎は村山四郎次郎、傾城かつらぎは荻野澤之丞、不破伴左衞門は團十郎で、衣裳に百足に雲の模樣を考案したのを用ひた(挿畫參照)。その大切に鍾馗の靈等に扮したが、後年「元祿桝」と稱するものがこれで、歌舞伎十八番(その一)の暫の始めである(挿圖參照)。此興行は大當りであつた。市中では團十郎の鍾馗に扮せし板繪を五文づゝにて賣りあるいたと云ふ程であつた。

三月には「一張弓勢三韓退治」の上演にて百合若大臣に扮しこれも評判がよかつた。

五月五日堺町中村勘三郎座で「兵根元曾我」四番續きの上演には工藤が山中平九郎、五郎と不動明王が團十郎、朝日奈は中村傳九郎、十郎は村山四郎次等にて、彼の愛子九藏は不動明王の化身通力坊に扮し、山伏の出端にて市川團之丞が引合せて、初舞臺の口上を述べた。九藏は八歳と家傳にあるが逆算して見ると十歳の時であつた。此の興行も大當りで親子して成田山に參詣して神鏡を納めた。家成田家を稱したのは此年からであると云ふ。また後年歌舞伎十八番(その二)「不動の起原」は實に此芝居から出てゐるのである。

七月には「待夜の姫小袖賣」の上演に萬年湯屋の亭主に扮し、九月には「平親王鐵の御所」に出演してゐる。十一月には「小栗」に三男の三郎と遊行上人、不動明王等を勤めたが、興行面白くなくして中止となり、更に「阿部の仲麿」を上演した。霜月に山村長太夫座で「信田和合玉」の上演に千原左近に扮して大當りであつたことが歌舞伎年代記に見えるがこれは年代記の誤りであると思へる。



元祿十一月正月に「佐々木箱傳授」の上演には荒岡源太左衛門に扮し、三月には「關東小六」六月には「龍女三十二相」に鎌田兵衛をつとめ、龍女は荻野澤之丞が附合つてゐる。

九月には右の女形荻野澤之丞が一世一代で「雲絶間名殘月源平雷傳記」四番續きにこれは團十郎自ら脚色したものであるが、鳴神上人は彼自身、渡邊國綱は九藏、渡邊綱は四郎次、同女房雲の絶間は澤之丞であつだ。九藏はその一念に扮し、金時の山中平九郎と卒塔婆引をする場面がある。これが後世の歌舞伎十八番(その三)「鳴神」の起原である。十一月に「吉野靜碁盤忠信」の上演には忠信に扮して、九藏には忠若をなさしめてゐる。

江戸歸來後の彼の活躍は實にめざましく、それに未だ幼年の長子を舞臺に立たしめたことなども劇界の注意を引いた。更に

又世人にしても役者自身にも思ひもよらざりし、脚本作家として初て筆を執り、つまり自作自演を行つたことは、洵に劇界の記錄を新にするものと云はねばならぬ。團十郎の理想が茲に及ぶを見ると、正に彼は元祿江戸俳優の新人であつたにちがひない。

元祿十二年正月に「女飛驒の匠」の上演には八ッ棟いからの助に扮し、三月には「信田和合の玉」に千原左近を自から勤め、こまつ姫は長子九藏、國若は彼の二男十彌にさせてゐる。二男は當時九歳で初舞臺であつた。彼が愛子二人までもかく幼少から役者としての敎育に心懸けてゐる點にも、他の役者とは異つた見識が見られるのである。

五月には「葛城小夜嵐」の上演白髮作左衛門に扮し好評を博した。七月には「甲賀三郎鬼神退治一心五界玉」の上演に甲賀三郎は彼自身、九藏には娘吳竹をさせてゐるが、これが後に歌舞伎十八番（二の門）「關」の起原である。



九月には「曾我」の上演に五郎に扮し、同月中村座を去り、十一月に森田座に轉じ「當世小國歌舞伎」を再び自作して上演し、山名左衛門は宮崎傳吉、お國は荻野澤之丞、細川勝元は村山平右衛門、仁木入道は大谷廣右衛門、荒獅子男之助は團十郎自身が扮しよく他の役者を活躍させてゐる。彼は初て作者として三升屋兵庫の名を署して發表した。

元祿十三年正月には、同く森田座にて「景政雷問答」の上演に鎌倉權五郎に扮し、二月廿五日同く森田座にて自から脚色したる「和國御翠殿」の上演には久米寺彈正左衛門に扮し、小松姫は長子九藏、千代若は二男十彌に勤めさせた。

五月には同く森田座に「大日本鐵界仙人」を上演し曾我五郎に扮し念力の五郎を九藏が勤めた。十一月再び中村座に轉じ「金平六條通」に坂田公平、怪童丸は九藏。

「十一月朔日中村勘三郎太夫、おやま開山上村井筒、新京役次

第、立役開山市川團十郎、同實方、山中平九郎」とあつて彼は押しも押されもせぬ江戸役者となつた。

以上の如く劇壇に連續的な奮闘を示して報いられた彼は、更に作者三升屋兵庫としても、立て筆を執り、短日に三つまでも自演してゐるのだ。彼の精力と才氣とは之によつて、想見される。ことに愛子を上演ごとに舞臺に立たしめて、自分の型を實地に呑みこませ、將來の俳優としての基礎を授けてゐる點など繰り返して云ふが注意すべきである。後年長子九藏が二代目團十郎を相續して、劇壇の重鎭となつたのは、父團十郎の此薫陶の賜物であることは、論を俟たぬ。彼は本年(元祿十三年)四十一歳九藏は十三歳であつた。此年の三月に刊行された「風流四方屏風」に彼が得意の伴左衛門と暫の芝居姿を見る。(挿畫參照)

翌元祿十四年正月二日中村座にて自作の新脚本「傾城王昭君」四番續きを上演して山上源内左衛門、せきくわう、二役に扮し九藏には山上子にわう丸をさせ、鈴鹿は山中平九郎であつた。歌舞伎十八番(その五)「象引」の起原である。(挿畫參照)

同三月中村座で更に自作新脚本「出世隅田川」四番續きを上演して粟津の六郎、不動、龍神に扮してゐる。五月の「日本祇園精舍寶寺開帳」には文覺上人を演じ、雷は九藏。七月十四日同座の「當世酒呑童子」には九藏が毘沙門を演じた。十一月の顔見世狂言は「葛城嶋越戰」でその不破作左衛門を自ら勤め、丹波の介太郎が九藏であつた。

元祿十五年正月二日中村座にて春狂言として「鎌田の家大黒柱」を上演九藏に澁谷金王丸をさせたが、この興行評別惡く、入がなかつたので二十六日に舞納めをなして、直ちに二月二日から自作の新脚本「操荒齢泉寛閤武藏星合十二段」を上場した。役割は上るり御前岸田小源二、れいせいの前澤村小傳次、堪海法師横山六郎次、めのと十五夜袖崎いろは、三河の大領中島三郎四郎、娘かつらの前市村竹之丞、佐藤繼信藥山岡右衛門、ひづめ五郎市川團四郎、鈴木三郎村山四郎三郎、武藏坊辨慶、伊勢三郎の二役は團十郎自から扮してゐる。此狂言は二月二日より六月廿五日まで、百五十日の連續興行と云ふ未聞の大當りであつた。見物の者は夜の中より群集して棧敷も切落しも人に埋まり、樂には見物が出來ず「オシアヒ十二段」と江戸市中の評判だつた。此狂言に、關門に於て、山伏問答の處があるが、これが歌舞伎十八番(その六)の「勸進帳」の始まりである。後世勸進帳を上演したならば當らざるなしと云はれてゐるが、當初既に如斯き盛觀を示したのであつた。此年の評判記「役者江戸櫻」には斯樣に評かれてある。

「武藏坊辨慶(團十郎)になり給ひ初めに五條の橋にて似せ牛若

れいせい小傳次との藝お家の荒事濡事のうつり又外の者のへせまじき大出事也、三番目伊勢三郎となり信夫小太郎金作どのを鎗にて殺さるる處むこうして尤に聞へ此所第一の大當り（中略）顔見世狂言の不出來を此度の辨慶に成り伊勢三郎兩役の當りにて取りかへしぬと諸見物の悦び大方ならず關東無雙の名人とは此人と中村七三郎云々」

其狂言と彼の藝風を不完全ながらも窺ふことが出來るのである。

此當りに乘じて團十郎は又筆を執つて十二段の後日大狂言「女高砂勢松女熊坂炻松新板高舘辨慶狀」四番續きを書いて七



月十五日より直に場に上した。此時には父子二人辨慶に扮してゐる。其評判は

「前狂言百五十日大入を取たまひて、又此度の高舘に辨慶と老人の所作事しうたん荒事そのうまさどうもいはれず、天地人の三才を兼たる立役とは此人のことなるべし、中に凡夫の口から評せんも空おそろし、天晴古今の名人三國無雙のきゝ男上々とは此人なり」

少々過褒の氣味がないでもないが、團十郎一生一代の花々しい大當りをとつた。

十月には同座で「夕顔観音方便」に出演し信徳丸は九藏がしてゐる。十一月には森田座に轉じて「天地人箇守」には荒岡源太をつとめ、九藏が和泉小二郎。

元祿十六年正月には「二三番柱暦」に出演し、同四月には森田座にて自作の「成田山分身不動」五番續きの上演に胎藏界不動に扮し、金剛界不動は九藏に勤めさせて、靈像の祕藝を九藏に相傳したと云はれてゐる。

七月には同座にて又自作の新狂言「小栗十二段」を上演して大原五島左衛門に扮し、十一月には市村座に轉じ「源氏六十帖」の上演に石山源太左衛門に扮し、九藏には源太荒王丸を勤めしめ、花形生島新五郎は光

源氏を附合て綺麗な姿を見せてゐる。

此興行中廿二日に關東の大地震があつた。廿九日には江戸の大火にて中村、市村兩座共に類燒してしまつた。

元祿十七年彼は八百兩に昇進した。

劇場の番譜も出來したので市村座では春狂言として「移徒(ワタマシ)十二段」を上演して彼は鞍馬僧正坊と佐藤忠信に扮してをつた。

その二月十九日の、晝時刻八島合戰の場で彼の佐藤忠信が白髪鬘で花道より出て來て、正面にて見えを切つて居る時に、夕立の俄雨で、何分前年の火災で、假小屋のこととて、舞臺の其處彼處へ雨漏がして來た。此時、樂屋口から頭取役の生島半六が合羽を持て來て、衣裳の濡れぬやう、團十郎の背後から著せかけんとしながら、その隱し持たる脇指を拔いて横腹を差した團十郎は思ひもよらざりし不意の出來事とて、振り向き樣にひきやう／＼とかん高にどなり半六の手を取つたが、衣裳の儘しかも重傷にて如何とも出來ず、再び言葉もかけ得ずに一突で舞臺の上にあへなく横死をとげた。漸く四十五歳のこれからと云ふ盛りの若さでまことにあつけない名優の最後であつた。(挿畫參照)



(寶永忠信物語より)

半六は直に捕へられて小石川の切支丹屋敷の假牢に送られたが、彼は舊と杉山姓にて、生島新五郎の門弟となつて生島を名乘つたもの役者としては餘り上手でなく樂屋の頭取などして舞臺へは出ることが少かつた。(「役者繪つくし」の内挿畫參照)

此時の落首に「市川が彼岸團子に丸められ杉のやうしてさゝれこそすれ」と云ふのがある。

數日を過ぎて取調べの際、半六と九藏の對審もあつたが、何分九藏は若年で、ことの眞相が知れない。彼は此時父の仇と半六を芝居刀で打つたと云ふ話しが傳はつてはゐるが芝居らしい話である。半六が公儀での申立には「市川に非されば我心を知

らず我心にならざれば市川の意趣ある事は知る可からず」と云てゐる。其他は何事も答へなかつたと云ふ。

一代の名優團十郎は何の遺恨をうけて舞臺に悲慘なる最後をとげたであらうか、彼の名聲を妬んだのでもない、世人は色々の噂を立てた。其一つには

半六は平常身持が惡く、自分の伯母と不義をしたので團十郎が强意見をして二人を別れさせ、伯母は團十郎自ら引取つて預かつたが、惡緣で再び忍び會ふので、團十郎が親元となつて其女を三味線引の權次郎の女房とさせたところ、權次郎が市村座に抱へられる樣になり、半六と往來するうち、そこに再び前記の不義が繰り返され、團十郎が怒つて絶交することになつたのが恨の一つ。又團十郎は平生子供好きで、樂屋入の都度大勢の子供に菓子をやることを悅こんでゐたが、獨り權次郎の子のみは姦夫の半六を憎むの餘り、常に與へなかつたのも其の一つであると云



(生島半六姿繪)

ふが、半六が、此等の事由によつて殺す心になるとも考へられぬ。又世評に「顏を紅にて染たる色事でもあらうか、彼まどひ止がたきは老たるも若きも知有も愚成も貴もなくせんとなふ。：實謹可恐云云」とある。文短くして意を盡してゐる。半六が彼市川に非ざれば我心を知らずと云ふ處に他に事情が潛んでゐた。

何故に當時其眞相を明かにしなかつたかと云ふに、これは幕府竝諸大名の婦人たちに關係があるからであつた。酷評すれば役者は藝道が本業か賣色が本業か解らない時代で、名優初代團十郎の横死も、實に此點より來てゐるのである。後にひそかに處刑せられた同輩の生島大吉と天龍院夫人との戀愛事件の初めを爲す事件で、吾人はこの件を見落してはならぬ。

半六は一ぷく盛られて假の獄舍で急病によつて牢死したと云ふことになり、簡單に片附けられてしまつた。後に生島大吉も

獄中で毒殺されてしまつた。

後年二代目團十郎が生島新五郎等と共に大奥の女中に戀愛關係を生じたとき、やみがたき時に、父團十郎は此事によつてあへなく横死をされたのであるから決して女中には近よること勿れと母に強意見をされたので、繪島事件には多數の同輩處罰の中に二代目團十郎獨りは無事なることを得たのであつた。

劇道には別に珍らしくもない痴情關係が、あたら名優をむなしく殺してしまつた。病にて舞臺に倒れることは斯道の名譽にもなるが、色道の事によつて舞臺に殺されることは慘事でもあり劇史未聞のことであつた。

彼れ元祖團十郎は、京坂二年餘の興行失敗に鑑み、江戸歸來後横死する迄八年の間約四十回の出演に舞臺出ヅ張りの努力を盡し、しかも自から新作狂言十餘編に筆を染め、其大抵は人氣を沸騰せしめてゐる。彼の如く、役者と作者と兩立したる名優が古今を通じて果して幾人あらう。これも未聞と云はねばならぬ。

當時、彼の父十藏は年七十六、自慢にしてゐた我子の變死に氣も狂はん有樣であつた。母は六十五歳、長子九藏十七歳、二男十彌、女子二人等未だ幼年であつた。此一族を預てゐた女房は、突然のかなしみに何の考もつかず、しかし十七歳の九藏が、父と共に舞臺に立つて既に七年、父の技を享けてゐたのが今となつてはせめてもの慰めであつた。彼女はこの九藏に、父の名跡を繼がしむ可く決心して、其年七月山村座に於て父の友宮崎傳吉の引合せによつて「平安城都定」の上演に八カ丸に扮せしめ、二代目團十郎と改名させ、父の追善の口上を述べさせた。其角が追善の句に「ぬり顔の父は長柄や雉子の聲」。

爾後九藏は、花形役者生島新五郎の薫陶をうけたが、正徳年中、その新五郎が大奥の女中繪島事件に座して重罪に處せられるに及んで、師を失つた二代目團十郎は、孤獨發憤して遂に後年父にをとらぬ名優と讃へらるゝに至つたが、祖父十藏は、未だ其成功を見ずして寶永五年七月廿四日に八十歳で病歿した。

江戸の劇壇には猶中村七三郎、中村傳九郎、山中平九郎等の名優がゐたが、心ある人々には、元祖團十郎を失つた寂しさを痛感せしめたのであつた。したがつて元祖團十郎が名人であつたことは、茲に一層鮮明となつたわけである。（四月九日）

脳の大きいのは賢いか

杉田直樹

山本代議士が斃れて、解剖の結果、其の脳髄が甚だ重いと云ふことが傳へられた。常人より軽いよりも重い方が、景氣が良いには違ひない。しかし脳重と智力の優秀との間に必然比例的の關係があるかのやうに考へるのは、餘りに常識的な判斷である。脳の形態と智能との間にさう簡單な法則で片附くやうな劃一性がある位なら、神經學者ほど幸福な科學研究者はない筈である。併し乍ら半可通の素人は昔しから偉人の脳が皆常人よりも重かつたやうに妄信してゐる。今歐米に於いて從前解剖學者の手で精細に研索せられた偉人の脳重量の中、極く著しいものだけを抄出すると大體第一表に示す如くである。尙參考のために本邦知名の人々でその脳重の測定せられた者を示すと第二表の如くである。尤も脳重の値は人種によつてもその平均價が異なるし、又年齢によつても著しい增減のあること云ふ迄もない。今迄の學者の研索の結果によると第三表に示すやうに幼年時から少年時へかけて脳重は急劇に著しく增大し、少年時から壯年時までは甚だ徐々に脳重が增して行くが、老年期へ進むにつれて萎縮によつて再び脳重は減少に傾いて行く。だから常人の脳重よりも重いかどうかを判定するには、その同一年齢の常人平均値と比較をすることが必要である。尙しかし何よりも大切な關係は脳重がその人の體重と密接の關係があるといふ事實である。體格の巨大のものは體重も大きく、自然とその體格に釣り合ふやうに頭蓋も大きく、從つて頭蓋内容たる脳髄も亦大きいこと勿論である。

以前には、男子脳重は女子脳重よりも成人に於いて平均的に百三十瓦以上も大であつた事實から、之れ男子が女子に比して智能が先天的に優秀なることの證據であると、メービウスなどの學者から論ぜられたことがあるが、一方に男子體重は女子體重よりも成人に於いて平均して十瓩以上も重いのであるから、若し體重一瓩當りの脳重量値を男女で比較して見たらば、却つて女子の方が、男子よりも脳重が重く、女の方が男よりも賢かるべき結論になる筈である。

一般に動物界を通じて脳重の大なるものほど高等の動物かと云ふにさうは云へない。象の脳重は約五千瓦、鯨の脳重は約三千瓦で、人間の平均脳重(本邦成人男一三六七瓦、女一二一四瓦)に比し三四倍も大

きいが、決して之等の動物の、智能の優秀さはお世辭にも認められない。又鼠族、半猿類、小食類等の小動物で腦重の甚だ微々たるものであつてもその感覺運動等の作用にはかなりの優秀さを示しゐる例も少なくない。今各動物の腦重と體重との比をとつて見ると第四表に示す如く哺乳動物類を通じて人間が比較的に一番重い腦を持つてゐるといふ事實が分る。鳥類の中で雀の如きはその腦重に比して體重が著しく輕くて、腦重の比率に於いて人間を遥に凌いでゐることは、恐らく腦の機能の優秀といふためではなく、空中飛翔の便宜からその體重が特に輕快に構成されてゐるが爲めであつて、之は除外例と見ても異存はなからう。併し同一人間に就いて腦重だけの年齡の發育に伴ふ重量增加の有様を見ると第五表に示す如く幼少時(一乃至六歳)に於いて極めて著しい增多を示すけれども、その體重は年齡に伴ひ殆んど正比例的の增量を示して行くに過ぎないから、腦重對體重の比率は第五表に見る如く却つて幼者に於いて壯者よりも高く、卽ち幼者ほど腦の比率が大きいといふ關係になつてゐて、一般動物に比較する際の法則は玆には適合しないことになる。「大男總身に智惠が廻りかね」といふ俚諺は成人に於いて腦重を一定値と見れば、體重の大なるものほど腦の比率が低くなるわけであるから、巨身者ほど割が惡いことになるので、幾分の眞理はある。

角力取から大學者が出たと云ふ話も嘗て聞かないが、さりとて小男の大頭が必ずしも偉大なる頭腦の持主であるとも限らない。一概に腦重そのものや腦重の體重に對する比率ばかりから、精神能力の程度を測ることは出來ないのみならず、上に記載した多くの實例を通覽して見ると、寧ろ腦重とその人の職業や能力とは何等の關係がないと云ひ切つて了つた方が却つてよく事實に適當してゐると思はれる位である。更に皮肉な話は獨逸國内で學者達が自分の遭遇した例の中で最も重量の大であつた腦の持主に就いて報告した所を集めて見ると二千二百瓦以上の非凡なる腦髓は三例が三例とも凡て普通人乃至低能者のものであつたと云ふ。

其處で私共は腦髓中の如何なる要素又は特質が數量的にその人の智能と密接の關係を持つてゐるものであるかを精細に硏索しやうとした。まづ着目したのは腦髓中のは腦兩半球の皮質と名ける部卽ち大腦の表面を徼うてゐる肉眼では灰白色を呈してゐる厚さ約三糎厚さ大眼の殆んど全面に亘る廣い部分は、從前から各種の運動や感覺や知覺や記憶、聯想のやうな要素的叡智作用の中樞部位の分布してゐる所と認められてゐる。此の大腦皮質部には大體に於いて多數の神經細胞が整然と層次をなして、規則正しく排列され、各細胞は相互の間に無數の纖維を出して一定の複雜な連合をなしてゐることが、組織學の上から明かにせられてゐるし、又此の大腦皮質を侵すやうな種々の疾病例へば腦膜炎、腦炎、動脈硬化、腦軟化等によつて皮質の神經細胞が破壞せられると之に伴つて著しく智能の作用が障礙されるといふ事實も明白なことであるから、大腦皮質細胞が智能の座位として最も密接重要な關係にあるものではないかと想察せられたのである。果して生來性の白癡者や又は精神病によつて癡呆に陷つた者などを、死後解剖して

其の大腦を精細に檢査して見ると、腦重に於いてはさほど著しい異常はないにしても、大腦皮質細胞の數や其の構造や層次排列や各細胞間の連合等には著明な先天性發育不良乃至疾病による破壞の跡がありありと顯微鏡下に認められたのである。此の大腦皮質部以外にも腦髓中に神經細胞は隨所に多數に散布してゐて、夫々が一定の生理的機能を營んでゐるには相違ないが、只今は議論の都合上大腦皮質細胞のみをとり出して問題にする。皮質神經細胞の實數については學者によつてその推定數にいろ／＼提說の相違があつて一致しないが、最も信憑すべきドナルドソン教授の推算によると、通常人の大腦皮質の神經細胞數は實に九十二億、まづざつと百億に上り、地球上の總人口數の六七倍の數に上る神經細胞を各個人がその智能作用のために驅使してゐる勘定になるのである。さて或る一人の大腦皮質の神經細胞總數が常人の平均數よりも多ければ多いほどその人の智能が優れてゐる筈であり、又少なければ少いほど低腦の度が增すといふ譯合である。尤も智能は個々の神經細胞が個々獨立に營むのではなくて、その個々細胞を連絡する纖維の連合作用によるのであるから、纖維の多寡等も精神作用の優劣に與かること重大なることは云ふ迄もない所であるが、大體その神經細胞總數の多少が標準となるものである。重量の大きな腦髓は、大腦の容積も大きく、從つてその表面積も廣いから、その爲めに多量の皮質神經細胞を盛ることが出來る故、重量の少ない腦の所有者よりも智能の優れた者が多いことは、推論出來ないこともない。しかし人間の大腦は其の表面が決して平滑なものではなくて、多數の腦溝や腦廻轉を作り、いはゞ深いひだが幾重にもあつて、その表面積を廣くしてゐるのであるから、同一の腦重のものでも大腦表面のひだが多く且細かくして皮質表面積の廣いものほど、皮質細胞數に豐富に盛り得るわけである。私共の實際に見た偉人の腦に就いて云つても青山胤通博士や夏目漱石氏の腦は腦重は平均値よりさう際立つて大きいことはないが、その大腦表面の腦廻轉の有様が甚だ複雜で、細かく、常人には認められない副溝が多數に存在してゐることが證せられた。之によつて見ても智能と比較的密接の關係があるのは、腦の重量そのものではなくて、大腦皮質内に含まれる神經細胞の總數の上にあるらしく、從つて腦廻轉が複雜で大腦表面積の廣いといふことが、その生物學的條件となるものらしく思はれる。之を人間の腦に就いて實際に證明することは甚だ困難な事業であるが、私が嘗て鼠の腦に就いて計測した所に因つて一例を述べると、白鼠（大黒鼠）はもと褐色鼠（溝鼠）から派生した變種であるが、種々生活上の機能退化の爲めに白鼠は褐鼠に比し體重も少なくなり腦重も一割方減少し（二瓦）てゐるが、しかし大腦皮質全體の神經細胞數は兩者に於いて少しも差違が存しない。たゞ白鼠に於いては視力が著しく退化するため、その視覺中樞の存する皮質部（即ち後頭部）が、その皮質の厚さを減じてゐる。しかし之は細胞數が減じたためではなくてたゞ個々の細胞の大いさが小さくなつたのに外ならないことが證せられたのである。人間でも腦水腫症と云つて大腦内部にある腦室と名ける部分に腦室液が病的に多量に瀦溜する病氣がある。之は大抵胎内に在る頃に脈絡叢と名ける腦室内の器官に炎症を起して、

その液の分泌量が病的に增多する爲めに發するものであつて 先天徽毒によるものが多いやうに謂はれてゐる。 之に罹ると腦室內の液壓が非常に高いために腦部頭蓋が段々と生育に連れて 內から外へと開いて來て、所謂福助頭の巨頭を構成する。 之を水腦と云ふ。 何故ならば此の巨頭を剖開して見ると、 その頭蓋內に充されてゐる腦髓はなるほど形は大きくて重さはおもいが、 それを切斷して見ると腦室が甚だしく擴張してゐてそれが全く水樣の液で充滿されてゐるからである。 而して肝要な大腦皮質の部は腦室液と 頭蓋骨內面との間にはさまれて內外から高い壓を蒙むるために紙のやうに菲薄になつて、 その皮質の神經細胞は殆んど發達せず、 その形態も排列も全く不完全で且その數も甚しく乏しい。 從つて水腦を有するものは巨頭なるにも拘はらず、白癡或は之に近い低能者が甚だ多いのである。 且大腦皮質其他の部の器械的壓迫の結果として智能低劣なることの外に 尙痙攣麻痺其他の著しい身體症狀をも伴ふものが多いのである。

しかし斯う云ふ腦の器質的の病氣を有しない 人に於いては腦重は大體その頭蓋の大いさから推測することが出來る。 勿論頭蓋の骨質が特に厚ぼつたい人では頭蓋の外形に比して その內腔容積は案外に小さいことも例がないではないが（多くは精神病者）、大抵は頭蓋外形の測定から、大凡その內腔の大いさ、 從つてその內容たる腦髓の大さ重量等を推測出來るものである。 第一表中の腦重の或者は斯うした方法で推算された數字も含まれてゐる。 而して頭蓋の大小を知る最も簡便な方法は云ふ迄もなく頭圍を卷尺で測ることであつて、 世界でのレコードはヨハンネス・ミュルレルといふ 生理學者の六一・四糎であらう。 ワグネル（音樂家）及びビスマルク（政治家）は五九糎あつた。 ナポレオンは巨頭のやうに書ではかいてあるが、 矮身のために比較的頭が大きく見えたものらしく、 その實測値は五五・三糎に過ぎず、 先づ成人の平均値にしか當らない。 ダーウインは五六・三、 桂太郎公が五七・五、 三浦守治博士が五九糎、 之等は大きい方であつて、 前の第一表の腦重と比照せられたら更に明かにならう。 ケンブリッヂ大學で嘗てゴールトンが二千百三十四人の學生に就いて頭圍を計つて、 その各々の學業成績と比較して見たことがある。 が、 其の結果によると大體頭の大きい者が學業も良く出來て、 小さいものが惡かつたといふことである。 然るに大頭に對して小頭症といふのがある。 之は一種の發育缺陷であつて多くは遺傳的に同一家系內に多數出ることもあるが、 之にあつては腦重も甚だ小さく、 ひどいのは成年であり乍ら三四百瓦のものがある。 普通に遭遇する小頭では大抵六百乃至八百瓦迄に止まる。 此の小頭者は凡て皆が白癡であつて、 斯ういふ小頭者の腦髓の形態特に大腦の廻轉等の有樣を檢すると、 寧ろゴリラやチンパンジーなどの大腦よりも簡單に見えるものが多い。

腦重量と智能との關係だけについても、 今日尙神經學者間に幾多の議論があり、 その研究資料にもまだ不十分な所の多いのを免れないが今日醫學的に分つてゐる事實の大要を通俗的に述べるとまづざつと上記の如くである。

第一表 泰西知名者の腦重量及び其の享年

(人名)	(年齢)	(腦重)
シューベルト(作曲家)	三一歳	一四二〇瓦
バイロン(詩人)	三六	一八〇七
ガンベッタ(政治家)	四四	一三一四
シルレッツ(詩人)	四六	一五八〇
ピューベル(哲學者)	四九	一四〇九
サッカレー(詩人)	五二	一六六〇
ダンテ(詩人)	五六	一四二〇
ハイネ(詩人)	五七	一四三〇
ヴュピュイトラン(外科醫)	五七	一四四〇
ヴァコミニ(解剖學者)	五八	一四九五
クロムウエル(政治家)	五九	二二三一
リヒテンシタイン(哲學者)	六二	一三九〇
ベルチヨン(人類學者)	六二	一三九八
キユヴイエー(科學者)	六三	一八二九
ツルゲネフ(文人)	六五	二〇二一
ブローカ(人類學者)	六五	一四八五
ナポレオン三世(帝王)	六五	一五〇〇
チヨーマース(牧師)	六七	一五〇〇
ウエブスター(政治家)	七〇	一五二〇
リービッヒ(化學者)	七〇	一三五二
ガル(骨相學者)	七〇	一一九八
ヒユーウエル(哲學者)	七二	一三九〇
ホイットマン(詩人)	七二	一二八二
ヘルムホルツ(物理學者)	七三	一四二〇
ビショッフ(解剖學者)	七六	一三七〇
ガウス(數學者)	七八	一四九二
カント(哲學者)	八〇	一六五〇
ペッテンコーフエル(衛生學者)	八二	一三二〇
ビスマルク(宰相)	八三	一八七〇

第二表 本邦知名者の腦重量及び其の享年

(人名)	(年齢)	(腦重)
山本宣治(科學者)	四一歳	一七一六瓦
三宅恒方(動物學者)	四〇	一五五〇
一戸直藏(理學者)	四二	一三七五
岩野泡鳴(文學者)	四七	一四二〇
柏村貞一(醫學者)	四九	一二五〇
夏目漱石(文學者)	五〇	一四二五
中江兆民(思想家)	五五	一三一〇
大澤岳太郎(解剖學者)	五六	一三一〇
三浦守治(病理學者)	五八	一四一五
青山胤通(醫學者)	五八	一四一〇
澤柳政太郎(文學者)	六三	一五〇〇
高橋順太郎(藥物學者)	六四	一三九〇
田口和美(解剖學者)	六四	一五〇〇
緒方正規(衛生學者)	六五	一二五五
桂太郎(政治家)	六六	一六一〇

第三表　日英人男女各年齢に於ける平均腦重表

	日本人(田口博士)(男腦重)	(女腦重)	英國人(ホワイト氏)(男腦重)	(女腦重)
一〇—二〇	一三四五瓦	一二二六瓦	一三七六瓦	一二四六瓦
二〇—三〇	一三五〇	一三六四	一三六〇	一二四〇
三〇—四〇	一三七四	一二一〇	一三六七	一二三〇
四〇—五〇	一三七一	一一七九	一三六〇	一二一四
五〇—六〇	一三八九	一二五二	一三四五	一二二三
六〇—七〇	一三八一	一二一九	一三一五	一二一二
七〇—八〇	一三三三	一二〇二	一二九〇	一一七〇
八〇以上	一三四二	一一〇二	一二八五	一一三〇

第四表　一二三の動物の腦重と腦重對體重比率表

		(腦重)	(腦重對體重比率)
哺乳動物	鯨	二四九〇瓦	一：二五〇〇〇
	羊	一三〇	一：三七七
	馬	四八〇	一：五三四
	象	四六六〇	一：四三九
	鼠	〇・四	一：五〇
	猫	三一	一：一二八
	犬	六九	一：四三七
	ゴリラ	四二六	一：二一三
	人	一四〇〇	一：四二
鳥類	駝鳥	二九	一：一二〇〇
	鴨	四・六	一：三一七
	鳩	二	一：一九二
	雀	〇・八	一：三〇

第五表　人の幼少時各年齢腦重平均並に體重平均(男女平均)により發育を示す表

(年齢)	男腦重(フィーアオルト氏)	女腦重(フィーアオルト氏)	男女平均體重(ケトレー氏)
生誕時	三八一瓦	三八四瓦	三瓩
一年	九四五	八七二	九
二年	一〇二五	九六一	一一
三年	一一〇八	一〇四〇	一二・五
四年	一一三〇	一一三九	一四
五年	一二六三	一二二一	一五・五
六年	一三五九	一二六五	一七・二
七年	一三四八	一二九六	一八・七
八年	一三七七	一一五〇	二〇・三
九年	一四二五	一二四三	二二・二
十年	一四〇八	一二八四	二四・二
十三年	一四八七	一二五六	三三
十五年	一四九〇	一二三八	四一
二十年	一四四五	一二二八	五七
廿五年	一四三一	一二二四	六〇

新支那訪問記

村松梢風

南京（四）

遷都可否

北平遷都說だの、西安遷都說だのが、南京政府の一部の人々の間で論議されてゐる。其の理由とする處は、經濟的及び軍事的に見て南京は國都として不適當であるといふのが第一。現在の南京都市計劃は約五千萬元の豫算で着手されてゐるが、物價と勞働賃銀の低い南京でも五千萬元では一大都市を建設するには不足である。所謂南京四不の電燈不明、電話不靈、道路不平、水不清と竝べて來ると其の一つを改良するだけでも容易でない。南京には現在では水道すら無い。而も井戶は非常な硬水で石鹼が溶解しない。頭髮を洗ふと、洗へば洗ふほどねばつて來る。水道建設は最大急務である。假りに斯樣な公共事業を民營で行はせるとしても、周圍三十數哩に亘る廣漠たる廢墟の如き南京城內に各種の文化的施設を行ひ、戴天仇の夢想するが如き東洋的な美々しい市街を現出せしむるまでには非常な巨額の投資をしなくてはならない。さうして此處に新都市を建設してみたところで、經濟上の實權は上海に奪はれてしまふ。外國貿易でも內地商工業でも地の利から云つて到底上海を凌ぐことは不可能だ。さすれば都市の繁榮は望まれない。それよりも旣に設備と機關の完備せる北平を國都とするがよいといふ意見。更に是れを軍事上からみると、支那は海軍が貧弱だから現在では長江一帶の警備すらできない。現在日、英、米等の海軍のために長江水上の支配權を奪はれてゐる。假りにそれらの外國と事端をかもした場合に敵國の軍艦のために江上から砲擊を加へられ

ば南京は忽ち落城の悲運を見なければならぬ。それゆゑ國防上有利なる北平か若しくは一層安全な陝西省の西安あたりへ國都を遷せといふ議論。この西安遷都といふことは支那の政治家軍事家が常に多少は念頭にある問題である。所謂排日論の最後に曰く中國は日本と戰爭をしても驚かない。其の時は國都を西安に遷す。日本の陸軍がいかに强くても陝西省の奥地迄大兵を進めることは不可能だと云つてゐる。私は日本の軍事專門家の意見も聞いて見たがまつたくそれは不可能に近いさうだ。然し、假りにさういふ場合があれば日本は支那の奥地迄軍隊を送るといふやうな愚かな眞似はしない。長江一帶の要地、山東及び天津地方の要地を占領して持久的策戰に出ることは勿論である。さうしてしまへば謂はゞ頭を押えられ、手足を縛られてしまふやうなもので譬へ胴中だけ生きてゐても動くことは出來ない。周や漢の時代なら知らず現代では斯くして國際的經濟の聯絡を絶たれては國家も政府も立ち行くものではない、と云つて其の專門家は笑つてゐた。日支戰爭などといふことは私は少くも今後百年以内に於て有り得べからざることを確信するが、日米戰爭論と同樣に是れを架空に描いて研究して見ることは無意味でない。支那の西安遷都論者の言ふ處も日本の軍事專門家の目から見ると一笑にしか値しない。が、其の日本の軍事專門家の意見も口でこそ容易らしく云へるがさて實際となると隨分怪しい點がある。かうして兩者ともに戰爭の危險と不利益とを自覺することは將來の國交を圓滑ならしむる上に於て有益であるとも云へやう。――以上が經濟的軍事的にみた遷都論の大要。

第二の理由は甚だ滑稽である。曰く、南京は上海に近いために政府の要人が頻繁に上海へ往復し爲めに政務事務の延滯を來す、且つ革命の志氣を弛緩せしむること少くないからよろしく他の土地へ首都を遷せといふのである。

政府の要人が上海へ往來することが遷都の理由に擧げられるほど事實其の往復は頻繁である。勿論用事もあるだらうが主なる目的はいき抜きである。政府の要人達は殆ど皆上海に住宅を構へて家族妻子を其處へ置いてある。南京の生活は假住居である。だから土曜日の午後から必ず上海へ出掛け、月曜日の朝にならなければ南京へ歸つて來ない。毎週の其の往復の夜行列車の一等寢臺車などと來ては南京政府の官吏を滿載してゐると云つてもいゝ位だ。猶此の休日以外の日にもいろんな口實を設けては上海通ひをする者が多い。遂に政務に故障を來してゐるほど頻繁に往來する。上海へ行かない人は馮玉祥と其の乾兒の數名位のものだと云はれてゐる。

現在の南京は殺伐荒涼の都會だ。或る米國の新聞記者は南京を評して、南京は都市ではない村の連續だと云つたさうだが適評である。或ひは巨大な村と云つてもい〻。然し、村なら村の平和があり長閑な娯樂がなくてはならぬが、南京には只混雜と慌たゞしさと、不便があるだけだ。まつたく厭な處だ。歡樂や慰安を求める場所は無い。夫子廟の茶館へ行つて唱を聽く位を僅かな慰めにしてゐる南京の若い官吏や軍人等を見ると私は寧ろ氣の毒な氣持がした。大官連は毎週上海へ行つて息抜きができるからい〻けれど、若い官吏や下級士官は金がないから其の眞似は出來ない。それでも少し懷中が溫まると直ぐに上海へ飛んで行く。南京で稼いだ月給を上海のダンスホールや藝者屋へ入れ上げて來る。是れでは南京の藝者や畫舫を禁止した甲斐がない。そも〱、強大なる資本主義に對しては一指も染め得ないで、資本主義の奴隷である最も弱者たる藝妓風情を彈壓して果敢ない彼等の生活を奪つて、それで革命政治だの新思想だのと云ふのが聞いて呆れる次第である。弱い者は後廻しにして、先づ強い者から征伐して貰ひ度い。孫中山の墓を建つはやさしいが、三民主義を實現することはむつかしい。やさしい事は後廻しにして、むつかしい事から片付けて貰ひ度い。

南京政府は藝妓と同時に易者の營業を禁止した。易者こそ飛んだ側杖を食らつたものだが、他人の身の上は占ふても自分の運命は判らなかつたらう。詰り迷信を打破するためだといふ。同じ頃民間で關帝を祀ることも禁じられた。關羽のやうな軍閥主義者を帝と云ひ神と稱して崇め祀るのは革命思想に反するといふのだが、關羽も今から一千七百年ばかり前に生れて三民主義を知らなかつたばかりに飛んだ災難を蒙るものだ。南京でもう一つ退治られたものが乞食である。乞食はほとんど居なくなつた。關羽は打倒されても大昔死んでしまつたから痛痒を感じないが、易者や乞食は可哀相だ。尤も關羽張飛劉備玄德などが生きてゐたなら蔣介石や馮玉祥があべこべに打倒されたかも知れない。何にしても弱い者が損で、四川や東三省の軍閥は相變らず威張つてゐるが、南京の藝者にヨボ〱易者と乞食とは立どころに打倒されてしまつた。

閑話休題、政府の要人と雖も人間の血が通つてゐる以上は生活の慰安を求めたくなるのが當然だ。馮玉祥の眞似をして一食一菜、朝は四時起床、木綿の服を着て兵卒みたいな生活をしなければならぬものだとは思はない。あれは馮玉祥の性格であり趣味である。他人に強ゆるべきことではない。然し、現在の南京のやうに、一般の民衆が索莫たる生活に堪へてゐる間は政府の大官も共に其の辛苦を嘗つべきである。それを指導者たる

大官連中が眞つ先かけて上海へ泳ぎ出すのだから評判も悪い筈だ。元來租界回收を絶叫する國民政府の政治家が上海の租界へ善美の邸宅を構へて已れ獨りヌク〳〵と納まつてゐるなどは甚だ矛盾である。言行不一致と主義の不徹底を責められても仕方がない。延ひては遷都主張の理由に大官の上海通ひが擧げられ外國迄其の事が電報で報導されるに至つてはどの道餘り人聞きのいゝ話ではない。

遷都論の眞相は大略述べた通りだが、此の論は馮玉祥一派の政客や軍人等によつて唱へられてゐる。私は議論の可否は暫く措いて、國民黨多年の宿願たる北伐漸く完成し革命の緒についたばかりで、再び遷都でもあるまいと考へる。政局の將來に非常な變動でも起らない限りは先づ遷都などは事實あるまいと考へる。それよりも早く南京に立派な都市を建設して貰ひ度いものだと思ふ。



蒋介石

蒋介石と馮玉祥

南京に居るといろんな風説や下馬評が耳に入る。所謂道聽途説である。かういふものをうつかり信用すると飛んだ間違ひの元になるが、さうかといつて道聽途説をまんざら捨てゝしまふわけにもいかない。何故かと云へばそれは一種の空氣だからである。すべてかういふものは無責任な處に特色がある。

或日、徐州へ軍隊檢閲に行つてゐる蒋介石が暗殺されたといふ風説が全市に擴がつた。同じ時同じ風説が上海でも立つた。上海が風説の本元だとも云ふ。異樣なザワツきと無氣味な沈默が通り過ぎた。

「事實でせうか?」

「さあ」相手はむつかしい表情をして「眞逆とは思ふが、然しどんな事だつて有り得るんだから――」

然り、どんな事だつて有り得る支那である。さうかと思ふと蒋介石夫人宋美齢女史が上海で強盗團のために誘拐されたといふ風説は、風説を通り越して大概の人が或る確信をもつてゐるやうに話してゐた。それはかうである。蒋介石が何かの病氣で上海の病院へ入院してゐる時、或る日宋美齢女史の處へ電話が掛つた。

「退屈だから直ぐ來て貰ひ度い。私の自動車を迎ひに遣る」と正しく蒋介石の聲である。

間も無く自動車が來たので宋美齢女史はそれへ乘つたが、其の自動車は常に蒋介石の乘用してゐる車であつて數名の護衛兵も附いてゐる。處が自動車は妙な處へ走つて行つて宋美齢は一室に監禁されてしまつた。強盗團の方では蒋介石の聲色を使ひ自動車も護衛も全然同じものを仕立てたのである。結局宋美齢は三十萬弗の銀行小切手を書かせられたといふ話だ。眞僞は別問題として、ありさうな話である。事實上海ではそれと同じやうな事がのべつ行はれてゐるんだから。

蒋介石に關する評判はすべて餘りよくない。殆ど人氣がない。坊間の下馬評では全くボロクソにコキおろされてゐる。曰く。「彼は反動政治家である」曰く「彼は機會主義の親玉で實力がない」曰く「この三月の第三次全國代表會議が彼の政治的生命の最後の審判だ」やれ姉女房の宋美齢とどうしたこうしたこと、やれ彼は青帮(チンパン)から月々五十萬弗取つてゐることか、やれ總税務司のエドワーヅが或人に向つて蒋介石の外國銀行の秘密預金が一千萬元あると云つたことの、と際限に退がない。

浙江省地方では「蒋來苦(チャンライク)」といふ言葉が流行り出した。どういふ意味かといふと、蒋介石は、浙江の出身だが彼が郷里へ來る度びに政治資金をつくるために新税が課せられる。或人が田舍へ旅行して宿屋へ泊ると電燈があるのにわざ／＼ランプを使つてゐる。何故電燈をつけないのかと尋ねて見ると、今度蒋介石が歸つて來てから電燈へ税が掛るやうになつた、馬鹿々々しいから電燈を休んでランプを使つてゐるのだといふ。蒋介石が來る度びに新税が掛けられる。それで「蒋來苦(チャンライク)」の意味が分つて來る。

かういつたやうな風説や下馬評が無數にある。こんな評判だけ聞いてゐると、蒋介石といふ人物は何となく不都合な男のやうに思はれてくる。然し、實際彼がさういふ人物であるかどうかは疑問である。風説には何も確かな根據は無い。只彼が現在一般民衆の人氣を失ひつゝあるといふことだけが事實である。

馮玉祥の評判はどうだかといふと是れは極めてよい。目下支那で第一の人氣男は誰かと云へば馮玉祥だ。少くとも彼に對し

て興味を有つてゐない者はない。馮玉祥は非常な勤勉家である。朝は四時に起き、五時半か六時には出勤してしまふ。客を接見するのも暗いうちからする。それから終日方々驅け廻つて會議に列席したり日に四五回も演説をしたりする。彼は演説が大好きで又上手である。極く通俗な演説だが掴みどころがあるので聽衆に感動を與へる。とにかく素晴らしい活動家である。

彼は兵卒と同じ服を着て兵卒と同じ飯を食ひ、一食一菜主義客を招待する時でも其の流義で押し通す。彼の主義は、吃、喝嫖、賭、の四つを禁じることだ。ピユウリタン同様の生活をする。彼はまたなか〳〵讀書家である。日本語は話せないが讀むことは可成り出來る。智識慾が旺盛であらゆる智識の吸收に努めてゐる。彼は南京では軍政部の役所の中で起き臥してゐるが、其處へ行つて見るといろんな標語を紙に書いて壁や羽目板へベタ〳〵貼つてある。『公家一文錢人民一滴汗』『一粥一飯當思來處不易』『耘鋤日正午汗滴禾下土誰知盤中飧粒々皆辛苦』『這些飲食人民供給我們應該爲民努力』『帝國主義民國之敵、救國救民吾輩天職』といつたやうな文句がきりもなく書いてある。彼は或る程度迄それを實行してゐるのである。さうかと思ふと彼はなか〳〵機智に富んで居り言往々人の意表に出ることがある。いつぞや日本の代議士が大勢で馮を訪問した時、或る代議士が『あなたの勤儉主義には大變感心して居ります』と云ふと、馮は破顔大笑して『いや、あれはみな噓です』と言下に答へた。

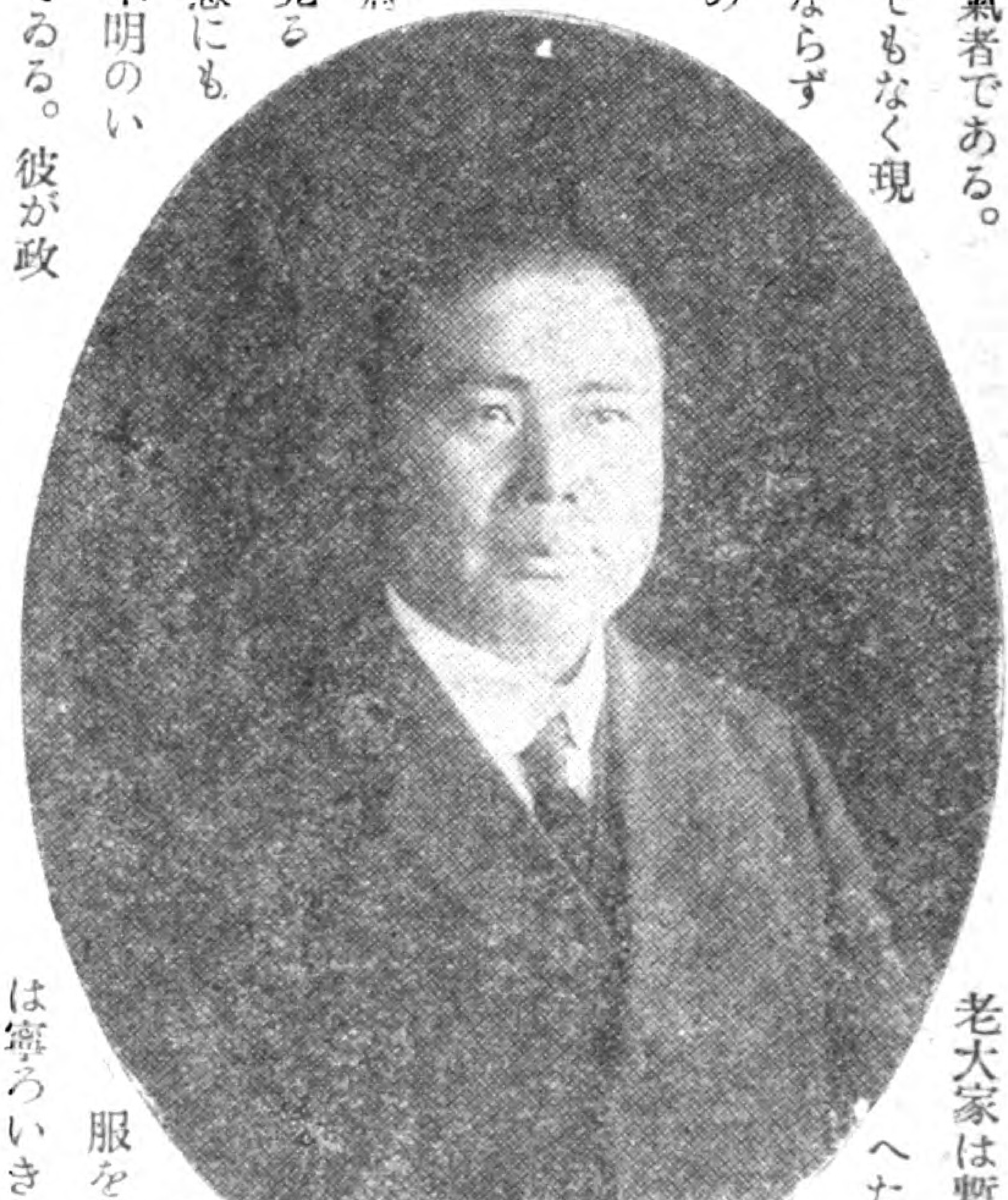
彼は兵卒と同じ服を着、頭巾のやうなヘナ〳〵の帽子をあみだに冠り、漂々浪々として歩いてゐる。是れ程邊幅を飾らぬ人も珍らしい。處が或日國民政府の若い官吏達の前で演説をして云ふことは『官吏たる者は第一に服裝を注意しなくてはいけない。軍人も同樣である。戰時には戰時の服裝か必要たが、最早平和の今日では成る可く民衆に親しみやすいやうな服裝をしなければいけない。諸君は毎朝役所へ出勤する前によく〳〵鏡に向つて自分の服裝を改めて貰ひ度い』馮玉祥の言葉だけに聞く者は驚いてしまふ。

馮玉祥の支配下にある河南省は近年うち續く饑饉のために人民は生活が出來なくて四方へ流離しつゝあるが、その饑民が陸續と南京へ押し掛けて來てゐる。馮は此の救濟について大いに努力しつゝあるが、毎朝役所の前の原つぱで大釜へ粥を煮てむらがり來る饑民達に振る舞つてゐる。

馮玉祥には無意識的に表裏があり、機略があり、そして今ではクリスチヤンは廢業したといふけれども何やら宗教的信念もあるらしく見える。要するに彼は日本でも云ふ通り支那でも怪

物視されてゐる。端倪すべからざる處がある。其の巨大な怪物は白晝トラックみたいな自動車へ兵隊と一緒に西瓜を滿積したやうに乘り込んでどても樂天的な顏をして南京の街を驅けずり廻つてゐる。民衆は馮總司令に對して異樣な興味、期待、親しみを寄せてゐる。詰り彼は人氣者である。

蔣介石と馮玉祥はいふまでもなく現代支那の二大立物だ。のみならず今や此の二人は世界的人物の域に入つてゐる。此の對照はどうであるか、蔣介石は人望を落し、馮玉祥は人氣を得つゝある。然し乍ら、蔣の不人望の原因を研究して見ると多くは前に云つたやうな愚にもつかぬことでなければ眞僞不明のいゝかげんな風說から發生してゐる。彼が政治上の大失態を演じたといふわけではない。馮玉祥の人氣の原因は何かといふと彼が戰爭が强いとか政治が上手だとかいふことではない。彼の人德だか、性格だか、策略だか分らぬがとにかくさういふものである。責任のある批評家が、馮は蔣に勝れりと云つたわけでも、蔣は馮より劣れりと折紙を附けたわけでもない。これが全くの下馬評といふやつである。



馮玉祥

私が日本へ歸つて來て政界の某老大家に向つて右の下馬評を根據にして蔣と馮との二人の風格を話し傳へると、其の時その老大家は暫く默想してゐた後次ぎのやうな批評を加へた。

馮玉祥もえらい人物だが、さう勉强しては不可んです。朝四時から起きて驅けづり廻ることの、不味い飯を食ふの、そんな事が國を治める者にとつて何になる。人間はさう戒を守つては駄目だ。戒律を守る力を有ち乍ら戒律に囚はれぬ處に妙があるのだ。馮が木綿の服を着て兵隊と同じ生活をする。さういふ事は寧ろいきな眞似である。餘りいき過ぎて大向受けである。民衆といふものはえてさういふ事に對して直ぐに拍手喝采を送るものだが、大志を抱いてゐる者にとつては一身の戒律を守るくらゐはむしろ手易いことだ。けれどもそれでは四億の民衆の人氣はとれても、彼の配下に附くべき英雄の心をとる

ことは出來まい。河南の饑民に粥を煮て食はせるはよい事だがさういふ事が所謂小恵である。天下を治める者が左樣な小恵に囚はれてはいかぬ。もつと大きく救濟しなくてはいかぬ。勿論馮も其の運動をしてゐるだらうが、自分の家の前で粥を煮て食はせるやうな事に氣が付いては困る。但し馮も既に其の邊に氣が付いて居り、やがて態度を一變する時があるだらうと思ふ。蔣介石が女房とデレ〳〵して居るなどは誠にいゝです。たまには賄賂も取るがいゝです。人間は多少さういふ處がないと第一自分も氣が疲れるし、また周圍の人間が窮屈で働けない。いや、然しどちらも面白い』

此の老人の批評が全部中つてゐるかどうかは知らぬが一面の眞理は穿つてゐるやうな氣がする。

一體この人物評といふものはむつかしいものである。殊に支那の人物に對する日本人の觀察には往々途方もない買ひ冠りや見損ないがある。支那には日本に無い型の人物がある。蔣介石にしても、馮玉祥にしても日本には無い型の人物である。かういふ全然自分の方に無いものを多分に有つてゐる人間に會ふと大概の日本人は極端に感心する癖があるが、こちらに無いからといつて必ずしもそれだから偉いとは限らない。田中義一は日本では珍らしくない型の人物であるが、田中を蔣介石と比べて見て必ずしも蔣介石の方が偉いといふ風に考へるのはよくない。

茶房

私が六年前南京へ來た時と變つた事の一つに黄包車(ワンポウ)の鈴のなくなつたことを前に書いた。が、實はもう一つ變つた事がある。それは下僕(ボーイ)に給料を出すやうになつたことである。民國十二三年頃には家庭で使傭する下僕に給金を與へる慣例はなかつた。全然無給料で、これは外國人の家庭でも支那人の家庭でも皆一樣にさうだつた。それはどういふ理由かといふと、下僕(ボーイ)といふ者は主人の買物のシッポを切り、或は出入商人からコムミッシヨンを取る特權を有つてゐてそれが公然と彼の收入になるからだつた。あらゆる買物に對してそれを行つた。では若し主人が彼に買物をさせないで他の仕事ばかりさせて置いたらどうかといふと、矢張り同じことで、商人の方では主人が自から店へ來て買物をした場合でもあとで其の家の下僕に對して一定の割り戾しを遣るのである。それが世間一般の慣習であり、商人間に於ては不文律的の商業道德とされてゐた。かういふ風だから買ひ物の多い少ないによつて下僕の收入も上下して一定しないが、ほゞ四五圓にもなれば上等の方だと云つた。買物が多いとか、主人が呑氣で胡麻化し易いとかで標準以上に收入のある下僕の

株は三十元から八十元位まで賣買が行はれてゐた。
是を人も怪しまなかつた。下僕（ボーイ）といふものはさういふものだとなつてゐた。たまく\日本から來た小學校の先生や外國の宣教師などが此の惡風を歎いて、下僕に正當な給金を與へて賄賂や不正手段を禁じたりしたことがあつても皆失敗した。下僕は唯々諾々喜んで給金を貰つた上に矢張り賄賂も取れば買物の胡麻化しもやる。二重の收入があるといふので其の下僕の株は俄然として騰貴する。大概の道學者は一ぺんで懲りく\して終ふ。然或る下僕は此の二重所得の株を高價に賣つて代りを入れた。然るに主人の方は其の頃漸う氣が付いて替りの下僕に對しては給料を拂はないことを宣告すると彼は承知しない。「自分は此の家は二重の所得があるといふので何十圓かで株を買つて來てゐる、今更前の制度をやめられては困る」と強硬に談判する。然し主人としては永久に二重拂ひをさせられてはやり切れないから止むを得ず其の株を買戻して漸う無給料に戻したといふ珍談があつた。

其の頃南京に住んでゐた私の友人はどうかして自家の下僕だけでも敎化したいと考へて、買ひ物を胡麻化すこと、コムミッションを取ることの不正なる理由と、公明正大にして一定の收入を得ることのいかに愉快であるかを口を酸ゝして說いたところが最後に下僕は腹を立て、

「下僕といふ者は昔から買ひ物を胡麻化してこれで金を溜めるものである。收入が一定すれば働く張り合ひも樂みもなくなるから當家へ勤めることは御免蒙る」

と云つてサッサと暇を取つて出て行つてしまつた。

それが、今度南京へ來て聞いて見ると何處でも大概三四圓位の給料を拂つてゐる。其處に時代思想の變化が見られる。

下僕の給料問題は僅かに一例に過ぎない。私は前に南京政府が官吏の待遇を改善して賄賂を嚴禁したことを書いたが革命前の支那は官吏でも軍人でも皆この下僕と同じ樣な筆法で賄賂を取ることと公金を胡麻化すことが唯一の定收入だつた。其の代り俸給は極く少なくてそれも不渡りといふやうなことがある。いきほひ不正手段を執らなければならんといふ狀態であつた。だからそれを社會も怪しまなかつた。南京政府が爰に着目して先づ官吏の待遇を向上し這般の惡弊を一掃しようと掛つたのは當然であるが、世間の評判を聞いて見ると現在でもまだ可成り露骨な賄賂が行はれてゐるさうである。惡くすると前述の下僕の筆法で月給も取れば賄賂取るといふことになりかねない。

家庭の下僕（ボーイ）はそれでよいが、旅館の茶房（ボーイ）は今も昔の儘である。

支那の旅館はボーイを非常に澤山使用してゐる。上海や南京あ

たりの旅館では普通部屋數三つ四つに對して茶房が二三人の割合にゐる。彼等は勿論無給料である。

旅館の茶房は必ず客の買物の頭をはねる。つまり與へた金よりも少なく買つて來る。若し値段の一定してゐる品物だとつり錢を取る場合はそれを少なく持つて來るし、さうでない場合にはアリ／＼判つてゐる品物に對して實際以上の錢を要求する。客がそれを拒絶すると彼は直ぐ不平を云ふ。何と云ふかと思ふと「先生のやうにキチヨーメンでは私の骨折賃が出ない」といふ。

それでは祝儀(チツプ)はどうかといふと、祝儀は祝儀で正々堂々と要求する。而も餘程澤山やつても一應不足な顏をする。旅館の支拂ひは滯在客だと大概五日目／＼にすることになつてゐるが、上海の旅館では支拂ひの一割だけ帳場から附けて出す。然らばそれだけ拂へば文句はないかといふとなか／＼さういかない。「勘定書へ附いてゐるのは帳場の者が取るのであるから自分達の分は別に貰はねばならん」といつて大威張で請求する。南京の旅館はさすがにそんなことはなく、勘定書は勘定だけであつて祝儀は客の任意にしてある。普通外國人だと一割以上二割位の祝儀を遣る。中國人であると餘程の紳士でない限り一割以下の祝儀を遣る。中國人なればそれで通るが外國人では通らない。

面白いことは客と茶房と祝儀の多い少ないで口論してゐる。よそめには全く喧嘩かと思ふやうに、口角沫を飛ばして論じてゐる。それで若干か增させて納まりがつくと最早ケロリとして命これ奉じて働いてゐる。不服なのを顏に出さず受け取つて其の代り冷遇するといふやうなことはない。不服なものは何處迄も正々堂々と不服をとなへる。

公然と祝儀を貰つた上に買ひ物のしつぽを切るのは怪しからんと思ふが、茶房の身になればなか／＼そんなことでは滿足が出來ない。此の上に有らゆる機關を利用してコムミツシヨンを取る。吳服屋、料理屋などは勿論だが、馬車屋、自動車屋、洗濯屋、炭屋、何處からでも取る。これは公然と取るし、出す方も公然と渡してゐる。客が直接自動車代を支拂つた場合に、あとから茶房が幾ら拂つたかと聞きに來る。そして自動車屋の云ふことと一致すれば問題はないが、若し自動車屋に不正直なことがあれば以後は其の自動車屋を呼ばない。だから商人の方でも茶房に對して德義を守ることになる。

旅館の茶房が一番甘い汁を吸ふ場合はお客に女を取り持つことである。勿論特約してある商賣女だ。此の場合は大概總額を女と茶房とで折半するが、茶房の方は朋輩があるから二三人でそれを分配し、なほ帳場の番頭先生にも義務的に配分する。か

ういふ點はなか／＼義理固い。處で女の相場といふやつはあるやうな無いやうなものだから、茶房は女を伴れて來て一應顏を見せた上で精々高く吹つ掛ける。お客次第で高く賣り込んでも女の懷中へ入る處は變りはないが、茶房がそれだけ不當利得をする。

支那の旅館は都會でも田舍でもこれがある。むしろ田舍へ行くほど自由で田舍は大概旅館にさういふ女が置いてある。夜になると茶房がお客の顏色をうかゞひ乍ら「先生好的姑娘要不要」てなことを云ふ。一夜泊りでも旅の一興と呼ばせる人もあるし男獨りの滯在客などは永い間にはどうしても呼ぶことになる。さういふ客は上客だから茶房のうちから大切にしてよく用をきいて立ち働く。が、まれには聖人もある。聖人では儲からないから自然粗略にする。粗末にするのは止むを得んとしてもかういふ例がある。或る聖人が勘定を拂ふ時他の友人と同じ割合で祝儀を遣ると茶房は手を振つてゐて受け取らない。

「某先生だつて一割ぢやないか」と云ふと茶房は曰く

「某先生は屢々姑娘をお呼びになるから一割で結構ですが、あなたは姑娘を呼ばないから幾らか其の分を頂き度い」

實に得手勝手な要求だと思ふが、茶房の立場から見ればこれが寧ろ公平なつもりであるのかも知れない。けれども、不當利得の方を標準へ持つて行く處は何處迄も茶房式である。

すべてかういふ調子である。それでは茶房などをする人間は定めて良くない人間だらうと思ふとさうでなく相當な旅館の茶房は概して正直である。財布を抛り出して置いても小錢を摑み出して机の上に置いても滅多に間違ひはない。要するに買ひ物を胡麻化したりすることは彼等として當然な事をしてゐるのであつて不正の觀念でやつてゐるのではない。正直であつて而も骨身を惜まずよく働く。これは家庭のボーイでも同じである。だから彼等の習慣を承知の上でチビ／＼胡麻化させながら手加減を加へて使ふとこれほど便利な召使はない。ぜんたい彼等は義務觀念で働くのではなく常に儲けづくで動くのだから使ふにも遠慮が要らない。支那の旅館へ泊つて上等の待遇を受けやうと思つたら、成る可く尊大に構へ、茶房を雜巾のやうにコキ使ひ、叱り散らし、威張れるだけ威張り、手數を掛けさせられるだけ掛けさせて、其の代り祝儀をうんと遣るのである。かういふのが一番上客である。茶房に對してなまじ斟酌を加へたり人格を尊重したりすることは禁物である。

下等な人間といふものがどうにもならぬものだとすれば、かういふ制度も一策である。これをもつて直ちに道德觀念の缺乏と見ないで、融通無碍の支那の社會組織の中からは往々この茶

房のやうな便利なものが生れて來ることに注意して見ると面白い。

個人主義

支那人の常識の中にわれ〳〵の常識にないことが往々ある。慣れて見れば別段不思議もないが、最初の間はさういふことで感情を害したり意志の不通を來たしたりすることがある。私はさういふ支那獨特の習慣、性格、常識に類したやうなものを擧げて拙著『支那漫談』中に解説を試みたことがあつた。今度も南京にゐて見聞した事柄を一二紹介して見ることにしやう。

或晩私がT君といふ中國人と一緒に例の書場へ行つて歌を聽いてゐる時の出來事である。其の晩は大變暖かい晩だつた。そこへ數百人の人がはいつてゐるので少々暑苦しくなつて私とT君は外套を脱いで帽子と一緒に側らの空いてゐる紫檀の床几の上に置いた。それから夕刊を買つて讀んだあとでそれを外套や帽子の上へ載せて置いた。暫くすると其處へ一人の紳士の客がやつて來た。年頃は五十近く眼鏡を掛け、羅紗の支那服を着て中折帽を冠つてゐる。なか〳〵風采のいゝ人だ。其の人は一つの床几へ腰を掛けやうとしたところが生憎それがよごれてゐる。其の上に茶がこぼれたり西瓜子の皮が散つたりしてゐた。すると彼は私達の買つて置いた新聞を何の斷りもなく取つてそれで床几を拭くのだつた。其の態度は、他人の買つた物だか、捨て、ある物だか、そんなことは全然無頓着らしく、平然として拭き了ると、今度は其の汚れた新聞を元々通り外套の上へ冠せて置くのだつた。どうせ讀みがらの新聞だから拭き物にされることは構はないが、汚れたやつを再び上へ置かれてはかなはないから、T君は一寸險しい目付きをして直ぐにそれを床の上へポンと捨てた。

これを見てかの紳士は恐縮するだらうと思ふと大違ひである。

「君は何といふ無禮なことをするか」と彼は二十ばかり年下のT君を叱り付けた。

「汚ないから捨てたのです」

「人が其處へ置いたものを目前で取つて捨てるといふは無禮である」

「これは僕達の買つた新聞だ、捨てやうとどうしやうと勝手だ」

「それを問ふのでない君の態度が宜ろしくないといふのだ」

「あなたは他人のものを默つて使つていゝか」

「それは吾輩は知らなかつたからだ。とにかく折角吾輩が置

いたものを拋り出すとは無禮である」

T君は軍官學校出身の少壯の官吏である。そのうへ中國人に珍らしい氣象の激しい男だから堪らない。忽ち大喧嘩になつた。唱も何もメチヤ〱で一時は大騷ぎである。私は呆れ返つてしまつた。とにかくどう負けたところでこつちが叱られる理屈はないと思ふのだがかの紳士は堂々と鼓を鳴らしてT君をやり込めて來る。無論T君の方も負けてはゐないがさりとて勝てないから不思議である。更に私が不思議でならぬのは此の紳士が何處迄も自己の正しさを確信してゐるやうな態度であつた。結局喧嘩は五分々々の物別れでお仕舞ひになつた。

是れに類似したやうな例を支那へ來てゐると時々經驗する。右の話を中國人に提出してどつちが正しいかと質問するまでもなく紳士の方に道理がある筈はない。が、議論とか喧嘩とかいふ場合になるとあながち理屈通りにはいかなくなつて來るから妙である。理屈などといふものは何處へでも附いて來る。ウカウカしてゐるうちに問題が横へそれて正しい人間の方が飛んでもない失言をしたりして結局謝罪しなければならぬやうな馬鹿なことがある。

或人が毎日同じ處へ黄包車に乘つて行つた。其處は廿錢が相場だつた。或時非常に年取つたヨボ〱の車ひきがすゝめるので同情して乘つてやるといつもの三倍も時間が掛つた。先方へ着いて二十錢出すと老車夫は受取らない。三十錢呉れと云ふ。

「馬鹿を云へ貴樣よりもつと綺麗な車に乘つても二十錢だ」

すると老車夫の言ひ草はかうだ。

「俺は他の奴より澤山走つてゐる、他の奴は廿錢でも俺は卅錢貰はなければならん」

老車夫が澤山走つたと云ふのは時間を澤山走つたいふ意味である。彼等には自我だけあつて決して他人はない。

外出する時、門の外へ出ると其の邊に迂路ついてゐる黄包車が一目散に疾驅して來て眞正面に足許へ梶棒を据へる。乘つて遣れば文句はないが、必要がないので乘らないと十中八九は何かブツクサ言つてゐる。「吝い奴だ」とか「人に骨を折らせる」とか云つてゐる。呼びもしないのに勝手に走つて來て人の前へ車を横たへて通行の妨害をしてゐることは考へないで只相手の不人情を怨むだり悪口を放つたりするのだ。實に度し難い量簡である。

茶館の老紳士のやうなことは眞に教養ある人は無論やる筈はない。然し、他の國では教養の有無に係はらず絶對にないことだと思ふ。黄包車の得手勝手はむしろ黄包車らしくて愛嬌があるが、全體的に支那の國民はそれ〲の立場に於て個人主義的

學の支配を受けてゐる。一面に於て善き個人主義がどうかすると右のやうな我利々々の自我主義へ突つ走るのである。非常識の根本は矢張り個人主義にある。

近代支那の革命運動はいろんな要素を含むでゐるが、個人主義の支那を社會主義に導かんとすることも其の一つである。そして政治的には現在社會主義に走りつゝあるが民衆の生活や經濟組織の上では舊態依然たる個人主義にとどまつてゐる。

經濟上の個人主義は極端な自由競爭主義を生み出してゐる。東方飯店の門前にはいつも黄包車七八臺位溜つて客待ちをしてゐる。此處に居る黄包車は朦朧車と異つて黑塗の上等の車で、そして彼等は毎日此處へ出張つて稼いでゐる。其の代り旅館の番頭や茶房に若干の運上を納めてゐる。彼等は毎日同じ場所で働いてゐるのだけれども、彼等の間には何等の統制も協定もない。仕事に對する場合は全然自由競爭主義である。客が一人玄關から出て來るとそれに向つて全部の黄包車が蝟集して猛烈な爭奪戰を開始する。客が麻胡々々してゐるやうなものなら大勢に引つ張られて動くことが出來なくなる。かういふ場合に籤で順番をきめるなど、いふことはない。何處迄も自由競爭を重んじる。ステーションに居る黄包車でも馬車でも自動車でも皆同じ筆法である。同様に賃銀の協定といふこともない。

産業や商業組織の中にも是れと同じく統制がなく自由競爭主義が發達してゐるので、一面に於ては物價昂騰を自然的に防止することになつて社會政策上反つて好い結果を生んでゐる。然し資本主義的立場から云へばそれが最大缺陷となつて支那では個人經營若しくは同族經營、大にしては地方的結合から成る場合は事業が發達し成功するが、一般的株式組織といふものはやつてみても皆失敗に終る。從つて大資本主義は此のまゝの支那では現在も將來も發達する見込は乏しい。

個人主義は支那の國民性の顯著な色彩の一つだが、どういふ風に個人主義が斯く發達したのかといふと、それは政治組織の影響から來てゐる。支那は國家が餘りに、尨大であるために恒に政治が微細に個人まで行き屆かない傾きがある。個人は國家の法律によつて完全に保證されることがない代りに、徹底的に法律の支配を受けるといふこともない。さういふ不安と自由とに包まれてゐる民衆生活の中から個人主義的習慣や道德が發達するのも無理はない。此處に支那の興味と弱點と兩つながらあるのであつて、從來民族的發達の目ざましさに引きかへて國家組織の薄弱なる理由が茲にある。所謂國民革命の目的は此の薄弱なる國家に強大な組織を組み立てやうとする國民の覺醒運動である。やがて政治組織が完備して法律が完全に個人を支配する

時代が來ると支那の國民性も自然の裡に變化してゆくであらう。

× × ×
× × ×

私が南京へ來た時は菊花の盛りだつたが、いつの間にか花は凋み、楊の葉も散つてしまつた。人々は毛皮裏の服を着て歩いてゐる。

朝、城門を通ると、城門の屋根の上に厚い霜がおりてそれが朝日を受けて銀色に輝いてゐる。もう冬である。

東方飯店には日本の新聞の特派員が二三人泊つてゐた。南京にはたつた一軒の賓來館といふ日本旅館がある。私は時々其處迄風呂に入れて貰ひに行つた。此家は例の南京事件の時大掠奪に遇つたが今では元々通り營業してゐる。私は先年其處へ泊つたので主人とも知り合ひであつた。主人はもう六十以上の人だが骨董が好きで多年蒐集した珍品が屋内一杯にあつたがそれも例の事件の時掠奪されてしまつたと云つて惜がつてゐた。此人は元來植木職で東京の團子坂の生れださうだが、三十何年前かに庭師として南京へ來て到頭土着してしまつたのだといふ。

南京事件以來在留日本人の數は急激に減つてしまつたが、それでも現在は全部で七八十人居る。醫師が三人居り、小學校もあつて四名の生徒と一名の先生がゐる。

私は南京で澤山の中國人の新しい友達を得た。軍人、官吏、新聞記者、會社員、教師。それらの中國人は私に對して皆極度に深切であつた。そうして日本に對するそれ／＼の理解を有つてゐる。或ひは理解しやうと努力してゐる人々である。私は南京で煉瓦塀に貼られた赤紙のポスター以外には何等の排日行動も排日感情も認めなかつた。

或る朝、私は南京車站から上海行の急行列車に乘つた。列車は右手に城壁を見つゝ走り出した。間もなく玄武湖の畔へ出た。先年南京へ來た時夜明け間も無く汽車の窓から此の湖と城壁とを望みて感激に撲たれたことを思ひ出した。うす靄の湖、蜒々と跪る城壁——何たる雄大夢幻の光景だらう。

「南京よ、さらば／＼」

心でさう叫んでゐるうちにはや湖畔から遠ざかつて汽車は紫金山の北方の山陰に入つた。

上海

車站の一景物

其の汽車は七時間かゝつて午後四時に上海へ着いた。私は砲

を赤帽に托して人ごみにまじつて改札口の方へ歩いて行つた。其時私の二三間前を行く男女があつた。一人の女は髮を縮らせ流行の外套を着、踵の高い靴をはいて、伴れの男の體へ倒れ掛るやうな恰好をしながら男に腕を取らせて、ジヤラ／＼として歩を運んでゐる。もう一人の女は刺繡をした派手なマントを着てゐる。一見して藝者だとわかる。上海のことだから若い男女が腕をとつて歩くのは珍らしくもないが、さりとて餘り猛烈なので私は可笑しくて堪らず其のあとからついて行つた。改札口を通り拔けて驛の建物の方へ行くと、出迎ひ人や宿屋の客引きなどが澤山待つてゐる。列車から降りて來た人達は皆何氣なくそちらの方へ歩いていつた。すると其の時妙な事件が私達の目前で突發した。出迎ひの群衆の中から一人の女が飛び出して來た。彼女はツカ／＼と大股に歩み寄ると、いきなり、女を抱きかゝえるやうにして歩いてゐた青年紳士を目掛けて飛び付いた。そして男の頭へ武者振り着きながら一聲高く叫んだ。

「此の浮氣者！」

男は危く倒れさうになつたが漸う立ち直つた。同行の女は駭いて逃げ出さうとすると女は今度は男を捨てゝ其の女の方へ摑み掛つて行つた。男は慌てゝ引き留める。甲高い女の罵り聲、男の呶鳴る聲――さういふあられもない活劇が始まつた。其の時私は初めて男の顔を見ると廿七八位の可成り美男子だつた。突然飛び出して來た婦人は彼の細君であるに違ひない。さつぱりした灰色のセルの服を着て、絹の靴下をはき、洋靴をつけてゐる。油氣のない斷髮が額へ落ち掛るのを華奢な指で掻き上げ掻き上げしてゐる。一寸そばかすはあるが色の白い、上流家庭の人らしい上品な、そして理智的な貌である。けれども今の彼女の眼はヒステリーのために吊り上り、唇は忿怒のために慄えてゐる。彼女の良人は馴染の藝者と其の朋輩の女とを伴れて蘇洲あたりへ遠出をして今此の汽車で歸つて來たところである。相手の藝者はハイカラなわりに美人ではなく、上海の藝者によくある型の女だつた。むしろ其朋輩の女の方が美人だつた。

男と女は群集の中で互に呶鳴り散らしたり摑み合つたりした。女は男に向つて家へ歸れと云ふ。男は歸らぬと强情を張る。「浮氣者」「恥知らず」「氣違ひ」「女豚」さういふ惡罵が双方の口から飛び出した。男は細君を置き去りにして向うへ行かうとすると、女は怒りまず追ひ縋つて武者振り付く。男は再び女の華奢な肩へ手を掛けて突き飛したり、あるひは建物の煉瓦の柱へ女を押し付けていまにも咽喉を締めて殺してしまひさうな劍幕を見せたりした。彌次馬が二人の周りを取り圍んで面白さうに見物してゐる。けれどもそれはあたりにゐるクーリーだ

のボーイだの下らぬ人間ばかりで、列車から降りて來た人々はみな一寸横目で見るだけでサッサと通り過ぎてしまふ。

「先生、荷物」

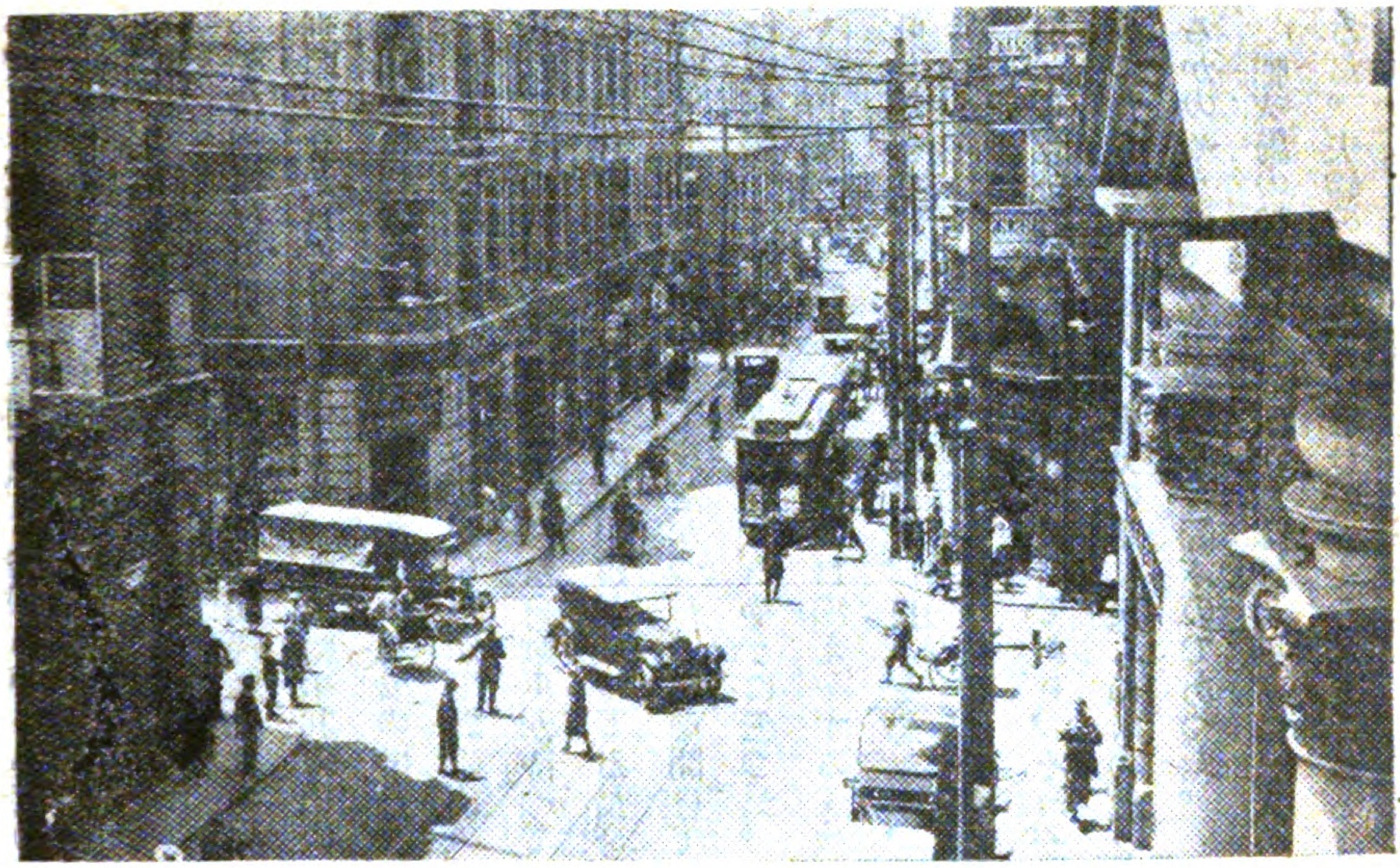
手荷物運びの男は私が物好きに何時迄も其の場を動かぬので到頭溜りかねて私に催促した。私は鞄や其の他の荷物を受取つて兩手に提げたまゝ矢張り此の若い男女の爭ひを眺めてゐた。

男女は揉み合ふやうにしながらやがて驛の前の廣場に出ると其處には細君が乘つて來た立派な自動車が待つてゐて、車の中には細君の義妹らしい年の若い娘が乘つてゐた。其の娘は人前を恥ぢて車の中から出て來なかつたが扉を開けて「兄さん今日は家へ歸つて下さい」と哀願するやうに云つた。抱への運轉手は若主人に向つて細君の爲めに口添えをすると忽ち頭ごなしに叱り飛ばされた。群集を恐れず、良人を恐れず、勇敢に爭ひ得る者はやはり彼の細君だけだつた。彼女は愛する良人を惡魔の手から奪ひ返すことが自分の役目であり、それが今日の機會を失つたら永久に良人は自分の手に戻らぬものだとでも思つてゐるかのやうに、死力を盡して鬪ふのであつた。

彌次馬の輪から十間ばかり離れた場所に二人の藝者は立つてゐた。夫婦の甲走つた爭ひ聲がそこ迄きこゑると二人はこちらを振り向いて見たが、そしてまた二人で顏を見合せるとさも堪り兼ねたやうに口に手を當てゝ笑つた。「わたしはあの男に惚れてゐるわけではない、お金をつかふよい客だからおやゝッてゐるだけだ、それがあの女にはそんなに大切なのかしら」女の顏には冷たい嘲笑が現はれてゐる

私はこの人々に對して氣の毒な氣持がしたからも飛び出して仲裁して遣ることも出來ない。此の土地では他人の事は深惡にかゝはらず「我不關焉」である。車ひきや、宿屋のボーイや行商人みたいな者のほかには私のやうに重たい鞄を提げて腕の拔けるのも我慢して物好きにも他人の夫婦喧嘩を見物してゐる馬鹿者や閑人はゐない。けれども私は何となく此の青年と彼の細君とに心をひかれて此の場を立ち去れないのであつた。それは京劇のやうで悲劇でもある。私は彼等の生活の中に直ちに上海の相を見るのである。遊蕩に溺るゝ青年、燒餠やきの細君、ハイカラ藝者、主人公の妹、運轉手。それから無智な彌次馬大勢——これだけの登場人物は立派に「上海」といふ一篇のドラマを生み出してゐる。

藝者達は待ちくたびれたやうに男を置き去りにして向ふの方へ歩いて行つた。男はそれと見るや彌次馬をおし分け眼の色を變へて女達の行つた方を追ひ始めた。すると細君は細君で蒼ざめた顏に強い決心を現はして斷髮を風になびかせながら良人



大馬街（上海風景）

あとを追ひ縋るのである。私は側にゐた黄包車(ワンポウツ)を呼んで乘つた。彌次馬がバラ／＼駈けて行く。電車が走つてゐる。日暮近い陽が汚い壁の上に落ちてゐる。黄包車は電車線路について老靶子路へ出た。葉の落ちたアカシヤの老樹が立ち並んでゐる。煉瓦造の建物が兩側に續いてゐる。露西亞人が笑ひ興じ乍ら聲高く話し乍ら歩いてゐる。手籠を提げた支那のかみさんが通る。ダンサーらしい日本の女が西洋人と同じ様な恰好をして煉瓦塀の脇を歩いてゐる。自由である、すべてのものが活きてゐる。其のもの、力で動いてゐるやうな氣持がする。

「上海へ來た！」

私は上海へ來たことを強く意識するのであつた。

我觀上海

民國十七年（昭和三年）八月末頃上海に始めての戸口調査を行つた。それ迄上海の人口は一體どの位あるものか見當が附かなかつた。支那の都會の人口は何處でもハツキリしたことは分らない。支那には戸籍といふものが無い。そこへもつて來て人間の集團組織が非常に複雑であるために何處でも正確な調査が出來ない。從來上海の人口については數年前には或ひは八十萬と云ひ或ひは百萬と云つた時代がある。民國十六年版の西山榮久

氏の『最近支那地理』には百五十萬と記載されてゐる。誰に聞いても答へが區々で、南京の城壁の延長と上海の人口は私に取つても久しい間の疑問だつた。處が今回初めての戸口調査の結果驚く勿れ二百六十三萬餘と發表され、人口に於て東京大阪を遙に凌駕し世界第六位の都市であることが證據立てられた。これには上海人自身も喫驚してしまつた。

上海といふ都市は、支那街、佛租界、公共租界の三つから成り立つてゐるが、其の全部を併せても東京の市街地の三分一、大阪に比べても約半分位の面積しかない。其の狹い面積に東京よりも六十萬も多くの人間が住んでゐるのだ。

街を歩いて見ると實に澤山の人が動いてゐる。それは歩いてゐるといふよりも流れてゐるといふ感じである。世界中を廻つて來た人でも上海の三馬路四馬路邊の雜沓を見て一驚を喫しない者はない。無數の金看板のきらめく街を群衆が眞黑く見える程歩いてゐる。茶館や料理屋はいつでも一杯客がはいつてゐる。支那街獨得の匂ひ、複雜な色彩、喧しい聲――。一體何處からこんなに澤山の人が出て來るのだらうと不思議な氣持がする。かういふ非常な群衆の中にあつては個人の色彩は殆ど目につかなくなつてしまふ。私は上海ほど徹底したデモクラシーは他の國には無いだらうと思ふ。それは弱者や貧者が彼等の權利を主



質屋の前（上海景風）

張したところの平等ではなくて、總ての人間が何も主張しないところのデモクラシズムである。一體支那はデモクラシーの國柄である。此の國では、富めるものも貧しい者も、强者も弱者も、人間的價値の上では等差を附けられてゐない。富める者や權力を有する者が弱者や貧者を支配したり虐げたりすることはあつても、彼等からの尊敬を享受したことはない。或る倶樂部へ行くと、其處には大勢の中國人が來てゐる、其中には富豪も居るし名士も居る、さうかといふと全く無名の素寒貧が居る、けれども彼等の間では言語應對に少しも階級はない。まつたくすべての人が何等主張しないところの徹底したデモクラシーだ。支那にも古代には階級があつた。淸朝時代にも可成りの階級はあつた。いまでも、軍閥があり、財閥があり、土豪劣紳があり、それが社會的勢力を有してゐても階級的には何の意味もない存在である。そも〳〵階級なるものは此の世の中に超優越的な一個の大權力が存在してゐる場合その權力に接近するに從つて許されるところの色別けだが、近代支那にはさうした大權力の存在がない。而も他の共和國のやうな統一された政府も久しくなかつた。階級觀念が亡びたのも當然である。從つて現代支那の無產階級運動はマルキシズムの學理を追求する經濟革命としては存在するが國體革命としては大した意味も變化も來さないものだらうと思ふ。そして、單純な經濟革命が國體革命よりも手易いかどうかといふことも疑問である。現在の國民政府がどれほど右傾したところで高が知れてゐる。支那の共產主義者がロシア革命を踏襲しやうと企てるならばそれは甚だしい無謀だと云はなければならない。

よく、上海を見た人は一と口に魔の都だと云ふ。或ひは罪惡の巢窟であると云ふ。さうであるかも知れない。プロレタリアートの意識を有つてゐる者は其處を世界の最後の都會だと云つてゐる。上海の亡びる日が、世界資本主義の滅亡の日で、同時に帝國主義が覆滅する時だと云つてゐる。それもいゝ觀察である。が、私は次のやうにも考へられる。上海は世界人類の最後の場面を稍々暗示してゐるのではあるまいかといふ風に。上海には三十ヶ國近い世界各國の人種が雜居してゐる。租界の行政と警察は外國の主權が統治してゐるが、多數住民の資格は無差別である。一萬人以上居るといふ白系ロシア人の勢力が支那人より强いとは云へない。フランス租界の法律は其の中に住居するフランス人と同等に中國人をも朝鮮人をも印度人をも保護してゐる。其處には自由と平等があるが、厭制や階級意識はない。世界中に此處ほど自由な土地はない。外國や支那本國の政治犯人でも一步此の境へ踏ん込めば其の身は安全である。支那の租

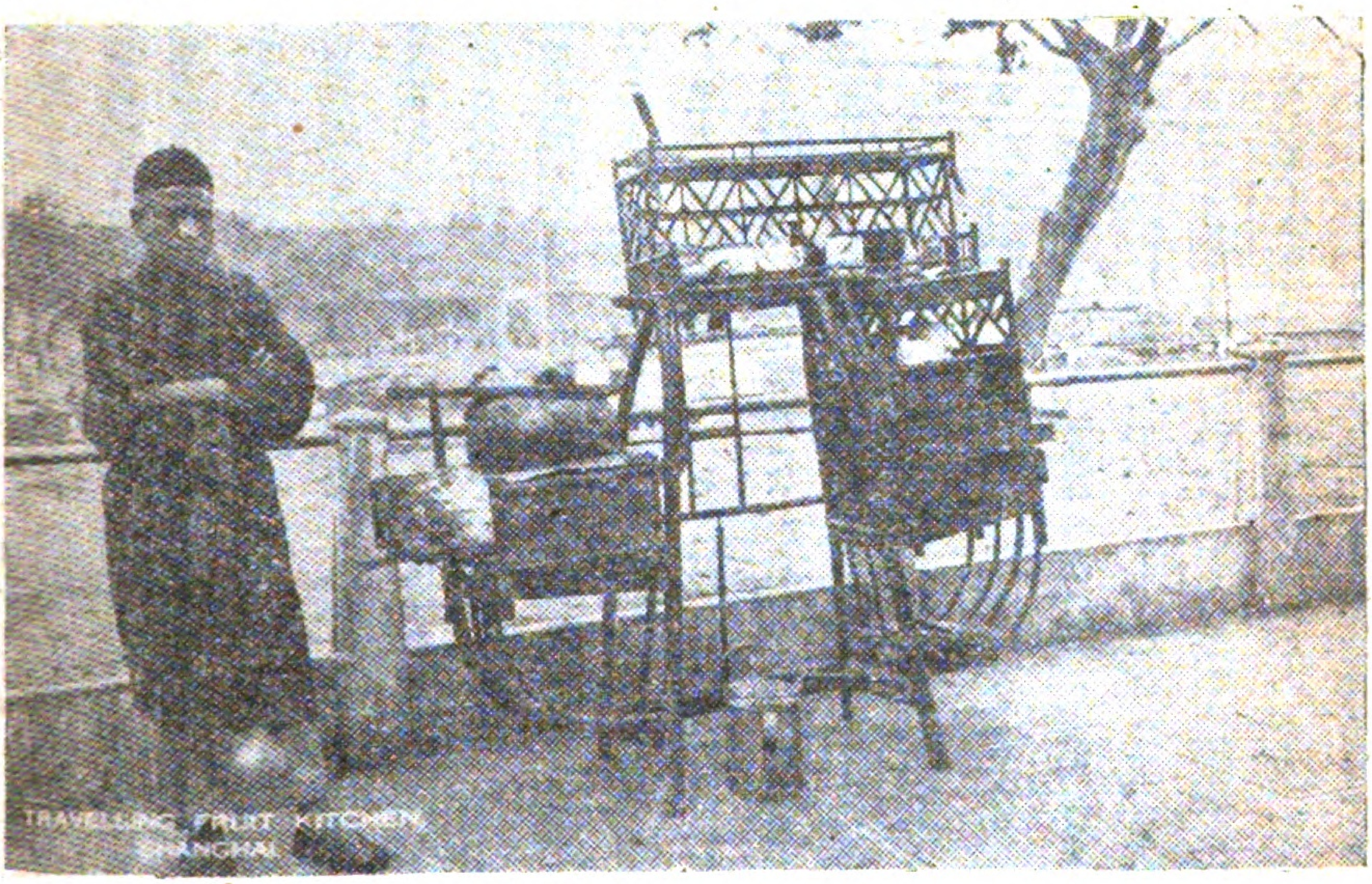
界回收運動は或る時期が來れば實現される可能性があり、それは當然合理的な主張であるとしても、第三者的立場から云へば世界のうちに一ヶ所位はかういふ處があつても差支へないやうにも考へられる。それがたま／＼支那國内にあるから支那では問題になるけれども、假りに其處を世界共有の都市であるとして人類の絶對自由の生活を保證して與れるならば、私は上海を讃美し上海の現狀維持を熱望してやまない。

上海を魔の都と云ひ、罪惡の巣窟だと云ふ人は、眞に上海を知つてゐる人とは云へない。それは他の國のそれ／″＼の法律や習慣や道德に當てはめて上海を觀察する人の言葉である。上海にはそれほど峻嚴な法律も、それほど定まつた生活様式も、それほど窮屈な道德も無い。人間はたゞ思ひ／＼の生活をしてよいことになつてゐる。警察は道路の取締りをするのみで屋内に干渉するものではないことになつてゐる。極言すると、上海では罪惡そのものが罪惡でなくなつてゐる。それは各人の生活であり行爲である。それをする人々の間に何等反省はない。道德的反省は一方に道德觀が嚴存してゐる場合にだけあるもので、上海のやうに基準道德のない土地でさういふことを求めるのは無理である。上海では大規模な賭博場が一般に公開されてゐる。賭博を打つことは少なくとも罪惡ではない。たゞ幸運と不運とを金錢を賭けて試みるだけの機關であるに過ぎない。元來賭博といふものは、勝者が敗者に對して同情や苦痛を感じない限りは、敗者が勝者に對して怨恨を含んだりしない限りは、本質的に罪惡とする理由は成り立たぬものだらうと思ふ。社會の安寧秩序を害することもなく極めて社交的に賭博が行はれるものであるならば一向差し支へないものだ。他人の金錢を強奪し窃盜するものとは意味が異ふ。勝者が勝者の得意を享樂し、敗者が敗者の後悔を味ふだけのことだ。上海での賭博はさういふ觀念の下に行はれてゐる。或人はこれをも資本主義の惡弊であると云ひ、私のやうな解釋をもブルジョワジーの詭辯だと云つたが、賭博は資本主義以前の最も元始的な人類の本能である。銀貨や紙幣を賭けなくても何でも賭ける物はある。上海の賭博場は非常なる大組織の下に、極めて明るく社交的に行はれてゐる。

上海では大規模な強盜團が横行してゐる。彼等は常に大々的計畫と手段とを用ゐて有名な富豪を拉致し人質に取り、其の身分相應の銀行手形を書かせそれを現金と引替へた後に禮を厚くして釋放する。抑留中も至れり盡せりの待遇をするといふことだ。彼等は警察よりも遙かに強い勢力と大きな組織の下で活動してゐるから、警察は常に彼等に對して無關係であるか、或ひは其の機關の一部であつたりする。其のほか上海には無數の罪

悪が行はれてゐる。けれども其のどれも是れも此土地では極く平凡な出來事である。都市の不安を叫ぶ者もなければ、警察の廓清を要求する者もない。

上海にたゞ一つの道德がある。曰く「自分を守れ」といふことである。すべての人は自分の生活を自分の力で保護してゐればよい。それ以上の大きな權力の存在を希望してゐない。それが上海人に共通の觀念である。そして其處に平和があり、平等があり、歡樂があり、罪惡があり、あらゆるものがある。何があつても此の土地では自然である。自由である。デカダニズムの行き止りが上海であると云ふ人もあるが、人類の生活は必ずしも道德的構成に向つてばかり進歩するものではない。資本主義



蘇州河のへり（上海風景）

が亡びても罪惡が無くなるとは云へない。私が、むしろ上海が人類の最後の場面を暗示してゐると云ふのは間違ひであらうか。

グレーハウンド

日本から上海へ着いて友人M君の家に落ちつくと其の晩M君が

「早速あなたに紹介するものがある」と云ふ。

「何んですか」

「犬ですよ、グレイハウンドといふ犬の競走ですがね、近來上海ではこれが大流行でね、どうかすると競馬よりも面白い勝負があることがある。二ヶ所あつて兩方で毎週二度宛あるんだが丁度今晩はある日だから行つて御覽なさい。」

何だ犬かといつた氣がして私は餘り氣が進まなかつたが友人が勸める

ことだからともかく伴れてつて貰ふことにした。友人は競馬が非常に好きで上海の日本人間でも寧ろ競馬狂として知られてゐる。其の人の云ふことだから間違ひもあるまいといふ氣もする。

「夜ですか」

「九時から始つて十二時頃終るから丁度今から出掛けるとい、時間です」

處がM君は其の晩宴會があるのでそれへ顏を出さなければならんから九時頃から犬へ行くといふ話で、私はM君の細君と二人で先きに行くことになつた。晝から曇りの怪しい空模樣である。私達は自動車で出掛けた。鐵條網が絡み付いてゐたりする支那街を通り拔けて華德路といふ通りを眞直ぐにつッ走るとやがて郊外へ出た。家はマバラにしかないが道路は廣くて坦々たるものだ。一里位行くと野原の眞ん中に大きな建物が見え出し其の邊は一面に空まで明るく見えてゐる。

「彼處がさうですよ」と細君は云つた。

やがて其處で車を降りると細君はヅン／＼先に立つて入場券を買ふ。入場料は一元(ドル)である。あたりはイルミネーションやアーク燈の光で晝のやうに明るい。大きく『明園』と書いてあつて別に英文でルナパアクと書き出してある。もうなか／＼人が入つてゐる。

細君は先づ犬を見る場所へ私を伴れて行つた。可成り廣い長方形の柵の中の地面では五六頭の犬が規則的な足どりで運動をしてゐる。頸に紐を附けて人間がそれを引張つて歩いてゐる。其の向う側は犬小屋で、一つ／＼の仕切りをして入口の扉を閉めた犬の長屋みたいな建物が長く續いてゐて、其の中に封じ込められてゐる犬達はワン／＼と喧ましく吠え立て、ゐる。グレイハウンドといふ獵犬なんださうだが、胴も顏も足も尾もすべてが細長く生れついてゐる。背中へ鞍のやうな形の布を着てゐるがそれへ番號が書いてある。チャン／＼コを着てゐるやうで愛嬌がある。

入口で買つた今日の勝負の豫測の謄寫版の冊子を開いて見るとそれ／＼犬の名前が出てゐる。Cairo([illegible]) Dancing Dervish([illegible]) Gipsy King([illegible]) といつたやうな名前でなか／＼面白い。が、犬知識のない私はいつ迄眺めてゐたつてどれがい、んだか判らない。札賣場へ行くと此の土地の競馬と同じ樣にウインとプレースの二種あつて、ウインは一等だけを狙ふもの、プレースは六頭立ての中で二着までを見るものであること競馬の規則と少しも變りがない。馬券と云ひ度いが此處では犬券が矢張り競馬と同じく一枚五圓、但し枚數に制限

などはない。私は豫想を見ると『カイロ』が一着に出てゐるのでそれをウインとプレースと兩方一枚宛買つて見た。友人の細君は少し通なので犬の恰好を見て氣にいつた奴を買つたらしい。

そろ〳〵レースが始まる頃になつたのでグラウンドの方へ出て見る。グラウンドは一周五百碼(ヤード)だ。一方に優に數千人を收容されるスタンドが出來てゐる。素晴らしく大きなアーク燈が幾つも宙天から下界を照してゐる、何處にも暗い場所はない、此處へ來ると全く夜だといふ觀念を忘れてしまふ。入場者は數から云へば支那人が多いが西洋人も澤山來てゐる。そして三分の一以上は女である。

愈々第一回のレースが始つた。さて此のグレイハウンドの競爭だがこれは近年英國の何處かで發明されたもんださうだ。先づ六匹の犬を出發點の場所で六つに區切つた檻の中へ入れる。檻は前方だけ鐵格子か何かで遠くが見えるやうになつてゐる。其の一丁ばかり前方に白い小屋があつて其の側に一匹の兎がしやがんでゐる。犬共は其の兎を見て檻の中でワン〳〵吠え立ててゐる。合圖の銃聲と同時に六つの檻の戸が開かれる。すると同時に前方の兎が走り出す。犬が一目散に其の後を追つかける。處が、此の兎は實は作り物で、電氣仕掛でレールの上を走るのだ。さうと知つてか知らでか犬達は兎を捕へやうとして死力を傾けて走る。犬の走力が加はれば加はるほど兎の走力も倍加する。兎はレールの上をすさまじい音響を立て〻走つてゐる。かうして一週した處で勝負が決するのだが其の時分には兎はたうに自分の小屋の中へ姿を隱してしまつてゐる。甚だ簡單であつけないものだ。何だこれだけのことかと思つてゐると友人の細君が來て

「村松さんウマクやりましたわね」と云ふ。

カイロが一着に入つたのだつた。ウインの方が廿一ドル、プレースが十ドル五十仙の配當がある。結局廿一ドル五十仙の利益だ。勝負はつまらないが勝つて金を取つて見ると急に面白くなつた。「成る程これあ悪くない」由來人間は犬より圖々しい。

細君と又二回目の犬を見に行く。

「どうです、三番は强さうな犬ぢやないですか」と私が云ふと

「否え、あゝいふ犬は駄目なんですの、それより五番か一番がい〻でせう。なんでもお尻を下げて、しつぽを股の下に挾んでゐるやうなのが速いんですよ」と細君は說明する。

今度は豫想を見ずに細君の意見を尊重して五番をウイン・プレース二枚宛いくと運惡く三着に落ちて前の儲けを吐き出してしまつた。それから後は勝つたり負けたりする。段々見てゐる

と最初はなんだつまらないと思つたのが次第に面白味が分つて來る。何しろ速力は速いもので五百碼の標準タイムが卅一秒から二秒位の間だ。馬よりも遙かに速いが其の代り競馬のやうに勇壯なものぢやない。障害物競走もある。競馬は頭數が澤山出るが是れは六頭と限つてゐる。滑稽なのは騎手無しの勝手に走るのだからどうかすると中途で先頭に竝んでゐる犬同志が喧嘩を始めて噛み合つてゐる間に後の犬が拔いてしまつたりすることがある。そんなことで大穴が出たりする。

M君は到頭顏を見せない。細君はお小遣を三十ドルほど負けると急に財布の口を閉めてしまつた。九回目のレースが濟んだのは十二時近くだつた。私は結局勝ち負け無しである。中途頃から雨がパラ／＼降つてゐた。私達は出口で自動車の切符を買つて歸途についた。——此稿終り——

附記。拙稿『新支那訪問記』が本誌に連載さるること四月、雜駁皮相の見聞記を以て永々讀者を煩はしめたる罪を謝して一先づ爰に擱筆する。顧みると本稿は南京事情のみに費すところの紙數二百枚に垂んとして僅に其の一角を記述したるに過ぎない。何ぞ予の文章の冗漫にして無益の辯多き。されど他日機會を得て第二第三の訪問を行ひ所謂『支那とは何？』なる世界的疑問の對象物を徐々に研究したき希望である。切に大方の後援を俟つ。（梢風拜記）

新著月評

最も權威ある批判であり推薦である

山本有三著　波

勝本清一郎

私は「波」については昨年の末、昨年度の小說の總評を書いた中で、ちよつと觸れたことがあるが、今度單行本になつて出たについて再び、もう少しくはしく批評して見たい。

私は前にも評した通り、これを夏目漱石系の智識階級小說だと思ふ。取扱はれてゐる生活事象が智識階級のそれであるばかりでなく、物の見方、感じ方、考へ方、作中に瀰漫するあらゆるイデオロギイが、現在の智識階級の觀點からくるものだからである。しかし夏目漱石の作品とよく比較しては、この作の方が、主人公達の姿や氣持が、ずつといぢけたものになつてゐる。昔のやうに正義人道を胸に抱いてゐる人達ではあるものゝ、最早おほらかな樂天觀で笑ひ立てることも出來ず、憂鬱に默々と生活しつつある。これは時代が智識階級にとつてそれだけ不利に動き、今や智識階級は就職難と失職の不安による暗い運命の中にあるからである。則ち明治三、四十年時代と今日とでは智識階級の置かれた社會的地位が異る——かう云ふ時代的な違ひを、この作は多少とも反映してゐるのである。

しかしそれだけの違ひの反映は、作者山本有三氏にとつて少しも名譽にならぬ。智識階級が下降線をたどりつつある時に、それの反映として、藝術品も一緒に無氣力になると云ふだけでは單に藝術品として前代の作品よりも一層影が薄く、衰弱したといふ結果になつただけの話なのである。この傾向が進めば、この藝術流派は病死するより外はない。

そこで我々は、同じ智識階級を取り扱ふにしても、見方を變へなければならぬ。觀點を變へなければならぬ。現實の智識階級は成程沒落しつつあるが、しかしそれはブルジョアジイに隨從するものとしての觀點から見た場合であつて、他の見方よりすれば、そこに來るべき時代に隨從しようとする新生活力の部分をも認めることが出來る。さういふ側面を把握することによつてのみ、我々は今日の智識階級小說をして、前代の智識階級小說とは質の異る、別の力ある作品とすることが可能なのだ。

それを山本有三氏はしてゐない。時代が異り、智識階級の置かれた社會的地位が異るにも拘らず、一時代前の取扱ひ方をその儘に踏襲してゐる——そこで單に生活事象の衰弱をしか見ることが出來ず、作品其自體を榮養不良に陷し入れてしまつたのである。たゞ漱石のやうに饒舌がなく、作柄が身綺麗に整頓されてはゐるが、しかしこれとても「貧しき完成」に過ぎない。無駄があつても中核の生活力の旺盛なものの方が藝術品として一段上である。

かくして「波」は、作中のあらゆる部分が現在の智識階級のイデオロギイによつて瀰漫してゐるにも拘らず、逆に云つて、現在の智識階級のあらゆるイデオロギイ、側面が十分に這入つてゐるとは云へないのである。むしろ一番大切な側面を取り落して、あまり榮えない衰弱的な側面だけの上にのみ視野を狹めて立つてゐるのだ。從つてこの作は、現代に於ける純粹な智識階級小說ではありながら、現代のそれとして眞に、正しく焦點を結んだ積極的な力のある、進歩的作品とは云へない。

この意味は、主人公見並行介の生活意識に

一番消極的に現れてゐる。この主人公は、何處まで行つても、この世界を變革しようとする意志の一端にさへ觸れない。世界に對する考へ方を、自分の主觀を、變革することによつて滿足しようとする人間なのだ。最初に彼は小學教員として教へたことのある女に誤まつて手をつける。すると彼には、事實に次ぐ事實の問題よりも、その最初の事實を主觀的に正當化する——則ち主觀的に變革することの方が問題になるのだ。そこで結婚したりして又次の誤りを犯したことになつてしまふ。又それから後の、たとへば子供に關する問題などでも、子供を、又は子供に對して、どうしようと云ふ問題なのではない。子供をどう思はう、どう愛しよう、どう考へよう、と云ふ惱みなのだ。從つて彼の眼前にあるのは、いつも觀念的問題ばかりである。彼が望む解決は、事實的な解決へ向つて追求する方向からは來ず、氣持の轉換によつて得られるのだ。しかもこれに生殖細胞論やショウペンハウエルの哲學やらを役立てる。しかしこの態度から行けば、現在の智識階級の全沒落的狀態すら、さう云つた風に何かの哲學か宗教で、主觀上の變革によつて片がつきさうである。現政府の政策と大變よく似てゐる。現政府は智識階級に對してその生活の物質的基礎を變へてやることなしに、少しばかりの「思想善導策」によつて主觀的に生活狀態を改善させようとしてゐるのである。しかし物質的基礎の問題について急迫されてゐる現代の智識階級は、良き思想になつたところで實際的事實の方がどうなるものでもないことを餘りに感じさせられ過ぎてゐる。そこで、例へばこの「波」を讀んだ所で、この內容の生活事象の問題について、主人公の精神內に於ける解決を解決として同感することが出來るかどうかは甚だ疑問である。多くの讀者は恐らく、最後の頁で主人公がこれまでの人生のあらゆる問題が解決したやうな氣持になつて、晴れた海を前にしてのう〳〵としてゐる場面に來ても、一緒にその解決に共感することが出來ないであらう。平林初之輔氏はこの小說を無解決性の小說だと評してゐたが、しかし作者としてはすべての部分に渡つて最善の解決を常に與へてゐるのである。たゞその解決が、いつも結局主觀的努力によつて主觀的に到達するといふだけのものなので、讀者に解決らしい解決としてそれを共感させ得ないだけの話なのだ。現代の讀者は、その生活意識に於いて、常に事實を欲してゐる。事實に對する解釋をでは

もだん・でかめろん(谷譲次著) 東京日日といふ現代の盛り場を背景とした都會の不可思議な挿話集であり、第一夜話より第十夜話に展開さるゝ物語の中に讀者は都會の妖美と惡夢と心戰の轟きを感じ奇しき挿話の蠱惑的な興味に引入れられる。本書所載の物語の大部分は嘗て本誌に連載されて好評を博したものであり、今讀みかへして見てまた別趣の興味を覺える。(四六判三七二頁、定價一・二〇、改造社)

テキサス無宿他三十一篇(谷譲次著) 作者獨得のアメリカを舞臺とせる物語三十二篇を收む。其處に登場するめりけん・じやつぷの生活の種々な姿態を通して、酒と戀と事件の都會的興味の展開を、而も詩と人生を離れずに、作者は最も近代的な筆觸を以て描いてゐる。同じ作者の「もだん・でかめろん」と併讀して其特色を味ふべきものである。(四六判五〇〇頁、定價一・五〇、改造社)

人生詩集(野口米次郎著) 眞實の詩は自然や人生を表徵眼からのみ見るべきものでなく、また半面的な人生眼からのみ見るべきでもない、之等を打つて一丸とした所に眞の詩は生れる。かゝる立脚地に在る氏の表象詩以後の詩百數十篇を收錄したのがこの人生詩集である。裝幀も第一書房獨特の瀟洒たるものであることはいふまでもない。(四六判五〇〇頁、定價二・五〇、東京麴町區一番町第一書房)

美男狩(野村胡堂著) 報知新聞紙に今なほ連載中の上品にしてユニークな大衆文藝の前

ないのだ。かゝる現代にあつて、「波」の如き作品は多くの進歩的讀者にとつて、ぴつたりとは來ないものであらう。遺憾ながら古き微温しか感じられないであらう。

私は作者に向つて、今後は、智識階級の生活事象を取扱はれるにしても、そのテーマを觀念的問題の追求でなく、事實的解決の追求たらしめることに依つて、衰弱化の方向を打開されんことを望む。以上、否定的批評のみで終つたが、しかし私としても、この作のかなりな表現力と、眞面目な努力については、充分に敬意を持つてゐる積りである。(四、九)

(四六版四四六頁、定價一・八〇、朝日新聞社)

日夏耿之介著

明治大正詩史

吉野作造

「詩」と云ふものに對して私は全く門外漢だ「史」には多少の縁故がないでない。「詩史」となると分らぬながらも一應は目を通して置かうと云ふ氣になる。日夏氏の「明治大正詩史」は上卷だけで五百頁に垂んとする大著だ、此種の著作の外にない今日、單に分量だけから云つても明治研究家の書架に是非無くてならぬものであらう。

私は全くの素人として、正直のところ敎はらうと云ふ謙遜な氣持で、この書を繙いた。讀んで行つて直ぐ感じたことは、文章が妙に分りにくいと云ふことであつた。どうしても解し難いと云ふのではない、表現に一種の癖があつて、手つ取り早く讀み上げてしまひたいと云ふ横着な讀者をば一寸近寄らしめぬと云ふ風がある。專門家はさうでもなからう、私の如き門外漢には、假令多少の必要を感じて讀み出しても、滿足に讀み終るには相當の忍耐が要るかと思はれる。尤も之は物事を出來るだけ平明暢達に書くと云ふ私の趣味から特に斯く感ずるのかも分らない。

併し著者の批判の痛快なのには大に牽きつけられた。打ち明けた所私に詩を鑑賞するの能はない。良いと云はるれば良いやうであり惡いと云はるれば惡いやうでもある。従て正直のところ、日夏氏の批評が正しいのかどうかをも判斷することが出來ぬのだ。けれども本書に見るが如く、與へられた資料をあゝまで縦横無盡に鋭く解剖し、一ト通り在來の評判にも耳傾けつゝ更に著者自身の立場から思ふ存分の忌憚なき論評を痛烈に聞かされては

編である。いふ所の大衆文藝に飽きた人には、きつと悦ばれるだらう。(四六判二一一頁、定價一・五〇、東京麹町區下六番町一〇平凡社)

光雲懷古談(高村光雲著)　遠くは震災前本誌に約半歳に亙つて連載され、近くは東日紙上に發表されて共に好評を博したもの。現代日本が持つ國寶的老彫刻家の口から漏らされる昔ばなしの數々、名匠傳、自作の苦心談などは恐らく何人も異常な興味を持たずにはゐられないものである。諸賢に一讀をお奬めする所以である。裝幀も頗る雅味あるもの。(四六判七二二頁、定價三・五〇、東京日本橋區通二丁目萬里閣)

戲曲小栗上野の死(十菱愛彦著)　小栗上野介はいふ迄もないことであるが徳川幕府方を代表する英傑として西郷、大久保と併稱さるべき一大人物である、彼の名が今日まで餘り擧げられなかつたのは幕府方即ち賊軍であつた爲めである、これを遺憾に思ひ先きに法學博士蜷川新氏は「維新前後の政爭と小栗上野の死」を發表された、それにヒントを得て十菱氏が戲曲化を思ひたつた。本書がそれである。附錄として史資、年譜等が附してあるのも讀者には都合がいい。(四六判二三四頁、定價一・六〇、東京麹町區内幸町一丁目六第一出版社)

小説神々の戲れ(佐藤春夫著)　報知新聞紙上に連載されて好評を博した長篇小説。かうして一卷に纏められたものを手にして讀んでみるとまた別種の趣きがある。縦横自在でしかも柔軟性に富んだ著者の筆は片多徳郎氏の

詩そのものの味は分らないにしても、文化史上の一論題としての意義はわかり、從つて全篇を通讀することに依て、誤つた「詩史」の概念は十分に得られると思ふ。當るにしても當らぬにしても、日夏氏の批判は少くとも一家言として獨立の地歩を占むるものだらうと思はしむる程、力強く而も綿細に說き明らめて居る。同氏の立場に贊成すると否とを問はず今後明治の詩史を論ずるものは一應は必ず日夏氏の提說に參酌せねばならぬことになるだらう。

何としても從來あまり開拓されて居ない分野に鍬を下ろしてあれ丈のものに纏め上げた勞苦と手腕とには敬服の外はない。集められた材料とそれの配列等に付ては、私の知る限り頗る當を得て居ると思ふ。欄外鼇頭の註解は斯種の書に珍らしい思ひ付だ。全體として頗る面白くまた有益な傍註だが、中にはなくもがなと思はるるも一つ二つはある。之れ丈けは他日の機會に少し整理して貰ひたい氣がする。

本書の記述中、私が多少の自信を以て論じ得ると思ふのは詩史の背景として一般文化の情勢を取扱つた部分である。この部分に付ても大體首肯出來るが、たゞ明治初期の記述中には餘りに在來の俗說に賴り過ぎて居るやの遺憾がないでない。明治初期の文化に就ては最近根本資料の發見蒐集に依て、ドシ〳〵在來の通說が改訂を加へられて居る。中には今日識者の間には相當分り切つた事となつて居るのも尠くはない。之等の方面に於て著者がモ少し探査の勞を吝まれなかつたらと思はるる節が可なりにある。

とは云へ、最初の試みとしては最も缺點の少い而して相當に成功した名著と云へよう。速に下卷を完成して明治研究家の渇望に應ぜられんことを驚望する。(上卷、菊版四九〇頁定價三圓五十錢、新潮社)

室伏高信著
アメリカ

大宅壯一

室伏氏は思想的千足動物である。氏は如何なる思想的根據の上に立つて、現代の思想界を、少くともそのヂヤーナリスチツクな側面を、跳び廻つてゐるのか、全く見當がつかぬ

挿畫と共に恐らく讀者を悲しませずにはおかないだらう。刪本から高價版への悲運をへけたものとも見られないことはない贅沢版の素晴らしいものである。(四六倍判三〇六頁、定價三・五〇、東京牛込區矢來町新潮社)

戯曲神を成就するもの(宮崎虎之助著) 著者が三十二歲の時から今日に到る二十八年間を豫言者として新宗教の宣傳に努めたのは人の知るところ。本書は世界のあらゆる宗教と信仰の歸一する所を明かにするため戯曲の形式をかりて釋迦、キリスト、モーセ、マホメツト、孔子、ソクラテースなどの聖哲を一堂に會せしめ眞理の幽玄を語らしめたるもの(四六判五三二頁、定價貳・〇〇、東京麴町區下六番町一〇平凡社)

雪と野菜(前川夕暮著) 歌といふ形式で表現し得ぬある補足を著者は、散文といふ形で表現してゐる。そしてそれらの作品の悉くが生活を本源とする歡喜に出發した散文詩であり童話であり旅行記であり感想である。(四六判二五八頁、定價一・八〇、東京市外西大久保一二八白日社)

原始から出た(林一郎著) 原始自然野蠻を謳ふ詩と小品。(四六判一〇七頁、定價一・〇〇、ロゴス書院)

ソヴエート・ユニオンの消費組合(ホボフ著・岡村眞三譯)(四六判一一五頁、定價・五〇、上野書店)

若き日のギヨーテ(阿部利吉著) 本書は著者が十六歲より廿七歲の現在に至る間に物

縦に見て、氏はデモクラシーその他幾變遷を經てゐるかわからないのみならず、横に見て、現在の氏の頭腦を彩つてゐる原色を見究めることは、更に困難である。

氏のかうした「特色」をば、最も鮮明に最も端的に示したものが氏の近著「アメリカ」である。その點からいつて、確かにこれは近來の「快著」である。

氏の著書は、あへてこの「アメリカ」だけに限らず、一つの纏つた書物といふよりは、種々雜多な觀點からみた種々雜多な内容を無統一に、雜然混然と並列したところの一册の雜誌である。

體裁の點からいつても、その目次を一見すればわかるやうに、手許にある材料を手當り次第に竝べて行つたやうなもので、何等の組織も系統的秩序もない。從つて、同一内容の反覆が到るところに見出される。嘗つて近藤經一氏の戯曲に「おゝ」といふ感歎詞がいくつ出てゐるかを算出した閑人が文壇にあつたが、同じ感歎詞ばかりでなく、同じ章句、同じ内容の繰返しの多い點に於て、この書物は近藤氏の作品に勝るとも劣らないであらう。

又内容的にいつても、「東京朝日新聞」の「讀書ページ」で清澤洌氏が指摘してゐたやうに、「前半の經濟のアメリカの批判は、フォード、カーヴァーのやうなオルソドックスな觀點であるに對し、後半のアメリカ主義を批判する筆は、シンクレアーやニヤリングの立場から出發してゐる。」その他、項目を異にするに從つて著者の觀點が變つて行くところを見れば、著者が材料を統制してゐるのではなくて材料が著者を支配してゐることは明らかである。

第一、アメリカ文明やアメリカ主義に對する著者の根本的態度がはつきりしてゐない。或るところではそれを無條件に讃嘆し、或るところでは例の「文明の沒落」的な立場から、アメリカの黄金萬能主義、機械文明、物質文化、都會偏重を呪咀し、又或るところでは、マルクス主義的な立場からそれを解剖し批判してゐるが、これらの基準が入亂れてゐて、どれが本當だかわからない。

實は著者は、アメリカを紹介したり、解剖したり、批判したりしてゐるのではなくて、たゞアメリカを歌つてゐるのである。しかもその調子は、隅から隅まで最強度のアクセントをもつてなされてゐる。同じ強さですべてにアクセントが行き亙つてゐるのは、全然アクセントのないのに等しい。從つて氏の文章は

せる戯曲の抒情集、純情可憐な作風は快よく全篇に溢れて居る。(四六判一五〇頁、定價・八五、東京府杉並町高圓寺四一五森林詩社)

マルクス主義講座・第十三卷(政治批判社編輯)　收むる所、民主主義批判(大山郁夫)議會主義論(石井保夫)、日本資本主義發達史(野呂榮太郎)、帝國主義日本の財政(松井剛)、日本無產階級運動發達史(橋浦毅八)、以上の續物の完結せる外に、國際勞働組合運動の現勢並に人口論の二篇がある、終りに發禁の彈壓の下に兎も角も本講座の最終卷を出すに至つた勞を謝する。(四六判四四四頁、上野書店)

日蓮聖人の實現の宗教(山川智應著)　本書は「本門戒壇論」と題した講演の速記をもととして修補したものである。日標教義としての本門戒壇」をサブ・タイトルとする。法華教及び日蓮聖人遺文の原據、宗學史に於ける本門戒壇事理の進退、本門戒壇法門の死活の三編を收む、宗教と國家との本質と其交涉の參考論文を附す(四六判三一二頁、定價二・五〇、東京市下谷區櫻木町一、天業民報社)

國家整調主義(清水芳太郎著)　機械は加速度に人力を奪はんとし而かも一方「働かざる者は食ふべからず」なる原則を有つ現在社會を如何にすべきかを前提として、不安なしに進歩を得、沈滯なしに安定を得なければならぬと斷じて國家整調主義の必要を說けるもの。其の主張論說に聞くべきものがある。(新四六判一二六頁、定價・五〇、平凡社)

極めてきらびやかであるにも拘らず、極めて單調である。

このことは同時に內容的にもあてはまる。氏の敍述は到るところ最大級の連續である。嚴密なる比較や批判をどこにも見出すことが出來ない。騷々しい廣告文を聯想させるやうな、不當な强調と誇張が橫行してゐるのが、著しく眼につく。

氏の文章も態度も、杉森孝次郎氏その他多くの人々が言つてゐるやうに、學者的ではなくて「詩人」的である。若し「詩人」といふものが、事物に對する正確なる客觀的認識を回避し、若しくはそれに耐へないで、感情的な獨斷論で滿足するものを意味するならば、室伏氏の如きは、典型的な、百パーセントの「詩人」である。

これを要するに、氏がアメリカ文明を呪咀するとしないに拘らず、氏自身の存在こそ、善い意味に於ても惡い意味に於ても、最も「アメリカ的」である。しかもその「アメリカ性」が、この著書において最も具體的に現れてゐる點からいつて、この著書は二重の意義をもつてゐるといへるであらう。

以上述べたところは、本書の缺陷めいたところばかりを拾ひ上げたやうに見えるが、決して、長所がないわけではない。

第一、この著者は、他の人が書けば晦澁になる內容を、輕く樂々と讀ませる腕をもつてゐる。

第二に、どこから讀み出しても、どれだけ飛ばして讀んでも、相當興味がある。この點からいつて、汽車や電車の中での退屈しのぎには持つて來いである。

第三に、一人の人が書いた一冊の書物を讀んで、數人若くは十數人の著者に接することが出來るといふ便宜がある。もつとも、それには本書の著者が使つた材料の性質を見分けて、それに對する批判は讀者が下す必要があることはいふまでもない。

最後に「アメリカ研究」が世界的流行になりつゝある今日、鳴物入りで世人の注意をアメリカに向けしめるといふ點に、本書の存在理由がある。

とにかく、この書物はそれ自體がアメリカニズムの直接反映として、「大衆的」ヂヤーナリズムを伴奏とする思想的ヂヤズ・ダンスとしてみるとき、確かに一讀、といふよりはむしろ一見若しくは一閱する價値があるであらう。（四六版、四七三頁、定價一圓六十錢、先進社）

帝制ロシア沒落の眞因（大竹博吉監輯・ロシア問題研究所譯）ロシア大革命史に於ける反對陣營側と治者當事者の人々の筆になる客觀的科學的價値ある文獻を收むる所、クルロフ將軍（前內務次官）の帝制ロシア沒落の眞因、ロヂヤンコ（前國會議長）の「ロシア革命と國會及軍隊」の二編、附錄として「ニコライ二世と宰相ストルイピンの往復書翰集」あり、共に帝制ロシアの最後の段階に於ける歷史的價値ある幾多の事實が示され、齊しく祖國主義者の陣營內にあつて二の潮流が對立抗爭して帝制沒落の大なる要因をなせる事を看取せられる。ロシア大革命の裏面史叢選輯の一。（四六判三八四頁、非賣品、東京市麴町區內幸町一丁目五、ロシア問題研究所）

社會思想批判（川邊喜三郎著）守舊思想並に左傾思想を各種類系統に述り、社會的、政治的、經濟的各方面より綜合批判せるもの、章を分つ二十、敍說多岐に亙り論旨懇切平明。知識の該博なる著者の理論と實證とに依る適切なる解剖批判は蓋し一本を手にする價値を充分に與へる。（四六判五一二頁、定價二・五〇、東京市神田區北神保町二、新生堂）

日本財界轉換論（上村逸山著）深刻なる財界不況と國際的に取殘されてゐる現在日本に於て眞の財界整理は彌縫策であつてはならぬ、金解禁を機として財界に現はるべき變動に如何にして善處すべきか本書は沈滯行詰りの極にある我財界の轉換方策を研究せるもの。（新四六判二〇〇頁、定價一・三〇、東京市麴町區平河町四丁目十四、經濟書院）

東方への港

有島生馬

一、マルセーユ

最初洋行の時には日露戰爭中だつたので、獨逸船ローン號に乘り、ナポリで上陸して終つたが、今度はマルセーユまで郵船香取丸の御世話になつた。同船の荒木船長が私と同年同月同日の生れであることを偶然聞き出して來た時、あき子は甲板の上を走りながら手をたゝいて面白がつてゐた。そんなことを妙に子供は興がるものだ。生れた許りでおぎあ〳〵泣いてゐる自分の姿を想像してみるやうなことは嘗つてなかつたが、もう髮の白くなつてゐる船長が襁褓の中に包まれてゐる赤ん坊の樣を思つてみる序に、自分のそれにまで考え及ぼすことをよぎなくさせられた。

香取丸は神戸を去年の二月十六日に出帆したが、マルセーユに着いたのは、三月二十五日早朝のことであつた。十八年目でマルセーユ港頭に屹立してゐるノートルダム・ドラ・ギヤルドの寺塔とその上の金色の聖母像とを淺い朝霧のなかに見た。ちつとも昔と變つてゐない。

海上から望むとマルセーユ一帶の磽确な荒々しい地形は、徒らに文華咲き亂れる國土を空想して來る東洋の旅客には失

望を與へるやうなものだ。港の家並も古びて灰色に些かに見へる。

大洋を馳つてゐる間は水を泳ぐ燕のやうに素早く見へる汽船、それが岸壁に横つけにされた時位、不思議に見違へるものはない。港も船も共にその位置、方角を變へ、性質を失ひ、見榮も恥もないやうな姿になる。岸壁は甲板の一部、船は陸上の街のやうに變つて、人の流がその間を往來し、Vous, Vous といふ佛音が船のなか一杯に擴まつた。

二、稅　關

各國に稅關のあることはいつの世まで續くか知らないが、旅行者にとつてうるさいといへばうるさいものだ。汽車旅行は別として、汽船が入港する一週間も十日も前から、船客殘らず稅關のことで頭を惱し、寄ると障るとそのこと許り話してゐる、傍觀的にみると面白くも、おかしくもある。一人位はそんなことに超然たる人があつてもよさ相だと思つたりする。

廣い倉庫の中の穢い長い臺の上に、手荷物がずらりと並べられて檢査が初まつた。自分で自分の荷物を持つて通るのであるが、多少とも檢事の前に出た被告のやうな氣分になつてゐる。

私の荷物の順番が來た。子供達まで後に立つて不安氣な顏をしてゐるのがいぢらしい。

「蓮の根だつて、そんなものをまだ見たことがない。どれ一つ開けてみせて見れ。」

稅關吏は蓮の根だなんて何を云ふかと云はん許りに箱の角を叩きながら云つた。泥だらけの蓮根は彼の興味を惹かなかつた。

「次は。」

「帽子の函です。」

二十幾個といふ荷物で、一々その内容を覺えてゐられなかつたから、函の形から推察していい加減にさういつた。

「帽子がこんなに重い筈がない。」

函をあけると、煎茶器が一揃ひ出た。彼はそらみろと云つてその茶瓶を手にとり眺めてゐたが、

「奇麗なもんだな。」と云つて函の中に突込み、白墨で函の蓋に無稅通關の印をつけた。

「その箱の中の罎は何んだ。」

「酒です。」

「何んの酒だ。」

「米の酒です。」

「駄目だ。」

「勿論稅を拂ふ積りで持つて來ました。」

「稅を拂つても駄目だ。」

「いくら高い稅でもいゝんです。」

東京を立つた時、D夫人のお土産に何がいゝだらうと訊いたら、或る人がそれは日本酒に限る。D夫人の日本酒好きときたら大變なものだと云つた。それで少し正宗を持つて來て、船室の寢臺の下にほうり出して置いたら、印度洋で味が變つて終つた。で下船する時事務長の好意で一升罎を一本貰つて來たのがそれだ。一本位いくら高い稅でも知れたものだと思つてゐたが、稅を幾ら拂つても酒精類は絕對に之を通さないといふので、稅さへ拂へば何んでも通るもののやうに思つてゐた自分は意外と迷惑とで途方にくれて終つた。

「折角日本から持つて來てこゝで捨てろといふんですか、一體この罎をどうすればいゝんです。」

「それは日本の酸（ヴイグネル・ヂヤポネ）だらう。酒ではないだらう。」

でつぷり肥つて、口髯の長い彼は笑を含みながら私の方を見てさう云つた。自分も笑ひながら、さうだ、さうだと云ふ

と、正宗が一本そのまゝ無事に彼の前を通過して終つた。衣類のトランクなどは一々開けてもみなかつた。

「お孃さん、それはあなたのお人形さんですか。」

彼はち系子の大事相にだきかゝへてゐた、妻から餞別にと送つた西洋人形に目をつけ、進み寄つて、その紅い頰に白墨で印をつけようと猿臂を伸した。

No,No,No!

ち系子は氣狂ひのやうになつて、その人形を堅く胸に抱き締め、片手を擧げて、税關吏の太い腕を拂ひのけた。

「嫌ですよ大事な顏にかくなんて。」

啞りながら彼女は赤くなつて、一生懸命反抗した。

「ご免なさい、ご免なさい。ではこゝに一寸かゝせて下さい。」

流石佛蘭西人である。小娘に對しても鄭重な態度で詫りながら、小さな靴をはいた人形の脚に輕く印をつけて、勇敢な少女の顏を眺めた。周圍の人々も一様に目を見張つてこの小競合を振向いてゐた。

「ち系子えらい、よく言つた、よく言つた。」

私は思はず大日本の小ピアニストを抱き締めて、彼女の前途を祝福した。

三、ブイヤベエス

日本にゐれば京都料理などが甘い。ついぞ西洋料理を喰べたいと思つたことがないので、外國に行つて第一に困ることはそれであらうと思つてゐたが、氣候のせいもあらう、一年間ゐるうちたつた一度で、日本料理を強いて欲しいとは思はなかつた。さうかと云つて西洋料理が特別甘いかと云ふにさうでもない。勿論甘いもの、甘い家もあるが、料理法が極めて局限されてゐて、變化に乏しい。支那料理の美味豐富とは較べものにならない。テウル・ダルヂヤンの有名な鴨料理など

でも、支那料理でする鴨の多種多樣な巧妙な調理法を思ひ出すと、寧ろ幼稚とも名づくべきであらう。

唯一つ日本にゐるより餘程甘く、且つ安心して喰べられるものに牡蠣がある。色々な食用貝類のうちでも、牡蠣と雲丹とが特別に好いと思ふ。生のまゝ檸檬の汁を一寸落して喰べるのであるが、あんな洒麗た吾々の口に合ふものがあれば、なにも態々面倒な思をして日本食を求めて行く必要はないやうなものだ。

巴里の街で最も印象的なものゝ一つはその牡蠣の屋臺である。どんな上等な料理屋の前にでも差出しの露店を往來に設け、海草や木の葉などを敷いた上に海の旬のする新鮮な牡蠣や、蛤や、小蝦などを陳べ、それに黄色い檸檬の果實をあしらつてある位、目に見ても趣の深いものはない。サボオをはいて、紺の胸かけをした漁士のやうな男が、そこで直ぐ貝を割つて皿に並べて出すのである。もしあれを南禪寺前にそのまゝ移したとしても、決して不調和とは云はれないであらう。

マドレーヌに近いブリュニエの魚料理は日本人の間でも評判の高いものである。(ヴィクトル・ユーゴオ街に新築された支店はモリス・ドニーの裝飾で日本一流の割烹店にでもみるやうな清新な趣がある。然し魚の味と云ひ、料理法と云ひ、吾々日本人を驚かすには足りない。どうも魚でも、海老でも、大味のやうな氣がする。クレールだとか、カレーだとかいふ生牡蠣の味ほど佛蘭西で吾々の味覺に適したものはない。

船中冷藏庫の魚にあきてゐる旅人がマルセーユに上陸して、ブイヤベエスに舌皷を打つのは當然であらうが、あの魚の新鮮さと特異な料理法とは巴里の美食家をも納得させるであらう。

私共は上陸した後、バッソでブイヤベエスを喰べ、サロン・パリジヤンで生きのいゝ魚料理を飽きるほどしたゝめた。吾々が魚を愛するのは米の飯を愛するのと同じだ。吾々日本人位いゝ魚を惠まれてゐる國民もなく、吾々位又よくその味を知つてゐるもののも世界にないであらう。

私はその後ニースへの途中二度マルセーユを通つて、ブイヤベエスの御馳走になつたが、出帆の日の午食にもう一度それを味つた。態々見送りに集つてくれた人々が一緒で、思ひ出しても愉快な午食であつた。サン・シヤマアから孫君夫婦、

エクスから林君夫婦、巴里から海老原君夫婦、それに陳君と吾々夫婦とあき子の十人であつた。林の説によるとパッツだとか、パスカルだとかいふ古港の正面に並んでゐる料理屋は格式張つてゐて、高い許りで、甘いことはないと云ふのである。それより魚市場の奥の方にある名もない小料理屋の方が本當のブイヤベエスを喰はせるといふので、先に立つて案内して行つた。どこに行つてもさういふ穴を嗅ぎつけるのは、林のやうな酒客でなければ出來ない藝當だ。

魚市場の立つ往來に仕舞ひおくれた二三軒がまばらに殘つてゐる許りだつた。新鮮な魚が海草の上に並んでゐるのも、その背景に古港の碇泊船が靜かな風に搖れてゐるのも、港臭い海の匂もマルセーユらしい趣だつた。海老原は鹿兒島港の恰度さうした海岸に育つただけあつて、魚の陳べ方や、鯛の尾を弓のやうに絲で釣つてあるのなどを鋭く觀察してゐた。

「なるほどかうして尻尾をぴんとさせて置く方が同じ魚でも生きて見える。」

かうした物の觀察法は私を喜ばせた。畫面から許り繪畫を研究しようとする心得は頼もしくない。

その居酒屋のやうな小料理店は、洞孔のやうに石で積み上げられた、土間の中にあつた。給仕の女は姐さんと呼び度いやうな漁士の娘、客は買出しに來た兄貴といふ風、葡萄酒は地酒、註文は硲君の妻君がもの馴れてゐた。ブイヤベエスは註文してから何分かゝる、それまでにこれとこれとが喰べられる、とかういふふうにしないとブイヤベエスは甘くないのである。なぜなら時間が最も大切な料理法だからである。

ブイヤベエスとは説明するまでもあるまいが、一口に云へばマルセーユの魚汁で、それも二三種の魚や海老を一緒に汁澤山にして煮込むのである。それに加へる香料が澤山ある。ペルシル、フヌイユ、ロマリー、テイルス、橄欖の葉、泊夫藍粉等。野菜はトマト、玉葱、蒜。これは硲君の奥さんアデリアの秘傳(?)である。アデリアは來がけに途中の草原で採集して來たといつて、夫等の野草を手攜の中から取出して土産に呉れた。詰りこれ等の藥草が他處には十分にないからマルセーユのブイヤベエスがいつまでも聲價を保つてゐる所以であらう。

中々甘いヴイオリニストとテノオルとが、そこへ這入つて來た。恰度酒が廻つて、ブイヤベエスが温まる頃に。

忘れられない樂しかつた離別の午餐よ。

榛名丸の出帆はおくれて、二時が五時頃になつた。久米君も遙々ニースから見送りに出て來てくれた。文化學院の村井添田の兩君も、先生と云つて甲板に姿を見せた。唯吾々が佛蘭西の土地を離れると同時に、六十九才になつたマダム・ペーヤがニースのホテルで息を引取つた。電報の行違ひで、香港へ着いた時、初めてそれを知つた。

四、ミレエイユの作者

マルセーユ・ロンシヤンの美術館はい、畫が少い代りに惡い畫が多い。陳列法が特によくないので見にくい。シヤヴアンヌの「東方への港」と「古代の幻影」。この二つの壁畫は一見の價値がある。

ミストラルの大きな半身像の前に吾々が恰度行き合せた時、二三十人の田舍者のやうな人々がどや〳〵と入つて來てその前に集つた。何が初まるのかと呆氣にとられてゐると、全く見なれない樂器、いやに細長い大鼓やら、唐人笛のやうな喇叭やらで、急にびつくりするやうな音を立てる奇妙な曲を演奏し出した。それが三分も續かないで、やまつて終ふと、又どや〳〵とその連中は肖像畫の前を立去つて終つた。

私は餘りの不思議さに、その中にゐた一人の老田舍紳士を捕へて、今したのは何んの事かと訊いてみた。今日はミストラルの紀念日に相當するので、かうして式をしたのだと答へた。このプロバンス特有の音樂のことも說明してゐたが今は忘れて終つた。これが今度佛蘭西に上陸して初めての會話らしい會話だつた。

別に肖像畫の前でお辭儀をするでもなく、祭文を讀むでもない。參會者も平服のまゝである。あつけないと云へばあつけない式もあるものだ。何しろ初まると濟んで終つたのだから。

然しかうして一寸でも年々ミレエイユの作者を思ひ出しに來る人々のあるのは面白い。これを稱してかたい許りといふのか、それとも心許りといふのか。

政界裏面　白眼老夜話

刀東公記

◇…世の中はすつかり春げしきになつたが、オラが内閣は秋景色じやないか。議會はあの體たらくで閉幕になつたが、田中も一息つけるものと思つたら、支那條約の效力發生問題だの不戰條約の「人民の名」だので、樞密院の爺さん達からグイ〳〵突つこまれて、グウの音も出ずにゐるのだから、乃公など老人は少々可愛さうに思つてゐる位だよ「人民の名」は議會で散々にこれ廻はした揚句だから、よもや樞府の爺さん達があの上又これる事もあるまいと思つてゐたら、どうして仲々頑固だ。世間や議會の問題になりかけた議長の倉富に會つて、『ありや問題になるんかれ』ときいたら『なあに大した事じやあるまい』と老人は言つてゐたのに、こんな騒ぎになつて來たから、又こないだ會つた時『何うしたのだれ』と訊れたら『どうも、「人民の名に於て」…といふのでは困るよ』と固い事を言つてゐた。乃公は年はとつてゐるが、長年外國の新聞も讀んでゐるので、この問題は近頃の面黑いものだと思つて見てゐるが、ありや問題にするから問題になるだけの事よ『インザ、ネイムズ・オブ・ゼア・レスペクチブ・ピープーズ…』といふ原文の文句は形容詞で、主權者が主權者の名で調印する以上、ちつとも差支へないものだと思つてゐる。これが昔なら「イン・ザ・ネーム・オブ・アワー・ロード」(我等の主の名に於て」といふ形容詞が使はれるところだが、近世はデモクラシーの世の中だから「神の名」といふ形容詞が「國民の名」といふ形容詞になつたまでの事じやないか。それに「人民の名に於て」といふ日本語譯を土臺にして議論してゐるのが第一なつてゐない。原文に英語と佛語だから、それによつて條文全體から論議するのが至當だ。第一、西洋に日本語でいふ「人民」なんといふものはない。「人民」といふのは君主國にだけあるもので、あの條文では「ピープルズ」といふ英語は人民でなく「國民」といふ意味だ。

◇…それにあの文句がいけないといふのなら、第一調印の年月の西暦千九百二十何年といふのまで問題になつて來る。西暦はA・D(主の年)といふので耶蘇の年號じやないか。それから、調印國主權者の名だつて西洋のアルファベット順で日本の天子樣の名はアメリカやドイツの大統領の名の下に出て來てゐるじやないか。まさかこんな事までいけないとどんな馬鹿でもいふまい。宗竹の謂ふ國と交際するからには、ピンからキリまで我が家の茶の間で家の子を相手にしてゐるやうなワケにはいかない。それに外交文書といふものには自づと決つた形式があるのだから、そんな形式に一々角立てゝ日本の國體がどうのかうのと騒ぐのは沙汰の限りといふものだヨ。

◇…だが、田中内閣がこんな詰らない事で

イヂメられるのは自繩自縛といふ奴さ。去年あたり、民政黨が議會中心主義と言つたのを國賊だの何んのと騷ぎ立てたり、無産黨の山本が殺されれば殺した奴をかばうやうな態度をしたり、その他何んでもチョン曲思想、反動思想で「皇室中心主義」を政爭に振り廻はし過ぎるからだヨ。チョン曲主義からいへば「人民の名に於て」なんて、不屆至極に極つてゐるからな。これといふのも、田中内閣には人物も居なく、ほんとに筋道の通つた學問のある奴が居ないからだ。内閣の一の番頭の鳩山なども、いゝ所はあるが、どうも頭が縮つてゐない。二の番頭の前田は仕事に熱心で好いが、これもこんな問題になると老人の乃公よりいけない。尤も條約文は外務省の仕事だが、今の外務省には、條約文の意味を讀み分ける程度の力のある役人許りで、あんな文句が世間に發表されたら、それが政治的にどんな騷ぎを起すかなんていふ事に、眼先きの利く奴は一人も居ない。どれもこれも日本人離れがして、日本の政治屋や日本の樞密院なんてものが、どれ位の惡黨でどれ位ひの頑固親爺だか知つてるものは一人もゐない。だからあの條約文を讀む時にも、西洋人の頭で讀んで、何んにも知らない田中外務大臣に盲目バンを捺させたのさ、だから田中は可哀さうだといふ事になるが、併し、それといふのも、いつ迄も柄にない外相兼任なんてやつてゐるから起きるので、これも高い兼任税サ。

◇……樞密院の伊東巳代治が何とかしさうなものだつて?さうされ、若槻内閣を倒したのは彼の親爺が御前會議の席上でやつた「知らぬは亭主たゞ一人」といふ若槻内閣彈劾演説なんだから、政友會と田中にとつては大恩人、こんな時には一肌拔きさうなものだが、それが近頃ではさつぱり田中にはよくないらしい。田中はあれの前へ行くと妙に固くしやちこ張つて了ふ位ひ怖れてゐるさうで、友達つきあいでなどは思ひも寄らない事のやうだ。伊東といふ親爺は仲々の欲張り屋でね……官界へ出てから伊藤博文の下で働いた時分からの手柄話やなんぞを一々刻明に日記や書類にして持つて居り、明治裏面史としてはたしかに貴重な文獻なんださうだ。ところが、或る新聞社でそれを新聞に出させてくれないかと交渉したら、これは金にすれば何千圓とか何萬圓のものだからと言つて、直ぐに金、話して話し出したので、使ひに行つた男もあきれて歸つて來たといふ事だヨ。……今の内閣で伊東の前へ出て洒々話の出來るのは誰だと思ふ?それが山本と原だから面白いじやないか。伊東と仲好といへば、後藤が一番だが、可哀さうにあの名物男も晩年が振はなかつたナ。運がよければ歩ける位にはならうが、實は二三年前からモウロクしてゐたのだよ。それを世間では氣がつかないもんだから、やれ「市會議員に出てくれ」「よし來た。」モウロクしてゐるのを知つてゐる家の子が驚いて飛んで行つて「飛んでもない、お止しなさい」「よし來た」といふワケだ。

◇……大隈が八十幾つで總理をやつた事から思へば、まだモウロクの年でもないのにどうして急にあゝなつたと君は思ふ?あの賢夫人に先立たれたのが原因だヨ。あれの女房といふのはそれは豪かつたぞ。世間ではそれほど知らなかつたが、乃公は後藤が滿鐵總裁から鐵道院總裁、遞信大臣、内務大臣、外務大臣と日の出の勢の時分に、ちよいちよいあれの家へ行つて、女房の樣子を見て居てつくぐ

感心した。或る時、小さな娘が（多分鶴見の細君になつてゐる人だらう）外から勢よくかけ込んで來てれ、玄關へ下駄を歩つて來た形に脫き捨てゝ「お母さん」とどなつてそこに立つて居た母の膝元へ飛んで行つたら、夫人は物もいはずに奥へすたく不興さうに立つて行つた。娘は何んで叱られたか分らなくてゐると、だまつて娘を連れて玄關へ戻つて來てその行儀わるく脫ぎ散らした下駄を指したョ、そこで娘もはじめて氣がついて、丁寧に揃え直したら、はじめて、柔和な顏をして「何んの御用」といつた。乃公はこれを見て居て、「後藤が今日あるは細君の御蔭だ、細君の方が一枚上だ」と當時喝破したものだが、後藤の家の內部のことを知つてゐるものは、「その通り」とみんな贊成してゐた。

◇…大分話が橫道に外れたが、たしか後藤が寺內內閣の內相から外相に廻つたのは、女房が死んだ日だつたよ。あれ以來は、山本の地震內閣で、一花咲かせ損つた切りで、どうも好い運が廻つて來ない。それにさみしくはあろし、新橋あたりの藝者を妾にしたり、馬鹿に若いのに手を出したりして、年寄としては精力を濫費し過ぎたらしいが、乃公はどうもそれがいけなかつたのじやないかと思ふ。あれで新橋あたりでは後藤のかくれ遊びは仲々有名だからな。妾といへば、伊東の屋敷と塀一つ隣りへ一時かこつて置いて、その妾宅へ行つた序に、庭つゞきの裏口からちよいく二人で往復したものだョ、伊東といひ後藤といひ春畝の門下生だけに、この方面にかけては仲々豪の者サ。

◇…伊東が不戰條約の「人民の名」で田中を助けさうもないのは、御大禮の時に、あの親爺が欲張り根性から當然自分を昇爵してくれるだらうと思つてゐたのに、大して問題にもしなかつたので業をにやしてゐるからだといふ者もあるが、どんなものだか。昇爵や授爵は宮內大臣の仕事で、內閣としては推薦するだけだから田中の責任許りとはいへないのだから、まさか伊東もそんな事を根に持つて居る譯ではあるまい。併し後藤を伯爵にしたのは田中の推薦だから、伊東としては、業を煮やさなかつたとはいへない。こんな事を世間からいはれるのもみんなあの親爺の慾が足りないからだョ。頭の好いのと議論の立つのでは今時政治家だと己惚れてゐる若い連中でも彼奴と太刀打ちの出來るのは何人もゐるまいが、惜しい事だ。不戰條約は結局どうなるつて？樞府の爺さん達がいつてゐるやうに、あの字句がどうでもいけないとなると、留保つきの批准といふことになる他あるまい。それもいけないとなると、あの條約は不成立となるワケだ。といふのは、あれは「各國の批准書が總てワシントンに於て寄託せられたる後」に効力を發生するといふ條文があるので一國でも批准を拒めば、後の國だけでは、新しく相談をし直さない限りは立消えになる。あんな形容詞一句のために、日本があゝいふ大きな條約の不成立の責任を持つワケには行くまいじやないか。結局、樞府が折れて出るか、留保條件つきかといふところで折合ふだらう。

◇…內閣改造騷ぎはどうなるかつて？サア毎日新聞がいろく書き立てゝ居るが、實は乃公にも見當がつかない。何しろ當の田中にも閣僚にも、これといふ目算がないのだから問日八日で騷ぐだけの事よ。今の閣僚を改造しなければならないといふところは、久原と

小川、望月の陥つてゐる陥穽だらう。それは貴族院あたりからゐんなにキメつけられたのは久原と小川が居るせいで、貴族院の連中から見ると商人上りで、金の力一つで成り上つた久原と、いやに傲慢チキで鐵道を露骨に黨利に使ふ小川が癪にさはつてならないのサ。それから望月には別にさういふ反感はないがこれは頭がカラツポなのをこないだの議會で物の美事にサラケ出し過ぎて了つて、これ以上置きかねるといふ次第だ。ところで、久原へ向つて、田中がそれとなく引退の謎をかけて見ると、この男ソロバンであそこまで叩きあげただけに、オイそれとは田中のいふ通りにならない。今迄金をいゝ加減注ぎこんで、これから商賣の上にもためになる一仕事といふ時になつて來て、お拂箱じや二一天作の五にもならなからうじやないか。だから田中のかける謎も一向知らぬ顔で、田中としても謎以上には今迄の義理でいへない。小川になるともつと始末がわるい。何しろ當人だけは副總理氣取りで、政友會生え抜きの黨人は乃公一人といふ顔をしてゐるのだから、田中が正面から談判したら、議論しても立ち退かないといふのがこの男だ。望月となると、黙つて居て、自分でも「内相の任にあらず」なんて言つてゐるが、併しいざ辭めるといふホントの話になると、我黨内閣改造のためとあらば自分は眞先きにやめるが、我黨一人では改造になるまい、後の久原や小川はどうすると言ひ出す。又、この人情先生にしてからが、一度やめたが最後二度とは大臣になれない位ひの目先きは利いてゐるから、内心は口先きほど辭めたくはない。

◇…そこへ持つて來て、床次の一件がからんで來てゐるから話がます〱やゝこしくなるといふヤツだヨ。この前にも話した事だが貴族院にはあの男の友達が割合に多くてね、青木や水野の一派は頻りと床次と田中を握手させやうとしてゐるし、政友會の隱居株の岡崎はまた床次びいきで、しきりに提携を當の床次にも田中にも説いてゐる。ところが、自惚れでは日本一の床次は入黨どころか政友會を自分のものにして見せる位に考へて居るらしいといふから自惚れもこれ位ひになると一層氣持ちがいゝと乃公は近頃感心してゐる。ところが閣内では床次を入閣させようか、させまいかといふので、二派に別れてゐるし、入閣させるにしても、外務に置かうか内務にしやうかといふので又がや〱言つてゐる。望月はこないだ田中をわざ〱訪問して、「改造のため必要とあらば」と例の口上で切り出し「但し自分の後に閣内から持つて來るのでは困る」と言つたさうだ。あれも床次引込み論者で、床次が歸つて來れば、自分は政友會の筆頭總務で我慢しやうと言つてゐるさうだ。望月も筆頭總務ならどうにかお茶をにごして行けるだらうヨ。何しろ二三十年議員になつて居て今迄たゞの一度も議案とか豫算とかいふのに目を通した事がないといふ代議士だからね。あれも田中の總理大臣と一緒に日露戰爭前期の大臣だヨ。

◇…床次入閣反對の急先鋒は閣外では相變らず鈴木喜三郎、閣内では小川だ。鈴木は自分の金を持たないのが玉にキヅだが、野心と雄心は滿々たるもので、未來の政友會總裁總理大臣を以て自任し、子分も相當出來てゐる。だから、床次に入つて來られるのは自分の將來の立場を考へて面白くないし、彼奴のテキパキした性格と床次のクニヤリ〱した

やり口とも間が合はない。又小川も野心家で、少くも政友會の第二人者の隨一を以つて任じてゐるので、勢力爭ひの關係から床次を歡迎してゐない。床次はこんな暗流は百も承知だし、政友內閣の命脈も長くないから、一足飛びに首相の後釜に据はらうといふ夢許りを考えて居る。だから入閣話も聯立話も一向らちが明かないのだヨ。だが、床次がいくら自惚れても、このまゝ內閣が潰れて了つては、二十數人の手勢だけしかない自分のところへ內閣のお鉢が廻つて來るとも考へられないから、田中內閣が改造騷ぎでどうにも始末がつかなくなつて、自分のところへ悲鳴を揚げて賴みに來るのを洞ヶ峠に立つて待つてゐるといふ形だらう。

◇……內閣改造では、陸相の白川も滿洲事件であの始末を議會で演じたから、田中は世間の評判のいゝ宇垣に代つて入つて貰はうと思つて會見したが、體裁よく斷はられて一寸男を下げたやうだ。これも田中の頭が鈍過ぎるからで、宇垣のやうな明敏な男が、今頃こはれかけて居る屋臺骨の土臺石などになるかならないか、素人にも見當がつくじやないか。宇垣は齋藤の留守に朝鮮總督代理をしてゐた時、大分好い氣持ちで、實はあの儘なつてゐたかつたのだヨ。一體軍人が朝鮮總督になると大抵みな好い氣持ちになるものでネ。それは今迄大臣になつても軍隊ことのほかやつてゐなかつたのが、急に財政、教育、殖產、工業とまるで小政府の總務大臣見たいな大きな仕事を總括するので、面白くてならないのださうだ。宇垣もそんなワケで、あのまゝ居据りたかつたのに、田中が全くの閥族關係で山梨を任命したので、宇垣はあの時隨分苦々しく思つたのだネ。それだから今になつて穴塞ぎの入閣など思ひも寄らぬといふのが彼の腹で、それに明日にもやめる內閣の下でならなくても、凝て居れば次の民政黨內閣には又なれる見込が多いのだから、ます〳〵承諾などしない。それどころか、白川のところへ行つて「お前が辭めてあの問題で軍部だけで全責任を負ふのは禁物だぜ」と智慧をつけたといふ事だ。白川はあれで淡白なところがあり、あんまりあの問題がうるさいので、早く足を洗つて、好きな釣でもやりたいと言つてゐたが、宇垣からいはれたせいかどうかは知らないが、その後態度が強くなり、辭めさうになくなつて來た。そこで田中も陸相の椅子を動かすことは改造のプログラムからはね除け、あの問題は「外交上國交に害あり」といふので一切公表させぬことになつたワケさ。これで次の議會まではこの方はしのげる事になつた。尤も白川が辭める段になると內閣の連帶責任になるので、田中から鈴木(喜)に泣きつき、鈴木から村岡に因果をふくめて、出先官憲だけの責任でお茶をにごさうといふ話にもなつたと聞いたが、これもしない積りかも知れない。何しろ責任をとる事にかけては、無神經な田中だから、常人には判斷がつかないヨ。

◇……何內閣は世間が見る通り今よろ〳〵してゐる。議會では委讓案、宗教團體法案、社會立法案、自作農案、肥料管理案、その上鐵道案も小選擧區制案も片ぱしから敗け。裁判所構成案を樞府へ先き持つて行つたらそこで先づ蹴られ、おまけに先きに言つたやうに、不戰條約案や支那條約案で散々に味噌をつけてゐるのだから、このよろ〳〵內閣を倒せない民政黨の意氣地なさはどうだい。これが所を換へて政友會の連中が[illegible]だつたら、とう

の背に倒してゐるヨ。若槻内閣を倒す時でも政友會の活躍は物凄かつたからナ。伊東ともたしかに策謀してゐたものだヨ。貴族院や樞府の情勢がこんなに民政に有利に動いてゐるのに加へて、新聞の輿論や世間の識者はみんな反現内閣になつてゐるぢやないか。こないだ、久し振りで前アメリカ大使の埴原に會つたら、滅多に政治談をやらないあの男が、口を極めて田中外交を攻擊して、この儘で行つては日本は外交の上からも亡國だと言つてね、あんまり心配だからパンフレットを出して諸方面の有識者に警告するつもりだと言つてゐたが、その通り印刷物にして乃公のところへも送つて來たよ。あの男など實際惜しい才で、黨派からは全くかけ離れてゐるのに、こんな大膽な擧に出るのを見ると、田中内閣に對するバロメーターの表示が雨である事だけはたしかだらう。それだのに、民政黨の連中と來ては、もう一息といふところで力拔けがしてゐるから駄目サ。それでたゞワケもなく五月には内閣總辭職だと騷ぎ廻つてゐる。假令五月にさうなつても、民政黨のためではない。自然と朽木が倒れるのです。

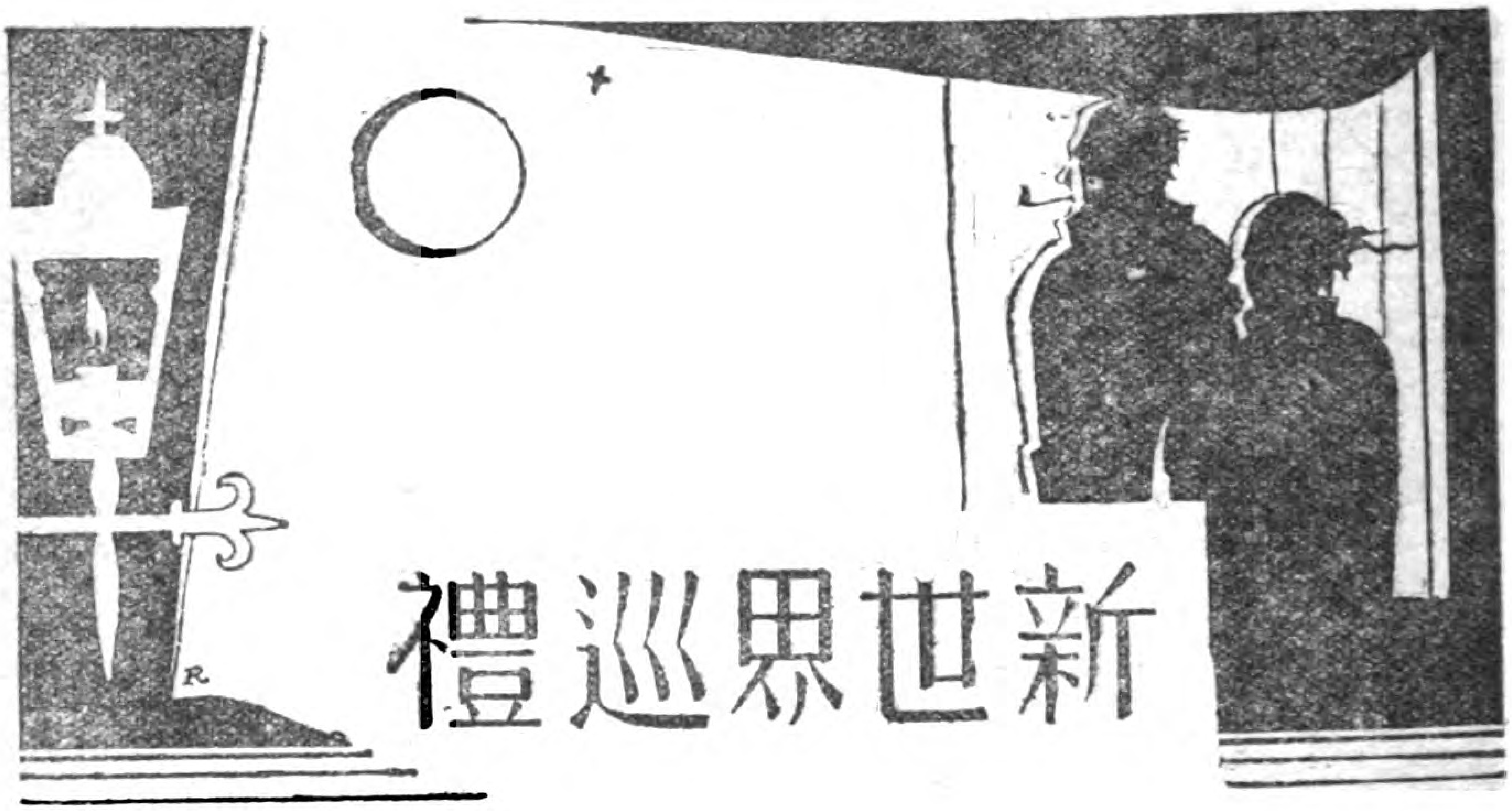
◇……民政黨の連中の彌次馬の皮算用が面白いで先づ濱口に大命一下となると、内務には安達か伊澤、大藏には若槻をもう一度引ぱり出す。町田で辛抱するの、外務はもう一度幣原、朝鮮には宇垣、臺灣に湯淺、滿鐵に佐竹、だとヨ。一つ振つてゐるのは、大眞面目で、濱口内閣が出來たら、帝大の小野塚を文相に推薦しやうといふ相當有名な男が居る事だ。その男の話によると、政友内閣の中で、あの生眞面目な原が、司法に居るので、どれだけ世間體をつくろつてゐるか知れない。それと同じ筆法で是非小野塚といふのださうだ。小野塚は濱口や幣原伊澤等と大學の同期で濱口とも親交があるといふのも一つの理由ださうだ。三宅雪嶺老は、前の帝大總長の荒木を東京市長にしろと新聞に書いてゐるのと好い對照じやないか。新渡戸が貴族院のあの演說で、民政黨に隨喜の淚を流させたり、近頃はどうも學者が政治に緣が近くなつて來たやうだぞ。これがといふのも、政治家が居なくなり、政治屋許りとなり、この連中のいふ事なす事を世間が信用しなくなつたので、誰でも承服する者を連れて來なくてはならないといふので、それに眞正直な物の理屈の分った學者に好からうといふ事になつて來たんじやないかね。そろ〳〵政黨政治屋の飯の食ひあがり時が來たのだと乃公はにらんでゐる……。

社告

本誌昭和四年三月號（第四百九十四號）所載「海のシャイロック」（浦島光雄氏筆）の記事中「いはゞ日本海員組合はガジ閥の總聯合體である」との記事を取消す。

右日本海員組合の名譽と信用のために玆に謹告す。

中央公論社



長靴の春

谷譲次

1

反照電熱機のやうな、香橙色の眞ん圓な夕陽を、地中海が受け取つて飮み込んだ。同時に、いろいろの鳥が一せいに鳴き出して、白楊の林が急に寒くなつた。私は、それらの現象を、すこしも自分に關係のないものとして、待合室の窓から眺めてゐた。その窓硝子には、若い春の外氣が、纖細な花模樣を唉かせてゐた。

そこは、ふらんすと伊太利の國境驛のヴァンテミィユだつた。小停車場は、塵埃をかぶつて白かつた。そして、油燈のくすぶる紫いろの隅々に、貧しいトランクの山脈と、いつしよに、この産業の自由流動と、それによる同色化傾向の濃厚な近代社會に、何とかして無理にも史的境界と、その尊嚴を保たうとする國家なるものの喜劇的重大性が、無關心

な旅行者の突然にまで立ち罩めてゐた。それは私に、戦線のにほひをさへ嗅がせた。伊太利と佛蘭西の二つの國家によつて、そこの空氣は二倍の比重を持つてゐたからだ。何處かバルチック海に沿ふ新興共和國の大統領護身兵のやうな、考へ拔いた制服の、一人の鼻の尖つた青年が、ふらんす側の車窓から、玄妙な言葉で私の荷物を强奪した。手荷物運搬人だつた。それから退屈な國境の儀式が開始された。

旅劵。佛蘭西の出國スタンプ。寫眞と顔の比較。亡命客のやうに陰欝な、あわただしい旅行者の行列。一人づつ、小さな、それでゐて何と多くの議論のあつたであらう屋内柵を過ぎると、もうそこで、私達は佛蘭西から伊太利へ這入つたのだつた。

憲兵。警官。國境防備軍の歩哨。それは、一本の羽毛を飾つた狩獵帽をかぶつて、自分の身長よりも高い銃劍で、新入國者にファシスト的な無言の警告を與ふべく努力してゐた。眞つ暗だつた。停電だつたのだ。また旅劵。伊太利入國スタンプ。質問の大暴風雨。つぎは税關である。

税關の役人は、貝殼のやうな眼をして私を白眼んだ。さうすることが彼の仕事なのだ。私は、用意の粉末微笑を取り出して彼の上に振りかけた。無事に通關したとき、そばの亞米利加の老婆が、私にさゝやいた。

『伊太利人は、同じ拉丁系民族のなかでも、他人の所有物に對してあんまり興味を感じないはうに屬します。これはいゝことです。』

停電は何時までも續いた。私は、手探りで廊下を進んだ。そして、向うから黒い影が來るごとに、接吻するほど顔を近づけて、兩替所のありかを訊いた。が、彼らはみなこの邊の農民らしく、モンパルナスの珈琲店で仕上げを濟ました筈の私の佛蘭西語は、彼等には通じさうもなかつた。その上、停電と乘換と出入國の煩瑣な手續とが、みんなをすつかり逆上させてゐて、誰も私のために足を停めやうとするものはなかつた。しかし、兩替所は、その二本の蠟燭の灯りで、直ぐに私の前に浮かび上つた。何かを、多分この停電を、怒つてゐるらしい若い女の冷淡な手が、私の法(フラン)を取り上げて、不思議な伊太利金のリラを抛り出した。

食堂(バッフェ)には、僧院のにほひが冷たかつた。が、それは、卓上の花挿しに立てた蠟燭の搖らぎと、熱心に、はじめてのマカロニと鬪ふ赤い横顔と、お腹(なか)だけ白いフイジの水堤のためだつたかも知れない。午後から、地中海の海岸線を私と同車して來た人々が、料理の湯氣のなかから私に笑ひかけてゐた。しかし、彼らと私との間には、少數の了解と、多くの動物的好意とがある

だけだつた。何故なら、すこしでも私の話せる言語は、彼らの耳には、すべて單なる音響としかひゞかなかつたし、また、何んなに熱烈な彼らの主張も討論も、私にとつては、音樂的價値以外の何ものでもなかつたから。で、直ぐに私たちは、お互ひに解らせやうとする努力を諦めてしまつた。けれど、私と彼らは、しぢう眼を見合はせて、その眼を笑はせることによつて、會話以上の社交的效果を保つて同車して來たのだつた。私達は、そこに滿足な友情をさへ汲み取ることに成功してゐた。

私は、マントンで、巴里風の洒落た服裝と、龍涎香のにほひとを私の車室へ運び入れて、それから私も、彼とだけずつと饒舌りこんで來た、若いルセアニアの商人が、私を、自分の前の空椅子へ招待するのに任せた。銀灰色の細毛の密生した彼の手首に、六種の色彩の大理石を金で繋いだ鎖が掛かつてゐた。その小さな大理石の一つは腕時計だつた。が、それにしても、この裝身法は小亞細亞的に野蠻で、感心出來なかつた。然るに、彼の口からは、倫敦リジエント街とピキャデリの角の英語が、尻上りの粋さをもつて滑り出るのである。

ルセアニア人は、私に、昔からこゝで、伊太利側から佛蘭西側へ輸出して來た切花に、最近ふらんすが七割の税を課することにしたために、もとは、わざわざ海側の汽車を選んで窓から見て行く人もすくなくなかつた、國境と線路に接近した伊太利の花卉園が、今では、見事に淋れてしまつたと告げた。

「毎朝の化粧臺に、變つた花束を發見しないと一日頭痛のする大ホテルの婦人客達は、値段など聞かないうちに、萎れた花びらに鼻を近づけるものです。だから、いくら殺人的に高價であつても構はないわけですが、そこへ行く先に、七割の關税と聞いて市場が手を引つ込めてしまひました。それかと言つて、佛蘭西側に新たな花園が拓かれたでもありません。國境一つで全然地質が違ふと見えます。このことは始めから判つてゐたのですから、七割税には、すこしも保護政策の意味は含まれてゐないのです。たゞ伊太利の切花業者と園丁から長年の生活を奪つて、そのかはり、彼らに、多くの悲劇と家庭の解散を與へたに過ぎません。あり餘る者から取るつもりで、結果は、無いものをますますなくさせる。じつに合理的な政策です、が、伊太利だつて文句は言へません。内政干渉と來ますし、それに、交換條件でも持ち出されちや嫌ですからね。何處でもさうであるやうに、ブルジョア政府同士の交渉の前には、郷土的利福なんか、花だらうが何だらうが、何んなに蹂躙しても構はないのです。そこでつまり、兩方の政府が仲よく笑ひ合つて、こゝら一帶を荒土にしました。ちやうどあの邊が、先頃まで一番素晴しかつた花卉

のおとです。」

窓へ伸ばした彼の指先で、シシリイ島人らしい半黑の一家族が、スウプ汁から離いた顔を上げた。

それから私は、彼との食卓で、伊太利バムウスを舐めて、赤茄子入りのスパゲテは、いつたい如何にして肉刺しへ巻きつけて、何うしたら一本の大匙の補助だけで最も能率的に口へ送り込むことが出來るか、其の術を習得した。そして、ルセアニア人と私と二人の煙草の明りで、私は、國內電報になるのを待つて今まで控へてゐた羅馬の宿屋(アルベルゴ)への電報を書いて、それを給仕に打たせるのに、發車までの殘りの時間の全部を費やした。

國境通關業者の制帽が、暗黑のなかで呪文を大唱した。

『ジエノア・ピサ經由、羅馬行き急行！　羅馬ゆき急行！』

これが、私達をナプキンから引き離した。

停電のプラツトフオウムには、綠と赤の灯の玉があつた。

煤煙。蒸氣。光線。萬國寢臺會社歐羅巴特急車が、傲慢で伊達者な潜精力を押さへて、驛長(カピタノ)の笛を待つてゐた。明るい窓が、先へ往くほど小さく、長く續いてゐた。旅行の精神と、遠い都會の誘惑とが、人々を占領した。そこにも此處にも、出發前の上吊つた聲と、着物の擦れ合ふ音とがあつた。騷亂の中から、さつきの荷物運搬人が現れて、豫約してある車室へ私を救助した。

またルセアニアの商人と同じコンパアトメントである。私達は短衣(ヴェスト)の扣鈕を突つき合つて、大笑ひした。

汽車が、停電中のヴァンテミイユを見棄てた。雪の帽子をかぶつた山頂が、佛蘭西の空に吸收された。車體が軋んで、その隙間から、水の香が流れ込んで來た。それによつて、私達は、まだ地中海が私たちを追跡してゐるのであることを知つた。

ジエノアは、眞夜中に擦過するに相違ない。ルセアニア人は巴里ラプレ商店製の印しのある靴を脫いで、その茶紙に包まれた、バブイノ街の石膏細工のやうな格恰の好い足で、車室の深紅の絨毯を撫でた。

2

車輪とレイルとの摩擦による火氣が、鐵材を傳はつて、上つて來るのかも知れなかつた。室內は、莫迦げて暑かつた。そのために窓の硝子が膨脹して、白い汗を流した。で、私達は相談して、入口の扉を開け放して置くことに合意した。

恐しい轉轍の技能だつた。その度びに、列車は何米かを飛行した。窓掛けが散亂した。衣裳鞄が踊つた。脫いであるルセアニア人の靴が、ひとりでに步き出した。私達は、空氣を抱擁しようとして、何度か失敗した。

鈍い音を立てゝ、戸口が人を吸ひ込んだ。その人は、激しく投げ出された身體が、機會的にルセアニア人の寢臺を打つて、その拍子に、彼と並んで、さうして私と向き合つて上手に腰をかけたので、やつと倒れることから自分を防いだ。それは、指を鳴らしたやうな出來事だつた。私は、ルセアニア人へ話しかけやうとしてゐた言葉を、唇の上で消したまゝ、この闖入者を觀察（スタディ）した。

彼女は、アストラカンの長い外套を着て、空想的な創造になる黑のフエルト帽をかぶつてゐた。顏は、プラタナスの落葉の吹きつける百貨店の飾窓に、春の先驅を着て片手を上げてゐる茶褐色の衣裳人形のやうに、何處までも人工的な印象だつた。眉は、細い鉛筆の一線だつた。大きな口が、官能の門を閉ざしてゐた。眼は、熟さない林檎の皮の青さだつた。それが、汽車の震動を誇張して、二つの驚愕の窓のやうに見ひらかれてゐた。

彼女は、咽喉から笑ひを轉がし出して、合掌をした。そして急に、執事のやうな眞面目な顏を作つた。それから、この椿事を說明すべく、兩方の肘を左右へ振つた。

『何て搖れる汽車でせう！』

かうして彼女の全身は、私達のコンパアメントのものとなつたのだ。それなのに、彼女は、其處にさうして存在を延長してゐていゝといふ私たちの許可を、沈默の眼で促してゐるのである。

私は、必要を認めて、同室者の意見をも兼ねた

『私達は、すこし神經質なのです。お互ひに鼻を見ては笑ひ、つぎに悲しさうに考へ込んで、果ては寢臺を相手に大聲に喚くだけのことです。居らしつても、面白いことはあるまいと思ひます。』

『私は、このまゝ此處にゐていゝのでせうか。それとも、もう一度、あの車廊の遊動木を渡つて、自分の部屋まで旅行しなければならないのでせうか。』

『御隨意に。』私はうしろへ反つて、兩脚をぶらぶらさせた。そのはうが、汽車の速力を助けるやうに思へたからだ。『しかし、ご覽のとほり、私の同室者は、もう靴を脫いでしまつて、靴下だけで床を踏んでゐるのです。それさへお差支へなければ――』

すると、彼女の表情を、私への輕侮が走つた。この私の紳士性は、彼女の憐憫を買ふに充分だつたのだ。

『何といふ興味ある話題でせう！』

彼女は、俄かの喜悅を示すために、外套の襟を抱き締めた。そして、前屈みの姿勢を採つて、私達二人を聽衆に、かういふ驚くべき秘密結社の曝露に着手したのである。

『明らかに、あなた方は、ただ、國際裸體婦人同盟に關して、何らお聞きになつたことはないと見えますね。女でさへ今は裸體を主張してゐるのに、男の方が、靴下一枚でゐたつて、それが何でせう？ 國際裸體婦人同盟は、アントワァプに本部のある最左翼解放運動の前線で、言はゞその獨立活動隊です。會員は、目下歐羅巴ぢうに七十人あまりですが、そのなかには、あの「幸福な白痴(ハッピイ・イヂウル)」を書いた倫敦の劇作家モウド・ハインもゐます。巴里の雜誌記者が二人ゐます。リデルヒブルグ大學の生物學教授シャンツ夫人もゐます。最近では、ワルシャワ歌劇團のソプラノ花形のリル・デ・メル孃と、ルツエルンの美容師で、六十七歳になるお婆さんとが加盟しました。そのほか、詩人、勞働運動者音樂家など、勿論みんな智識階級の女ばかりです。』

彼女は語を切つて、自分は何も國際裸體婦人同盟の宣傳をしてゐるのではないと、私達を誤解から切斷しやうとした。私たちは、私達も今ちようどさういふ話しを始めるところだつたからと言つて、彼女に、續けることを賴んだ。

『同盟の信條は、ごく簡單です。年中裸體で生活すること。これだけです。但し、外套と靴下は特別に許されることになつてゐます。外套は、必要に應じて寒氣を防ぐため。そして靴下は、裸足で歩いてい丶設備が、まだ多く都市に出來てゐないものですから、仕方なしに許容され、その附屬品としてです。が、さういふ方面の訓練の全く缺けてゐる、教養のない男達の眼から私たちが裸體でゐることを隱すために、私達は、四六時中何んな要心を強ひられてゐることでせう！ 餘計な注意を惹いて悶着を起したくないからです。それでも、私たち國際裸體婦人同盟の會員にとつては、裸かでゐるほうが遙かに自然なのです。近代の女は、現世紀の狂氣じみた性の騷ぎには、飽き飽きしました。性のことなど、問題にすべきではないのです。誰が、食べ物のことをさう喧しく言ふ人があるでせう？ 性は、はじめから種族的な「縱の本能」に過ぎません。人間には、もつと社會的な「横の仕事」が澤山ある筈です。ところが、この簡單な「性」に神祕を着せてゐるのが、われわれの着物です。一體着物といふものは、支配階級が、富と權力を示して民衆を脅かしつけるために發明されたものではないでせうか。それは法律や宗教や評判のいゝ學說と同じに、現在の社會制度を支持するほか、何の役目もしてゐないのです。』

『すべてが習慣なのだ。』こゝで、ルセアニア人が、考へ深さうに言つた。『だから、われわれは新しい習慣を創造しさへすればよいゝのだ。そして、それを、一般が不審がらずに受け入れるまで、闘つて押しつけることだ。』

『さうです。その通りです。だから人間は、ことに女は今、男の前に眞つ裸になる必要があるのです。衣服は、在來のすべての社會的罪惡の母でした。裸かですと、人は絶えず内省します。そして、對人的關係と、それを綜合した社會における個の進展の方向とを、はつきりと認識するでせう。そこに、近代的に健康なスポウツマンシツプも、理論上一つの瑕もない完全な自由も發見されるわけです。』

『さうすると。』

と私も、何か彼女の議論の助けになるやうなことを、早く言はなければならない義務を感じ出した。口を閉じた彼女が、默つて私を激勵した。それが私を、さつそく勇敢な獨斷家にしてしまつた。

『さうすると、あらゆる意味での裝身を景品の一つにして、こんなにまで個人間の自由競爭を亢進させて其の利を食んでゐる狡猾な資本主義も、都會人に關する限り、その魅力の半分を失くすることになりますね。』

『勿論です。』彼女の顎が襟の開きを打つた。『各方面から切り崩さなければならないほど、資本主義は、あまりにしつかり無智な人間の滿足を把握してゐます。ちよつと考へても解ることではないでせうか。近代の女が、まだ着物を着てゐるなんて、何といふ古い醜さでせう！ 彼女らの言語でいつても、それは實に嗤ふべき流行遲れなのです。しかし、何事もはじめの間は厄介なものです。一番いけないことは、男が、女の裸體に慣れてゐないことです。けれど、これは無理もありません。が、そのうちには、マデレイヌもボンド街も第五街も、通行の裸かの女で充滿する日が來ることでせう。それが、國際裸體婦人同盟の理想なのです。これは必ず實現するにきまつてゐますが、さうなつた日、女を見る男の眼も、自然變つて來なければなりません。一般の女を、女としてより先に、人間として眺めて、そして、一般の女のなかからさへ、性ばかりでない、もつと價値あるもの、もつと智識的なものを探さうとするでせう。性は詰りません。お互ひですもの。』

つまり彼女によれば、國際裸體婦人同盟は、世紀的に古い誤謬に毒され切つてゐる男達を、その可哀さうな狀態から救ひ出すための、親切な教育團體だと言ふのだ。私達は、彼女の說に、異常な恐怖と好奇と感謝を感じながらも、それを表面に現さないだけの努力を必要とした。すこしでも、「この瞬間の傾向」の背後に立つてゐると思はれたくない虛榮心が、私たちといふ二人の男を強く支配してゐる事實に、私は氣がついてゐた。したがつて、近く彼女が示さうとしてゐるであらう彼女自身の實

識に對しても、私たちは、それを待ちあぐんでゐることなどは氣振りにも見せなかつた。實際、若いルセアニア人は、そんなところは何哩も先に行つてると言つたやうに、しきりに欠伸をしてゐたし、私は、詰らなさうに、度び度び窓の外を覗かなければならなかつた。硝子が一面に靄を吹いて、何も見えはしなかつたけれど。

私は、汽車の兩腹を撫でて、非常な速力でうしろへ逃げて行く暗黑の音を聞いた。

それは、長靴の膝に當る地方の深夜だつた。そして、停車は沿線全體のものだつた。

彼女が言つてゐた。一九二八年の暮れだつた。そこは、伯林の雜沓だつた。電車を降りやうとしてゐた彼女は、無禮な群衆の不注意から、彼女の外套の下を瞥見させるやうな過失を結果してしまつた。さういふ訓練のない男達の眼が、彼女に一齊射擊された。警官が來た。彼女は既に、拘引と、退屈きわまる訊問とを覺悟してゐた。が、警官は、警察へ同行するかはりに、保護と稱して、暗い公園の奧へ彼女を伴れ込まうとしたといふのだ――。

『救はれない!』

ルセアニア人が叫んだ。すると彼女は、啓示を受けた人のやうに、急に起ち上つたのである。

『一たい誰が、あなたに着物を着ることを敎へましたか?』

そして、彼女は、今まで片手で押さへてゐたアストラカン外套の前を、手早く開けて見せた。下には直ぐに、薄桃色の曲線と、興味を持つた面とが、三十年近くを生きて來て、たるんでゐた。毛穴が、早春の地中海の夜氣を呼吸して、不備をすこし粟立たせてゐるやうに、私には見えた。

『ポケットがなくて、不便です。』彼女が打明けた。『靴下を吊る仕掛けのほか、私は何時もこれで、そして、誰よりも一番好い着物を着てゐるつもりです。』

私達は、あわてて、贊成した。彼女は、もう一度、アストラカンの前を合はせて、濡れた氣體か何ぞのやうに、ルセアニア人の寢臺の端に凹くなつた。それが彼女を、急に疲れて見せた。

『あなた方が、私のこの服裝を氣にするほど、反動的でなければいいがと思ひます。』

私は、第一、さうして外套さへ搔き合はせてゐれば、絕對に私達の眼に這入りつこないし、假りに外套を脫いだところで、私も、私の同宿者も、そんな小さなことからは解放されてゐるからと言つて、彼女を安心させた。さうすると彼女は、まだ自分の服裝のことを考へて、それを話題に上すやうな仕方は、ま

ゐで今までの普通の女と同じで、同盟員が目的してゐる若々しい反逆——實は、それは、單なる純理論の實行に過ぎないのだが——には、何らならないと反省して、淑やかに自分を責めた。それから彼女は、耳の上に挾んでゐた喫みかけの葉卷をくわへて、ゝゝゝ、うううと唸りながら、私達に燐寸を催促するために、それを擦る手眞似をした。

3

トラモンタナと呼ばれる狂暴なアルプス颪が、窓の外に汽車の轟音と競爭して、私達に、今夜は暗いばかりでなく、恐らくは、粉雪を含んで寒いのであらうことを、間斷なく報せてゐた。

しかし、私達のコンパアトメントは、感謝すべき存在で一ぱいだつた。そこには先づ、萬國寢臺會社が、旅行好きな公衆と同業者とに誇る、そして誇つてい丶、照明と煖房と裝飾とが、好意ある經營をもつて往き屆いてゐた。

模樣入りの人造革を張り詰めた室内の壁には、白樺材を眞似た塗料が被せてあつた。鋲が、掃除婦の忠實を證明して、光つてゐた。窓では、眼科醫の色盲檢査布のやうにいろいろに見える、その當只の綠いろの厚いカアテンが、私達の賞嘆を得やうとして、大けさに搖れてゐた。その下に、折曲げ式の、皮張りの板が立てられて、机の代用をしてゐた。それは、ルセアニア人の旅行用香水壜と、私のクック版大陸時間表とを支へてゐた。大陸時間表は、いくら私が注意して離して置いても、ともすると、汽車の動搖に乘じて革の上を滑つて行つて、しきりにルセアニア人の香水壜に接吻しては、戀をさゝやいてゐた。が、この事實に氣が付いたのは、私だけらしかつた。で、私は默つて、二つを放任することにした。佛蘭西語の文法から言へば、煤煙臭い大陸時間表は男性で、香水は、もちろん女性に相違なかつたから。

そのほか、私の正面には、ルセアニア人の孱弱(フラジル)な眼鼻立ちがあつた。彼は、頸へ青い血管を卷いて、蕁菜のやうな指を組んでゐた。そして、國際裸體婦人同盟員の耳へ、譯の解らない口笛を吹きつけてゐた。

私が、視線を移動すると、今度はその尖端に、ナストラカンの間から電燈へ微笑してゐる彼女の胸部が、ぶら下つた。光線は、何度反撥されても、露出してゐる彼女の部分を愛撫しやうと試みた。それは、醉つた好色紳士のやうに、しつこかつた。

たうとうしまひに、我慢し切れなくなつて、彼女は、外套を脫ぐと言ひ出した。そして、その辯解として、この部屋は熱帶性の怪物であると論斷した。實際、室内は、萬國寢臺會社の心

づくしのために、まるで赤道下の貨物船の後前のやうに皆かつたのだ。が、この、彼女に外套を脱がれることは、私達の一番恐れてゐたところだつた。そこで、私は、ルセアニア人と素早く無言の評議を交したのち、二人を代表して、彼女に申し入れたのである。

『私たちは、もう暫くの間、表面古風な女としてのあなたを眺めてゐたいと思ふのですが——。』

『何故でせう。』

アストラカンを肩まで辷らせたまゝ、彼女が反問した。

『こんなに理解のある方々とだけ、排他的に同席出來るといふことは、私にとつて珍しい名譽です。私は、自分の健全な自由さを極度に享樂出來る、かういふ好機會を逃がしたくありません。』

『御尤もです。しかし、ほんたうのことを言ふと、その、あなたの健全な自由に價値するほどの、教養も、準備も、自信も、まだ私達には出來てゐないのです。私は決して、傳統といふ幽靈に屈服してゐるのではありません。たゞ、あなた方の採用した新しい生活樣式と、その刺激には、すこしばかり慣れてゐないといふだけのことなのです。言へ換れば、あなたの「服裝(コスチユウム)」の前に、私達は、私たち自身が恐しいのです。お解りになりましたか。お解りになりましたら、外套を脫ぐことだけは見合せて下若し強ひて脫ぐと仰言るんでしたら、私と、この、名前は知ませんが、私の同室者は、きつと、私達の大嫌ひな德律の命令に服從して、寢臺車掌(コントロルウ)を呼んで、あなたを、あなたの車室まで送り届けなければならないことになるでせう。それは、實に不愉快な事業で、私達も、その必要に迫られたくはないのです。』

この駁論が作用して、一時彼女に、外套をぬぐことを中止させたらしかつた。

すると、そこへ、いま私が引用したばかりの寢臺車掌が、飮酒の形跡と一しよに、顔を出した。もうこの部屋が最後だから寢臺を作らせて與れと言ふのだ。

私達は、眼で合議した。そして、私が答へた。

『困つたことには、私はまだちつとも眠くないのだ。』

『それからこゝに一つの告白がある。』ルセアニア人が續いた。

『この頃、頑固な不眠症が取り憑いてゐて、私を離れないのです。』

『さう來なければうそです。』彼女が、アストラカンの中から叫んだ。『多分私たちは、羅馬へ着くまでのこの一晩を、自由に語り明かして使ふことでせう。共通の新しい思想に昂奮してゐる私達にとつて、寢て過ごすべくあまりに惜しい今夜ですから——。』

車掌は、勝手にと言ふやうに、帽子へ手をやつて、廊下へ退いた。車扉(ドア)が流れて、音とともに外部を遮斷した。

彼女は、私達に向き直つた。

『私は、多くの愉快な話材を、旅行用として、身體のあちこちに隱してゐるのです。』

かう言つて、彼女は立ち上つた。

『何といふ常識のない暑さ！ 私の判斷では、確かにこの汽車は機關の餘剩スチイムを車内へ向けて濫費してゐます。』

さうして、彼女は、私達が抗議するひまもなく、今まで彼女を、外見上ほかの女と同種に呈示(プレゼント)してゐた、その唯一のアストラカン外套の扮裝を、たうとう見事に拒絶してしまつたのである。

私たちは、恥ぢ入つた。ルセアニア人は、自分の神經と感覺を保護するために、出來るだけこの國際裸體婦人同盟員から遠ざかつて、窓ぎわの壁に密着した。彼は、溜息を吐いた。

無警告に、裸體の全身が上へ伸びた。そして、彼女の手が、壁のスヰッチに觸れた。それが、もう一つ、萬國寢臺會社の到れり盡せりの魔術的設備となつて現れた。車室の電燈が、綠色に一變したのだ。天井に、二つの電燈が一つづつ點くやうに仕掛けしてあつて、釦鈕を捻ると、白い光りが自動的に消えて綠いろのが生き出すのだつた。

かうして、室内を濃い綠色に落して置いて、彼女は、その裸體を元の位置に返した。

空氣は、青苔の細胞で充滿された。その密度を通して見る彼女の皮膚は、日光を知らない深海の海草のやうに、不氣味に濡れてゐた。

彼女は、脚を組んで、兩手を膝へ挾んだ。

『これでいゝでせう。綠いろの光線は、正しいことを考へるのに相應しいものです。』

私たちは、一時紛失した落付きを、すこしつゝ取り戻して、國際裸體婦人同盟員の示威運動が、あまり邪魔にならなくなり出した。

それでも、ルセアニア人は、先刻から、ZIPの手鞄を開けて取り出した嗅ぎ鹽(スメリング・ソルト)を、しきりに鼻へ當ててゐた。これは、氣付けのためである。彼は、それを、まだ續けてゐた。

汽車は、レイルを嚙んでは、うしろへ吐き出した。外部の重い闇黑のなかで、もうジエノアが近づいてゐるらしかつた。何處かに港のにほひがすると、私は思つた。しかし、それは、過度の熱氣に一層發散し出して、この狹いコンパアトメントの中にも爆破しやうとしてゐる、窒息的な彼女の體臭を、私がさう誤認したのかも知れなかつた。

暫らくは、快活な汽車の奏樂と、緑いろの半暗電燈だけの世界だつた。

彼女は、自分の乳首の檢査に熱中してゐた。が、直ぐ、彼女の顔が、私の方向へ起き上つた。

『あなたは、新聞記者(ジョナリスタ)ですね。』

驚きを隱すために、私は、答へる前に、自然らしく耳の背部を掻いた。

『若しさうだとしたら、あなたは何うしてそれを御存じですか。』

『簡單なことからです。ヴァンチミイユの旅行係のまへで、私は、あなたの直ぐうしろに立つてゐました。』

これは、じつに滿足な解答である。私は、さう言つて笑ひ消すことによつて、この話頭の轉化を計らうと望んだ。が、結果は、却つて彼女の追求を招いただけだつた。何故と言ふに、彼女は、急に、非常な祕密を打ち開ける人のやうに腰をずらして、出來るだけ淺く寢臺に掛け直したからだ。

そして、緑色の舌の先で、下唇を舐めた。

『あなたはジョナリスタです。その他、私には、あなたに關するいろいろなことが判ります。第一、あなたはこれから、羅馬へ行つて、シニョオル・ムツソリニに面會を申込まうとしてゐる――さうでせう？』

『何らの根據もない、恐るべき斷定だ！』

私は、ルセアニア人に、援助を求める眼をやつた。しかし、彼は、彼の嗅き鹽(スメリングソルト)といつしよに非常に多忙だつた。私は、單獨で彼女に對抗しなければならなかつた。

『一體誰が、そんなことを言ひました。』

『讀心術(テレパセイ)です。私は、ノルマンディの漁村で、不思議な力を有する一人のお婆さんから、讀心術の手解きを受けたことがあります。』

『おやおや！ あなたの裸體に對する僕の心持だけは、讀まれると困る瞬間がある。』

ルセアニア人が、彼の樂しい嗅壜の上から、聲を持つた。

『どうぞ茶化さないで下さい。ですから、私には、大概の人が、その希望も、その個人的難境も、一眼で判斷出來るのです。そこで、當面の問題へ歸るとして、第二にあなたは、ムツソリニに會つたら、政治哲學上の議論などを吹つかけることは極度に排斥して、飽くまでも、亞米利加産の訪問記者手法で往かうとしてゐるでせう。つまり、專門の智識なんかすこしも持ち合はせてゐない、無邪氣な顔をして、莫迦け切つた質問ばかり發します。さうして、それによつて、その返答を素材に、こつちで勝手に、

あなたの好む通りの「人間」を拵へ上げる。それは、この上なく賢明な遣り方です。公衆(パブリック)は、自分達の偶像との、かういふ電光石火的面談記(ライトニング・インタヴユウ)を胸を躍らせて愛讀すべく、ジャアナリズムの英雄達によつて、もう充分に教育され盡してゐますから、今あなたが、ムッソリニに對して、この方法を採用すれば、或る程度までの效果は期待してい丶筈です。」

私は、一々自分の意圖が、この國際裸體婦人同盟員の口から繰り出されるのに、新奇な驚異を經驗しながら、それなら、假りに私がムッソリニに會ふとしたら、私は、果して何んな質問を次ぎつぎにポケットから取り出して、ムッソリニの何處を狙つて投げつけべきであらうかと、彼女に訊いてみた。

彼女は、其處から名案を叩き出さうとでもするやうに、一つの握り拳で、暫らく手の平を打ち續けたのち、やがて、注意深い小鳥のやうに、首を曲げて、言ひ出したのだつた。

「1　一日に何時間眠りますか。或ひは、何時に寢て、何時に起きますか。

2　一番好きな食物は？

3　一番嫌ひな食物は？

4　一番好きな葡萄酒は？

5　一番好きなスポウツは？

6　一番好きな格言は？

7　一番好きな史上の人物は？

8　一番好きな煙草は？　そして、それを一日に何本お喫ひになりますか。

9　本はいま何をお讀みですか。

10　あなたの養生法は何ですか。

11　若し、日課的に散歩なさるなら、規則(ルウル)として犬をお伴れになりますか。

12　あなたは、何個國語を話しますか。

13　物心ついてからの、最初の記憶は何ですか。

14　何があなたの少年時代の野心でしたか。

15　あなたの一番幸福な瞬間は何時でしたか。今のほかに。

16　あなたは、新しい靴のために足が痛む時は、いつも何ういふ方法を講じますか。

17　忘れましたが、珈琲には砂糖をお入れになりますか。お入れになるやうでしたら、一つですか。二つですか。

18　私は、あなたから讀者への傳言(メセイジ)として、何を傳へたらい丶でせうか。

19　このあなたのブロマイドに署名して下さい。

20　いろいろ有難う御座いました。さよなら。

そして、必ず正面を向いたまゝ、戸口まで後ずさりに歩いて、退出するのです。しかし、これには、絨毯に躓いたり、出口のつもりで書棚の硝子戸に手をやつたりしないやうに、大變な注意を要します。が、これだけ引き出せば、何んな偶像でも、人間の片鱗は覗かせるだらうから、そこを摑めばいゝと、あなたは簡單にお考へのやうですね。ところが、ムッソリニの場合だけは、例外なのです。」

4

私は、これらの彼女の思ひつきは、すべて正當なもので、私も、ちやうど彼女と同じ内容の質問戰を計畫してゐるところかも知れないと、彼女に告げた。しかし、それは、明らかに彼女が、既定の事實として勝手に決めてゐる、私とムッソリニとの面會を前提にして、始めて必要の生じるジャアナリステック準備であつて、正直のところ、私は、私の大事なペンを賭して、シニョオル・ムッソリニに肉迫するか何うか、私自身決めてゐないのである。と言ふよりも、私の偽らない心持のなかでは、否定説のはうが有力だつたのだ。問題のベニト・ムッソリニ氏は、この何年かの間に、世界各國のあらゆる新聞雜誌記者と、外國での記念（スーベニア）といふ他愛もないがらくたを熱愛する旅行者の大訪問群によつて、一日に何十回の面接と談話とで、すつかり職業的に荒らされてしまつてゐるに相違ないことは、誰でもの常識内で許される想定だ。その彼を、すこし時節外れのこの頃になつて襲撃するほど私は、「去年の林檎」でありたくない氣が強かつた。私は、常に明日に生きる自負を持つてゐる。この意味で、いま話頭に上つてゐる「今日の人」は、それだけで、私の感興を惹くべく既にすこし古いのだ。それに、英雄崇拜といふ變態宗教は、私に來るところの最後のものである。だから、私は、半ば以上、この「黑襯衣を着た世紀の怪物」を、一瞬間でも邪魔することなしに、彼を、彼の大好きな首相、外相、飛行大臣、拓殖大臣等々々の七つの大臣椅子の上に、彼の讃美者に取り卷かせたまゝ、幸福にしておいてやることにしやうと決心してゐた。そのかはり私は、羅馬のホテルの酒場で、アルコホルが語らせる旅客の伊太利觀から、より多くの眞實を摑み出さうと耳を立てるであらう。そして、何處の都會ででもして來たやうに、私は、この鞄の底から放浪者の假裝一式を身につけて、幾晩も續けて臭い裏街の彷徨に徹夜するだらう。私は、ベニト・ムッソリニよりも、このはうを好むのだ。

かういふ言葉で、私は、彼女の裸體を包んだ。

多くの社交室をこなして來たらしい、噴水式の彼女の笑ひに

は、失望と賛成があつた。彼女は、下腹部の黒子を押して、その彈力を享樂しながら、言つた。

『あなたは素晴しい空想の所有者です。そして、この場合、その空想は適中してゐるかも知れません。私は、たゞ、巴里への旅行者が、必ず一度はエッフェルへ昇るやうに、羅馬へ來る人は、初代基督教徒の地下街(カタコンブ)と、カプツィニの人骨堂と、ベニト・ムッソリニだけは、誰でも、旅程の第一日に据えて參詣して行くものですから、あなたも、クヰリナアレ政廳への訪問者に相違ないと思つたまでのことです。あなたが、伊太利へ來てムッソリニを無視するのは、それだけでも、あなたの公衆にとつて大きなセンセイションでなければなりません。一人位ゐるムッソリニに會ひたくないといふ旅行者が出て來ることを、私は、ひそかに望んでゐたのです。』

『何故そのことが、そんなにあなたの關心を持ちますか。』

『私の性格が、すべて反對を好むからです。全く、ムッソリニは誰にでも會ひますし、誰でも、外國から來た人は、彼に會ひ度がるやうです。何うして、あんな、立憲政體の變形者が、こんなにまで反動主義者の世界的賞讃を博するやうになつたのでせう？　きつとそれは、彼が、社會主義への反逆者であるからに決まつてゐます。私には、ほかに正しいと思はれる答案が發見出來ないのです。野望なほど自信と精力の强いブルジョア政治家なら、何處の國も、彼以上の紳士的惡漢で一ぱいで、それぞれ持て餘してゐる筈ではありませんか。伊太利だつたからこそ、彼も、羊の群のなかの獅子として、その自己集權慾を滿足出來たのでせう。要するに、彼は、人氣を取つてゐないやうに見せかけて人氣を浚つてしまふ、顏の怖(こは)いお上手者に過ぎないのです。私達には何らの關係もない、古風な過失的存在です。』

『僕は、彼は東洋人ではないかと思ふ。』

ルセアニア人が、逡巡しながら、割り込んだ。彼女が、受け取つた。

『東洋人ではありますまい。しかし、彼の顏には、純粹の白人らしくない暗示が見られます。』

『と言ふと、何ういふ意味ですか。』

『彼の奉ずる力の讃美には、もつと太陽に近い土地の、砂漠と大植物との、黑色の哲學が潜んでゐるやうな氣がしはしませんか。』

『立派にあり得ることです。伊太利、西班牙、葡萄牙などの、南歐羅巴の羅典系文明が、近世に到つて一足遲れたのは、奴隸として輸入された黑人の血が、雜婚によつて吸收されたためだと言ふ說があるくらゐですから。血統の何處かに、飛び離れた異人

種を持つ家は、往々にして巨人を出すものです。」
「爪を見れば、判るさうではありませんか。」
「しかし、ムッソリニといふ名は、古い伊太利名です。「ムッソリニ」は普通名詞のモスリンから轉化したもので、つまり、彼の家は、職業世襲時代に、代々モスリンの織匠だつたのでせう。」
「さういふことは、私の國の日本にもあります。ちようど、ムツソリニと同じ語源に、織部といふのがある。」
「とにかく、先刻私が言つたやうに、彼は誰にでも會ひます。亞米利加から來た、下著の旅行販賣人(トラヴエリング・セイルスマン)にも、インクの流れるやうに能辯な萬年筆の行商人にも！　それでも、はじめのうちは、人に自分を見せることの政策的な必要と利益から、今よりももつと多量に、俳優的態度で引見することを好んだものです。近頃は、それ程でもありませんが、今は外交關係から、殊に亞米利加人に盛んに會ひつゝあるといふことです。」
「彼は、亞米利加へ移民を送ることを止して、そのかはり、佛蘭西との國境地方あたりへ國内殖民を始めてゐるさうではありませんか。そのために、佛蘭西が、すこし警戒し出したといふやうな噂も聞きましたが——。」
「ブルジョア國家といふ、現在の人類生活の單位は、その人類である私達の日常生活には、何らの交渉もない事件のために、しぢう忙がしがつてばかりゐるのが、その特性です。」
「法王廳とムッソリニは？」
「あなたは、何時の間にか、私を「訪問」してゐますね。結構です。彼は、三月の總選擧に、加徒力教徒の人氣が入要な筈ですから、悦んで、その前に、ヴァテカンと伊太利との握手の世話役に立つことでせう。」
「皇帝と彼とは？」
「この間傳へられた、あれは、全然嘘報でした。巴里で發行される、反ファッシズム新聞「黄色い嘴(ベツコ・ジャロ)」の投げた宣傳の一つに過ぎません。」
こゝで、彼女は、私達からの、これ以上の質問を拒否するために、ジャズのカスタネットのやうに細かく笑つて、兩腕を拋り上げた。
脂肪が壓搾されて、肋骨の裝飾が現れた。
「今まで私は、まるで案内人のやうに饒舌つて來ましたね。そして、私は、何といふ不注意な女でしたらう！　ムッソリニと大きな聲で言つて、しかも、總選擧だの、黄嘴紙(ベツコジャロ)だのと！　人が聞いたら、何うしませう！　それは、怖いものを知らない者のすることです。何故なら、密偵は、空氣のやうに何處にでも這入り込んでゐるからです。

これはソヴイエト・ラシアとムツソリニ政府だけが、ほんとに誇り得る制度なのです。この汽車も、さういふ密偵を滿載してゐることでせう。あなたが、その一人かも知れない！　この方が、さうかも知れない！　あの、先刻、寢臺を作りませうかと言つて來た、不隨意筋ばかりで出來てるやうな寢臺車掌(コントロルウ)！　あの男は、確かにクキリナアレの廻し者です！　私の讀心術(テレパセイ)は、決して私を欺きません。それから、あなた方は氣が付きましたかしら。この、一つ置いて前のコンパアトメントにゐる、商業から教會へ引退したばかりの肉屋のやうに、フロック・コウトの肩に赫ら顔を載せて、靴紐で鼻眼鏡を吊つてるお爺さんこそは、言ふまでもなく密偵に決まつてゐます。實際、市場、ホテル、料理店、街角、今の伊太利は、もとの乞食のかはりに、憲兵と賣子、觀光客、給仕人、花賣りなんかに化けた密偵とで、隙間もなく覆ひ盡されてゐるのです。そして、若し人民がムツソリニなどと言つてゐるのを聞かうものなら、好くても惡くても、忽ち彼らの眼が光ります。ですから、不必要な嫌疑を招きたくない一般人は、お互ひに注意し合つて、ムツソリニといふ名を口にしないやうにしてゐます。銘々それに代る暗合を發明して、用を達すのです。で私達もこの色彩的な話題を進めて行かうとするなら――。』

丁度この時、急に車内に、叫喚と喚號の無政府狀態が始まつた。車輪の下に鐵橋が横たはり出したのだ。

彼女は、眉を下げた。そして、その横暴な音響と闘つて、言語を、私達の聽神經まで屆けるために、直ちに、可笑しいほどの努力に移つた。

咽喉を紫にして、彼女は、あとを絶叫した。

『――綽名をつけませう！　三人の間で。ベニイ！ベニイと。私は何時も、自分の創造力を自慢してゐるのです。これなら、判りつこありません。聞こえますか。ベニイなら、大・丈・夫！　ベ・ニ・イ！』

5

彼女の大聲が終らないうちに、鐵橋が濟んでしまつたので、最後の「ベ・ニ・イ！」は、大音響の直ぐ後の靜寂に殘されて、喧嘩のやうに、突拍子もなくひゞいた。

私達は、眞夜中を忘却して、笑つた。

すると、彼女は、演說者のやうに腰骨へ兩手を置いて、突然、前後とすこしの關係もない奇怪な聲を、詩の一節のやうに發し出したのである。

『Meglio vivere un giorno da leone, che cento anni da pecora

——何誰か、新しい廿リレの銀貨をお持ちですか。お持ちでしたら、出して、讀んで御覧なさい。それは、ファシスト政府の鑄造したもので、裏に、ベニィの言葉と傳へられる、こんなモトウが彫つてあります——めりよ・びいぶる・うん・じよるの・だ・わおね・け・つえんと・あに・だ・ぺこら——羊として百年生きるより、獅子として一日生きたはうが增しだ。何といふ、腕力的な野心でせう！　何といふ旺盛な積極的人生觀！　しかし、すこし非醫科學的なやうですね。すくなくとも、かういふ英雄主義は、現代のものではありません。文句自身は、ベニィ個人の場合に限つて、大出來でせう。が、貨幣は、その性質として、誰の手にでも渡るものです。そして、この叱咤は、羊のやうに弱い人にとつては、すこしばかり強過ぎるのです。つまり、あまり露骨にファシスト的だといふので、それは、一般に評判の好くない新貨ですが、あなた方は、何うお考へですか。』

『私は、勇敢で面白いと思ひます。』

『それは、あなたが青年だからです。如何ですか。まだ、ベニィに會つてみたくはなりませんか。ベニィに面會するためには絹高帽(シルク・ハット)と、モウニング・コウトと、閣下(ユア・エキセレンシイ)といふ敬語と、些少の禮議と、多分の微笑をさへ用意して行けばいゝのです。しかし、あなたは、何時か日本の代議士がしたやうに、特にそのため、前の晩にホテルの寢臺で讀んで來た、政治哲學めいた書籍の智識から、生硬な二三の問題を出して、彼を苦笑させたりしてはなりません。ベニィは、彼の有名な額部を光らせるばかりで、決して答へやうとはしないでせう。さういふ時、彼は、政治哲學の教授のやうに博識に見えるのです。そして、彼も、そのことをよく知つてゐるのです。しかし、あなたも、絹高帽の扱ひにだけは、相當慣れるための下稽古が要ることでせう。あの帽子は、置き場所に困る帽子です。だから、いよいよベニィの部屋へ通されて、あの眼と口が、あなたの前に立つた時、あなたは、先づ、あなたの絹高帽を何處へ安置したものかと、魔誤々々するかも知れないのです。そして、狼狽の極、祕書官に手渡し、やうとしたり、或る亞米利加人は、白手袋を投げ込んだまゝ、それをベニィに突き出して、持たせやうとさへしました。が、これらは、すべて誤りです。あなたは、今あなたの一擧一動の上に、あの、世界的に知られた、ベニィの白い視線があることを、忘れてはならないのです。そして、絹高帽の置き場處は所有者の頭のうへか、椅子に掛けた姿勢ならば、その膝の上と決まつてゐるものです。で、絹高帽を膝に立てると直ぐ、あなたは面會を開始するのですが、この場合、あなたは、先刻私が申し上げたやうな質問集で、すこしでも、ベニィの人間味を探

り出さうなどと望んではなりません。彼は、あらゆる形式の面接に慣れ切つてゐて、何んなことがあつても、自分の影をさへ曾見させるやうなへまはしないでせう。從つて、あなたに殘された活動の餘地は、室内を見廻して彼の事務家振りを推測することであり、灰皿の吸殼から彼の愛用する煙草を知ることであり、その一本を訪問記念としてこつそり持つて來るために、手を伸ばす機會を探すことであり、讀んでゐる本を突き留めるには、彼を押し退けて、あなた自身、卓子の上下から引出しを、根氣よく捜索しなければなりますまい。何と、華やかな面會ではありませんか。』

『非常に面白さうなお話しですが、私は、殘念ながら、矢張り、彼を默殺することに決めてゐます。』

『そして、あなたは、佛蘭西語か英語か伊太利語で、彼と、その二三日の天氣の批評をして、モウニングの尻尾を皺だらけにして歸るのです。寫眞は、幾らでも呉れます。署名（サイン）もします。最初に較べると、この頃は、そのはうが重々しいといふので、すこし出し澁りますが、それでも、ベニィの机は、訪問者に持たして出す自分の寫眞で一ぱいで、その上、六人の寫眞師が、後からあとからと、その複製に日夜追はれ續けてゐます。署名用の萬年筆にインクを滿たすためには、何時も、二人の祕書官が掛かり通しの有様です。そして、歸りかけに、あなたは、各國人を包んだモウニング・コウトの列が手に手に、官房主事の發行した、大型封筒の面會許可證を、切符のやうに握つて、クキリナアレ政廳の長廊下に、忍耐深く待つてゐるのを見かけるでせう。』

『いよいよ私は、ベニィに面會を申込むまいといふ私の決心に、感謝しなければならない。しかし、あなたは、何うしてさう彼のことを知つてゐるのです。』

『知る必要があるのです。彼は、私の敵ですから。』

ルセアニア人は、彼女が裸體であることを忘れて、肘を突いた。

『あなたは、つい今し方、あんなに自分の不注意を悔いて、密偵を警戒すると誓つたではありませんか。私達は、單純な旅行者なのです。あなたの輕卒によつて、馬鹿々々しい關着への同伴になりたくはないのです。もうすこし、氣を付けて戴けないでせうか。』

『うつかり昂奮してゐたものですから——。』彼女は、意外に簡單に收縮した風だつた。國際裸體婦人同盟員が、はじめて自分の裸體を意識したやうに、緑色の肉體が、眼に見えて、動揺した。それには、汽車の震動ばかりと思へない、内的なものがあ

つた。

が、彼女の精神は、印度護謨で出來てゐるに相違なかつた。それ程の强靱性を實證する言行に、次ぎの瞬間の彼女は、大飛躍してゐたのだ。

ルセアニア人に對する彼女の宣戰は、もう一度、例の、彼女のお得意の詩句の諳誦によつて先驅された。

「non dir di me, setu di me none sai. Prima pensa perte eppoi drai. 私を知らずに、私のことを言ふな。第一にお前自身、それから、いふなら言ふことだ——羅馬は、羅馬時代から、さまざまの名文句で混んでゐます。」

「あなたは、何か大變な感違ひをしてゐるらしい。」

「さうでせうか。こゝはピサですね。」

ピサの斜塔が、星を撫でて、眞夜中の地上に接吻しやうと骨を折つてゐた。

一時に濃度を增した闇黑が、汽車を押し潰さうと、窓の外に犇めいた。

彼女は、そのなかに隱された小さな聲を、懸命に聞き取らうとしてゐる樣子だつた。

やがて、何か重大事に想到したやうに、彼女の眼が、細くなつた。

「しーーいつ！」

と言ふのである。

彼女は、人指指を立てゝ、口唇へ當てた。その口びるは、指と十字を作つて、橫に固かつた。

そして、彼女は、敷いてゐたアストラカンから、除々に起立した、と同時に、手が伸びて、車扉(ドア)の橫にスヰッチを探した。

小さな音を合圖に、車室が、今までの綠色の薄明から、完全な暗黑へ轉落した。

私は、私の神經の騷ぐ音を聞いた。暗いなかに、ほの白い彼女の裸體が、窓の方へ走るのを見た。其處には、若いルセアニアの商人が、彼の嗅ぎ鹽(スメリングソルト)とともに、平和に暮してゐるのである。

私は、同室者として、彼の身の上を案じた。果して、國際裸體婦人同盟員は、ルセニアア人と、出來るだけ同じ空間を滿たすべく決心したらしい。彼女は、その「服裝」で、若いルセアニア人を、私の前から隱してしまつた。

ルセアニア人は、死んだルセアニア人のやうに、彼女の體重に耐へて、聲も立てなければ、身動き一つしないで、牧師のやうにきちんと腰かけてゐるのだ。それが、私を笑はせた。

「何が、可笑しいのです。」

彼女の聲だつた。そして、それは、直ぐ、この自分の突飛な

行動の事後説明に取り掛つた。

「これに、すこしも性の意味がないとは、私は言ひません。幾分あるやうだからです。しかし、本能の處理は、戀愛とは全然別なものです。戀愛は、本能の享樂であり、處理は、何處まで往つても事務だからです。ところが、近代に到つて、この本能の處理に、色んな思想や文學や都會生活やの扮飾が加へられて、それは、一見戀愛と同じ外觀を備へるやうになりました。この二つは、事實非常に紛らはしいのです。そのために、現代人は、兩方を一緒にしたり、本能の處理を戀愛と思ひ込んだりしてゐます。つまり、本能の處理が、何時の間にか戀愛に接近するほど、それは、多くの享樂的な外面を持ち出したのです。けれど、二者の運命的な相違は、戀愛の享樂性は、對者を條件とする內容にあるのに反し、本能の處理におけるそれは、要するに附帶物の作り出す一時的錯覺に過ぎないといふことです。では、一體何が、本能の處理に、これだけの夾雜物を投げ込んで、近代人を惑はしてゐるかと言ふと、こゝで、資本主義の消費經濟が、もう一度責められなければなりません。資本主義は、その蓄積した餘剩價値をこの方向へ集中して、かうして人の眼を眩惑し、それによつて、すこしでも長く自分への人心を繋ぎ留めて置かうと計つてゐるのです。おきまりの補助的方法が また一つ、見事に成功したわけです。が、その手を直ちに逆に使つて、私達は、この資本主義の奸手段に對抗することが出來ます。それは、その煽動に乘じて、資本主義が一番大事な味方にしてゐる道德(マラリティ)を衝くことです。言ひ換へれば、與へられたあらゆる機會に、本能の處理を享樂するのです。實際、私達は、何んなにそれを享樂しても構ひません。たゞ、戀愛の享樂が、戀人の間にだけ許されるのと同じやうに、本能の處理を享樂するにも、そこには、一つの社會的な特權團體があります。それは、地球を押してゐる人達です。時代の進展に意識的に關與して、他のことは何うでもいゝ、つまり、私たち最左翼の智識群です。が、誤解なさらないで下さい。私は、年中人に誤解され通してゐますが、今の私は、かうして、僅かに、本能の處理の惡戯を享樂してゐるだけのことなのです。ですから、この方が何う思はふと私の知つたことではありませんし、其處に、もう一人の紳士がゐらつしやればこそ、私も自分を信用して、安心してこの方の膝に腰かけてゐられる譯です。が、實は問題はそんな末梢的なことではないのです。」

「何か、私達の眼に見えない、突發事でもあつたのでせうか。それが、あなたに電燈を消さして、席を變へさせたと言つたやうな。」

「さうです。私は、大變なことを思ひ出したのです。先づ、あなたは、いま、國外に追放されてゐる反ファシストの連中が、續々伊太利に潛入してゐる事實を、思はなければなりません。彼らは、三月に行はれる總選擧を攪亂して、それを機會に、ベニイ一派に痛手を負はさうと勇み立つてゐるのです。そのために、この數週間、國境の警戒は、あの通り殊に嚴重を極めてゐるのですが、こゝに、驚くべき一事は、この列車で、あの、ベニイが一番怖がつてゐる、巴里の「黄嘴紙（ベッコ・ジャロ）」の論説部員の一人が、宣傳の目的で、決死の羅馬入りをしやうとしてゐることです。それは、其筋には知れてゐます。だから、この汽車の乘客の半ばは、政府の密偵であると、私は斷定するのです。しかし、その勇敢な「黄色い嘴」は、名前も顔も、ちやんと解つてゐると言ひますから、途中で暗殺されずに、ともかく無事に羅馬へ着くことが出來れば、それだけでも、彼または彼女にとつて、それは、非常な成功でせう。が、いま私は、その人間の上に、危險が迫つてゐるのを嗅ぎます。かう申し上げれば、何故私が、突然コンパアトメントを暗くして、この紳士の膝に保護を求めたかが、お解りでせう。」

「まさか、あなたが、國際裸體婦人同盟員である一方、その、冒險的な「黄色い嘴（ベッコ・ジャロ）」の論説部員なのだと、仰言るのではないでせうね。」

私の聲は、何度か顫いた。

ルセアニア人は、啞のトラピスト僧のやうに默り込んだきりなので、私一人が、この、彼女の表明に對して、期待されただけの驚愕を、反應させなければならない立場にあつたのだ。

彼女の裸體が、不安さうに凝結した。

彼女は、私が、痛いと感じた程の語調で、突つ返した。

「何故、さうであつてはいけないのでせう！――しかし、もう間もなく夜が明けます。私は、もう一度、朝の日光を見ることが出來さうです。さうすると、羅馬！　羅馬！　何處の都會よりも輝しい朝を持つ羅馬！　私は、一つは、それが忘れられなくて、かうして歸つて來たのです。おや！　この方は、眠つてゐますね。私の體温が、彼を眠りに誘つたのです。何といふ、一志（シリング）の切れかゝつた瓦斯ストウブのやうな、可愛い鼾！　鼻を突いてやりませうか。私は、この人の小さな足を、その茶色絹の靴下と一緒に、鹽と胡椒だけで食べてしまひたい。」

「彼のために、その衝動を押さへて下さい。彼は、疲れてゐるのです。」

「ベニイも、この頃では、すこし疲れて來ました。可哀さうなベニイ！　神經衰弱だといふ評判もあります。」

「彼は、家族と別れて住んでゐるのですね。」

『さうです。家族は、ロマニア州のフリウリ村に居ます。ベニイの羅馬の邸は、ノメンタナ街――Via Nomentana――の六六・六八・七〇番で、アルサンドロ街から次ぎの角まで、一區劃(ブロック)を占めてゐる、宏大なものです。ミケランジエロの建築と言はれてゐる法王門(ポルタ・ピア)から、兩側に、閑靜なアパアトメントと、乾麵類や藥を賣る近處相手の小商店とを持つ、可成り廣い並木街が、眞直ぐに迯げてゐます。そこの、門(ポルタ)に一番近く立つてゐるアカシアの街路樹に、何時か、ベニイを暗殺し損ねた同志の彈丸の痕が、今でもいゝいはつきり木肌に殘つてゐる筈です。その前から、眠さうな電車に乘ります。すると、一伊仙分(チエンテズモ)だけ行つたところにあなたは、聖ジユセッペの寺院の圓屋根を見るでせう。さうしたら、電車に別れて、あの邏特有の、今ならば霜解けの非道い、鋪裝(ペイヴ)してない歩道傍の土を踏まなければなりません。ベニイの家は、その近くから始まつてゐます。それは、白い、高い石塀の上から、巨大な赤松の林立が、周圍に、森のやうな影を落してゐることによつて、直ぐに判別されます。正門は、角軒燈と石材の威嚇的效果です。お上品な砂利道と芝生の向うは、神祕そのもののやうな建物の散在です。そして、勿論、全體の空氣には、まるで王宮のやうに、そのあちこちに、大きく「禁止」と書かれてあります。邸内には、ヨニック式の禮拜堂があります。圓形野外劇場(アンフイセアタア)もあります。埃及角塔(オベリスク)もあります。この邸宅は、トロニア公爵の屋敷として、羅馬名所の一つなのです。』

『それが、何うして、ベニイの住宅になつたのですか。勿論、例の、國際的な猶太人の覆面資本團からでも貰つた金で、買つたのでせうね。』

『ところが、さうではないのです。今のトロニア公爵(プリンチペ)は、この前の、駐英大使でしたが、その母親といふ人が、非常なベニイ・ファンで、或る猛烈な感激の瞬間に、ノメンタナ街の家を、土地ぐるみそつくりベニイに贈呈したのでした。で、ベニイは、毎日こゝからクヰイナアレ廳へ出かけてゐるのですが、その出入は、數度の奇襲に懲りて、嚴戒を極めてゐます。毎日、自動車と、往復の通路を取り換へて、眼に付かないやうに努めてゐます。そして、夜も晝も、塀の外には、私服刑事の一隊が、普通市民の散歩者に混ざつて、何氣なさそうに逍遙してゐます。が、ベニイ自身は何時も、運命を自分に有利なやうにだけ、假定してゐて、しかも、それを信ずる心が強いのです。ですから、何處へでも公衆の場處へ出掛けて行きますし、萬一のことがあつてはと、みんなが停めるのも肯かずに、旅行は、すべて飛行機と決めてゐます。公用は勿論、土曜から日曜にかけて、ちよつ

リウリ村へ家族に會ひに行くにも、ベニイは、飛行大臣として、飛んでいくのです。しかし、彼は、運の好い男で、輕い事故さへも、まだ經驗したといふことを聞きません。暗殺も、今までのところでは、すべて失敗に終りました。一度は、胸の勳章が彼を救つたほどの、狹い逃亡（ナロウ・エスケイプ）でしたけれど。』

『情婦があると言ふではありませんか。』

『事實です。マリア・セラフアチといつて、ちよつと原稿なんかも書く女です。彼女の著したベニイの傳記もあります。が、さあ同棲してゐるんですか何うですか――。』

彼女は、先刻から、ルセアニア人から接吻を盜み續けてゐた。そして、この時も一つ、濡れた音響と共に、肥つたのを奪（と）つた。

しかし、ルセアニア人は、眠つてゐるのではなかつた。彼は、この、不可思議な受難の夜を、羅馬まで甘受して往く覺悟が、もうすつかり出來たとみえて、彼女の肩の上に据わつてゐる彼の眼が、私を凝視してゐた。そして、彼は、出來るだけ二つの身體を搖れさせないやうに、それを自分の責任として、一人で汽車の震動と爭つてゐた。それらのことが、闇黑にも係らず、私には、よく見えるのだつた。

曉と羅馬とが、線路の末にあつた。

それを眼當てに、汽車は、一層勇躍した。加速度の廻轉で灼熱したピストンが、足の下に、熱く感じられた。

『時間通りに、羅馬へ這入りさうですね。』

彼女が、觀察した。

『伊太利の汽車が、時間を守るなんて、私達は、これだけでも、ベニイの功績を認めべきではないでせうか。それから、第二に名物の乞食が姿を潜めたこと。』

『みんな、役人や兵隊になつたのです。そのうちで、餘程哲學的な連中だけが、ヴエニスへ集まつて、停車場の前で日光浴をしてゐます。客がゴンドラへ乘ると、その舟べりを押さへて、銅貨（チエンテズモ）一枚を受け取らないうちは、何んなことがあつても、ゴンドラを岸から離さないのが、彼らの職業です。彼らはまた、その時貰ふ銅貨の多寡によつて、ゴンドラの上の外國人を、自由に呪つたり祝福したりすることも出來ます。彼らは、その一仙二仙で、直ぐに紙卷煙草を買ふのです。煙草屋では、特に彼らのために、煙草の袋を切つて、一本でも、二本でも、分けて賣つてゐます。』

彼女の好物の一つに、格言があるらしいことが、間もなく、私に解つた。

『あなたは、伊太利でよく使はれる、かういふ文句を御存じで

すか。「銀行が湖水を潰すか、湖水が銀行を潰すか」と言ふのです。ベニィが、この出典に、幾らかの關係を持つてゐます。いまベニィのゐる、トロニア屋敷(パラツト)の先の所有主、トロニア公爵(プリンチペ)の先祖の出世物語なのです。一八〇〇年代の始めでした。その頃まで、まだ、たゞの平民の富豪に過ぎなかつたトロニア家は、羅馬で銀行を營んでゐました。すると、當時、中部伊太利のフシィノ地方に、ラルゴ湖といふ湖水があつたのですが、この湖を、時のトロニア氏が、大金を投げて埋めにかゝりました。多分、その湖の大きさだけの領土を持たうといふ、中世紀らしい發案だつたのでせうが、それは、まるで、金銀で湖水を埋立てしやうとするやうなものです。夥しい人夫と土砂と支出を負擔して、トロニア銀行は、今にも潰れさうになりました。そこで、華やかだつた其の時代の人々は、手を拍つて喜びました。銀行が湖水を潰すか、湖水が銀行を潰すか。つまり、この文句の意味と用途は、危なつかしいことだが、何方が勝つか、傍觀してゐて、面白い見物だといふのです。ところが、この場合は、トロニアが勝ちました。たうとう銀行が、一八四二年から七〇年まで掛つて、その湖を埋めたのです。そして、埋められた湖水の跡は、今では、伊太利で最も豐沃な農園地の一つとして、知られてゐますし、埋めたトロニア家には、その時から、この功によつて、公爵の位が與へられました。トロニア公爵一世は、ラルゴ湖征服のお祝ひを、竣工の年の九月廿日に、いまのベニィの家で催しました。それは、實に盛大極まるものでした。歐羅巴の近世史上に、第一の宴會と傳へられてゐます。この祭典は、晝夜三日續きました。羅馬市とその近郊が、全精神を擧げて參加しました。最初の日には、法王と、バヴァリアからは、王樣の一行が乘り込みました。二日目には、羅馬の市民が、全部招待されました。父母の記念にと言つて、新公爵は、オツソラから埃及角塔(オベリスク)を擔ぎ込ませました。公爵家の紋章で美々しく裝はれた三十三頭の牛が、羅馬の街上に、その尨大な石材を牽いて、ノメンタナ街の邸へ練り込みました。その家が今ベニィの私生活と、彼の夢を知つてゐるのです。同じことが言へないでせうか。人は、自分の利器に一番注意すべきです。ベニィがファツシズムを潰すか、ファツシズムがベニィを潰すか――。」

明方は、睡眠の滿潮時だ。

彼女の饒舌が、受動的に働いて、何時しか、私の意識をぼやかしたに相違ない。

私は、二人をその儘にして、眠つてしまつたのだ。それが、何時間だつたか、私は知らない。咽喉が乾いて、身を起したとき、私は、停車してゐる車室のカアテンに日光の波紋を見た。

そして、外には、羅馬停車場(スタツイオネ)の喧噪な構内が、靜止してゐた。

が、コンパアトメントは、私だけのものだつた。そこには、國際裸體婦人同盟員と彼女のアストラカン外套も、若いルセアニアの商人と彼の嗅ぎ鹽(スメリング・ソルト)も、見られなかつた。あるのは只、ルセアニア人が殘して行つた、微かな龍涎香(アンバア)の薫りと、一晩中密閉されてゐた彼女の體臭とが混合して、喫煙室のそれのやうに、重く搖らいでゐる空氣だけだつた。

二人は、到着と同時に汽車から走り出て、急いで、ホテルへ向つたのであらう。眞面目顏のホテルの番頭(クラアク)は、二人を夫妻として登錄して、一室の鍵を渡すだらう。微笑が、寢不足の私を、輕くした。

私は、酸素を要求して、窓を開けた。

金色の風が、歡聲を上げて、突入した。何と、爽やかな羅馬の朝！

私は、こゝで、歷史の眞ん中へ降り立つのだ。

直ぐにナポリ行きへ乘換へる人や、朝發(た)ちの旅客の爲にプラツトフォウムには、驛賣りの呼び聲が縱橫に飛び交してゐた。

あつか・みねらあれ！

あらつち・まんだりいね！

しがれつて！

ちよこらつて！

6

ホテルの私の部屋で、電話の鈴が私を驚かせたのは、その日の午後だつた。

電話は、女の聲だつたので、私は、紳士として、部屋着の襟を合はせた。

接續線の向端に、アストラカンの外套がちらついてゐるやうな氣がした。何うして私が、それを感知したのか、また、如何にして彼女が、私のホテルを突き止めたのか、これらは、完全に私の理解の外部にある。とにかく、それは、國際裸體婦人同盟の熱心な會員でもあり、同時にまた、反ファシスト派の巴里機關紙「黃色い嘴(ベツコ・ジヤロ)」の論說部員として、今朝死を賭して、この「久遠の街」へ潛り込んだのだと信ずるに足る、あの、彼女からの、あわたゞしい電話だつた。

受話機から、昨夜の聲がこぼれて、私の足許へ散らばつた。

「私は、尾行されてゐます。いま、何よりも男の方の守護が必要なのです。」

そして、私に直ぐに、國民大街(ヴイア・ナツオナレ)の端れの、第二回萬國自動車(インテルナツイオナレ・)展覽會會場(アウトモビイレ・サロネ)へ來るやうに、と言ふのだ。

私は、若いルセアニア人のことなぞは、すつかり忘れてゐた。そして、敵地にゐる彼女から、かうして私に、こんな命令的な呼出しが來るのは、何だか當然至極のことのやうに思へた。私はそれを早晩來べきものとして豫期してゐたやうな氣がした。

間もなく、羅馬の雜沓が私のタキシの左右に後退してゐた。到るところに、噴水と憲兵が立つてゐた。彫刻と、大石柱の並立とがあつた。史的色調と、民族の新しい嚴則(デサィプリン)とが、何處の露路からも、二階の窓からも、晴々しく覗いてゐた。

料理店では、食慾がマカロニを吸ひ込んでゐた。それが、私を見て、手を振つた。

英吉利の小都會からの觀光團が、案内者の雄辯に引率されて、國民經濟省の建物を見上げてゐた。それを、子供と寫眞帖(アルバム)賣りが、遠卷きにしてゐた。

軍樂隊が來た。

黑裝束に、腰の革帶に短刀を一本挾んだきりの、フユウメ決死隊の一人が、軍旗といつしよに、先頭だつた。それに續いて、青灰色の軍服の行列が、重い靴で、鋪道を鳴らした。

私のタキシは、除行した。運轉手は、右腕を眞直ぐに伸ばして、前方へ、斜め上に突き出す禮をした。これは、昔羅馬武士が、出陣に際して、王と神の前に戰勝を誓つた儀禮の型であり、そして、今は、ムッソリニと彼の仲間が、公式に流行らせてゐる「羅馬挨拶」なのだ。

私の運轉手は、ファシストだつた。が、今この街上に、何とファシストの多いことよ！　老人の手、青年の手、勞働者の手、警官の手、通行人の手。青物屋は、野菜の車を停めて手を上げ、その野菜の山の上から、青物屋の伜が手を上げ、軒並みの商店からは、主人と店員が走り出て手を上げ、そして、電車の窓からも、何本となく手が上がつてゐる。軍旗は、この、手の森林を潜つて、消えた。

これが、現在の伊太利の常用禮式なのだ。官廳ででも倶樂部ででも、劇場ででもホテルででも、家庭ででも、かうして手を上げ合つてゐる人々を、見るであらう。

正規には、これに、ファシスト式の萬歳(エイル)の高唱が加はるのだ。

Eja! Eja! Alala

えや！　えや！　あらら！

えや！　えや！　あらら！

第二回萬國自動車展覽會場の入口に、何時もの宣傳用の「服裝」をアストラカン外套で隱した、國際裸體婦人同盟會員が、私を期待してゐた。

彼女は、先刻の電話の聲で示した可成りの恐怖と狼狽を、何

處かに置き忘れて來てゐた。

私は、第一に、誰が彼女を尾行してゐるのかと、訊いてみた。が、彼女は、もうその問題を、他人事のやうに考へてゐるのである。

「尾行者は、美少年だつたり、落葉だつたりします。何者だか、私の讀心術が、しきりに私に私の尾行されてゐることを警告じてゐます。」

彼女は、この讀心術(テレパセイ)といふ言葉を、何にでも代用して使ふことが、好きらしかつた。私は、ルセアニア人のことは、思ひ出さなかつたし、また、何うして彼女が、私のホテルを知つたかといふ疑點も、別に質さうとはしなかつた。彼女が、それをも直ぐに、彼女の「讀心術」の能力で片付けるに相違ないことを、私は承知し過ぎてゐたから。

私達は、會場を一順して、戸外へ出た。

その間、彼女の眼は、陳列してある各會社の、一九二九年の新春型を、機械的に送迎してゐただけだつた。が、彼女の口は、絶えず言語の洪水を張らして、私を溺死させやうとした。私は、一體自分は、何のために騎士的感激をもつて驅けつけて來たのだらうと、そのことばかり考へてゐた。

彼女は、サンパウロ發行の反フアシスト新聞「防禦(ラ・ジフエサ)」について、多くを語つた。そして、その主筆である、元の社會黨代議士フランチエスコ・フロラに關して、より多くの呼吸を費やした。殊に、亡命者としてのフロラが、上陸禁止令を無視して、警戒線を突破した當時のことや、その後の彼を覆つた官憲の壓迫には、彼女は、特別に、詳細な智識を所有してゐる樣子だつたしかし、私は、彼女の身邊に、今までなかつた弱々しいものを感じて、それを、汽車の疲れであらうと判斷した。そして、宿所へ歸つて休むことを、彼女に奬めてみた。

すると、彼女は、この私の說を逆證すべく、俄かに努力した。自分は、この通り精力に滿ちてゐると言ひたい爲に、彼女は歩きながら、針金細工の人形のやうに手足を張つて笑ひ出した。

一七六〇年開店(フオンダト)のキヤフエ・グレコが、金文字入りの扉(ドア)で、私達に敬禮した。「車(ワゴン)」と呼ばれてゐる、奥まつた細長い部屋に、その家の財産の、古い、汚ない一個の卓子があつた。卓子は、マアク・トウエイン、ビヨルンソン、ゴウゴル、ゲエテ、グノウ、ビゼエと言つた詩人(ポエタ)達の、手垢と、樂書と、小刀(ナイフ)の痕とで、有名に裝飾されてあつた。その上で、彼女は常食と稱して、牛乳に蜂蜜を落して飲み、私は、また、彼女の雜談の續きを食べた。

配達に來た郵便脚夫を見て、彼女は、私に私語した。

「あの男が、私を尾行してゐるのです。」と。

彼女の音盤(レコード)は、まだまだ切れなかつた。

『選擧の準備と、その妨害の祕密戰は、いよいよ白熱化しつゝあります。あなたは、この三月の總選擧が、ファシスト政府の新しい選擧法によつて行はれる、全く特殊のものであることを、知らなければなりません。先づ、一千の地方勞働組合から、四百人の準候補者を推薦させて、それを、ファシスト最高幹部會の評議にかけます。ファシスト最高幹部は、五十二人から出來てゐます。羅馬進軍當時の四人の將軍、ファシスト革命直後三年間の大臣と次官、一九二二年以後のファシスト事務總長、國民軍指揮官、學士院長、國防特別裁判所長、總組合長(シンダカト)などです。そこで、この最高幹部會で、取捨選擇して、すつかり定員數の候補者を決めてしまつて、その全體を、最後に、一千萬人の投票に問ふのです。人々は、午前七時から午後七時までの間に出かけて行つて、投票します。投票紙には、然・否(シーノー)といふ二つの明白な字が、印刷してあります。その何方かを消して、投票箱へ入れゝばいゝのです。つまり個々の候補者に投票するのではなくて、既にファシスト最高幹部會で決定した、その全部の顏觸れに異存があるかないかを、投票するのです。何といふ、見事な選擧でせう！　何といふ、洒れた冗談でせう！　何といふ、手數の省略でせう！　あなたは、さうはお考へになりませんか。』

それきり、私は、彼女に會はないのである。

7

羅馬のホテルから廻送して來た、彼女の手紙を、私は、ナポリで見た。

『私は、あなたに報告しなければならない、一つの誤謬を發見しました。それは、何時か申し上げた、私の尾行者に關してです。彼は、確かに、私を尾行してゐました。けれど、彼の尾行の意思は、決して私が思つたやうな、政爭的な、物騷なものではなかつたのです。あなたは、羅馬で、スカラ・サンタといふ寺院の内部を御覽になつたことがあるでせう。あそこの正面の大理石階段は、十字軍の末期に、エルサレムから持つて來たもので、基督が、ピラトの審判を受ける時に上つた階段であると傳へられてゐます。ですから、參詣の女は、あの階段だけは、必ず膝まづいて昇らなければならないことになつてゐるのですが、あの、急な廿八段を膝で上るのですから、洋袴(スカアト)の短い、若い女などは、隨分餘計な苦心をしなければなりません。

　以前はよく、男達が、それを下から見上げてゐて、これといふ狙ひを付けたものです。そして、お寺から、その女を尾行して行つて、住處を突き留めます。それからは、毎日女の家を見

張つてゐて、女が外出する度びに、尾行を續けるのです。そして、何時からとなく、そのうちに交際が始まつて、やがて、目的を遂するかも知れない日を、男は、根氣よく待つのです。この習慣は、何もスカラ・サンタの寺院にだけ限られてゐるわけではありません。これは、一つの例で、伊太利では、何處でもやつてゐることです。結婚も、野合も、この經路から生れるものが、可成りに多いやうです。私は、この「服裝」でスカラ・サンタへお詣りしたわけではありませんが、私の尾行者は、何處かで私を見初めて、それから、この尾行を始めたものに相違ありません。彼は、私を戀してゐると言ふのです。戀ださうです！何といふ馬鹿な男でせう！　あなたは、さうはお考へりなりませんか。」

シシリイ島、ソレント、カプリ島、フロウレンス、ミランと、私は、この「長靴」に、豫定以上の日數を持つてしまつた。

そして、ヴエニスで、私は、春の跫音を歡迎した。

ヴエニスの春は、第一に、溫みかけたグラン・キヤナルの水が、親切に知らせて吳れた。

私は、長靴の伊太利から、明るい春の煙りが、カラカラ浴場跡の雜草のやうに、生々と沸き上るのを見た。

ゴンドラを繋ぐ、理髪屋の標柱のやうな彩色棒の影が、水の上で、伸びたり縮んだり、千切れたり附着したりして、一日中遊んでゐた。

裏町では、毎日、窓から窓へ、夥しい洗濯物の陳列會が開催された。

泥柳が、岸に堵列して、晴天を祝つてゐた。

私は、溜息の橋（ブリッヂ・オヴ・サイ）の下に、ゴンドラを流して、ヴエニス市民の全生活を、そこの石垣の根に眺めて暮らした。ヴエニス市民の全生活が、その、赤土沼のやうな水の表面を、ゆるく旋廻して通り過ぎつゝあつたのだ。それは、古靴の片つぽ、破れた洋傘、果物の皮、死んだ猫、首のない人形、去年の雜誌、無生物になつた仔猫など、すべて、この町の春の仕度に用のないものばかりだつた。

かうして、一九二九年の春は、長靴から立ち昇つてゐた。

が、このヴエニスのホテルの酒場で、私は、ルセアニアの商人に化けて、密かに這入り込んだ「黃色い嘴（ベクコ・ジヤロ）」の若い論説部員が、羅馬へ着くと同時に逮捕されたことを聞いた。彼は前夜から同室してゐた刑事に徹宵警戒されてゐたのだといふことだつた。

私の眼に、ヴアンテミイユ羅馬間の特急を移動警轄にしてゐる、ムツソリニ直屬の外事課高等刑事の乳房と、彼女の下腹部の黑子が、瞬間、浮かんだ。

中央公論社代理部案内

東京市丸の内ビルディング七七六區
中央公論社代理部
振替東京七八四七五番
電話丸の内(23)二〇六番

代理部への御註文はすべて前金に限ります。御送金はなるべく振替を御利用下さい。
御註文の際は郵税をお忘れなく。
宛名は必ず「中央公論社代理部」として下さい。

香水を兼ねた

スマドレ・ヘヤトニック

このスマドレ・ヘヤトニックは有名なスマドレ會社の製品で、ニューヨーク・ロンドン・パリー等の日本人に愛用されてゐるものです。洗髪後或ひは朝夕に數滴を毛髪の根元に振りかけて、指頭で輕くマッサージしてをけば、フケを除り拔毛を止めるので萬國の專賣特許を得て居ります。使用後は氣持ちの良い香りがのこり、毛髪は使用するにつれて軟く、漆黑の美が増します。

定價特大瓶（婦人用・紳士用）**各二圓五十錢**
送料東京市内十二錢内地十八錢鮮臺四十五錢

理想的な洗髪液

スマドレ・シャンプー

毛質を少しも害する事なく、簡易に毛髪の汚れを落し、フケを除り爽かな潤ひのある美しい髪にする一方、ちゞれ毛や癖毛を直す點は全く不思議です。

日々忙しい社會に、劇務の間にも男子の髪を整へる事が禮儀とされる今日、之を用ふれば、僅かな時間で、毎もさつぱりとした髪で人に接する事が出來ます。

定價特大瓶二圓
送料東京市内十二錢内地十八錢鮮臺四十五錢

理想的な整髪料

スタイルセット

油やアルコールを絶對に含まぬしかも餘りぱさぱさしない理想的の新整髪料で、フケトリとポマードを兼ねた合理的新製品であります。使用法はまづ髪を少量の水で濡らしておき、掌に少量のスタイルセットを滴らして、毛髪全體にゆき渡る様に塗つけるのです。

定價六十錢
送料東京市内十二錢内地十八錢鮮臺四十五錢

春と夏の香水

此の頃は一般に一年中香水が用意される様になりましたが、それも毎も同じものでなくその時々の氣分や、出る場所或ひは氣候などによつて變つたものを用ふるために中央公論社代理部で特に四季の香水を造りました。

その中でも、すがすがとした春の梅及夏の鈴蘭の香水は、今用ふるには是非おすゝめ致し度いもので、贈答品にもふさはしい様、素敵な體裁の函に納めてあります。四季何れでもお好みのまゝにお註文下さい。

定價（春・夏・秋・冬）**各二圓**
送料東京市内十二錢内地十八錢鮮臺四十五錢

雨期に必需の

純良レインコート

純良なイージー印のレインコートをお頒ち致します。生地は上等の羽二重を用ひ、之に良質のゴムを裏附けしたもので、如何なる豪雨にも絶對に水を透す事なく、小さく折疊んで添附の同質生地のサックに納めれば、手提鞄の片隅に入れて少しも嵩張らず、一番輕量な點でも、夏期旅行中突然の急雨に備へるのには之に如くものはありません。

色はネヅミ・テツ・茶系統の最も斬新な流行色を選んだもので、現在盛んに海外に輸出されつゝあるものです。

寸法は襟下鯨約二尺六寸から三尺二寸位まで約二寸毎に取揃へてありますから、御註文には、襟下何尺何寸の何色と御明記下さい。

各色共一着　**十三圓**
送料東京市内二十錢内地二十七錢鮮臺五十五錢

自働研式

パレイ安全剃刀

パレイ程完全かつ簡便な優秀品

は、今はどこにもありません。巧妙な裝置によつて、いかなる素人にも立派に砥げます。從つて一枚の刄が、半年以上も每日の使用に堪へ、その切れ味は廣光の古銘刀にも匹敵することが證明されてゐます。

C型（革砥替刃三枚 レザー1挺入）一圓八十錢
同　同　二圓
B型（革砥替刃一打 ニッケル箱入）十三圓五十錢

送料東京市內十二錢內地十八錢領土四十五錢

萬能書見臺

小には机上の書見臺から大には約五尺五寸位まで、腰掛けて見る場合、寢て見る場合、書架の部分には頁止めを附して奏樂用の譜面臺にも好適、屋外ではスケッチ用の畫架となり、横に曲げて氷臺つりとなり、寢臺に取付ける事も出來る、大部分鋼鐵製ニッケル磨きの、小箱入携帶至便、分解組立自在な、文字通り萬能書見臺です。

寢ながらの書見には、下向の書物を完全に把持し、而も高低左右角度長短傾斜等意の欲するまゝてす。

定價一臺　八圓五十錢

送料東京市內十二錢內地五十五錢領土八十五錢

高級で低廉な

アテナ萬年筆

使ふにつれて直きに執筆者の手と書風になじみ、使へば使ふ程いよいよ書き好くなるといふ定評を得てゐます。

定價三圓五十錢・四圓・四圓五十錢

（回轉式自動吸入型）三圓五十錢

送料內地十八錢　領土四十五錢

▲型錄は二錢切手封入御申込の事

替ズボン

眞の洋服愛用者は、特に二三着のズボンを用意して、屋內での執務・外出・散步・旅行等時と場合を考へて時々かへて用ひます。

こうする事は、新調の洋服を何日までも上下同じ新しさに保たせる事が出來るばかりでなく、古い上衣も、常に新しい氣分で着る事が出來ます。

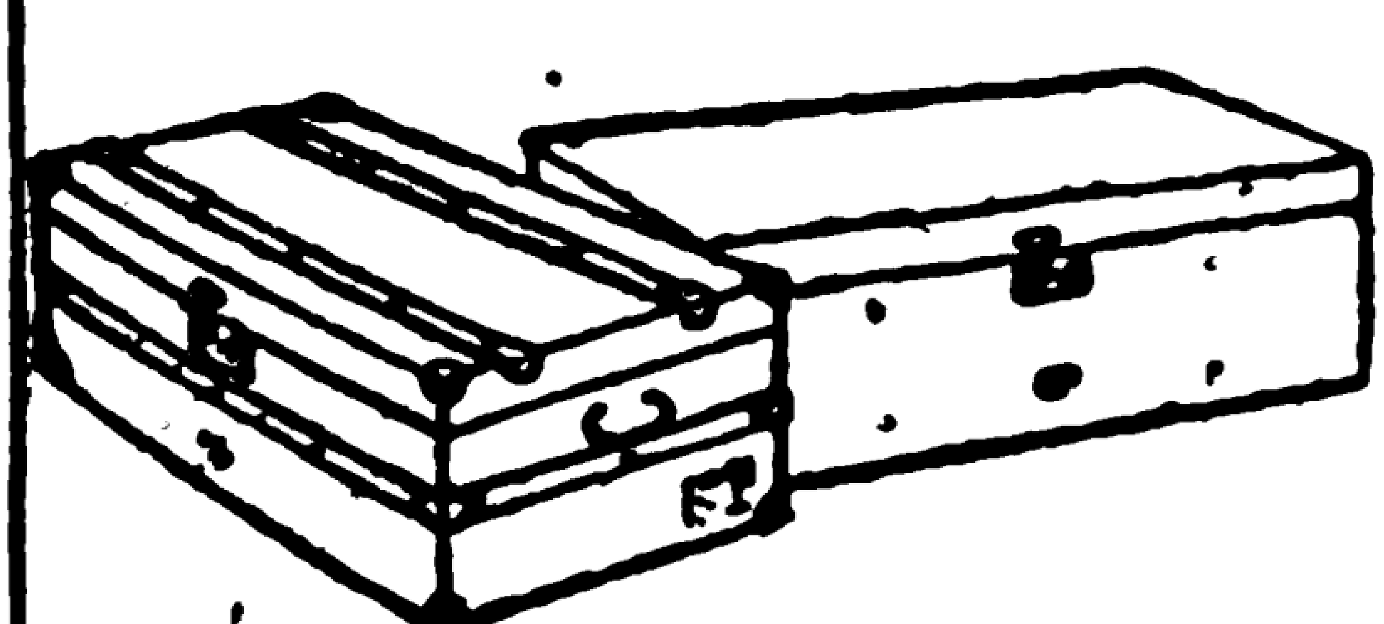
中央公論社代理部は、地方在住の方々のために、種々の替ズボンを左記の特價で提供致します。

一番困るのは寸法ですが、これは何回でもお取替致しますから、安心して御註文下さい。

大　腰廻　總約二尺五寸　股下　約　一尺九寸五分
中　同　同　二尺三寸　同　一尺八寸五分
小　同　同　二尺二寸　同　一尺七寸五分

紺サージ　四圓五十錢
特上黒サージ　九圓八十錢
黒セル　五圓八十五錢
絹セル　黒紺　各七圓
フラノ　紺鼠　各六圓

送料東京市內十二錢內地十八錢領土四十五錢



防火防濕毛織物入

昭和文庫

厚い鐵板張り、タテ二尺七寸、幅一尺二寸、高サ八寸五分の堅牢な容器で、內壁の四方を丈夫な木板で圍み、中にナフタリン樟腦の入れものがついてをり、外面には漆の燒附けを施して立派に仕上げ絕對に外氣の侵入を防ぐやうに出來てゐますから毛織物・貴重書類その他大切なものをしまつておくのに必須な品です。

特製はトランクとして、そのまゝ送り出す事が出來、簞笥や支那鞄より遙に便利です。

定價　特製　九圓八十錢
　　　並製　六圓八十錢

送料東京市內二十錢　地方運賃先拂

絞染紙製

洋服カバー

防水防濕防蟲の效用を具備し、しかも布よりも丈夫で洗濯が出來るといふ重寶な品です。この絞紙製品は婦人公論誌上に發表して好評を博してゐますので本誌でも特に格安にお取次いたします。

定價（大）一圓二十錢（小）八十錢

送料東京市內十二錢內地十八錢領土四十五錢

スプリングコート兼用

バーバリーレインコート

英國製と同樣の生地を用ひた純國產品です。多額の運賃と少からぬ關稅とを仕拂ふ必要がないだけそれ丈、品質も仕立も非常に吟味されたものです。これならばスプリングコートともなり、天候の危ぶまれる日の外出にも安心して着

て出られます。



色は紺・茶系統の常に最も斬新な流行色で、寸法は襟下鯨尺二尺六寸から二寸毎に三尺二寸までそれぞれ取揃へてあります。

各色共一着 **十九圓**

送料東京市内十二錢内地二十七錢領土五十五錢

最高級

オペラグラス

―一名ガリレオ双眼鏡―

本誌愛讀の方々のために、光學上最も完全なオペラグラスを、一般市場では到底見られない特價でお頒ち致します。

本品の特色は、鏡胴短く携帶に便利で、高級な光學硝子のレンズ十二枚を使用し、極度に精密な設計により、一々嚴格な試驗を行つてありますから、レンズの周邊に至るまで鮮明に見る事が出來、光線の通過量は八割五分に達する程で、薄暮光線の不足な場合に用ひて最も有效です。

その他接眼鏡の間隔は日本人の眼の間隔に適合する樣に設計されオペラグラスと云つても、野外で必要な場合を考へて、日除けの裝置がしてありますから、廣大なグラウンドの一角に立つて、選手の一擧手一投足の微妙な動きまで正確に見る事が出來ます。

旅行に、散策に、敎育用に、贈物に、常に人を喜ばせる本器は、光學的に正確なばかりでなく、價格に於ても、市場の類似品の比ではありません。

定價A(少し小型)**十八圓B十七圓**

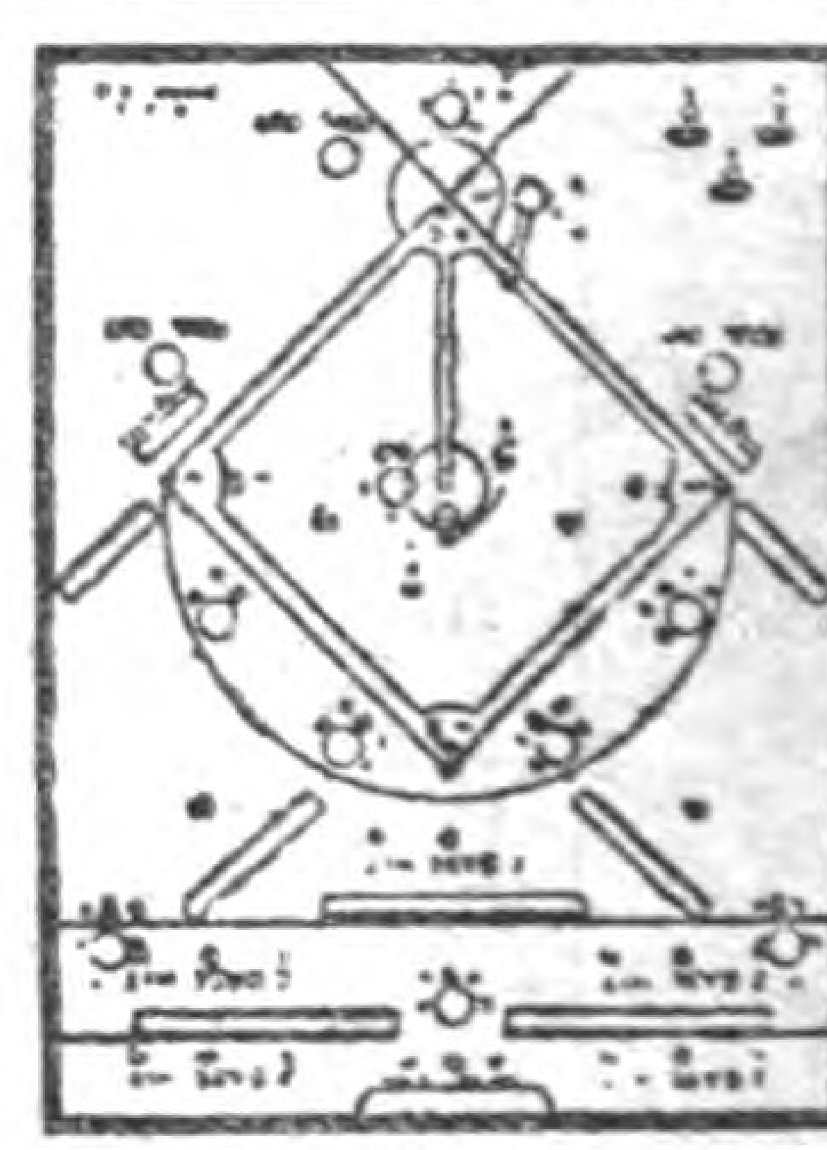
送料東京市内十二錢内地十八錢領土四十五錢

誰にも愉快な

野球競技盤

約二平方尺の盤上へ野球の實戰と同じ興味と緊張味を移す事に成功したのがこの高桑式野球競技盤です。

盤面は飛行機から見た野球場さながらで、投手は球にあてた指の力一つで、直球、曲球、軟球、剛球自由自在に、打手も亦選手がボ



ツクスに立つた氣分で、バットの振り方で美事本壘打を飛す事も出來れば、油斷をすれば、投手に計られて三振「アウト」にされて了ひます。

實戰に臨む人はもとより、高尙な新らしい家庭遊戲として一般の家庭におすゝめ致します。

小型(長一尺四分巾七寸五分) **一圓三十錢**
中型(長一尺六寸巾一尺二寸) **三圓八十錢**

送料東京市内十二錢内地十八錢領土四十五錢

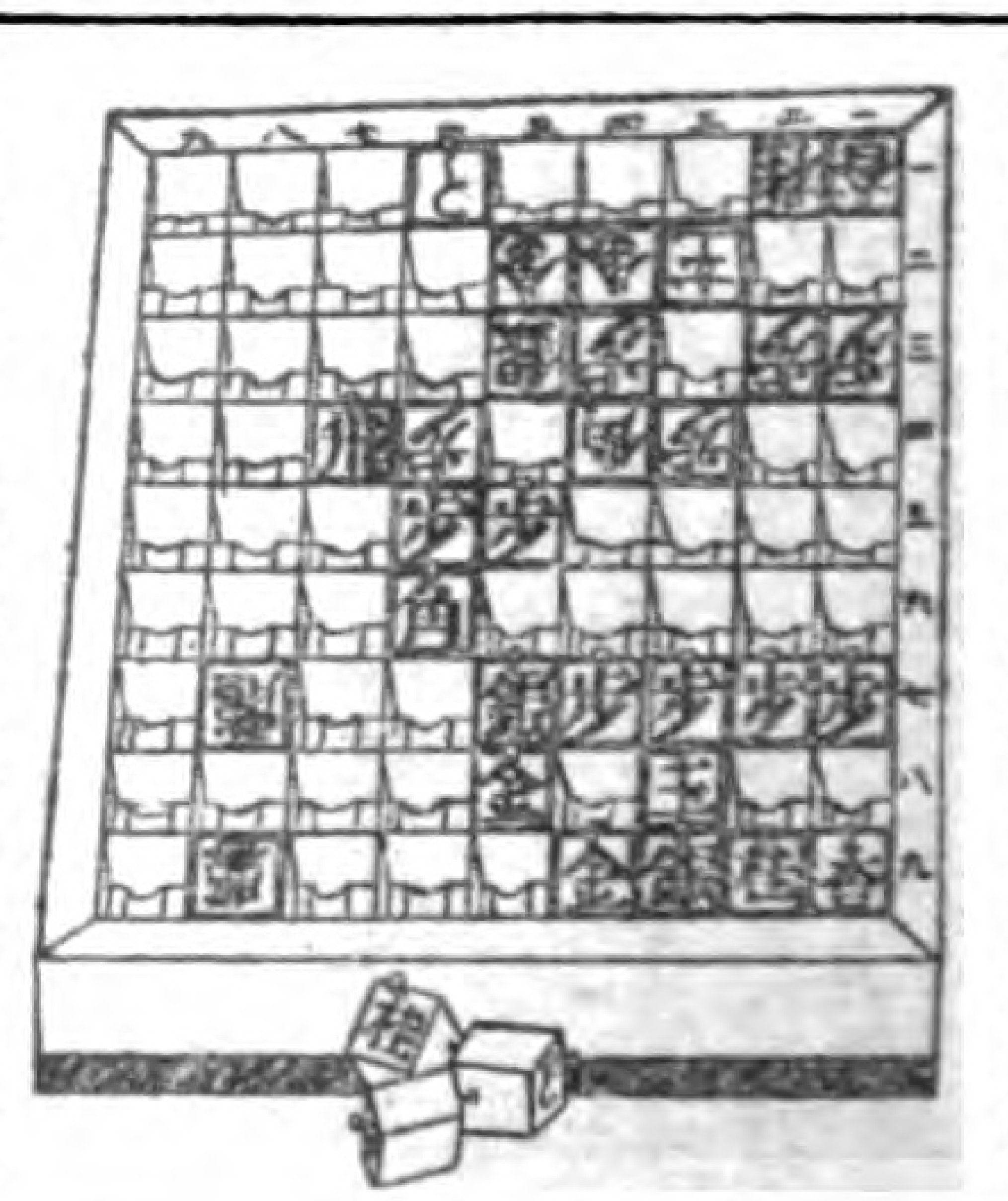
携帶用

輕便將棊盤

縱三寸七分橫三寸二分厚サ五分の輕便將棊盤です。木とアルミニームで造られてありますから、ポケットに入れて少しも重くなく駒には一個一個蟲針が附けてある等婦女子の眼にも可愛らしいもので

す。

駒は標準文字を用ひ盤には縱橫に數字が記されてありますから、新聞を見乍らの研究には一層便利



です。其の他繁雜な業務の間に數分の閑を得て、又は忙しい旅の車中に或ひは湯上りの腹ばひのまゝで、或ひは机上に、或ひは病床のつれづれに、仰向けのまゝでも出來る好棊家にとつてこれ程便利なものはありません。

定　價(駒全部附)**一圓八十錢**

送料東京市内十二錢内地十八錢領土四十五錢

古本賣買のお取次

主として地方在住讀者諸氏の御便宜を計る目的で特設いたしましたのが弊社代理部の「古書案内部」です。どうぞ御遠慮なくどしどし

御用命下さい。古本御購入のお取次はもとより御賣却御希望の古本古文書、和本、錦繪等價格不明の御不用品の評價、賣却のお取次をいたします。お問合せだけで御返事いたしかねるやうな種類のものならば、一應御送附下さいますれば早速市內一流の專門家に囑して正確迅速に評價して御返事を差上げます。

古本賣買お取次規定

(A)紹介は往復葉書又は返信料添付のこと。(B)註文はなるべく爲替で、但送品は着金後一週間以內。(C)評價御希望の書籍は、書名、著者、發行年月、發行所、汚損の程度等詳細御報のこと。但古文書、錦繪等の如きは現品拜見の上ならでは正確に評價できない場合がありますからその旨お含みおき下さい。御返送の場合の送料は申受けます(D)宛名は中央公論社古書案內係と明記のこと。

インターナショナル式

新聞綴器

近來の新聞はみな欄外が狹くなつたゝめに、普通の新聞綴器では押目に近い部分は讀む事が出來ず一々取はづすのは餘りに煩瑣極ると云ふ缺點を完全に一掃した新工夫の新聞綴器です。

本器は、新聞を挾んだまゝ、欄外その他の部分も完全に讀む事が出來、廻轉裝置で任意の一枚でも容易に取はづせる點に最も工夫をこらした、凡そ新聞を讀む御家庭には是非備へ度い品です。

定價（表紙附） 一圓二十錢
送料東京市內十二錢內地十八錢鮮臺上四十五錢

佛國內化粧界の驚異

除毛劑タキー

顏はもとより手足その他の部分の毛を、刀剃を用ひないで容易にしかも綺麗に除る藥がローシェ化學研究所で發明されました。

これはチューヴ入のクリームで手でも足でも、腋の下でも、任意のところに塗つて五分乃至十分後に水で洗ふと、剃刀で剃つたよりも綺麗にすつかり毛が除れてしまひます。

これを五六度繰返して使つてゐるうちに次第に毛が薄色の弱いものとなり、遂に全く發生しなくなつてしまひます。「タキー」は又腋臭を除く效果があります。

皮膚に害はないかと云ふ問合せが澤山參りますが、一個每に添附の說明書の通りに御使用下されば全く無害で、效果は一層確實です。

定價（マスクリーム附） 二圓二十錢
送料東京市內十二錢內地十八錢鮮臺上四十五錢

オプチサナ

獨逸藥品の偉力は世評の認める所ですが、特にこのオプチサナは、せきを止めるのに著しく效果があります。甘くておいしいので百日ぜきの子供も喜んでこれを呑み、一週間服用すればきゝめがあらはれ、殊にぜんそくのせき止めには喜ばれてゐます。

尙所々から醫家の纏つた御注文がありましたが、今後十個以上纏つた御注文には、多少の割引をする事に致します。

定價 二圓
送料東京市內十二錢內地十八錢鮮臺上四十五錢

理想的な

產兒調節藥

從來の樣に醫師の手を煩はさず絕對的信用のある「オクルサトル」は、用器と錠劑とに分れてゐて、之は組合せて使用するものです。

用器は永久に使用出來るもの、錠劑は一錠一週間有效のものですから、始めて使用される人は、用器と錠劑とをお求めになる必要があり、二回目からの御註文の時のために、別に錠劑だけが用意されてあります。

あれこれと使用して效を奏さなかつた人にも、之だけは十分滿足を得られると云はれてゐる「オクルサトル」の效果をお試し下さい

定價（用器付錠劑十二錠入） 六圓
（錠劑だけ十二錠） 二圓
送料東京市內十二錢內地十八錢鮮臺上四十五錢

御注意

◇振替は、一番安全な送金法ですが、普通近い所で四日かゝりますから、特にお急ぎには爲替で書留に願ひます。

◇御註文のお品が、お氣に召さぬ場合、代理部へのお希望、お問合せ等は、中央公論社代理部係へお申越を願ひます。

「春泥」雑感

（貝殻追放）

水上瀧太郎

「春泥」は昭和三年の春、新聞に連載された久保田万太郎氏の長編小説であるが、今年正月、ひどく凝つた裝幀で、春陽堂から出版された。

いつの頃からか、大概の小說本は四六版ときまつた形になつてゐたが、これはむかしにかへつた菊版で、浮世絵風の密畫では無いけれども、木版色刷の口繪のついた、今どき珍しいものである。何となく紅葉露伴時代のなつかしさを誘ふものがある。日清戰爭時代のなつかしさだ。むかしをなつかしむ心は、やがて作者久保田万太郎氏の心である。

「春泥」の登場人物は新派の役者で、場所は勿論東京で、時代はその東京のありし日の面影をむざんに破壊した大地震の後だ。どこからどこ迄久保田氏好みである。

「春泥」は六つの小標題を持ち、それぞれ異なる場面を描いてゐる。先づ最初の「向島」では、天變地異の爲に姿かたちを一變した水邊の風景の中に、田代小倉三浦三人の新派の役者を點出した。元來此の作者は、人と景色との淡彩的調和を喜ぶ。それは俳句から來た影響でもあり、又氏自身の持つて生れたまるみと柔かみのあるひととなりの賜でもある。どぎつい原色の交錯には、此の作者の神經は對抗出來ない。必ず、ぼかしを用ゐて、柔かい階調の效果を擧げなければ安心し

ない。一面からいへば臆病である。さまざまの色彩音響をひとつに集めて、力をもつて調和せしめるといふ冒険にぶつかつて行く意力は毛頭無い。だから、此の場にあらはれる三人の役者も、誰一人主役を演じる役廻を背負はされず、とりとめが無いといへばとりとめなく、あるといへば昔は榮え今は衰へた新派の運命を暗示するせりふをやりとりしながら、ぶらぶら散歩してゐるのである。その效果から見て、すぐれたる抒情的散文詩であり、又抒景的散文詩である。極月の曇つた空の下に、土堤と水と、枯木の景色は、うす墨の繪の趣を湛へ、人は昔の名所のむざんにいたんだ姿と共に、時勢に押流されて行く自分を嘲り歎いてゐる。久保氏獨特の上品な感傷が、ひそかに伴奏をかなでてゐる。

「三羽烏」は、珍しくも地の文が多く、此の頃の久保田氏としてこれ程文字の數を費した事はないであらう。こゝでは、前の場の三人が向島をほつつき歩いてゐるのと同時刻に、他の場所にあらはれる新派の古い三枚目西巻金平なる人物によつて、矢張新派はどうなるのだらうと云ふ心配をさせてゐる。ほかの場面は二人若くは二人以上の會話を主として描いてゐるが、こゝばかりは地の文の巧みをつくして、西巻の過去を細叙した。魚屋から壯士役者となり、由良一座の三羽烏の一人となつた生一本の、時代遲れの三枚目を、喜劇とも悲劇とも、どつちとも見られるやうな、つかずはなれずの態度で行屆いた說明をした。此の一節の面白さは充分推稱すべきものであるが、こゝ丈が大部分記述體で、他の部分との釣合を多少缺いてゐる憾がある。

扨て西巻は、自分達一座の屬する會社と、自分達の師匠由良との間に何か氣まづい事があり、その爲めに初春早々地方へやられはしないかといふ心配に惱んで、土産を持つて師匠の家を訪問する。折惡く主人も娘も留守で、新參の女中にそつけなく扱はれ、はかない氣持で大川端を歩いて來る。附近の景色は、彼の感慨のたねとなる。

一ト晩といへどかれは俥をその河岸にとばさなかつたことはなかつたのである。芳町から柳橋へ、柳橋から芳町へ、役があがるとすぐかれは芝居を出、あるひは魚河岸の客に、あるひは兜町の贔負に、あるひは木場の旦那に、呼

上げられてはつねにその界隈の有名な茶屋小屋……岡田だの、稲井だの、鶴清だの、柳光亭だの、深川亭だのに始終もう入浸りになつてゐたのである……

かれは眼を轉じて電車通りをみた。そこには廣い道の上を電車に交つて自動車と自轉車とが目まぐるしく行交つてゐる。その間を縫つてトラックが絶えずけたゝましい地響をさせてゐる。――が、嘗ての日のあれほど矢のやうに飛交つた俥の影は？……なつかしい、馴染のふかいあの俥の影は……？

「變つたなア……」

こゝ迄讀んで來て、思はず知らず微笑した。人力車の少なくなつた事は誰でも承知してゐる。しかし、それをセンチメンタリズムの小道具に持つて來たところは、何といつても淺草の詩人の仕事だ。私としては、新派の三枚目役者が、人力車の影を見ない事などに感慨を催さうとは考へられないのだが、作者はかなり大袈裟に、西巻金平と共に嘆息してゐる。私は人力車は嫌ひだから、子供の頃の外は、殆んど乘つた事が無いのだが、既に藝者と、仲買の御用きゝと、銀行へ行く會社商店の雇員と、觀光團の異人の外には乘らないものとなつてからも、久保田氏は屢々車上の人であつた。時には宴會の果る迄門口に待たせてあるやうな景色さへ見た記憶がある。さういふ場合、勿論私は惡口をいふのだが、御本人は多少の芝居氣の外に、相當人力車の美點を認めてゐて、しきりに抗辯したものだつた。尤も、流石の久保田氏も今日此頃は用ゐないらしいが、同じく下町子の小島政二郎氏は、近頃しきりに人力車の上にふんぞりかへつてゐるさうである。

それは餘計な事だが、兎に角久保田氏は、あらゆる機會にあらゆる小道具を使つて、時勢の推移をはかながらせ、且新派の衰運に結びつけて效果を擧る事に努めた。

第三節は「みぞれ」で、これは又殆んど會話だけで運んでゐる。場所は菊の家といふのみやで、出て來る人間は田代と元は芝居茶屋今は待合うたむらの亭主、後から小倉がかけつけて、やがてうたむらの亭主は歸つて行く。此の場に何故う

たむらなんていふ人物が必要なのかといふと、これも亦時勢の推移を見せるのに都合がいゝのだ。芝居のいろんなしきたりが變るに連れ、芝居茶屋といふものも亡びてしまつた。さういふ手なのだ。

會話の間に、新派といふものは、このさきどうなるか、女形といふものは將來どうなるか、といふ質問を田代が出すが、結局その答案を作中に出す程作者は愚かでは無い。解決を急ぐのを避けて、曖昧のうちに話は轉じてしまふ。それが將來どうなるかといふ事などは、作者にとつては重大問題ではない。いゝものも惡いものも、ときよ時節で亡びて行くのだといふなりゆき哲學が、むかしから久保田氏の思想をうらうちして居る。

「冬至」には、再び西巻金平を登場させ、此の威勢のいゝ二枚目、酒には不死身だと景氣づけてゐた役者も、次第に深酒が身に堪へて來る姿を描いて、新派の衰へてゆく歩みと並行させた。

「むほん」には、由良一座の若女形、藝筋がよくて、いゝ男で、親思ひで、弱氣で、氣だてのいゝ若宮を、淺草の興業師樂天坊主と、由良一座の三羽烏の一人で、西巻とはうらはらの惡玉にされてゐるけちんぼの小金貸、菱川とがぐるになつて筋を書き、一座を脱退させようとする事件を中心とし、新派の世界の重大事件の切迫を、田代と小倉の口をかりて運んだ。最も劇的の場面で、いろいろの人間の心持の紛糾が熱をもつて頂點に辿りついた。

ところが作者は、その闘爭的開展には筆をつけず、突然若宮を旅先で自殺させてしまつた。讀者にとつては意外千萬な出來事だが、作者は人情の分裂に陷る事を好まないのであらう。死をもつてそれをあがなつたのである。恐らく、一般長編作家の手法としては、一度はむほんの成立するところ迄立入つて描くのが本當だらうと思ふが、久保田氏はさういふ動的な場面、混亂した筋立を喜ばない。この相違が、久保田氏をして常に情緒的寫實主義に居坐らせるのである。

その脈を引いて、最後の「夕燒雲」になると、由良一座の統領が、田代小倉三浦をつれて、谷中へ墓參に行く。仲間うちのいざこざも、若宮をいたむ心に柔らげられ、淋しさやうかびて遠き春の雲といふやうな句をおもひ案じさせ、その心

境を以て一篇のしめくゝりをつけて完結した。

作者は、新派の衰亡といふ大きな材料をつかんだが、結局これを解剖的に取扱ふ事を欲せず、おのれの心持にひきつけて、ひと色の繪具でぼかしてしまつた。描かれた事が主となるよりも、作者の心境が主たるものとなつた。言葉をかへていへば、新派没落のよつて來る運命を中心にしては描かなかつた。その運命に押流されてゐる無力な人間を描く事によつて頼りない人生に靜寂なる詩境を見出したのである。why といふことばは久保田氏の好まぬものだ。何故新派の運勢が傾いたかをはつきりと主題化する事は嫌ひなのだ。それよりも、曾ては榮え、今は衰への道を辿る新派に對して、盡きない同情を寄せるのである。

久保田氏の心は、社會のあらゆる事象に對して、積極的に働きかける事が少ない。氏は將來の社會的變革に何等の希望を持つて居ないであらう。どんなプログラムにしたがつても、過ぎ去つた日をなつかしむ程ぴつたりと身柄にはまる世の中を想像する事は出來ないであらう。實行派の鬪士が血眼になつて論議する諸問題は、殆んど總て久保田氏の興味をつながないであらう。生産機關が國有にならうと、共有にならうと、はたまた永久に資本家の手にあらうと、彼にとつては何でも無い。政治や經濟方面の社會生活を、此の詩人は自分のものとして痛切には考へないのである。自分の周圍、自分の好きな領域の間にのみ、彼の世の中がある。私は曾て或る雜誌の質問に答へて斯う書いた。

萬一此の人が作家にならなかつた場合を想像して見て下さい。たとへば官吏になり、軍人になり、會社員になり、筋肉勞働者になり——其の外あらゆる他の職業の何にでも携つたとしたら、やくざな人間だつたに違ひありません。

實際、久保田氏の心的活動の範圍は極めて狹い。彼の心を喜ばせ、悲しませ、樂しませ、慰めるものは藝術丈だ。彼が本氣になつて關知する事はそれ丈だ。内閣が變らうと、議會が解散しやうと、金解禁にならうとなるまいと、普選たらうが婦人參政權だらうが、凡そ新聞紙上を最も賑かにする其の日其の日の問題は、噂を喜ぶ都會人の話材としての外、彼の

心に何等の響を傳へない。

又藝術を愛する心といふも、藝術を功利的に考へたり、利用しようとしたりする肚は毛頭ない。彼はたゞ藝道の玄人にのみ理解せらるゝ藝術の味ひを創造し、又味到する事に生涯を盡すのである。それは今日の、玄人と素人とのへだゝりをなくなさうとする一般の人氣には反するものである。それは今日のアチ・プロ根性とは全然相背馳するものである。彼はむかしの藝道の名匠のやうに、たゞ一筋に自分の氣質に根ざしを持つ藝術にはげみ、工人としてのうでの練達に努める。

さうかと云つて久保田氏は、書齋に閉籠つたつきりで世間の事は何も知らない偏屈人では無い。寧ろ愛想のいゝ世間人だ。たゞ自分の仕事だときめた人生活動の範圍が極めて狹く、それ以外の事に心を煩はす事を好まないのだ。しかも自分の心にかゝはりのない事に對して、輕蔑したり白眼視したりする意地惡根性も持つてゐない。かへつて、自分の世界以外に對しては臆病でもあり、謙讓でもある。自分なんぞが口を出したつてどうなるものかと、へりくだつた心持できめてゐるのである。それが、ひとたび藝術に關する事になると、忽ち彼の肚のどん底に、梃子でも動かない強情が、鳥黐のやうに魂をつゝんでしまふ。

いつたい都育ちの人の特性として、だいそれた事を考へない。目の前には天子樣がゐらつしやる。その天子樣を圍んで位人臣を極める人間がゐる。一生かゝつてもつかひきれないやうな大金持がはびこつてゐる。元帥もゐれば大將もゐる。どの方面を見ても第一流の人物が、肩を並べ陣を敷いてゐる。それより偉くなる事のむづかしさが、子供の頭にこびりついて、自然と野心をいだかなくなる。よくいへば謙讓になり、惡くいへば意氣地なしになる。

そこへ行くと田舍の子は向ふ見ずだ。目のあたり見た事のない都會の偉大を空想し、憧憬し、その都には自由があり、出世があると考へやすい。そこへ行つて一流の人間にならうといふ野望が強く、天下をとる事さへ樂々と想像するであらう。好んで天下國家を論ずるものは國者だ。

久保田氏は生拔の東京子だ。彼は曾て總理大臣にならうと考へた事はなかつたらう。代議士になつて國政に參與しようとも思はなかつたらう。銀行會社の社長頭取にならうとも夢想しなかつたであらう。坪内博士の向を張つて、演劇革新事業に携はらうとも思はなかつたらう。否々、彼は俳人として正岡子規の名聲をかち得る事の可能性も信じなかつたらう。小說家としても、戲曲家としても、一流の大家にならうなどゝは夢にも考へなかつたに違ひ無い。恐らく、出世作「朝顏」があれ程の評判を博する事さへ想像しなかつたであらう。彼はたゞ先輩の御眼鏡にかなひ、雜誌に掲載される丈で充分滿足するさゝやかな野心をもつて處女作の筆を執つたに過ぎないであらう。

大それた野心と懷疑は此の詩人のものでは無い。實行上のロマンティシズムは此の詩人のかゝはるところでは無い。彼は向ふ見ずにラッシュ・アワーの四辻を先頭に立つてつつ切る勇者では無い。同時に自分が斯うときめた好む道を歩む事に於ては、道端の草の花にも心をとめて、あだには見過さない。藝術製作者として、久保田氏程心的動搖の少ない人も珍しい。それが取材の範圍の狹い缺點となつてあらはれ、他方に於ては稀にしか破綻を見せない行屆いた作風の中に、しつとりとした情緒を漂はせ、詩情と表現形式と共に純粹感の著しい特徴となつてあらはれる。

さういふ傾向の人であるから好き嫌ひがはげしく、好きなものには凝り、嫌ひなものは見向かない。そして、いつたん好きになり、その道に入つて行くと、そこに人情が湧き同情が生れ、彼自身の情緒を豐かにする泉となる。

久保田氏と、彼が深き同情を持ち、親切に世話をする新派との仲も、いつしかさういふえにしとなつたやうだ。

私は近頃あまり芝居を見ず、殊に新派には常に御無沙汰勝なので、見當がはづれるかもしれないが、いつたい今の新派といふものは、創生時代の意氣を失ひ、何處から見ても新の字をかぶせ難い存在となつてゐる。演劇の革新を叫び、様式的な歌舞伎に對抗して、寫實の旗じるしを立てたのは、明治時代の科學的精神と合致し、文學美術の潮流と合流するものであつた。片方は夙の昔に定型となつた技法を守る外に道の無い程完成しつくしたのに反し、一方はすべてが未開拓の有

由を有し、その爲めに新鮮味を感じさせたのである。又純粹の歌舞伎を理解するには、相當の智識習練が必要であるが新派の方は誰にもわかりやすく、手取早く感激を托する事が出來た。演技の巧拙のわからない、たゞ筋の面白さを逈る初學入門の芝居客にとつて、新派は喰ひつきやすいといふ特徴があつた。傳統的鑑賞眼を持つてゐないのがしあはせで、蕪雜な技藝も邪魔にならず、舞臺の上の悲喜哀樂を共に分つ事が出來るのである。若き新派にとつて、大衆の共感を得たといふ確信は何よりも強い後だてである。歌舞伎にとつてかはらうとする野心を抱き、信仰が生じた。新領土の開拓の爲めには、いかなる冒險をも辭さない情熱が湧いた。その挑戰に應じて、歌舞伎俳優の大頭株、今の歌右衛門幸四郎等が、新派とうでを競ふ意味で、當時流行の通俗小說を脚色した大甘物の束髪芝居を演じた頃が、新派の意氣最もあがつた時代であらう。

天下をとるには至らなかつたが、たしかに新派は一城のあるじとなつた。と、同時に、技藝の熟達の目ざましさに連れていつしか一定の型をつくり、マンネリズムに陷つた。新派式の形式美、新派式の感傷癖――あらゆる事が新派の定石によつて支配され、脚本の選定も、新派的好みに媚るものでなければならなくなつた。一切の事が新鮮感を失ひ、かくして新派は新派自體に於て崩壞の道を辿り始めた。その上に、更にその全盛期を速かに終らせた原因としては、自由劇場文藝協會等が種を蒔いた新劇團の出現から、藝術座となり、澪止となる一つの潮流に、新の字を奪はれた事にもあるのだが、それよりも新派自體がいゝ氣になり、樂をし、太平の夢を見てゐた目先の見えなさにあると云ふ可きであらう。

往年新派の客だつた新しい芝居客は、今の新劇の客に等しく、今の新劇の進出に對抗する新派の位置は、むかしの歌右衛門、幸四郎に比すべく、しかもその意氣に於て、遙かに頽敗的である。彼には據る可き歌舞伎劇の本城があるが、これには籠城すべき堅壘が無い。氣の腐れの甚しいのも無理は無いが、幸ひに新派には修得した寫實的技藝がある。此の際皆の壯士芝居の意氣込で、あらゆる新派式と名づけらる可きものをなげ捨て、素裸になつてかゝつたならば、局面打開の道

がありさうだ。さうしない限り、新派の滅亡は文樂の壽命よりも早いかもしれない。恐らく、冷酷なる興業主は、衰運に向つてゐるものゝたて直しに苦心するよりも、亡びるまゝに亡びさせ、他のものをもつて之に替る方が算盤にあふ事を知つてゐるであらう。新派は自力で立直る外はないのである。

私はこゝで新派論をする氣は無いのだが、何故新派に拘つてゐるかといふと、「春泥」の作者久保田万太郎氏を眞魚板にのせて勝手な熱を吐くのに、これ程便利な景物は外に無いからである。さしみのつまの防風や、豚カツのつまの馬鈴薯の如きものではない。これなくしては、醬油の無いさしみとなり、ソオスの無い豚カツとなるであらう。

むかし讀んだ本の中に引用してあつたので、何處の國の誰の說だか記憶してゐないのが、同情とは理解と同意義であるといふ說をたてた學者がある。それは全部的には承認出來ないにしても、少なくとも正しき同情は深き理解によつてのみはぐくまれる事は疑無い。久保田氏は新派の芝居のおもてもうらも知り盡してゐながら、今日舊劇と新劇の間にはさまつて、最も特色が無く、魅力が無く、人氣の無い新派に深き同情を持つものである。多分、文壇に於て、自作の脚本が上演されるかもしれないといふあてのある作家の外、しんけんに新派に好意を寄せるものは氏の外には無いであらう。

まことに、久保田万太郎氏は、新派の常套手段、長所短所から、新派の役者の技巧の末、内輪話に至る迄知つてゐる。高いところから低いところを見下すやうに、はつきりと見てゐる。見てゐるばかりで無く、共に感じ共に歎いてゐる。恐らく、文壇人とのつきあひよりも、もつと深いまじはりがあるであらう。常日頃、何が面白いといつて、新派の役者と話をしてゐる程面白い事は無いと云つてゐる位だ。ひとつの王國をきづきあげ、そのなかばかりで威張つてゐて、昔からの家柄が一切萬事物をいふ舊派の馬鹿々々しさを微塵も持たない新派は物わかりがいゝ。みんな苦勞人だから話が面白い。しかも、わかりがいゝ丈に弱氣である。往年新派が天下をとると夢みた向ふ見ずの强さは、今はひとつの話草に過ぎない。新派は駄目だと自分からきめてかゝつてゐる程ものわかりがよく、且弱氣である。その意氣地なさは、プロレタリア

文學論に脅かされた文士の如く、氣持の上に腐れが來てゐる。

さういふ向上精神の乏しい新派に對して、大概の人は既に何等の期待も同情も持たなくなつた。久保田氏と雖も新派の將來には期待をかけてゐないかもしれないが、深き同情を惜まない事は明白である。少しく詭辯に類するが、新派が往年の如く榮えてゐたら、久保田氏はそれ程の理解同情を持たなかつたかもしれない。せつかく技藝に細かい味を修得しながら多年いゝめを見ない新派の現狀こそ、寧ろ久保田氏の詩情に媚るものかもしれない。誰が考へても新派の代表的俳優だと思ふ故人高田實は、久保田氏の好まない藝風だつた。藝の蟲で、上手とも名人とも呼ばる可き喜多村緑郎は、他人の技藝に對して忌憚なき批評を下して譲らない人間であるが、高田丈は常に口を極めて激稱してゐる。若し高田が死なゝかつたらと思ふものは敢て喜多村ばかりで無く、新派一統のかへらぬ愚痴らしいが、恐らく此の説に眞向から反對するのは久保田氏であらう。

彼は大がかりな事、はげしい事、嶮しい事は一切嫌ひだ。英雄を崇拜せず、平凡人の正直なつゝましやかな生活をよしとする詩人だ。淸水の次郎長は彼の好まざる人物である。われわれのやうに無責任に、斬つたりはつたりの話を興がる事は無い。さういふ凄い人間の存在は、詩人の心がうべなはない。トルストイもドストイエフスキイもゾラもバルザックもニイチエもマルクスも、彼にはつきあへない人間なのだ。親分肌といふものは嫌ひだから、一代の代表作家で師弟の間のしつけのやかましかつた尾崎紅葉先生の如きも、彼は敢然として拒否する。九代目團十郎も嫌ひであらう。常陸山谷右衛門も嫌ひであらう。同じ理由で高田實も嫌ひなのであらう。

さうはいふものゝ、新派が衰運にあるから好きなのだと簡單に解釋してはいけない。又喜多村緑郎との古い友達つきあひや、それから延長された一團とのくされ緣の爲めばかりでもない筈である。多分久保田氏自身も氣がつかず、矢張友達づきあひの爲めの同情だと考へてゐるだらうと思ふが、私は一說を立てたいのだ。

第一、今の新派の持味には多分に久保田氏と共通のものがある。昔の新派の芝居は荒唐不稽のロマンティシズムを事としたが、今の新派の芝居は一種の寫實である。それは現實主義と呼ぶべく躊躇されるところの寫實である。たとへば現代の社會組織、經濟組織などに何等の關するところの無い或風俗の寫實である。それは今日の中心興味となつてゐる新興事象にかゝはりの無い、まさに昨日にならんとする世態人情の寫實だ。それと同じく、久保田氏の寫實も、明日につゞく今日の世の姿よりも、昨日につゞく今日を描く事にかゝはつてゐる。尤も、久保田氏はひとつの筋を追及する長編物に多くの興味を持たず、殆んど俳諧の味に等しい短編的風韻を喜ぶのに反し、新派の芝居は筋を賣物にする相違がある。だが、それは今日の新派のほんとの持味を生かすものではない。だらだらと筋を賣る通し狂言は、素人客の最も喜ぶものであるが、今日の新派の細かい寫實的演技は、夙の昔に浪漫的な筋をしいかす大まかな味を失つてゐる。だから、新派の大立物が、下座の鳴物をふんだんにつかつて、荒唐不稽な戀愛の場面をやる時なぞは、新派の新派たるうまさはあらはれないで、新派の新派たる臭味丈が露出する。それに引かへ、端役しだしのうまさは驚く可きものだ。ほんとにそのうまさは推稱に値ひするもので、しかもそれが芝居の本筋に何のかかはりも無いといふやうな不思議な光景を現出する。英雄嫌ひの、大がかり嫌ひの、浪漫主義嫌ひの久保田氏にとつて、平凡人の、日常生活的演技は最も親しみ易いものである。彼が新派のうまさを讃へるのは、此の日常生活的寫實主義に故郷を見出す爲めだらうと思ふ。

又久保田氏は、頗るつきの問題嫌ひである。露骨なる問題は彼の情緒的寫實主義の邪魔をするものとして排斥されるのである。然るに新派の芝居にも曾て問題中心の劇は無い。テーマ芝居は無い。イブセン流の問題劇、勞農派的イディオロ劇は決して新派と竝行した事が無い。

勃興當時の新派は田舍者の寄集りだつたが、今日の新派は不思議に生殘つた三頭目をはじめ江戸子で固めてゐる。あくどく理屈にこだはる事は江戸子の好まないところである。今の新派と雖も、傳統的に筋のしち面倒臭さは持ちながら、決

して内面的葛藤に及ばないのも、久保田氏の理解を容易に導く特徴のひとつではないだらうか。

又消極的には、今日の世の中の眞只中に渦卷く混亂紛糾をよそにして、やゝ世の中に取殘された形で、しかも自分の城のなかにたてこもつてゐる兩者の相似點も、互の理解同情を助けるものであらう。

實際今の儘にして置いたら、新派の亡びる事は確實だが、その亡び行く事に對しても、久保田氏はなりゆきに任せてしまふであらう。どうせ亡びるときまつてゐる文樂の人形淨瑠璃に對して、三宅周太郎氏が持つてゐるやうな執念深い愛着はないであらう。むかし久保田氏の作品に「なりゆき」と題するものがあつたが、なりゆき哲學は今もなほ根ざし深く心の底に巣くつてゐる。なりゆきに反抗してもがく事を敢てしない。寧ろなりゆきの悲運に際會した者に對し、同情ある觀察者の眼をもつて、はかなく見送るに過ぎないのである。

だから、新派の衰運といふ大きい問題をつかんでも、決してその問題に重要點を置かず、單なる背景として、情緒の信託所とし、感傷の源泉として取扱つたのである。

したがつて「春泥」は、原稿紙の枚數に於ては長編小說に違ひ無いが、その本質は抒情的散文詩であり、又抒景的散文詩である。しかも極めてすぐれたる詩である。作者の技巧のうまさは愈動かし難きものとなつた。どんな場面でも、些かもあぶなつけなく書きこなすこまやかな筆致は、憎らしいばかりである。殊に二人若くは二人以上の會話をかりて話を運んで行く手法は、すつかり手に入つて誰人の追隨も許さない。

元來作者自身が、日常の會話の面白い人だ。隨分話好きでもある。時々はにかんで、變にしどろな話をする事もあるが、大體は言葉の撰擇に意を用ゐ、いやみのない、氣のきいた、機智に富んだ話をする。會話のうけわたしの意氣も心得たものだ。それは東京育ちの人の特に惠まれた才能だが、意識的にも洗練を加へて居る。これが文字となる場合も、勿論巧妙を極めたもので、現代に於て會話のうまさ第一と稱しても過褒ではないと信じる。

「春泥」にあらはれる人物も、一人殘らず會話のこつを知つてゐる。彼等の會話の特徴は、決して長々と喋らない。半分いへば、相手が引取つてわかつてくれる。物わかりのいゝ、呼吸のあつた會話だ。しかもかなり皮肉な會話だ。何が皮肉かと云ふと、はなしてが口に出す言葉は、屢々ほんとの心と逆の場合が多いのだ。ぞんざいな口をきゝながら感傷的だつたり、大事な事をさりげなくいつてしまつたりする。一分の甘つたれ、一分の皮肉、一分の諧謔、一分の自嘲を含んだものだ。そして、小說全體のはこびは悠々たるものだが、會話の間は頗る早い。

曾て方面違ひの私の友人が、泉、小山内、谷崎、久保田諸氏に私を加へた宴席に列した事があつた。彼は平生人一倍雄辯で差向ひで話してゐても、熱して來ると演說口調になる傾向を持つてゐる程だつたが、その時は何一言も進んでは云はないで、私の隣席に沈默してゐた。どうしたのだと訊いてみると、あんまりみんなの會話のやりとりが早く、一人が半分いふと他の人が直ぐわかつてしまふ、俺の出る幕では無いぢやあないかと答へた。

又或人は、上記の諸氏から谷崎氏をぬき、そのかはりに里見、吉井、長田の諸氏を加へた會合にのぞんだ歸途、私にささやいて、今日程疲れた事は無い、どうして作家といふものはあゝも鋭どく頭が働くのだらう、側で話を聽いてゐて、その話を追つかけて行く丈でくたびれてしまつたと話した。それは常に放談をしつけてゐる文人の特技であり、東京育ちの人の惠まれたる地方的才能である。就中久保田氏は、その才能を文字にあらはす場合、斷然リイドしてゐるのである。氏の戲曲の最大の味は、會話と間に他人の企及し得無いうまさを有する事から生れる。まことに會話は彼の特技だ。彼の小說はいつの間にか、段々地の文が少なくなり、手取早く會話が運ぶ事に昵んでしまつた。「春泥」も此の例に漏れないのである。

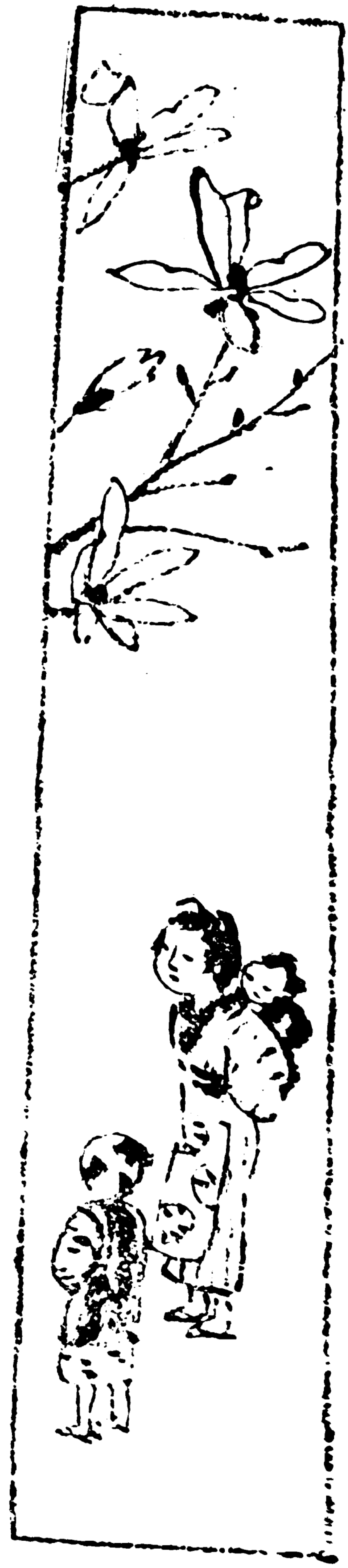
要するに「春泥」は、久保田氏の家の藝を代表するものである。新派といふ、誰よりもよく理解し同情する一團の衰運にある時機をとらへ、しかも之を描くのに決して問題化せず、主として會話で事件を運びながら、一切を自分の好みの情

緒の中にとかし込んでしまつた。強ゐて缺點を擧るならば、新派に對する同情過多が原因となり、察しがよすぎて、突放し方が足りない事である。折角の大きな材料を、あまりに詩的に扱ひ過ぎ、作者も登場人物と共々、ひとつの感傷の波に押流されてしまつた事である。これは皆、久保田氏の爲人のさせるわざに違ひ無い。

久保田氏は適度のあたたかみと柔かさを持つ尊敬すべき爲人を惠まれてゐる。猥雜野鄙は此の人の身に添はない。私は彼とつきあふ事二十年に及ぶが、未だ曾て一度たりとも、彼の口から猥談に類する事をきいた事が無い。殺伐なる言葉をきいた事が無い。それ程此の人はひとつの心持で統一されてゐる。輕佻に黑から白になり、白から黑になる眞似は出來ないのだ。常に自分の溫情の中にはぐくむ人情世界から愛着を絕たない。

彼は殆んど惡人を描いた事が無い。「春泥」の中の樂天坊主や菱川などは珍しい方で、常に善良にして時勢に伴ひ兼ねる人間を好んで描く。平凡人のかたちづくる平凡世界、みんなが不平不滿を持たず怒號せず、靜かに分を守り、つゝましく暮らす町中の一隅にこそ、久保田氏の詩境はあるので、偉大なる物質文明の到來などは、夢想もしなければ希望もしないのである。

さういふ作者の心境が、當然「春泥」をして上述の如くならしめた。何から何迄知り盡し、深い同情を持つてゐる新派、それを衰亡のなりゆきのまゝに眺め、寂しく哀れんでゐるかたちである。意地惡く解剖し、衰亡の止むを得ない過程をさらけ出し、所以を說き、批判を與へる事は敢てしない。その渦中の人間にも一人々々なさけをかけ、決して突放して一人步きはさせないのである。めいめいが心細く思はないやうに、誰の心にも共通の義理と人情を絡ませ、分相應の心配と安心とを與へる。其處に强味もあると同時に弱味もある。否々、上來述べて來た一切の事が、久保田氏の强味であると同時に弱味である。しかし、作者自身から見て、恐らく「春泥」は、彼が計劃した丈の事を、充分描き出したものに違ひ無く、作者の持味に詩情を誘はれる讀者にとつても、それ丈の效果は認められるのである。（昭和四年四月一日）



良寛と子守（舞踊劇）

逍遙作

越後の國、西蒲原郡の或る村はづれの地藏堂の前。時は四月ごろ。土手寄に滿開の櫻の立木。背景は遠近の山々田畑。（背景も舞臺裝置も成るべく簡素に、寫實的でないのがよい）。

こゝに十五六歳の村の小娘、名はおよし、赤んぼをおぶひ、十一二歳から八九歳までの女の子四人と「子買を〱」の遊戲をしてゐる。十一二歳の者も、二人だけは赤んぼをおぶつてゐる。

幕があかぬうちに、山臺の常盤津連中は「子買を〱」の童謠を地に取りて語りはじめる。ト「〽二もんめくれる

〽やアだ〽三もんめ〽やアだ」の邊で幕をあける。トすぐに例の追ひ廻しになり、子役らは舞臺を二三度ばた〳〵と足音をさせて駈け廻る。トゞおよしが物に蹴つまづいた心でころぶのをキッカケに、およしの後ろに附いてゐた子役ら一同將棋だふしに倒れる。途端に三人の赤んぼがけたゝましく哭き出す。（赤子笛）。その哭き聲をキッカケに「たがよ〳〵」になる。

コドモウタ〽子を買を、子買を〽どの子がほしい〽ちよいと見て此子〽よく見て〽この子〽何買うて養の〽魚と饅頭とおこしの米よ〽そりや蟲の大毒〽一もんめくれる〽やアだ〽二もんめくれる〽やアだ〽三もんめ〽やアだ。

子役皆々〽アイタヽヽヽ！

赤子〽オギヤア〳〵〳〵！

常磐津〽おいたち轉んで、膝ッかぶ、チヽチットモソットモ大事なえ。

およし〽たがよ〳〵！

皆々〽たがよ〳〵！

ト子役四人は泣く子をあやしながら、別れ〳〵に奧の方へ退り、およしも同じく赤子をあやしながら前へ出る。

常〽泣くなよい子だ、こんな物くりよに。

ト懷ろから手鞠を出し、それ〳〵見せてあやしながら

常〽暮れるまでにはまだ日が高い、ねんねしなされ、寢る子は可愛い。〽泣くを慰さの子守唄。

子モリウタ〽ねんねころゝや、ねんころにやア、ねんねの守はどこへ往た、あの山越えて佐渡へ往た、佐渡は四十五里、波の路。

オケサブシ〽沖のかゝり火涼しくふけてよ、夢を見るよな佐渡が島 〽雪の新潟、ふゞきに暮れてよ、佐渡は寝たかよ灯も見えぬ。

ト此間よろしく振ありて、

常〽ねたかよ背の赤ッ子も。〽さアこれからはみんなして、

ト奥の子役四人をさし招くこなしありて

〽木やり音頭や盆の唄 タカタキヤリ〽アヽイー、雪になりたや駒ヶ嶽の雪に、アーイ、とけて流れて、ソーリャ、新潟女郎衆の化粧水、ヨイヤサ〳〵 同〽アヽイー、竿に瓢箪秋の風が吹けば、アーイ、ころびころんで、ソーリャ、蜻めがくる〳〵搦みつく、ヨイヤサノ〳〵 長岡盆ウタ〽石の地藏さん頭が丸い、鴉とまれば投け島田 同〽早く大きう成れ〳〵女子、なれば殿さへ嫁にやる 同〽盆だてかんに、茄子の皮の雑炊だ、あんまり盛りつけられて、鼻の頂上燒いたとや。

踊りをさめると

およし〽ナウおでこさ、きんによも一昨日も良寛さまア來なさらなかつたがの、どうしなさつたかなう？

甲〽けふは必定來なさらうすけ、來なさつたら、また一貫ていはうなう。

乙〽あゝ、良寛さまア、おらが二貫てえと、こんげえに反ッ返りなさるがんだね。

丙〽ほいから、三貫てえと、又こんけえに。

丁〽四貫てえと、又こんがに。

およし〽だら、けふはでッかい聲で五貫てつて見なされ、ぶッ倒れさつしやるかもしんねえすけで。

皆々〽ほんだ。それがえい、それがえい。

（およし）「だども、まだよッぽど間があるだらうすけ、おすこでおはぢきサして待つてるようて。さアみんな、來なされ／＼。

と一同地藏堂の緣まで退り、二人ほどは緣にあがりて坐り、他の三人は緣に倚りそうて、見物へは背を向けて、おはぢきをはじめる。

ト床の常盤津のオキになる。

（常）「山かげの岩間を傳ふ苔淸水、かすかにわれは墨染の、やぶれ衣は雲煙り（風に亂る丶耳が根の、おどろ白髪は陽炎や、かぎりある世をいざしばし（生醉ひ心地、舞ひ心地、うかれあるきの良寬坊。

ト良寬、六十七八歲、裾みじかに著た鼠色の古ぬのこ、處々やぶれてよれ／＼になつた墨染の僧衣、素足に草鞋（脚絆はなし）。頭は禿げて、白髪は薄く、鬚は耳の少し上から、後ろは頸へ掛けて延び放題。胸元には手拭其他の必要品をいれた頭陀袋を下げ、つい今がた、或る托鉢先きで馳走になつた酒機嫌、ほろ醉ひの心、極きやしやな（四尺五寸ぐらゐの）錫杖に途中で摘み集めた菫や蒲公英なぞを一束にして結へ附けてかつぎ、うかれて出る。

（常）「雨のふる日にやみじめなおらも、晴れてうら／＼初春がすみ、立つたりや居ても、ねて見ても、しづ心なの、菜を摘もか、水を汲まうか、歌よもか、いつそいつもの子供らと、菫すまうやはぢきくら、てんとおもしろてん鞠つこか、ひふみよいむな、やッとんとん、子らが歌へばおらが突く、おらが歌へば子どもらが、やッとん、やッとん、こ丶のとを、十とをさめて又もとへ、戻るか往くか白眞弓、春に醉うてぞ來りける。

ト本舞臺へ來る。この途端に、およしは地藏堂を離れる。

（およし）「ほらこそ良寬さまが來なさつたぞ。

皆々 〽ほんだ。良寛さまだ〳〵。

ト皆々ばら〳〵と前へ出て

甲 〽良寛さま、一貫！

トこれにて良寛いかにもびッくりしたらしく反り返る。

乙 〽良寛さま、二貫！

ト良寛前よりも大きく反る。

丙 〽良寛さま、三貫！

ト良寛又大きく反る。

丁 〽良寛さま、四貫！

ト良寛又反る。

五人一しよに 〽良寛さま、五貫!!

トこれにて良寛更に大きく反るはずみに仰向けに倒れて、かついでゐた錫杖をはうり出す。

皆々 〽わアい〳〵！　はゝゝゝゝ！

ト手を叩きて笑ひ囃しながら、トゞ寄りたかりて抱き起す。

良 〽やれ〳〵！　おらをえらい目にあはせるなう。

トいひながら、しづかに塵を拂ひつゝ起きあがる。

およし「良寛さま、その杖の棒の花ア何しにだかえ？

良「オヽこりやいつもん通り、おみたちと草相撲せうと思うてなう、これ、こんげえに摘んで來たがな。

甲「良寛さま、何しにけふは……

乙「あのいつもの鉢の子を……

丙「なんしに持つて……

皆々「ござらつしやらなかつたかの？

ト良寛はじめて鐵鉢を忘れて來たのに心附いて、驚く思入れ。

良「ホイー　鉢の子！

トうろたへるこなし。

あの鉢の子を、いつ、どこへ……

常「おきても、寐ても、何として、忘らりよものか、はしきやし、あの鉢の子は思ひ出の、いづち崎なるふる里を、立出でしより五十あまり、幾はる秋の朝ゆふべ、かひなに掛けて、手に載せて、眞しら玉かや、まな子かや、また無き友ともいとをしみ、手馴れしものを、いつ、どこで、憂き別れてふうつし世の、あぢき歎きをけふぞ身に、思ひしら髪わが心、かき亂れては立つらくの、立つても居ても、せんすべも、なみだ片手にさがそにも、あて嫋竹や細杖を、たゞ一筋の力草。

ト文句の通り良寛なげく振よろしくある。子供らもつい同感して氣の毒がる。

甲「あら、良寛さまがベソかいてござるだ。

およし　〽ほんに泣いてござる。なア、良寛さま、泣かッしゃるな〳〵。おけんなものだアれも持つてく筈なえすけイ、今にどッこぞで目ッかるだで、泣かッしゃるなてば。

乙　〽良寛さま、機嫌なほさッしゃれ。

丙　〽いつものやうにてん鞠でも突かッしゃれ。

・およし　〽ほんにそれが一ちえゝわ。

丁　〽良寛さま……

皆々　〽てん鞠突かう、てん鞠突かう。

このうちに良寛よろしく思入れありて

良　〽ほんにさうぢやなう。負うた子に浅瀬とは此事ぢや。南無阿みだぶ、南無阿みだぶ！　さア〳〵、突かうてや、突かうてや。

常　〽うなづき、うなぢの頭陀の紐、とく〳〵手に手、鞠しらべ。

ト文句の通り、良寛は頭陀袋より手製の美しき鞠を取り出す。同時に子供らもめい〳〵鞠を取り出すことありて

およし　〽さア〳〵、えゝかえ？　けふは負けたもんには罰イあてるてがんね。

良　〽罰あてる？　で、若しわしが負けたら？

およし　〽いつもん通り、何か（なん）おもしろえ話イして……

皆々　〽くらッしゃい〳〵。

良 〽おいよ、おいよ。だども、若しおみたちが負けたら?

およし 〽ほしたらなア、どんげん事でも、ナア……

ト皆々を見返る。ト皆々聲を揃へて

皆々 〽爲るがんね。

良 〽よし〳〵。さうきまつたら、さア〳〵、てん鞠の、はじまり〳〵。

テマリウタ 〽善導寺の鴉、お賽錢ぬすんで、田端へ寄つて、肴買うてたべて、喉に骨突き立つた。お千水くりよ、お萬水くりよ。お千もやアだ、お萬もやアだ。ほうろく鍋で、小石を積んで、ホヽウあぶないところ。

およしをはじめ五人を相手に良寛鞠を突く。「石なを積んで」といふ文句の切れ目で良寛鞠を取り落す。

およし 〽ホウラ! 落ちた。良寛さまの負けだ。

皆々 〽罰イあてれ、罰イあてれ!

およし 〽さア〳〵、話イして……

皆々 〽くらッしやい、くらッしやい!

良 〽なぢよしよもなんない! 話しましよ〳〵。

〽手鞠ひろうて、身づくろひ。

ト文句の通り、ちよつと支度することありて

〽むかし〳〵の物語、釋迦無二如來のいでまし、天竺の山奥に、仲よう暮らす猿、狐、うさぎの前世は人の身も、剛慈悲

道の報いにて、今畜生のあさましさ、悔みかなしみ、身を責めて、苦根積もる雪の夜半、うゑこゞえたる乞食の老翁、目はかすみ、腰は弓狀、竹の杖、つく息もたえ〳〵に、山路を辿りくるしげに、喃、物たべと言ひかけて、倒れかゝるを抱き起し、猿と狐は介抱を、うさぎに賴み山と川、猿は木の實を、狐は魚、とり〴〵に食ませ、いたはれば、やう〳〵に息いでて、あら、有りがたのみめぐみや、この上の情けには、あたゝめてたべ此肌と、言葉の下に狐と猿、枯れ枝あつめ、打火して、はやぼう〳〵と燃ゆる火を、うさぎつく〴〵うちながめ、あら、はづかしや、われのみは、何ひとつの功德もせず、冥加のほどもおそろしゝ、せめて炙り肴まゐらせん、はやめせ、と言ひもあへず、炎の中に躍り入り、生きながら燔き兎となりにける〽こじきの姿忽然と御佛と拜まれたまひ、美妙のおん聲ほがらかに、身を殺しても他を救ふ、これこそこよなき功德ぞと、うさぎの骸を搔きいだき、虛空はるかに上りまし、月の宮にぞをさめたまふ〽今も見るなる兎の影の、由來は斯くぞ子供たち、月の鏡に末の世永く、寫す情けの鑑、小うさぎ。

ト文句の通り、物語の振よろしくある。此話のうちに、子守ら感動したる思入れ、一ところに居ずくまりて、しほれ、物語が濟んでも尙ほ泣いてゐる。良寛それを見て

良〽ホイ、どうしたのぢや？　こんどはおみたちがベソかくか？　どうしたのぢや、どうしたのぢや？

およし〽おらアそのうさぎの燒け死んだんが、もけッけなうて、氣の毒で……

甲〽おらも、そのうさぎがかはゆさうで、かはゆさうで……

ト皆々泣く。

良〽感心々々！　よう兎をば氣の毒がりやる。それが情けといふもんぢや。慈悲といふもんぢや。それでこそ眞の人に

なれるてや。だどもナウ、もう機嫌をなほいて、さア〳〵、もう一遍、てん鞠、てん鞠！

トこれにて子供ら又立ちあがる。

良　〽さア、こんどはわしとおよしさと、二人の勝負ぢやぞや。

ト次ぎの手鞠唄の最初の一句だけは、良寛みづから歌ひつゝ、突きはじめる。

鞠唄　〽おらが婆さは燒いた餅が好きで、隣へよばれて、四十八たべた。〽一つ殘して袂へ入れて……

ト鞠をポーンと突いておよしへ渡す、およしそれを

〽馬に乘るとてコロ〳〵と落し…

ト歌ひつゝ受けようとするはずみに「コロ〳〵……」と歌ひかけて落す。

良　〽そらこそ落いた！　罰だぞよ〳〵。

皆々　〽さうだ〳〵。

甲　〽良寛さま、罰イなによ…

皆々　〽あてさッしやるの？

良　〽何がよからうかなう？　やッぱり、いつもの出雲崎の船唄がえいなう。

乙　〽サア〳〵、およしさ….

丙　〽いつもの出雲崎を…

皆々　〽うたはッしやれ、うたはッしやれ！

トこれにておよし次ぎの船唄につれてよろしく振。

〽いづも崎の羽黒町で、その名も高いお茶屋の娘、髪は嶋田で黄楊の櫛、着物は薩摩の紺がすり、帯は筑前上博多、白足袋はいて、下駄はいて、さらしの手拭ひ肩に掛け、小田原提灯手にさげて、姐さん、どこへ、と問うたれば、追分け習ひのその戻り、御所望ならば謡ひましよ〽今までは、それと知らずに浮氣もしたが、ぬしと定まりや、辛抱する。

良〽やんや〳〵！　面白かつた〳〵。

およし〽その代り、今度はナウ、良寛さまを鬼にして、目かくし鬼をしようて。さ、良寛さま、これさ結ッ附けさッしやい。

とおよしはじめ子供ら寄りたかりて、手拭ひにて良寛の目かくしをする。

良〽これはまた迷惑な！

目かくしを式の如くにしてしまふと、一同ばら〳〵と四方へ散つて

甲〽良寛さまが鬼だ！

乙〽良寛さまが鬼だ！

常〽目のなえ鬼さ、こつちさござれ、手の鳴るはうへ、とつとゝござれ、手の鳴るはうへ。

此文句二度繰り返す。その間に、二人三人づゝ舞臺を横切つて、二三度上下へ入れかはる。其都度良寛も追うて廻ること。

ト暮れ六つの鐘。風の音。花がはら〳〵と散りかゝる。櫻の梢に七日ごろの朧月が現れる。

二度目の文句のかゝりで、およしは他の子役四人へ何か耳打することありて、〽とつとゝござれ、手の鳴るはうへ」

で、わざとずつと上手まで走つていつて、二三人で大きく手を鳴らし、すぐまた拔き足して下手へ戻つて來て、うなづきあひ、次ぎの文句のかゝりで花道へ逃げてゆく。

常〽暮れずとも、よけき春日もたそがれて、梢にいつか七日月、さしあし拔きあし、小べッちよども、折からこゝへ野良がへり、家路へ急ぐ村男、口には煙管、くはを肩、駈けゆく姿、けげん顏、見返り〱あゆみくる、出あひがしらに良寛坊。

ト村男甚六、四十歳ぐらゐ、文句の通り、野良がへりの打扮、頰かぶり、くはへ煙管、鍬をかつぎ、花道にて子供らと擦れちがひ、不審さうに其うしろ影を見送りつゝ、本舞臺へ來る。ト

良〽そらこそつかまへたぞよ。

トだしぬけに甚六をつかまへる。甚六は驚いて

甚〽や！　お前さまは！　あれ！　良寛さまでなえかの？

トこれにて良寛手拭ひをはづすこと。

甚〽ま、お前さま、なんしてござらッしやるだか？

良〽お！　さういはッしやるは甚六さか？　わしは今子供たちと目かくし鬼をしとるところぢや。

甚〽はれ！　子供らはもうとうにいつてしまひましたてがんね。

良〽ホイ！

甚〽時に、良寛さま、これさ若しやお前さまがんぢやなえかの？

ト懷ろから鐵鉢を出して見せること。良寛見て、飛び立つほどに喜ぶ思入れ、急ぎ受け取りて

良〽おゝ、こりやわしの鉢の子！

常〽あら、嬉し、あら、かたじけな、み佛のかげかや、神の冥助かや、夢ではないか、現かや　今は世にないかなし子が、生き返つたら親心、かうもあろかや千よろづの、玉にも金にも代へられぬ、おらが獨り子、いとし鉢の子。

ト文句の通りよろしくありて

良〽どうしてこれをおぬしさが？

甚〽さればなう：：

常〽長い日もはや暮れかゝる山畑の、仕事しまうて歸り路、菫、たんぽゝ、すかんぼう、ぼんやり踏み出す爪先きに、おッとどッこい、牛の糞、かと思うたら、ころ〳〵〳〵、さては天からお授けの、黒い玉でもあらうかと、拾うて見たれば

甚〽これだ。お前さまがいつも持つてござらッしやるのらしえすけ、拾うて來ましたゞ。

常〽わたせば三度おしいたゞき

ト良寛鉢を何度となく押しいたゞきて

常〽あら、有りがたの佛菩薩、われらが菩薩、人の世の日ゝの菩薩ぢぬしたちの、粒々辛苦になりわひは、げにこそ國のおんたから、南無阿彌陀佛、阿彌陀佛、冥加あらせたまへやと、をろがむ聖者ぞたふとけれ。

ト良寛うや〳〵しく合掌し、膝まづきて甚六を拜む。甚六あきれて、會釋に困るをかしみよろしく。また風の音。櫻が少し散りかゝる。どこかで梟の啼く聲。

幕。

附言

良寛研究家の多い現代には餘計なことのやうだが、全く不案内な讀者もあらうと思ふから、曲中に引用した句意の出所を、引用順に左に列記しておく。

○山かげの岩間を傳ふ苔水のかすかにわれは住みわたるかも。

○頭髪蓬々耳卓朔、衲衣半破若雲煙、半醉半醒歸來道、兒童相擁後與前。

○風は清し月はさやけしいざ共に踊り明さむ老のなごりに。

○いざ歌へわれ立舞はむぬばたまのこよひの月にいねらるべしや。

○もゝどりの木づたひて啼くけふしもぞさらにや飲まむ一つきの酒。

○行々投田舍、正是桑楡時、鳥雀聚竹林、啾々相率飛、老農擁鋤歸、見我如舊知、喚婦漉濁酒、摘蔬以供之、相對言更酌、談笑一何奇、陶然共一醉、不知是與非。

○雨のふる日は哀れなり良寛坊。

○わが宿の軒端に春の立ちしより心は野邊にありにけるかな。

○飯乞ふとわが來しかども春の野にすみれ摘みつゝ時を經にけり。

○柴やこらむ清水や汲まむ菜や摘まむ時雨のあめの降らぬ間に。

○歌やよまむ手毬やつかむ野にや出む心ひとつを定めかねつも。

○也與兒童鬪百草、鬪去鬪來轉風流、日暮寥々人歸後、一輪明月凌素秋。

○冬ごもり春さりくれば飯乞ふと草の庵を立ちいでて里にいゆけば、玉鉾の道のちまたに子供らが今を春べと手まりつくひふみよいむな汝がつけばあは歌ひあがつけば汝は歌ひ突きてうたひて霞立つ長き春日をくらしつるかも。

霞立つ長き春日を子供らと手まりつきつゝけふもくらしつ。

○つきて見よ一二三四五六七八九の十、十とをさめて又はじまるを。

○日々日々又日々、閒伴兒童送此身、袖裏毬子兩三個、無能飽醉太平春。

○鉢の子は、愛しきものかも數妙の、家出せしよりあしたには、腕にかけて夕べには、手上に乘せて新玉の、年の尾長く持たりしを、けふ餘所に、忘れて來れば立つらくの、たつきも知らず、居るらくの術をも知らに、刈孤の思ひ亂れて夕づゝの、かゆきかゝゆき、谷ぐゝの、向伏すきはみ、天地のよりあひの限り、杖つきも、突かずもゆきてとめなむと、思ひし時に、鉢の子は、こゝにありとてわが許に、人は持て來ぬ、いかなるや人にませかも、千早ふる神のゝりかも、ぬば玉の夜の夢かも、嬉しくも持てくるものかよろしなへ、持てくるものかその鉢の子を。

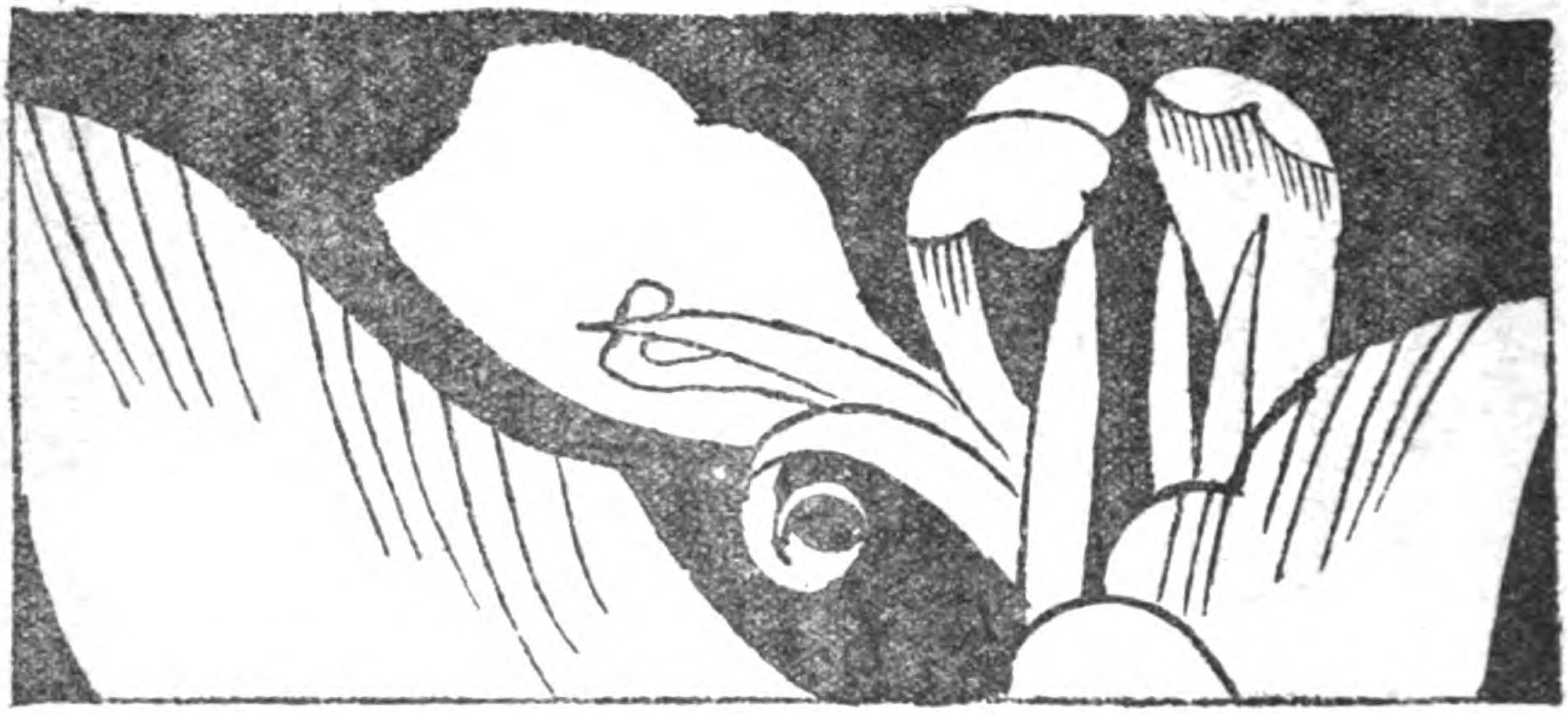
みちのべの菫つみつゝ鉢の子を忘れてぞ來しその鉢の子を。

○天雲のむか伏すきはみ、谷ぐゝのさ渡る底ひ、國はしもさはにあれども、人はしもあまたあれども御佛の、あれます國のあきかたの、其いにしへの事なりき、猿と兎と狐とが、ことをかはしてあしたには、野山に遊び夕べには、林に歸りかくしつゝ、年を經ぬれば久方の、天のみことの聞こしめし、いつはりまこと知らさむと、旅人となりて足檜木の、山ゆき野ゆき菜摘みゆき、食し物あらば賜へとて、尾花折り伏せいこひしに、猿は林のほつえより、木の實を摘みてまゐらせり、狐は梁のあたりより、いをゝくはへて來りたり、兎は野べを走れども何もえせずてありければ、いましは心ともなし、と戒めければはかなしや、兎うからをたまくらく、猿は柴を折りてよ、狐にはそれを焚きてたべまけのまにまになしつれば、ほのほに投げてあたら身を、旅人の牲となしにけり、旅人はそれを見るからに、しなひ

うらぶれ、こひ轉び、天を仰ぎてよゝと泣き、土に倒れてやゝありて、土うちたゝき申すらく、いまし三人の友だちに、勝り劣りをいはねども、あれはおさぎをめぐしとて、もとの姿に身をなして、からをかゝへて久方の、天津みそらをかきわけて、月の宮にぞはふりける、しかしよりして塚の木の、いやつぎ〳〵に語りつぎ、言ひつぎ來り瓢形の月のおさぎといふことは、それがもとにてありけりと、聞くわれさへに白妙の、衣の袖はしぼりて濡れぬ。

○子供らと手毬つきつゝ此里に遊ぶ春日はくれずともよし。

○かぐはしき櫻の花の空に散る春の夕べはくれずもあらなむ。



ドナウ・ホテルの殺人

下村千秋

一

時は、二月十二日の夜、嚴密にいへば二月十三日の午前零時より零時半の間、場所は、横濱の場末、海岸の裏通りのドナウ・ホテルの二階の一室、そこに於て一つの殺人事件が起つた。

被害者は、岸壯一郎といふ青年紳士、東京山ノ手に棲む富豪の主人で、年齢三十五歳。彼の咽喉を絞めた十番の鐵線が、肉の中にめり込んで、その兩端は稻妻形になつて彼の胸の上に突つ立つてゐた。

横濱の場末、海岸の裏通りのホテルといへば、そこを傳へ聞きにしてゐるものにも、凡そ想像がつくであらう。そこには、ドナウ・ホテルの外、Mホテル、Uホテ

ル、Hホテル、Dホテル、Sホテル、Nホテル、Kホテル等、大小併せて二十數軒の洋館、バラックか、三間道路をはさんで軒を並べ、酒とダンスと人肉の市場をひらいてゐる所である。世界中の港々に必ずある一つの治外法權地で、人間の煩惱を飽滿させることに於ては、全く無制限であり全く無障害であるところの天國と地獄の世界である。情慾の生命を亂舞させるために、神より與へられた生命を抵當として、生と死の境界を大洋を見る如く取り拂はうとする人々の集る場所である。

さういふ場所に於て、一つの殺人事件が起つたのである。これには少しの不思議もなく、むしろ當然あり得べきこと、して、吾々は特に驚く必要はない。只一つ、こゝに不思議と思はれ、驚くに足ると思はれることは、その被害者が、岸非一郎氏であるといふことであつた。

何故といへば、彼の境遇から見て、彼の日常生活狀態から見て、殊に彼の趣味から見て、彼は絶對にさういふ場所へ足を踏み入れる男ではなかつたからである。一例を言へば、彼の趣味は、建築と讀書と古代彫刻の蒐集に終始してゐたといつていゝ。その凝りやうは、その財力と併せて殆んど無際限であつた。彼の棲む屋敷は、高臺と谷とを含めて凡そ七千坪あり、松林と椎の森と花櫚の林と、芝生と花壇と溫室と、それらの中に彼は、再度の歐洲旅行から得て來た建築趣味に依つて、イタリー・フローレンスのルネサンス建築――オスペダーレ・デグリ・インノセンチ院を模したものを建てた。彼には子供がなかつたので、夫人と共に(B男爵家から嫁した人)四人の女中と三人の園丁を伴つてそこに棲んで見た。が、實際に棲んで見ると、小規模なだけ、本場のインノセンチ院の圓柱と廻廊の朗らかさはまるで味へず、彼は苦笑して、數年にしてその大部分を毀ち、その後へぐつと新らしくライト式の家を建てゝ見た。が、これにはすぐ飽きて、今度は松林の一隅へ、足利時代の建物――慈照寺銀閣の型を取つた家を建て、前の谷を利用して、相阿彌の作と傳へられる銀閣の林泉を模した庭園を、二年がかりで造つた。が、これも豫想の十分の一の味も出さうもないので、最近これにも厭氣がさし

次の新規な建物を考案中だといふことであつた。

他の趣味の凝りやうも推して知るべきである。要するに、彼の兩親の沒後、これまでの十數年間の彼の生活は、それらの趣味を次から次と間斷なく、また限りなく追ひ味はうとすることのみに埋められてゐたと言つていゝのである。

しかし、漁色家としての彼はどうであつたか。人に依つてはこの問題ばかりは、外の凡てと切り放し、全く別問題として考へねばならぬことであるが、これは、彼が、親ゆずりと同時に富豪子弟共有の性癖から、極端なる潔癖家であり、極端なる嫌人家であつたといふことで、その程度がはつきりする。人を嫌ふこと、殊に女を嫌ふことでは寧ろ病的といつてもよかつた。彼は、口紅を嫌ひ、耳かくしを嫌ひ、拔衣紋を嫌ひ、薄ものの羽織を嫌ひ、色つきのパラソルを嫌ひ、その身につく桃色を嫌つた。桃色を嫌ふことは分けてもひどく、彼は草花にすら桃色のあることを呪つた。で、この嫌ひなものを一つでも身につけ得々としてゐる女と相對することがあつたりすると、彼は終日胸惡がつてゐたほどであつた。

「漱石はどういふ理由で他の女に接しなかつたか知らぬが、僕には、妻以外の女は凡て汚ならしく、傍へ寄ることすら出來ない。その意味で、僕は漱石以上女房孝行だよ」と彼はよく言つてゐたほどである。また或る時は、

「妻すら無性に汚ならしく感じ、同じ部屋にゐることにも堪へられないことがある」とも言つてゐたほどである。

この感覺から彼は、トルストイやストリンドベルクやモウパッサンや、ダヌンチオなどといふ人間が曾て存在したそのことをも憤つてゐた。第一あれらの顏が見るに堪へないといふのであつた。

このやうな彼が、彼の嫌ひ呪ひ憤るもののみで埋まつてゐる横濱のホテル、しかもその種のホテルでも中以下のオールナイト○○エンといふやうなドナウ・ホテルへ、何故にまた如何して現はれたか。これが先づ一つの大きな謎であるのに、その彼がまたそこで最後の呼吸を止められてゐたのである。これは寧ろ滑稽なほどあり得べからざることで、彼のたつた一人の親友烏山が、

「鯨が箱根の山に死んでゐたやうなものだ」と言つたほどであつた。若し彼がこれを聞いたなら、この友を揶揄るだらうと思はれるほど面白くもない言ひ方であるが、これがこの場合の感じを一面現はしたほど、この事件は全く馬鹿々々しく不思議な事件であつたのである。

しかし、事實は飽くまで事實である。そして吾々は、この事實を前にしては、何故に如何して彼がこのやうな場所へ現はれたかを詮索する前に、何者に依つて如何にして殺されたかを先づ見極めねばならない。

二

この夜のこのホテルに於ける岸氏の相手の女は、ゆき子といふ混血兒に見るやうな顔とからだつきを持つた二十二の女であつた。

彼女は、この夜ウヰスキーに醉ひ、まるで狂人のやうに喜び勇み、錦紗の裾をスカートのやうにひろげ、十坪ほどのダンスホールの中を、壁から壁へぶつかりながら相手構はず踊り狂つてゐた。岸氏が二階のベットの上で殺された時刻には、彼女は、サンフランシスコ生れ、上海と横濱育ちのアメリカ青年と、夢中になつてチャーレストンを踊つてゐた。

「ゆきちやん、いゝ加減で寢て頂戴よ。大事なお客さんをおつぽらかしといて、まるで氣違ひだ」

おかみが、隣室の酒場のスタンドからさう叫ぶと、ゆき子はけら〳〵笑つて、

「いやーだよ。あたしやこの人と夜明し踊るんですよ」と吹鳴つて、アメリカ青年にかじりつき、延び上つて、その桃のやうな赤い、むく毛の生へた頬ぺたへ無暗と接吻する。アメリカ青年は喜んで鵞鳥のやうな聲を立てる。

おかみは舌打ちし、

「あいつの馬鹿にも呆れるよ」

その三十分ほど前である。岸氏は、ウヰスキーとヂンをちやんぽんに飲み、もう頭も上げられないほどに醉つて、ストーヴの前の椅子にぐつたりとなつてゐた。この時、ゆき子はショートタイムの客の相手となつて、二階の部屋へ引つ込んでゐた。おかみは幾度かゆき子を下へ呼んだが、ゆき子はつひに出て來なかつた。止むを得ずおかみは、自分で岸氏の手を執り、二階の一室へ案内した。岸氏はベットの上へ倒れると――あとであの混血兒(あひのこ)さんに水を持つて來さしてくれと苦しさうに言つたのである。

おかみは今、それを思ひ出し、ゆき子へ向つてさう叫んだのであつたが、さういふ有樣のゆき子を見ると、自分でその用を足してやる氣になつた。かういふ用事は、大抵の場合相手の女か、小女にさせるのであるが、今、水を運んでやらうとする客は、貴公子のやうに美男で、また途方もなく金ばなれがいゝので、特別の待遇なのである。二重顎の色白のでつくり肥つたおかみのからだは、蟹の肉の味だ、このホテルの七人の抱へ子のどの女も持ち合せてゐないものを持つてゐる、ビール一打と二晩分の金に依つて、一つお願ひは出來ぬものか、と眞顔で申し出る客が十人のうちに二人はあるので、おかみはそれを密かに自負してゐる。で、今、もしあの客がそれを申し出たら、前例を破り、プライベートとして實現して見てもいゝと、おかみはウヰスキーのまわつた胸の中に考へながら階段を上つて行つたのである。

客の部屋は、中廊下の突き當り、東と南に窓を持つた二坪半ほどのリノリーム張りの部屋であつた。ノックする迄もなく、ドアは三寸ほど開いてゐた。おかみは足の先でそれを押し開き、

「お待ちどうさまでした。お一人でお寒いでせう」と、お盆をティー・テーブルの上に置きながら客の方を見て、あつ！と叫んだ。

客はダブル・ベットの下の床の上に仰向けに倒れてゐる。胸の上に、二本の太い針金が稻妻形に突き立つてゐる。片手は横に眞直ぐ突つ張り、片手は、掛布團の眞赤な縮緬模樣を掴んでゐる。その顏は蒼白に、口は歪んだなりにかたく結ん

である。

おかみは椅子を蹴倒して、ドアの外へよろぼり出た。廊下から階段をころがり落ちた。ダンス・ホールのドアを開き、叫ばうとした瞬間、おかみは本能的にもなつてゐる商賣意識にぐつと制せられた。おかみは眼の光りへ凡てのものを集中して言つた。

「ゆきちやん! さつさとおいでよ!」

踊り狂つてゐたゆき子も、その聲には目が覺めたやうにぎくりとした。彼女はアメリカボーイの頬へもう一度接吻して、よろ〳〵とおかみの方へ寄つて行くと、溺死しようとするものが岩にすがりつくやうに、おかみの硬い闊い肩へ凭れかゝり、熟柿の息を吹きかけながら、

「マヽさん、ごめんねえ!」

おかみは、ゆき子を廊下へ引き出すと、ドアをばたりと閉め、

「ゆきちやん、冗談ぢやないよ。お前さんのお客が、死んでゐるよ!」

「何ですつて、おかみさん!?」

「大きな聲をお出しでないよ。外のお客に聞えるぢやないか」

ゆき子は、五足で階段を飛び上り、部屋へ入ると、死人の顏へ自分の顏を引き寄せて、瞬間ぢつとした。が、そのまゝぢり〳〵と後去りし、壁へ背中をはりつけると、恐い眼付でぢつと死人の顏を凝視した。

死人は眼をうす眼に開け、下唇を喰ひしばつてゐる。下顎に鮮血が二筋、すいと流れて咽喉に垂れてゐる。針金は、その咽喉を巻いて肉の中に喰ひ込まり、咽喉佛の所で一ねぢりぎりゝとねぢつてある。

ゆき子は、片手をあげて眼を蔽ふやうなことをしたが、そのまゝ崩れるやうにばたりと倒れた。おかみが傍から支へよ

うとしたが間に合はなかつた。ティー・テーブルが倒れる。その上のフラスコとコップが床の上にはね返つて割れる。その物音に小女が走り込んで來る。事件はすぐに下のホールへ傳つた。

三十分しないうち、他の六人の客は、ダンスホールにゐたものは眞先に、ベットへ入つてゐたものも、音も立てず身仕度をして、影の如く素早く、往來へ消え去つてしまつた。更らに三十分しないうち、二臺の自動車が玄關前へ止り、五人の刑事、警官が、冷たい風を酒場の中へ持ち込んだ。そして六人の女は三人の警官に看視されてホールへ監禁され、おかみと小女は自動車でY署へ送られた。ゆき子も署へ運ばれる筈であつたが、殆んど意識を失つて倒れてゐるので、ホールの隅のソファーに寢せられたまゝであつた。非常線はすぐに張られた。

その翌朝になり、嫌疑者として三人の大工と二人の左官があげられた。この五人の職人は、事件のあつた部屋の窓から三尺と離れないHホテルの新築場に働いてゐた者である。被害者の咽喉をしめた十番の鐵線は、その新築場の足場の圓太を結へたものと全く同じものであつたがためであつた。更らに夕方までに、八人の嫌疑者があげられた。出入りの商人、及びこのホテルの常連の或るものであつた。

けれど、これより三日の後、これ等嫌疑者は凡て解放された。他に犯人があがつたからである。作者はこゝで探偵小説を書くつもりはないので、その犯人をこゝで知らしてもいゝのである。

犯人はゆき子であつた。

ゆき子は、卒倒してから二日二晩のあひだ、夢魔に襲はれてゐるやうな眠りをつゞけ、三日目の朝になり、漸く意識を回復すると、一刑事の訊問に應じて、

「私が殺しました」とはつきり言つたのである。そしてそれまでのいきさつを明細に述べ立てたのであつた。

三

以上の描寫に依ると、ゆき子が犯人であることが餘りに唐突のやうに思はれる。犯人どころか、この殺人事件とは何のかゝはりもない人間のやうにすら思はれる。最初の訊問者の刑事すら、はじめはさう思つたほどであつた。だから若し彼女が眞犯人であるならば、以上の描寫が全然嘘僞であるとも思はれる。

しかし作者は、嘘僞の描寫に依つて讀者をたぶらかす必要は何處にもないのである。凡ては事實の描寫である。只以上は半面の事實の描寫であつたのである。他の半面――彼女が何故に如何にしてこの事件を起したかの事實の描寫は凡てオミツトしたのであつた。

何故さうしたか？　それは今玆で描寫することが、全く無益徒勞に終るからであつた。それほど、以上の結果的事實の中に織り込んで同時に描寫することが不可能であるほど、この事實には、彼女と被害者岸氏の歷史的過程が含んでゐて、そこから生れた不可思議な心理と感覺との交錯した事件であるがためであつた。これから作者はこの事實を描寫する段取りを取るのである。

玆で問題は自ら、始めの問題――岸氏が何故に如何にしてこのドナウ・ホテルの如き場所へ現はれたか？　そしてまた、何故にどういふいきさつを經て、一人の賣女ゆき子の如きものに殺されたか？　といふ二つの問題の詮索にかへつたわけである。

これより丁度一年ほど前、二月上旬のある午後のことであつた。岸氏は一人、書庫の肘掛椅子に凭つてぼんやり煙草をふかしてゐた。書庫とは、旣に大部分を取り毀して、今は二階と階下の一間だけ殘してある例のインノセンチ院を模した

建物の二階であつた。窓のステンド・グラスを通した橙色の光が、高い圓天井(ドーム)の下にほのかにあたゝかい色を漂はしてゐる。彼はこの色を愛し、この色に包まれて讀書する氣分を愛してゐた。この部屋を書庫としたのもそのためであつた。

橙色の光が鼠色に變りそめた夕方近くであつた。彼は、階段の下に人の跫音、それも忍び足の音をふと耳にした。つゞいて何か囁き合ふ二人の聲を聞いた。彼は直覺的に、或ることを感じた。彼は立ち上り、忍び足に階段の下り口まで行つた。そして半圓を描いて下つてゐる階段の下を覗いた。と、二人の男女の影がちらりと見えた。女の白いうなじと、男の太い二の腕が、下半身、觀音の立像のかげに隱れて、ちらりとしかもはつきりと見えた。――(その部屋は、彼の趣味の一つである古代彫刻のコレクションを置いとく庫になつてゐたのである。)それを見た瞬間、からだ中の血がかつと湧き立つやうな昂奮を彼は感じた。つゞいて彼の極端な潔癖性がむら〳〵と働いた。

「汚ない!」さう叫ばうとして口を開いたとき、彼は言葉を一つ一つなげつけるやうにかう呶鳴つた。

「だれだ! 待て! 動くな!」

彼は階段を走り下りた。そこには女中の澄と、園丁の定吉が、肩を縮めて立つてゐた。彼は拳を固めて、定吉の耳をなぐりつけた。定吉は二三歩よろぼつて辛うじて立つた。彼はつゞけて、澄の胸倉を力一ぱいに突いた。澄は、背後の觀音像に突き當り、それと一緒にばたりと倒れた。觀音像の胴が、澄の胸の上へ折り重なつた。

彼は昂奮のあまり口がきけなかつた。彼はさういふ澄と定吉を尻目に憎々しく睨めてから、階段を跫音高く登つて來た。再び肘掛椅子へ身を置いたとき、彼は胸の動悸が自分でも恐ろしいほど大きく鼓動してゐるのを感じた。彼は、書架の隅に備へつけてあるオーソーテルヌ酒を取り、銀カップへ溢らしながら飲み乾し、再び椅子へ凭れた。

階下からはしばらく何の物音もしなかつた。が、やがて何かを引きずるやうな音がして、それが部屋の外へ消えた。それは、倒れてゐる澄のからだを、定吉が外へ運び出したのであらう。

三十分ほどした。と、再び階下に跫音がし、それが階段を登つて來る。彼はまた立ち上つた。が、すぐに、その跫音は友人鳥山であることに氣づいた。彼は腰を下し、何故か慌てゝ煙草に火をつけた。

鳥山は、帽子も外套もつけたまゝ、黒坊主といふ態じで、眼鏡を寒さうに光らしながら彼の卓子の前へ近づいて來た。

「君が、この部屋にゐるのは珍らしいね」

「あゝ、二週間ぶりだ」

彼は強ひて平明な表情で平明な聲を出さうとした。

「何か面白い讀み物でも見つかつたの？」

「いや、なんにもありやしない。それより今日はこゝで、素敵な事件にぶつかつちやつた」

「何だね？」

「うちの園丁と女中の奴が、この階下で逢引をしてやがつたんだ」近頃僕はこの家を空巣にしとくもんだから、いつの間にかあいつ等が巣を喰つてたんだね」

「それで君はどうした？」

「二人を、力限りなぐつてやつた」

「それから？」

「それきりさ。女中の奴、怪我をしたかも知れない」

「どうりで、君はいつになく昂奮してゐると思つた」

「それが君にも解つたかね？」

「一目見てすぐ解つたね。とにかく君にしちや勇敢な行爲だつた。だが、そいつを奥さんには言はん方がいゝぜ」

「なぜだ？」

「奥さんは、君の言ふ通りを正直に取りやしないからさ。事件が事件だけに」

「さうかな……なるほどさうかも知れぬ」

鳥山は、書架から一册の本を引き出し、彼と反對の北窓の下のソファーへ行つて讀みはじめた。

彼は、今の鳥山の言葉から、先刻の自分の勇敢な行爲を内省しようとした。しかし彼には、彼の一徹の憤怒が、主人として爲すべきことを爲さしめたのだ、といふ風にしか考へられなかつた。

が、しかし、時間が經つにつれて、この一徹の憤怒が薄らぐにつれて、その後に、一つの不快な暗い滓が殘つた。そしてそれはだん／＼と色濃く重くなつて來た。それは彼自身にも説明しようのないものであつた。

その夜彼は、夢で、澄を冒した場面を見たのである。彼はその夢の中で、昨日の暴力以上の暴力を敢てした。これは實に堪らない不快な氣持であつた。定吉が澄に向つてしたやうなことを彼自身が普段に無意識に、澄に對して感じてゐたのだ、といふことをはつきりと裏づけたやうなものであつたからである。

事實、正直を言へば、彼はこの一年以來、澄に對し、意識的にも無意識的にも或る心情を動かしてゐた。彼の婦人癖がこの女に向つてはさう露骨に働かなかつたのである。

意識的に動く場合は、同時に彼の潔癖性が働いて、常に無事に濟んだが、無意識に動く場合は、後で考へてぞつとするやうな危機を彷徨した。澄が、彼のために何か用を足して引き下らうとして頭を心持ち下げたとき、彼の眼がふと、澄の白いうなじに止ることがある。そのうなじは、彼の妻にも曾てなかつた美しさを持つてゐた。彼はそれに或る悩ましい魅力を感じた。瞬間彼は、ある暴力的本能力に全く支配されることがあつた。

彼の妻には、砂のやうにさら／＼した感情と、クレープ・ペーパーの人形に見るやうな乾いた美しさしか殘つてゐなか

つたが、澄には、葉牡丹を見るやうな粗野な水々しさと生氣に充ちた柔らかさとがあつた。この感覺は、澄を眼の前に見ない場合にも、常に彼の心情を刺戟してゐた。さうして、彼は一人で顔を赤らめるやうなことを空想した。その空想の中でも、彼は暴力的行爲を敢てした。

昨日、定吉と澄との逢引を見て、彼としては生れてはじめての暴力、またさういふ二人を主人として制裁するには可なり常軌を逸した暴力を奮つたのも、この暴力的本能の一つの變形であつたのである。

朝食を濟すと、彼は憂欝な面を伏せて、例の書庫の家へ入つて行つた。階段の登り口で、彼の足はひとりでに停つた。彼の眼には、そこへ倒れた昨日の澄のあられもない姿態がはつきりと映つたのである。彼は最早主人としての立場から、彼等二人を裁決しようといふやうな考へを殆んど忘れてゐた。

彼は、書庫へ上ると、南面の窓際のソファーに身を沈めて、ぼんやりと煙草をふかしてゐた。殆んど二時間を彼は身動ぎもせずさうしてゐた。拂つても拂つても、不快な妄想が次から次と腦裡をかき亂す。

と、階段を登る跫音がして、昨日の鳥山が入つて來た。

「近頃また勉强家になつたんだね」鳥山は少し皮肉な調子で言つた。

「あゝ」と彼は答へたが、しばらくして「實は、この一年、僕は一頁の讀書もしなかつたよ」と寂しく言つた。

「でも、とき〴〵こゝへこもつてゐるぢやないか」

「讀書をしてゐるんじやないよ。近頃何だか、何處にゐても落ちつかないことがあるので、そんな時、こゝへこもつてゐるのだ」

「なるほど、こゝならそれには持つてこいの所だね。まるで廢寺の中だからね」

「廢寺はひどい。とにかく落ちつくよ。しかしあんまり長い間こもつてゐると、今度は頭がうんで來るやうな氣がする」

「それもありさうなことだね」

「四五日前僕は、隣の家（今は棲む人もなく荒れ果てたライト式の建物）へ入つて行つて、親爺のかたみの馬車を見たのだ。君に話したかどうか、あれは親爺がパリの日本公使館を引き上げるときに、二頭の馬ともに買つて來たものだが、今はほこりまみれになつて棄てられたやうにしてある。あれを見てゐるうちに、僕はふと、死んだ親爺の剝製を見てゐるやうな氣がして來たのだ。それ以來僕は、餘計に暗い落ちつかない氣持に囚はれてゐるのだ」

「さうかね、いや、さうだらうね。君のやうな生活をしてゐる人間が、今の時代に存在してゐることは、むしろ不思議なくらゐだからね。何かに對する冒瀆のやうな氣さへするからね。」

「それはどういふ意味だ？」彼は少し不機嫌に問ひ返した。

烏山は何も答へず、彼の面を冷たく見てゐたが、

「昨日の事件はどうなつたね？」と何かを探るやうに言つた。

「あれきりだ」

「行つて見てやらないのかね？」

「あゝ」

「少々無責任だな」

怪我をしたかも知れぬ澄を見舞つてやらないのが無責任なのか、彼等二人の問題を解決してやらうとしないのが無責任なのか、彼はそれを訊きかへさうとして、

「僕は、十年この方、女中達の家へ足を踏み入れたことがないからね」と答へた。女中達の家とは、例の銀閣を模した本屋から渡り廊下によつてつゞいた別棟の家で、そこに四人の女中と二人の園丁とは、岸家に三十年あまり任へてゐる或

老婆の監督の下に寢起きしてゐるのであつた。

「それで濟むなら結構だが」烏山は獨りごとのやうに言つた。

「……」彼はそれに答へなかつた。

と、再び階段を上る跫音がした。彼は椅子から身を起し、神經質な視線を階段の方へ注いだ。現はれたのは、園丁の定吉であつた。定吉は、デンドロビユームの鉢を兩手に捧げてゐた。彼は默つて卓子の隅を指した。定吉は近づき、示された場所へ鉢を置くと、しやんと立ち、

「後ほどで結構でございますが、少々お願ひがあります」と言つた。少し兵隊口調である。

「今そこでいへ。昨日のことだらう?」

定吉は烏山の面をちらと偸み見てから、

「はッ、實は、お澄さんがひどく發熱しまして、醫者を呼びましたところ、入院する必要があるといはれましたもので」

彼は椅子へ身を沈めて、煙草を取つた。マッチを擦つて火をつける手が少し顫へてゐる。

「……さうか。ぢやすぐ入院さしたがいゝ。奥さんにもその事を話したのか?」

「はッ、婆やさんから話していたゞきました」

「どういふ風に話さした?」

「急に發熱しましたから、とだけ申し上げてもらひました」

「その時の奥さんの返事は?」

「そりや、流行の惡性感冒だらうから、すぐ入院させるがいゝと、おつしやつたさうです」

「醫者もさう診斷したのかね?」

「醫者は、急性肺炎になる恐れがあるといひました」

「澄は、今も苦しさうかね？」

「今日はこん〳〵と眠つてゐます。ゆうべは夜通し、譫言ばかり言つてゐたやうです」

「もう、よろしい」

「それで……」

「解つてゐる。入院料のことだらう。その點はちつとも心配するなと言つてやれ。その他物入りがあつたら、すべて僕へ直接いつてくれ。奥さんへ言つてはならぬぞ」さう言ひ切つて彼は險しい眼をした。

定吉は、お辭儀をして、階段を下りて行つた。

鳥山は椅子から立ち上り、部屋のうちを歩きはじめた。とき〴〵眼鏡を冷たく光らして彼の方を見る。それは何か言ひ出さうとして、或る適切な言葉が探し出せないでゐるといふ風に見える。彼は、さういふ鳥山が薄氣味惡くなつた。

彼は、何かを追ひ拂ふやうにいきなり立ち上り、

「鳥山君、今日は失敬するよ。僕はこれから或るところへ行かねばならぬ」と言つた。

四

四十分の後、彼は愛用のピーヤス・ローを自ら運轉して神宮外苑の芝生に沿つた道を靜かに走つてゐた。煙に卷かれたものが、晴れた新らしい空氣を求めるやうにして彼は此處へ來たのであつた。

外苑の芝生はあつらひ向きに、からりと晴れた空を映して、遠く遙かに澄み渡つてゐた。彼は全裸體になり、その芝生の中を思ひきり走り廻りたいやうな衝動に驅られた。

彼は靜かに車を進ませてゐた。と、その二十歩ほど前を、一人の若い外國婦人が歩いて行く。光る黑毛の外套に、淡紅色の帽子をかむり、春草の莖を想はせるやうなすらりとした薄みどりの脚を現はして、こつ〳〵と歩いて行く。彼は自分の庭園の池に飼つておく愛禽の鵠をおもひ出してゐた。

彼の車が、彼女の五六歩あとへ進んだときである。彼女は、靜かにふりかへり、彼の方を流し目に輕く見たが、ふと彼の車を遮るやうに近づいて來て、

「Voulez-vous bien me prendre à le gare d'S?」(恐れ入りますが、私をS驛までお送り下さいませんでせうか)と、言つた。朗らかなテノールである。

彼は車を停め、一寸返事にまごついた。彼女の言葉が、彼の豫期しなかつたフランス語であつたのと、その申し出が少し意外であつたからであつた。が、彼はすぐ答へた。

「Volontiers!」(どうぞ)

彼が手を延べて座席のドアを開けようとすると、彼女は、

「Non, monsieur, je me contente de ce siège.」(いゝえ、わたし、こゝで結構でございますわ)と言つて、運轉臺へ彼と並んで座つた。座るとき彼女は彼の顔を見て、薔薇の花のやうな微笑を浮べた。彼は、その微笑と同時に、外遊以來忘れてゐた外國婦人の或る特種な香りを總身に感じた。

彼はふと、パリの郊外をドライヴしてゐるやうな氣持を感じた。外苑の風景がまた不思議とその氣持に調和した。さういふことから、また相手が外人であることから、彼の嫌人癖はこゝで働くひまがなかつたのである。

彼は靜かに車を進めた。進めながら、

「Etes-vous pressée, madame?」(お急ぎですか?)と訊いて見た。(以下、彼と彼女の對話は凡てフランス語であるが、飜譯

書いて置く）

「いゝえ」と彼女はまたふつくらと微笑して、「わたしは今日、こゝのグランドへラグビーを見に來たのですが、疲れたので中途で出て來たのです。それにひどく寒いもんですから、つひあなたにこんなお願ひをしたのですわ」

何年ぶりに、このなめらかな言葉のリズムを聞いてゐるうちに、彼の氣持はいつか、明るいスポンテニヤスなものになつてゐた。つひ先刻の煙に卷かれて窒息しさうになつた氣持は、跡方もなく消え失せてゐた。眼の前が急にパツと明るく突き拔けたやうな感じであつた。

この感じは、彼の外遊後三年間に、只の一度も味つたことのないものであつた。

彼のピーヤス・ローが、お濠端に沿つて日比谷の方へ疾走してゐた時分には、彼は今までになかつた新らしい別の人格へ乘り移つてゐる自分を感じた。そして彼はこのことを不審とも思はなかつた。彼は元氣な聲で言つた。

「もし、お急ぎでなかつたら、夕食をおつきあひしてくれませんか」

「えゝ、ありがたう。よろこんでおつきあひしますわ」

彼は、少しでも彼女を喜ばせようと思ひ、日本橋のK閣を選んだ。二十分の後、二人はそこの一室に座つてゐた。彼女はお世辭らしくもなく、障子をよろこび、襖をよろこび、床の間をよろこび、掛幅をよろこび、紙框に包まれた灯をよろこんだ。

彼はそこでやうやく彼女の顔をしみじみと見た。それはフランス人にしては、少し固い輪廓を持つてゐた。眼の凹み方顎の形がロシヤ娘を想はせた。しかしその唇は、ポインセチアの葉の如く赤かつた。彼はそれに或る神秘的な濃艶さを感じた。どういふ階級の女か、全然判斷がつかなかつたが、この場合彼に取つてそれは問題外であつた。

料理が出ると彼女は、上等の支那料理は、上等のフランス料理の三倍ほど美味であると言つて、丹藥のやうな指先へ上

手に箸をはさんだ。彼女は口を動かしながら、絶えずしやべつた。そしてやがてこんなことを言つた。

「わたしは、日本の方で、あなたのやうに上手にフランス語を話す方に出會つたことがありません。あなたはフランス育ちぢやありませんか？」

「いえ、そんなことはありません。只、僕の父と母がパリの日本公使館にゐたことがあるので、僕は子供の時分からフランス語を敎へられたのと、一九二〇年に一度、一九二五年から六年へかけて一度、フランスを中心とした旅行をしたことがあるのとで、それで少ししやべれるきりなんですよ」

「おゝ、フランスは何處に住みました」

「リオンとパリ」

「パリは何處です」

「主に、ノートルダムに近いセイヌ河の岸に」

「おゝ、わたしもあの邊に暮したことがあります」

「僕はあの河岸の古本屋の爺さんと仲良しになりましてね、なかなかの東洋趣味黨で、今でもときどき文通をしてゐます。つひ四五ケ月前も、あの爺さん、日本の都會情緒を代表するものはおでんやの提灯ださうだから、一つ送つて見てくれと言つて來ましたよ。こいつには笑つちやいましたが、構はず、一つ造らせて送つてやりました。すると爺さんすつかり喜んでしまつて、居間の天井へぶら下げて毎日眺めてゐる、と言つて來ましたね。あの赤い間ぬけた大きな提灯が、狹いくすぶつた部屋の中にぶら下つて居る所を想像すると、僕はいつでもふき出してしまひます」

彼はすつかり調子づき、そんなことを實に愉快さうにしやべりつゞけた。彼女は更らに調子づき、

「ハツハ、、、。そんなら今度は、日本の紳士が着る外套だといつて、印半纏を送つて上げなさいよ。そしたらその爺さ

んそれを着て得々然と、あのセーヌ河岸を歩き廻るでせうから」

二人はそこで大聲に笑つた。この調子は二人の行動を更らに思ひがけないものに移して行つた。そこを出て、玄關先へ置いといた自動車へ、彼女は彼より先へ乘りこむと、いきなりハンドルを握り、

「わたしにドライヴさしてね。そして今度はわたしに御馳走さしてね。これからある所へ行きますから」と言ひ出したのに對し、彼は、

「おゝ、ありがたう。よろこんで御馳走になりますよ」と言つたのである。そして五分後には、N町通の或るビルディングの前へ來てゐたのである。

彼は、このあたりは、大震災後は勿論、その以前もいつの年に來たことがあるかを殆んど知らなかつた。彼の生活はどういふ點からも、このあたりとは沒交渉であつたからである。それだけに、彼には生れて始めて見る都會の一部のやうな氣がした。それにK閣での老酒が快く彼の眼をかすませて來たので、ふと、パリのラテン街をうろついてゐるやうな自分になつたのである。

彼は、彼女に導かれてエレベーターへ入つた。と、微かにヂヤヅの音がきこえてエレベーターは止つた。

彼女は煙草に火をつけた。そしてくゞり戸のやうな小さなドアを開けた。突然、ワツとヂヤヅの音が風の如く彼等の總身を囚へた。つゞいてもやもやとしたうん氣が流れて來た。彼はふら／＼として、彼女の後に續いた。煙草の煙とうん氣と彼の醉眼とで、凡ては水底の如く見える。その中に、何十組かの男女が魚のやうにゆら／＼と踊り廻つてゐた。

彼は、日本では始めて見る世界であつた。しかし彼は不思議と、何の驚きも感じなかつた。當然來るべき所へ來、現はるべき世界が現はれたといふ氣がしてゐた。つひ數時間前、彼女と始めて會してしばらくしし、彼はそれまでの煙に卷かれて窒息しさうな氣持の自分を全く忘れたのであつたが、今は、つひ數時間前迄の自分の凡てを全く忘れてゐた。

「よし、飽くまで踊るぞ！」と彼は叫んだ。

「どうぞこちらへ」とボーイが案内する。スチーム・タオルが運ばれる。ダンス券を買はされる。

「お飲みものは？」

「プレーンソーダ」

彼はポケットから何枚かの札を無造作に掴み出して、その一枚をボーイの手に渡す。ボーイは急にカメレオンのやうな顔をして頭を下げる。

彼女は、彼の肩にすり寄り、長い脚を高く組んで坐り、悠々と煙を吐いてゐたが、やがて唄ひ出した。

………

ラーヂビオミ　グッドレアヅ

ラーヂビオミ　ペリオーズ

アイダヾ　アイダ

　アイダヾ　アイダ………

太陽と星の大旗がひるがへる。赤と青と黄の光りが交錯する。そこから湧き立つヂャヅが、ホール一杯を引つ掻き廻して、彼女のテノールを踏みにじる。

「こいつ、船唄なんぞを唄やがつて、やつぱりソヴヰットの百姓娘か」彼はそんなことをふと思ひ、それが更らに彼を愉快にした。彼はプレーンソーダをぐつと飲み乾すと、

「さア踊りませう」と立ち上つた。

「Ah! cher petit!」（おゝ、可愛いゝお坊ちやん！）

彼女は、眞赤な唇を大きく開けて叫んだ。そして黒毛のオーバを脱ぐと、乳房のふつくらと盛り上つた胸を押しつけて來た。瞬間彼は、さァーつと血液が逆流したやうに感じ、額の汗を拭つた。

二人は、踊りながらホールの外側を廻つて行つた。只、赤い色、青い色、綠の色、淡紅の色が、ぼやけた一圓となつて錦魚のやうに眼の前をゆれ泳ぎ過ぎる。しばらくして、白い顔が見えて來た。が、どれもこれも同じ顔に見える。みんなパリつ子の顔に見える。みんな眼を細めて陶醉した顔が、虹のやうに流れて行く。と、黒熊が立ち上つたやうな一組が過ぎる。外人の老夫婦である。お婆さんの腕にバックがぶら〱する。ローラー・カナリヤのやうなおしやべり聲が過ぎる。男の顔を顎の下に見下しながら九官鳥のやうな聲を出すヤンキー・ガールが過ぎる。鷲鼻に河童のやうな頭のドイツ紳士が過ぎる。

するいと彼女が、ほてつた息を彼の耳朶に吹きかけながら囁く。

「あなたが倒れるまで踊りますよ」

「いゝえ、あなたが倒れるまで踊りますよ。ところで、あなたなんぞと呼ぶのは水臭い。名を言つて下さい」

「おゝ、忘れてゐました。わたしの名は、ヂヤネット・ゲーナー、ぢやなかつた、そら、カトレア、、、」

「カトレア！　何處かで聞いたやうな名だ。僕にダンスを教へたパリのあの娘さんの名がさうだつたかしら」

「いやなことをおつしやる。そんな人の名とは違ひます。そら、花の名。メラコイデス、オプコニカ、エリカ、シクラメン、デンドロビユームなんどと一緒に咲いて、そしてそれらよりずつと仇つぽく狂ほしく咲く花。それがわたしの名ですわ」

「あゝ、わかつた。僕の庭の溫室にも咲いてる筈だ。白蓮に似て、もつと美しく、そしてたしかにもつと仇つぽい狂ほしい花」

「えゝ、それよ。素敵でせう。そしてあなたのお名は？」

「僕は、岸──キシといひます」

「お、キツシ!」

「いゝえ、キ、シ、……キツシぢや、キツスと間違へる」

「ハヽヽ、間違へたら、なほいゝわね」

そこで二人は聲を揃へて哄笑する。彼は、彼女の心臓の鼓動を直接に感ずる。彼の心臓の鼓動は彼女へ直接に傳はる。

そこには神祕と驚異の融合した夢が宿る。さうして彼は、これほどの夢は、彼の唯一の女──妻とすら經驗したことがなかつた。

チヤヅとレコード。間斷なく荒れ狂ふ騷音、ワルツ、フオツクス・トロツト、チヤーレストン……何十人かのダンサーが、チヤヅ團のステージの下へ一列に、雀のやうに並んでは散り、並んでは散る。さうして時は、時を超越して過ぎて行く。

彼はぐつたりと疲れて、ホールの隅の椅子へ凭れてゐた。彼女──カトレアは、まだ平氣で、鷲鼻と河童のやうな頭を持つたドイツ紳士と、とき〴〵甸高く笑ひながら踊つてゐたが、やがて彼の傍へ來て、

「たうとうあなたが先に倒れましたね。ぢや今晩はこゝでお別れしませう」と言つた。

彼は不足らしい顏をして、

「そして、これきり永久にさよならなんですか?」

「さうね」と彼女はドイツ紳士の方を流し目にちらりと見て、「ぢやまたお目にかゝりませうか」

「いつ?」

「さうね。來週の今日、夕方の五時」

「どこで？」
「T驛の婦人待合室で」
「きつとですね。間違ひありませんね？」
彼女は、口を尖らし、大袈裟に胸を撫で指を合せて十字を切り、
「死がそれをさまたげない限り」と言つて、彼を睨めるやうにして、につこりした。

五

その夜彼は、彼女――カトレアの夢を見た。ダンスホールはいつか彼の書庫に變つてゐる。そこで彼は例の暴力を揮ふ。彼女は力限り抵抗する。それが更らに彼を昂奮させる。そして××××××後、カトレアはいつか澄に變つてゐた。

澄が再び夢に現はれたことは、彼をまた憂鬱にし、腹立たしくした。彼は、昨日の、カトレアに會つてから別れるまでの自分を思ひかへして見た。あの明るいスポンテニヤスな自分になり切つた自分を思ひかへして見た。が、その自分は、けふの自分とは何のつながりもなく全然の別人のやうな氣がした。病的な夢に出て來る自分のやうな氣がした。

事實それは不可思議な人格の轉換であつた。澄と定吉との事件から、暗く鎖されてゐた彼の胸は、無意識に、パッと開けた世界へのはけ口を探してゐたのであつた。それが、カトレアの偶然の出現をきつかけとして、別人格へむしろ病的に突進して行つたのであつた。しかし彼自身はこれをはつきりとは自覺しなかつた。

さうして彼の胸は、カトレアを思ふとき、怪しくも妙に明るくなつた。澄を思ふとき、暗くなつた。呆んやりしてゐると、彼の胸は夜のオーロラの如く怪しくぎら／＼とゆれ動いた。

しかしこの明暗の彷徨は、その翌日になると、莫然とした一色に薄れて來た。更らに翌日になると、それは秋の夕の霧

の如く、暗く重く冷たく彼の眼前を鎖して來た。一度はあれほどからりと明るく突き抜けた眼前が、何故にかう鎖されて來たのか？　けれど彼はこの疑問を解くことを恐れた。

彼は幾月ぶりかで、庭園の南面の花櫚（かりん）の林へ出て行つた。その林の黑々とねばり強く延した枝を見て、ゆれ動く胸に力を吹き込まうとした。晩春に咲くその花――梨の花よりも深いうるほひを持つたその花を想つて、眼の前の霧を晴らさうとした。が、それは凡て無駄であつた。いつか彼は、カトレアと澄とを別々に考へることが出來なくなつてゐたのである。全く別種の、しかも緣もゆかりもないこの二人が、どうしてかう一つのものに溶け合つて、自分の眼前を暗くするのか？　けれど彼は、これをも解くことを恐れた。

カトレアと再び出會ふ約束をした日が明日となつた。その前夜のことである。彼は一寸としたことから、妻といさかひをした。ほんの二言三言のいさかひであつたが、彼はこれまでになく昂奮した。彼は冷酷極まる眼を瞠つて、妻の眼を凝視した。

妻は、結婚して十年のあひだに、始めてさういふ良人の眼を見た。彼女は唇まで蒼くして、

「今晩、里へ泊りにやつていたゞきます」と言つた。

「幾日でも泊つて來るがいゝ」と彼は突つ放した。

「そんなら、三日も四日も五日も泊つて來ます」と彼女は、三日も四日も五日もに力を入れて言つて、涙をホロ／＼こぼした。

彼は、妻の出る前に、洋服に着かへて、一人家を出た。一時間ほど、暗い樹立の通りを歩いてから烏山を訪ねた。玄關先で、

「外へ出てくれないか」といふと、烏山はすぐ外套をひつかけて出てくれた。

「馬鹿に元氣がないね？」烏山はさう言ひ出した。

「今晩に限つたことぢやない」と彼は不機嫌に言つたが、やがて「爆發しさうな憂鬱だ」と強く頭を振つた。

烏山は、それには何も言はなかつた。二人はしばらく無言のまゝ、人通りもない屋敷街を步いて行つた。やがて、

「たうとうやつて來たね」と烏山は、無氣味な低音を出した。「人間、半生を過ぎると、誰でも襲はれる憂鬱が、君にもたうとうやつて來たのだ。しかも君はブルヂョアだけに、一寸は救はれさうもない」

「僕は、資本家ぢやないよ」彼は、反抗する口調になつた。

「いや、資本家ならまだいゝ。彼等は鬪つて後斃れるといふところがあるから、立派にあきらめもつくだらう。君は、流れ口もない泥沼に棲む魚のやうなものだ。ぢつとしてゐれば、またぢつとしてゐるより外はないのだが、さうすれば、永久に枯れさうもない水の中に生きて來た魚なのだ。しかし、その水が一度腐りはじめたら、流れ口がないだけ、魚はもう救はれない。そして君の沼の水もそろ〳〵腐りかけて來たのだね」

「そりや詭辯だ。でなけりや君の友情から出る言葉ぢやない」

「君は僕に甘へようとするのか」

「君は貧乏人のひがみと殘酷さを持つてゐる」

「冗談ぢやない。僕は君から、鐚一文の恩惠を受けようとも思つたことがないよ。正直をいへば、僕は、君といふ友人を持つてゐることで、いつでも或る憂鬱な影を投げかけられてゐるやうな氣がする。僕は、「君の書庫のうづ高く積んだ東西古今の書籍を見、彫刻のコレクションを竝べたあの階下の暗い部屋を見る度に、沼の底に沈んだ泥を見るやうな氣がする。その臭氣を嗅ぐやうな氣がする。そしてさういふ中に平然と三昧境に浸つてゐる君を見ると、一つの奇怪な山椒魚を見るやうな氣がする」

「…………」

「さうして、あの隣の、今は棲む人もなく朽ち果てたライト式の建物を見ると、印度古代の遺物、エロースの窟院か、アチャンター窟院の一部を見るやうな氣がする。そこで酷使された當時の奴隷の骨の臭氣が、そのまゝあの中にこもつてゐるやうな氣がする。書庫のある建物はフローレンスのインノセンチ院を模したといふが、そのインノセンチ院は、別名に捨兒院とも呼ばれてゐるぢやないか。あの建物の地下には、赤兒の木乃伊が無數に横たはつてゐるやうな氣がする。君はその財力に任せて、あのやうな大きな名もなき墳墓を築いて來たのだ。さういふ中に平然と坐つてゐる君を見ると、僕は第六感のみで生きてゐる或る不可思議な相貌の佛像を見るやうな氣がする……」

「烏山、もう默らんか」

彼は息を切らしながら叫んだ。道は、片側から椎の森に黑々と蔽はれて、稍々上り勾配になつてゐた。そこをしばらく上つて行くうちに彼は、森の下の石塀へよろ〳〵と凭れかゝつた。そしてまた叫んだ。

「君は、僕を殺さうとするのか！」

「ハヽヽヽ」と烏山は冷たく笑つた。その聲が森の下に反響した。「少し恐くなつて來たね。だが安心したまへ、誰も君を殺さうとは思はないからね。只しかし、君が自滅する場合は、君であるだけに、誰もどうすることも出來ない」

「なぐるぞ！ ……君は、僕の生活を破壊するために、まるで出鱈目の假説を誇張して、僕を怯やかさうとしてゐる。卑怯者だ」

「君は、金持ちのひがみと臆病を持つてゐる。君は、自分から先づ告白したのぢやないか。爆發しさうな憂鬱と。つひ五六月前も言つてゐる。親爺のかたみの馬車を見ると、親爺の剝製を見てゐるやうだと。また言つてゐる。この一年間、一頁の讀書すらしなかつたと。僕は只、さうなつて來た君の生活の依つて來る原因を分解して見たに過ぎないのだ」

「そのことなら、君などに分解して貰ふ必要はない。僕自身がよく知つてゐる」
「知つてゐるだけぢや、知つたことにならない」
「君は何んにも知らないのだ。事の眞相を知らずに知つたかぶりの顏をするのが貧乏人の淺間しさだ。もう君の話は聞きたくない」
彼は、凭れた塀から身を放し、鳥山の方へ見向きもせず、坂を登りはじめた。鳥山はその後へついて歩きながら言つた。
「ほつといたら、君の憂鬱はひとりでに爆發するぞ」
「…………」
「そのときは、只死があるばかりだぞ」
「…ぢや、どうすればいゝのだ？」
「その憂鬱を自分から爆發させるのだ」
「それは自分を殺すことになる」
「或ひはさうなるかも知れない。が、ならないかも知れない。それは君自身の體力と意力とに依つて極まる」
「もつと具體的に言つてくれ給へ」彼は僅かに鳥山を顧るやうにしてそれを言つた。
「一切の所有を棄て、君の生來のブルヂョア的潔癖と嫌人癖とを同時に棄てゝ、君自身だけとなり、街頭へ出ろ、といふことだ。あの腐りかけた空氣に包まれた家屋と屋敷とを棄てゝ、民衆の中へ飛び出せ、といふことだ。君だから念を押しとくが、これを君の趣味の宗教心、藝術觀から解釋することは大禁物だよ。凡て明確な社會意識、世界觀から、確實に科學的に進出することだけが許されるのだ」
「ありがたう。理論としてはよく解る」

「理論卽ち行動だ。……しかし君の生活は、理論卽ち行動となる生活者とは、全然別の軌道を歩いてゐるのだからね」

「……おや、君は嗤つてゐるな」

「急に馬鹿々々しくなつたからさ」

「何が？」

「君は、あの女中の澄に、入院するほどの怪我をさしといて、それに對し物質上の責任だけを持ち、あとは恬としてゐる。さういふ君に何が出來るか、といふ氣がして來たからだ。さういふ君に向つて眞面目くさつてしやべつてゐた自分が馬鹿々々しくなつたからだ」

「宜しい。君は友情を弄ぶ奴だ。これ限り、君の顏は見たくない」

彼は急に大股に歩き出し、ぐん／＼と坂を上つて行つた。

「ありがたう。それで僕もせい／＼した」

烏山は、彼の背後へさう浴せかけて、坂を靜かに下りかけた。

坂を登つて行つた彼は、そこの十字路で一臺の圓タクを拾ふと、彼の家とは反對の方向へ疾走し出した。

間もなく、また一臺の圓タクが先の車を追つて疾走し出した。それには烏山がゐたのである。

二十分の後、先の車はTホテルの前へ來て停つた。車を出た彼は、外套の襟を立て、急ぎ足にホテルの入口へ消えた。

それを見屆けた烏山は、安心と不安と半々の氣持で車を引きかへした。

六

その翌朝、烏山が再びTホテルへ彼を訪ねると、彼は旣にそこを出てゐた。烏山は不安のまゝ空しく引きかへした。

その日の午後五時が來たとき、彼の姿はT驛の婦人待合室へ現はれた。それまで彼の身はどこをどう彷徨してゐたか、彼自身も殆んど知らなかつた。

カトレアは、三十分ほど遲れて姿を現はした。エメラルド色の帽子に、房々とした白毛の襟卷を掛けてゐる。その中に眞白な顏が包まれ、その芯をなすやうに唇がぽつちりと眞赤に光つてゐる。それはまことにカトレアの花であつた。

彼は大股に歩み寄り、その兩手を執つて、

「ありがたう、ありがたう。よく來てくれました」と溢れさうになつてゐた胸の思ひを一度に吐き出すやうに言つた。「さア、これから、この胸が爆發するやうな所へ連れて行つて下さい。」

「どこへでも來てくれます?」カトレアは、小首を傾けて少し甘へるやうな表情をした。

「どこへでも行きます。お金のことは御心配なく」

「おゝ、可愛いゝお坊ちやん!」

五十分の後、彼等二人は、横濱驛の眞白なからんとした構内の出口へ立つてゐた。いつか夜になつてゐた。前の廣場を横切つて、冷たい海風が吹き通つて來た。カトレアは一臺のタクシーを呼び、

「イセサキチヨー、シブヤオデン」そんなことを言つてホツ〳〵と笑つた。十分の後、二人は、紺の暖簾のかゝつた家の土間のテーブルをはさんで坐つてゐた。

「こゝは、横濱の通人が來るところですよ。日本橋のK園よりずつと素敵でせう」

カトレアは、ハンドバツクから出したコンパクトへ、いたずらつ兒のやうな顏を映しながらそんなことを言つた。

彼はそこで、始めておでんといふものを食つた。カトレアは何かひつきりなしにしやべりながら日本酒を飮んだ。彼には日本酒を飮む習慣はなかつたが、カトレアに負けず盃を乾した。

二時間の後、彼はカトレアに腕を執られてそこを出た。足元の大地が大きく波打つ。一目に見渡した夜の街の灯が、無數の花火の如く虹の如く、素晴らしく美しくきらめきゆれた。彼は大聲に叫んだ。

「おゝ、街頭！」

「さア、行きませう、あなたの胸の爆發するところへ」

カトレアは、彼の背を抱へて、タクシーへ押し込めた。タクシーは、彼が一本のアルハンブラをすひ切らないうちに停つた。岡の上の冬草と枯木を海風が吹き鳴らしてゐるやうな所である。振りかへると、遠く街の灯と、海と、船の灯とがきらくとまばたき輝いてゐる。

「これはルアーブル？　それともマルセイユ？　ナポリの港？」

「いゝえ、あなたの大好きなカトレア姫の港」

カトレアはさう言つてから、とある洋館の門柱を跨いで馬蹄形に押し立てた看板を仰ぎ、

「これがわたしのお家よ」

彼は、よろめく足を踏みしめて、聲を出して讀んだ。

「ダンシング・ホール……キユウル・アネエ・ホテル……はゝア、薔薇の谷ホテル、こりや素敵だ」

「一度入つて、その薔薇の花の香に醉つたら、二度と外へは出られませんよ」

地母蘭が兩側から硬い葉を突き出してゐる。その間をだらくと下つて行くと、いきなりピアノとヴアイオリンのヂヤツが響びき渡つて來た。玄關へ立つと、カトレアは、

「おきやくさアーん」

と、流暢な日本語で叫んだ。（以下彼女は多く日本語をしやべる）

小女が出て來て、彼の外套と帽子を取つた。部屋を入ると、そこは酒場である。一人の若い外人が、スタンドへ肘をついてホツトウスキーを飲んでゐる。窓際のテーブルには日本紳士が三人、女を相手にビールを飲みながらストヽン節を唄つてゐる。

「やア、おかへり、今日はまた結構な御同伴で」と、前頭のよく光る紳士がカトレアを仰ぐ。

「こないだのお河童さんのドイツ紳士は、ありやどうなさいましたね」と、大きな赤鼻の紳士が聲をかける。

「しツ、およしなさいよ」と、傍の女が言ふ。

カトレアはツンと顎をあげて、彼の腕を抱くと、

「さア、こちらへいらつしやいね。こゝでは何を踊つてもいゝんですよ。わたし達はチエーク・ダンスをしませうか、ハツハ……」

そこは天井の低い十坪ほどのダンスホールである。ピアノとヴイオリンの騒音が、ちんばを引きながら部屋中をころげ廻る。それに引き廻されながら五六組が踊つてゐる。オレンヂスカートとラツパズボンと、友禪模樣と縞ズボンと、おさけと赤ネクタイと、接吻とさゝやきと、吐息と哄笑と、それ等が、左右の壁鏡の中に、綾をなしてもつれ亂れる。

彼は、一週前の東京でのダンスホールと對照し、只呆然と突つ立つてゐたが、つひに隅のソフアーへ行つて、どさりと身を投げ掛けてしまつた。

反對側の隅のストーヴの周圍には、三人の紅毛人が、アスパラガスの葉を挿したハンチングを横つちよにかむり、めいめい一人の女を傍にして、途方もない辭でしやべり立てゝゐる。

「ねえさア、いつまでおしやべりしてないでさ」それは猩々紅冠鳥のやうに洋裝した女である。

「このひと、きがはやい。いやぢやありませんか」

おやぢが芋のやうな顔をした男が、妙なアクセントでさう言ふ。
「いやーな人。活動へつれてつてと言つてるのぢやないの」
「あゝ、あゝ、デンジロ、チヤンバラ、よろし」
「わたしは、ウイスキーをいたゞきますよ」これは黒襟に黒繻子の帶をした年增である。
「なんぼでも、おあがりなしやい」
「おい、マコちやん、またハダカダンスしよか」
「あんたが踊りや、踊らなくつてさ」これは斷髪に眞赤な帶上げを胸の上にひろげた女である。
「コシマキばかりで、海岸までおどつたひと、どれ？」
「あの、オレンヂのスカートさ。おかげで三日も稼ぎそこなつたとさ」
と、隣りの酒場からカトレアの方へ大きな聲が起つた。
「おい、フエブローニヤ、いやに澄してやがるぢやねえか」
「ちよいと錠前屋のおかみさん、只で見せとくつもりかえ」
彼の肩に凭れかゝつてゐたカトレアは、煙草の煙を輪に吹きながら、
「えゝ〳〵、あとでどつさりおごりまつせ」
と、今度は高島屋の聲色で、
「どこの公爵樣か知らねえが、いや、すてきなかもだア……」
「ちえツ、この人は Dorian Gray、わたしは Marguerite、あなたなんかに眞似も出來ない」
ソフアーに身を沈めてゐる彼は、醉眼をひと所に集めてぢつとしてゐた。彼は、自分のからだが、幾つもの影に分裂し

てしまつたやうに感じた。そしてそれらが一つ一つ、自分から遠のいて行くやうに感じてゐた。彼はその影に向つて、手を延べ大きな聲で呼ばうとした。しかし自分は小聲一つ出せなくなつてゐる。自分はどういふ所へ來たのだらうか？、それをはつきりさせる意識も飛散してしまつてゐた。彼はぢりぢりしながら徒らに兩眼を輝かしてゐた。

彼は、反對側の壁鏡に映る自分を見ようとした。それに依つて自分の實在をはつきり摑まうとした。しかしそこには無數の影と色と光と音とが果てもなく踊り廻り、荒れ狂ひ、彼の姿をも無茶苦茶に掻き亂し、無數の細片としてしまふ。相向ふ二つの鏡面の中の物體は、その二つの鏡面へ無數無限の影を映すといふ現象が、こゝにも働いてゐたのであるが、彼はこの現象を自分の心理の現象としか考へなかつたのである。そして彼の心理もまた、この鏡面と同じ作用をしてゐたのでもあつた。

鏡面を凝視してゐた彼は、やがてくらくらと、部屋がゆれめぐるほどの眩暈を感じ、傍へごろりと倒れてしまつた。

「ねえ、そんなに苦しい？　ぢや、二階のベットへ休みませう。さア、しつかり立つて」と、フェブローニヤのカトレアは、彼の肩をゆすぶつた。

「水だ、水だ」彼は打つ伏したまゝ息聲で叫んだ。

彼女は、ビールカップへ水を運んで來ると、彼を抱き起し、一息に飲み乾させた。それから彼の片腕を自分の肩に背負ひ上げ、

「坊ちやんでしようがない」と言ひながら、ホールを横切り、ドアを開け、二つに折れた階段をどしどしと登つて行つた。

七

その夜彼は、生れて始めて、人間の獸性とその美しさを見た。

それは、彼の裡に、五感以上の自分を目覺めしめ、同時に五感以下の自分を創造せしめた。そしてそこには、驚怖に近い恍惚が靜かに渦巻いてゐた。

次の夜遅くである。彼は、自家へかへるために、京濱電車の二等室にゆられてゐた。この時、彼は耳の底に、今まで聞いたことのない不思議な物音を聞いた。それは、今まで彼の周圍を取り卷いて積み上げられてゐた或るえたいの知れぬ物質が、ごとり、ごとり、と一つづゝ、崩れ落ちる音にも聞えた。厭に空虚でそして、或る重さを持つひゞきであつた。

それは實に堪らなく寂しいひゞきであつた。彼は何かに取りすがらうと藻掻いた。藻掻き苦しんでゐるうちに、彼の胸へふと浮んだのは澄であつた。

彼はほうつとした。彼は殆んど夢中で、その澄へ取りすがつたのである。つひ數日前までは、彼の胸を徒らに暗く重くするばかりの澄が、今は、彼のためにさういふ働きをしてゐるのである。そしてそれは、實に充實した新鮮な存在として働いてゐるのである。彼のからだは本能的にその澄の方へ吸はれて行つた。彼はそれに依つて辛うじて、先刻のいやなひゞきを防ぐことが出來た。

彼は、S驛から傭つたタクシーを門前でかへして、一人、兩側からヒマラヤ杉の繁つた門内の砂利道を、毀れものを運ぶやうにして、靜かに歩いて行つた。

と、暗闇からいきなり、愛犬のテリヤが飛びついて來た。彼はぎよつとして、力一ぱいその首を拂ひ除けた。と、また大きな黒い影がひよつこり現はれた。彼は更らにぎよつとして、

「だれだ！」と叫んだ。

「おかへりなさいまし」と黒い影は答へた。

「だれだ？」

「私でございます。定吉でございます」

彼は息をはづませて、

「貴様か。こんな所でだしぬけに、馬鹿な奴だ」

「申し譯ありません。實は旦那様へ直接祕密に申し上げたいことがありますので、茲にお待ち申してゐたのでございます」

「お金のことか？」

「いゝえ、實は、あのお澄さんが、たうとう死んでしまつたのでございます」

「え？　もう一度はつきり言へ！」

「お澄さんが死んだのです」

「それは、ほんとうか？」

「こんなこと、嘘を申されるものではありません」

「なぜそれを僕に知らさなかつた」

「昨日も一昨日も、旦那様のお姿が見えませんでしたので」

「よし、それぢや、これから病院へ行かう」

「いゝえ、もうお骨にしてしまつて、葬式も目黒の親の家で今日の夕方に濟んでしまひました」

「一體、いつ死んだのだ」

「一昨日の夜中です。昨日も今日も旦那様のおかへりを待つてゐたのです」

「……………」

「それでお願ひがあるのですが」

「何でもいへ」

「お金のことでございます。お澄さんの父親が、旦那樣の仕打ちについて、少しつむじを曲げて、これから旦那樣の所へ怒鳴り込むのだ、などと言つてますので、私が代つて來たのでございます。……お金をたつぷり惠んでやれば、それで萬事無事に落着することゝ存じますのです」

「金なら、ほしいといふだけやらう。明日、僕の部屋へ取りに來い」

「いゝえ、實はそれを今晩中にいたゞきたいのです。葬式その他の費用、凡て待たしてありますので」

「ぢや、これから僕の部屋へ來い」

彼は、自分の部屋へ、他人の家へ忍び込むやうにして入り、定吉を誘ひ入れた。そこで彼は、金庫にあるだけの現金と小切手とを定吉の手に渡した。その金額は、澄の父が望んだ額の十倍に當つてゐた。

それを見た定吉は、また言ひ出した。

「實は私も、今晩限り、お屋敷をおいとまいたゞきたいと存じます」

「それは何故だ？」

「わけは申し上げなくとも、旦那樣にはよくおわかりのことゝ存じます」

さう言つてゐる定吉から、彼は脅迫に似た或る壓迫を感じた。彼は稍々たじろぐ風に、

「……さうか。ぢやお前の好きなやうにするがいゝ」と言つた。

彼はそこで、澄の父親の與へた金額の半額ほどを、小切手で、定吉の手に持たした。定吉はひそかに狡猾な笑ひをもらした。

定吉のかへつた後、彼は殆んど喪心狀態で何時間かをそこに坐つてゐた。庭の池の水鳥か、朝の光を吸ふために飛び立

つ頃、彼は二階の寢室へ上つて行つた。

と、そこには、里へ泊りに行つてゐる筈の妻がゐた。妻は、着物を着たまゝ、寢床の上にきちんと坐つてゐた。そして彼の姿を見ると、わーッと聲を立てゝ泣き伏してしまつた。

彼は妻を抱いてやつた。しかしそれはまるで、木偶の坊を抱いてゐる感じであつた。

こゝで作者は、一足飛びに、一年後のこと、卽ち、彼の死の前後の描寫に移らうと思ふのである。何故なれば、この一年間の彼の變化は、これ迄に說明して來た彼の心理狀態をそのまゝ、讀者の想像に依つて布衍して行けば、充分に解ることだからである。

作者の友人が、曾て古井戸へ落ちたことがある。藪へ篠竹を切りに入り、過つて落ちたのである。幸ひ怪我もせず水も淺かつた。が、五十尺あまりの深さで、底は袋のやうにえぐれてひろがり、自分の力で出ることは全く不可能であつた。すると、そこに一疋の大蟇が、彼より先客に落ちてゐたのである。蟇は眼を光らし大きな手をひろげて、彼の方へ泳ぎ寄つて來た。彼は殆んど氣絶せんばかりに怯かされた。彼は叫び聲をあげ、蟇の足を引つ捕へるや、夢中で天上へほり上げた、けれど蟇は壁面にぶつかつてばしやりと落ちて來た。彼はそれを幾十度となく繰りかへした。蟇は彼の頭や首筋へも落ちて來た。彼は疲れて來た。蟇を放逐することは全く不可能となつた。彼は聲限り救ひを呼んだ。が、それにも疲れ果てた。一晝夜が過ぎた。彼は死を覺悟した。すると、その大蟇が彼にはなつかしいものに思はれて來た。死を覺悟した自分の前に、一つの生きものが泰然として存在してゐるといふことが、堪らなく心強く、そしてなつかしく思はれて來た、といふのである。

この一年間の彼の心理の變化は、右の話によく似てゐる。

彼はこの一年間に、凡そ四十度ほど、キュウル・アネエ・ホテルを訪ねた。十度ほど訪ねたとき、彼は、自分は古井戸の底へ陷ちてゐることを知つた。彼は心中におののきながら、自分の棲み家へかへつて來た。が、そこも同じ古井戸の底であつた。そこには烏山が曾つて言つた廢寺に似た建物、病院を想はせる建物、親爺の剝製の馬車、泥沼の臭氣を發散する書庫とコレクシヨンの置場があるだけである。この方がむしろ怖ろしい古井戸であつた。彼は全身の精力と意力とを以て、こゝから脫出しようとした。烏山の所謂街頭へ、民衆へ、まつしぐらに進出しようとした。が、その足場、手がかりは何處にも見出せなかつた。街頭なるもの、民衆なるものは、何十尺の深い竪穴を通して、かすかに明るく見えるだけであつた。烏山は曾て、彼の建物を指し、君はその財力を以てかくの如き無用の墓を築いた、と言つたが、今は、彼自らその財力に依つてこの古井戸を掘りつゝあるのであつた。彼は烏山に向つて救ひを呼ばうとした。が、今はその聲を烏山の耳に屆かせることも不可能に思はれた。こんな時、あの澄がゐたら、と彼はそれを痛切に思つた。

彼は自分の棲み家が怖ろしくなつた。そしてまたホテルへのがれて行つた。が、それは二つの古井戸の底を通ずるトンネルを往復するやうなものであつた。動くことは外界へ出ることにはならなかつたのである。

二十度ほどホテルへ出入したとき、彼は相手のカトレアが非常に恐ろしい怪物に見えて來た。彼はこの怪物をあらゆる方法で、その世界から放逐しようとした。がそれは全く不可能であることがやがて解つた。彼女は、暗黑と腐敗水の中にも平氣で棲める兩棲動物だからである。その上彼は、彼女に取つて無盡藏の食物でもあつたからである。

この頃彼はよく自分の死を思つた。さうして彼は、朝、ホテルのベッドの上に眼を覺し、ぼんやりと煙草をふかしてゐると、例のひゞき、何かえたいの知れぬ物質の崩れる寂しいひゞきを耳底に聞いた。はじめそのひゞきは、からだの外からひゞいて來たのであつたが、今は、からだの裡からひゞいて來た。彼はそれを、心臟の崩れる音ともきゝ、骨格の毀れる音とも聞いた。彼は死を思つた。

三十度ほど訪ねたときである。彼はいつかこの世界を唯一の安住所と思ふやうになつてゐた。そしてカトレアが、彼の唯一の心頼みであり、好侶伴であるやうになつてゐた。彼は最早、外界の光をすら恐れるやうになつてゐた。

この頃、彼の妻は肋膜と稱し、一人の女中をつれ、里の母親に伴はれて、遠く瀬戸内の海岸へ、半永久的に轉地してしまつた。そしてその後へ、里の父親――B男爵が、後見人らしい顔付をして住みこんで來た。

彼には最早、どの意味でも、自家へかへる必要がなくなつた。彼は熱海のAホテルへ自分の居間を移し、そこからキウエル・アネエ・ホテルへ往復した。

かくて一年が過ぎたのである。そして二月十二日が來た。

その夕方、彼は伊勢佐木町のH堂の三階で、一人支那酒に醉ひ、機嫌よく口笛を吹きながらカトレアのお家を訪ねた。と、カトレアは留守であつた。その日は日曜であつた。

「あいつ奴、また東京へ出稼ぎに行きやがつたんだらう」と彼はスタンドのおかみへ言つた。この頃の彼は、わざと下司つぽい物の言ひ方をするやうになつてゐた。その顔も妙に鋭どく蒼褪めてゐた。この一年間に彼は全身の血液の半分を失つたやうになつてゐたのである。

「あなたを差し置いて、だれがそんなことをするものですか。そんな必要もなし」

「馬鹿言へ、あいつは、アザラシ見たいな奴だよ」

彼は立つたまゝウヰスキーを飲んだ。今までかういふ場合には、彼は部屋のベッドでカトレアのかへりを待つてゐるのがきまりであつたが、その夜の彼は、なぜかさうするのが癪であつた。

彼は、酒場からダンスホールを一廻りして來ては、スタンドの前でウヰスキーを飲み、ヂンを飲んだ。そして少し呂律が怪しくなるまで醉つた。彼はおかみへ怒鳴つた。

「おい。代りを出せ。そら、五六日前始めて來たといふ女があつたろ。俺の顔を遠くからちらりと見て逃げてしまつた奴さ。あいつを出せ」

「まア、そりや無理よ。カトレア姫に殺されますよ」

「その前に、あいつを殺してやる」

「それにね、あの子は、たつた一晩きりで、何處かへ出たなり、歸つて來ないんですよ」

「何處へ行きやがつたんだ？」

「大方、い丶人がつれ出しに來たのでせう」

「あいつは、混血兒（あひのこ）だね。カトレアより十倍も上等だつたぞ」

「冗談ぢやありません。只のニッポン・ガールさ」

「逃げられたもので、何とか言つてやがる」

さう言ひながら彼はダンスホールの隅のソファーへ行つた。そこにはマコちやんといふ女が、寢ころんで葉卷をふかしてゐたが、ふと起き上り、彼の耳元へ口を寄せ、

「ねえ、キイさん、わたし、あの混血兒さんのゐどころを知つてるわよ」と囁いた。

「何處だえ、教へろ」

「只ぢやねえ——」

彼はポケットから一枚の札を摑み出してその女の手に持たした。女はニヤリとして、

「ね、そら、この山を越して、海岸の裏通りのドナウ・ホテル、あそこへ行つてるわよ」

三十分の後、彼はドナウ・ホテルの前へタクシーを停めてゐた。彼はステッキで、玄關の柱をなぐつたりしながら、よ

ろ〳〵と入つて行つた。丸髷に黒襟のでつくり肥つたおかみが出て來た。これも少しよろけながら、
「おゝ、ウエルカム、マイボーイ」といふや、いきなり熟柿臭い口を近づけて來て、その濡れた唇を彼の頰へべた〳〵と押しつけた。

彼は內ポケットから、大きな札を一枚出して、おかみの手に持たせながら、
「おい、君んとこに、四五日前來たばかりの混血兒さんがゐるね。あいつを賴むぜ」

おかみは、手の內の札を見てびつくりし、その札を兩手に持ち、猫が毬を持つたやうに持ち廻りながら、醜いほどに顏を歪めて喜んだ。
「おい、その子はゐないのかえ？」
「あゝ、つひぼんやりしちやつて……えゝ、えゝ、ゐますとも。さア〳〵どうぞこちらへ」

酒場には支那人らしい男が二人、ビールを飲んでゐた。となりのダンスホールには、三四組がレコードで下手なワルツを踊つてゐる。その周圍を大きな黒猫がうろ〳〵してゐる。おかみは階段の下へ立つて景氣よく、
「ちよいとゆきちやん、大至急、下へ來て」

返事をして、やがて階段を下りて來た女は、ストーヴの前の椅子に首を垂れて掛けた彼の姿を見ると、そのまゝ忍び足に引きかへしてしまつた。

おかみはまた女を呼んだ。今度は返事もない。
「困つた子だねえ」おかみは、階段を登つて行つた。四五分して下りて來たおかみは、彼の傍へ凭れるやうに立つて、
「あんたがあんまりいゝ男なので、あの子は恥かしいんだとさ。まるでおぼこだからねえ」

彼はそこでまたウヰスキーとヂンをちやんぽんに飲んだ。そしてぐつたりとなつてしまつた。その間におかみは、三四

度二階へ往復したが、最後に彼の手を執つて、
「ねえ、もう十二時ですから、お休みしませう」と彼を引き立てた。
彼は二階の部屋へ上ると、上衣とカラーを取つただけで、ごろりとベットへ倒れてしまつた。倒れたまゝ彼は言つた。
「あとで、あの混血兒さんに水を持つて來さしておくれよ」
彼は眠るまいと努力した。周圍の壁に、活動俳優のブロマイドや、三色版の風景がべた／＼に貼られてゐる。彼はそれを一つ一つ見ることに依つて、半ば夢心地ながら眼を開いてゐた。
と、やがて女が、忍び込むやうにこつそりと入つて來た。なぜか眼を泣き腫らしてゐる。そして窓の下に立つたきり身動きもしない。彼はこの時始めて女の顏をしみじみと見たのである。と、その眼が急に異樣に輝いて來た。彼はベットの上に身を起し、
「おい、お前は澄ぢやないか！」と叫んだ。その顏はむしろ凄かつた。
女は兩手を顎の下に縮めて顏を伏せた。彼は更らに身を起し、何とも言へない鋭どい聲で、
「おい、おい、お前は澄ぢやないか！」
瞬間、彼は現實と夢を全く混同してしまつた。やがて女は、ふるへ聲で答へた。
「えゝ、わたし、澄です」
「…澄だ？…しかし、そんな筈はない。お前は死んだ筈だ！」
それを叫びながら彼は、夢の中から現實の中へ呼びかけてゐるやうな氣がしてゐた。
「………」澄は答へない。
「お前が生きてゐる筈はない。お前がこんな所へ來てゐる筈はない」

「えゝ、わたしも旦那樣がこんな所へ出入してゐるとは思ひませんでした。このあひだあのキウエル・アネエ・ホテルではじめて旦那樣の姿を見たとき、私もびつくりしました。そして自分のことが急に恥しくなり、こつそりあそこを脫け出して、こゝへ移つてゐたのですのに……」

「俺はそんなことを訊いてゐるのぢやない。お前は死んだ筈だといふのだ。生きてる譯はないといふのだ」

しかしこの疑問は、彼女にはまるで通じなかつた。彼女は不審氣に答へた。

「……えゝ、わたしは死んだも同じです。旦那樣が、あの定吉にあんまりどつさりお金をあげたもので、わたしはこんなことになつてしまつたのです」

今度は、この言葉が彼には全く通じなかつた。

「それは何のことだ。俺にはさつぱり解らない」

「定吉は、あのお金をかぶと町とばくちでたつた半年のうちに使ひ果してしまつたのです。それでわたしはカフエーへ働きに出ねばならなくなつたのです。そのうち、定吉の刑事問題でお金がいることになり、たうとうわたしはこんな所へ賣られてしまつたのです」

その言葉を聞いてゐるうちに、彼は耳の底に、例の物の崩れる音、堪らなく空虛な寂しいひゞきを聞いた。と、思ふうち、それが、がら〳〵……と總崩れに崩れ落ちて來た。と同時に彼は、心臟も腦髓も骨格もばら〳〵に崩れ毀れたやうに感じた。

彼はぢつとしてゐられなくなつた。何物かにすがらずにはゐられなかつた。そしてこの場合、澄は、彼にはたとへ夢の中の幻影であつても、彼の取りすがるべき唯一のそして最上の存在であつた。

彼は床の上に下り立ち、長い兩手をひろげてふら〳〵と澄の方へ步み寄つた。その顏は、この世の人の顏ではなくなつ

てゐた。妖怪！　しかし更らに奇怪に凄かつた。

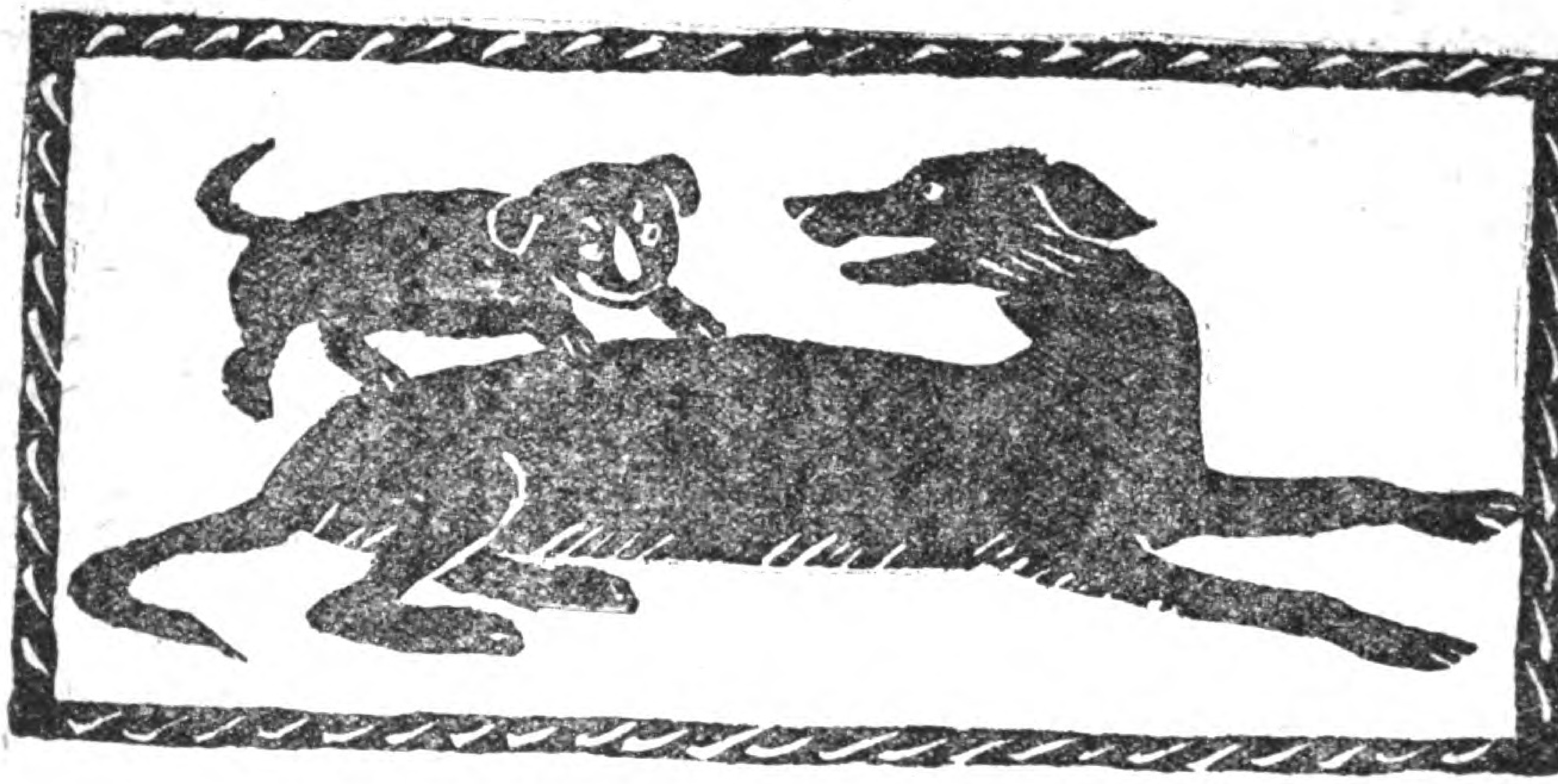
彼女の頭には一年前のことが電光のやうに閃めいた。彼女の息の根を止めるほどに擲りつけた彼の殘虐さを思ひ出した。そしてこの人は自分を殺すためにこんな所へ來たのだ、今度こそほんとうに殺されるのだ、と感じた。

彼女は鋭どく叫び、窓から外へ飛び下りようとして、硝子戸をがらり開けた。と、三尺ほどの太い針金がぴんと彈ねて床の上へばたりと落ちた。（それは、窓から半間と離れないHホテルの新築場の足場と、この部屋の窓との間に突つ張つてゐたものらしかつた。）この物音に彼女はぎくりとして、瞬間立ちすくんだ。と、いきなり骨のやうな手が彼女の兩肩を掴んだ。同時に空洞のやうな眼と、白い齒をむき出した大きな口とが、すぐ眼の上にゆら／＼とゆれた。

彼女は殆んど意識を失つた。全く夢中で床の上の針金を拾ひ上げるや、眼の前の長い首へぐるりと一つ巻いて、力一ぱいにねぢり上げた。

相手は聲も立てず、掛布團の端を引つつかんでふら／＼となつたが、そのまゝごろりと床の上へ倒れてしまつた。

彼女は、ドアを蹴破るやうにして廊下へ出ると、隣室の日本座敷へのめり込み、昏倒してしまつた。彼女はそこで恐ろしい夢を見た。それは僅か十分間のことであつたが、彼女には一晝夜の惡夢を見つゞけたやうに感じた。彼女は夢にうなされて起き上り、まるで夢遊病者のやうに階段を下りて行つた。そして凡てが惡夢のつゞきであつた。彼女はスタンドの前にアメリカ青年がカクテルを飲んでゐるのを見ると、そのカップを引つたくり、ウヰスキーをつゞけざまに五六杯あほつた。それからアメリカ青年の手を執り、目茶苦茶なチヤールストンを踊りはじめたのである。（一九）



あんな男こんな男

片岡鐵兵

「それや、馬鹿も居れば、悧口も居りますよ。いくら大學生だつて」

宮木は笑つた。緣側に腰かけて此方を見上げた彼の半面が、軒から洩れる日光で明るく、それ故、笑ひ顏がちよつとグロテスクだつた。

「で、貴方は、お馬鹿さんの方、それともその反對？」

「さア、それは分りませんよ。貴女が勝手に觀察したら好いでせう」

で、柱に凭れながら、登美は默つてしまつた。妾は貴方をお馬鹿さんだと觀察します、などと冗談に云ふのが、ちよつと差し控へられたからだ。と云つて貴方はお悧口で…などと、此所でまともな事云ひ出すのも、少しばかり照れる話である。

登美は、自分の家の二階を借りてゐる宮木を油斷のならぬ若者だと思つてゐる、勿論、馬鹿だなどとは考へたこともない。登美は小學校を卒業しただけなのだ。大

學生にも馬鹿がある」——そんな事が考へられよう筈はなかつた。

宮木が出て行つたあとで、登美は、二階の宮木の部屋を掃除した。四疊半には、机が一つ、本が五六册、その他には、壁の釘に、春が來て、もう要らなくなつた外套が、ぼんやり懸つてゐるだけで、場末の借家らしい安普請に、ぴつたり似合つた貧しさだつた。

「苦學でもしてるのか知ら？」

掃除しながら、登美はいろいろの事を空想する。こんなに貧しい部屋でありながら、宮木は毎朝、部屋ぢうを埃だらけにして出て行くのだ。夜おそく歸つて來ることがある。登美が表戸をあけてやる。宮木はろくろく物も云はないで二階へ上ると、ドシンと、寢床の中へもぐり込む音が、階下にまで響いた。それつきり、朝まで宮木は眠る筈だ。そして起きると間もなく飛び出して行くのだから、部屋がよごれやう筈がなかつた。それだのに、朝、登美が掃除すると、夥しい埃だつた。春さきの風は激しいし、建て付けはわるいし、だが、それにしても、時には、寢床をあけると、ボロボロに乾からびた泥などが、疊の上に音立てて降ることがある、そんなのは、不思議ではないか？

泥まみれの宮木さん。さう云つてやつたら、どんな顏をするだらう。

雨の降る日に、宮木は下谷の或る電車通りで圓太郎を待つてゐた。乘合は仲々やつて來なかつた。五分經つた。それから又十分……するど、宮木は自分の肩のほとりで何やら生あたゝかい氣配を感じた。人間だ、と氣付いた。つゞいて、黄色いレイン・コオトの男が、ひよいと宮木の前をよこぎつた。ちろりと此方に眼を注ぎながら。

誰だつて、黄色い、よれよれのレイン・コオトを着た男に、往來で顏を見られたら不愉快になるだらう。丁度その時、圓太郎でなくて、電車が來てとまつた。宮木は突嗟に洋傘を縮めるとそれに飛び乘つた。

黄色い、オーヴァの男も、宮木を追ふやうにあはてて飛び乗つた。

「君、君」

宮木はすぐ車掌を呼び止めて、聴えよがしに云つた。

「闘太郎は、故障でも起したのかね？」

「…………………」

「幾ら待つてても來ないぢやないか」と腹立たしさうに云つて切符を買つた。

「闘太郎は、私の責任ぢやありません」

車掌がひよいと顔を上げた。

「いや、それやさうだ。失敬失敬」

そこで初めて屈托なささうに笑ひながら、宮木は、黄色いレイン・コオトを着た男の腰かけてゐる眞向ひに座つた。

次の停留所で、黄色いレイン・コオトを着た男が詰らなさうな顔をして降りて行つてしまふと、宮木は吐き棄てるやうに云つた。

「畜生う！」

朝。

「宮木さん、宮木さん」と呼ばれてゐるのに氣がつくと、登美が夜着の上から揺り起して呉れてゐるのだつた。

「まア、どうして？　こはい聲で」

「僕、唸つてた？」

「どうなすつたのかと思つて、びつくりして階下から飛んで來たのよ…………まア、この汗！」

「うん」

額が汗ですつかり濡れてゐる。宮木は寢衣の袖で無雜作に拭いた。

登美はやや離れて枕もとに坐りながら、思ひ出したやうに顏を赧らめて、

「お加減がわるいのぢやない？」

「いや、なに」

と云つたが、確かに身體が弱つてるのだと思つた。早く、登美なんか階下へおりて行つて吳れれば好いと思ひながら、枕の上で、頭を振つて見た。すこし、ふらふらするやうだ。

「わるい？」

「大したことはない」

「不可んわ、そんなに頭ふつちや」

登美はあはてて膝をにぢり寄せると、あふむけに枕の上に載つてる頭を、兩手で抑へるやうにした。

「熱があるわ」

「さうか知ら」

登美の手は、すこしガサガサしてゐた。その手の上に、宮木も自分の手を持つて行つた。どの位ガサガサしてゐるかな此の上まだ試めすやうに。

「あるでしよ、熱」

と、登美は、ぽつと眼のふちを赧らめて、無理に微笑した。

頭の兩側で、お互ひの手が重なり合つてゐる、その四本の手が、何か囁き合ひ始めたかのやうに、微かな耳鳴りを感じた。

「僕、もう暫く眠る。」

宮木はそのまま眼を閉ぢた。が、四本の手はかるく重り合つたまま、時時ふるへてゐた。宮木は、自然に眠りに陷つて行くやうに裝ひながら、だらりと自分の手を疊の上に落とした。登美も、思ひ切りわるさうに手を引つ込めた。そして、相手の眠りを驚かさないやうに、そつと立上つて障子の外に出て行つた。

階下へおりても、登美は、心を二階の男の枕もとに落つことして來たかのやうに、ぼんやりしてゐた。

「どうしたの？」

急ぎの仕事があつて、朝はやくから筐臺の前に坐り付いてゐた母親が、登美の顏いろを見て云つた。

「宮木さん、病氣なのよ」

「それや、困るね」

無感動に云つて、筐臺の上にのしかかるやうな姿勢で、筐を動かした。その腕の振動が肩から頭に傳はつて後れ毛がこまかく動いてゐる。あとで又きつと頭痛がすると云ひ出すのだらうと、登美は思つた。

「どつか、働くとこ、ないか知ら、あたし」と登美は呟いた。

「どんな所？」

「どこでも好いわ」

「カフエにでも入つて、墮落したら好いさ」と母親は笑つた。

父親が、他の女の所へ轉り込んで歸らなくなつてから五年の月日が流れた。母親は、場末では大きい或る呉服屋の賃仕

事と、時時呉れる不貞の良人からの補助と、それから二階を學生に貸すこととで、以前より結局氣樂で好い程だつた。娘も二十歳になるのだが、その行く末など考へるのは面倒臭かつた。養子に來る者もあるまいから、自分でどうにでも身の振り方を付けたら好い位に考へてゐた。

登美は、さう云ふ母の手許で、母の助手のやうな形で生きて行くのを、だんだん我慢のならぬ事に感じ出してゐた。それで、此頃、しきりに働きたいと考へるやうになつた。たとひ日に八十錢でも、いや五十錢でも好い、僅かな日給で働いても、兎も角、自分で自由になる金を持ちたいのだ。母親からおこぼれを貰つて、半襟を買つたり下駄を買つたりするのはつくづく厭だつた。この生活は暗い。この暗い中にゐる間は、自分ひとりが世間から除け者にされてる氣持ちを、はふり捨てる事が出來ないのだ。

「火をもつとおこしといてよ」

母親が、長火鉢から鑵を拔いて、加減を見ながら云つたので、登美は炭籠をのぞいた。火箸で底をつつくと、炭の粉が登美の顔をめがけて立ち舞つた。

二階で足音がするので、登美は大急ぎで炭をつぐと、階段をのぼりかけた。

「こんな――すぐ消えるわよ」

母親が長火鉢をのぞいて、炭のつぎ方を非難してゐるのだが、登美はかまはずに二階へ上つて行つた。

宮木は制服に着換へてゐる所だつた。

「お出掛け？」

「飯を食つて來ます」

「熱があるのに……」

部屋のまん中に、二人とも突つ立つたまゝだつた。しばらく無言で眼を合はせてゐたが、やがて宮木は窓を明けて、窓ぎはに腰掛けながら、
「濟みませんが、煙草を買つて來て吳れない？」
「ええ、買つて來て上げるわ、だから、外に出るのは止した方が好いわ。御飯は、家に何かあるでせうよ」
ズボンから抓み出した銅貨が、バット一個の七錢に足りないので、宮木は机の方へ行つた。
「抽出しの中に、まだ二三錢あつた筈だ」
「ねえ、宮木さん、妾みたいな者でも、どつか使つて吳れる所あるでせうか？」
抽出しの中をゴソゴソ搔き廻してゐる背ろから云つたが、すぐ、無駄なことを云つたと後悔した。
探し出した銅貨を、彼女の掌に載せながら、
「職業婦人になりたいの？」
「だつて、遊んでんの、詰んないわ」
「それより、工場に行つたら好い」
「まア、馬鹿にしてるわ、妾に工女になれつて……どうせ、それやね」
すこし燥いだ氣持ちで登美は外に出た。煙草屋まで仲々遠かつた。大急ぎで歸つて見ると、玄關にさつき出る時に確かにあつた宮木の頑丈な破れた靴が、無かつた。
誰か訪んで行つたのか？　それとも……と不安な氣持ちで、駈け上るやうにして二階に上つて行くと、茶の間から、
「宮木さん、もう出掛けてよ」と母親の言葉が、追つ掛けて來た。

その通り、二階の部屋は、もぬけの殻だつた。

「知らない！」

登美は、バツトを、あんまり力一杯でなく壁に向つて投げ付けたが、ふと、眼の前の壁が、ひどく間が拔けて見えた。いつも其所に掛つてゐる外套がないからだ。

この暖かい春の日に、外套が要る筈はなかつた――そしたら――登美は、二三年前、今のやうに母親が氣樂でなかつた時の經驗から、宮木の外套の行方を想像する事が出來た。

先刻、バツトを買ふ銅貨がやつとあつた宮木、まだ飯を食つてゐない宮木、で、彼は、わざわざ登美を外へ使ひに出しておいて、その留守に、外套を持ち出したのだ。見得坊！登美、は荒々しく階段を踏んで下におりて行つた。

「お母さん、宮木さんを、賄付きにして上げたらどう！」

賄付きでなしに、と云ふのが、部屋を借りる時の宮木の希望であつたのも忘れて、登美はまるで母親をきめ付けるやうな調子だつた。

その夜、宮木は一人の同志と或る所で落ち合つた。眞夜中の二時半頃、彼らは出發した。

ビルデイングが、夜明け前の都會の空に、廢墟のやうに聳えてゐた。表通りに面した四階に、彼らの目指す事務所がある。

そこには、世界の出來事を、眞實に批判したり報導したりする新聞があつた。だからそれは、プロレタリア階級の鬪爭のために在る新聞だつた。無產者の、新聞だつた。あらゆる新聞は、世界の出來事を報導するが、それは支配階級の欺瞞に都合の好いやうに、眞相を歪めて報導するのに過ぎない。本當の無產者の新聞は一切の政治的な、又社會的な現れが、

無産者から搾取するための、或は無産階級の擡頭を發壓するための、資本家地主の政府の××の現れであることを鋭く發露して、それに對する闘爭心を煽動するのだ。

歴史を正しく導く新聞は、歴史を創造して行くプロレタリアートの物である。資本家地主の執行機關が、これに對して、×××な彈壓を加へるに不思議はない。

ビルディングの四階に、その新聞の事務所があつた。それは、前日、多數のスパイに踏み込まれて、警官隊の占領する所となつてゐるのである。

正に、午前三時だ、ビルディングの、一切の明りは消えて、それは四角な怪物の巣のやうに暗く聳えてゐた。

「表戸は、駄目だ、裏へまはらう」

二人は囁き合つて、裏の路地へ入り込んだ、懐中電燈で足もとを照しながら、星の光も屆かぬ溝板を踏むと、ビルディングの煉瓦の肌が、死人の胸のやうに冷めたく、身ぢかに迫つて感じられた。

建物の裏口は、ビルディングの夜番や小使の通路口で、夜どほし鍵を掛けない。其所から二人は、樂々と中に忍び込むことが出來た。晝間の、人間の波を驅逐したあとのビルディングの中には、闇と沈默と、そしてコンクリートの匂ひとが盛り上つてゐた。裏の方から眞直ぐに、表玄關まで來た。懐中電燈が、各事務室の郵便物受箱の、四角な格子の上をさまよつた。丸い明りは、すぐ一つ格子の上に停止した。持つて來た鍵で、蓋をあけると、中から新聞宛ての各地からのレポや、基金寄附の小爲替を封入したらしい封書などを取出して、二人のポケットに捻ぢ込んだ。

先づ、仕事の一つは片附いた。

「上つて行くのは一人が好いだらう」と同志が囁いた。

宮木が、表に出て待つことになつた。彼はそつと元來た路を取つてかへした。表通りまで來ると、ビルディングの眞向

ひの小路の暗がりで、ぴつたり身を軒下にくつ付けながら、四階の窓——カアテンもおろさないで、只、底深い黒さに光つてゐる。

ガラス戸を、一生懸命に見上げてゐた。

それよりも一生懸命に、同志は階段を一つづゝ上つて行つたのだつた。勿論、靴は脱ぎ捨てゝ、靴下ひとつだつた。一足、階段を踏んでは耳を澄ませるといふ風に。懐中電燈も危險なので、手さぐりであつた。

やがて、四階まで來た。階段口から直ぐ取つ付きの右手に、新聞の事務所の扉がある。合鍵は持つてゐる。

それにしても、此所へ來るまで、見張りの奴の一人にも出會はなかつたのは、氣味のわるい幸運だ。一體、占領者共はどこに居やがるのだらう、と、彼は闇の中をそれとなく見まはした、すると五階へ通じる階段を上り切つたところに、ぼんやり薄明りがさしてゐるのを見た。それで分つた。五階を上つたところに、空き事務室がある。彼奴らは其所に榮々と寢そべつて、いつかの拷問で腫れ上つた顔など夢に見ながら、寢汗でもかいてゐるのに違ひない……

だが、同志の亡靈よ、今夜だけはスパイの夢を驚かせないでおいて呉れ。今、彼奴らが眼を醒ましたら大變なんだ。敵の眠りよ、安かれと、彼は合鍵をさし込んだ。掌の肉だけの運動で、じいわりと音のせぬやうに、その鍵をまはした。

もし此の部屋に誰かゞ見張つてゐたら、命も最後だ。彼はぬつと入つて行つた。

誰もゐない。闇だ。ぼんやり、机が見える。爪さきで歩いてゐるのに、體が何故斯うも床へ引き付けられるやうに伸びたがるのか。その時、ふうわりと柔らかく、手に觸るものがあつた。ハッとしたが、それは經營部と編輯部とを區切る垂れ布だつた。

彼は懐中電燈のボタンを押した。なつかしいと云ふやうな氣持ちで、明りの中に散亂した部屋を見た。

兎ら角、此所から、讀者名簿と、會計簿と、その他の重要書類を盗み出して來るのが目的だ。彼は、今は大膽になつて

盛に懐中電燈を照らしながら、次から次へと、重要書類のありかを漁りまはつた。
が、突然、肘が机の上のレニンの胸像にふれた。ガチャンと音がして、像が床の上でくだけた。瞬間、彼はひよいと身をかゞめて、机の下にぢつと縮ぢこまつた。
今の音が、階上のスパイ共に聴えたか！
彼は耳を澄ませ、息を殺した。永い永い時間が、巨大なビルディングの闇の隅々を匍つて行く……

表通りの物かげから、四階の窓を見上げてゐる宮木は、氣が氣ではなかつた。黒い窓ガラスの上に、絶えず懐中電燈の光りが明滅してゐる。それは、空をかすめる人魂の反映のやうに氣味わるく見えた。いけない事に、それよりも一層底ふかい内側からの光であるのが表通りからありありと分るのだつた。もし此の深夜の街を、俺たちに馴染ふかいスパイの叔父さんでなくても、たとへ泥刑でも通り合はせて、四階の窓ガラスに光る時ならぬ明りを見付けたとしたら、どうだらう？結果は餘りにも分りすぎてゐる。そして、深夜の街を、泥刑がさまよつて來ても、あまりにも有りすぎる事ではないか？ちかり、ちかりと、四階の窓が薄ら冷めたく輝く度びに、あゝ、止せば好いにと、下から注意してやりたかつた。思ひ切つて四階へ上つて云つてやらうか？　もし、こゝへ泥刑が來たら――來て見ろ、俺は一撃のもとに――だが、その時、窓のもとに明りが突如として消えたまゝ、再び光らなくなつた。
永い永い時間が、それは殆ど永遠のやうに、暗い街通りに物音ひとつしなかつた。
ぢつと見上げてゐる頸すじの痛さも忘れて、宮木は、今にあの四階の窓から、ガラスを蹴破つて同志が飛びおりて來はしないかと、息を殺して待つた。
が、何事もなかつた。やがて、窓の上に再び、懐中電燈の明りがさし始めた。宮木はほつとした。今は、あの明りが危

險だとも思はなかつた。あれは同志の生命のしるしだ。彼は生きてゐる。彼は活動してゐる。それを合圖する光明だ！

同志は、小脇に書類を一杯抱へ込みながら、表通りに現れ出た。宮木は馳け寄つた。

「萬歲だ！」

「うまいぞ、うまいぞ！」

手を固く握り合つた。感動でふくれ上つた胸は、ともすれば全身を小躍させようとする鼓動に鳴つた。

「圓たくだ！」

「よし、その邊にあるだらう」

云ふうちに、もう二人とも馳け出してゐた。

昨夜から宮木が歸つて來ないので、登美はやゝ焦々してゐた。宮木が來て二週間ちかくにもなるが、夜、外で泊つたのはこれが初てだつた。

その日、久し振りで父親が來た。父親は鼠色のレインコートを、だらしなく着て、幾ら洗つたつて埃の落ちつこないやうな顏をしてゐた。いつもの通りで、戸口を入つて來ると、いきなり、いかつい眼で、ギヨロリと家内を伺ふやうな顏をした。

「ちよつと用事があつて、この邊まで來たから」辯解らしく云つて、晝飯がまだだと言ひ添えた。

「御飯なんか、餘分に炊いては居ませんよ」と、母親は飼犬を叱るよりは丁寧なと云ふ程度の調子で、縫物の手をやめようともしなかつたが、結局立ち上つて臺所へ拵へに行つた。

「登美は、まだ縁談が決らんのかな」

父親は、登美を顧みて冷やかすやうに云つた。

「それ所ぢやないわ。あたし、どつかで働きたいの」

「カフェーにでも行きたいのか」

父親も、母親と同じやうな事を云つた。

「工場へね――どうせ、妾、女工さんにでも成る他はないわ」相手がカフェーと云つたので、その皮肉に報いる皮肉のつもりだつた。

「ふん、娘が工女で、そして、お定りの組合入りだらう。俺がそれを摑まへる役か」

「あんな事を」

登美は取合はない顔で立ち上つて、二階へ逃げて行つた。

父親は、臺所へ向つて聲をかけた。

「おい、近頃、二階の借り手はあるのか？」

「無かつたら、家賃に困りますわ」

母親は障子越しに答へる。

「この前の、職人の夫婦者は、引越して行つたんだらう――」

「え丶、とつくに」

「今は、どんな人――」

「大學生よ、登美と仲が良いの」

「登美と？　どうだかね」とニヤリと口を横に歪めて「そつちの、若い燕ぢやないのかい」

「登美に聽えますよ」

登美は二階で、窓ぎはに腰掛けてゐた。青い空が、額に染み込むやうな氣持ちだつた。

宮木が早く歸つて吳れゝば好い――登美は窓ぎはから、室內を見まはした。何にもない貧しい部屋。机の上の四五册の本、それから、矢張り机の上に、さ青な、小さな函がある。昨日、登美が買つて來たバットである。

「人を馬鹿にして」

要りもしないバットを買ひに行かせて、その留守のまに外出した宮木が、本當に自分を馬鹿にしてるやうに考へられて來た。でも、それは仕方がない、自分は何の取柄もない女なのだから……

「女工になれ、など、云はれたつて仕方がない。大學生だもの。大學生の眼から見たらねえ」

然し、何と考へても、女工になれ、と云はれたのは、屈辱のやうな氣がした。今度歸つて來たら、うんと當り散らしてやるんだ。

階段を踏む足音がして、父親が、口に殘つた飯をまだ嚙みながら上つて來た。

「ちよつと階下へおりとれ」と、いかめしい顏で登美に云つた。

「どうして？」

「どうしてゝも好い、おりとれ」

登美はぷり〱しながら降りて行つた。長火鉢の所では、食ひ散らしたお膳を片附けもしないで、母親は縫物の前に坐つてゐた。

「お父さんつて、無茶よ、人の部屋を」

「一度は、何でも彼でも疑つて見るのが、あの人の職業さ」
「いやな職業」
父親がおりて來た。
「登美、學生さんが歸つて來ても、云つちや不可んよ」
「云はうたつて、云へやしないわ」
「俺の職業なんか云つたら、登美、お前が嫌はれるばかりだからな、ハヽヽヽ」
「誰だつて嫌ふでせうよ」と母親が、縫ひ上つた片袖をかざして擴げながら云ふのを、
「お前は默つとれ」と叱つた。
紺の洋服の兩脚を投げ出して煙草を喫つてゐる父親の方へ、母親はチラと眼を投げたが、そのズボンのポケットの縁が少し綻びてゐるのを眼敏どく見付けて、
「こんなにまア綻ばせて――お浪さんに少しは繕つて貰つたらどう?」
母親は絲を口にくはへ、針を持つて側に寄つて來た。
「これは有難い」
父親は上衣のはしを持ち上げながら、繕つて呉れる相手の手元をぢつと眺めた。
「あんた、お浪さんは、こんな事、平氣なの。綻びたものを着せて、外に出すなんて、妾にやとても我慢がならないわ。ほんとに、お嬢の用事ばかりが女の勤めぢやあるまいし」
父親は默つてゐた。
「はい」と、母親が縫つたあとをポンと叩くのと一緒に、父親は立上つた。

「ぢや、又來る」

玄關で、足の甲の兩側がゴムで出來て、口を擴げるとスツポリ嵌るやうになつた靴を穿きながら、彼はもう一度云つた。

「ほんとに、明日か明後日、また來るから――」

母親は見送らうともしないで、

「そして又、飯を出せ、でせう」

「いや、繕ひ物を澤山持つて來る」

いつたん出て行つたが、何を思つたか又引返して來て、格子戸の外から「登美」と呼んだ。

「登美――」と、出て來た彼女を招き寄せて囁いた「ほんとに、默つてるんだぜ。あの大學生に、戸山君に」

「戸山！　宮木さんよ」

「あ、さうか、さうか。俺は、どんなにかして、お前の婿さんに欲しいと思つてるんだから」

「知らない――嘘ばつかり」

登美が茶の間に引つ返して來るのを、母親はギヨロリと見て、

「お父さんと、お母さんの惡口だらう」

「嘘よ」

つんとした登美の顔は底白く青白めてゐた。

その日も、その翌日も、宮木は登美の家に歸つて行かなかつた。

三日目に、彼は青山の裏通りを歩いてゐた。向ふから、ロイド眼鏡の若い男が歩いて來る。宮木は腕時計を見て、

「ふむ、丁度、三時十五分だ。俺も正確だが、彼奴も正確だな」

宮木はつと横丁に折れた。向ふから來た男も、半町ほど先きの横丁を、同じ方向に折れた。

二人は、互ひの横丁を突きあたると、再び半町ほど先きにお互ひの姿を認め合ふ裏通りに出た。彼らは一歩々々、近づいて行つた。

「やア」

「やア」

出會ひ頭に、挨拶した。

「どこへ？」

「なに、ちよつと」

そんな事を云ひながら近寄つて行つた。ちよつと手と手がふれた拍子に、宮木の掌中には、相手から渡された小さな紙片が殘された。レポだ。

そのまゝ振り向きもせずに、宮木は電車通りに出た。交叉點が二三十間さきに見える所まで來ると、いきなり背ろで、

「泥棒だ、泥棒だ！」と云ふ聲がした。

宮木は振返つた。すると、先程紙片を取交はして別れたばかりの同志が、こちらと向つて懸命に奔つて來る。あとから二人のスパイが、「泥棒だ」を連呼しながら追つ掛けて來るのだ。

「畜生、何が泥棒だ！」

瞬間、宮木も突き飛ばされたやうに、駈け出さうとしたが、その衝動は懸命に抑へた。

往來の人々は、みんな立止つて、この突然の追跡場面を、びつくりした顔で眺めた。

澤山の入り亂れた足おとが、すぐ宮木のうしろにまで迫つた。

「泥棒だ！　泥棒だ！」

「嘘つけ！　何が泥棒だ！」

同志は力強く叫び返しながら逃げて來た。彼らが、宮木の步いてる前を走りすぎる時には、追ふ者と追はれる者との距離は二三間の近さに縮められてゐた。

「泥棒だ！　泥棒だ！」

さう叫ぶのは、往來で闘士を追跡する時、いつも彼奴らが使ふ古い手だ、泥棒でもない者を泥棒だと罵ることで、通行人を欺くのだ。そして正しい者を追跡する疚しさを繕ふ。いや、あらゆる場合に、支配階級とその手先き共は、闘ふプロレタリアに汚名を着せるためには、厚顔無恥な嘘八百を宣傳するのだ。泥棒でもない者を泥棒と呼ぶのは、そのほんの一例であるに過ぎない。そんな事で、一般民衆をごまかしておいて、どし〳〵闘士を逮捕するのだ。嘘だといふなら、それらの「泥棒」を取調べ、「審く」ところの××を公開して見ろ！

宮木は、眼前に悲劇を見て地團太踏んだ。向ふの電車交叉路から、もう一人のスパイが、バラ〳〵と飛び出して來て、逃げて行く同志の前に立塞がつた。此頃の大都會の十字路や、目星しい停留所などには、必ず一人二人のスパイが、一般民衆にまぎれて、電車を待つ風を裝ひながら、左翼のおたづね者を見張つてゐるのだ。

忽ち、激しい格闘が始まつた。そこいらの通行人たちが、その格闘を取り圍んだ。通行の大衆は、本當の泥棒だと思ひ込んで、彼らのために闘つてゐる者の逮捕に手助けした。

もし宮木が猪突の勇を許されるなら、そして、彼がこの地球の上に根を張る闘爭組織の一細胞として活動することを放棄しても好いのだつたら、この瞬間、彼は生命を投げ出して、あの格闘の中へ飛び込んで行つたであらう。

彼は通り掛りの圓タクを呼び止めて、それに乘つた。彼は逃げなければならなかつた。

彼は無慈悲に、同志を敵の包圍の中に殘して行かねばならなかつた。

宮木は、危險を冒して、或る勞働組合の本部に行つた。

ストライキが、方々で起りかけてゐた。もう既に火蓋を切つた工場もあつた。それで、組合の事務所は、ひどく忙しさうだつた。

二階から、夕日を眺めながら、宮木は一人の勞働者と話してゐた。事のついでに、宮木は先刻赤坂でやられた仲間の話をした。

「あの人がやられたか——多分、逃げられないだらうな。畜生！　あんな好い人間を」

「こんな好い人間だよ。こんな好い人間を、あんな男たちが蹂躙するのだ。あんな男が、逮捕する立場にあつて、こんな男が逮捕される立場にある、それが現代の秩序さ」

宮木は云つた。

火蓋を切つたストライキ工場は、右翼組合のダラ幹に指導されてゐた。だから、この爭議は、負けさうな形勢にあつた。然し、左翼の分子が、その爭議の中で盛に活動してゐた。爭議其物は負けるだらう。だが、それによつて、大衆は、現實に、具體的に、ダラ幹がダラ幹である所以を經驗によつて知るだらう。左翼のみが、本統に信賴すべき階級的な組合である事に氣がつくだらう。

「そんなにして、大衆の力は、だん〳〵昂まつて行くのだ、力強い大衆の背景さへあれば、さう無暗に、あんな男に、こんな男を蹂躙させてはおかなくなるよ」

「さうだ、何と云つても大衆の力だ！」

それは、日に日に實現されて行つてゐる。ストライキがある毎に、大衆の左翼的結成の盛り上つてゐるのは、知る人ぞ知る事實だつた。

用談を濟ませた二人が、夢中になつてそんな話をしてゐる所へ一人の勞働者が二階へ上つて來た。そして大仰に叫んだ。

「や、太陽が、いかはでな引つ込みをやつてやがらァ」

トタン屋根の上に、栫の梢の上に、春の夕日が、華やかに燃えてゐた。今の顚狂な勞働者の言葉が、久し振りに、彼に「自然」を意識させて呉れた。

その夕日は、宮木の汚れた詰襟服の、泥と埃を鮮やかに浮き出させてゐた。

宮木は、久し振りに二階借りの部屋に歸つて來た。まだ宵の口だつた。

貧しい宮木の部屋にはゝ、茶を用意する道具もなかつた。それが登美には幸福だつた、と云ふわけでもないが、登美は番茶をくんで、二階に上つて來た。

「久し振りですね」と、宮木はニッコリした。

登美は默つてゐた。

「あ」と宮木は机の上のバットに氣がついて「買つて來て呉れましたね、ハヽヽヽ、それで、怒つてるんですか」

「怒つちや、ゐませんわ」

「僕ねえ、臨時試験があるので、友達ん所で、ノォトを寫してたんですよ。友達の下宿に泊つてたんです」

ノオトを寫すことの意義などは登美には分らなかつたが、學校の事に關るのだから、品行を疑ふ點のないのは明かだつ

た。登美は、何となく、のんびりした氣持ちで、
「だつて、ひどいわ、宮木さん」
「何が？」
宮木は愕然として顔をあげた。
「あたしを心では笑つてらつしやるのでせう。女工になれなんて云つて……」
豫感がはづれたので、宮木は樂な氣持ちに歸ることが出來た。
「女工になれと云ふのが、どうして不可ないんです？　ちつとも、あんたを輕蔑して云つたのぢやないもの」
「どうせ、私は無學で、鈍感よ。それやさうに違ひないけど」
「無學で鈍感な人に女工になれとは勸めない。それより、女工を輕蔑する貴女なら、僕は、もう貴女とはお話もしない」
「あら、どうして、そんなに怒るの？」
然し、宮木は微笑して、プロレタリアートの役割について、啓蒙的な話をし始めた。
しばらくすると、階下から母親の、登美を呼ぶ聲がした。
「ちよつと待つて」
登美は相手の話を途中でさへぎつて立上つた。
「あたし、呉服屋まで行つて來なくちやならないの、仕立物を持つて」
「行つてらつしやい」
「歸つたら又、お話のつゞき、して頂戴ね」
「ええ、早く行つてらつしやい、今晩はひどく眞面目な話があるから、僕、待つてる」
「待つててね」

登美は飛び立つ氣持ちを抑へて下におりて行つた。と、茶の間では、思ひ掛けもなく、父親のニヤリ〳〵した顏が、長火鉢の所にあつた。

「さ、これを持つて行くんです」と、母親は仕立物の包みを登美に渡した。

「登美、早く行つておいで。歸つて來たらお前を喜ばせてやる」と、父親が、立つてる登美を見上げながら、氣味わるく笑つた。

「だから、お酒を買つて來い、でせう」

「冗談ぢやないのだ。俺は、二階の書生さんに談判しなくちやならないんだ、お母さんに賴まれたんだよ、今」

登美はギョッとして、

「どんな、談判?」と唾を呑んだ。

「登美」と、父親は嚴肅な顏になつて「お前、二階の大學生は、お前を好いてるんだらうな。本當かい?」

「知らない」と登美は眼のふちを赧くした。

「お母さんに賴まれてね、俺は、お前の婿になつて貰ふやうに、これからあの大學生に談判するのさ、どうだ、好いだらう」

「登美、早く行つといで」と母親が云つた。

「早く行つといで。歸つて來たら、今晩から花嫁だ、ハヽヽヽヽ」

登美は、からかはれてるのだと思つた。同時に、父親の顏付きに、本當らしい表情もある事を見のがさなかつた。歸つて來たら、花嫁になる! 父親はいくらでも、からかふが好い、宮木が、待つて吳れて居るのは確かなのだ。

登美は、袷の下を汗ばませながら、往來を急いだ。

仕立物を屆けて、その歸り途は一層汗ばんだ。一層、足がはやくなつた。

とにかく、からかひであらうが冗談であらうが好い、「歸つて來たら、お前は花嫁だ」父親のこの言葉は登美を陽氣にした。もしそれが冗談にしても、今晩確實に實現される豫言ではないか。何故なら、「早く歸つて來い」とは、本人の宮木も云つたことだ。「今晩はひどく眞面目な話がある」彼はさう云つた。

若い男が、若い女にする眞面目な話？

登美は、汗ばんだ上にひとりでに身體があつくなつた。これからは、妾も、うかうかとしては濟すまいと考へた。先刻、男が、話したプロレタリアの話が、頭の中に蘇つて來た。よくは分らなかつたが、話が巧くて、女工にならずには居られないやうな氣がした。誰だつて、あんな工合に説明されたら、女工にならずには居られなくなるだらう。

さうだ、女工にならう。そして、プロレタリアとして、鬪はう！

我が家に近くなると、登美は自分の歩く足を數へてゐた。一い、二う、三い、四う……戸口まで何歩あるだらう。物心ついて、曾つて一度として父親を父として信用したことのない登美だつたが、今日は半分だけ父親を信用して見る氣になつた。と云ふのは、父親のあの言葉が、眞實から出たのか、それとも冗談なのかを、心で占つてゐるのだ。もし家の戸口に着くまでの歩數が、奇數だつたら眞實。偶數だつたら嘘。けれども、戸口まで着いた時には、自分の歩數なんかいつの間にか數へるのを忘れてゐた。彼女は、格子戸をあけると、勢ひよく中に飛び込んだ。

が、いつもの癖で、登美は、玄關の叩きの上に、あの頑丈な破れ靴――宮木の靴を見ようとした。が、茶の間の灯火が屆かないので、玄關の叩きは、暗い闇だつた。

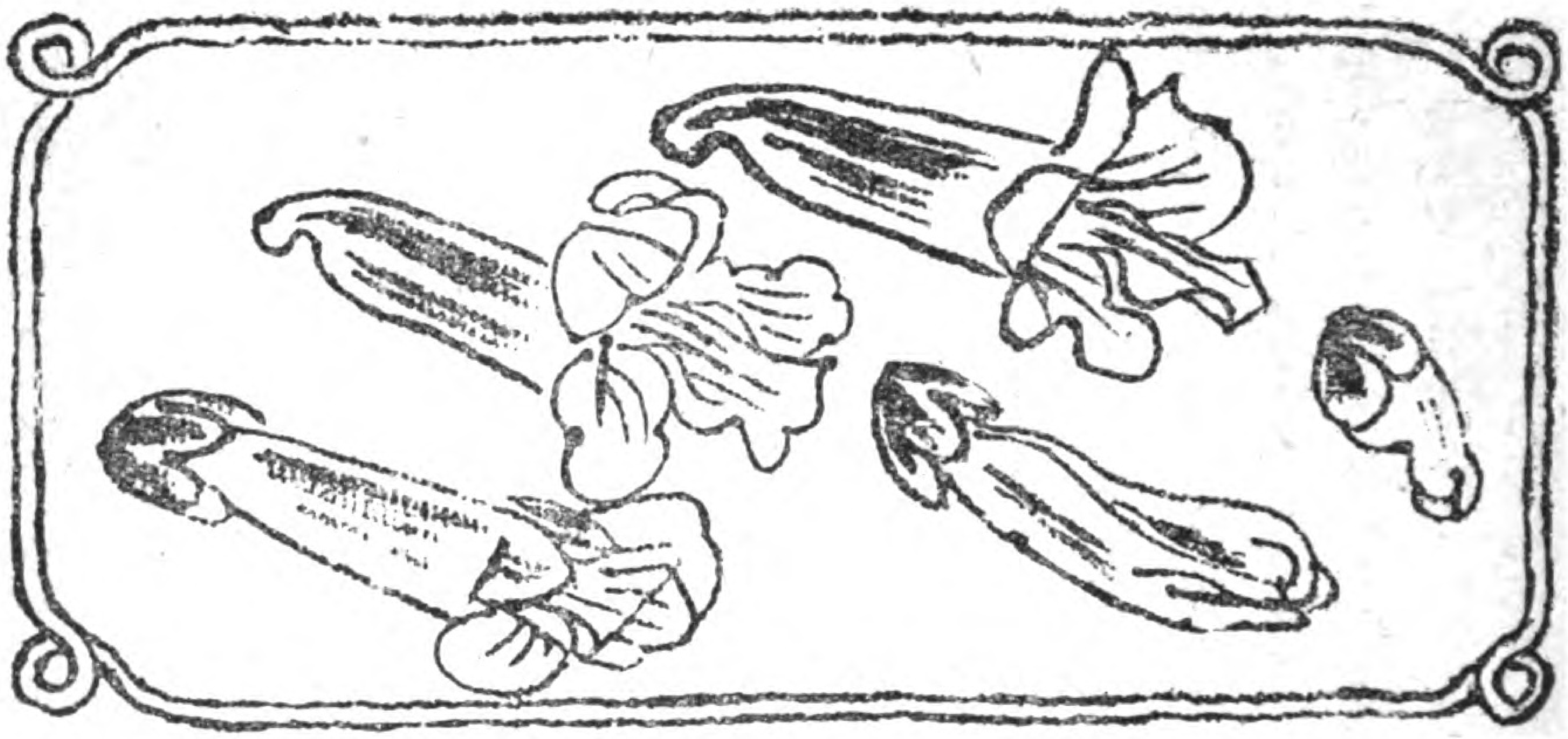
心を落ちつけなければ――そして、あはててゐるのを見透かされてはならない。彼女は身をかがめて、三和土の上を手さぐりに、靴を搜した。

靴は一束もなかつた。父親のと二束ある筈だが、一束もない。

「お父さんも、歸つたのか知ら？」
登美は何となく不安で思はず呟いた。

「只今」
茶の間に入つて見ると、母親がひとり、ぽつねんと縫物をしてゐた。
「宮木さんは？」
「行つちやつたよ」
母親は、チラと登美を眺めたが、すぐ眼を縫物の上に落として、針を動かせつづけた。
「行つちやつたつて？　どうして？」
「知らないよ。お父さんが、引つ張つて行つたんだもの」
「どうして、引張つて行つたの？」
それでも、まだ半分の半分だけ、父親を信用したくて、登美は聲をふるはせた。
「どうしてか、知らないよ。お父さんの、それが職業だらうさ」
「どうして、どうして！」
もはや、みじんも父親は信用しない。そして登美は聲をあげて泣き出した。
あんな男が捕まへる立場にある。こんな男が、捕まへられる立場にある。
「でも好かつたわ、部屋代を前拂ひで貸してあつたのだから、損はないんだし、お前、泣くのは止してお呉れよ」
母親は、振返りもせずにさう云ひながら、せつせと針を動かせてゐた。明日までに仕立て上げねばならぬ賃仕事を——

——一九二九年四月——



支那（長篇小説）

前田河廣一郎

九

このとき、李刀達には、自分の持つてゐる、人間としての判斷力や感情や感覺が、極度の痲痺作用から、すつかり體外へ持つて行かれたやうな惧れが湧いた。はげしい一瞬間の苦しみ、それから吐き出されて、ふらふらと眼が昏んだときは、もう、巨大なボイラーかなんぞのやうな機械に飛び込んだ人間も同然であつた。その機械は、非常な速度で廻はつたり、破裂したり、滑走したり、上下揉み立てたりしてゐるので、それに觸れたものは、嫌應なしに、恐ろしいその自動力に引浚らはれずには居られなかつた。……

李刀達は見た、動いた、聞いた。しかし、それは、全く自分と關係のない狼籍の

世界を、誰かに代つて見たり、聞いたり、動いてやつたりしてゐることのやうにしかとれなかつたのだ。彼はものの聯絡を忘れた。

　そこに、三人の人間のヘルメットが、一度にサイドウオークへ轉がつて、たつた一つしか眼の前に落ちかなつたやうなことがある。頭の上で、いままで、

「やつつけろ！――外國人を敲き出せッ！」

と大聲でわめき散らしてゐた、學生らしい青年が、水を嚥むやうな音を立てたと思ふと、李刀達の上へ惜いほど亂雜にのしかかつて來るのである。押しのけて見ると、その青年の下顎が全部失くなつてゐた。どこかで、白い布に、颯と赤い色が流れる。色は、とめどなく漏出するインキのやうに布地を染めて行つた。それを見てゐる間、彼れの耳には鮮かに陶器がぴーんと裂けるのが聞え、更らに、その下から、食用蛙が踏みつけられるときのやうな氣味惡るい人間の呻吟もして來た。すこし橫手の支那靴の底と大きい臀部の下から、仔豚の屠殺されるときのやうなきいきい聲が、さいぜんからつづいてゐる。子供達にちがひない。李刀達は、その方へ行かうとした。躓いた。人間の蒼黃ろい顳顬が、南瓜のやうにころがつてゐる。その顳顬は、もう生命のないものであるにも拘らず、二三度、石の上を寢返へりを打つやうに動いた。動くごとに、李刀達は、機關銃彈の骨を貫く音を聞いた。やつとのことで、人間と人間との重なり合つてゐる底から、少年らしいものの二本の足を曳摺り出すと、小さな楊桃を潰したやうな顏からは、もはや人間の聲は出てゐないのだ。

大砲が、つづけざまに、自分の顏へだけむけて、まともに凄まじい火の煽りを送るやうに思へた。その都度ぴくんとして、橫を向くと、これも火焰に煽り立てられるばつたのやうに、腰を力に飛びあがつて、何か白い物を閃らめかしながら、

「殺罷！　殺罷！――」

と叫んでゐる。北方人らしい瘦せた勞働者が眼についた。

李刀逵の帽子が、何ものかによつて、手荒らく地面へ敲き墜された。それを拾つたときには、横手の『殺龍』は、ぐつたり前かがみに、沙面の方へ両手をついて、東洋人が敬禮するときのやうな恰好で座つてゐた。ちやうど、その男の股から痩せた臀肉の間へかけて、先刻から彼れの振つてゐた白い物が見えた。旗だつた。その上の『…帝國主義』といふ赤い文字が、蛭のやうに血を吸つた布から消えた。自分の帽子には、前額から後へ抜けた彈丸の孔があつた。――李刀逵は、愕然として、我にかへつた。

ほんのちよつとの間だけ、そこには妙に靜かな時が迫つて來てゐた。それは、單純な、物體や人間のかもす音響が停止したといふだけの靜かさではない。突然、聾になつてしまつたときのやうな驚駭が、李刀逵の心を襲つた。靜かになつた四邊には、もつと恐ろしいものが潜んでゐた。その中から、より凄まじい爆發が、今にも起りさうであつた。寸斷れさうでゐて、わづかに一本の絲のやうな時間で、つなぎ留められてある沈默であつた。沙面側も、支那人側でも、云ひ合はしたやうに、この瞬間は、射撃を中止したのである。

このとき、李刀逵は、ヴィクトリア・ホテルの窓に、過去七ヶ月間やとはれてゐた主人であるところの、ジイ・エム・ハムマーストン氏の顔をありありと見た。奇妙な境遇である。西洋人は、手にピストルらしい物を持つてゐた。ボンジイのシヤツ一つになつても、彼は、さすがに英國紳士らしく、腕まくりなどはしてゐなかつた。ハムマーストン氏の、特長のある眼は、ことさらに李刀逵に對してだけ爛つてゐるやうにこちらを熟視してゐた。

李刀逵は、わざとヘルメツトを脱いで、ちよつと敬禮の眞似をして見せた。西洋人の顔が、認識で、すこし脹らむやうなけはひがした。

と、彼は、ホテルの下の方を向いて、しきりに何か大聲で、誰かに命令するのであつた。節くれた樟の木の蔭下にある鐵條網の奥に、カーキー色の帽子が、水に漂つたコルクのやうに、二つ三つ浮いたり沈んだりした。

『畜生ッ?』

李刀達は、心の中で訝かつた。そして、ごく微細な、丸るい、黒光りに光つたルウィス銃の照尺のむかうに、がていかりとすると、彼は一種の芝居氣から、ポッケットの小切手を取り出して、副領事の視線を邪魔するやうに高く振つて見せた。

副領事が、手を擧げた。左の手だつた。李刀達は、その端にピストルを豫期してゐたのであるが、意外である。が、次の瞬間、商館の事務員達が、揃つて十呂盤を鳴らすやうな音がしたと思ふと、李刀達の身を躱はした石柱の柱身は、見えない鈍刀で削りをろされるやうに、旺んに大小の石のかけらを飛ばしてゐた。それに應じて、味方のどこかから眞赤に燒けた鐵の棒を、いきなり水の中の中へ突刺すときのやうなライフルの響がした。それは、ずつと頭の上であつたから、誰かその邊の商館の二階へ陣取つた兵隊達であるにちがひない。

李刀達は、憤然として叫んだ。

『――酒店(ホテル)！　酒店(ホテル)！』

そして、異様な沈着さを見せながら、一歩石柱から踏み出ると、手にした小切手を半分に切裂いて見せた。『Hongkong and Shanghai Bunking Corporation』と印刷してある小切手が、二枚になると、もう一度重ね合はされて四つになり、最後に十六枚の小さな紙きれになつて、ハムマーストン氏をめがけて投られた。惜しいことには、この芝居を見せようとした當の見物人である副領事その人は、もう窓枠の奧深く姿を潜めて、折角の芝居と、もう一つ、兩手の指をひろげて、それを鼻の上へ、Wを二つつなぎ合はせたやうにして羽搏きして見せた李刀達の、國際的侮蔑の表情とを、彼は看過したのである。――尤も、かういふ藝當が、李刀達に出來たのは、味方の射撃が再び猛烈になり、從つて、敵方の目標も商館『利榮號』の二階へ移されてゐたといふ、間接の庇護にも依つたのである。

『どうせ拂ふわけが有りつこはない。對手は、ただで一萬元呉れる英國人ぢやないんだ、碧ン眼玉め！』
李刀達は、自分をチャステファイするためにかう斷定した。
夥しい人間が、わアわアと騷ぐ音がして、礑とやむだ。もう一度、先刻と同じやうな靜寂が廣場を占領しそうになつたとき、誰かが、尖がつた聲で、
『おい、發砲をやめい！』
と命ずるのが聞えた。鋭い刄物で宙を截つたやうな餘韻が、聞いてゐる人間の耳に殘つた。李刀達は、若い黃埔軍官學校出の士官を思ひ起こした。そして、氣がつくと、いつの間にか英國人側では、發砲を中止してゐたのである。
『おうい、擔架だ、救護班だ、――負傷者をどうするか！』
かう煙脂のつまつたやうな聲で叫ぶと、意外に近い場所から、
『君は、誰か――？
と鋭く訊問する聲がした。
振りむいた李刀達は、自分の背後に、血の滲みた鼠色の中山服を着て、細い靑で緣取（へりと）つた赤いネクタイを締め、幅ろひいバンドを掛けた軍人が、帽子の廂から不審げに彼を眺めてゐるのを發見した。彼は、何時からこの青年士官がそこに立つてゐたかしらと疑ぐつた。
『李刀達、沙面罷工委員會の李刀達です。あの英國副領事の奴は惡魔です。もつとやらないですか？　發砲をやめて……
……？』
士官は、彼れの姿から眼を放すと、ちよつと腕時計を覗いたのちかう云つた。
『負傷はしてゐないかね？』

「Aoh,——my, my——！」

と叫んで、自分の言葉に蓋をするやうに、片手を口の上へあてがつて、いきなりそこへ立ちすくむでしまつた。

車夫は、病院の敷石の上を、悪鬼のやうな容を乗せて、棕梠の葉を戦かしながら駈け込んだ。

がらんとして、ボーイ一人ゐない受付のガラス窓を、苛立ちながら指先で敲いてゐると、廊下へ葉巻を啣へたハムマーストン氏そつくりな西洋人が顔をあらはした。

「大人——英國人？」

びつくりした李刀達は、階段へ踏みかけた片脚を外づした。

「Nop,——We 're Americans！」

「メリケン。——オーライ。」

につこり笑つた李刀達は、唾液のなくなつた口をあけたまま、自分の上衣を捻つて見せ、その上、西の方へ手を揮ふことによつて、沙面の事件を暗示しようと試みた。

だが、この無言劇も、小銃や大砲の轟きを聞き、更らに市黨部公署からの電話で、救護班の組織最中であつた博濟醫院の、米人醫員にとつては、むしろ餘計な表情の反撥に過ぎぬかに思はれた。

西洋人は、大きく頷くと、口中の葉巻の位置を變へた。

「オーライ。すぐさま！」

李刀達は、安心して、鬚の上へぞつと手鼻をかんだ。

十

……最後の、素裸かに剝かれた死骸である、無名の老人の寫眞が、柴南巷の露地で撮られると、夥しい死骸の山が、トラックや病院用自動車(アムバランス)や網曳き車に積まれて、黄昏の街を、わかれわかれに、方々の病院や個人醫師の診察所などへ運ばれて行つた。

夕霧にぼんやり光をうすめられた街々に、苦力達や勞働者救護班の、

『えー――ほう、えー――ほう……』

といふ掛聲が、遠くの遠くまでつづいて、いかにも、死んで行つた人間の魂が、どこかほかの世界へでも運び去られる風に響いた。

『博濟醫院は五十六人だね。それから、光華醫院が二十人、廣東公醫院には三十八人……それから！』

高らかに收容人員の數を讀み合はしてゐるのは、黄埔軍官學校から派遣された二人の軍醫である。しまひに、數字を合はしてから、その一人が、

『負傷者の多いのは良いにしても――あのうち幾人生きるかが問題さ。』

と嘆息した。

政府の寫眞班は、軍服をつけた士官達にまじつて、新聞記者をどなりつけながら、店やサイドウォークを犯罪捜査的に撮映して歩いた。

『まだある！　まだ濠の中にゐるぞ！』

兵卒の一人が、サンパン用の鐵具(かなぐ)のついた竿で、ごわごわと堀を掻き廻はしながら、かう叫んだ。四五人の兵士達が驅けつける。

『血だ。滑り落ちるなよ！』

『いや、別に。僥倖です、私だけこんなにぴんぴんしてるのは！』

『ぢや、御氣の毒だが、君は、一と走り病院から醫者やアムバランスを迎へて來てくれ給へ。――僕は、軍隊長の方へ電話を掛けにやならん。早いのがよろしい。だいぶ學生や見物人が殺られてる。』

李刀達は、自分も一兵卒ででもあるかのやうに、無言で頷くと、活潑に踵を巡らして、廊の下を歩るき出した。靴の底が、泥濘（ぬかるみ）にでも捕はれたときのやうに、にちにち粘りつくので、彼はわざと石甃の上を見ないで進んだ。見ないでも、妙に生あたたかい臭みが、ぼいやりとそこらから一面に發散するのである。

沙基中路の角へ出ると、眼に入る限りの街路の光景が、あまりにも濠端のそれとちがふので、かへつて、その開け放たれた扉や、張りつめたショウ・ウインドオや、何も反響しない壁などの整然とした列が氣味わるく思はれた。彼は、靴から血糊を敲き捨てるために二三度、岸へあがつた家鴨でやうに足踏みした。一軒の家では、開かれた扉の奥でしきりに婦達の立犇めいてゐるけはひがして、店の前には、赤から赤黑く變色しかかつた女の衫（うはぎ）と汗襯（したぎ）とが、捨ててあつた。平和な場所へ來れば來るほど、沙面が恐ろしくなつて來た。

『博濟醫院！』

そこは、よくアマの芳春偺が厄介になりに行く慈善病院である。その廣ろい、西藥（ドラッグ）の香の漂つてゐるそうな芝生を、彼は一度ならず、低い煉瓦塀越しに見たことがあつた。つひ先達も、仲間といつしよに『血心救國』を貼りに行つたのが、その病院ではなかつたか。

『あすこなら、大丈夫。』

かう考へて見ると、不圖、長堤（バンド）から太平路へ抜けた方が近路であつたのに氣がついた。――しかし、それには、再び沙面の方へ引返して、あの動物園の柵のやうな鐵條網のむかうに數百の眼がこちらを窺つてゐるフランス租界から、税關の

方へ出なければならなかつたのだ。それでなければ、菲寧里邊の裏通りから、太平路へ出て、そこをうねうねと曲がつて行かねばならない。かなりの道だ。しかし、李刀遠は、かなりの道の方を選んだ。彼は臆病になつてゐたのである。

眼の前に、呆氣にとられた表情をして彼をしげしげと瞶めてゐる女が三人あらはれた。どれもどれも若い小綺麗な姑娘(クーニャン)であることだけをぼんやり意識して、行き過ぎてから、はつとして自分の服を見返へつた。娘達の驚いたのも無理はない。いつのまにか、彼は、上衣とヅボンの最も眼につきやすい個所へだけ、濃い血しぶきを浴びてゐたのだ。

『乘りますか？……』

聲を掛けられて、顔をあげると、篭(かご)のやうな竹笠の下から一人の黄包夫が、探ぐるやうな眼付で、自分の上衣とヅボンを瞶めてゐた。李刀遠は、何年ぶりかで、この黄包子(ワンポーツ)といふものを見たやうな氣になつた。かういふ手合は、戰爭があると、一旦は鼠のやうに何處かへ姿を晦ますのであるが、すこしあたりが靜謐になると、のこのこ平氣で孔から出て稼業をはじめる。

『よし、やれ。大至急。――博濟醫院、仁濟大街。右だ。』

彼は蹴込みへ片足を載せた。靴の甲には赤鉛筆でいたづら書きをしたやうな、血の痕跡が殘つてゐた。車夫は片手をひろげると、

『痛くはない、先生？――』

と訊いた。

『俺、大丈夫。むかうには死人が百人も二百人もゐる。早くしろ！』

車は風を切つた。狹い横丁から、黄包夫の素足の音と共に、急に閑靜な通りが展開して、その角を曲がらうとするとき、一軒の西洋造りのドアを排して、つかづかとあらはれた西洋婦人が、李刀遠の上半身と膝頭へ眼を遣るや否や、

『Aoh,――my, my――!』

と叫んで、自分の言葉に蓋をするやうに、片手を口の上へあてがつて、いきなりそこへ立ちすくむでしまつた。

車夫は、病院の敷石の上を、惡鬼のやうな客を乘せて、棕梠の葉を戰かしながら駈け込んだ。

がらんとして、ボーイ一人ゐない受付のガラス窓を、苛立ちながら指先で敲いてゐると、廊下へ葉卷を啣へたハムマーストン氏そつくりな西洋人が顔をあらはした。

『大人――英國人?』

びつくりした李刀達は、階段へ踏みかけた片脚を外づした。

『Nop,――We 're Americans!』

『メリケン。――オーライ。』

につこり笑つた李刀達は、唾液のなくなつた口をあけたまま、自分の上衣を捻つて見せ、その上、西の方へ手を揮ふことによつて、沙面の事件を暗示しようと試みた。

だが、この無言劇も、小銃や大砲の轟きを聞き、更らに市黨部公署からの電話で、救護班の組織最中であつた博濟醫院の、米人醫員にとつては、むしろ餘計な表情の反覆に過ぎぬかに思はれた。

西洋人は、大きく頷くと、口中の葉卷の位置を變へた。

『オーライ。すぐさま!』

李刀達は、安心して、鬚の上へそつと手巾をかんだ。

……最後の、素裸かに剝かれた死骸である、無名の老人の寫眞が、柴南巷の路地で撮られると、夥しい死骸の山が、トラツクや病院用自動車（アムバランス）や綱曳き車に積まれて、黄昏の街を、わかれわかれに、方々の病院や個人醫師の診察所などへ運ばれて行つた。

夕靄にぼんやり光をうすめられた街々に、苦力達や勞働者救護班の、

『えー―ほう、えー―ほう……』

といふ掛聲が、遠くの遠くまでつづいて、いかにも、死んで行つた人間の魂が、どこかほかの世界へでも運び去られる風に響いた。

『博濟醫院は五十六人だね。それから、光華醫院が二十人、廣東公醫院には三十八人……それから！』

高らかに收容人員の數を讀み合はしてゐるのは、黄埔軍官學校から派遣された二人の軍醫である。しまひに、數字を合はしてから、その一人が、

『負傷者の多いのは良いにしても――あのうち幾人生きるかが問題さ。』

と嘆息した。

政府の寫眞班は、軍服をつけた士官達にまじつて、新聞記者をどなりつけながら、店やサイドウオークを犯罪捜査的に撮映して歩いた。

『まだある！　まだ濠の中にゐるぞ！』

兵卒の一人が、サンパン用の鐵具（かなぐ）のついた竿で、ごわごわと堀を掻き廻はしながら、かう叫んだ。四五人の兵士達が驅けつける。

『血だ。滑り落ちるなよ！』

『よし、よし。もつと帶へ絡らみつけろ！』

『おうい、寫眞班、こつちだ！』

『自動車はどうした？――まだこつちにあるぞ。車でもいい。何だ手押車か！』

マグネシームのフラッシュ、一輪車をきしませながら近よる探檢の苦力、好奇心に富んだ見物人、おいおい人混みで泣き出す遺族の群、竹箒で軍帽や音樂隊の喇叭や小旗や靴や服の山をがりがり掃きあつめながら數人で選りわけてゐる兵卒の群、わづか數時間で廣東の大通りの一つからがらんどうな廢墟になつてしまつた店舖のでこぼこなシイルエット、突然群集を押のけてやつて來ては歸へつてしまふ役所のサイド・カアの爆音……さういふ光景の上に、六月廿三日の太陽は、疲れきつた大きい眼のやうに閉ぢて行くのである。

沙面側では、ものものしいサーチライトを動かしてゐる軍艦の光に浮び出てゐる、四角い仄暗らい建築層の奥で、しきりに電話のベルが鳴つた。この租界は、敵意を孕んで、鳴りを鎭めてゐる。濠一重へだてたむかうには、警戒をゆるめない英國やフランスや印度の兵隊が、殺人の裝身具にすつかり身を固めて、對岸の悲嘆と當惑と不安とには無關心に、一人々々頭を動かして番號を叫んだり、一小隊づつ士官の號令の下に交替したり、廣東人に嫌はれる歪家の苦力に彈丸のケースを一輪車で運ばせたり――戰爭といふものが、當夜も、明朝も、明日の晝も、その翌日も繼續するかのやうな戰鬪準備に忩がしく見えた。鐵條網の上には、電燈がともり、強い反射光線のレフレクタアが光つてゐた。

『畜生、あの電燈を消してやりたいな。』

『利榮號』の前に屯ろしてゐる群集の一人が、沙面へむかつて煙草のきれつばしを投げ棄てた。

『消そうよ。出來るさ。』

『電線を截るのか？』

二三人が聲に應じた。職工連中らしい。

『電燈會社のストライキさ。』

一人がきつぱり云つて唾を吐いた。

『さうさう、廣東電力のゼネ・ストだ。――』

『そんなことになつたら、こつちも困るさ。やはり、問題は、彼奴等を支那の土地から驅逐するんだよ。』

學生らしい影がさう云つた。

『香港ぢや、どうしても廣東を兵糧攻めにするといふ噂ぢやないか？』

『經濟封鎖か――畜生ッ、いまいましい野郎どもだな！　戰爭だ！』

李刀達は、かういふ群集の間を、ピケツトでもやるつもりで、ぶらぶら歩るいてゐた。

あれほど凄慘な場合に直面して、屠殺場に這入つたほどの經驗を通過した彼であつたが、今はゆつたりと唇に楊子を咬へてゐた。やつと探がしあてた裏町の料理屋で、何の屈托もなく貪り啜つた大血湯や、名前だけいやに麗々しい一品肝鳳膽といふ鷄の臟物や、羊の血と肉を煮つけた肴で、強い蛇酒を二三杯飲んで、昔からの饑ゑをふたけたところなのである。ぶよぶよした豆腐の肉を齒の間へ運んで行つても、修養の積んだ彼は、人肉を懷ひ出さないほどの專門的な味覺は持つてゐた。彼は、頗る上機嫌になつて、この血腥ぐさい戰場である漆端を徘徊してゐたのである。

――いかに、一介厨房の奴僕である自分が、孫中山先生の正義觀に感化されて、烈々たる愛國心に驅られたあまり、終に、碧眼紅毛の外交官連を煙に卷き、新興支那の偉大さに奴等の度膽を拔いてやつたばかりではなく、その堂々たる態度から他們馬鹿者共に書かずともいい小切手を書かせ、自分の一擧手一投足にまでタイピストの速記をわづらはし――あの棺桶色の女猿めが！――最後に、あのどたんばで、三本の花火で、英支戰爭の口火を切つてやつたか！　しかも、どうだ

らう？　肉闘戦の最中に、あの總領事野郎の小切手を、ものの美事に他們の前で引裂いて見せた、捨てた——それが一萬弗！　そんな目腐れ金は、俺の頭にはないんだ。これから、支那は天と地とを反對にして見せるんだ！　支那の革命こそは、國際的な〇〇の尖端なんだ！　何が、一萬弗か。それとも、毛唐人、温和しく尻尾を捲いて、香港、九龍、上海、漢口から手を引くか！——」

こんな排外思想に醱酵してゐた彼が、むしろ適宜に得意であつたことも認めねばならない。そして、血だらけなヅボンのポケットへ手を突刺して、大股に歩るいてゐながら、群集の誰彼や、兵卒、巡警、監督の士官などに、半ば不審げに顔を覗き込まれても、かへつて名譽心の強い、廣東人らしい矜負をさへ感じたのであつた。

「俺は李だよ。沙面罷工委員會の李刀達さ。今日の事件は俺が口火を切つたんだ！」

實際、彼は、顔を覗き込む人間の一人々々へさう聲を張つて挨拶してやりたかつた位なのであつた。

「——前進呵！
革命青年！
前進呵！　强敵當前！　勿逡巡！
最可恨八十餘年侵略吞倒！
最可恨廿載恃兵横行！
……………」

誰かが暗闇のむかうから、冴えたテノールで唱ふ聲がした。フランスの革命歌の調子である。李刀達は、思はず、ぶるツとした。それは、きつぱりと張りつめた銀の細い絲を、一本づつ順に彈き立てるやうな聲であつた。その聲には、何かしら、日頃、支那の大衆が無意識に求めもがいてゐる尖鋭的な精神が暗示された。挑つた、尖端の鋭い、觸ればぴ——ん

と跳ねかへるやうな劍で、音もなく突刺されるときのやうな烈しさが、聲の裏には籠もつてゐた。——李刀達は、じつと立ちとどまつて、歌に聽き惚れながら、今日の慘劇を思ひ浮べた。少年のめちやくちやに踏み潰された顏を思つた。老人の胴にあいた孔を思つた。無數の人間の流した血を考へた。數千本の針で眼窩の周圍が刺戟されるやうに、苦るしい、悲痛な淚が、ひとりでに湧いて來た。好い歌だ。畜生、泣かせやがる！——

「合唱！　合唱！」

歌は、忽ち數人の青年士官達らしい、朗かな聲量の持主によつて、いろいろな樋から淸水が迸つて一つの瀧になるやうに強められ、擴大された。齣の終りに、ちよつとポーズがあると、鐵條網からこちらを覗いてゐる英國兵の一人が、まるで犬の競走を見物でもしてゐるやうな口吻で、

「ゴッデム・チンク！」

と嘲笑つた。

このとき、李刀達は、闇の中に瞳を据ゑて、一人の男を凝視してゐた。その男は、さいぜんから、駈け出しの扒手（すり）のやうに、そちこちと群集の間を縫つて歩るき廻つてゐるのであつたが、別に窃盜の目的があるわけでもなさそうなのは、巧みに他人と接觸することを避けてゐる樣子でもわかつた。が、目立たぬ服裝をして、靜かに支那靴で步るきながら、をりをりじつと立停まつては、群集の話を聽いたり、それとなく警備の兵士達の方へ近づいて腰を蹈めては休んだり、ときには見ぬふりをして李刀達の前を通つたり、煙草屋、錢莊、雜貨店、米行、麵行……と立ならんだ店舖の方へ姿を消しては、再び忍び足でもとの場へあらはれて來る、その全體の行動に於て、怪しいと思へば怪しげな節が多かつた。

うす鼠の上下の支那服を着た、瘦せ形の小柄な男で、はつきりしない地柄の鳥打を眼深かにかぶつて、いつも伏眼に步るいてゐるのだが、何かしらを嗅ぎ出そうとするもののやうに、ときをり立停まつては周圍に犬のやうな嗅覺を働らかす

ところに、李刀遂の本能的な猜疑心をそそるに足るほどの不審さがあつた。

『何だい――彼奴の目的は？』

彼はそつと背後からその男に近づいて行つた。誰かが、むかうの方で、懷中電氣をパッと照らした。しかし、電光は、男の顔に反射する前に、ほかの方へ外れてしまひ、背後に人のけはひを感じたのか、彼はすたすたと店舗の方へ十分にコントロールした速足で歩み去つた。

『逃げる――こりや、可怪しい。』

同時に、李刀遂には、どこかしらこの男の全輪廓に見覺えのあるやうな氣がしてならなかつた。人間の後ろ姿といふものは、ときに、正面を向き合つてゐる場合よりも、より多くその特長が出るものだ。彼は、ひとつこの男のあとを尾けてやらうと思つた。――この偶然な好奇心から、妙な追跡が李とその男の間にはじまつた。

一定の目標を持つと、李刀遂の神經はかなり撓やかな執着力を發揮するのである。彼は初夏の夜の水蒸氣に、むんむん生血の臭ひの立騰る路面を、息塞らしい思ひをしながら、小刻みな歩調で追ひ驅けた。都合の良いことには、この頃の廣東の市街には、人間よりも偉大な宣傳のポスターや壁や柱にぢかに大書したスローガンが多いので、いざといふ場合には對手に氣どられずに、ぴつたり壁や柱へ蝙蝠のやうに身を寄せれば、一時逭れの忍術が使へたのである。

鼠色の服は、しばらく急ぎ足になつたが、やがて、ごく自然な疲勞の體を裝つて、反對にゆつたりした歩調で、西橋からすこし鍵の手に曲がるところまで行つて、何氣ない風に立停まると、マツチを擦つて煙草に火をつけた。

『なアー―んだ。やはり、何でもなかつたのか――？』

追跡する方では、別にその男に用件があるわけではなし、それに一日の疲勞も手傳つてゐるので、やや自分の馬鹿々々しい妄想を放棄して、早く宿屋へ歸つて寢てしまはうとさへ思つた。人間、鼠色の服を疑ぐつた日には、廣東の人口の半

分かたは、何かの間諜(まはしもの)であるにちがひない。李刀達も、先方にならつて、マッチを擦つて『紅錫牌』に火をつけた。しかし闇に擦つたマッチのお蔭けで、ちよつと視覚が鈍つた矢先に、ひよつと前方をすかして見ると、彼は、思はず、

「しまつた!」

と呟かざるを得なかつた。

鼠服の男は、忽然として横丁の一つへ消えてゐたからである。

「悟つたな!」

李刀達は、煙草を捨てて、『新塡地』と呼ばれる、第五區警察署へ拔ける細道を、片側の壁に添つて急いだ。

道が盡きて、Kの字形になつた街角へ出ると、遠くの方にともつた電燈の下を、一瞬間白つぽい肩の動きを見せ、すぐと闇そのものに溶け込んだ鳥打帽を發見した。この邊は、わりに賑やかな通りなのであるが、今日の事件ですつかり怯えてしまつた市民の大部分が戸を固く閉ぢたり、ほかへ逃げ込んだりしたあとなので、ろくに電燈もともつて居らず、街はどこかの舊都の靈廟のやうに荒れてゐた。

『いよいよ怪しいぞ。わざわざここへ來るなら、どうして沙基からまつ直ぐに這入らなかつたのか?』

李刀達は、普通の通行人らしい歩調を裝ひながら、その實不規則な速足になつて、男に追ひすがらうとした。道は曲がつた。鼠服も曲がつた。その通りは、沙面の西橋から、一直線に北へ趁る狹い横丁なのである。鼠服は、明らかに、追跡者をまかうとして焦心り出したらしい。

「武器?――」

不圖、李刀達は、かういふ素狀の知れぬ男が、他人を誘拐して置いて、暗闇から突然躍り出すと對手の胴腹へピストルを突つけるのだといふ、上海や廣東の常識を懷ひ出してゐた。そして、心窃かに、今日引裂いた小切手を持つてゐたなら

彼自身ひとつ面白い芝居が打てたのであつたことに、苦笑を洩らしたのであつた。

對手の方は暗らい街へ狭い横丁へと、選りに選つて嫌がらせをするやうに歩ゆんで行つた。幾度かその姿を見失はうとしては、ぽつつり視線の屆く範圍に浮み出る瘦せた白つぽい肩の影を見つけては、釣り込まれて歩るいた。沙基を離れてから、よほど歩るいたらしく、もうその邊は、あまり李刀逵にははつきりしないいくつもの横丁の錯綜し合つた區域であつた。この邊へ來ると、廣東の市街も皺くちやになつて互に押し合ひへし合つてゐるやうに思はれた。もうろうとした人間の影を、高い城壁のやうに聳えた邸の壁に添ふて深い谿底へ怪しい獸を追ひ込むやうに慕つて行く――その泰西探偵物の書き出しのやうな冒險を、李刀逵は必要以上にも味はなければならないのである。不思議な心理から、對手が遁げようとすればするほど、その人間を捕へて見たくなり、捕へられないとなるとますますその男の神祕性が加はつて行くのが、かう云つた冒險の特質である。彼もよくこんな小說を讀んだことがある。

『やめよう！　つまらないや。愚劣だ！』

手を放すやうに彼は云つてその男が賑かな十八甫の街路へ飛び込んだのを見戌つた。深夜の雲呑（ワンタン）屋よりも下らない、平凡な街の通行人と對手になつてしまつたのだ。――ここから自分の酒店（やど）まで、もうかなりな距離になつてしまつた。

鼠色の服は、暗らい横丁から彼れの出て來るのを待ち受けでもしてゐるかのやうに、しばらくハンカチーフで顔を拭きながら電柱の側に佇んでゐたが、李刀逵がひよつくりあらはれると、再び挑戰するやうに、彼れの方を振りむいて、またすたすたと歩きはじめた。

『畜生ッ、馬鹿にしてやがる！』

舌打をした李刀逵は、はじめて、謎が解けたやうな氣になつた。――彼奴、俺を誘き寄せるのだな！　しかし、何の目的で？……

彼に駈け寄ると、いきなりその襟髪を掴へて、りつゝに對手を詰問してやりたい氣持を押へて、やはり魅せられたもののやうに小半丁も跟いて行つた。と、その男は『富基號』といふ金看板の出てゐる店へ吸ひ込まれるやうに這入つて行くのであつた。李刀達はペッと唾を吐いた。

『ヘッ、何だ、こりや毛髪屋ぢやないか！』

忍び足に立寄つて、扉の表から内側に注意を集中すると、誰も今新しくそこへ這入つたものの氣配などはなく叫てきてきと麻雀らしい牌を掻き寄せる音がして、

『對死(トイスウ)！　對死(トイスウ)！』

と、半ば眠むたげに呟く男の聲が聞えるだけ――李刀達は、すこし、自分の他愛なさにむつとしたのである。

そこで、彼は、もう一度煙草に火をつけると、どこか西關の黄包子の溜りのある方へ戻らうとしたのであつたが、そのとき、横手の押戸になつてゐる扉が開いて、一本の手が伸びると、黒い腕章をつけた方の彼れの腕がしつかと握られた。

『李刀達――待つてゐたよ！』

十一

李刀達は、むしろ快よく招待されたのであつた。

最初、遠路を『案内』した男は、電燈の下で顔を合はせると、思ひ掛けなくも、沙面中國人組合の書記である嘍定住であつた。次に、多少の膂力を用ゐて彼を屋内へ『案内』した人間は、これも意外といふよりほかはなかつたが、今日『博濟醫院』へ彼を載せて行つた、黄包夫そのものであつた。明かに、二人の案内人の間にはあらかじめ意志の疏通があつて、什景火鍋に入れる小蝦のやうに李刀達を待つてゐたらしいのである。

かうわかつて見ると、李刀逵には、非常に不思議の數が殖えたのである。そして、この毛髪賣買所の家屋の構造などもたしかに不思議の一つにはちがひなかつた。これらのわからない諸事情を引くるめて、彼は、張定奎にかう詰問した。

『君達は……この俺を、どうしようと云ふんだ？』

張定奎は、對手の蒼くなつた顏色には無頓着に、かう答へて先頭に立つた。

『どうぞ、こちらへ。』

壁の片側には、廂へ屆くまで、荷造りされた人毛の梱が積んであつた。乾いた蘭草の香りが、ほのかな樺皮を燒いたやうな臭ひを籠めて、夏の物置に特有な、人間の呼吸を窒める程度の熱氣を湛へてゐた。それと反對の板壁に赤く扉だけを塗つてある個所を押して這入るのかと思ふと、張は、構はずずんずん先へ行つて、一見、青いペンキと單なる板の圍ゐとしか思はれぬ壁を、片手でどしんと撲つと、何かのトリックのやうにそこに廻轉式になつたドアが開いて、先づ彼が一步を踏み入れるのであつた。手には懷中電燈がともされてあつた。冷いやりした空氣が李刀逵の體軀を包んだ。黃包夫がぎいと押しかへすと、ドアはもとのまゝになつて、三人は完全な暗黑の中に在つた。

『どこへ行くんだね、張定奎？』

『默つてその梯子を上がんなさい。』

背後から黃包夫が、さほど手荒くはない拳で、彼を押し遣つた。

足の下は石敷らしく、黴くさい冷氣が見る見る人達の汗を彈ねた。張定奎は、もう四五尺上方に居つて、足下を電燈で照らしてゐた。恐ろしく急な狹い階段である。恐らくその長さも普通でなからうと思はれるほど、三人は永いこと登りつづけた。やつと張の跫音が終熄して、ごつんと李刀逵の片手が、彼れの突兀した肩胛骨へ觸れた刹那、かすかに鈴の音がして、こもつた上層の空氣に、三人の步行を終つたあとの呼吸が、氣せわしく響くのであつた。

ドアらしい場所のむかうに軽るい足音が近づいた。かたり複雑な錠と閂とが外されて、三人は帳の垂れてある小房へ通された。そこで、険はしい眼をした肥つた男が、張へ會釋すると、李刀達の前へ出て、

『一應形式だけ――失禮ですが。』

と云つて、ポケットやヅボンの上を慣れた手付で輕るく觸れた。

『どうぞ、御待兼ねです。』

檢査が濟むと、彼は緋の帳を揭げて、一同を招じ入れた。

そこは、明るく電燈のついた、贅澤な客廳風な部屋で、多少洋式を加味した嚴重なドアには、外國で見受ける新式の錠がおろしてあつたり、窓には涼しそうなカーテンが垂れてあり、天井からは刻ガラスのシャンデリアが、水晶で拵へた瓔珞のやうに、きらびやかに中央の大きい卓の上へ伸びてゐたりした。

部屋のまん中に、鷲のやうに寂然として、一人の老人が餘念なく『字』を書いてゐるだけで、ほかには誰もゐなかつた。

『これが李刀達君でございます。』

かう張定奎が紹介すると、まつ白い練絹のやうな長髯を垂れた老人は、年齢に不似合いなほど鋭いダイヤモンドのやうな瞳をあけて李刀達の顏をじろりと見遣つたが、やがて、又、筆を執りあげて、『紅』といふ字を書き加へた。その一字が終ると、老人の前の白紙には、

『空林微雨落花紅』

といふ一句が出來あがつてゐた。

李刀達は、餘念なく風流事にひたつてゐる仙人のやうなこの老人が、何のためにあんな馬鹿騒ぎをしてまで自分をおびき寄せたものだらうと呀りながら、そつと張定奎の方を顧みると、どうしたことか、張定奎も黄包夫の姿も、床に呑まれ

たやうに室内にはなかつたのである。

『呀ッ！』

驚いた彼を、老人は象牙の筆軸で、しづかに制した。

『ここへ掛けなさい。』

筆軸の向いた方向には、黒檀の椅子があつて、その上に緋の小座蒲團が載せてある。李刀達は、馬鹿々々しさにすつかり立腹してしまつて、老人の麗々しく書いてゐる紙をそのまま引掴んで寸斷してしまはうかとさへ憤つてゐた。

景色ばむで近よつた彼を、老人はにたりと微笑みながら受けた。

『よく來てくれたね。』

李刀達は、まつ赧になつて腰を掛けた。

『わざわざ御招きして、非常に失禮だとは思つたが――實はな、是非とも貴方に相談したいことがあつてね。何かい、迎ひの者達が、何ぞ無禮なことでもしましたかの、手荒いやうな――？』

『いや、別に――でも、何ですか？　こんな芝居をしなくとも、組合へ出りや、張定奎とはしよつちゆう顔を合はせてるのだし、あすこへ迎ひをよこせあいいぢやないですか！――それに、書は書で車夫を使つたりしてさ。私は、もうこんなに遲くなつて、他人に監禁同様にされてまで、相談とやらなんか聽きたくはないですよ！』――

老人は、じつと李刀達の血だらけな服裝に鋭どい視線を泌み込ましてゐた。對手が云ふだけ云つてしまつて、自分の言葉に豫期したやうな反應がないので、やや失望しかけた――と思はれるほどの間を措いて、老人は、卵白のやうな髯を應揚に撫でおろした。

『李刀達さん――今日、貴方は、偉らいことをしでかしましたね！』

『えいッ……？』

『いや、あの花火ぢやよ！』

李刀達は、しばらく無言でゐた。事實は、何か云はうにも、唇が顫へて、それを噛みしめるための努力に、彼れの全精力は傾注されてあつたのだ。やうやくのことで、喘ぎながらかう訊ねた。

『――それはどういふことですか、大人？』

老人の聲は、非常に透き徹つて、やや女性的でさへあつた。それは、聲が彼れの貴族的に隆起した鼻へかかつたせいかも知れない。彼は永いこと、話をつづけた。

『何もかもわかつとるのです。祕密は嚴守して置きませう。――だが、貴方もまだ若い。いや、お若い。あの老虎窩(ローフウオ)ぢやあれはわしの知つとる者が出してる店だて。あの婆さん――御覧ぢやつたらう、病身ものらしい婦人――あれは仲々はしつこい女でのウ。あれから、急いで貴方の投げ込んだ花火を取り出したのだ、が、どうも二本だけは揉み消しても、あとの一本は窗の下で爆發した始末ぢや。――それがために、あんな世界中を驚かすやうな大騷動がもちあがつた次第さ。いや、それは、尤もごく間接の動機にはちがひない。貴方の簡易閣報所から御持ちなすつた書類にも明記してあるとほり、外國の資本主義が侵略した結果、支那が半植民地化されると、何と云ふかの、それ新しい言葉で云ふとマルクス辯證法かの。それに從つて、中國には被壓迫民衆の民族的解放運動が起るのは必然ぢや。――したが、李刀達さん、貴方は、二つの爆彈へ、同時に一本のマッチをあてがつた人だよ。と云ふのは、一面、異常な功績者で貴方があると同時に、他の半面には實に不用意きわまる輕卒な仕事をされたとも云はるべきだからだ。まア、御聽きなされ。――貴方は、日頃の貴方の空想癖とでも申さうか、つまり、お芝居氣だの、それに騙られて、あゝいふことをなすつたが――あの結果どうなると御考へかの？――中國と英國との國際關係がさ、恐らくおわかりになるまい……又、誰しもわかるまい。だが、賢明な李刀

達さん、わし共には、かういふことだけはわかつとる。――現在の廣東政府、北京政府と對立しての國民革命政府ぢや、これには現在のところ英國と武力の闘爭を開始するだけの資金はない。――よろしいか、苦るしい内輪話だが、これは非常だ。しからば、折角貴方が白晳人種に對して、よしむばそれが個人的動機から出たものとしても、おおした復讐手段を講ぜられたにしても、それは謂ば水泡ぢや。よろしい、そこまでは、それでよろしいとする。――さて、一旦おお開始されたた、それは、あすこまで展ろげられてしまつた沙面の慘案を、今度は、英國と中國との政治的な立場から考へて見よう。一方、英國側では、貴方も御承知のとほり、沙面の武裝は當分解除せぬことだし、次には、その消極的戰爭を挑む傍ら、香港九龍を根據として、激烈に廣東政府を窮地に陷し入れる策を講ずるだらう。尠くとも、わしの調べた範圍では、今日白鵞譚にあつた軍艦には日本の軍艦も二隻あつた筈ぢや、それからアメリカ、これもあの闘爭の目擊者であつた。さういふ列國の環視中に、どんな無法な英國と雖も、砲艦攻擊を敢えてしてまで廣東を占領するやうな時代錯誤はやるまい。そこで、英國が企むだらう唯一の方法は、廣東政府の形式的な否定は無論のこと、更らに實質上にその聯俄容共主義の「赤い」政府を潰そうとする事業であるにちがひない。――それは、廣東州の經濟的封鎖、といふことが最も致命的であることも、アスキスやチャーチルが良く心得てゐる。全然印度のやうに植民地化してしまはない中國のやうな邦の無産階級運動を壓迫する英國政治家の常套手段がこれさ。

――そこで、今度は、翻へつて、現在の廣東政府を見て置かう。――今日、貴方も見られたとほり、あの示威遊行へ參加した政府の要人の主だつた連中、胡漢民、王精衛、林森・廖仲愷、孫科・甘乃光、伍朝樞、鄒魯、譚平山、ボローヂン……まあさう云つた連中は、大概先頭に立つて出たものだから、あの沙面の鐵火の洗禮は受けなんぢやつた。わしの手元に來とる情報では、現に、この時間、軍政府内では非常會議を召集し、黄埔から蔣介石が一枚加はつて、審議を凝らしとる最中ださうぢや。もうすこし經てば、わしのところへこの會議の結果が報告されて來るだらうが、現在のところは、そこま

ではわかつて居らぬ。が、どちらにしても、戰爭反對說が有力となることは、現在の左翼と共產派との臭味のある政府としては、さもあるべきことと思はれる。あれだけ國辱を被つて、政府はおめおめ赧い顏をして引退がるのか、と貴方が御云ひなさるだらう。しかし、その御心配は、御無用ぢや。共產派乃至左派の戰略戰術としては、わしの眼に黑い瞳があるうちは、きつと英國にむかつて、香港、廣東の總同盟罷業に出るだらうことは、この卓を撲つわしの掌よりも外れつこはない。

『そこでぢや、ここに英國側と廣東革命政府とが、期せずして同じ經濟戰の戰術に出ることになる。これは假定ぢやが、大體間違ではあるまい。——つまり、中國が排英打倒帝國主義の無產國民戰術を採用すると、英國は資本帝國主義の經濟戰術に出るわけぢや。が、ここに問題が起こる。まア、御疲勞の樣子ぢやが、これから貴方の出る場面だから、お聽きなされ。英國側では、その攻擊の唯一の口實として、支那側が最初に發砲して來た、當方は正當防衞である——と申すだらう。しかし、わしの知つた範圍では、李刀達さん、貴方があの他愛もない兒戲に類した爆竹を鳴らした以外に、支那側では誰一人沙面を砲擊しようなどと考へたものはなかつたのだ。それは、常識から見ても、あれほどボローチンやガロン將軍によつて、根強く共產黨軍の訓練を受けてゐる國民軍としては、有り得べき正攻法ではないのぢや。誰が、好んでああ武裝してゐる敵軍へ、些かの保障もない平地で戰爭を挑む馬鹿があらうか！　わづかに思想カブレのした學生が二三人、それこそ、わしが上海から持つて來て、貴方が寫し下さつた「血心救國」ぢや、あの精神で犧牲になる心算はあつた。しかし、軍隊內には絕對にない。それはわしが斷言する！　だから、中國側では、最初に發砲をしたのは英國ぢや、と云ふ。英國は中國ぢやと主張する。——かうなると、證據聚めが双方で行はれる。さア、何しろ地球の兩端の二大國が、尨大な經濟戰に這入る爲めの準備行爲なのだから、詮議立てもかなりやかましからう。重大な搜査ぢやて。これこそ大規模の探偵術が行はれる。が、しかし、李刀達さん、さういふ重要な動機となる發砲事件が、謂はば他愛もない貴方の花火問題から起つたのだ——とは、いかな國民政府も主張しかねるだらうし、英國側でもへいさうでありましたか、と苦笑して濟ませる筈のものでも

ないのぢや。おわかりかい？

「わしがさいぜんから云ふ問題といふのは、ここのことだ。それは、李刀達さん、貴方一身の始末のことに外ならぬやうなものさ。今日明日のところは構はんぢやらうが、いよいよとなると、李刀達さん、貴方の生命は、双方から邪魔になるわけではないかの？　一方英國でもそれを否定するために、又、中國側では、英國の方が下手人であるといふ說を主張するために。――つまり、事件が逼迫して來れば來るほど、李刀達といふ惡戲者の生命は、二つの轉がつて來る大石のまん中に置かれた卵のやうなものになるわけぢや。……どうだの、篤と考へて見なさるがよい！　さて、わしは、永いことお饒舌をして來たが、ことの序に、もう一言だけ貴方に云つて置きたいことがある。それは、外でもないが、この家の奇妙な構造ぢやよ。ここは、窓もこのとほり、嚴密に閉ざしてあるが、特別な裝置を施こして、格別この暑さに熱氣も籠り居らぬ。もう一つの部屋がむかうの方にあるが、それは、ここと違つて、或る會社の重役會議を行ふ室になつてゐて、完全にこの部屋から隔離されてあるのぢや。――で、この部屋には、貴方が御氣づきかどうかは知らぬが、わしが釦を一つ押すと、それそのとほり、壁の中から四挺のピストルが出るやうな二重の壁に圍まれて居る。御覽なさい、その額の中から一挺、こちらは電氣釦らしいところが銃孔になつとる。それから、窓の下に一挺あらう、あれは、決して人間があの下に居るわけではない。機械仕掛――いや、むしろ電氣仕掛と云つた方がよろしからう。それで、もう一つは、貴方の眞後ろぢや。これは皆わしの命令に從ふ忠實な武器での、もし貴方が、すこしなりと惡戲心を御出しになれば、わしの命令で四挺のうちのどれなりと自由に貴方の體軀を狙ふやうに出來て居る。わしの命令といふのは、小さな四の釦にしか過ぎんが、その釦の後ろには强力な電流があることだけは御承知下され。――で、な、この部屋の構造がおわかりとあれば、もう一つわしに云ふことがある。それは外でもないが、貴方の生命が買ひたいのだ。値段は、記名して電話で打合はしてある空手形の一萬弗ぢやないよ。は、は、は、、、、ここに纏まつた香港銀行の紙幣で五百ポンドある。これが貴方の生命代ぢ

や。と云つて、わしは別に貴方の生命を奪つて、生膽を藥屋に賣るのぢやない。陰莖を強精劑としてひさぐわけでもない。當分の間、この廣東を遁け出して貰ひたいのだ。しかも、立退先きはちやんと御世話して進ぜる。それは香港へ行くことぢや。香港も唯漫然と行くのではない――香港市內キング・エドワード・ホテルに棲んでゐるわしの親友のもとへ行つて、然るべき仕事に就くのだ。その仕事は、親友の王先生に云ひつかるとほりをやればよろしい。至極貴方の性分に叶ひさうな仕事だ。王――王英先生は、謂はばわしの片腕ともいふべき人での、革命のためには隨分功勞のある仁ぢや。生命を賣りますか――買はして貰へれば、ここに香港行の輪船の切符と、紹介狀と、紙幣で五百ポンド封入してある。輪船は、恐らくこの便が最後かも知れんて、そのうちに香港へのボイコットが始まらうも計られぬでな。――三等船室。なるべくこの際、目立たぬやうに旅立つがよろしかろ。……どうぢや、わしはこの上お饒舌はしたうない。ボーイ、茶ぢや！」

云ひ終つて老人は、緋帳の間から龍井(ロンチイ)を運んで來る肥つた男へ、鋭どい一瞥を與へると、枯れた手でちよつと白綸の袖口を扱いて、再び石硯(すず)へ香りの高い墨を滑らせた。

勇敢な、新興支那の冒險家として、コック李刀達が、この場合成し得た最善のことは、味を佳良にするためにわざとあらゆる方法で慘虐な屠殺を行はれる豚のやうに、必死の勢ひで、悲鳴をあげるだけのことであつた。その悲鳴は、遉がに儼然としたこの老人の前では、深かい嘆息のかたちを執る以外にはなかつたのである。

十二

汽船は阿片臭かつた。

廣東、大新公司前の碼頭(まとう)から香港まで、近海六時間の航路を、默々として眠りこけて行く苦力の姿が、現實よりすこし調子を低くめた李刀達の貧乏たらしい變裝であつた。その三時間目にやつと瞳を十分の一ほど開いて、彼は暮れかかる船

内の雜踏から、一人の特定の人物を發見しようと試みた。その人物は、李刀達と殆ど同じ程度の貧窮と粗食と失職とを表現した勞働者にはちがひなかつたが、世界萬國に共通した勞働者の巨きい手だけを持ち合はさぬ、やや變裝術の手下な人間であつた。乘り込んだ最初から、李刀達は、この白い手の勞働者の存在を意識した。無制限に乘客を詰め込むカルゴウ・デッキの常として、出帆まぎわには立錐の餘地のないほどに混み合つてゐるのであるが、次第に船足が速くなると、どうにか船客達はめいめいの座席だけは擴大して行くのが、この船の特長である。そんなわけで、室の右隅の積荷の箱にもたれてゐた李刀達が、だんだん人いきれに眠りを催して來て、自分の膝の伸びる範圍まで場所をはだけて行くと同時に、左隅の絹絲の箱に凭りかかつてゐたこの人物も、やはり同じやうな行爲で睡眠狀態に陷つて行くらしかつたのである。二人の間には、壁に沿ふて、人いきれの發散者である、無慮三十人からの雜多な客がつまつて居つたが、不思議と、李刀達には、この勞働者らしくない勞働者しか眼につかなかつた。それは何故であるかといふに――右隅と左隅とに、同じやうに人目を避けながら着座した二人は、必らず同時に千鈞の重さを帶びた瞼を開いて、お互を見遣つてゐたからである。つまり、二人とも睡眠を裝ふてゐたのである。それが、二度目ほどまでは、誰しもにあり得る暗合とも云へるのであるが、三四度と度重なるにつれて、そこに心理的交渉が生じる次第であつて、――その心理的交渉から反對する、合理性と不合理性との區別に對する判斷が各自の頭に萌すのは、きわめて自然な話である。李刀達は、梧州所在の農民や、廣東市内外の工人のどんなに零落したサムプルを持つて來ても、決してその男よりも、白い光澤のある手を發見することも出來ないのを知つてゐたし、それから、貧窮と粗食とに刻まれた勞働者の額と頰と眼窩とには、左隅の草笠に身を扮した人物のやうな、撓みのない肉附と、黑曜石のやうな、瞳は絕無だつたのである。

「スパイだな！」

これは李刀達の直感であつた。

次には、
「どつちのスパイかな？」
といふ疑問は、當然の歸結であつた。それは、英國側にも、支那側にも、自分を附け狙ふ可能性のあることが、昨夜の考へによつて立證されたあとで、もう一つ、老人の方からもスパイが派遣され得るといふ可能性も積み加へられた現在の彼としては、尤のことである。

今、三時間後に、眼を細めて、燭力の弱い電燈の下で、左隅へちらと一瞥を與へた李刀達は、對手もやはり右隅へ同じやうな視線を投げてゐることに氣づくと、衝動的に立ちあがつた李刀達は、寢呆けた眼を擦りながら、大きい伸びを一つした。

やつと百八十人ほど乘り込める收容力を持つたカルゴォ・デッキに、かなりの荷役をした上で、二百人以上もの人間を詰め込んだ室内で、わづかに多少の空間を殘してあるのは、奥の右隅に設けられた料理場の前だけである。ここは、どんなに手足を四つに擴ろげて眠りたい人間でも、絶えず燃やしてある炭火のために、暑くて、迚も寄りつくわけには行かないといふ特點を備へてゐた。そこへ、李刀達は、人間の頭だけは踏むまいとして近づいた。

この荷物代用として香港まで運搬されるお客達の愛用する三等船室は、民國創始以來の斷髮令を無視した、辮髮の男子や、長髮の女を滿載してゐることによつても、廣東の市街や香港の大通りでは見受けられない、別な國境線内にあるのである。さういふ女達は、乳呑兒を抱いて、鮒のやうに口を開けながら、大事な荷物を神棚のやうに緘ひ込んで眠つてゐる。さういふ男達は、素裸な上半身に油汗をかきながら、蜜柑の皮と唾液と紙屑の中に俵のやうにころがつてゐる。これらの民國革命を知らない群集は、いつも大擧して廣東や香港や上海へ陸續と上陸するのであるが、大都會は、不思議な吸收力をもつて、彼等を、砂へ撒いた水のやうにどこかへ散らしてしまつて、決して目立たせるやうなことはしない。その唯一

の原因は、かういふ勞働者男女は、何處へ行つても一定の住宅などといふものを持たずに、最も民國革命の目につかぬ裏町を徘徊して歩るくことに歸因するのである。この、何時も大都會の舗道にごろ寢をする群集が、二百個からの銅片を拂つて、比較的抵抗力の尠い板床の上へ寢るのである！　彼等は、出來るだけ完全に近い睡眠を執るために、都會の競馬馬でさへ享樂しない空間の獨占の本能を發揮するわけである。それぞれの寢藁と獨房とをあてがはれる競馬馬には、旣うの昔にさういふ原始的な動物的な本能が退化してゐるのである。……李刀達は、やつとの思ひで、コック場へ漕ぎつけた。料理場は、大概の客が欲しいだけ食つて、出せない分の銅片はちやんと腹掛やヅボンへ藏ひ込んでしまつたあとなので、頗る閑散であつた。コックと二人の素裸なボーイとは、廣東人の矜負としての白い飯を、客の方へ見せつけながら、まん中の二枚の皿を睨みつけて、旺んに搔き込んでゐる最中だつた。

ちやかちやかと小錢を鳴らすことによつて、コックは忽ち食料品の商人となつて立ちあがり、笊から三疋の赤蛙を掴み出すと、この兩棲動物の飛躍を試みる前に、笊の縁で彼等の神經中樞を撲滅してしまふのである。次に、三個の蛙の屍體が圓るいまん中の椀のやうに磨り減つた臺の上に陳列されて、手斧ほどの圓るみを帶びた庖丁で、すぶんすぶんとかうべをはねられるのである。小蟲の吐瀉物が內臟から食み出る前に、コックの拇指と人さし指とは、ゴム手套を脫ぐやうに、蛙の皮を剝いでゐる。身だけになつた蛙は、まだ盤臺の上で泳ぐやうな恰好をして生きてゐる。三疋の蛙が、頭と皮膚を失つて、何處かへ泳ぎ着かうと焦心つてゐるとき、再び大刀隊の使ひさうな庖丁が器用に使驅されて、內臟を全部切開し、脚から踵を切斷すると、珠江の水より濁つたバケツの水の中でざつと洗ひ立てられ、じわじわと油の中で焦げて行くのである。

食事が終ると、李刀達は、反對のデッキへ出ようとして、ここでも亦異常な注意を拂つて、他人の頭から自分の脚を除けて鐵柵をもうけた、二等船室の境目まで漕ぎつけた。鐵柵のむかうには、ライフルを抱いた巡警が、しきりにスタンダード

石油會社の石油箱の上で居眠をしてゐる。どうして三等船室にだけ動物園よりも嚴丈な鐵柵をもうけ、鐵鎖をその上に絡らみつける習慣になつてゐるかといふことは、支那の長い間の外國資本主義による搾取、半植民地化に對する民衆の自然發生的な叛逆方法としての、海賊の歴史と關係のあることであるから、ここでは省略するとする。が、鐵柵は、全然それがないよりは、或る種の來客にとつては便宜である。何となれば、彼はそこから、獅子や豹が園丁の持つて來る肉の香を嗅ぐやうに、より清潔な、二等一等客の呼吸する空氣だけは吸へたからである。

李刀達は、煙草に火をつけて、船會社のためにベルトを附け、鐵砲に實彈を罩めて居眠りをしなければならぬ警官の横顔を、ややしばらく觀察の對境に置いた。が、ぎらぎら着劍をした銃を肩にして、銀行を守護してゐる巡警達を見慣れてゐる彼には、眼の前の警官にさほど興味を感ずるわけでもなかつたのである。この刹那、彼れの最も興味を感じてゐたものは、この鐵柵のわきに凭りかかることによつて、直立してゐることが出來たといふことだ。直立の狀態にあれば、自然と室内の大部分の現象が視野のうちに收められ、尠くとも、横眼で、今しも、彼につづいて、鷄肉か何かを料らせてゐる白い手の勞働者の一擧一動がよくわかつたといふ特點を持つたのである。

スタンダード石油會社の石油箱は、だんだん熟眠狀態に侵入して行く巡警の上半身の傾斜を支へきれなくて、デッキと或る程度までの角度を描くや、今にも、石油以上の重量を帶びた荷物を投り出さうとするらしく見えたのであつたが、人間の叡智の働きは、こんな場合にも無自覺的にその存在を主張して止まぬのである。船の動搖と、身體の垂下狀態と、箱の一隅の急角度を造らうとする傾向との、三つの自然現象を、巡警は、巧みにライフルの銃身を掴んでゐることによつて、都合よくバランスを取つてゐたのである。この平和な巡警は、鐵砲といふものの用途を、たしかに發明者以上に考案したのであつた。

巡警のかういふ愉快さうな假睡狀態を、現實の三等デッキに呼び返へしたのは、まん中の荷物の山に隱くれてふわんたん

をやつてゐる一群の賭博打ちの騒々しい口爭ひであつた。しかし、それも一錢か二錢の遣取りで疵がへいたらしく、やがと治まつてしまふと、李刀達の存在には目もくれずに、彼はもう一度ライフルの冷や冷やした銃身へ手を置き變へて、以前のポーズに歸へつた。

『暑いぢやありませんか？』

李刀達は、飯を濟まして、意味ありげに鐵柵から空氣を吸ひに來た、白い手の勞働者を待つてゐたのであつた。勿論、その男は、型の如く煙草の火を借りに來たのであつたし、六時間の航海は獨り者の旅には、お互に無聊であつたのだ。

『全くやりきれません。』

すべて、支那中で、どんなスパイでも、相互を紹介し合ふ場合の會話は、かういふ緒からはじまることは、人間の發明した支那語の形式から當然さうなるべきであつた。

『あすこの阿片(アーピン)患者にはやりきれませんよ。——私は妙な性質でしてね、あの臭ひだけは堪らないんです。』

一向に勞働者らしくない口吻で、その男は述懷した。

『阿片』と聞いて、巡警がハッと眼をあけたが、次の李刀達の言葉によつて、もう一度安堵したかの風で、銃身を愛撫した。

『廣東はともかくも、香港へ近くなると、なかなか盛んなやうですな。』

『——香港は始めてですかね？』

『いや、これで二度目です。この前は船コックとして行きましたが、素通りも同然でしたよ。』

李刀達は、わざと自分の手をひろげて、對手の前へ撓やかな指を示した。

『——さう、さう、貴方はコックの方ですか？　私は、これで茶館の手代をやつてゐるたちんですが、組合の方からちよつ

とへまをやつたので除名されましてね。今では、何でも手當り次第な勞働に從事してるんですが、何しろ今度の騷ぎでせう――組合に這入つてゐない勞働者はかうなると弱いもんです。てんで働き口がなくなるんですからね。貴方は沙面の騷ぎを御存知ですか？』――

李刀達は、内心對手の貧弱な『茶館』說をせせら笑ひながら、すつかり暮れ落ちた沿岸の方を舷窓から覗き込む振を裝ふた。

『おい、君は誰か？』

これは、舷窓に區切られた闇の色に失望したらしい彼が、身を引きしなに放つた最低音の質問であつた。

『俺よりも、君から右へ四人目に眠つてる小僧に氣をつけろ！』

對手の答は、鋭どい低聲であつた。

『もうそろそろ着く頃ですがね。』

李刀達は大聲になつて、自分から四人目の男といふのをじろりと眺めた。

そこには、猫のやうに丸るくなつて、曾て李刀達が一萬弗の小切手を見せびらかした、料理屋のボーイが熟眠した風を見せてゐた。

（つづく）

定價	定價	送料
一冊	八十錢	參錢
六冊	四圓八十錢	送料共
十二冊	九圓六十錢	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます

△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます

△御購讀は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割增の事

△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和四年四月十八日印刷
昭和四年五月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　島中雄作
印刷人　竹內喜太郎
東京市牛込區榎町七番地
印刷所　日清印刷株式會社
東京市丸ノ內ビルヂング七七六區
中央公論社
電話丸ノ內二〇六番
振替東京三四番
同長野三二〇五番

神經衰弱
不眠症



▼岡田醫學博士▼伊藤醫學博士
▼福田醫學博士▼ロビンソン博士證明推奨

レーベン

主効病状

腦病・神經衰弱・ヒステリー頭痛・頭重・逆上・便秘・不眠症・耳鳴・眩暈・記憶力減退・勉學過度・憂鬱焦燥・心身衰弱・遺精・夢精・陰萎等の生殖器障害

注意

學者、銀行、會社員、學生、著述家、技師、官吏、其他平素腦を使用する人は必ず常用せよ

レーベン は米麥等を主食とせる日本人の體質に適應する植物製劑にして絶對に副作用の憂なし
レーベン は腦の重要なる榮養素たるリンサンを多量に含有し積極的治療劑として健腦強精の卓効を有す

◉進呈
増田博士森常持兩學士共著神經衰弱療法精神療法は申込次第贈呈

定價
一圓・二圓・三圓・五圓・(徳用分)拾圓(試用分)五十錢
全國到る處有名藥店にあり

◉取次、中央公論代理部にても取次します。

發賣◀ 東京市京橋區弓町 大阪市天王寺上汐町六 中南定太郎藥房▶

GHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co, Published Monthly.

Terms of Subscription: Annual subscription yen 12.48, Single copy 80 sen including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.